岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
井手見延遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
井手見延遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001

岡山県教育委員会

序

国道429号線は、倉敷市から都窪郡山手村・総社市を通り津山市に至り、やがて兵庫県へ通じる主要幹線道路の一つです。周辺には、山陽自動車道倉敷インターチェンジや岡山空港など広域交通の拠点が存在するため、県の南北を連結するうえで、重要な役割を果たしています。近年、交通量の増加が著しく、特に、改良区間の倉敷市西坂から総社市井手までは、交通渋滞や歩行者の安全確保に対処するため早期改良が望まれております。

岡山県教育委員会は、山手村および総社市内の工区に所在する遺跡の保存について、関係機関と協議を重ねましたが、遺跡の現状保存が困難なものについてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の処置をとりました。

調査対象となりました７遺跡・１散布地のうち山手村内の２遺跡は、すでに報告書を刊行しております。本書には総社市内を中心とした５遺跡・１散布地を収録いたしました。これらの遺跡は、作山古墳のある西の丘陵と備中国分寺のある東の丘陵にはさまれた沖積平野に立地する、弥生時代から近世にかけての集落遺跡です。遺跡全体では、合計39軒の竪穴住居や14棟の掘立柱建物などが発見され、それぞれの遺跡で遺物も数多く出土しています。なかでも、三須畠田遺跡で検出された６世紀前半の竪穴住居５軒は、調査例の少ない時期であり、多量の須恵器や土師器を伴っている点でも注目されます。さらに、井手見延遺跡では、奈良時代の方形土壙から完形の丹塗り土師器高杯などが須恵器を伴って出土しています。また、付近からは円面硯や風字硯など官衙関連遺物も見つかっており、備中国府を考えるうえでも重要な発見です。ここ数年来、周辺地域は、総社市教育委員会による発掘調査も進み、三須河原遺跡で「郡殿」と墨書された須恵器が出土するなど、重要な発見も相次いでいます。これらの成果と本報告書の成果で、さらにこの地域の集落の動向・特色が、より具体的に浮き彫りになることを期待してやみません。

この報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、吉備地域の歴史を研究する一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成に際しまして、岡山県文化財保護審議会委員の先生方の有益な御指導・御助言を賜りました。また、関係機関各位、発掘調査・整理の作業員の皆様方、さらに地元の方々から暖かい御理解と多大な御助力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成13年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　　正岡　睦夫

例言

1　本報告書は国道429号線改良に伴い、岡山県土木部道路建設課（倉敷地方振興局）の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが、平成４～10年度に調査を実施した都窪郡山手村内の岡谷大溝散布地、および総社市内の三須今溝遺跡・三須河原遺跡・三須畠田遺跡・井手見延遺跡・井手天原遺跡の発掘調査報告書である。

2　国道429号線改良に伴う発掘調査報告書は、２分冊にわたる刊行であり、本書はその第２分冊目にあたる。

3　遺跡の名称変更を行った。調査時名称の大溝・今溝遺跡を岡谷大溝散布地と三須今溝遺跡に、調査時名称の三須畠田遺跡を三須河原遺跡と三須畠田遺跡に、調査時名称の金井戸見延遺跡を井手見延遺跡と井手天原遺跡に、それぞれ分離し、名称を変更した。これは、総社市教育委員会の国道429号線周辺の発掘調査の成果をふまえたもので、変更に際しては、同市教育委員会と協議を行った。詳しくは「第１章 第２節 報告書の作成」を参照されたい。

4　調査は、平成４年度１月から平成７年度９月まで、間に他事業との調整による２ヶ月の調査中断期間をはさみ、継続して行った。その後は、条件整備の進捗に合わせ、平成８年度５月～６月、10月～12月、平成９年度４月～６月、平成10年度６月～７月、11月～１月に断続して行った。

5　発掘調査にあたっては岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両氏よりご指導、ご助言をいただいた。記して厚く感謝の意を表する次第である。

6　報告書の作成は、平成８年度１月～３月、平成11年度４月～３月に岡山県古代吉備文化財センターにて行った。

7　本書の編集は物部・亀山・小嶋が担当し、執筆は物部・金田・小嶋・亀山・蛯原・高田・葛原・重根・宇垣・岡本が分担し、とりまとめを物部が行った。

8　特殊な遺物の自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益なご教示・報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

歯の鑑定	小田嶋梧郎（岡山大学）
鉄滓鑑定・分析	大澤正己（たたら研究会委員）
	鈴木瑞穂（株式会社九州テクノリサーチ）
胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
獣骨鑑定	富岡直人（岡山理科大学）
樹種同定	畦柳　鎮（岡山商科大学）
石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学）
樹種鑑定	パリノ・サーベイ株式会社

9　周辺の遺跡および古代の土器について武田恭彰氏に御教示いただいた。記して厚くお礼申し上げる。

10　遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

11　出土遺物・図面・写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡例

1　本報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁北である。

2　本報告書に掲載した地図のうち、第７図は国土地理院発行の１/25,000地形図を複製し、加筆したものである。

3　本報告書に掲載した遺物の掲載番号は遺跡・散布地ごとに１から付けている。また、図・表の番号は第１章～第７章までを通し番号とし、第８章のみ、各項それぞれで付けている。

4　遺構・遺物の略記号・略称は次のとおりである。

竪穴住居＝住　掘立柱建物＝建　柱穴列＝柱　土壙＝土　井戸＝井　土壙墓＝墓

溜池状遺構＝池　粘土塊＝粘

土製品＝Ｃ　石器＝Ｓ　金属器＝Ｍ　玉類＝Ｊ

5　遺構・遺物の個別実測図の縮尺は次のとおりである。

竪穴住居・掘立柱建物：1/60　　土壙：1/30・1/40　　溝断面：1/40・1/60

土器：1/4・1/5・1/6　　土製品：1/2・1/3　　石器：1/2　　金属器：1/2

6　図版の遺物写真のうち、縮尺設定したものは表示した。

7　土器の実測図の中で中軸線左右に白抜きのあるものは、小片のため口径・底径がやや不正確なものである。

8　溝断面図において使用した記号Ｅは東、Ｗは西を表わし、記号のないものは西方向あるいは南方向から見た実測図である。

9　遺構の実測図において使用した点描等は、注記のない限り次のとおりに統一した。

被熱面

焼土粒の散布範囲

炭散布範囲

10　文章の執筆は各調査担当者が分担し、文責を文章末尾に示した。

11　土器の実測図において、赤色顔料の塗布面と黒色土器の炭素吸着面には点描をかけた。

12　本報告書における土層名称は、各発掘調査担当者によって異なり、統一できていない。

13　本報告書の記述に使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠する。古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃までを指している。また、遺構・遺物の時期については、『津寺遺跡２～５』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書98・104・116・127）で使用された土器編年案に従い、表記法も踏襲する。ただし、５世紀以降は実年代を併用した。

目次

序
例言
凡例
目次
第1章　序　　言 …… 1
　第1節　調査の経緯と経過 …… 1
　第2節　報告書の作成 …… 10
　第3節　地理的・歴史的環境 …… 12
第2章　岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡 …… 15
　第1節　岡谷大溝散布地の調査の概要 …… 15
　第2節　三須今溝遺跡の調査の概要 …… 17
　第3節　三須今溝遺跡の遺構・遺物 …… 18
第3章　三須河原遺跡 …… 25
　第1節　調査の概要 …… 25
　第2節　弥生時代の遺構・遺物 …… 28
　第3節　古墳時代の遺構・遺物 …… 29
　第4節　古代・中世の遺構・遺物 …… 34
　第5節　遺構に伴わない遺物 …… 35
第4章　三須畠田遺跡 …… 37
　第1節　調査の概要 …… 37
　第2節　弥生時代の遺構・遺物 …… 40
　第3節　古墳時代の遺構・遺物 …… 79
　第4節　古代の遺構・遺物 …… 100
　第5節　中世の遺構・遺物 …… 103
第5章　井手見延遺跡 …… 115
　第1節　調査の概要 …… 115
　第2節　弥生時代の遺構・遺物 …… 118
　第3節　古墳時代の遺構・遺物 …… 139
　第4節　古代の遺構・遺物 …… 148
　第5節　中・近世の遺構・遺物 …… 156
第6章　井手天原遺跡 …… 163
　第1節　調査の概要 …… 163
　第2節　弥生時代の遺構・遺物 …… 165
　第3節　古墳時代の遺構・遺物 …… 167
　第4節　古代の遺構・遺物 …… 187

第５節　中・近世の遺構・遺物 …… 189
第７章　まとめ …… 203
第８章　自然科学分野における分析・鑑定 …… 207
第１節　三須畠田・井手天原遺跡中世墓出土の歯の鑑別　小田嶋梧郎 …… 207
第２節　国道429号線改良に伴う発掘調査出土
製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査　大澤正己　鈴木瑞穂 …… 210
第３節　三須畠田遺跡出土の白色粘土および土器の胎土分析　白石純 …… 222
第４節　井手天原遺跡出土動物遺存体　富岡直人 …… 224
写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　調査位置図　（１/200万）
第２図　路線図　（１/25000） …… 1
第３図　調査区配置図１　（１/2000） …… 3・4
第４図　調査区配置図２-既報告分　（１/3000） …… 5
第５図　土層高低図　（１/80） …… 6
第６図　調査区周辺地形図　（１/10000） …… 11
第７図　周辺遺跡分布図　（１/40000） …… 14
岡谷大溝散布地
第８図　トレンチ配置図　（１/3000） …… 15
第９図　土層図　（１/60） …… 16
第10図　出土遺物　（１/４） …… 16
三須今溝遺跡
第11図　調査区配置図・基本層序　（１/3000・１/60） …… 17
第12図　遺構全体図　（１/400） …… 18
第13図　溝１・出土遺物　（１/40・１/４） …… 19
第14図　溝２・出土遺物　（１/80・１/４） …… 19
第15図　溝３・護岸・出土遺物　（１/80・１/４） …… 20
第16図　溝４～10　（１/40） …… 21
第17図　溝４・10出土遺物　（１/４） …… 21
第18図　溝11・護岸
（１/400・１/100・１/60・１/40） …… 22
第19図　溝11出土遺物　（１/４・１/２） …… 23
第20図　溝12・13　（１/40） …… 24
第21図　包含層出土遺物　（１/４・１/２） …… 24
三須河原遺跡
第22図　調査区配置図　（１/3000） …… 25
第23図　立会調査遺構配置図・遺構断面図
（１/1200・１/80） …… 26
第24図　遺構全体図　（１/400） …… 27
第25図　溝７～10・出土遺物　（１/40・１/４） …… 28
第26図　竪穴住居３・出土遺物　（１/60・１/４） …… 29
第27図　竪穴住居４・出土遺物１　（１/60・１/４） …… 30
第28図　竪穴住居４出土遺物２　（１/５・１/４） …… 31
第29図　竪穴住居４出土遺物３　（１/５・１/４） …… 32
第30図　溝11・12・溝12出土遺物１　（１/40・１/４） …… 32
第31図　溝12出土遺物２　（１/５） …… 33
第32図　溝13～16・出土遺物　（１/40・１/４） …… 33
第33図　掘立柱建物　（１/60） …… 34
第34図　柱穴列　（１/60） …… 34
第35図　溝17～19・出土遺物　（１/40・１/４） …… 34
第36図　遺構に伴わない遺物１　（１/４・１/２） …… 35
第37図　遺構に伴わない遺物２　（１/４） …… 36
三須畠田遺跡
第38図　調査区配置図　（１/3000） …… 37
第39図　遺構全体図・弥生～古墳時代　（１/400） …… 38
第40図　遺構全体図・古代以降　（１/400） …… 39
第41図　竪穴住居１・出土遺物　（１/60・１/４） …… 40
第42図　竪穴住居２・出土遺物
（１/60・１/４・１/２） …… 41
第43図　竪穴住居３・４・出土遺物
（１/60・１/４・１/２） …… 42
第44図　竪穴住居５・出土遺物
（１/60・１/４・１/２） …… 43
第45図　竪穴住居６・出土遺物　（１/60・１/４） …… 44
第46図　竪穴住居７・出土遺物　（１/60・１/４） …… 45
第47図　竪穴住居８・中央穴　（１/60・１/20） …… 46

第48図　竪穴住居８出土遺物　（1/4）…… 47
第49図　柱穴列　（1/30）…… 48
第50図　土壙１・出土遺物
（1/30・1/6・1/4）…… 48
第51図　土壙２～５・出土遺物　（1/30・1/4）…… 49
第52図　土壙６・７・出土遺物１　（1/30・1/4）
…… 50
第53図　土壙７出土遺物２　（1/4）…… 51
第54図　土壙７出土遺物３　（1/4・1/2）…… 52
第55図　土壙８・出土遺物１　（1/30・1/4・1/3）
…… 53
第56図　土壙８出土遺物２　（1/4）…… 54
第57図　土壙８出土遺物３　（1/4・1/2）…… 55
第58図　土壙９・出土遺物　（1/30・1/4）…… 55
第59図　土壙10・11・出土遺物１　（1/30・1/4）
…… 56
第60図　土壙11出土遺物２　（1/4・1/2）…… 57
第61図　土壙12・13・土壙12出土遺物
（1/30・1/4）…… 58
第62図　土壙13出土遺物　（1/4）…… 59
第63図　土壙14～16・出土遺物　（1/30・1/4）…… 60
第64図　土壙17・出土遺物　（1/30・1/4）…… 61
第65図　土壙18・19・出土遺物　（1/30・1/4）…… 62
第66図　土壙20・出土遺物　（1/30・1/4）…… 63
第67図　土壙21～23・出土遺物
（1/40・1/30・1/4）…… 64
第68図　土壙24～29　（1/30）…… 65
第69図　土壙27～29出土遺物　（1/4）…… 66
第70図　土壙30・出土遺物　（1/40・1/4）…… 66
第71図　溝１～３・出土遺物　（1/40・1/4）…… 67
第72図　溝３出土遺物１　（1/4）…… 68
第73図　溝３出土遺物２　（1/4・1/3）…… 69
第74図　溝４・出土遺物　（1/30・1/4）…… 70
第75図　溝５～９　（1/40）…… 70
第76図　溝９出土遺物１　（1/4）…… 71
第77図　溝９出土遺物２　（1/4）…… 72
第78図　溝９出土遺物３　（1/4）…… 73
第79図　溝９・７出土遺物４　（1/4）…… 74
第80図　粘土塊・出土遺物　（1/30・1/4）…… 75
第81図　土器溜まり出土遺物　（1/4・1/2）…… 76
第82図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 76
第83図　遺構に伴わない遺物２　（1/4）…… 77
第84図　遺構に伴わない遺物３　（1/4・1/2）…… 78
第85図　竪穴住居９・出土遺物　（1/60・1/4）…… 79
第86図　竪穴住居10・出土遺物　（1/60・1/4）…… 80
第87図　竪穴住居11・出土遺物　（1/60・1/4）…… 81
第88図　竪穴住居12・出土遺物１　（1/60・1/4）
…… 82
第89図　竪穴住居12出土遺物２　（1/4）…… 83
第90図　竪穴住居12出土遺物３　（1/4・1/2）…… 84
第91図　竪穴住居13・出土遺物１　（1/60・1/4）…… 85
第92図　竪穴住居13出土遺物２　（1/4）…… 86
第93図　竪穴住居13出土遺物３　（1/4）…… 87
第94図　竪穴住居13出土遺物４
（1/4・1/2・1/1）…… 88
第95図　竪穴住居14・出土遺物
（1/60・1/4・1/2）…… 88
第96図　竪穴住居15　（1/60）…… 89
第97図　竪穴住居15出土遺物　（1/4・1/2）…… 90
第98図　竪穴住居16　（1/60）…… 91
第99図　竪穴住居16出土遺物　（1/4）…… 92
第100図　竪穴住居17　（1/60）…… 92
第101図　竪穴住居17出土遺物　（1/4）…… 93
第102図　竪穴住居18・19・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 94
第103図　竪穴住居20・出土遺物
（1/60・1/4・1/2）…… 95
第104図　竪穴住居21・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 95
第105図　土壙31・出土遺物　（1/40・1/4）…… 96
第106図　土壙32～34・土壙32出土遺物
（1/30・1/4）…… 97
第107図　溝10～13・溝12出土遺物
（1/40・1/5・1/4）…… 98
第108図　遺構に伴わない遺物　（1/4・1/2）…… 99
第109図　土壙35・出土遺物　（1/60・1/4）…… 100
第110図　溝14・15・出土遺物　（1/40・1/4）…… 100
第111図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 101
第112図　遺構に伴わない遺物２　（1/4）…… 102
第113図　掘立柱建物１・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 103
第114図　掘立柱建物２　（1/60）…… 104
第115図　掘立柱建物３・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 104
第116図　掘立柱建物４・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 105
第117図　柱穴出土遺物１　（1/4）…… 105
第118図　柱穴出土遺物２　（1/4・1/2）…… 106
第119図　井戸・出土遺物　（1/40・1/4）…… 107
第120図　土壙36～38・40　（1/40・1/30）…… 107
第121図　土壙39・41・42　（1/40・1/30）…… 108
第122図　土壙36・37・39・40・41出土遺物
（1/4・1/2）…… 108
第123図　土壙43・44・出土遺物
（1/30・1/4・1/2）…… 109
第124図　土壙墓１・２・出土遺物　（1/30・1/2）

…… 109
第125図　土壙墓３・４・出土遺物
（1/30・1/3・1/2）…… 110
第126図　溝16～19・出土遺物　（1/40・1/4）…… 111
第127図　畦畔　（1/40）…… 111
第128図　畦畔出土遺物　（1/4・1/2）…… 112
第129図　下がり・出土遺物１　（1/60・1/4）…… 112
第130図　下がり出土遺物２　（1/4）…… 113
第131図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 113
第132図　遺構に伴わない遺物２　（1/4・1/2）…… 114

井手見延遺跡

第133図　基盤層出土の縄文土器　（1/4）…… 115
第134図　調査区配置図　（1/3000）…… 115
第135図　遺構全体図１　（1/400）…… 116
第136図　遺構全体図２　(1/400)…… 117
第137図　竪穴住居１　（1/60）…… 118
第138図　竪穴住居１出土遺物　（1/4・1/2）…… 119
第139図　竪穴住居２　（1/60）…… 119
第140図　竪穴住居２出土遺物　（1/4・1/2）…… 120
第141図　竪穴住居３　（1/60）…… 121
第142図　竪穴住居３出土遺物　（1/4・1/2）…… 122
第143図　袋状土壙１・２　（1/30）…… 122
第144図　袋状土壙２出土遺物　（1/4・1/2）…… 123
第145図　袋状土壙３・４　（1/30）…… 123
第146図　袋状土壙３・４出土遺物　（1/4）…… 124
第147図　袋状土壙５・６　（1/30）…… 125
第148図　袋状土壙６出土遺物１　（1/4）…… 126
第149図　袋状土壙６出土遺物２　（1/4）…… 127
第150図　袋状土壙７・出土遺物　（1/30・1/4）…… 128
第151図　袋状土壙８・出土遺物　（1/30・1/4）…… 128
第152図　袋状土壙９・出土遺物１　（1/30・1/4）
…… 129
第153図　袋状土壙９出土遺物２　（1/4）…… 130
第154図　袋状土壙10・11・出土遺物　（1/30・1/4）
…… 131
第155図　袋状土壙12・13・出土遺物　（1/30・1/4）
…… 132
第156図　袋状土壙14・15　（1/30）…… 133
第157図　袋状土壙15出土遺物　（1/4・1/2）…… 133
第158図　土壙１・出土遺物　（1/30・1/4・1/2）
…… 134
第159図　土壙２・出土遺物　（1/30・1/4・1/2）
…… 135
第160図　土壙３・４　（1/30）…… 136
第161図　土壙５・６・出土遺物　（1/30・1/3）…… 136
第162図　溝１・出土遺物　（1/4）…… 137
第163図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 137
第164図　遺構に伴わない遺物２　（1/4・1/2）
…… 138
第165図　竪穴住居４・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 139
第166図　竪穴住居５・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 140
第167図　竪穴住居６・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 141
第168図　竪穴住居７　（1/60）…… 142
第169図　掘立柱建物１・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 142
第170図　土壙７　（1/30）…… 143
第171図　溝２～４　（1/60）…… 143
第172図　溝４出土遺物１　（1/4）…… 144
第173図　溝４出土遺物２　（1/4）…… 145
第174図　溝４出土遺物３　（1/4）…… 146
第175図　遺構に伴わない遺物　（1/4・1/2）…… 147
第176図　掘立柱建物２　（1/80）…… 149
第177図　土壙８・出土遺物　（1/60・1/4）…… 150
第178図　土壙９　（1/60）…… 150
第179図　溝５～10・出土遺物　（1/40・1/4）…… 151
第180図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 152
第181図　遺構に伴わない遺物２　（1/4）…… 153
第182図　遺構に伴わない遺物３　（1/4）…… 154
第183図　遺構に伴わない遺物４　（1/4）…… 154
第184図　遺構に伴わない遺物５　（1/4）…… 155
第185図　掘立柱建物３・出土遺物
（1/60・1/4・1/2）…… 156
第186図　土壙10～12　（1/30）…… 157
第187図　土壙墓・出土遺物　（1/30・1/5）…… 158
第188図　溜池状遺構・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 158
第189図　溝11～20　（1/60・1/40）…… 159
第190図　溝13出土遺物　（1/4）…… 159
第191図　低位部土層断面図　（1/60）…… 160
第192図　遺構に伴わない遺物１　（1/4）…… 161
第193図　遺構に伴わない遺物２　（1/3・1/2）
…… 162

井手天原遺跡

第194図　調査区配置図　（1/3000）…… 163
第195図　遺構全体図　(1/400)…… 164
第196図　土壙１・出土遺物　（1/30・1/4）…… 165
第197図　土壙２～４　（1/30）…… 165
第198図　遺構に伴わない遺物　（1/4・1/2）…… 166
第199図　竪穴住居１検出状況　（1/60）…… 168
第200図　竪穴住居１　（1/60）…… 169
第201図　竪穴住居１出土遺物　（1/4・1/2）…… 170
第202図　竪穴住居２・出土遺物　（1/60・1/4）
…… 171

第203図　竪穴住居３・４・出土遺物　（1/60・1/4）…… 172
第204図　竪穴住居５　（1/60）…… 172
第205図　竪穴住居５出土遺物　（1/4）…… 173
第206図　竪穴住居６　（1/60）…… 174
第207図　竪穴住居６出土遺物　（1/4）…… 175
第208図　竪穴住居７・出土遺物１　（1/60・1/4）…… 176
第209図　竪穴住居７出土遺物２　（1/4）…… 177
第210図　竪穴住居７出土遺物３　（1/4）…… 178
第211図　竪穴住居７出土遺物４　（1/4）…… 179
第212図　竪穴住居７出土遺物５　（1/4）…… 180
第213図　竪穴住居８・出土遺物　（1/60・1/4）…… 180
第214図　竪穴住居９　（1/60）…… 181
第215図　竪穴住居９a・b　（1/80）…… 182
第216図　竪穴住居９出土遺物　（1/4・1/2）…… 182
第217図　土壙５・出土遺物　（1/30・1/4）…… 183
第218図　土壙６　（1/30）…… 184
第219図　土壙７・出土遺物　（1/40・1/4）…… 184
第220図　土壙８・９　（1/40）…… 185
第221図　溝１・２　（1/40）…… 185
第222図　遺構に伴わない遺物　（1/4）…… 186
第223図　掘立柱建物１　（1/60）…… 187
第224図　溝３・４・出土遺物　（1/40・1/4）…… 188
第225図　遺構に伴わない遺物　（1/4）…… 188
第226図　掘立柱建物２　（1/60）…… 189
第227図　掘立柱建物３　（1/60）…… 190
第228図　掘立柱建物４　（1/60）…… 191
第229図　掘立柱建物５　（1/60）…… 192
第230図　掘立柱建物６　（1/60）…… 193
第231図　掘立柱建物７　（1/80）…… 193
第232図　柱穴列１・２　（1/60）…… 194
第233図　掘立柱建物出土遺物　（1/4）…… 194
第234図　土壙10・11・出土遺物（1/60・1/40・1/4）…… 195
第235図　土壙12～14　（1/30）…… 196
第236図　土壙墓・出土遺物　（1/30・1/4）…… 196
第237図　溜池状遺構　（1/300・1/60）…… 197
第238図　溜池状遺構出土遺物　（1/4）…… 198
第239図　溝５・出土遺物　（1/60・1/4・1/2）…… 198
第240図　溝６・出土遺物　（1/60・1/3・1/2）…… 199
第241図　溝７～20　（1/40）…… 200
第242図　溝７～20出土遺物　（1/4・1/2）…… 201
第243図　遺構に伴わない遺物　（1/4・1/2）…… 202
第244図　井手天原遺跡出土遺物　（1/4）…… 206

表　目　次

第１表　遺構の変遷 …… 206
第２表　岡山県出土の回転台形土器一覧 …… 206

図　版　目　次

岡谷大溝散布地
図版１　１．近景　南から
２．Ｔ６西壁　東から
３．0T-１東壁　西から
４．0T-３東壁　東から
図版２　１．0T-５西壁　東から
２．0T-８西壁　東から
３．Ｔ５東壁　西から
４．出土遺物
三須今溝遺跡
図版３　１．溝１　西から
２．溝３護岸　北から
３．溝４　南西から
図版４　１．溝８　南西から
２．溝10　西から
３．溝11　北から
図版５　１．溝11　南から
２．溝11護岸　北東から
３．Ｔ４西壁　東から
４．Ｔ１西壁　東から
図版６　１．溝１・溝２・溝11出土遺物
三須河原遺跡
図版７　１．遺構全景（13区）　南から
２．溝16・溝10・溝9・溝８（手前から）　北から
図版８　１．竪穴住居３　北から
２．竪穴住居４　南東から
３．柱穴列　北から
図版９　竪穴住居３・４出土遺物
図版10　竪穴住居４・溝12出土遺物

三須畠田遺跡

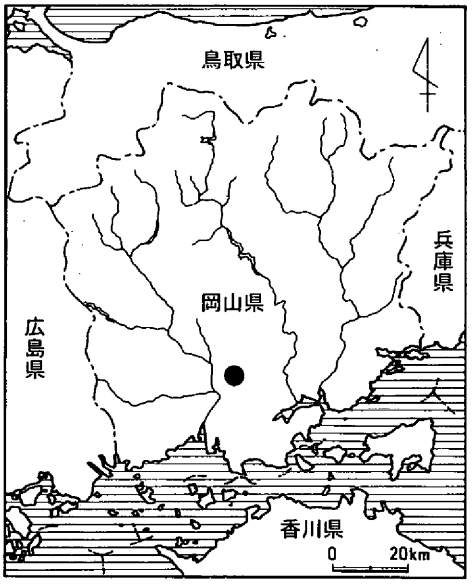
図版11　1．竪穴住居６　上層床面　西から
　　2．竪穴住居７　北から
　　3．竪穴住居８　南から
図版12　1．土壙７　南東から
　　2．土壙８　南西から
　　3．粘土塊　北西から
図版13　1．竪穴住居10　西から
　　2．竪穴住居12　南から
　　3．竪穴住居13　東から
図版14　1．竪穴住居15　南から
　　2．竪穴住居18　鉄滓出土状況　西から
　　3．竪穴住居20　南西から
図版15　竪穴住居２・４・６・８・土壙７出土遺物
図版16　土壙７・13出土遺物
図版17　土壙８・溝９出土遺物
図版18　遺構に伴わない遺物、竪穴住居10出土遺物
図版19　竪穴住居12・13出土遺物
図版20　竪穴住居13・14出土遺物
図版21　竪穴住居15・土壙31・土壙墓３・
　　柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

井手見延遺跡

図版22　1．遺構全景（２区）北から
　　2．竪穴住居１　北から
　　3．竪穴住居２　南西から
図版23　1．袋状土壙４　南から
　　2．袋状土壙６　北東から
　　3．袋状土壙15　西から
図版24　1．竪穴住居５　南から
　　2．竪穴住居５カマド　南から
　　3．竪穴住居６　南から
図版25　1．掘立柱建物２　南から
　　2．土壙８出土遺物　南から
　　3．土壙墓　南東から
図版26　竪穴住居１・袋状土壙２・４・６出土遺物
図版27　袋状土壙９・土壙２出土遺物
図版28　土壙２・竪穴住居４・溝４出土遺物、
　　遺構に伴わない遺物
図版29　溝４・土壙８・溝５出土遺物、
　　遺構に伴わない遺物

井手天原遺跡

図版30　1．竪穴住居１検出状況　北から
　　2．竪穴住居１　北から
　　3．竪穴住居２　南から
図版31　1．竪穴住居６　南から
　　2．竪穴住居７　南から
　　3．竪穴住居９　南から
図版32　1．中世遺構全景（16区）南から
　　2・中世遺構全景（15区）北から
　　3．中世遺構全景（29区）南から
図版33　1．土壙墓　南から
　　2．溝８　南から
　　3．溜池状遺構出土獣骨　南から
図版34　竪穴住居１・２・５出土遺物、
　　遺構に伴わない遺物
図版35　竪穴住居６・７出土遺物
図版36　竪穴住居９・土壙７・溝４～20・
　　土壙墓・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物



第１図　調査位置図（１/200万）

第１章　序　　言

第１節　調査の経緯と経過

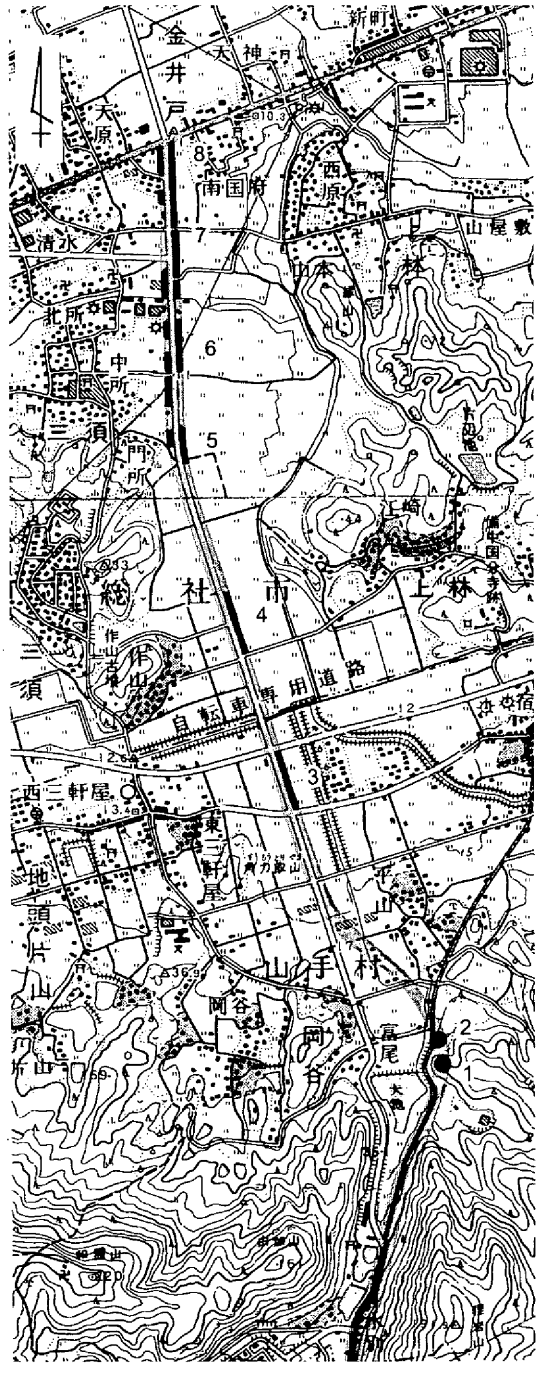
（１）調査の経緯

岡山県は、山陽自動車道の開通による周辺アクセス道路の交通量の増加や交通渋滞の解消を目的とし、倉敷・総社間の一般国道429号線の改良工事を計画した。計画路線は、現道を拡幅するほか一部バイパスもあり、丘陵部の削平と水田部への新設が予定されていた。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いについては、平成元年度に岡山県教育庁文化課に事前協議がなされ、現地分布調査を一部実施した。平成３年度は予定路線沿線の民間開発（ガソリンスタンド建設）に伴う発掘調査にあわせ、国道拡張部及び国道側溝部の調査を総社市教育委員会に依頼した。また、用地買収が終了した部分から一部工事が開始され、一部の新発見遺跡（現在の三須河原・美濃田遺跡部分）について立会調査を実施した。

そして、平成４年10月26日付けで、岡山県倉敷地方振興局長から文化財保護法第57条の３に基づく協議書が岡山県教育委員会に提出され、本格協議に入った。この時点では、現地踏査等の結果では古墳１、集落跡３か所の存在が判明しており、両者で保存について協議を重ねたが、周辺部の状況等から現状保存が困難であるとの結論に達し、岡山県教育委員会は平成４年10月30日付けで倉敷地方振興局長に対して、遺跡部分については工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

以上の協議経過に基づき、岡山県教育委員会は、都窪郡山手村と総社市分の関係遺跡の用地買収等の条件整備の整った部分から、平成５年１月になって発掘調査を開始した。そして、その後も用地買収の遅れ等から部分的な発掘調査の実施を余儀なくされたが、平成11年１月末をもって終了した。　（物部）



1．前山遺跡　　2．鎌戸原遺跡
3．岡谷大溝散布地　　4．三須今溝遺跡
5．三須河原遺跡　　6．三須畠田遺跡
7．井手見延遺跡　　8．井手天原遺跡

第２図　路線図（１/25000）

（2）調査の経過

第1次調査

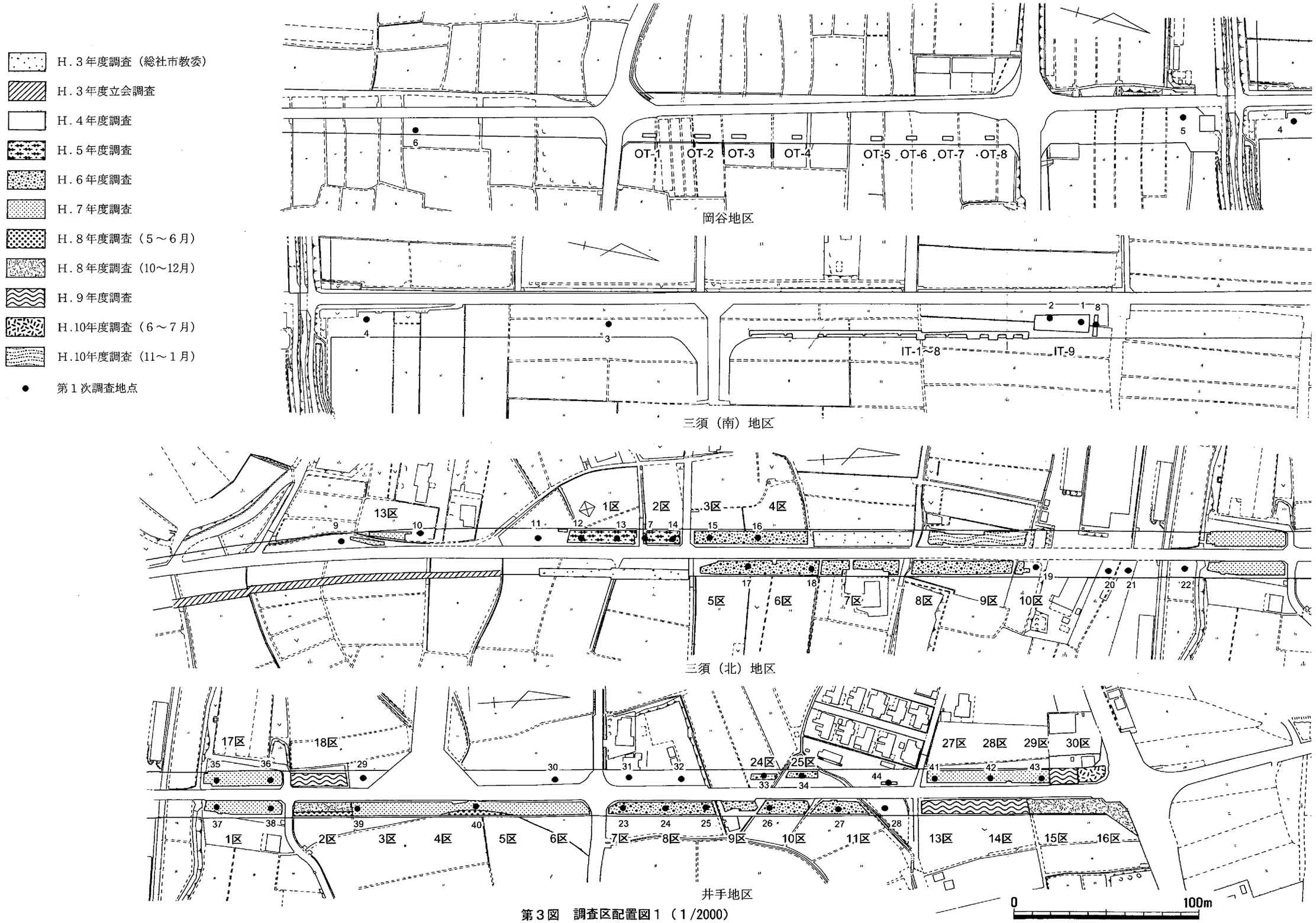
遺跡の広がりを確認することを目的とし、第1次調査を行った。都窪郡山手村前山遺跡から総社市井手天原遺跡までの約3kmの間に合計58地点でトレンチを設定した。そのうち、今回報告分は44地点で、1×3m、2×2mの広さを中心とする。調査は全面調査と並行して、農閑期に実施した。期間は岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡関連（T1～6、8）が平成4年度1～2月、三須河原・畠田遺跡関連（T9～22）が平成5年度12月、1月、3月、井手見延・天原遺跡関連（T23～44）が平成6年度10月、12月、2月、平成7年度4月、平成8年度10月にそれぞれ1～3日間を要した。調査後、必要な場合は石灰と機械で固めながら埋め戻し耕作土をのせた。

調査の結果、6つの微高地と5つの低位部、上幅約100mの旧河道が確認された（第5図）。基本的に遺構のない低位部および旧河道部、そして微高地上であっても遺構・遺物が確認されなかった地点は全面調査を行わない方針をとったが、低位部でも遺構が検出された場合、または遺物が多く見られる場合は、トレンチの拡張あるいは全面調査を実施した。

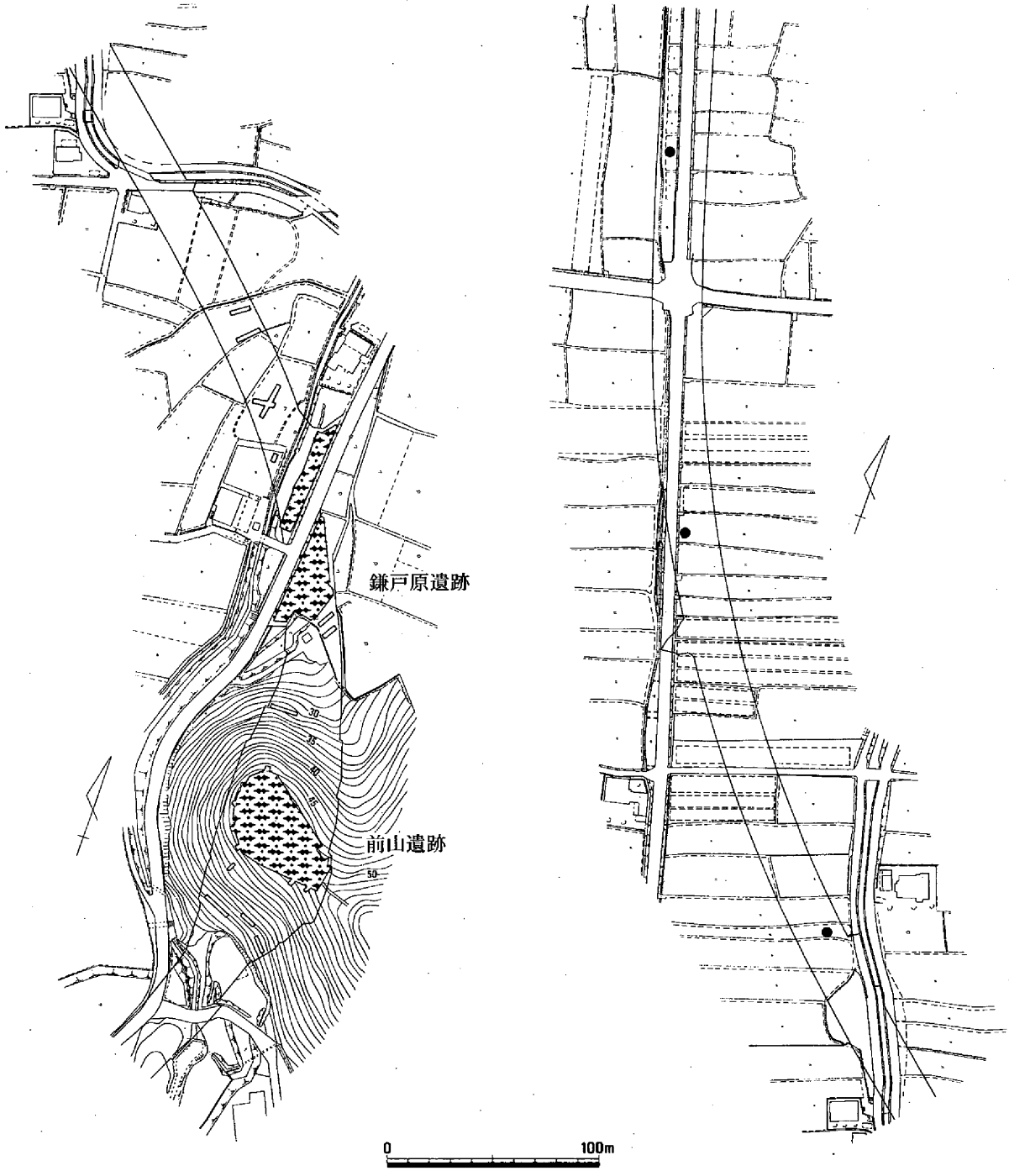
微高地の基盤層は下から礫層・粗砂層・褐色弱粘質微砂層とかさなり、褐色弱粘質微砂層上面で遺構が検出される。礫層・粗砂層が表土直下まで上がっている場所もある。低位部の基盤層（無遺物層）上面と微高地部遺構検出面との比高差は0.4～1.0mである。井手見延・井手天原量遺跡を隔てる低位部（T23～27・33・34）の基盤層上面では古代の鋤痕を検出した。旧河道部（T19～22）の南岸は緩やかに下がり、中世の水田層が確認できる。T20～22の表土下1m以上は粗砂が堆積し、その粗砂に混じって粒状になった早島式土器のかけらが多数あることから、旧河道の深さは不明であるが、少なくとも中世の段階でほぼ現状程度に埋まっていたと考えられる。

全面調査

全面調査は道路工事を急ぐ区間から、岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡、鎌戸原・前山遺跡、三須河原・三須畠田遺跡、井手見延・井手天原遺跡の順に行った。平成4年度は1月から3月まで調査員4名1班体制で岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡の調査を行った。岡谷大溝散布地では、旧山陽道がこの付近を通っていたと考えられ、2×8m前後のトレンチを8本設定した。三須今溝遺跡ではT2で護岸と考えられる無数の杭が密集した状況で検出されたことから、広く拡張したIT－9区を設けた。平成5年度4月～3月は調査員2名（1月から3名）1班体制で鎌戸原・前山・三須河原遺跡の調査を行った。この間9～10月の2ヶ月間他事業との調整により調査を一時中断した。平成6年度4月～7年度9月まで調査員3名1班体制で三須畠田・井手見延・井手天原遺跡の調査を実施した。第1次調査の結果をうけ、井手見延遺跡のT29では微高地上ではあるが遺構・遺物が全く確認されなかったことから全面調査を行わなかった。また、T23～27は低位部であるが微高地に近く、遺物も多量に出土したことから、全面調査またはトレンチの拡張を行った。T30～32は低位部であり、遺物も僅かであったので第1次調査をもって調査終了とみなした。T28・44では微高地上であるが基盤の粗砂層が表土直下までせり上がっており、遺構・遺物とも確認されず同様に第1次調査をもって終了とした。その後は用地買収等の条件整備が間にあわず、調査を一旦中止し、3月まで鎌戸原・前山遺跡の報告書の作成に入った。以後、条件整備の進捗に合わせた断続的な調査となる。平成8年度5～6月に調査員2名1班体制で井手見延遺跡を、同年度10～12月に調査員3名1班体制で井手見延・井手天原遺跡を調査した。その後1月から3月まで調査員1名が報告書の作成を行う。平成9年



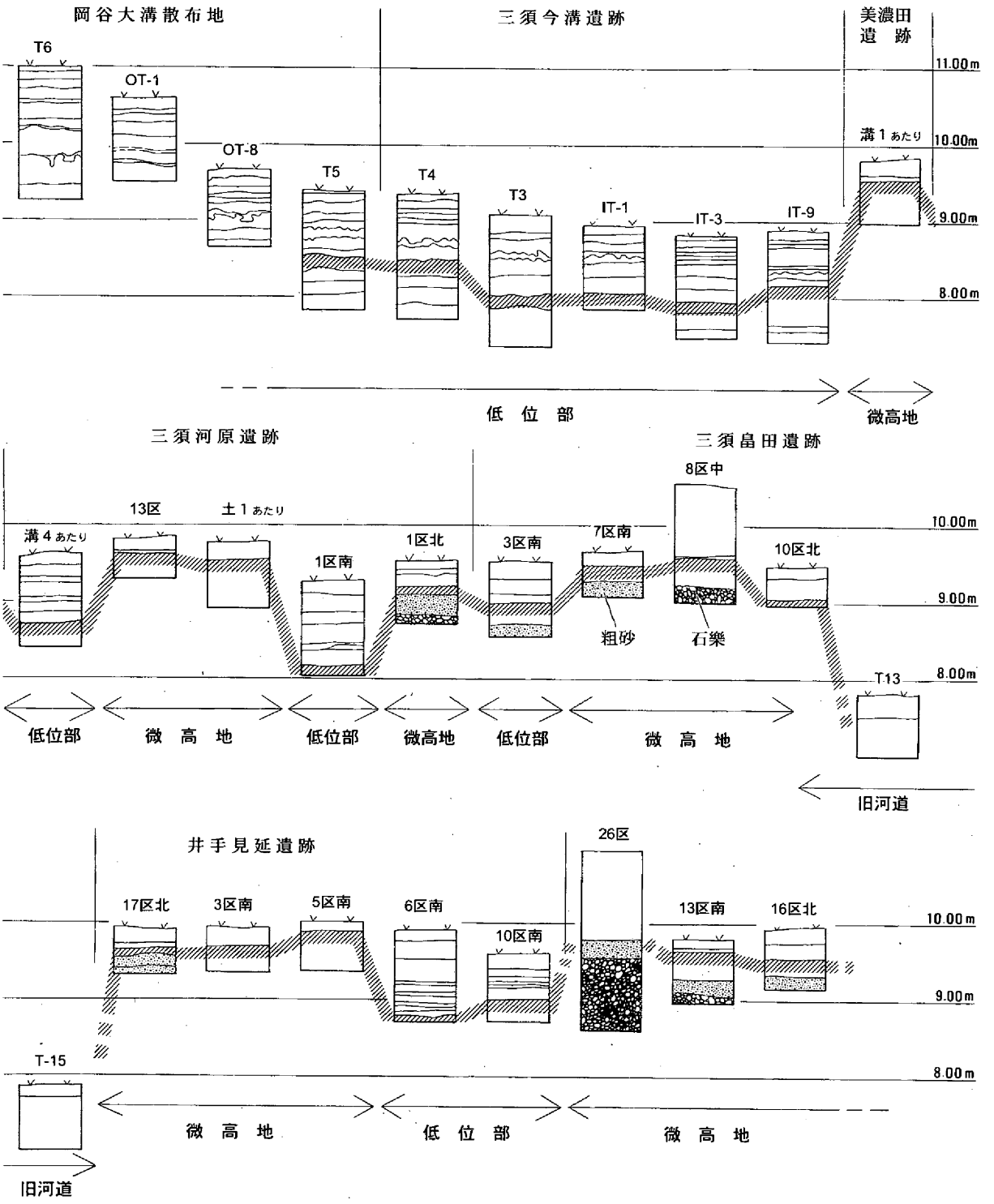
第３図　調査区配置図１（１/2000）



第４図　調査区配置図２-既報告分（１/3000）

度４～６月に調査員３名１班体制で井手見延・井手天原遺跡を、平成10年度６～７月に調査員２名１班で井手天原遺跡、11～１月まで調査員３名１班で三須畠田遺跡を調査し、これをもって国道429号線改良に伴う発掘調査を終了した。

調査期間を通して倉敷地方振興局、文化課、岡山県古代吉備文化財センターの三者で、時に総社市や道路工事請負業者を交え、条件整備の確認、調査の進捗・方針、排土用の借地依頼などを話し合う現地協議を再三開いた。また、平成６年度１月に埋蔵文化財専門委員会を開催し、指導・教示を得た。調査にあたっては、非常に交通量の多い道路の両側であるため、歩行時には注意をはらった。また、ガードレール等が無い部分については夜間に車が調査区に飛び込まぬよう電柱から100Ｖを下ろし、



第5図　土層高低図（1/80）　　※斜線は基盤層上面

チューブライトを設置した。雨水や地下水の排水はコンパネで水槽を作り、オーバーフローさせた。調査区は水田と車道にはさまれた部分が多く、シート等が飛ばぬよう台風時には特に気を付けた。また、調査区が民家の出入り口、商店の出入り口・駐車場になっている場所あるいは排土置き場の借地が困難な場所は狭い範囲を3～4分割して進入道・駐車場を確保しながらの調査となった。住宅への入り口が限定される場所は進入道も限定され、どうしても調査できない範囲が生じた。表土剥ぎは主に重機を用い、調査終了後は、道路工事と連動する箇所以外は重機・人力にて埋め戻した。　(物部)

調査体制

平成４年（1992）年度

岡山県教育委員会
　教育長　竹内　康夫
岡山県教育庁
　教育次長　森崎岩之助
文化課
　課　長　渡辺　淳平
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　柳瀬　昭彦
　主　査　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
　所　長　横山　常実
　次　長　河本　清
　文化財保護参事　葛原　克人
　〈総務課〉
　総務課長　北原　求
　課長補佐（総務係長）　小西　親男
　主　査　石井　茂
　主　査　石井　善晴
　〈調査第一課〉
　課　長　葛原　克人（調査担当）
　課長補佐（第二係長）　岡田　博
　文化財保護主事　三上　修二（調査担当）
　主　事　竹原　伸之（調査担当）
　主　事　長門　修（調査担当）

平成５年（1993）年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　岸本　憲二
文化課
　課　長　渡辺　淳平
　課長代理　松井　新一
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主　査　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
　所　長　横山　常実
　次　長　葛原　克人
　〈総務課〉
　総務課長　北原　求
　課長補佐（総務係長）　小西　親男
　主　査　石井　茂
　主　査　石井　善晴
　主　任　三宅　秀吉
　〈調査第一課〉
　課　長　正岡　睦夫（調査担当）
　課長補佐（第二係長）　山磨　康平
　文化財保護主任　槇野　芳典（調査担当）
　主　事　物部　茂樹（調査担当）

平成６年（1994）年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　岸本　憲二
文化課
　課　長　大場　淳
　課長代理　松井　新一
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主　査　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所　長　河本　清
　次　長　葛原　克人
　〈総務課〉
　総務課長　丸尾　洋幸
　課長補佐（総務係長）　杉田　卓美
　主　査　石井　善晴
　主　任　三宅　秀吉
　〈調査第一課〉
　課　長　正岡　睦夫（調査担当）
　課長補佐（第三係長）　岡本　寛久
　文化財保護主任　逸見　優一（調査担当）
　主　事　物部　茂樹（調査担当）

平成７年（1995）年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　黒瀬　定生
文化課
　課　長　大場　淳
　課長代理　樋本　俊二
　参　事　葛原　克人
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主　査　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所　長　河本　清
　次　長　高塚　惠明
　次　長（文化課本務）　葛原　克人
　〈総務課〉
　総務課長　丸尾　洋幸
　課長補佐（総務係長）　井戸　丈二
　総務主幹　守安　邦彦
　主　査　石井　善晴

主　任　木山　伸一
〈調査第一課〉
課　長　正岡　睦夫(調査担当)
課長補佐(第一係長)　松本　和男
文化財保護主任　岡田　達也(調査担当)
主　事　物部　茂樹(調査担当)

平成8年(1996)年度

岡山県教育委員会
教育長　森崎岩之助
岡山県教育庁
教育次長　黒瀬　定生
文化課
課　長　大場　淳
課長代理　松井　英治
参　事　葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)　平井　勝
主　査　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　河本　清
次　長　高塚　惠明
次　長(文化課本務)　葛原　克人
〈総務課〉
総務課長　丸尾　洋幸
課長補佐(総務係長)　井戸　丈二
総務主幹　守安　邦彦
主　査　木山　伸一
〈調査第一課〉
課　長　高畑　知功
課長補佐(第一係長)
(県立博物館兼務)　江見　正己
文化財保護主任　大橋　雅也(調査担当)
主　事　金田　善敬(調査担当)
〈調査第三課〉
課　長　柳瀬　昭彦
課長補佐(第三係長)　岡田　博
文化財保護主任　高田恭一郎(調査担当)
主　事　尾上　元規(調査担当)
主　事　小嶋　善邦(調査担当)

平成9年(1997)年度

岡山県教育委員会
教育長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　臼井　洋輔
課長代理　西山　猛
参　事　葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)　平井　勝
主　査　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　簸本　克之
次　長　正岡　睦夫
〈総務課〉
総務課長　小倉　昇
課長補佐(総務係長)　井戸　丈二
主　査　木山　伸一
〈調査第二課〉
課　長　伊藤　晃
課長補佐(第二係長)　山磨　康平(調査担当)
文化財保護主任　高田恭一郎(調査担当)
主　事　重根　弘和(調査担当)

平成10年(1998)年度

岡山県教育委員会
教育長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　西山　猛
参　事　正岡　睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)　松本　和男
主　査　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原　克人
次　長　大村　俊臣
〈総務課〉
総務課長　小倉　昇
課長補佐(総務係長)　安西　正則
主　査　山本　恭輔
〈調査第一課〉
課　長　高畑　知功
課長補佐(第一係長)　中野　雅美
文化財保護主事　岡本　泰典(調査担当)
主　事　重根　弘和(調査担当)
〈調査第二課〉
課　長　伊藤　晃
課長補佐(第二係長)　下澤　公明
文化財保護主幹　山磨　康平
文化財保護主査　光永　真一(調査担当)
文化財保護主事　金田善敬(調査担当)
文化財保護主事　蛯原啓介(調査担当)

調査日誌

平成４年度

１月25日　岡谷大溝散布地調査開始
１月27日　三須今溝遺跡調査開始
１月28日　岡谷大溝散布地調査終了
３月31日　三須今溝遺跡調査終了

平成５年度

４月１日　鎌戸原遺跡調査開始
６月16日　鎌戸原遺跡調査終了、前山遺跡調査開始
９月１日～10月31日　他事業との調整により前山遺跡調査一時中断
１月13日　埋蔵文化財専門委員会開催
１月17日　三須河原遺跡調査開始
２月15日　前山遺跡調査終了
３月31日　三須河原１・２区調査終了

平成６年度

４月１日　三須畠田遺跡調査開始
11月７日　井手見延遺跡調査開始
12月22日　三須畠田３～10区調査終了
３月31日　井手見延７～11、19～25区調査終了

平成７年度

４月１日　井手見延遺跡１区から調査開始
４月21日　三須河原13区調査開始
５月12日　三須河原遺跡調査終了
５月17日　井手天原遺跡27区から調査開始
８月22日　井手天原27・28・29区調査終了
９月29日　井手見延１・17・３・４西半・５区西半・６区調査終了

平成８年度

５月13日　井手見延２区東側から調査開始
６月13日　井手見延２・４・５区東側調査終了
10月１日　井手見延２区西側調査開始
11月５日　井手見延２区西側調査終了
11月25日　井手天原16区から調査開始
12月24日　井手天原15・16区調査終了

平成９年度

４月４日　井手天原13・14区から調査開始
６月５日　井手見延18区調査開始
６月25日　井手見延18区調査終了
６月27日　井手天原13・14・30(南半)調査終了

平成10年度

６月４日　井手天原30区(北半)調査開始
７月16日　井手天原遺跡調査終了
11月４日　三須畠田11・12区調査開始
１月26日　三須畠田遺跡調査終了

第2節　報告書の作成

報告書の作成は平成８年度１～３月（調査員１名）、平成11年度４～３月（調査員前半２名後半１名）で行った。

７年間にわたる調査の結果、微高地や低位部の状況が把握され、また、総社市教育委員会による圃場整備に伴う発掘調査等が周辺で進展し、それぞれの微高地の特色も明らかになりつつある。そこで、総社市教育委員会と協議をし、遺跡をくくり直し、それに従って報告書を作成した。以下詳細を記す。南から、調査時の名称「大溝・今溝遺跡」を「岡谷大溝散布地」と「三須今溝遺跡」に分けた。両者間の距離と緩斜面と低位部という立地の違いを考慮した。また、岡谷大溝は遺構が確認されず散布地とした。その北、調査時に「三須畠田遺跡１～13区」とした区間は、小字「河原」の北側小字境（矢印１）がちょうど低位部に沿っており、ここに境を設定し、北側を「三須畠田遺跡」（３～12区）、南側を「三須河原遺跡」（１・２・13区）とした。13区は正確には低位部をはさんで中須賀遺跡が所在する別の微高地であるが、総社市教委の調査で、「郡殿」の墨書須恵器や棟方向を同じくする奈良時代の掘立柱建物群など重要な発見が相次いだ三須河原遺跡と一連の総柱建物群が検出されており、三須河原遺跡に含めた。その南は低位部をはさみ美濃田遺跡～天満遺跡が所在する。三須畠田遺跡の北には「三須」と「井手」の大字境（矢印２）になっている旧河道がある。この大字境から国道180号までを調査時は「金井戸見延遺跡」と呼称した。この区間も中央部に低位部が所在し、小字「天原」

報告書作成の体制

平成８年(1996)年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長	黒瀬　定生

文化課

課　長	大場　淳
課長代理	松井　英治
参　事	葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井　勝
主　査	若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	河本　清
次　長	高塚　惠明
次　長(文化課本務)	葛原　克人
〈総務課〉	
総務課長	丸尾　洋幸
課長補佐(総務係長)	井戸　丈二
総務主幹	守安　邦彦
主　査	木山　伸一
〈調査第三課〉	
課　長	柳瀬　昭彦
課長補佐(第三係長)	岡田　博
主　事	小嶋　善邦(整理担当)

平成11年(1999)年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	宮野　正司

文化課

課　長	松井　英治
課長代理	佐々部和生
参　事	正岡　睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本　和男
主　任	奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	葛原　克人
次　長	大村　俊臣
〈総務課〉	
総務課長	小倉　昇
課長補佐(総務係長)	安西　正則
主　査	山本　恭輔
〈調査第一課〉	
課　長	高畑　知功
課長補佐(第二係長)	下澤　公明
文化財保護主任	亀山　行雄(整理担当)
文化財保護主事	物部　茂樹(整理担当)

の南境（矢印３）をもって北を「井手天原遺跡」、南を「井手見延遺跡」とする。井手天原遺跡は国道180号を越えて延びることが確認されており、また、すぐ東の金井戸天神遺跡と同一微高地上に立地する可能性がある。また、井手見延遺跡は小字「西鴻崎」「東鴻崎」に所在する金井戸鴻崎遺跡と同一微高地上に立地し、井手見延遺跡低位部出土の遺物は金井戸鴻崎遺跡との関連が強い。　（物部）

第６図　調査区周辺地形図（１/10000）

第3節　地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

岡山県の南西部に位置する総社平野は、総社市東部から山手村・清音村・岡山市の西部にまたがっている。北に面する経山(372m)から鬼城山(403m)にかけての山塊は吉備高原の南縁にあたり、平野に面した山容は比較的けわしい。また、南に連なる福山(302m)から仕手倉山(223m)にかけての山塊は、なだらかな南面に比して北面は急峻な傾斜をもち非対称な山容をみせる。これらの山塊は白亜紀の花崗岩からなるが、軽部山辺りでは古生代の堆積層が見られる。また、福山と仕手倉山の間には南北に走る断層があり、狭長な谷部を形成している。現在国道429号が走るこの谷は、総社と倉敷を結ぶ交通路として古くから利用されており、その沿線には多くの遺跡が点在する。

この国道429号が南北に縦断する総社平野は、古高梁川の東分流によって形成されたものである。この河道は、井尻野辺りで分岐して東流し、古足守川と合し板倉付近で南に向きを変え、「吉備の穴海」と呼ばれた内海へと注いでいたものと想定されている。平家物語や太平記に見える板倉川がこれにあたり、現在の前川はその一部と推定される。この河道は次第に流路を変えながら幾重にも分岐し、さながら網の目のような痕跡を大地に刻み込むとともに、その流域には大小の自然堤防を発達させている。縄文時代以来の集落はこうした自然堤防上に立地しており、その傾向は現代の伝統的集落においても踏襲されている。

また、自然堤防の周囲に広がる低位部は、河道跡などを利用して水路が巡らされもっぱら水田として利用されてきた。しかし、近年では埋め立てによって工場の進出や宅地化が顕著となってきている。

一方、南北の山裾にはなだらかな低丘陵が広がり、一部では扇状地が発達している。これらの地帯は現在、水田や畑地として利用されているが、かつては居住の場として、あるいは数多くの古墳群に示されるように墳墓の地として利用されてきた。

（2）歴史的環境

この地域における人類の足跡は旧石器時代に溯る。総社平野を取りまく丘陵上では旧石器が点々と採集されており、ここに生活の場を求めた人々がいたことを物語っている。平野部の遺跡は、長良山遺跡や真壁遺跡など縄文時代早期から見られるが、本格的な進出が始まるのは後期以降のことであり、井手見延遺跡においても晩期の土器が数点出土している。こうした立地変化の背景には南溝手遺跡の籾痕土器が示唆するような生業の変化があったものと思われる。

弥生時代前期～中期中葉の遺跡は南溝手遺跡のほか山津田遺跡・鎌戸原遺跡などさほど多くはないが、中期後半になると遺跡数は増加し、三須畠田遺跡もこの頃に集落の形成が始まっている。中期後半には平地式の建物が多く見られるようであるが、後期になると大形の竪穴住居が主体となり貯蔵穴が増加する傾向にある。総社平野では三須で銅鐸の出土が伝えられるものの、足守川流域に比べれば青銅器の出土は少なく、他地域との活発な交流を窺わせるような遺物も乏しい。しかし、後期に入ると集落規模が拡大するとともに、丘陵上に前山遺跡や鋳物師谷遺跡・岩屋山遺跡といった集団墓が営まれるようになり、やがて宮山遺跡のような前方後円形の墳丘墓が出現する。

古墳時代前期には天望山古墳(約55m)や三笠山古墳(約70m)といった前方後円墳が築かれるが、足守川流域のように100mを越えるような古墳は見られない。しかし、中期にはいると加茂造山古墳(350m)に続いて三須作山古墳(286m)、宿寺山古墳(114m)といった大規模な前方後円墳が造営さ

れる。また、周辺の丘陵部では後期にかけて数百基の古墳が築かれるが、その中には竪穴系横口式石室と呼ばれる初期の横穴式石室を導入するものもあり、この地域の特色をなしている。やがて山陽道でこの時期最大の前方後円墳（約100ｍ）であるこうもり塚古墳が築かれるが、続く江崎古墳（45ｍ）を最後に前方後円墳は姿を消す。ところで、この地域では津寺一軒屋遺跡の鍛冶炉や随庵古墳（約40ｍ）の副葬品に示されるように早くから鉄器生産が行われているが、後期には鉄鉱石を原料とする製鉄が千引かなくろ谷遺跡などで始まり、窪木薬師遺跡のような鍛冶専業集落も現れる。また、奥ケ谷窯跡では須恵器の生産がいち早く行われており、末ノ奥窯跡で生産された飛鳥瓦は奈良県平吉遺跡にも運ばれていることから中央政権（蘇我氏）とのかかわりの深い地域であったことが指摘されている。

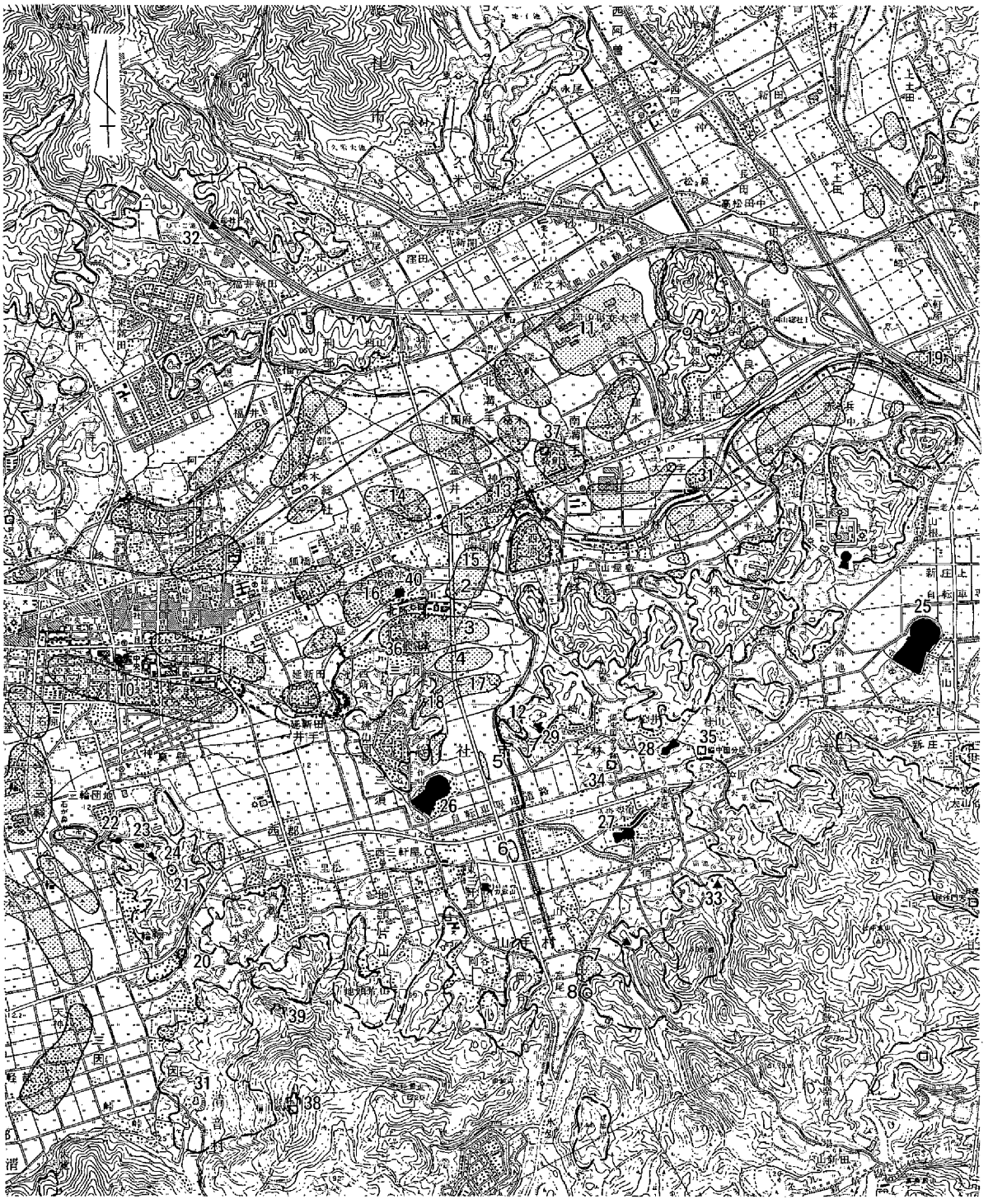
律令制下において、この地域は窪屋郡美賀郷と賀陽郡八田部郷に比定され、その境は三須畠田遺跡と井手見延遺跡の間を東西に走る河道にあるものと想定されている。古代山陽道は、津峴駅に比定される矢部遺跡を経て備中国分寺・国分尼寺の南を西に走るものと推定されているが、「郡殿」の墨書土器などを出土した三須河原遺跡を窪屋郡衙に擬するならば、総社宮周辺に想定されている備中国衙、あるいは栢寺廃寺の辺りに存在されるとする賀夜郡衙へ向けて北上する古道がこの周辺を通過していたかもしれない。平安時代には、福山山塊に福山寺や朝原寺・広谷寺などの山上寺院が建立されている。なかでも藤原成親出家の地として平家物語に表れる朝原寺（安養寺）は、応安２年銘の瓦経が出土したことで知られる。

鎌倉時代には東大寺復興の料所となった備前を拠点とする重源の活動がこの地においても伝えられている。南北朝時代には福山城をめぐる攻防が繰り広げられ、福山寺も兵火にかかって焼失している。やがて備中は細川氏の領国となり、この地域は幸山城に拠る守護代石川氏の支配下におかれた。このころには、守護所のおかれた松山への往来が整備され、総社宮の存在もあいまって八田部村界隈は賑わいを増していったものと推測される。応仁の乱後、細川氏の支配が弱まると、尼子や毛利、織田氏の進攻を招き、庄氏や三村、禰屋、薬師寺、中島、生石氏といった国人を巻き込んだいわゆる備中兵乱が勃発する。しかし、高松城をめぐる攻防が織田氏優位のうちに終わると、これに与した宇喜多氏の支配するところとなる。関ヶ原の合戦後、宇喜多氏に代わって三須・井手には蒔田氏が、岡谷には早水氏（後に池田氏）が入封する。宝暦年間に井手に開かれた蒔田氏の陣屋は火災を被った後浅尾に移されるが、幕末の浅尾騒動に際して灰燼に帰している。

明治に入り、井手村は総社村に合併され、昭和29年には三須村をも併せて総社市となる。また、岡谷村は明治22年に山手村に合併され今に至っている。現在、三須・岡谷地区は吉備路風土記の丘県立自然公園に指定され、休日ともなれば県内外から多くの観光客を迎え入れている。一方、井手地区は市街地整備事業によって宅地化が進み、その景観を一変させた。今回の国道429号の拡幅整備によって、この地域の景観はさらなる変貌を遂げつつある。　（亀山）

＜主要参考文献＞

『岡山県通史』岡山県、1930
『岡山県史１～30』岡山県、1981～1991
『総社市史』総社市、1987～1998
『総社市埋蔵文化財調査報告書１～15』総社市教育委員会、1984～1999
『総社市埋蔵文化財調査年報１～９』総社市教育委員会、1991～1999
『岡山県歴史の道調査報告書１・９』岡山県教育委員会、1992・1994
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47・65・100・115』岡山県教育委員会、1982・1987・1995・1997



集落　古墳群　弥生後期集団墓　寺院跡　旧河道

1．井手天原遺跡
2．井手見延遺跡
3．三須畠田遺跡
4．三須河原遺跡
5．三須今溝遺跡
6．岡谷大溝散布地
7．鎌戸原遺跡
8．前山遺跡
9．長良山遺跡
10．真壁遺跡
11．窪木南溝手遺跡
12．山津田遺跡
13．金井戸天神遺跡
14．金井戸新田遺跡
15．金井戸鴻崎遺跡
16．井手村後遺跡
17．美濃田遺跡
18．天満遺跡
19．高塚遺跡
20．鋳物師谷遺跡
21．岩屋遺跡
22．宮山遺跡
23．天望山古墳
24．三笠山古墳
25．造山古墳
26．作山古墳
27．宿寺山古墳
28．こうもり塚古墳
29．江崎古墳
30．緑山古墳群
31．窪木薬師遺跡
32．奥ヶ谷窯跡
33．末の奥窯跡
34．備中国分寺
36．備中国分尼寺
36．三須廃寺
37．栢寺廃寺
38．福山城跡
39．幸山城跡
40．浅尾藩陣屋跡

第7図　周辺遺跡分布図（1/40000）

第２章　岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡

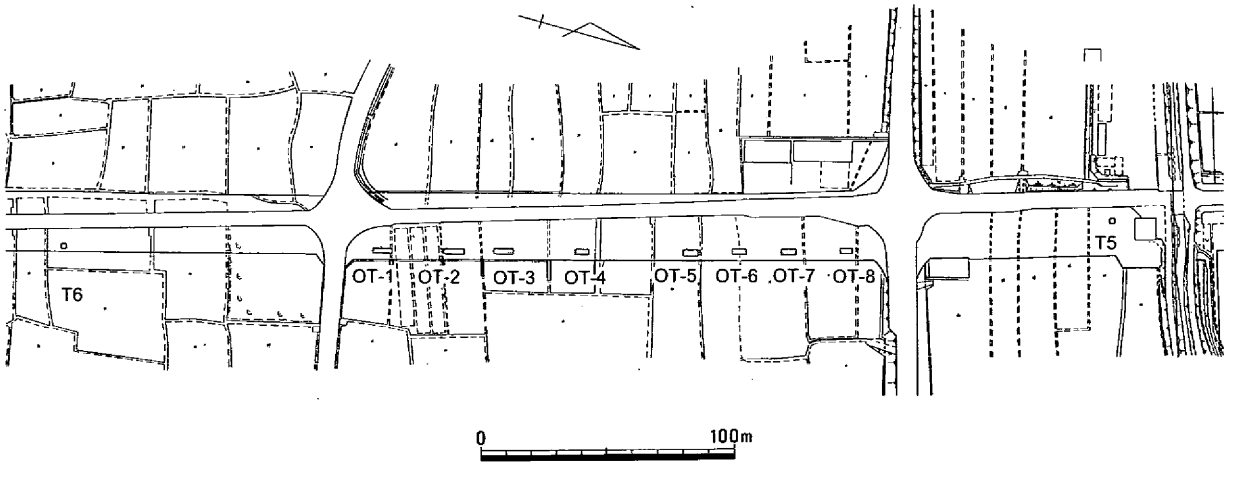
第１節　岡谷大溝散布地の調査の概要

岡谷大溝散布地は都窪郡山手村岡谷字大溝に所在し、北緯34°39'30"に位置する。天平期の旧山陽道と推測されている現在の吉備路自転車道と、その南約300mにある江戸期の旧山陽道とされる現在の県道清音真金線の間を中心にして、トレンチによる調査を行った。その結果、少量の遺物が出土したものの遺構は確認されなかったので、散布地として取り扱うことにした。

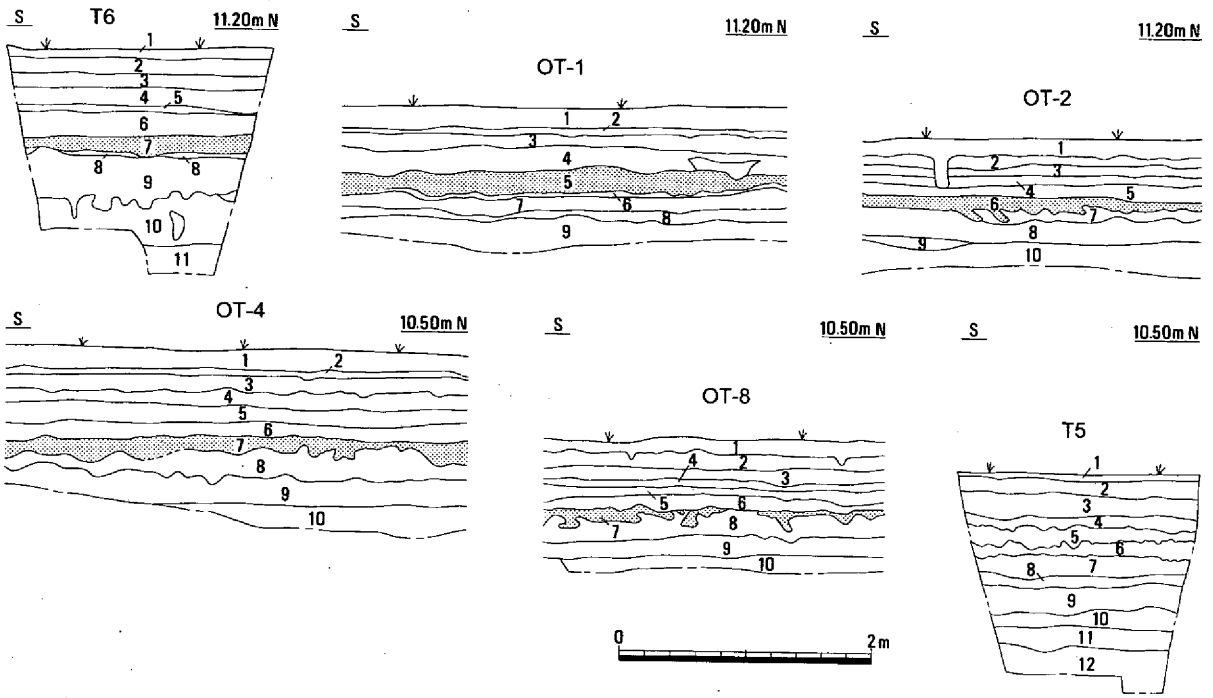
通称「水別れ峠」から北に向けて緩斜面が広がっている。峠付近の谷水を集めた貯水池「大池」に発した「大溝川」が緩斜面のほぼ中央を北流し、三須今溝遺跡の所在する低湿地に至り、やがて前川に合流する。調査区はこの大溝川の西約100mにあり、このあたりの大溝川は天井川と化している。

Ｔ６の現在の水田面の標高は11.05m、Ｔ５では9.45mで、両者の比高差は1.60mある。現水田耕作土の下は黄灰色を呈する砂質土層であるが、これはおそらくは近世以降の水田層と考えられる。その下層には、色調にやや違いのある粗砂を多く含む土層と粗砂層が、Ｔ６からOT-８にわたり見られる。これらの層は大溝川の氾濫・堆積層を示すものと推測される。Ｔ５では第４～６層に相当するように思われるが、そうであれば後節の三須今溝遺跡におけるＣ層に接続する可能性が高く、時期は中世となる。その下層は黒色を帯びた粘質土層になる。OT-２の第９層・OT-４の第９層など粗砂層を挟んでいる場所がみられ、やはり、大溝川の氾濫に起因した堆積層の可能性が強い。

遺物は全体で10点出土した。いずれも小片で、かつ摩耗している。Ｔ６では遺物は皆無である。OT-１においては近世かと思われる細片１点。OT-２では弥生後期Ⅲの鉢１が１点出土。OT-３では遺物は未発見。OT-４では須恵器の小片が２点。OT-５・６ではいずれも遺物なし。OT-７で８世紀前葉の須恵器杯**２**が１点出土。OT-８では遺物なし。Ｔ５で平安時代と考えられる土師器皿**３**が１点、凹面に布目・凸面に縄目タタキが残る平瓦**４**が１点、その他、土師質の細片が３点出土した。これらの遺物は明らかに南上方より流入してきたもので、付近に集落の存在を推定することは難しい。 また、旧山陽道に関連すると思われるような遺構・遺物とも認められなかった。　　（葛原）



第８図　トレンチ配置図（１/3000）



T6
1．耕作土
2．灰黄色砂混入土
3．明灰黒色中砂
4．灰黄色粗砂
5．灰黄色土
6．茶黒色土
7．灰黒色粗砂混入土
8．灰黄色粘質土
9．黒灰色粘質土
(炭・焼土粒を含む)
10．黄灰色土
11．暗灰黄色土

OT-1
1．耕作土
2．床土
3．明黄褐色砂
4．淡灰褐色砂質土
5．〃
6．黄茶褐色土
7．暗灰色粘質土
8．暗黒灰白粘質砂
9．暗黒灰粘土

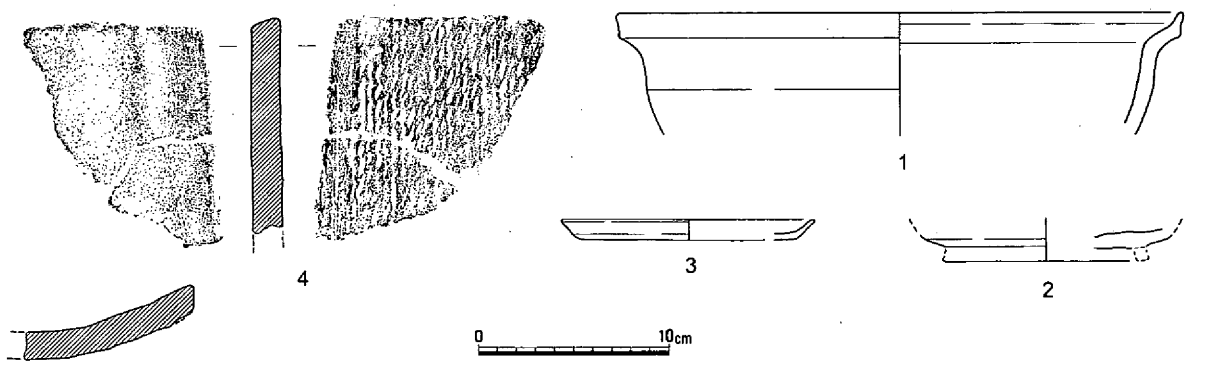
OT-2
1．耕作土
2．床土
3．灰黄色土
4．灰青色微砂混入土
5．灰青色中砂
6．暗茶褐色微砂
(粗砂を含む)
7．灰色粘土
8．青灰色土
9．灰青色粗砂
10．暗青灰色土
(部分的に黒色)

OT-4
1．耕作土
2．淡灰色土
3．明茶褐色粘質微砂
4．灰褐色土
5．灰褐色粘質微砂
6．淡灰褐色土
7．明黄褐色粗砂
8．淡灰茶褐色砂質土
9．明灰褐色粘質土
10．暗黒灰色粘質土

OT-8
1．耕作土
2．黄灰色土
3．灰色土
4．灰黄色土
5．淡灰青色土
6．淡灰紫色土
7．灰色粗砂
8．灰青色粘質粗砂混入土
9．灰黒色土
10．黒色粘質土

T5
1．耕作土
2．灰黄色粗砂混入粘質土
3．灰黄色粗砂混入粘質土
4．灰紫色粗砂
5．灰青色粘質土
6．明灰青色粘質土
7．黒灰色粘土(炭を含む)
8．暗黒灰色粘土
9．黄灰色粘土
10．明青灰色粘土
11．灰黒色粘土
12．黒色粘土

第９図　土層図（１/60）

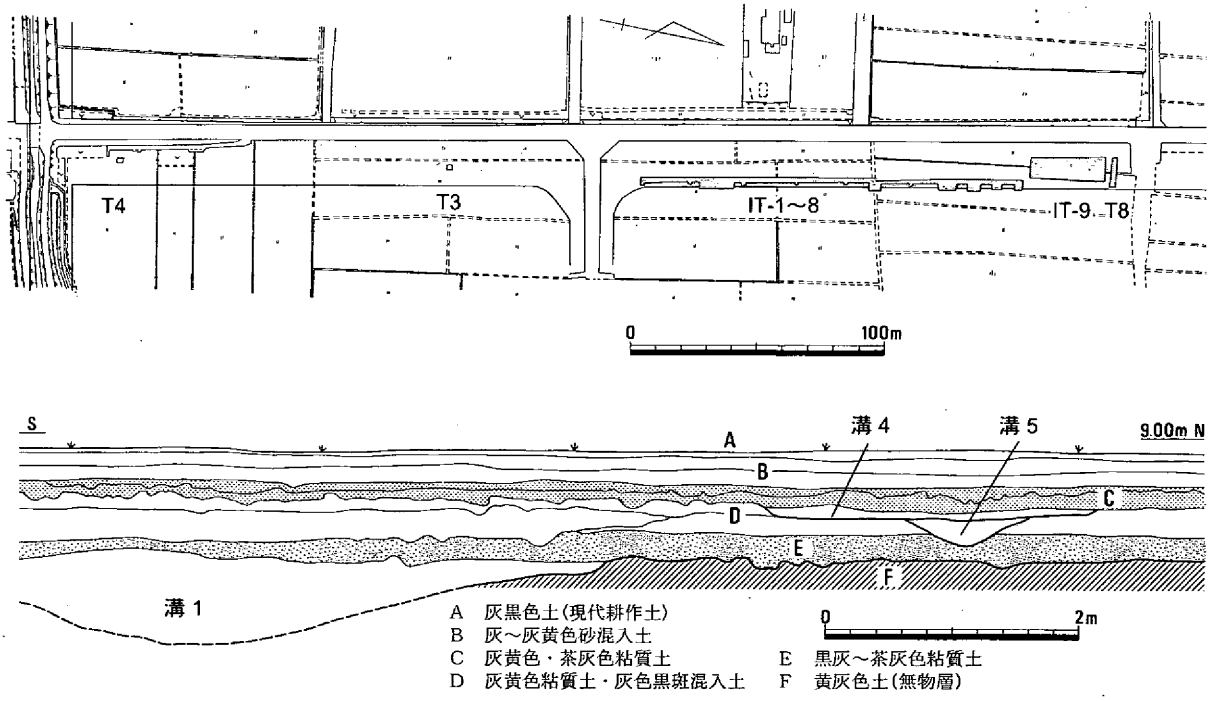


第10図　出土遺物（１/４）

第２節　三須今溝遺跡の調査の概要

三須今溝遺跡は、総社市三須字今溝に所在し、北緯34°39'49"東経133°46'39"に位置する。当地の地形は、北に美濃田遺跡の微高地、東に江崎古墳などが所在する低丘陵、西は作山古墳を南限とする低丘陵、南は都窪郡山手村と倉敷市を隔てる福山山塊の山裾緩斜面などに周囲を囲まれた低湿地帯で、現在は広く水田化され、条里地割りがみられる。周囲から集まる用排水路は東側の丘陵に沿って流れる前川に注ぎ、北へと抜ける。標高は8.80～9.00mと低く、大雨時には水田が冠水し、容易に水が引かない場所である。調査区はこの低湿地のほぼ中央部にあたる。

現代耕作土下には厚さ20～30cmの近世水田層（Ｂ層）があり、16世紀末～17世紀前葉の絵唐津の碗や18世紀の唐津・伊万里の碗・京焼きの皿がわずかにみられる。その下は厚さ10～15cmの灰～茶灰色を呈する中世水田層（Ｃ層）となる。この層の下面は激しく乱れ、洪水の痕跡と考えられる。その下の粘質土（Ｄ・Ｅ層）は土師器様の細片が少量出土したのみで、正確な時期は決めがたいが、この層を基盤とする溝10に包含された土器の年代観から古墳時代中期以前の堆積層と推定される。そして、黄灰色土（Ｆ層）から無遺物層になる。遺構面は２面。現地表下50～80cmのＤ層上面と約90cmのＦ層上面である。Ｄ層上面では溝が10条確認され、５～６世紀の溝が８条、古代の溝が１条、中世の溝が２条である。Ｆ層上面では弥生前期の溝１条、弥生中期後半の溝３条を検出したにすぎない。弥生中期後葉の溝３をのぞき、弥生前期～古墳時代の溝は流路を南西－北東にとるのに対し、古代～中世の溝は南－北、東－西を指す。遺物の総量は土器小片300～400片 程度で、IT-1～IT-9区のそれぞれから10数片ずつ出土。 縄文晩期、弥生前期Ⅱ・中期Ⅲ・後期Ⅰ・Ⅳ・古墳前期、中期Ⅱ・後期、中世（鎌倉）、近世の各時期が確認された。Ｔ４では摩耗した瓦片と近世後半の備前焼きを含む小片５点が出土したが、Ｔ３は無遺物であった。検出された溝は排水路と考えられ、周囲に弥生前期水田が存在する可能性もある。　（葛原）



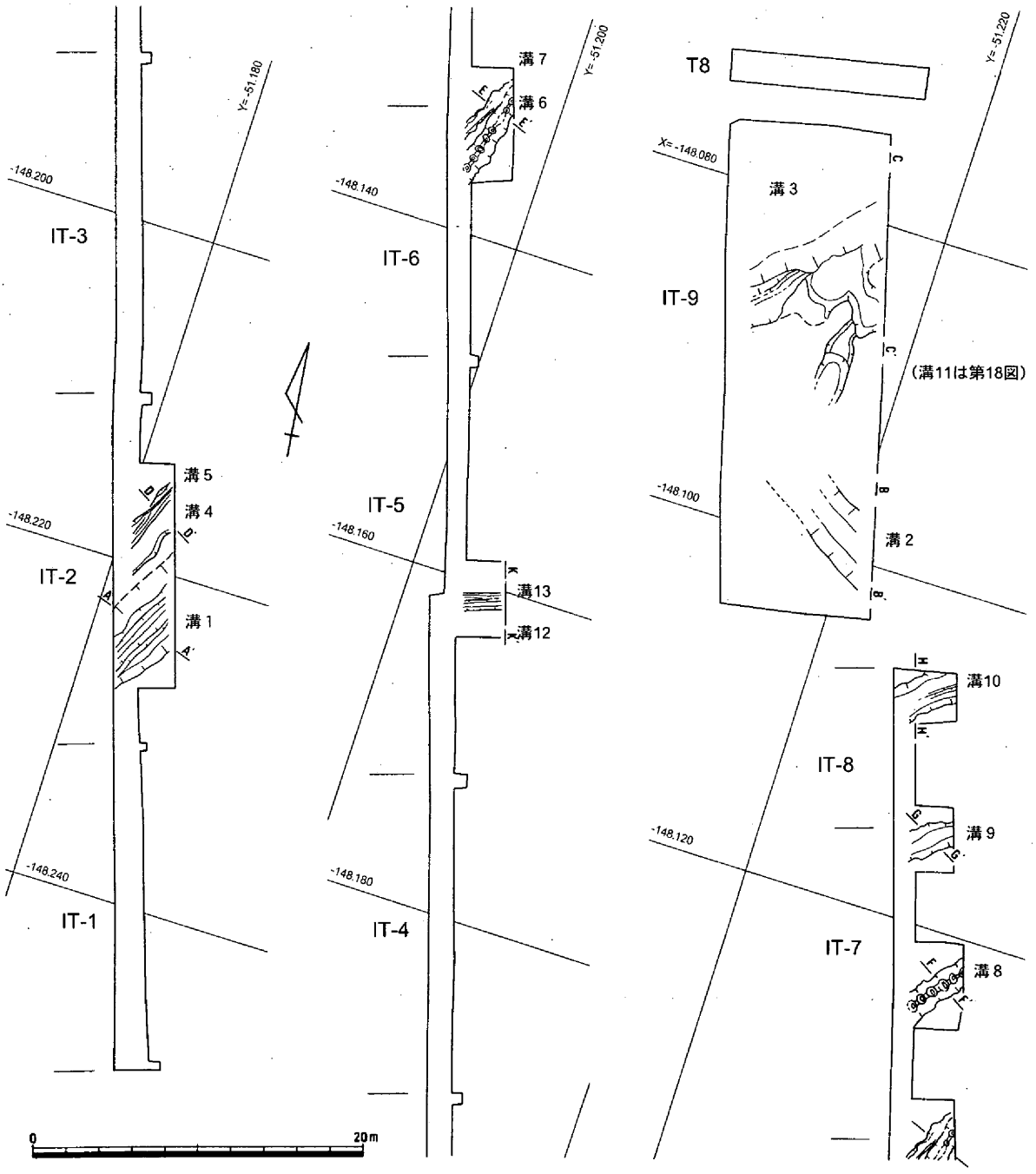
第11図　調査区配置図・基本層序（１/3000・１/60）

第３節　三須今溝遺跡の遺構・遺物

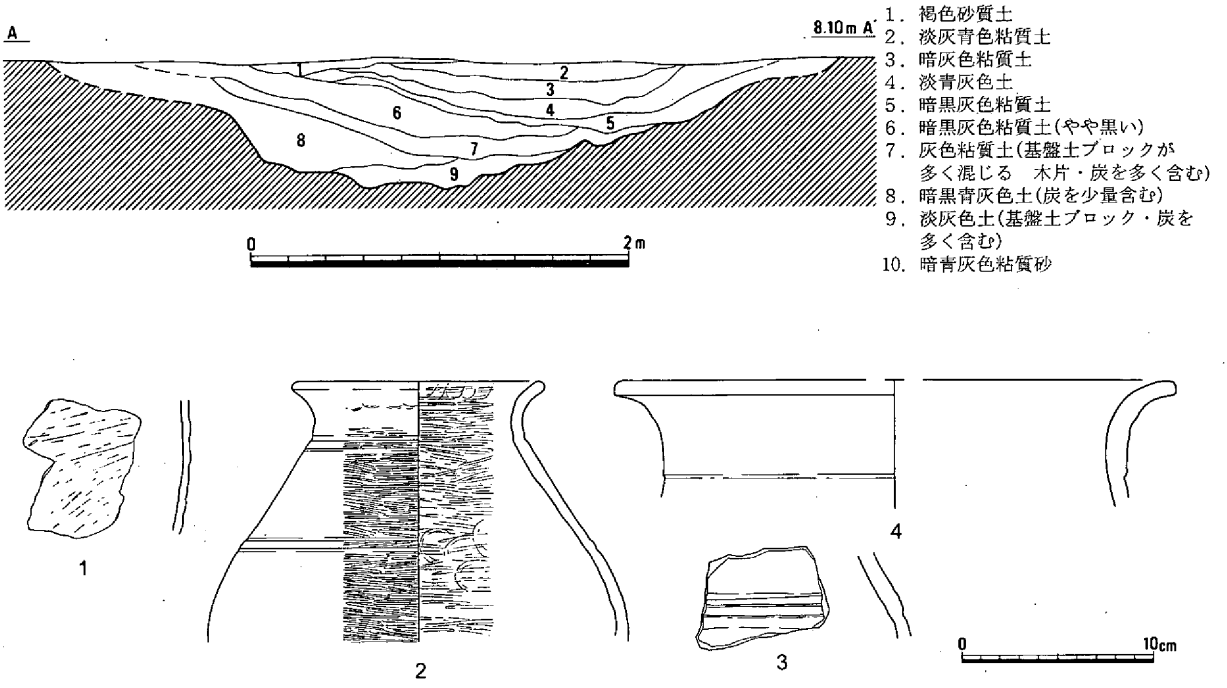
（１）溝

溝１（第13図　図版３・６）

IT-２区で検出された溝１は最も南に位置する遺構である。検出面の標高は約8.00mと低い。幅4.1m、深さ0.65m。現在の地形からすると南西から北東に流れていたと思われる。埋土は粘質土である。７層には枝状の流木が多数みられ、また溝の南側斜面で土器が集中して見つかった。おそらく５層の底部に堆積したものであろう。１は縄文晩期の深鉢体部、２・３は弥生前期の壺、４は甕である。特に２の壺は状態がよく内外のヘラミガキも明瞭である。時期は弥・前・Ⅱと考えられる。　（葛原）



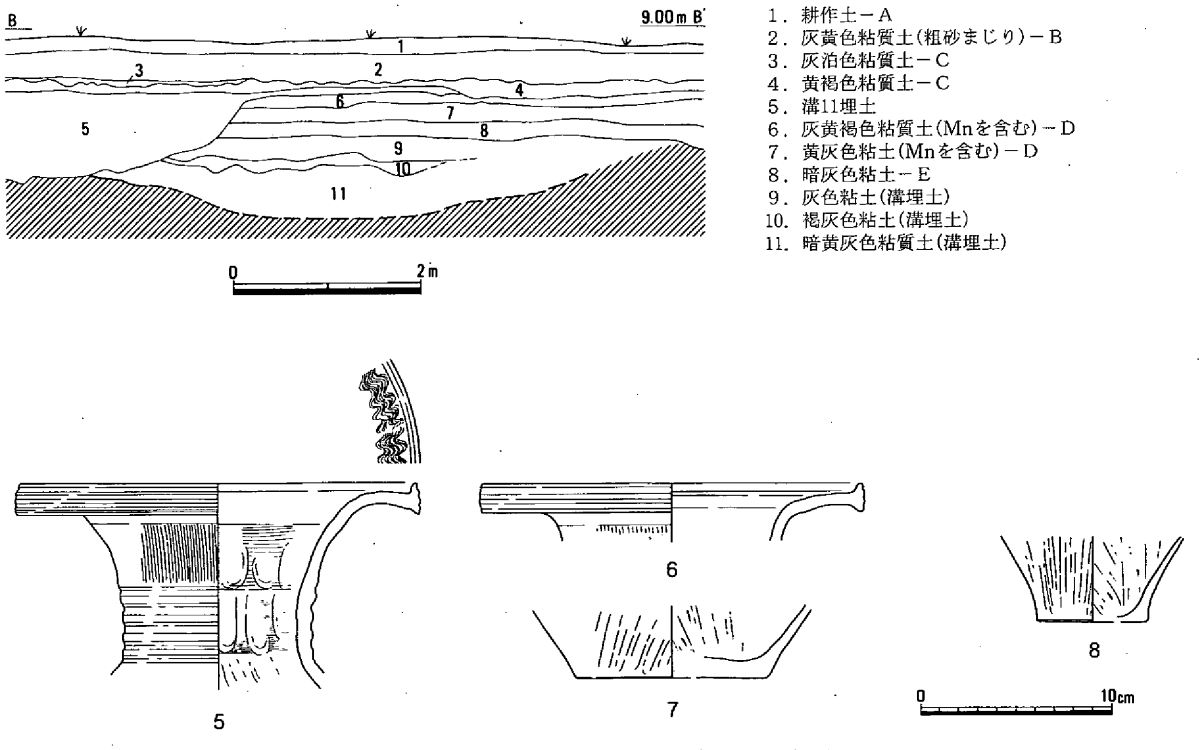
第12図　遺構全体図（１/400）



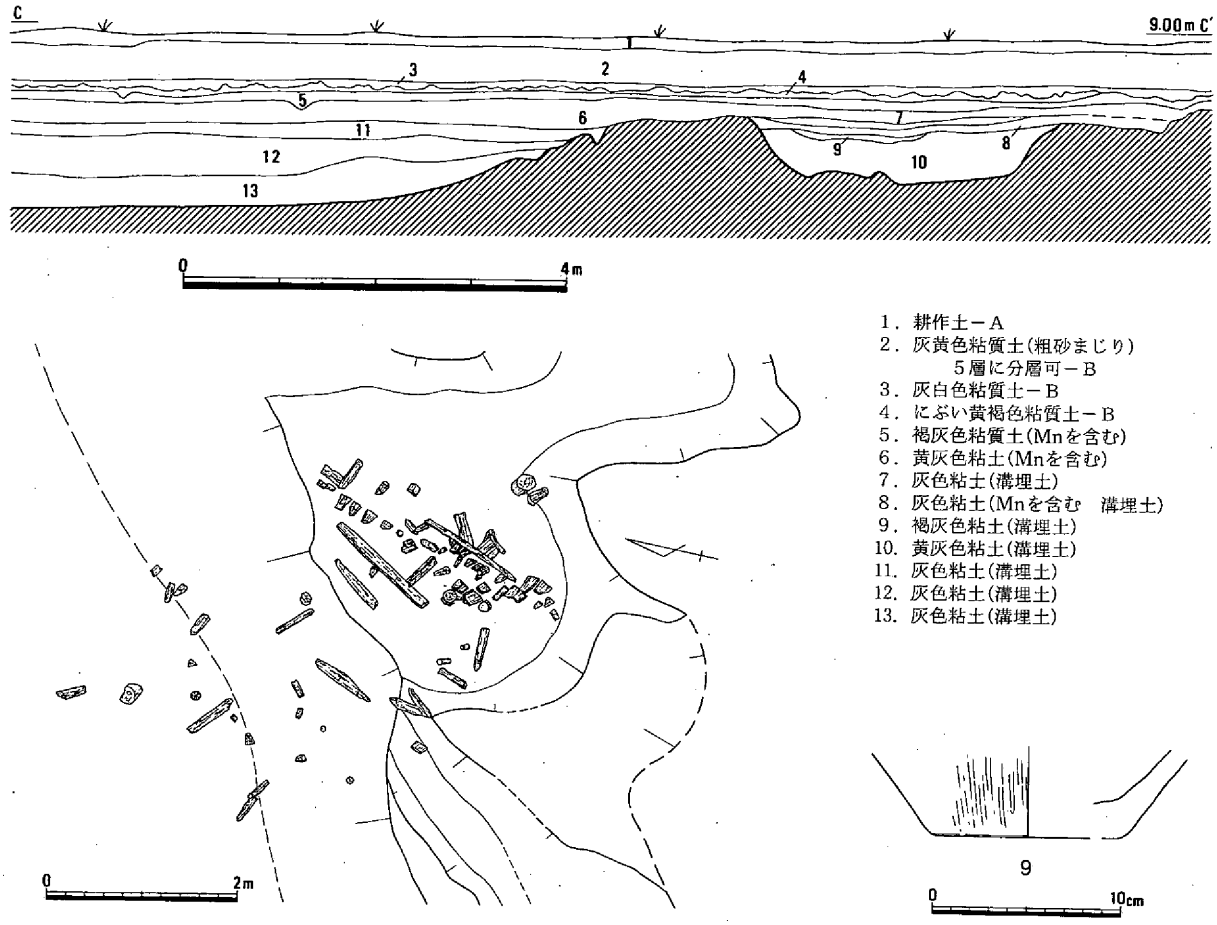
第13図　溝１・出土遺物（１/40・１/４）

溝２（第14図　図版６）

IT-９区の南部に位置する。幅3.3m、深さ0.85mを測る。溝11によって分断されている。周辺地形から北西から南東への流走方向が推定される。 出土遺物には土器片が約20点あり、そのすべてが弥・中・Ⅲの時期と考えられる。この溝２は、同時期の溝３から分岐するものと思われ、１点（５の壺）ではあるが土器の接合もみられた。　（物部）



第14図　溝２・出土遺物（１/80・１/４）



第15図　溝３・護岸・出土遺物（１/80・１/４）

溝３（第15図　図版３）

IT-９区の北半部に位置する。南西－北東に主軸をとる大きな溝と考えられる。北側の肩口は調査区外になり、溝幅は不明である。検出幅9.0m、深さ0.9mを測る。南側肩口に不正形な窪みがみられ、このうち溝ののり面に近い部分に縦杭と横木で構成される護岸がある。縦杭の頭はすべて溝３の方に傾いている。おそらくは窪みを埋め立てる際の土留めと考えられる。出土遺物には土器片が少量あるが、そのほとんどが灰白色の砂粒の少ないものであり、溝２出土土器との接合関係もあることから、時期は弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

溝４（第16・17図　図版３）

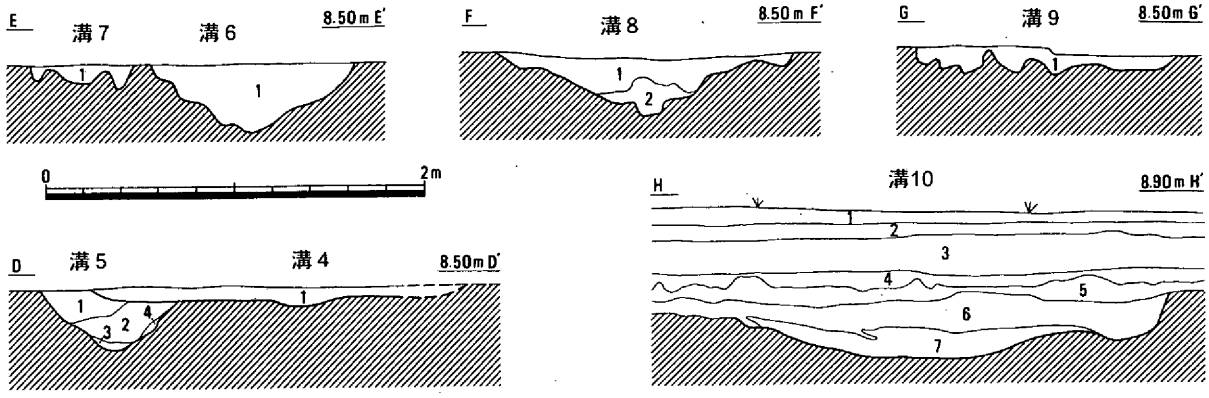
IT-２区で検出された溝である。溝１に隣接するが、層位的には溝１より上位にある。中世包含層（Ｃ層）に上部を削平されている。幅2.0m、深さ0.07mと広く浅い。約100点の土器片が出土した。弥・後・Ⅰ、Ⅳの土器片に混じって須恵器が12～14など５点あった。時期は６世紀後葉。（葛原）

溝５（第16図）

IT-２区に位置し、溝４に上部を削平されている。幅0.73m、深さ0.32mを測る。周辺地形から流走方向は南西から北東と考えられる。出土遺物は土器細片がわずかに２点である。時期は決めがたいが、溝４以前でもそう離れない古墳時代後半期の中でとらえてよい。（葛原）

溝６（第16図）

溝５から北へ約55m離れたIT-６区の北端部に位置する。周辺地形から流走方向は南西から北東と



溝４
1．灰白褐色粘質土

溝５
1．暗茶灰褐色粘質微砂
2．褐灰色粘質弱砂
3．明黄褐色灰色粘質土
4．粗砂

溝６
1．灰茶色粘質土

溝７
1．灰茶色粘質土

溝８
1．灰茶色粘質土
2．橙灰色粗砂

溝９
1．濃茶灰色粘質土

溝10
1．灰黒色耕作土－Ａ
2．灰色粗砂混入土－Ｂ
3．灰黄色微砂混入土－Ｂ
4．灰黄色粘質土－Ｃ
5．茶灰色粘質土－Ｃ
6．黄茶灰白色粘質土(溝埋土)
7．灰白色砂(溝埋土)

第16図　溝４～10（１/40）

考えられる。底面に径８cm、深さ10cm程の穴が約15cm間隔で並ぶ。出土遺物はない。時期は溝７を切っていることから古墳時代後半期の中と考えられる。（葛原）

溝７（第16図）

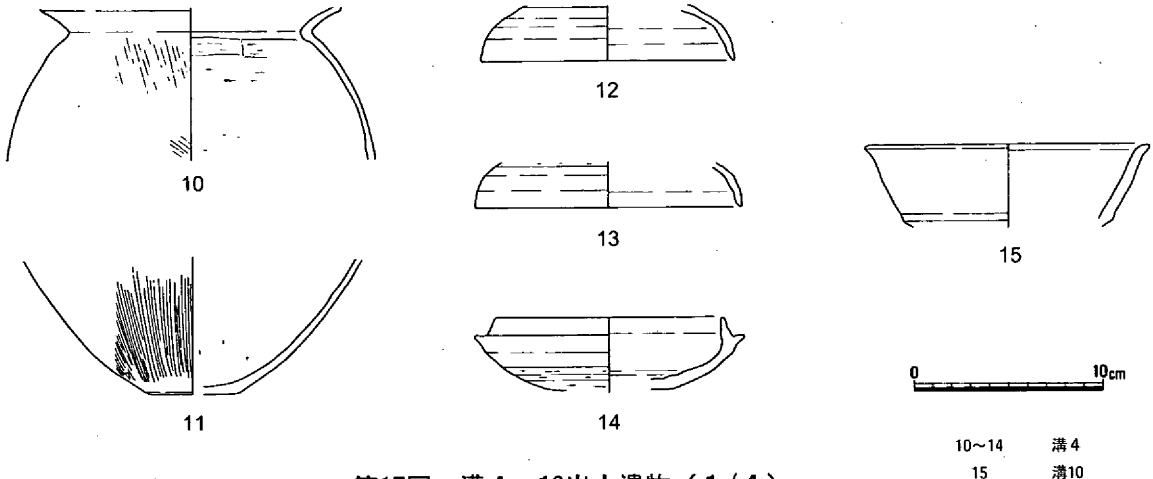
IT-６区からIT-７区にかけて走り、溝６に切られていて、幅0.53m、深さ0.1mを測る。上部を削平され中世包含層（Ｃ層）によって覆われている。埋土は溝６と類似する。出土遺物は須恵器小片が１点あるにすぎない。灰白色を呈する焼成不良のものである。時期は古墳時代後半。（葛原）

溝８（第16図　図版４）

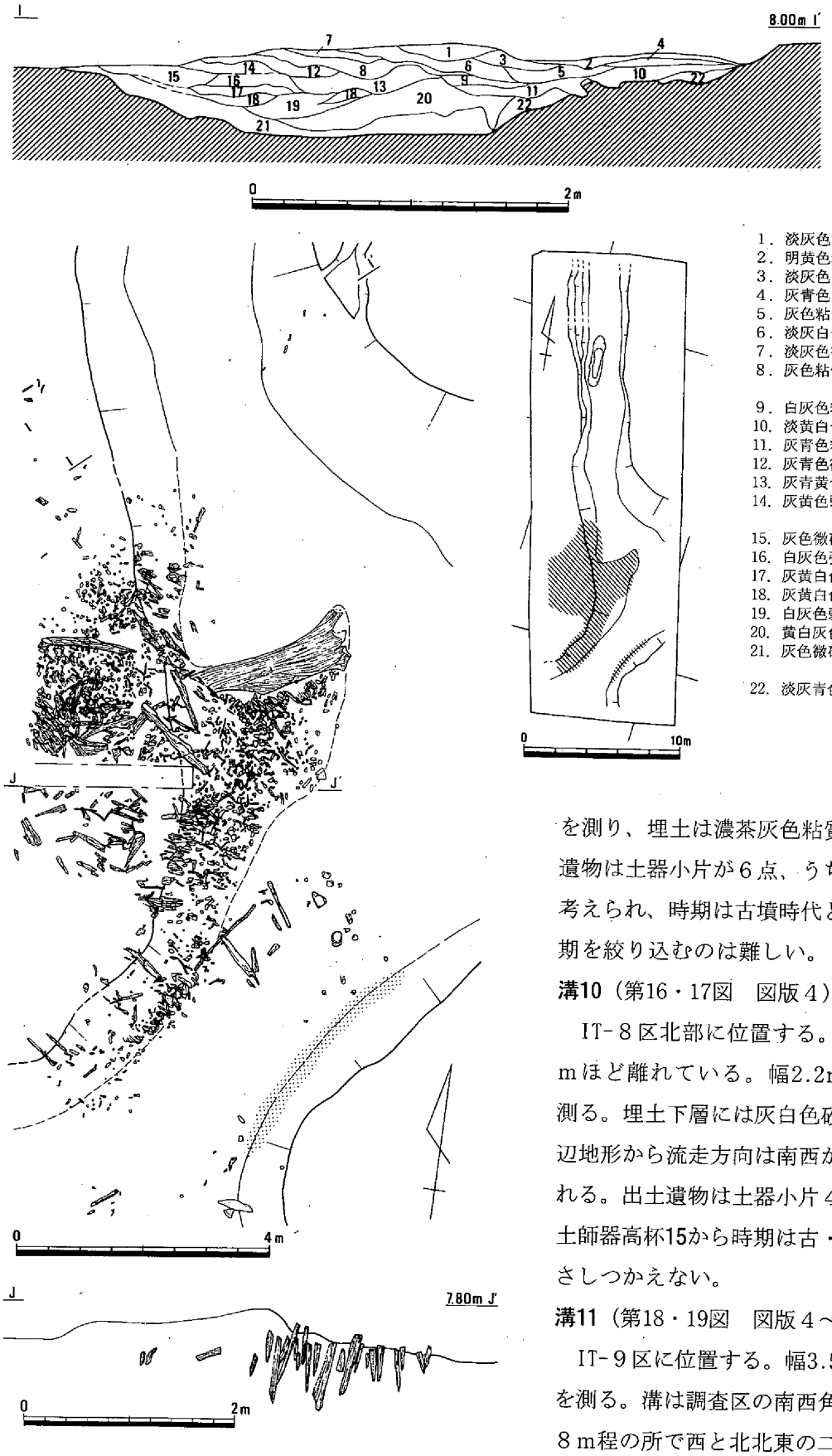
IT-７区の中央部に位置する。溝７から北に10mの距離にあり、幅1.5m、深さ0.26mを測る。底面には溝６と同様の小穴がやはり15cm間隔で並ぶ。穴には粗砂が堆積する。周辺地形から見て、流走方向は南西から北東を指す。出土遺物は土器細片１点のみで、時期は古墳時代後半期か。（葛原）

溝９（第16図）

IT-７区とIT-８区の境界の位置にあって、溝８から北に約８mを隔てる。幅1.35m、深さ0.13m



第17図　溝４・10出土遺物（１/４）



第18図　溝11・護岸
（1/400・1/100・1/60・1/40）

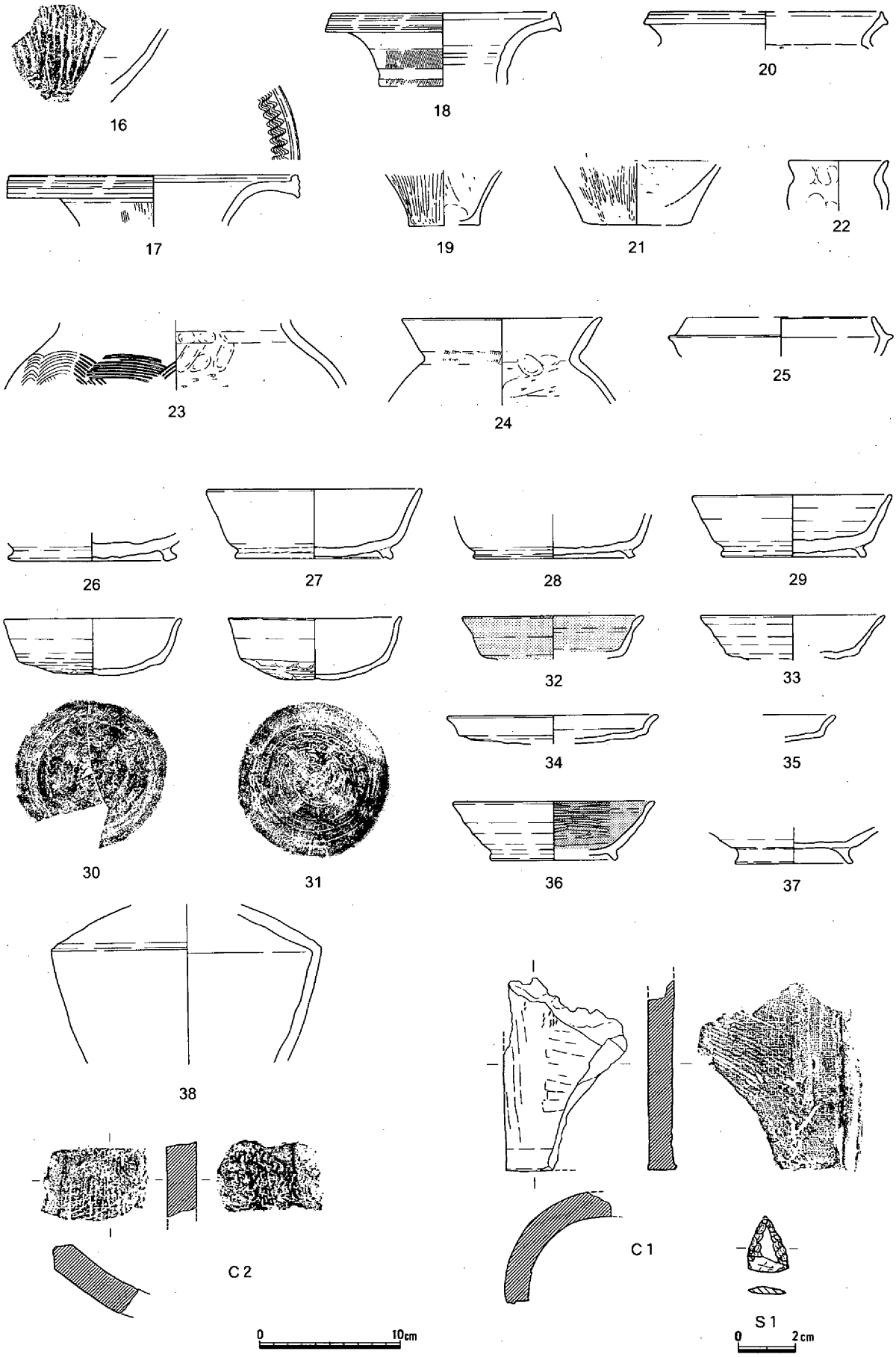
を測り、埋土は濃茶灰色粘質土である。出土遺物は土器小片が６点、うち４点は土師器と考えられ、時期は古墳時代と思われるが、時期を絞り込むのは難しい。　（葛原）

溝10（第16・17図　図版４）

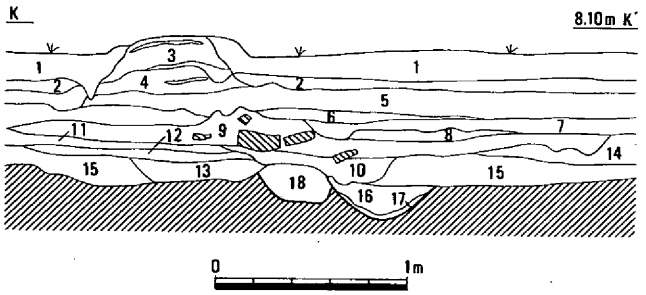
IT-８区北部に位置する。溝９から北に９ｍほど離れている。幅2.2m、深さ0.3mを測る。埋土下層には灰白色砂が堆積する。周辺地形から流走方向は南西から北東と考えられる。出土遺物は土器小片４点のみである。土師器高杯15から時期は古・中・Ｉと考えてさしつかえない。　（葛原）

溝11（第18・19図　図版４～６）

IT-９区に位置する。幅3.5m、深さ0.56mを測る。溝は調査区の南西角から北東方向に８ｍ程の所で西と北北東の二方向に枝分かれする。埋土には粗砂層が多くみられる。この二股に分かれる部分の西側斜面を中心に無数



第19図　溝11出土遺物（1/4・1/2）



1．耕作土－A
2．暗灰褐色砂質土－A
3．褐色土(灰白粗砂をスジ状に含む)
4．灰褐色土(灰白粗砂をスジ状に含む)
5．灰色粘質土－B
6．灰黄色粘質土－B
7．灰色粘質土－B
8．黄灰色粘質土－B
9．白灰色粗砂
10．茶灰色粗砂
11．灰色粗砂
12．灰色粗砂
13．灰褐色粗砂
14．灰黄色粘質土－C
15．茶灰色粘質土－C
16．灰色粘質土(溝12埋土)
17．灰白色粘土(溝12埋土)
18．黄褐灰色粘質土(Mnを含む溝13埋土)

第20図　溝12・13（１/40）

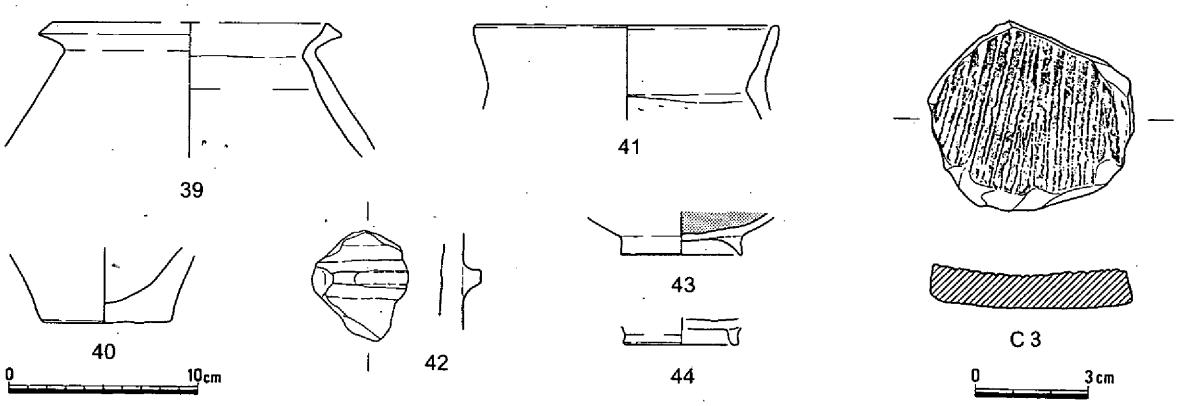
の杭が密集して打ち込まれた護岸施設がある。杭は直径約５cmの丸杭や幅10cm前後の割杭があり、長さは平均約80cm。樹種は鑑定の結果、アベマキ・カシワ・アラカシ・ケヤキなど多種あり、選択性はみられない。また杭の傾きも多方向である。太い流木が杭を押し倒し、溝を塞ぐように引っかかっている。対岸の東側斜面の裾部（アミ目部分）にも杭群がみられる。杭の密集する所はちょうど溝２埋土部分にあたる。この護岸は南から、あるいは北から流れる水流をある程度西に流すために作られたものと考えられる。出土遺物には縄文晩期から古代までの各時期があるが、完形や完形に近い土器は８世紀のもので、数量も多い。**26**～**29**は須恵器杯で高台が外に踏ん張る。**30**・**31**は須恵器杯で、外方に比較的直立する口縁を持ち、いわゆる杯Ａと呼ばれるもので、底部外面はヘラ切り後、押圧、ナデを若干施す。**32**～**35**は土師器杯・皿・椀、**36**は黒色土器（内黒）椀である。溝11はこれらの土器の特徴によって８世紀第２四半期から９世紀頃に機能していたと考えられる。　（物部）

溝12・13　（第20図）

IT-５区の中央部に位置する。２つの溝は並走し、溝12が溝13の北側肩部を切り込む。溝12は幅0.56m、深さ0.2m、溝13は幅0.38m、深さ0.2mを測る。出土遺物は両溝ともにわずかな量で、溝13から中世羽釜の鍔が出土している。両溝は現在の畦畔と重なる位置関係にあり、同様の近世の畦畔も確認していることから水田畦畔に伴う溝と考えられる。時期は中世に比定できよう。　（葛原）

（２）包含層出土遺物（第21図）

遺物の多くはＣ層およびその上層から出土した。数量は少ないが、縄文晩期、弥生前期・中期Ⅲ・後期、古墳、古代・中世・近世の各時期が確認できる。**39**・**40**は弥生後期の甕、**41**は土師器の甕、**42**は明黄褐色を呈する円筒埴輪で、非常に高いタガを持ち、表面はよく摩耗している。**43**は内黒の椀、**44**は早島式土器の椀、**Ｃ３**は備前焼擂り鉢を転用した円盤である。　（物部）



第21図　包含層出土遺物（１/４・１/２）

第３章　三須河原遺跡

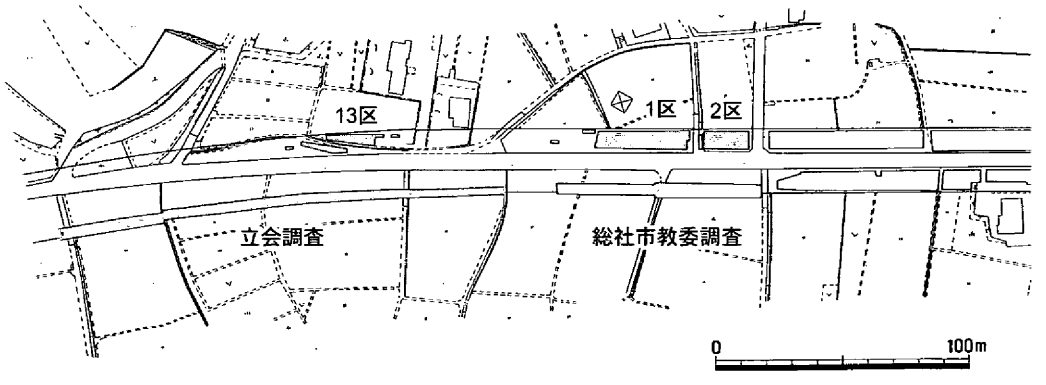
第１節　調査の概要

三須河原遺跡は総社市三須字河原を中心に所在する。調査地点の字名は窪田、茶柄杓である。当初、三須畠田遺跡として調査を実施したが、２区と３区の間に上幅約50ｍの浅い低位部が確認され、これより北を三須畠田遺跡、南を三須河原遺跡とした。

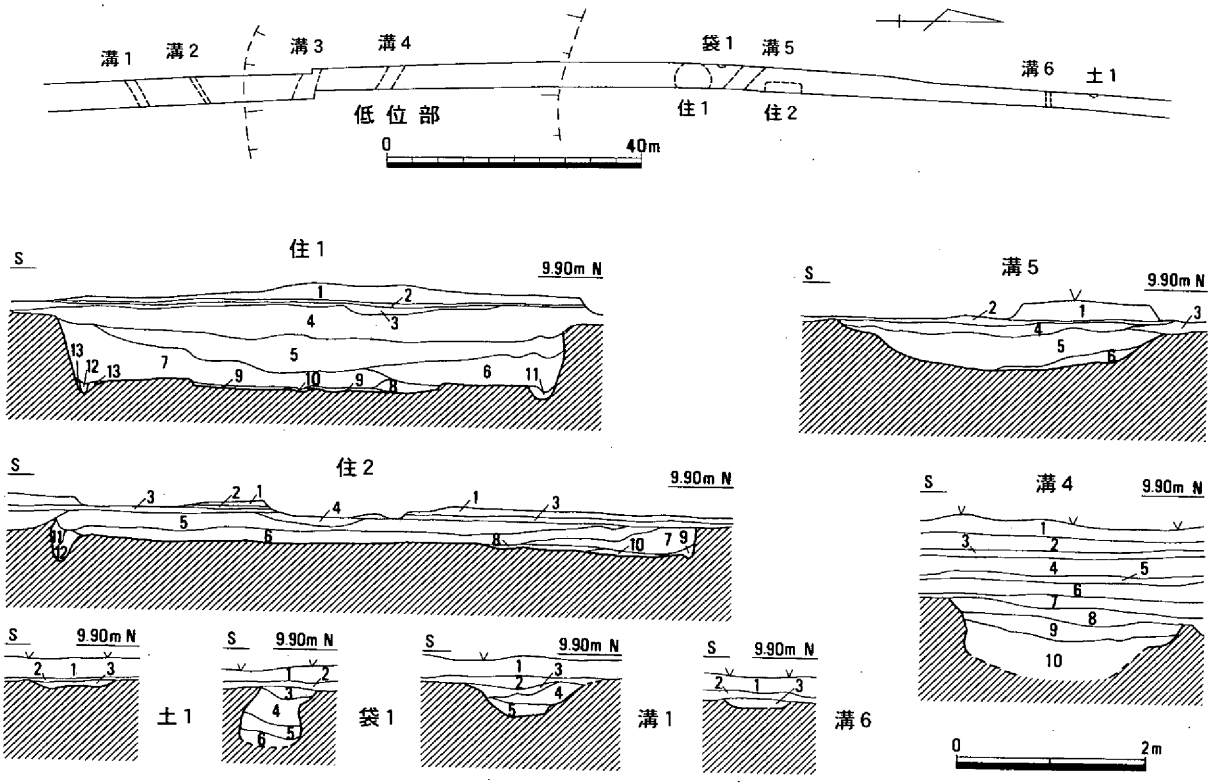
また、三須河原遺跡は幅20～30ｍの低位部をはさみ、北の微高地と南の微高地に分かれる。北側の微高地は平成８・９年度の総社市教委の圃場整備に伴う発掘調査で８世紀前半の南北に棟方向をとる掘立柱建物群や「郡殿」の墨書のみられる蓋杯が出土し、窪屋郡の郡衙の可能性が指摘されている。南の微高地は平成10年度に総社市教委の同様の調査において北の微高地で検出された建物群と主軸を同じくする８世紀初頭の総柱の掘立柱建物群の存在が明らかになった。今回の調査地はこれら奈良時代前半の建物群から西に約70ｍ離れている。南の微高地は従来、中須賀遺跡とされてきたものであるが、三須河原遺跡にまとめて報告する。また、平成２年度の立会調査ではその南端で、美濃田遺跡の所在する微高地にかかっており、溝２条が確認されている。

１・２区の在る北の微高地は現代水田耕作土下ににぶい黄褐色砂質土の中世と考えられる包含層があり、これを除去した褐色土上面で遺構が検出される。その褐色土の下には微高地の基盤を成す粗砂層、その下に礫層がみられ、１区と２区の境ではこの粗砂・礫層が中世包含層直下までせり上がり、微高地の最頂部となっている。13区の在る南の微高地は現代耕作土直下で遺構が検出される。

１・２区で出土した遺物の中には、弥生時代中期中葉から後期前葉の土器片が少量ある。遺構は、微高地の下がりに沿う弥生時代後期後葉の溝２条、古墳時代後期の溝３条、微高地部に古墳時代中期の竪穴住居２軒、古代と考えられる柱穴列１列と溝１条、鎌倉時代の掘立柱建物１棟がある。また、瓦片が総数21点出土し、西約100ｍの三須廃寺との関連が考慮される。13区での遺物・遺構の初現は弥生時代後期である。立会調査で弥生時代と古墳時代後半期の竪穴住居が１軒ずつ確認され、平成７年度の総社市教委によるガソリンスタンド建設に伴う調査においても６世紀後半の竪穴住居が検出されている。また、13区に直角に曲がると考えられる溝があり、区画溝の可能性が考えられる。（物部）



第22図　調査区配置図（１/3000）



住居１
1．〈水田耕土〉
2．赤橙色土
3．褐黄色土
4．褐黒色土
5．暗褐色粘質土
6．暗褐色粘質土（黄色土ブロック混）
7．暗黄褐色粘質土
8．暗褐色粘質土
9．炭
10．焼土
11．黄色粘質土と黄褐色土のブロック
12．暗褐色粘質土
13．暗黄色粘質土

住居２
1．〈水田耕土〉
2．赤橙色土
3．褐黄色土
4．暗灰色粘質土
5．暗褐色粘質土
6．黒褐色粘質土
7．黒褐色粘質土
8．暗褐色粘質土（焼土・炭混じり）
9．暗赤褐色粘質土（焼土を含む）
10．黄褐色粘質土（焼土を少量含む）
11．暗褐色粘質土
12．褐黒色粘質土

土１
1．〈水田耕土〉
2．橙色粘土
3．灰色粘土

袋１
1．〈水田耕土〉
2．暗灰褐色粘質土（弥生包含層）
3．暗褐色粘質土（黄色粘土ブロック混）
4．黒褐色粘質土
5．暗黄褐色粘質土
6．暗褐色粘質土

溝１
1．〈水田耕土〉
2．灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．黒褐色粘質土
5．暗灰色粘質土

溝４
1．表土
2．黄灰色粘質土
3．黒灰色砂礫混じり粘質土
4．黄色粘質土
5．黒灰色小礫混じり粘質土
6．明黄色粘質土
7．黒褐色灰色粘質土
8．暗褐色粘質土
9．明黄褐色微砂質土
10．黄褐色微砂

溝５
1．〈水田耕土〉
2．赤橙色土
3．灰色粘質土（中世包含層）
4．暗灰色粘性砂質土
5．暗褐灰色粘質土
6．黒褐色粘質土

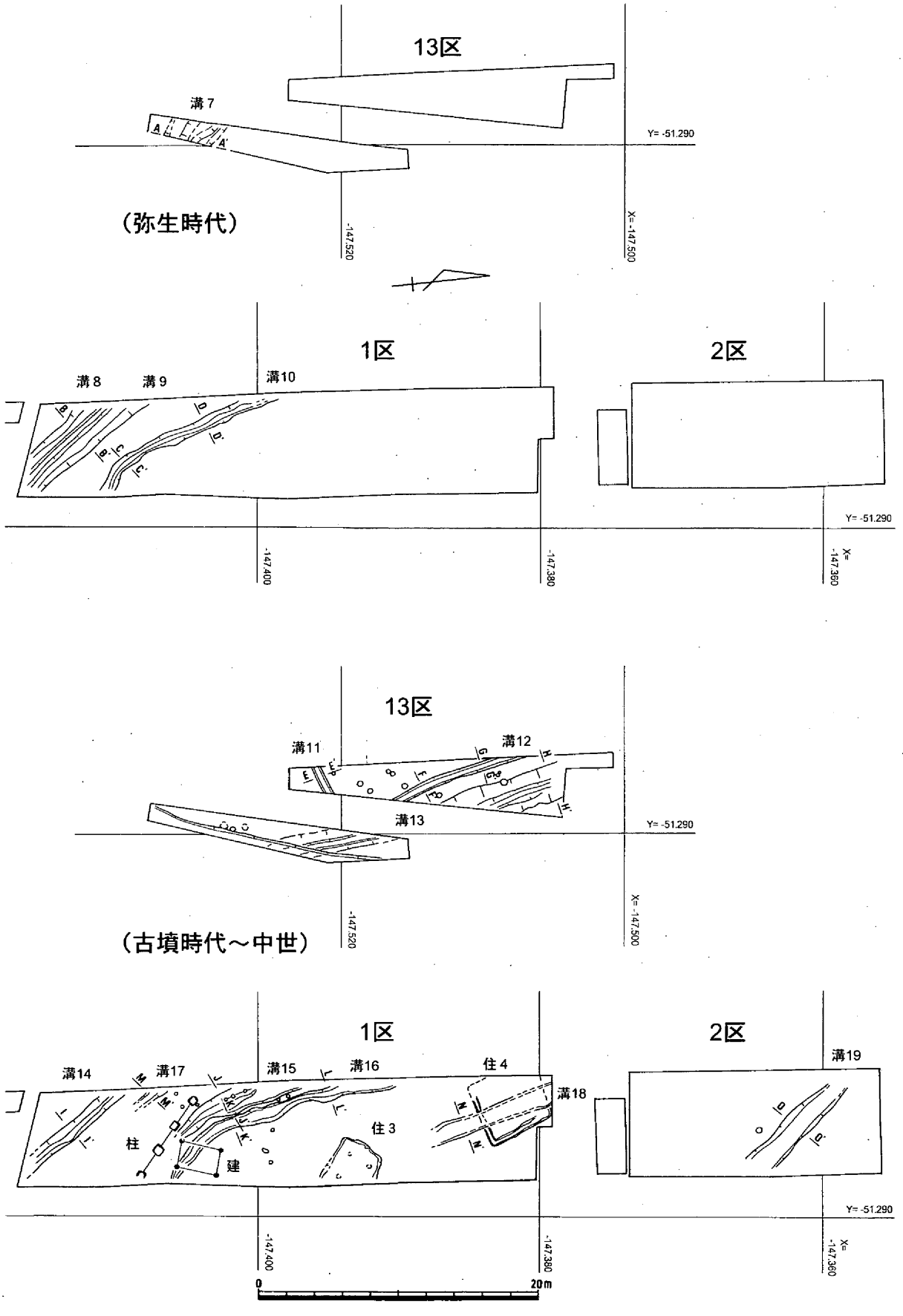
溝６
1．〈水田耕土〉
2．橙黄色土
3．暗褐色粘質土

第23図　立会調査遺構配置図・遺構断面図（１/1200・１/80）

立会調査の概要

当初、遺跡の範囲を十分に把握できていなかったため、工事の進行に応じて文化課職員が立会・試掘の措置を行っていたが、13区以南では遺構・遺物の所在は認められなかった。掘削が13区東側に及んだ際にこの部分に遺構が所在することが判明したが、すでに遺構面は失われており、やむをえず工事掘削壁面の実測をおこなった。調査期間は平成４年１月６日から３日間である。

以上のような状態であったため、遺物を採集することができず遺構の時期は明確でないものが多い。遺構は低位部北側の微高地に集中する。竪穴住居１は推定径5.6m、深さ0.36mを測り、弥生時代とみられる。袋状土壙１も弥生時代であろう。竪穴住居２は北側にかまどをもつ古墳時代後半期の住居とみられる。溝のうち５は古代ないし中世の可能性が強いが、他は時期が明確でない。これら以外に溝５付近を中心に径0.5～0.3mの柱穴８基や土壙を確認した。（宇垣）



第24図　遺構全体図（１/400）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

（１）溝

溝７（第25図）

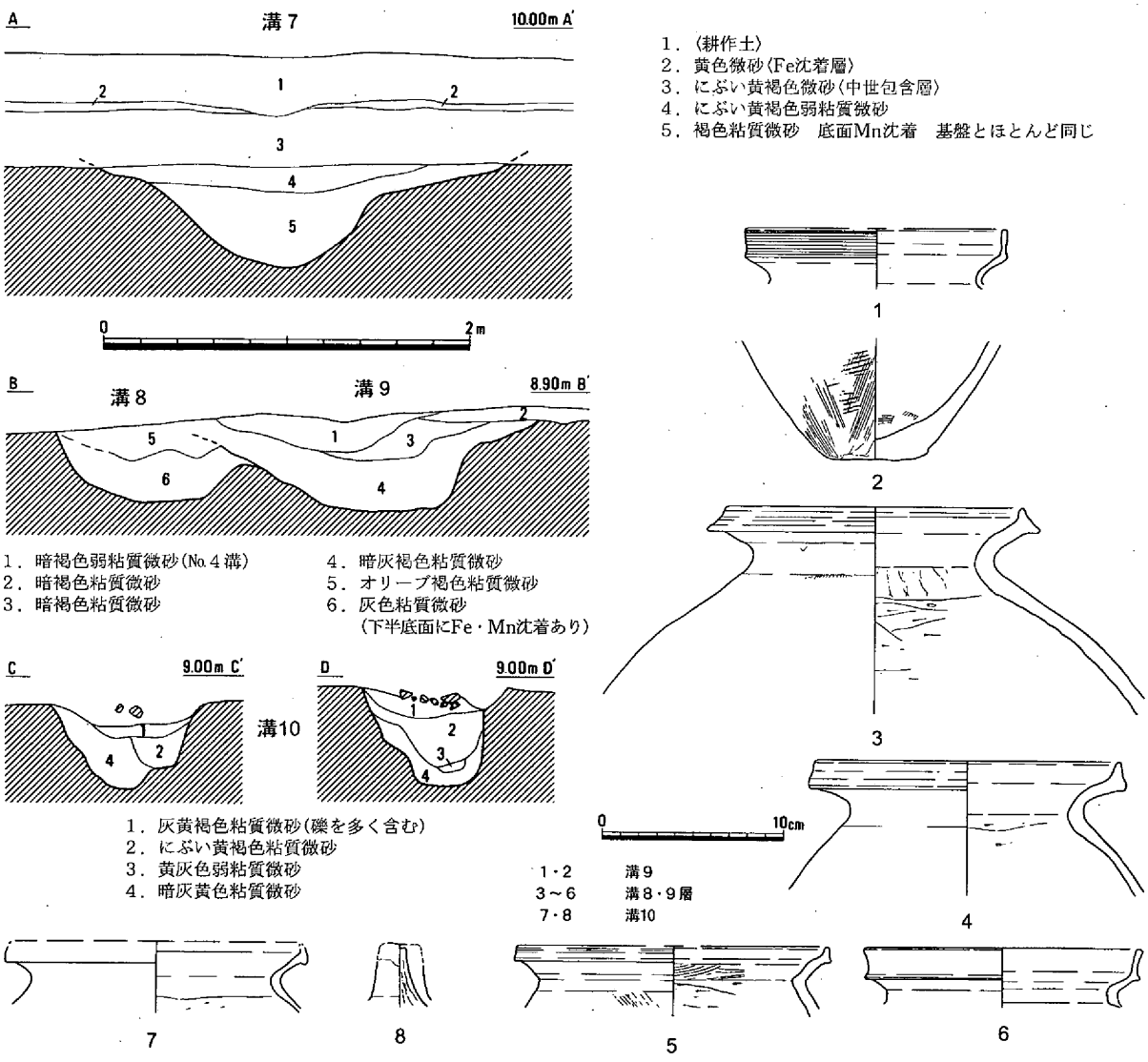
13区の南端に位置する。幅2.25m、深さ0.55mを測る。遺物は無し。総社市教育委員会が平成７年度にガソリンスタンド建設に伴って調査した中須賀遺跡の溝状遺構と同一と思われる。　（物部）

溝８・９（第25図　図版７）

１区の南端に位置する。溝８は幅1.05m、深さ0.45m、溝９は幅1.8m、深さ0.55mを測る。溝８の北岸を溝９が切る。溝９は甕１・２から弥・後・Ⅳ。溝８は遺物が無く、溝８・９上層の土器片から弥・後・Ⅱとも思われるが、きれいに溝９に並走していることから弥・後・Ⅳの中と考えたい。（物部）

溝10（第25図　図版７）

１区南部、溝８・９の２m程北に位置する。幅0.4m、深さ0.27mを測る。北から湾曲しながら南西へ流れる。少なくとも１回の掘り直しがある。上層に円礫の堆積がある。微高地の南西縁に沿って流れる用水路と考えられる。時期は弥・後・Ⅲ。　（物部）



第25図　溝７～10・出土遺物（１/40・１/４）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

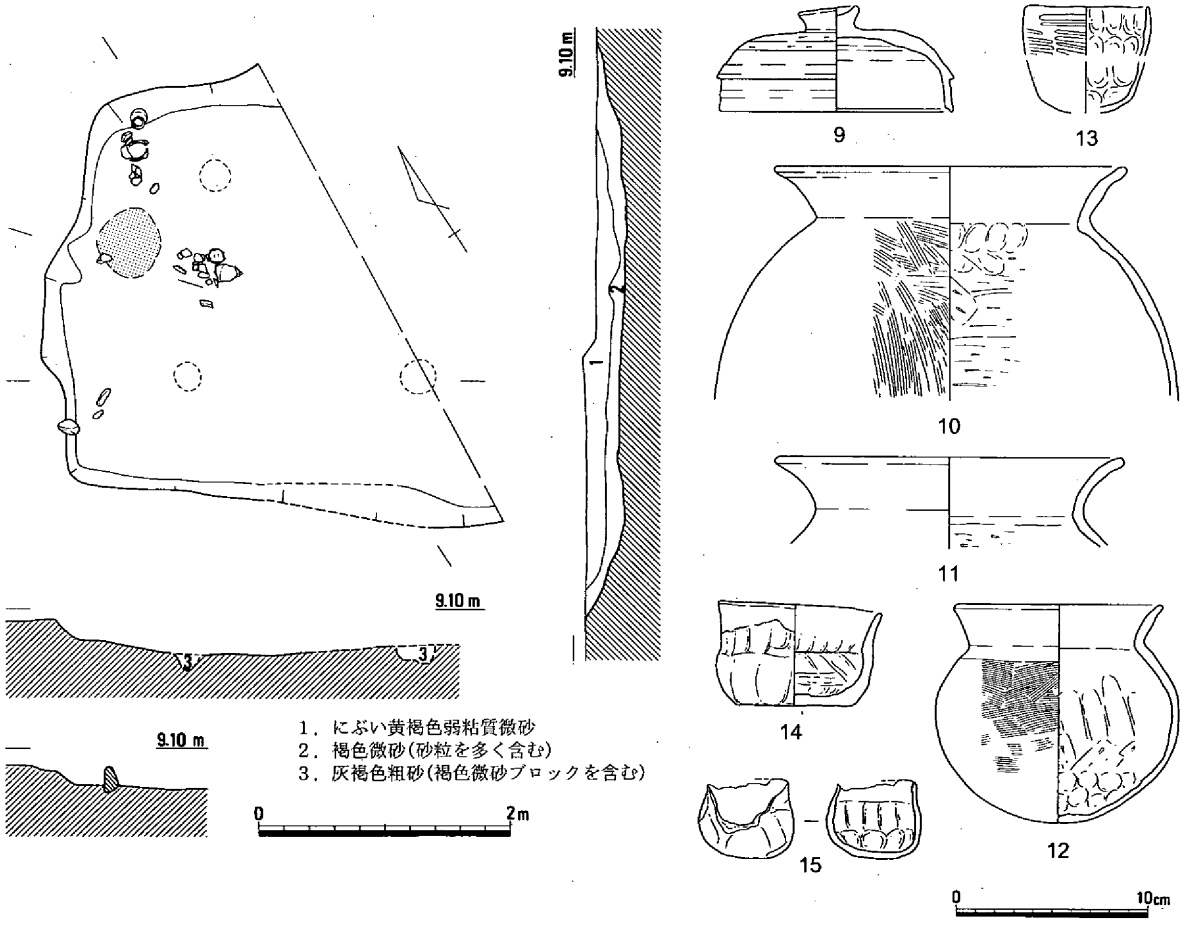
（１）竪穴住居

竪穴住居３（第26図　図版８・９）

１区のほぼ中央に位置する竈付きの方形住居である。北東部１/３は調査区外になる。平面検出時には周囲より黒っぽい微砂で埋まった不整形のたわみ状であったが掘り進めるうちに方形を呈するようになり、焼土面並びに支柱石が見つかり、住居と認識できた。3.3以上×3.0m、床面の標高8.70mを測る。微高地の基盤となる粗砂層に掘り込まれており、また、地下水位が高いせいで床面まで下げると水がしみ出した。柱穴の確認も困難を伴ったが、断面の観察から粗砂の中に褐色微砂のブロックが多数含まれる部分があり、柱の痕跡と考えた。出土遺物は住居が埋まる過程で投棄されたものと思われる。須恵器は完形の高杯の蓋**9**と内面のタタキをナデ消した甕体部など小片が３点。土師器甕**10・11**、完形で小形の甕**12**、いれこになって検出された鉢**14**と手捏ね**15**、製塩土器**13**がある。時期は須恵器がTK-208に比定され、古・中・Ⅱの古相と考えられる。（物部）

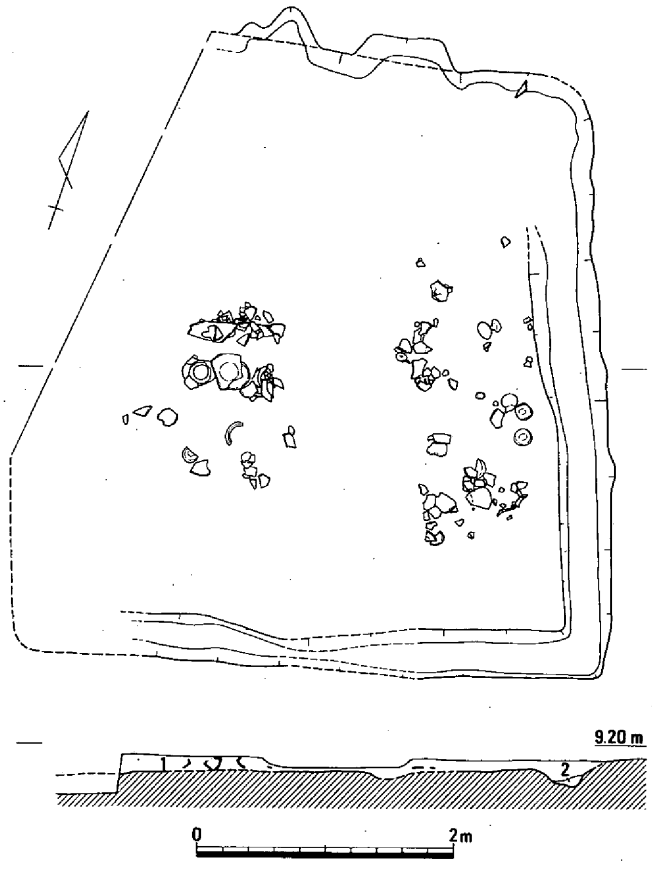
竪穴住居４（第27～29図　図版８～10）

１区北端、竪穴住居３から北へ約８mに位置する方形の住居跡である。北西コーナーが調査区外になる。4.56×4.4m、床面の標高8.99mを測る。微高地の基盤層である粗砂層の下にある礫層が地表近くまで上がっており、住居は粗砂層を掘り込み床面は礫層上面になる。住居の北縁は崩れている。

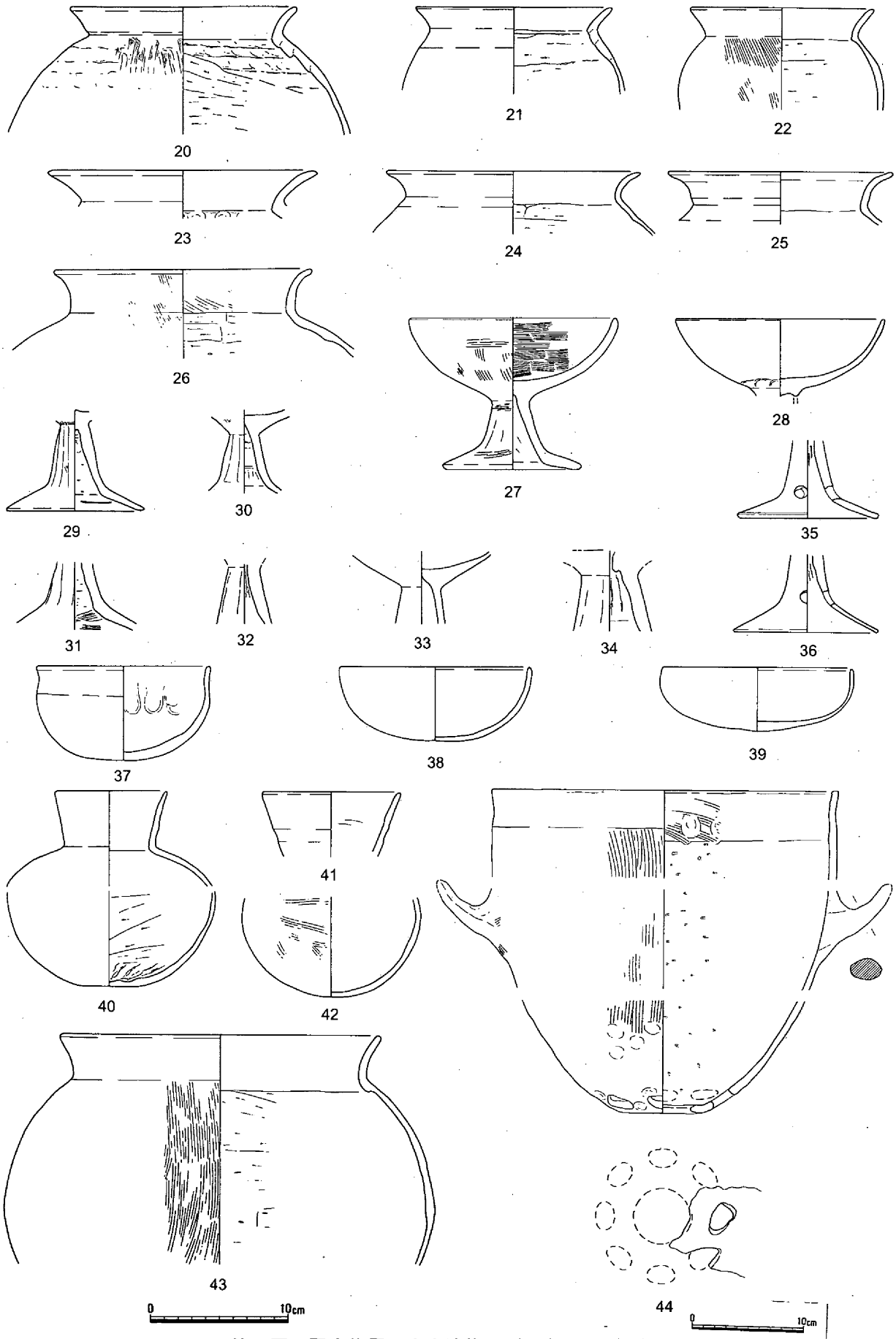


第26図　竪穴住居３・出土遺物（１/60・１/４）

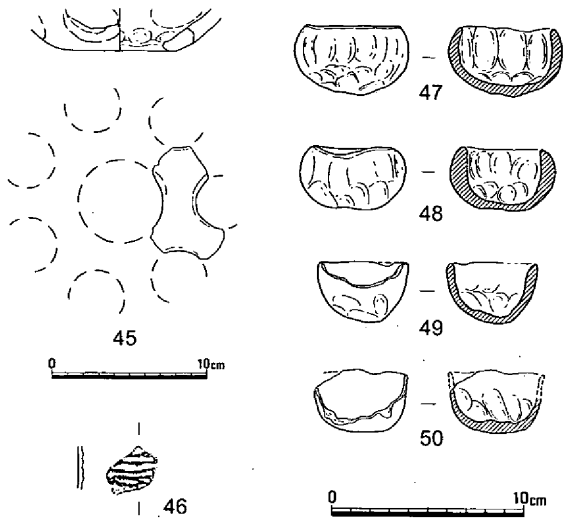
住居中央を溝18が床面付近まで切っている。住居の東・南辺に浅い壁体溝が検出された。出土遺物は多量にあり、住居の埋没過程の早い段階に破棄されたものと考えられる。須恵器には杯蓋16・17と同様形態の小片２点。１/２以上に復元される壺18と壺口縁部の小片19がある。土師器は各種ある。甕11個体、高杯12個体、鉢６個体、直口壺２個体、鍋１個体、甑３個体、手捏ね土器６個体、製塩土器片13点が残存する。甕の内面調整はヘラケズリが目立つ。甕25・26は口縁部がいったん上方に立ち上がってから外湾する。高杯35・36および鉢39は精良な胎土をもつ。43は口径が大きいので鍋と推定される。時期は須恵器からTK-208相当、古・中・Ⅱ古相と考えられる。　　（物部）



第27図　竪穴住居４・出土遺物１（１/60・１/４）



第28図　竪穴住居４出土遺物２（１/５・１/４）

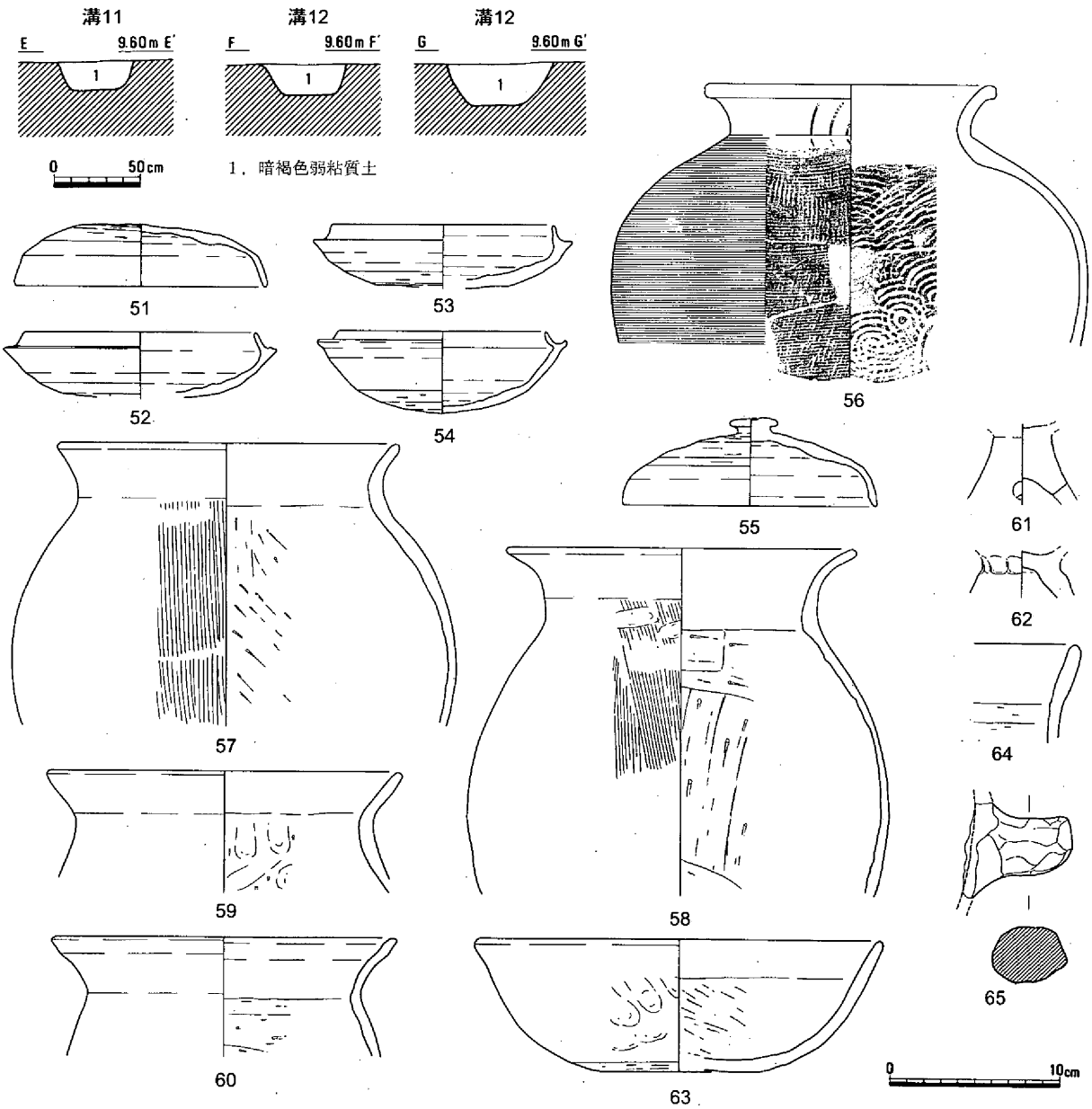


第29図　竪穴住居４出土遺物３（１/５・１/４）

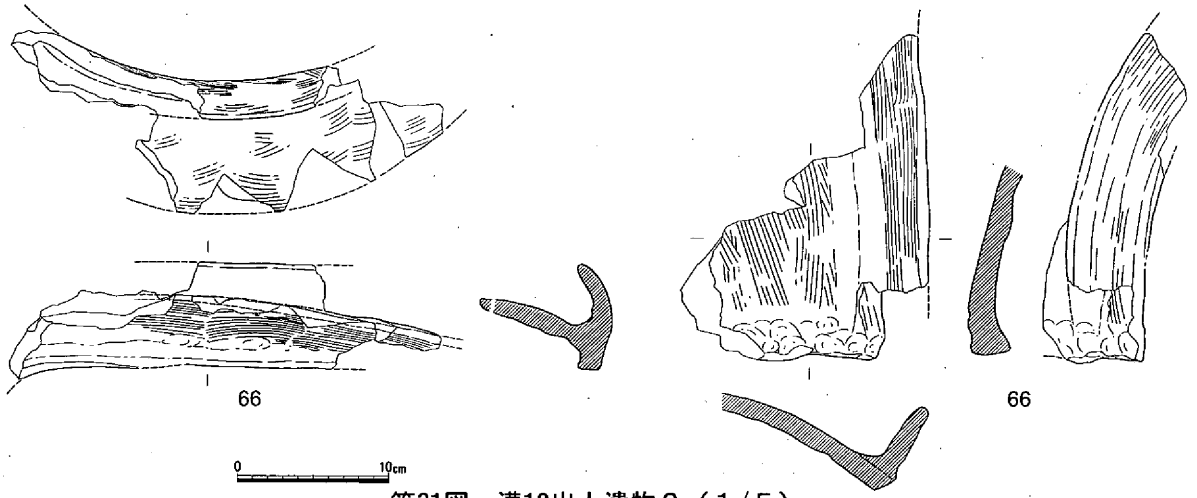
（２）溝

溝11・12（第30・31図　図版10）

13区の西側調査区で検出された。溝11は幅0.45m、深さ0.16m、溝12は幅0.5～0.6m、深さ0.18～0.24mを測る。両溝の主軸はほぼ直交する。西側の調査区では中世の包含層が一段深く入っており切りあいの有無は確認できない。しかし、両溝の断面形および埋土が非常によく似ており、直角に折れ曲がる同一の区画溝である可能性が高い。遺物は溝12にみられ、一括廃棄された状況であった。須恵器蓋杯51～54、高杯の蓋55、口縁外面に３条以上のヘ



第30図　溝11・12・溝12出土遺物１（１/40・１/４）



第31図　溝12出土遺物２（１/５）

ラ記号のある甕**56**、**61**・**62**は土師器の高杯、**63**は大形の鉢、**64**は甑、**66**は移動式竈である。その器種構成は、一軒の住居の廃棄土器のような印象を受ける。時期は古・後・Ⅱ。　（物部）

溝13（第32図）

13区に位置し、溝12とほぼ並行する。幅2.0m、深さ0.82mを測る。遺物は小片で約50点あり、大半が上半部から出土した。**67**・**68**は須恵器、**69**・**70**は土師器。時期は古･後･Ⅱ。　（物部）

溝14（第32図）

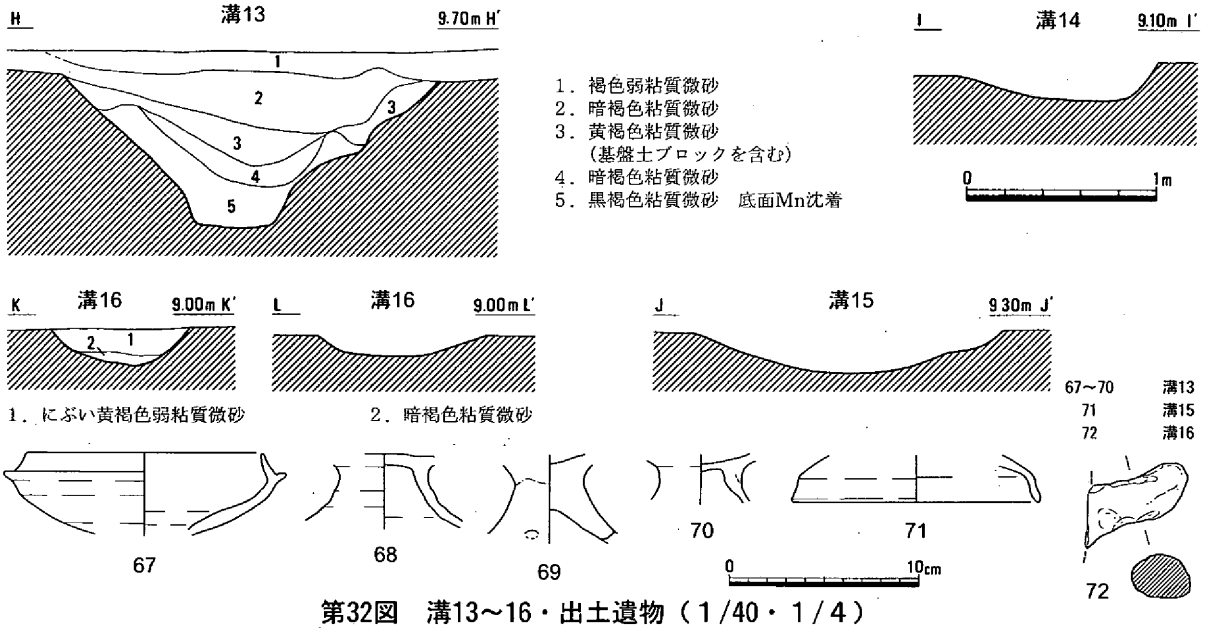
１区南端部、溝８・９の上部に位置する。幅1.08m、深さ0.24m。出土遺物は少量。弥・中・Ⅲ、弥・後・Ⅰ、弥・後・Ⅲ、古墳初めなどの各時期を含むが須恵器があり、古墳後期と考える。（物部）

溝15（第32図）

１区中央部、溝14から北約８ｍに位置する。幅1.8～0.7m、深さ0.2mを測る。出土遺物小片60点の内、50点は弥中Ⅲ、４点が須恵器である。時期は杯蓋**71**から古・後・Ⅱと考えられる。　（物部）

溝16（第32図　図版７）

１区中央部、溝15の北に隣接する。幅0.72m、深さ0.2mを測る。溝10・15と同様に南から西にカーブする。出土土器は小片10点のみ。**72**は貼り付け式の把手。時期は古墳後期だろうか。　（物部）



第32図　溝13～16・出土遺物（１/40・１/４）

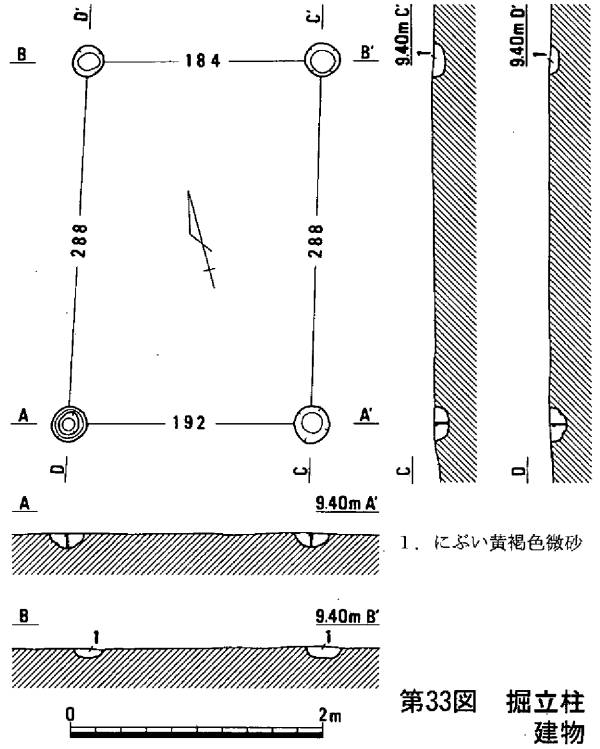
第４節　古代・中世の遺構・遺物

（１）掘立柱建物（第33図）

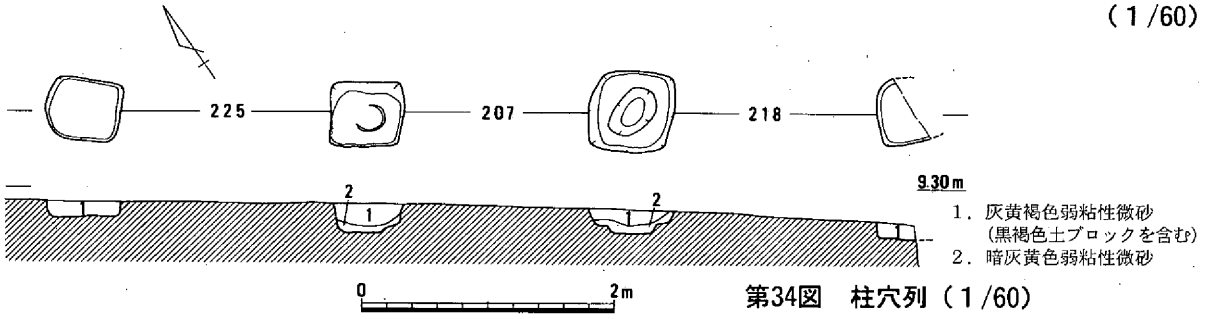
１区のほぼ中央部に位置する。１×１間の建物と考えられるが、東方の調査区外にのびる可能性もある。柱穴の深さは検出面より0.14m程しかなく、上部は現代の耕作土で削平されている。遺物は柱穴から早島式土器椀底部片が１点出土した。鎌倉時代。　（物部）

（２）柱穴列（第34図　図版８）

１区の南半に所在する。１辺0.5～0.6mの方形の堀形をもつ柱穴が４基検出された。基盤層は南西に向けて下降しており、柱穴列の南側に対になる柱穴があった可能性は残る。出土遺物は無く、時期不明であるが、古代と考えている。総社市の調査によって検出された建物群とは主軸を異にする。　（物部）



第33図　掘立柱建物（１/60）



第34図　柱穴列（１/60）

（３）溝

溝17（第35図）

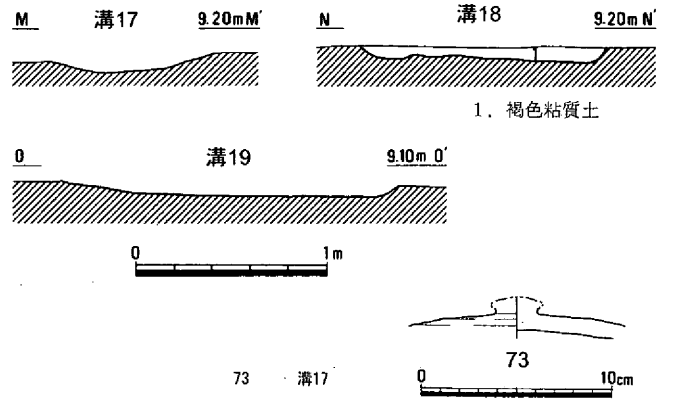
１区の南半、溝14と15の中間に位置する。幅0.87m、深さ0.08mを測る。須恵器蓋**73**が１点出土。時期は８世紀以降と考えられるが、埋土が黄色土なので中世まで下る可能性もある。　（物部）

溝18（第35図）

１区北半に位置し、竪穴住居４を切る。幅1.5m、深さ0.07m。時期は住４の遺物の中に混入した８世紀の須恵器の摘付き蓋片があり、それ以降と考えられる。（物部）

溝19（第35図）

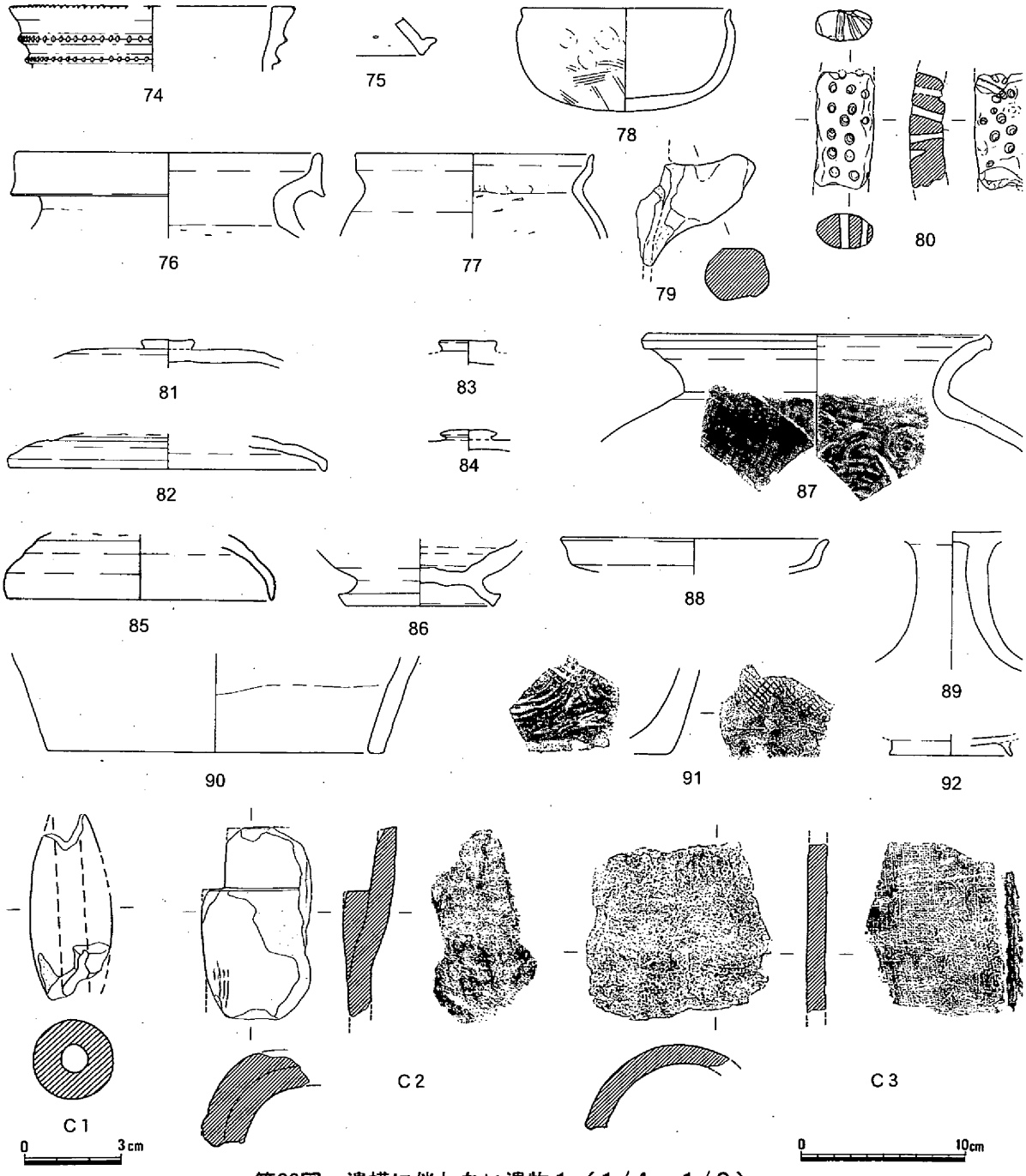
２区に所在する。幅1.8m、深さ0.07mを測る浅いたわみ状の溝である。時期は格子目タタキのある須恵器甕片が１点出土しており、古代～中世。　（物部）



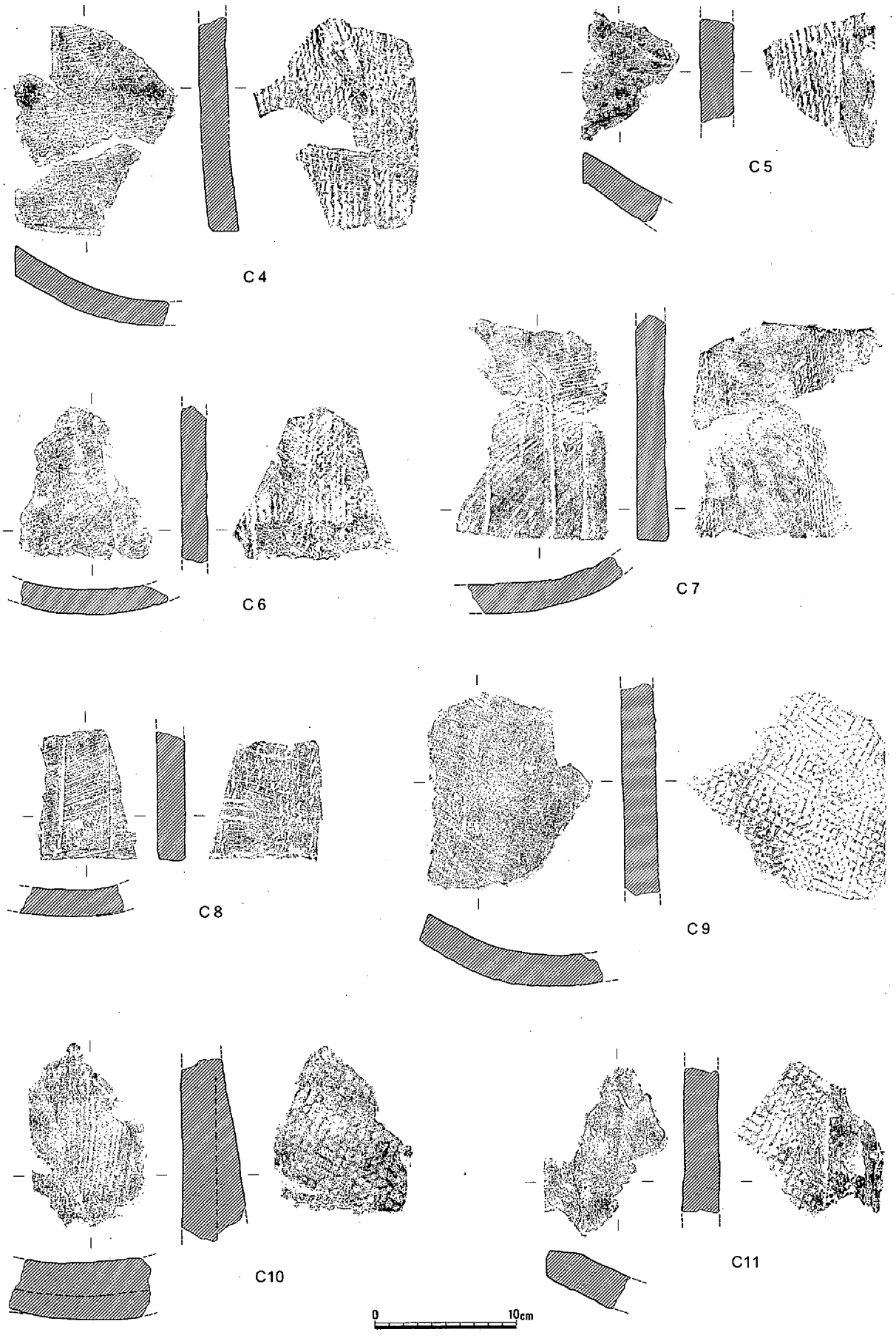
第35図　溝17～19・出土遺物（１/40・１/４）

第５節　遺構に伴わない遺物

遺構検出段階で出土したもの、および時期の異なる遺構に混入していたものを掲載する。82・Ｃ９～Ｃ11は13区、74・75・83は２区、それ以外は１区から出土した。74は弥・中・Ⅱの壺、75は弥・中・Ⅲの高杯、76・77は弥・後・Ⅳの壺と甕である。78は口縁端部に癖を持つ土師器の鉢、79は土師器の把手。80は不明品である。時期は古墳時代以前。81～86は須恵器、88～90は土師器の皿・高杯・甑である。91は亀山焼の甕、92は早島式椀。瓦片は１・２区で21点、13区で３点出土した。Ｃ２の丸瓦は粘土を貼り付けて玉縁を作り出している。平瓦は凸面縄目、凹面布目のものがほとんどで、糸切り痕・模骨痕も明瞭にみられる。13区出土のＣ９～11はすべて凸面格子目であった。　（物部）



第36図　遺構に伴わない遺物１（１/４・１/２）



第37図　遺構に伴わない遺物２（１/４）

第４章　三須畠田遺跡

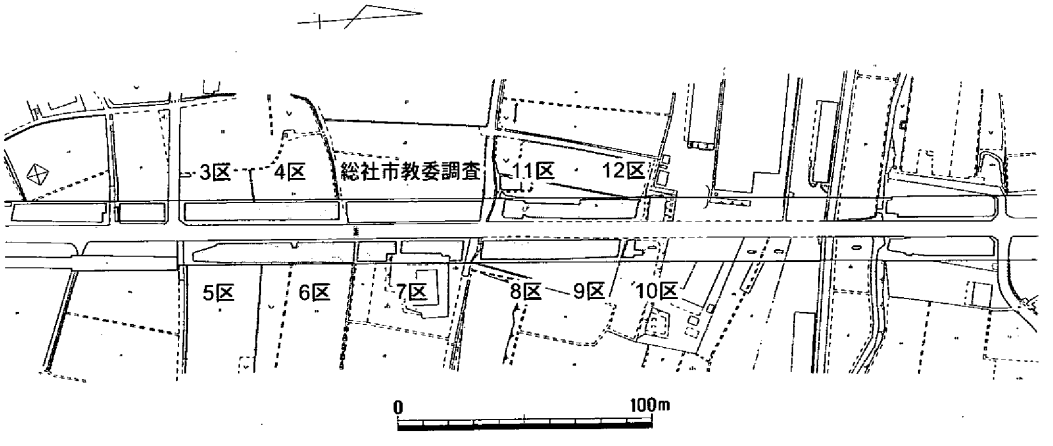
第１節　調査の概要

三須畠田遺跡は東西に流れる川幅約100ｍの旧河道南岸に発達した自然堤防上に立地する弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。総社市三須字畠田に所在し、北緯34°40'18"、東経133°46'25"に位置する。当初、三須河原遺跡を含め、三須畠田遺跡として調査を行ったが、２区北半から３・５区にかけて浅い低位部が確認され、低位部および北の微高地を三須畠田遺跡と呼称することにした。

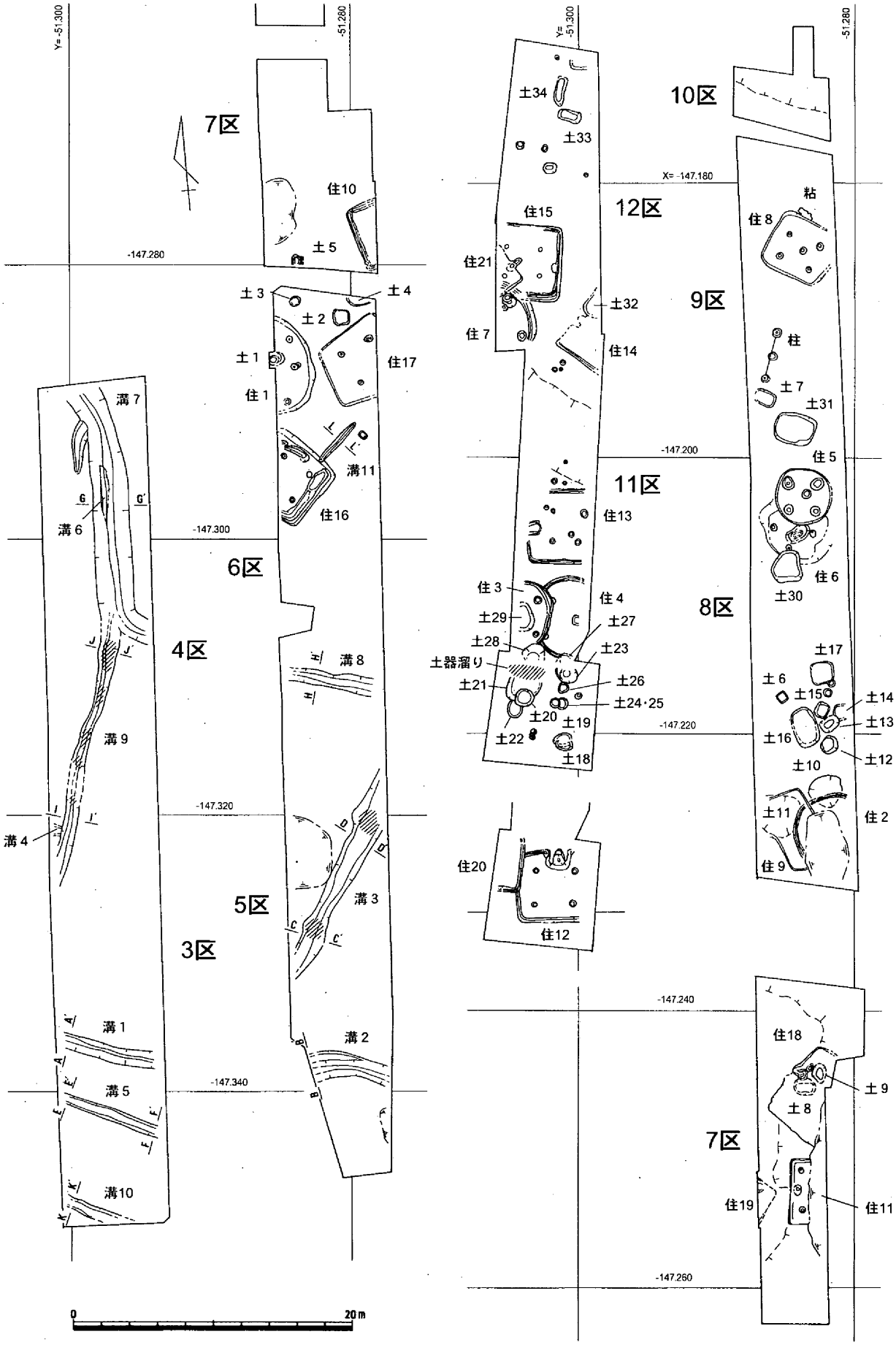
この微高地の大きさは南の低位部から北の旧河道まで約130ｍ、東は平成８年度に総社市教委の圃場整備に伴う確認調査により、国道から約150ｍまで、弥生時代～古墳時代の竪穴住居などが確認されている。西側については不明であるが、大きく広がる可能性がある。

遺構は現代水田耕作土直下で検出され、検出面の標高は9.4ｍ。低位部の幅は約50ｍ。現代耕作土下には厚さ20cmほどの近世以降の水田層、その下に厚さ10cm前後の中世水田層がみられ、微高地から低位部にかけての斜面部では特に厚い。その下が基盤層で遺構面になり、標高約9.0ｍである。

三須畠田遺跡の今回の調査で検出された遺構の中で一番古い時期のものは弥生時代中期後葉の竪穴住居１軒、土壙７基、溝３条などである。出土土器もかなり大量にあり、時期の違う遺構埋土にもほとんどにこの時期の土器片が混入している状況がみられた。弥生後期前葉には土壙９基が検出されたが、８・11区の南半に群集する特徴がある。後期中葉には遺構・遺物とも僅かになる。後期後葉～末になると、遺構は竪穴住居７軒、土壙12基など格段に増加し、遺物も大量に出土する。古墳時代に入り、前期から中期にかけて再び遺構・遺物が希薄な状態になるが、後期前半に竪穴住居４軒、後期後半に竪穴住居５基と増え、平成３年度の総社市教委の調査ではこの時期の竪穴住居が12軒、掘立柱建物が２棟検出され、三須畠田遺跡の最も中心となる時期である。古代前半の遺構は土壙１基、溝１条であり、遺物も少ない。古代後半にはさらに少なくなる。古代末から鎌倉時代には微高地を中心に低位部まで多数の柱穴が検出される。15世紀頃から低位部の水田化が始まり、微高地上もおそらくこの時期水田へと変化していった可能性がある。なお、遺物には弥生前期中葉および中期前半の土器も僅かながら出土しており、この遺跡の形成がその時期までさかのぼる可能性がある。　（物部）



第38図　調査区配置図（１/3000）



第39図　遺構全体図・弥生～古墳時代（１/400）

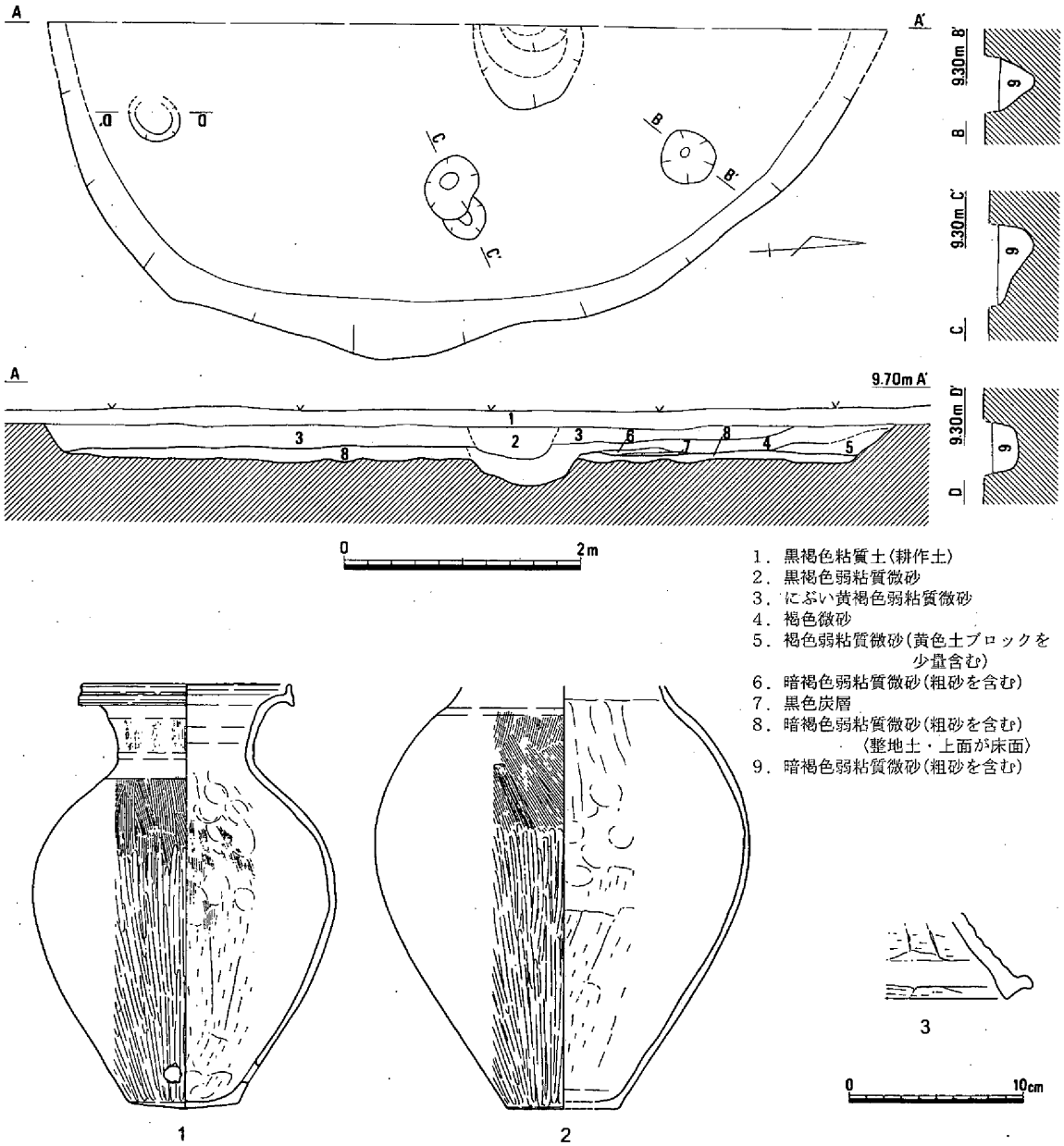
第40図　遺構全体図・古代以降（１/400）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

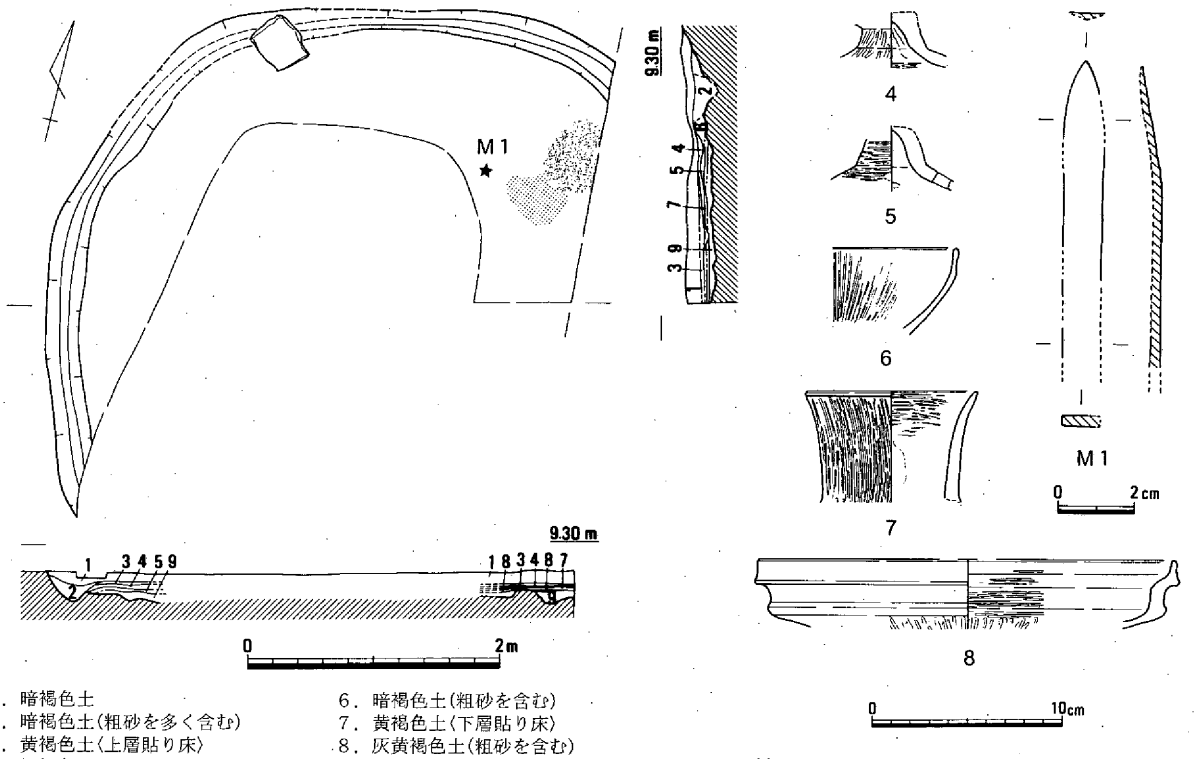
（１）竪穴住居

竪穴住居１（第41図）

６区北半部で検出された円形の住居である。西半分は調査区外になる。土壙１が埋土を切り込んで掘られている。竪穴住居１の直径は推定7.4m、床面標高9.12m。壁は粗砂が基盤のため、かなり崩れている。床面は第８層（整地土層）上面の水平面と考えられ、一部に炭層もみられた。柱穴は整地土層を除去した段階で３基確認された。柱穴の間隔を計算すると、７～８本柱と推定される。住居の中央やや北東よりに直径約１m、深さ0.35mの浅い土壙がある。遺物は住居の東側肩部から流れ込んだ状況で少量出土した。１は壺で２/３程に復元された。体部下端に穿孔がみられる。２は甕、３は器台の脚部である。いずれも灰白色を呈する。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）



第41図　竪穴住居１・出土遺物（１/60・１/４）



第42図　竪穴住居２・出土遺物
（１/60・１/４・１/２）

竪穴住居２（第42図　図版15）

８区の南端で検出された。中央部を現代の攪乱が入る。また、竪穴住居９に西半部を切られ、土壙10・11を切っている。直径5.8mの円形住居である。柱穴は確認されなかった。黄褐色土の貼り床２面が明瞭に観察された。上層貼り床面は8.96m、下層貼り床面は8.93mを測る。上層の貼り床面の北東部で直径0.5m程の焼土面と炭の散布面がみられた。北側の壁際で40cm台の各礫が上面を水平にして検出されたが、使用痕はみられない。出土遺物は200片あまりあったが、すべて小片であった。**４**の高杯は壁体溝、**５・６**の高杯は貼り床土中、**７**の直口壺と鉄製の**M１**は上層床面上から出土。**８**は埋土中から出土した備中南西部のチョコレート色を呈する丹塗りの高杯。時期は弥・後・Ⅳ。（物部）

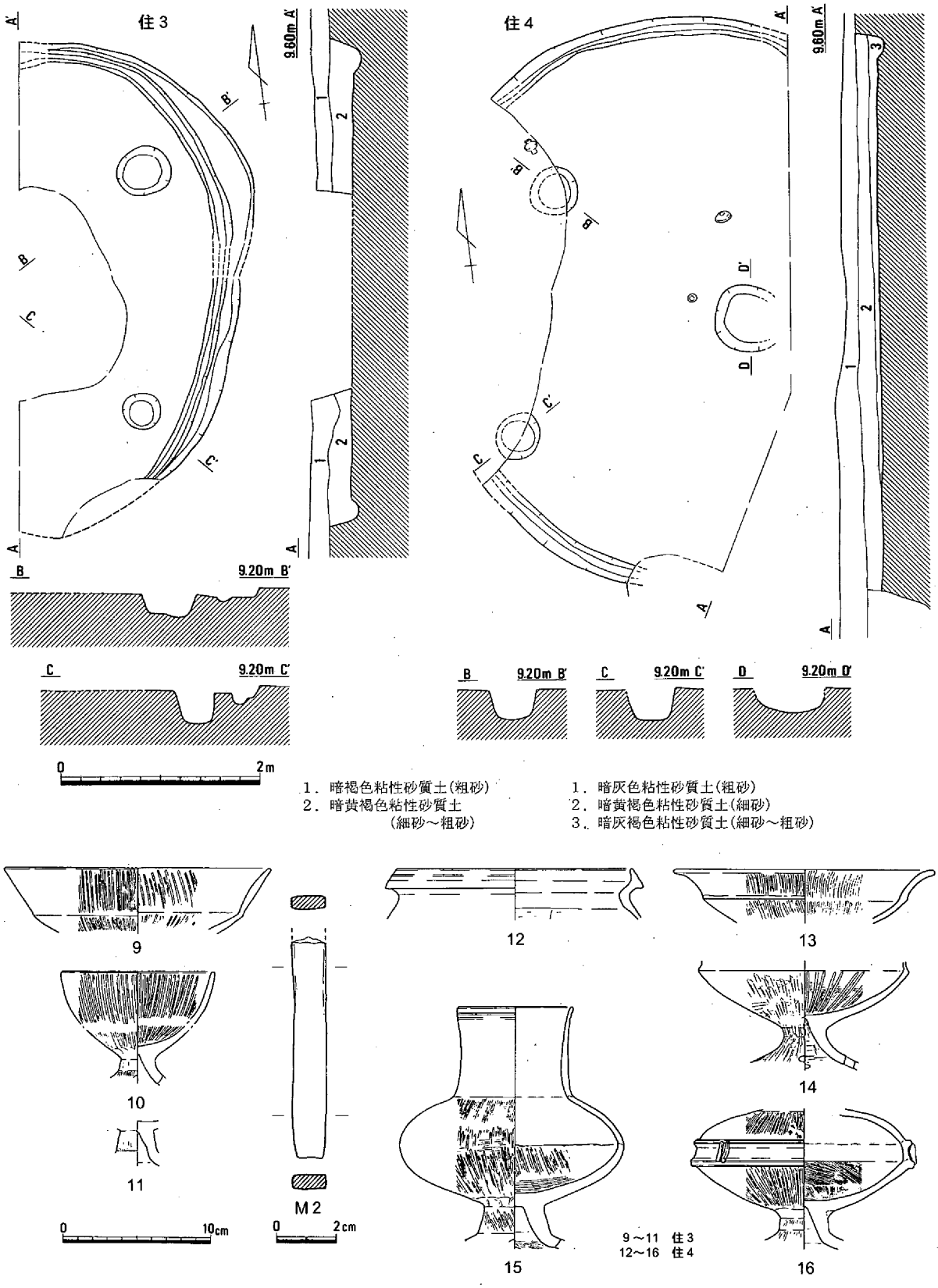
竪穴住居３（第43図）

竪穴住居４の西にあり、土壙28に南側・土壙29に西側を切られている遺構である。西側は調査区外に延び全体は検出しえなかったが、平面形は直径5.0mの円形を呈すると思われる。検出面からの深さは約0.3mで、ほぼ平らな床面をもつ。床面の外側には幅0.2～0.25m、深さ0.1～0.15mの壁体溝を巡らしている。主柱穴は２基のみを確認しているが、全体では４基あったものと想定される。柱間距離は0.244mを測る。また、壁面は壁体溝からはなれ少し外側に張り出して存在し、その張り出し部分のレベルは床面より幾分低い。建て替えによるものだろうか。出土遺物には高杯**９**～11があり、**９・10**は内・外面に縦方向のヘラミガキがなされている。この遺構の時期は弥・後・Ⅲか。　（蛯原）

竪穴住居４（第43図　図版15）

竪穴住居３の東隣に位置する。土壙27に南側の一部を切られ、東側は調査区外に延びるが、残存部より直径5.87mの円形を呈すると思われる。床面は検出面より約0.25mの深さにあって、外側には壁に沿って幅0.2～0.25m、深さ0.1mの壁体溝が掘られている。埋土は２層に分かれるが北側から南側に向かって傾斜するように堆積している。主柱穴は２基確認しているが、その位置関係から床面全体

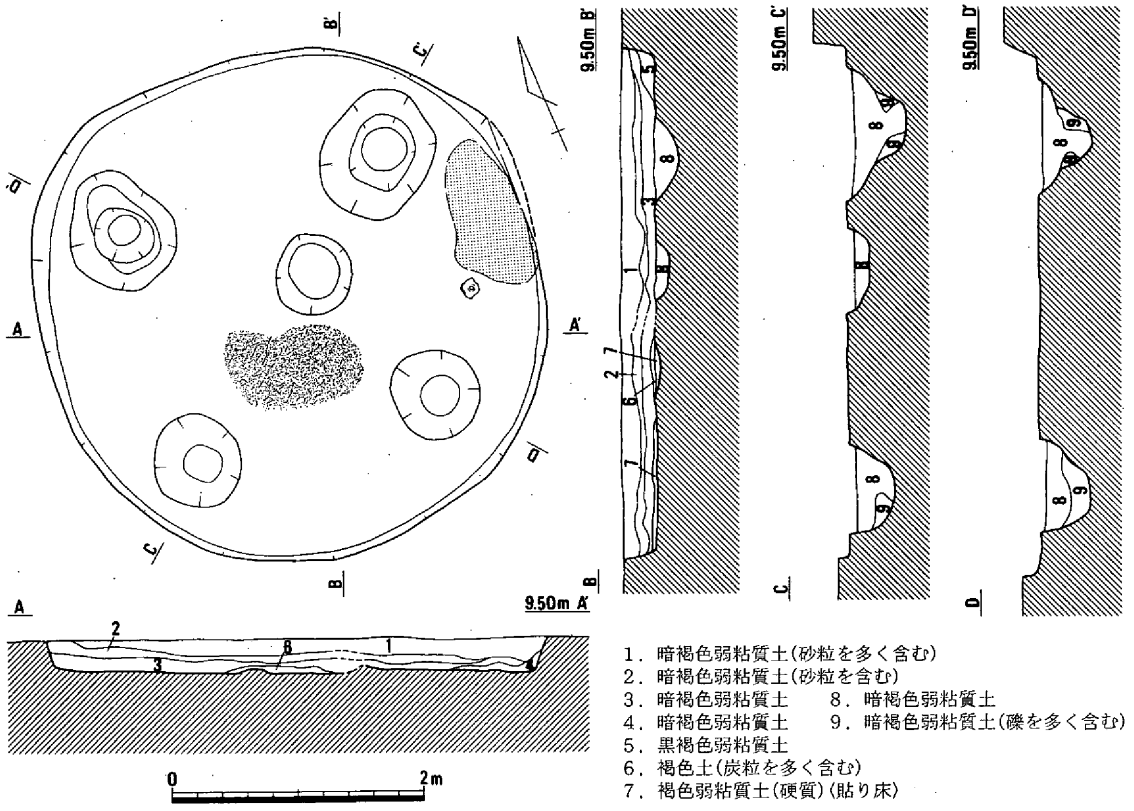
では４基ないしは５基あったと考えられる。また、中央穴は円形で径0.7mを測り、堆積土中には炭が含まれていた。遺物は12が甕で、13・14が高杯、15・16が台付壺である。16は胴部に棒状浮文が２本単位で施されている。この遺構は弥・後・Ⅲの範疇に入るであろう。　（蛯原）

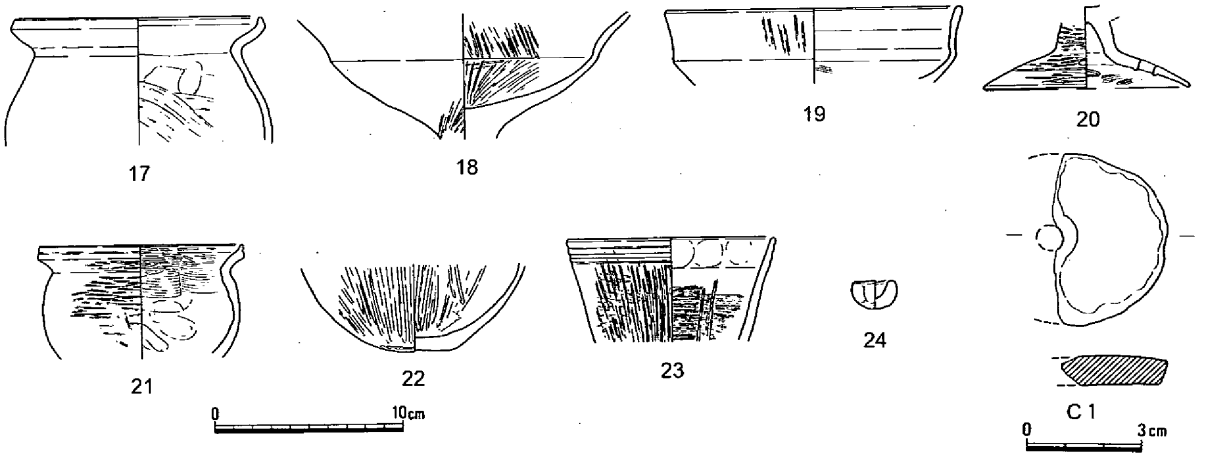


第43図　竪穴住居３・４・出土遺物（1/60・1/4・1/2）

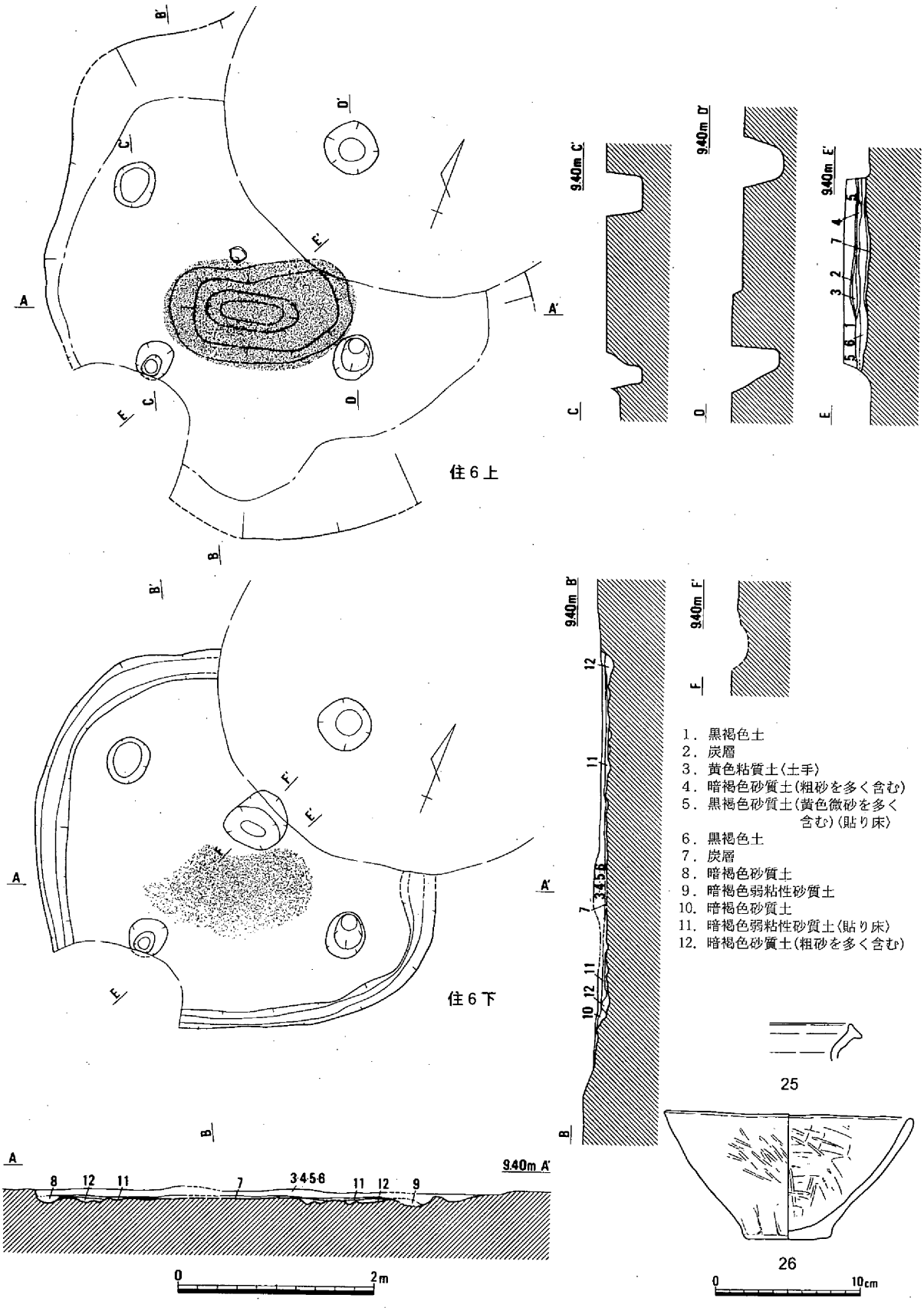
竪穴住居５（第44図）

８区と９区の境に位置し、後述する竪穴住居６を切っている。直径4.00mの円形を呈し、検出面からの深さは0.25m、床面の標高は9.04mを測る。住居の底面は微高地の基盤である礫層に達し、床面の窪んだ部分に褐色弱粘質土の固く締まった貼り床がみられた。直径1.0～0.7m、深さ0.4m前後の柱穴が４基、また中央やや北東よりに直径0.6m、深さ0.1mの浅い中央穴が礫層を穿って掘り込まれている。この中央穴の南側1.1×0.6mの範囲に炭の散布がみられた。東壁沿いには、1.2×0.5mの範囲に焼土が広がっていたが焼土面はなく、多量の焼土粒が堆積したものであった。遺物はすべて埋土中から出土したもので小片ばかりである。17は甕、18～20は高杯、21・22は小形の鉢、23は直口壺、24は非常に小さな手捏ね土器、Ｃ１は土製紡錘車である。20・21・23・24は精良な胎土を持つ。流入した土器なので正確さに欠けるが、弥・後・Ⅲ～Ⅳの範疇で考えられる。　（物部）





第44図　竪穴住居５・出土遺物（１/60・１/４・１/２）



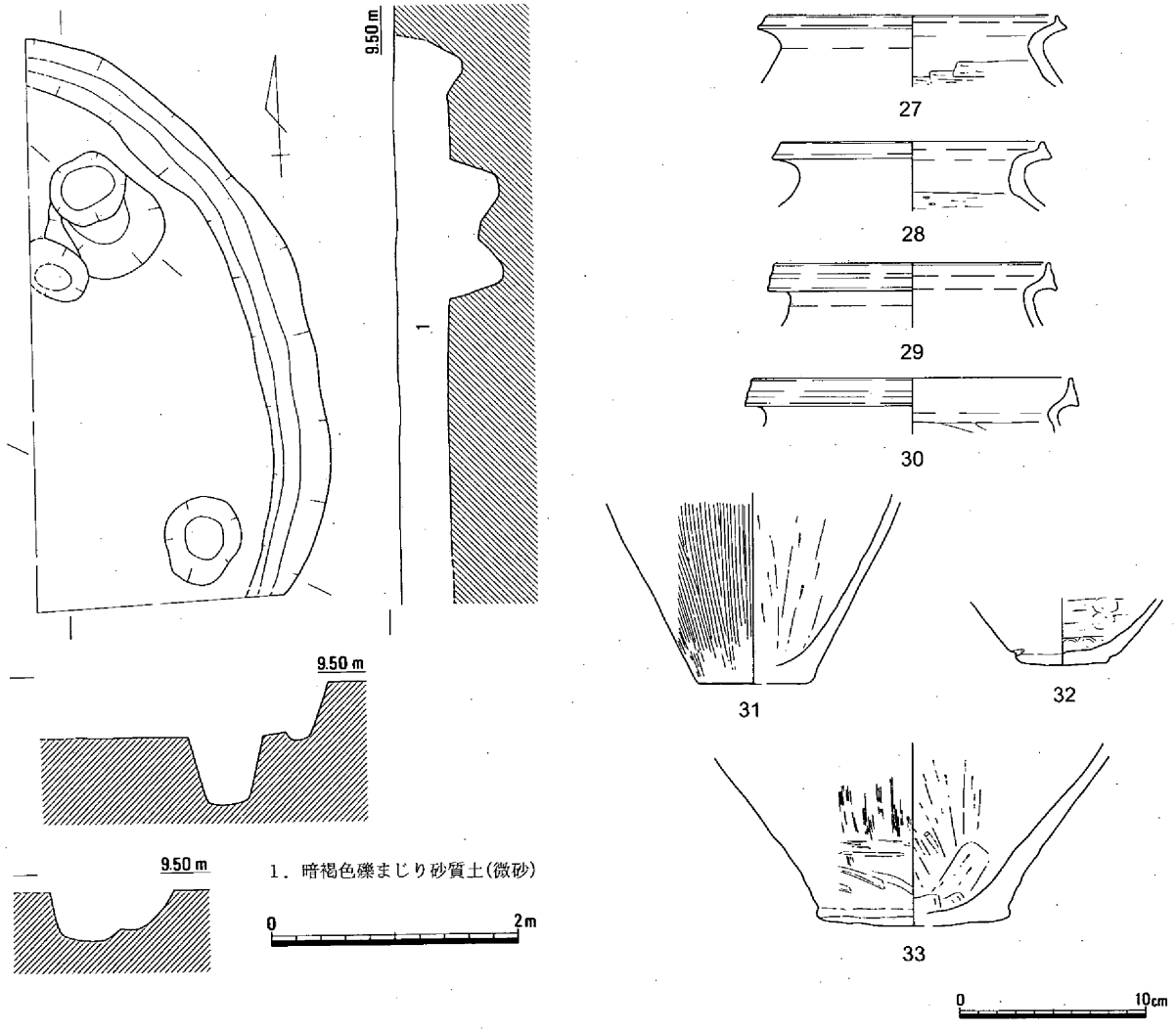
第45図　竪穴住居６・出土遺物（１/60・１/４）

竪穴住居６（第45図　図版11・15）

８区北部に位置し、竪穴住居５に北側１/４を削平されている。貼り床２面が確認された。上層床面の標高は9.14m、下層の床面は9.10mを測る。上層床面に伴う住居は上半部を削平され、輪郭は不明。ただ、黄色微砂を含む貼り床は明瞭で平面的に追うことができた。この貼り床が北側と東側で下層の住居の輪郭の外に広がっていることから拡張したものと考えられる。床面中央には黄色粘質土を使って幅0.4～0.7mの土手を長方形に巡らしている。また土手の上面全面に炭が散布している。柱穴は４基確認された。下層床面に伴う住居では壁体溝が確認された。平面形は3.76×3.70mの隅丸方形を呈する。柱穴は上層床面で確認された４基以外には検出されず、拡張の際、柱の移動はなかったと思われる。床中央やや北寄りに浅い中央穴があり、その南に1.7×0.7mの範囲に炭の散布がみられる。出土遺物**26**は上層床面に接して出土した鉢、**27**は柱穴から出土した甕である。下層床面に伴う土器はないが、上層床面と大差ないと思われ、弥・後・Ⅲの範疇に収まると考えられる。（物部）

竪穴住居７（第46図　図版11）

12区の南西隅に位置する。調査区の制約で竪穴住居の東側のみを調査した。竪穴住居の平面形は円形で、周囲に壁体溝がめぐる。復元で径約6.7mを測る。住居床面から柱穴と考えられる穴を２基検出した。そのうち、南側のものは径0.7m、深さ0.45mを測る。北側のものについては複数の柱穴の

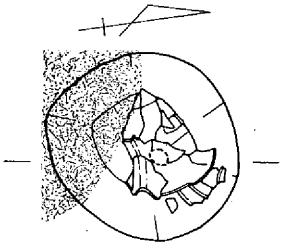


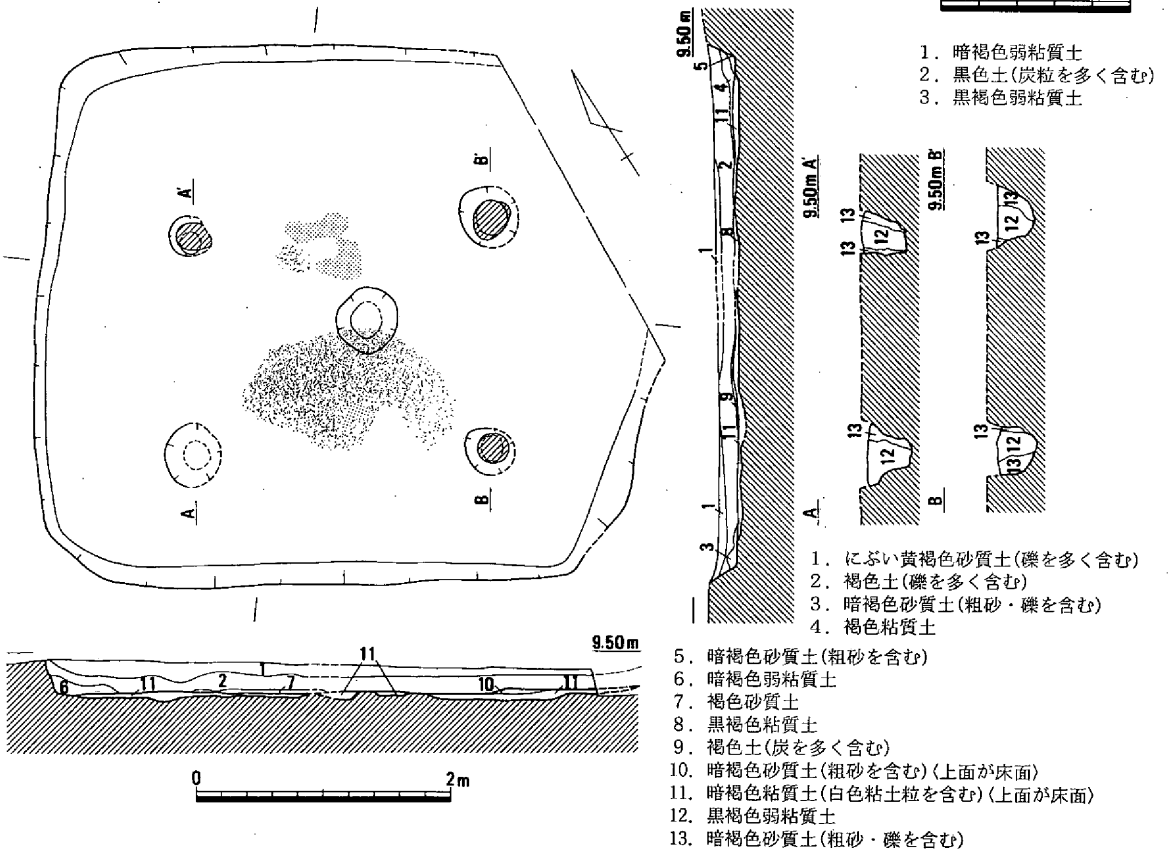
第46図　竪穴住居７・出土遺物（１/60・１/４）

痕跡がみられ、径約0.6～１ｍ、深さ約0.4ｍを測る。住居跡内には礫を含む暗褐色土が堆積しており、埋土中から弥生土器が出土した。27～30は甕の口縁部である。31～33は底部である。これらの出土遺物から、この住居跡の時期は弥生・後・Ⅲであると推測できる。　（金田）

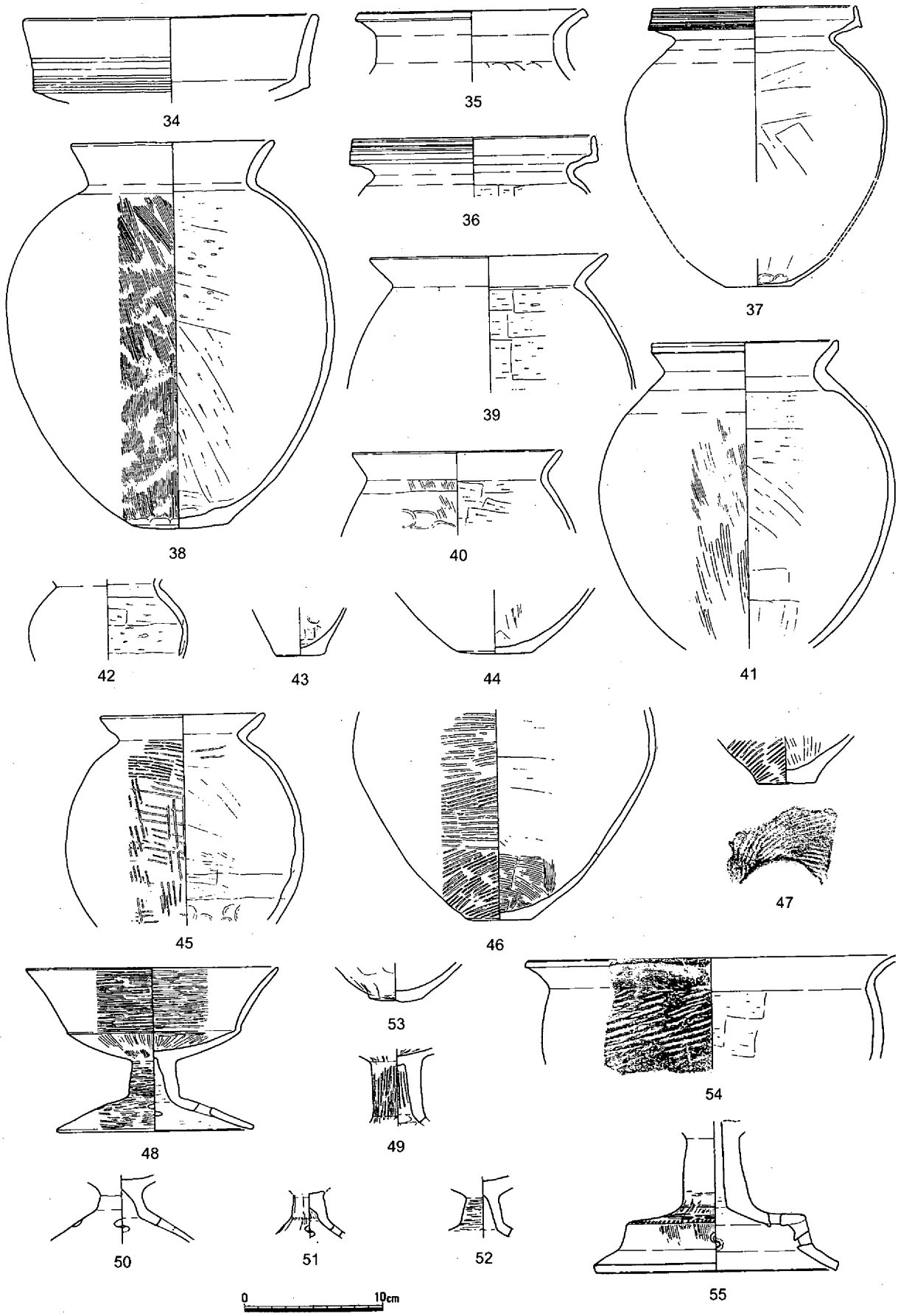
竪穴住居８（第47・48図　図版11・15）

９区北半に位置し、後述の粘土塊を切っている。東角が一部調査区外になる。平面形は南東辺がやや開き気味であるが、4.95×4.28ｍの方形を呈する。底面は微高地の基盤である礫層上面に達し、３～８㎝の整地土（第10～13層）を敷いて床面を整えている。床面の標高は9.18ｍを測る。柱穴は直径0.4～0.5ｍ、深さ0.4ｍ前後のものが４基検出された。そのうち３基には柱痕が確認できた。また、直径0.5ｍ、深さ0.1ｍの浅い中央穴がある。その北東側と南西側に小さな焼土面がみられた。さらに中央穴の底面から南西側にかけて1.5×0.9ｍの範囲に炭の散布があり、北東側焼土面の東側にも小さな範囲に炭の散布があった。出土遺物は、39の甕と51の高杯の２点が中央穴に伴うもので、それ以外は住居の廃絶後、一括して投棄されたものである。34は口縁端部が高く立ち上がる壺。35は短い頸部を持つ壺。36・37は口縁端部が拡張する甕、38～40はくの字口縁の甕、41の甕は口縁端部がわずかに立ち上がる。45～47の甕は外面に平行タタキの痕跡が明瞭に残る。48～52は高杯、53・54は鉢、54には外面に平行タタキが施される。55は装飾高杯である。時期は弥・後・Ⅳと考えている。　（物部）





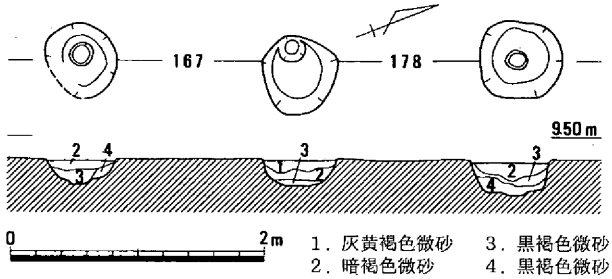
第47図　竪穴住居８・中央穴（１/60・１/20）



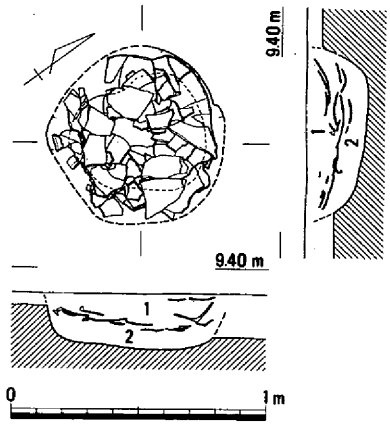
第48図　竪穴住居８出土遺物（１/４）

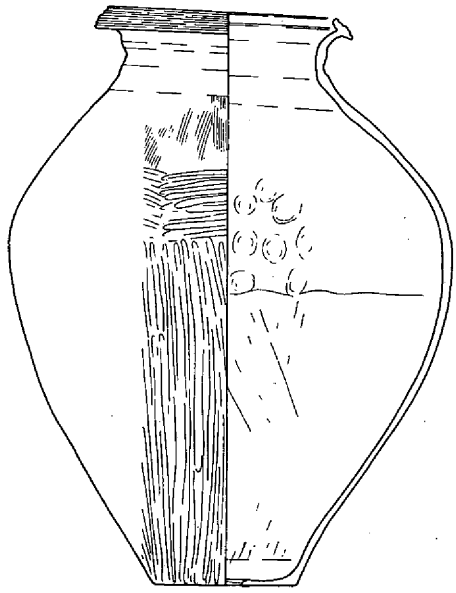
（２）柱穴列（第49図）

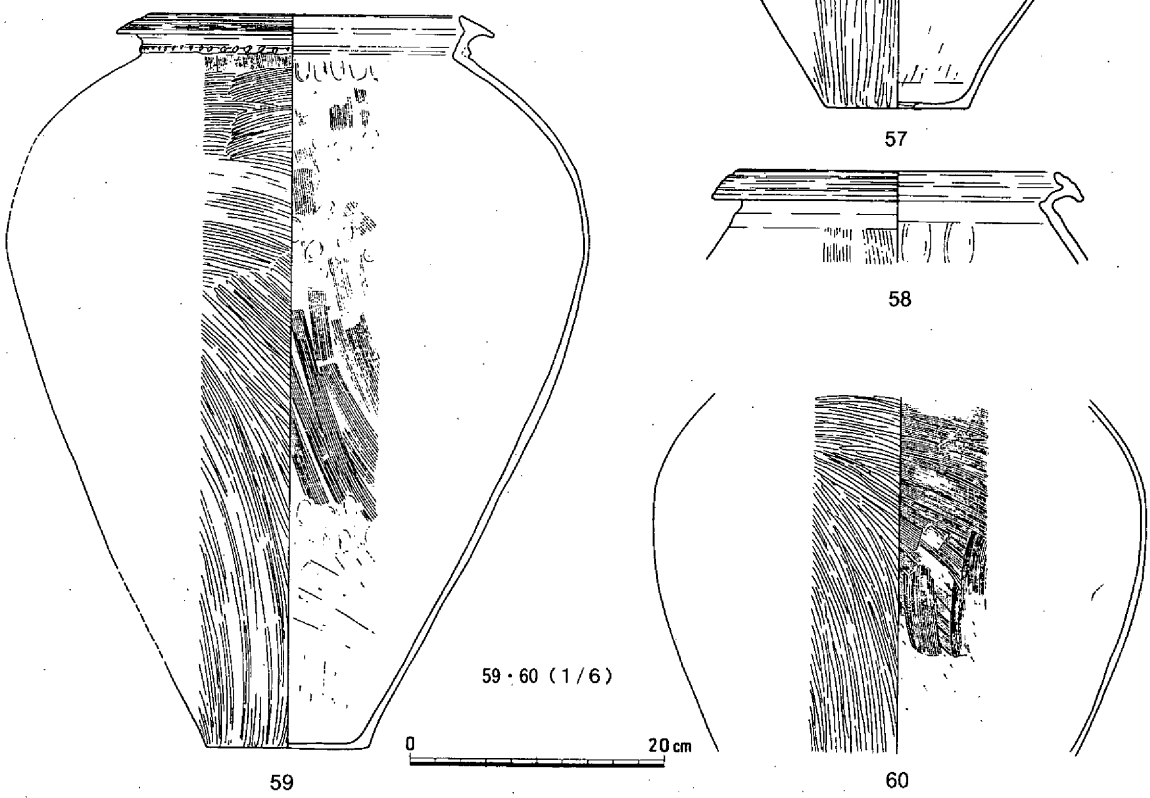
９区で検出され、竪穴住居５と８のほぼ中間に位置する。直径約0.6m前後の不正円形を呈する柱穴が３基並ぶ。主軸は、N－89°－Wである。遺物は混入土器小片のみ。その中に精良な胎土の高杯口縁部があり、緩やかに外反しながら高く立ち上がる特徴から弥・後・Ⅳの時期と考えられる。（物部）



第49図　柱穴列（１/30）







第50図　土壙１・出土遺物（１/30・１/６・１/４）

（３）土壙

土壙１（第50図）

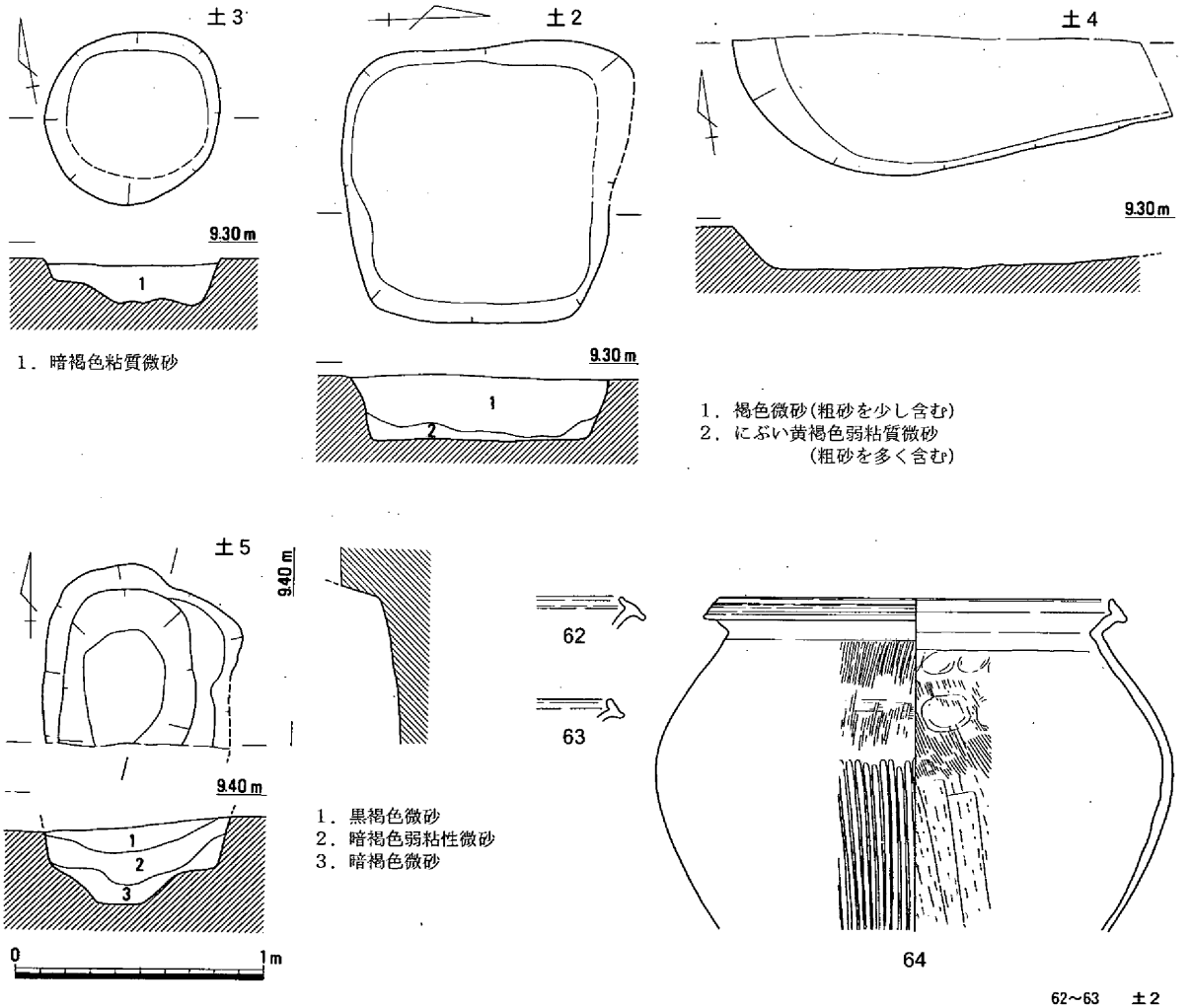
６区の北半に位置する。竪穴住居１の中央穴のちょうど上部にあたるが、埋土を切り込んでいることが確認された。直径0.7ｍの円形を呈す。土壙上半部は現在の耕作土によって削平されている。内部には、器高30.7㎝の壺**57**の上に器高58.7㎝の甕**59**が横位で重なりあってつぶれていた。この２個体はほぼ完形に復元された。**57**の底部には穿孔がみられる。その他に壺口縁部**56**、甕口縁～肩部**58**、甕体部**60**、鉢**61**の小片などが認められた。棺身と棺蓋という関係がなく、土器棺墓の可能性はあるが断定できない。時期は弥・中・Ⅲである。（物部）

土壙２（第51図）

６区の北部、土壙１の北東約4.5ｍの位置に在る。一辺1.1ｍの方形を呈する。検出面からの深さ0.26ｍを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らである。埋土から僅かに混入土器小片が数点出土した。甕口縁部**62**・**63**の形態は弥・中・Ⅲの時期を示している。（物部）

土壙３（第51図）

６区の北部、土壙２の北西約2.5ｍに位置する。直径約0.77ｍの円形を呈する。埋土は土壙２とよく似た微砂で、土器小片が少量混じっていた。時期は埋土から弥・中・Ⅲと推定される。（物部）



第51図　土壙２～５・出土遺物（1/30・1/4）

土壙４（第51図）

６区北端に位置し、土壙２の北東側に隣接する。北側と東側が調査区外になるため、正確な形状は不明であるが、７区で検出されなかったので、２ｍ前後の方形を呈する土壙と推測される。出土遺物は、土器小片が少量。埋土が土壙２・３とよく似ており、土壙４の時期は弥・中・Ⅲと推定する。（物部）

土壙５（第51図）

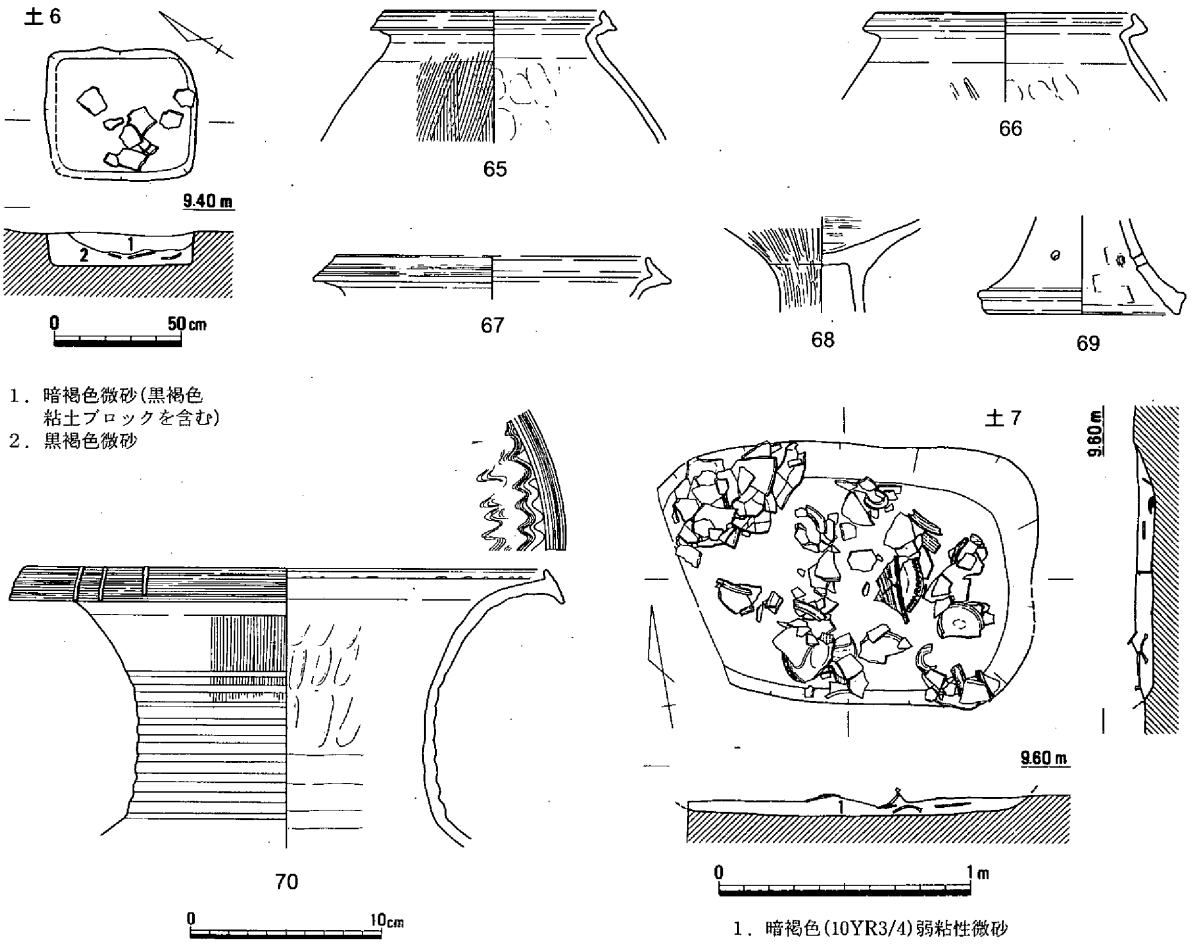
７区南端、土壙３の北約２ｍに位置する。南部は調査区外になるが、１ｍ前後×0.75ｍの不正長方形と推定される。２段に掘り込まれ、検出面からの深さは0.3ｍを測る。遺物は埋土上層から甕の口縁～体部にかけての破片**64**が１点出土したのみである。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。　（物部）

土壙６（第52図）

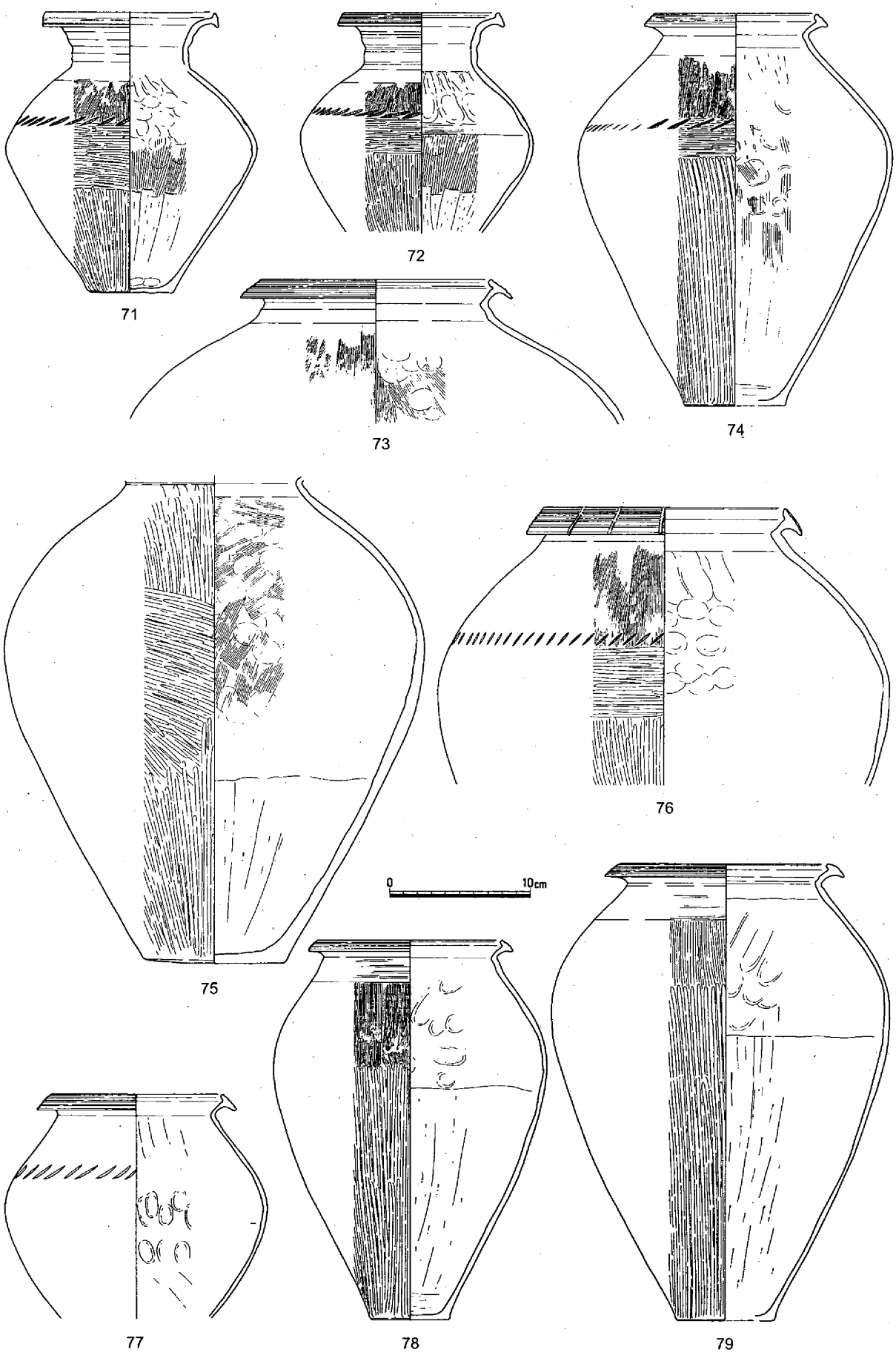
８区の中央部に位置する。平面形は0.6×0.52ｍのほぼ正方形を呈し、検出面からの深さは0.15ｍ、底面の標高は9.17ｍを測る。壁は垂直、底面は平らである。埋土中から土器小片が26点出土した。**65**～**67**は甕、**68**・**69**は高杯で、すべて灰白色を呈する。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

土壙７（第52～54図　図版12・15・16）

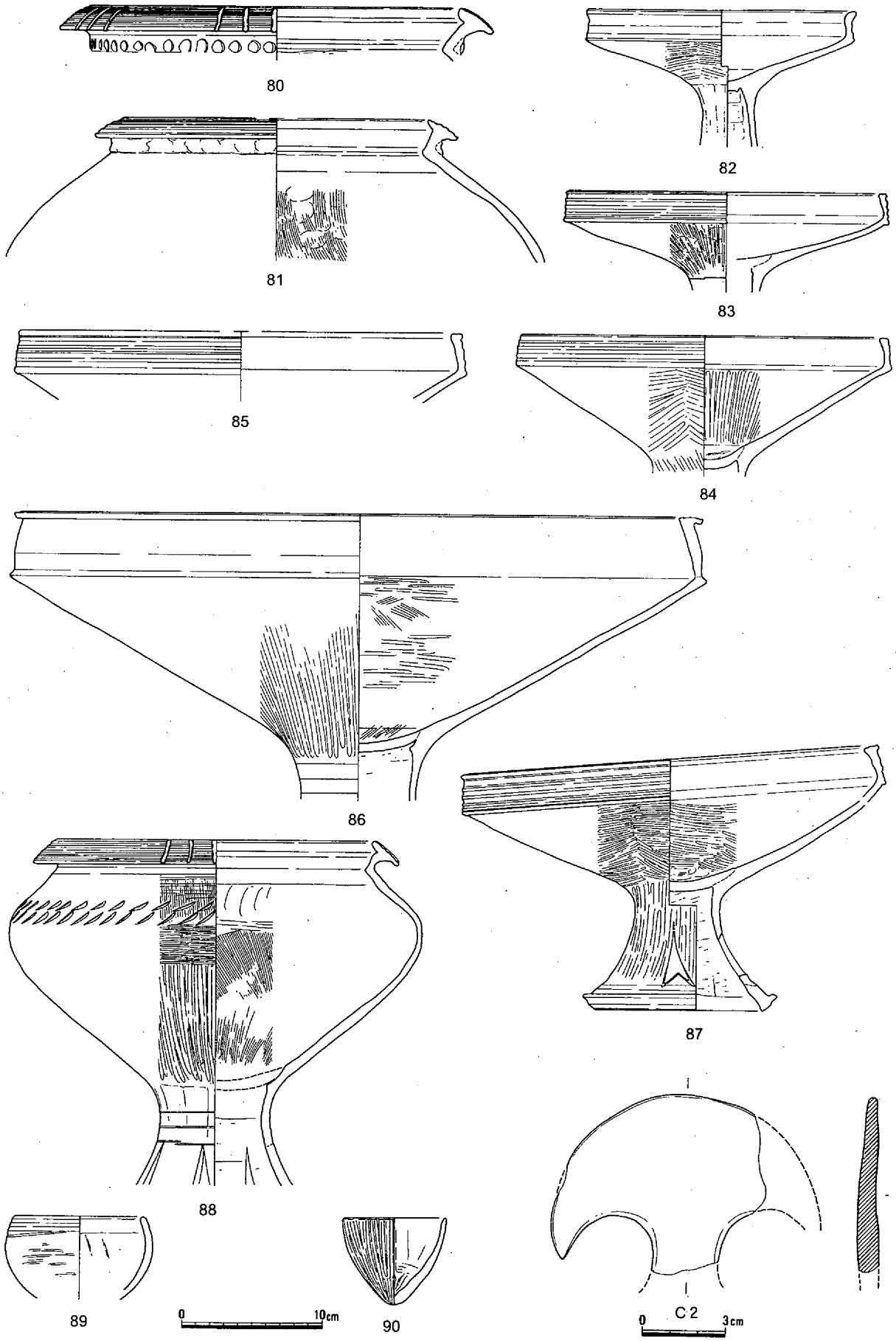
９区の南半部、土壙６から北へ約21ｍに位置する。1.4×1.03ｍの隅丸長方形を呈する浅い土壙である。内部から多量の土器が出土した。すべて灰白色を呈し、１㎜大以下の砂粒を含む比較的きれいな胎土を持つ。**70**～**75**は壺である。**70**は大形で口縁部外面に棒状浮文、口縁部内面に櫛描き波状



第52図　土壙６・７・出土遺物１（１/30・１/４）



第53図　土壙７出土遺物２（１/４）

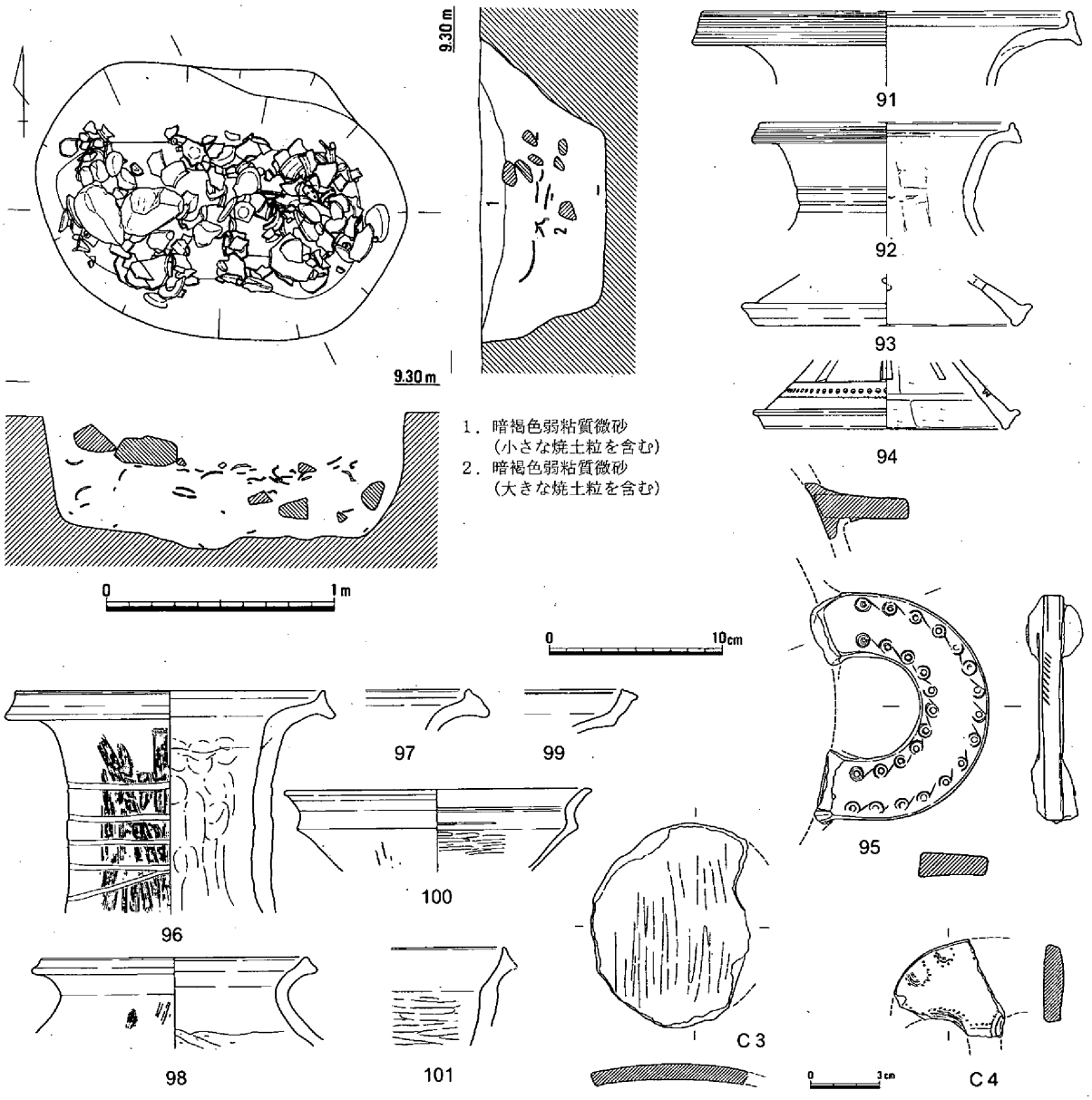


第54図　土壙７出土遺物３（１/４・１/２）

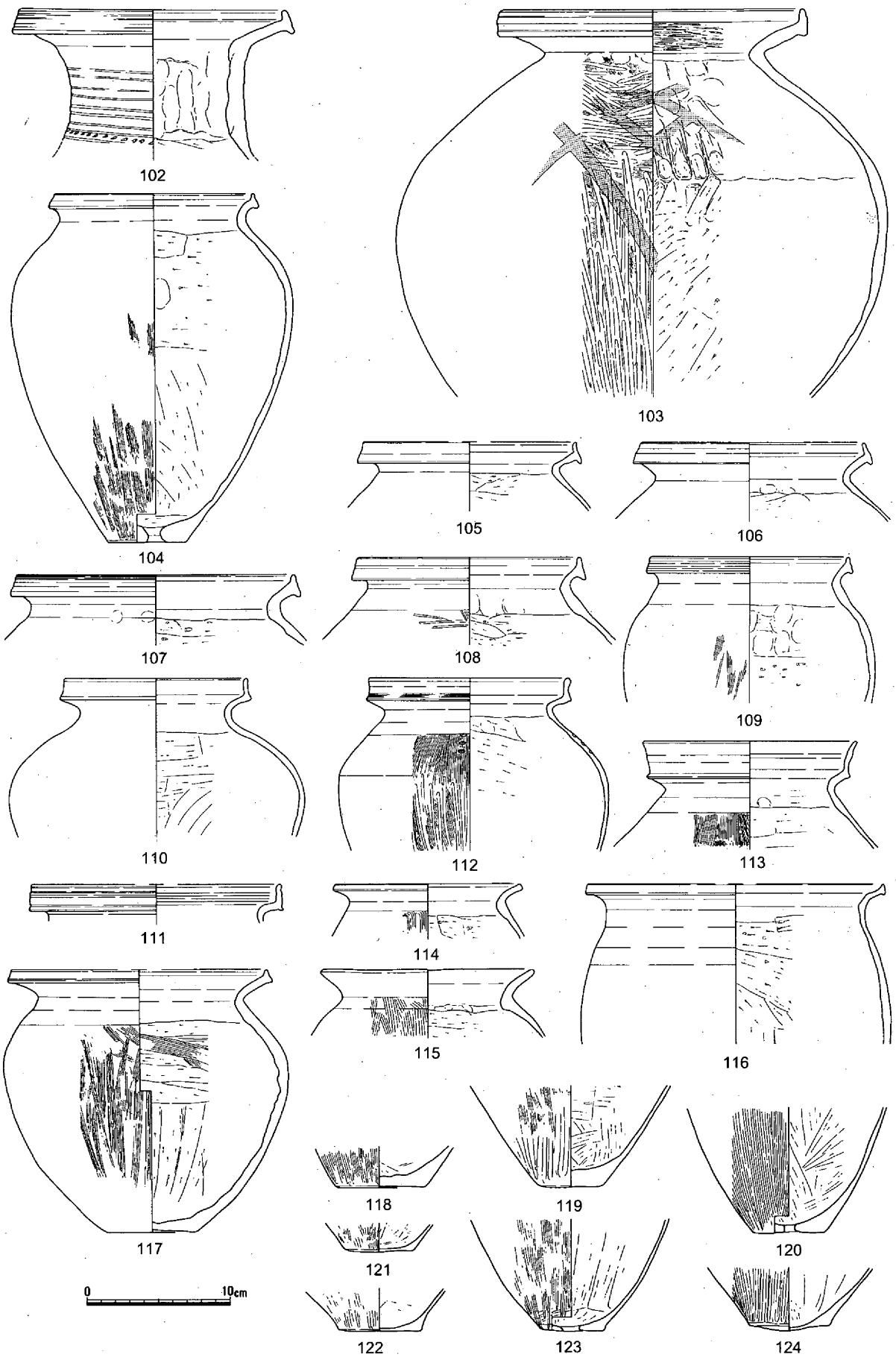
文を施す。甕は頸部に突帯のあるもの80・81とないもの76～79がある。82～87は高杯である。すべて口縁部が内傾して立ち上がる。82・83は口縁端部が若干外方へ拡張する。また受け部外面のヘラミガキが多角形のものと放射状のものがある。86は大形で口径46cmある。87は脚部に矢羽根透かしが施される。88は台付き鉢で内面はハケメ調整、脚註部に三角形透かしがある。89・90は小形の鉢。90は尖底で外面に丁寧なヘラミガキを施している。Ｃ２は分銅形土製品である。時期はこれらの土器の特徴から弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

土壙８（第55～57図　図版12・17）

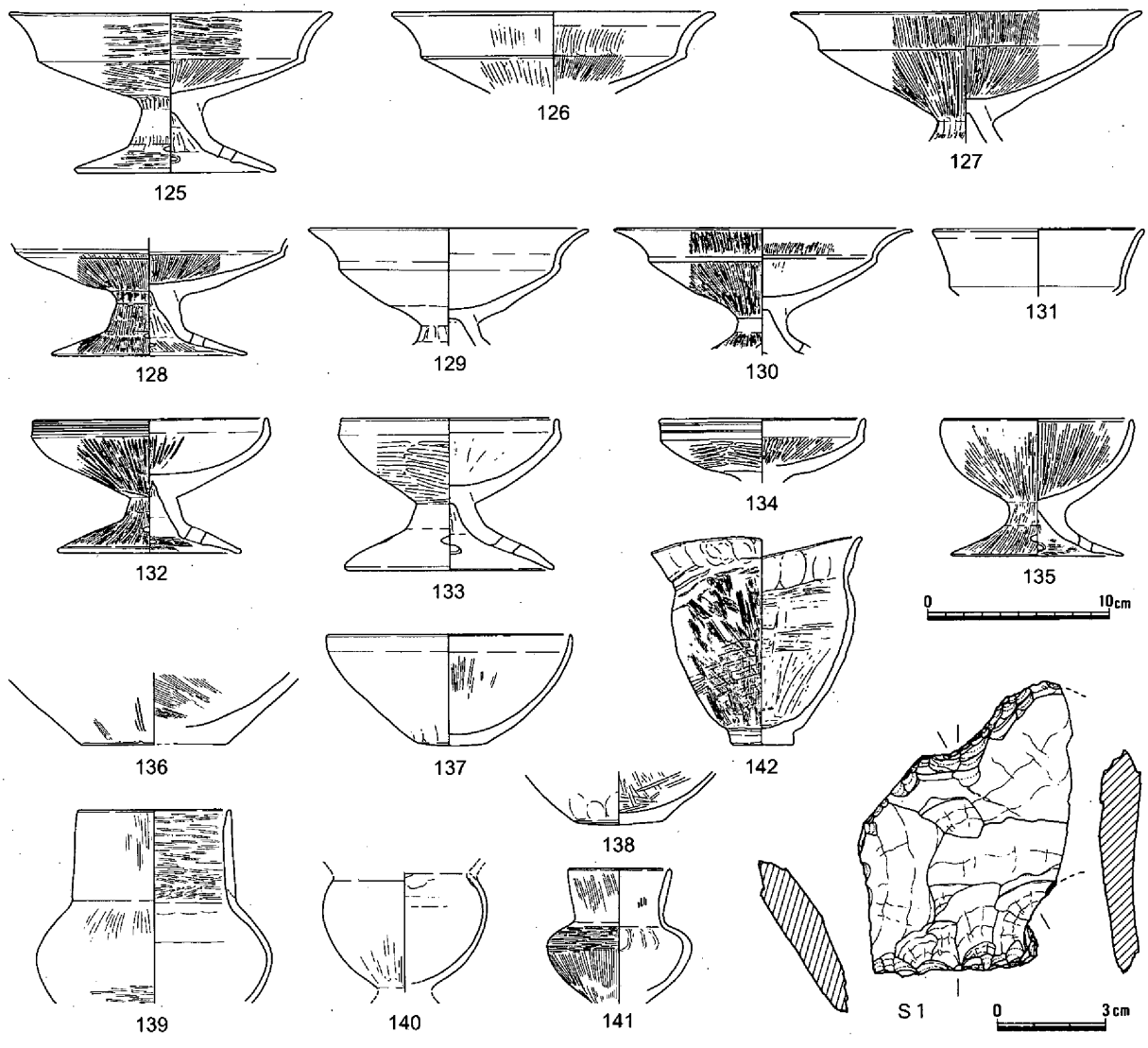
７区北半に位置する。後述する竪穴住居18に上部を削平されている。平面形は1.63×1.17ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.4ｍを測る。多量の土器および20cm大以下の礫を包含し、埋土には焼土粒を含む。焼土面など被熱痕跡はみられない。出土遺物には土器・土製品・石器があり、弥・中・Ⅲ、弥・後・Ⅰ～Ⅲの各時期が混在する。その割合は弥・後・Ⅲが８割、弥・中・Ⅲ、弥・後・



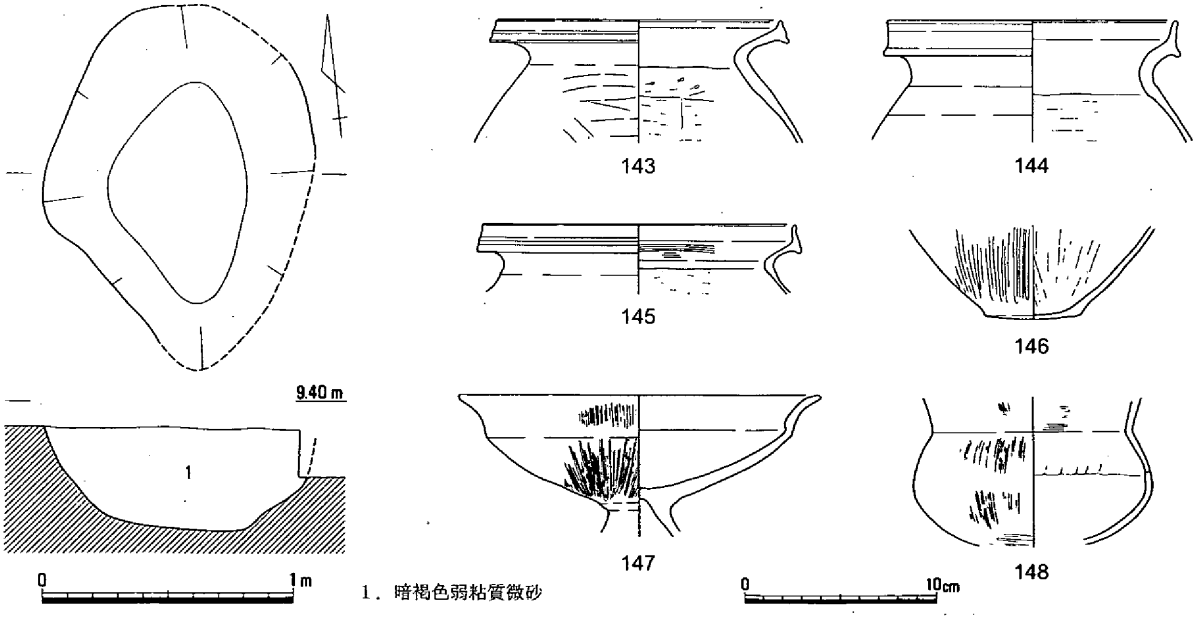
第55図　土壙８・出土遺物１（1/30・1/4・1/3）



第56図　土壙８出土遺物２（１/４）



第57図　土壙８出土遺物３（１/４・１/２）

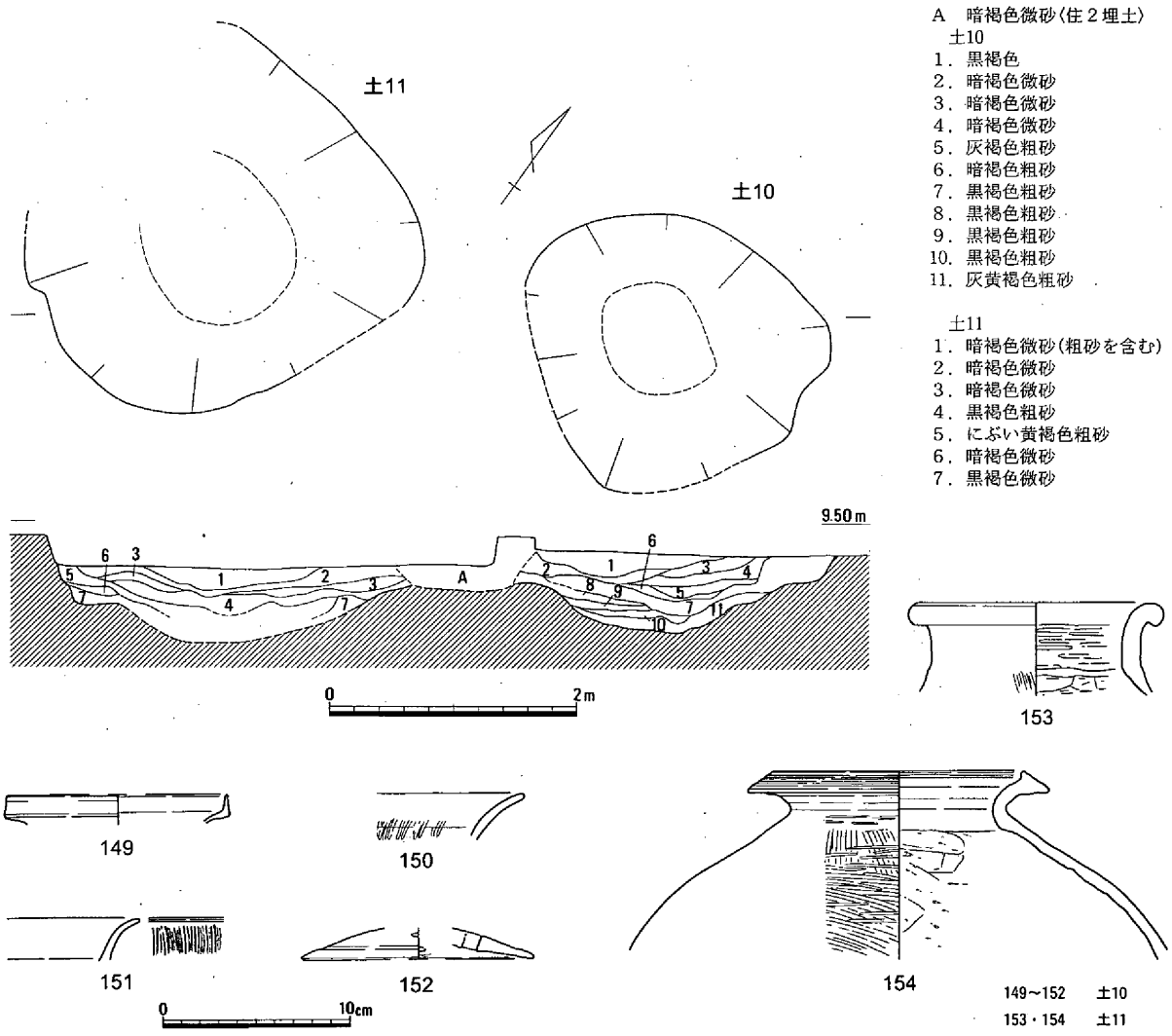


第58図　土壙９・出土遺物（１/30・１/４）

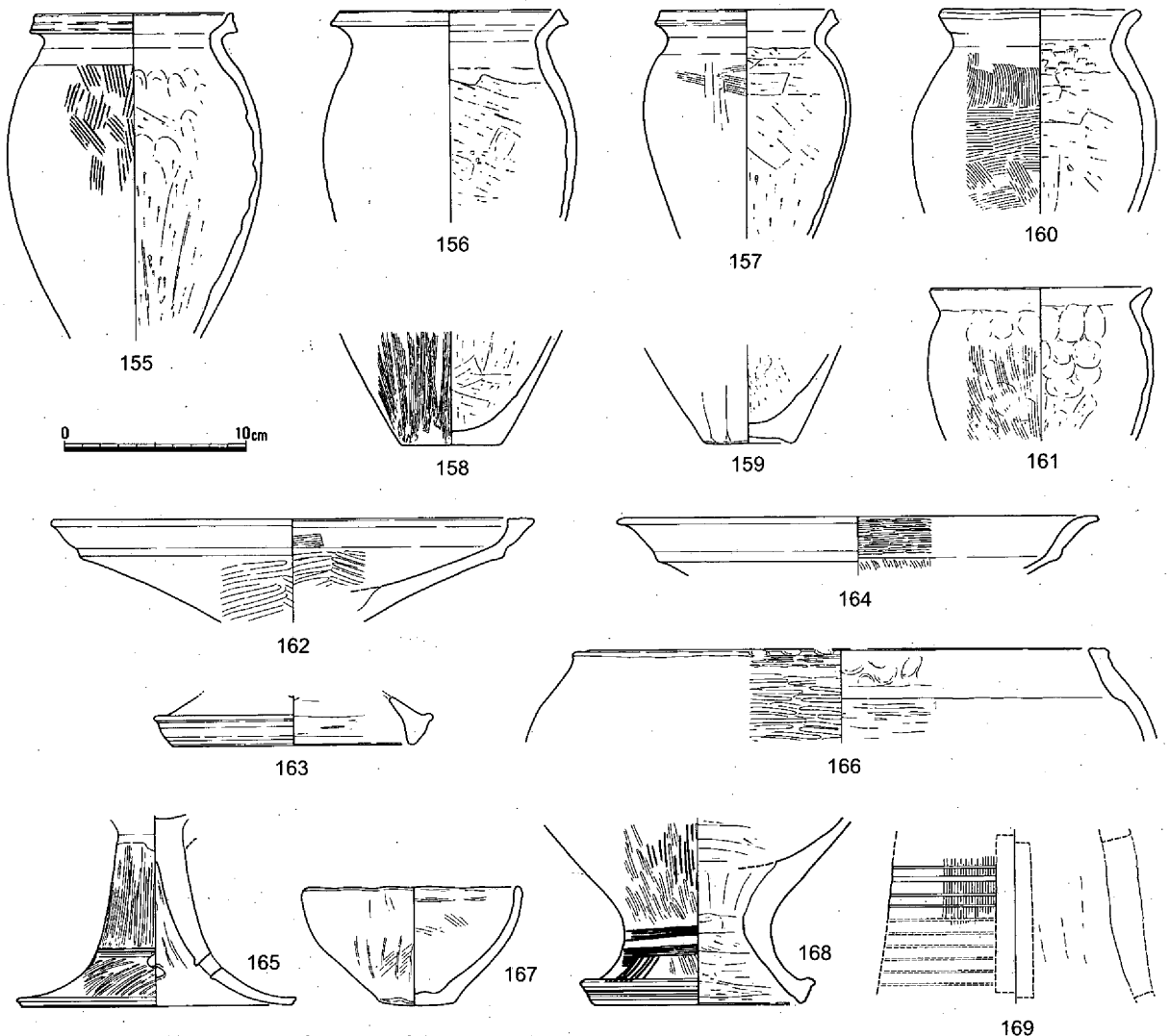
Ⅰ～Ⅱが２割である。91～94は壺と高杯、95は差込式の把手ではなかろうか。Ｃ３は甕体部を転用した土製円盤、Ｃ４は分銅形土製品である。以上は形態および胎土・色調から弥・中・Ⅲと考えられる。96～101は弥・後・Ⅰ～Ⅱ。壺96・97、甕98、高杯99・100、鉢101である。102は長頸壺、103は壺でカゴメが残る。104～124は甕である。104～106は口縁端部を強いヨコナデにより引き出している。110～112は口縁端部を長く上方に拡張するもので、胎土は砂粒を多く含む。114・115はくの字口縁の甕、116は肩が張らずだらりと下がる器形を呈する。117は寸胴である。119～120は比較的分厚い底部を持つもの、121～124は底部器壁が非常に薄いもので、下方に少し突出し安定の悪いものも見られる。125～135は高杯である。口縁端部が外湾するものと、上方に短くつまみ出すもの132～134、そのまま丸く収める135と３種類が見られる。136～138は鉢である。139～141は脚付きの直口壺で口縁部が上方に伸びるものと外傾するものとがある。Ｓ１は２箇所にえぐりを持つスクレイパーである。出土土器は全部で100個体前後あった。色調の全く異なる破片の接合が多く見られた。完形に復元されるものは少なかった。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。（物部）

土壙９（第58図）

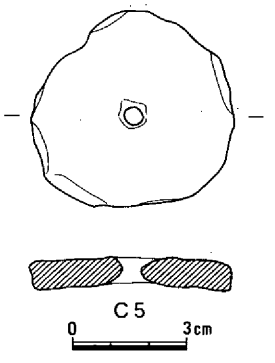
７区北半に位置し、土壙８北東に隣接する。1.45×1.06m、検出面からの深さ0.4mを測る。上半を竪穴住居18に削平され、埋土上部にはこの住居に伴うと考えられる土器片が混入していた。出土



第59図　土壙10・11・出土遺物１（１/30・１/４）



第60図　土壙11出土遺物２（１/４・１/２）



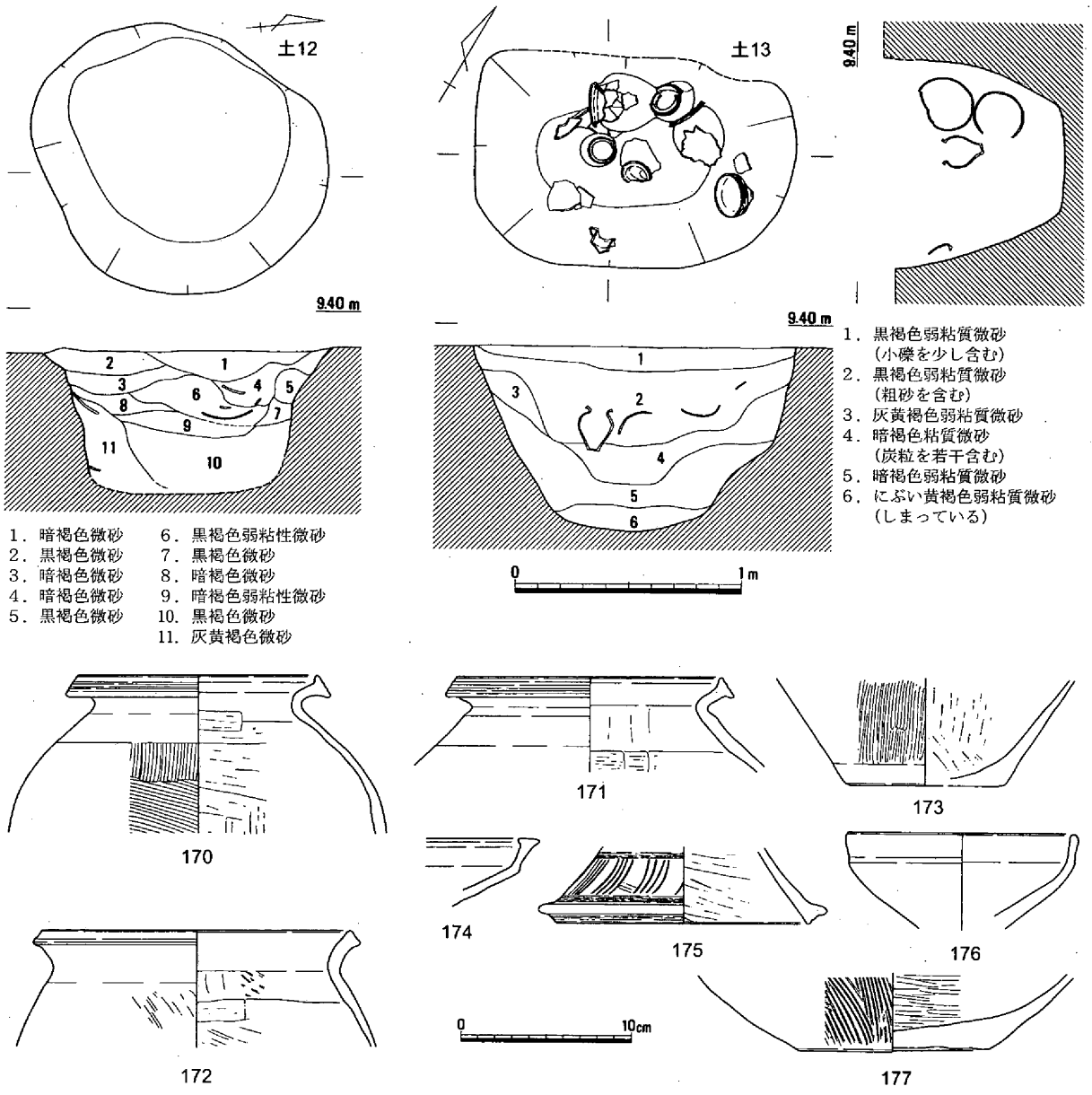
遺物には甕**143**～**146**、高杯**147**、脚付き直口壺**148**のほか、土器小片100点があり、弥・中・Ⅲの土器片の混入がある。時期は弥・後・Ⅲ。（物部）

土壙10（第59図）

８区の南部に位置し、竪穴住居２に南半上部を削平されている。2.36×1.3mの不正方形を呈し、検出面深0.63mを測る。掘り方は微高地の基盤である粗砂層に達し、湧水が見られた。出土遺物は小片のみ。弥・中・Ⅲ、弥・後・Ⅰの時期の土器片が混入する。時期は弥・後・Ⅲ。　（物部）

土壙11（第59・60図）

８区の南部に位置し、土壙10の西側に隣接する。竪穴住居２に一部、後述の竪穴住居９に上部を削平されている。西端部は調査区外になる。約3.0×3.0mの不正方形を呈す。土壙10と同様に粗砂層を掘り込み、湧水が激しいため、底面まで掘りきることはできなかった。出土遺物は破片が少量見られた。**153**・**154**は壺で、前者は口縁が玉縁状を呈する。**155**～**161**は甕。**160**の口縁は丸く収まる。**161**は体部内面上半に指頭圧痕が目立つ。**162**～**165**は高杯である。**166**・**167**は鉢。**168**は脚台付きの鉢か壺と思われる。**169**は長方形透かしを持つ器台。**Ｃ５**は甕か壺の体部を転用した土製紡錘車である。弥・後・ⅠとⅡの２時期が混在している。土壙の時期としては弥・後・Ⅱと考えられる。　（物部）



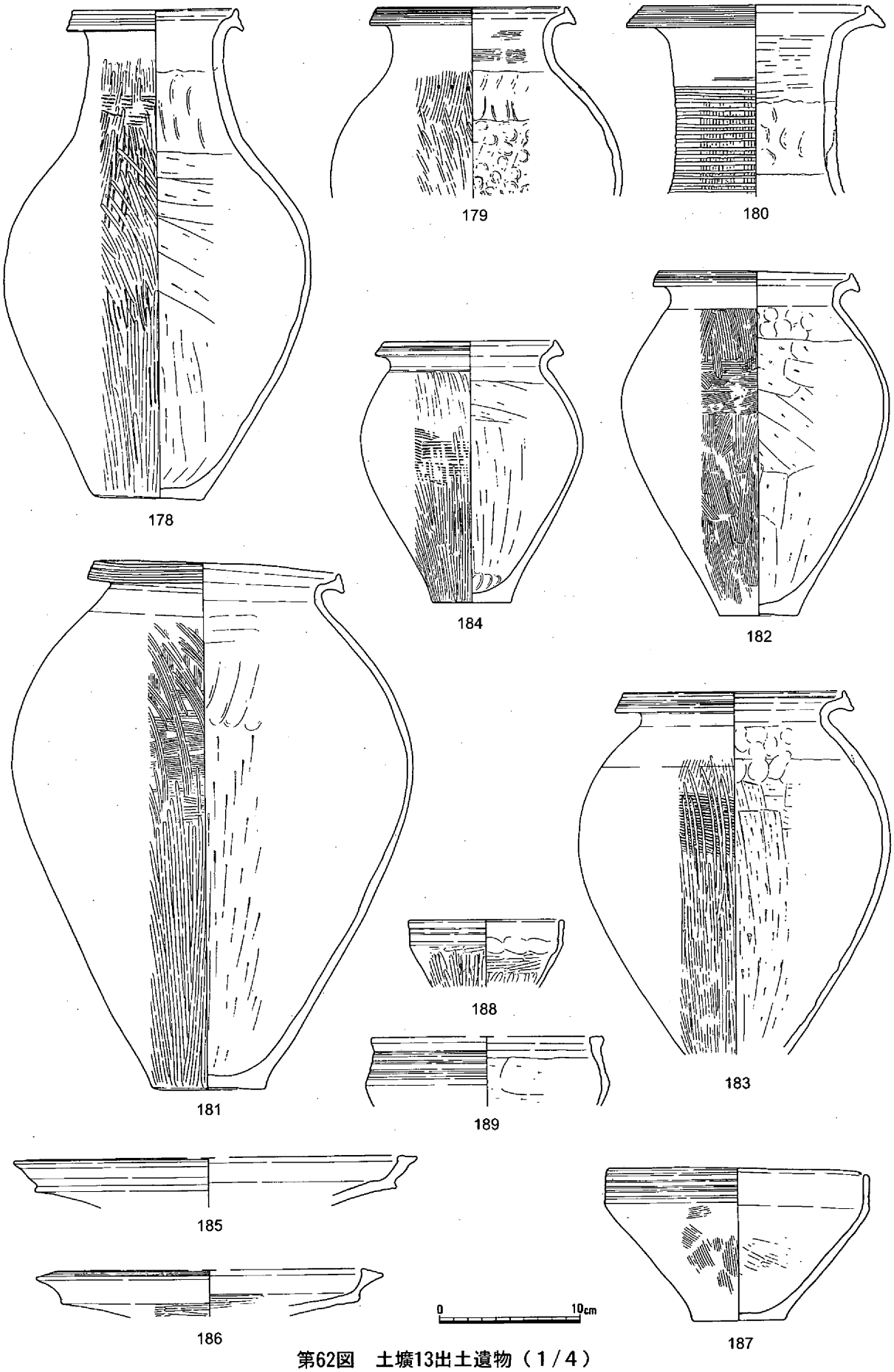
第61図　土壙12・13・土壙12出土遺物（１/30・１/４）

土壙12（第61図）

８区の中央、土壙10の北1.5ｍに位置する。平面形は1.28×1.20ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.65ｍを測る。出土遺物には土器小片が、弥・中・Ⅲの時期の混入を含め、約80片見られた。甕170～173、高杯174・175、鉢176・177などがある。いずれも１～２㎜大以上の砂粒を含み、橙色を呈する。土器の特徴からこの土壙の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（物部）

土壙13（第61図　図版16）

８区の中央に位置し、土壙12の北側に隣接する。平面形は1.42×0.94ｍの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.82ｍ、底面の標高は8.48ｍを測る。にぶい黄褐色を呈する埋土最下層（第６層）は固く締まり、整地土とも考えられる。出土遺物は、壺３個体、甕21個体、高杯９個体、鉢４個体、器台２個体が確認された。いずれも１～２㎜大以上の砂粒を含み、橙色を呈する。時期は弥・後・Ⅰと考えられる。少量の弥・中・Ⅲの土器片が混入していた。また黄白色を呈する６㎝大の粘土塊が出土し、この粘土塊と178壺、および甕・高杯の小片を胎土分析に供した（第８章第３節）。（物部）



第62図　土壙13出土遺物（１/４）

土壙14（第63図）

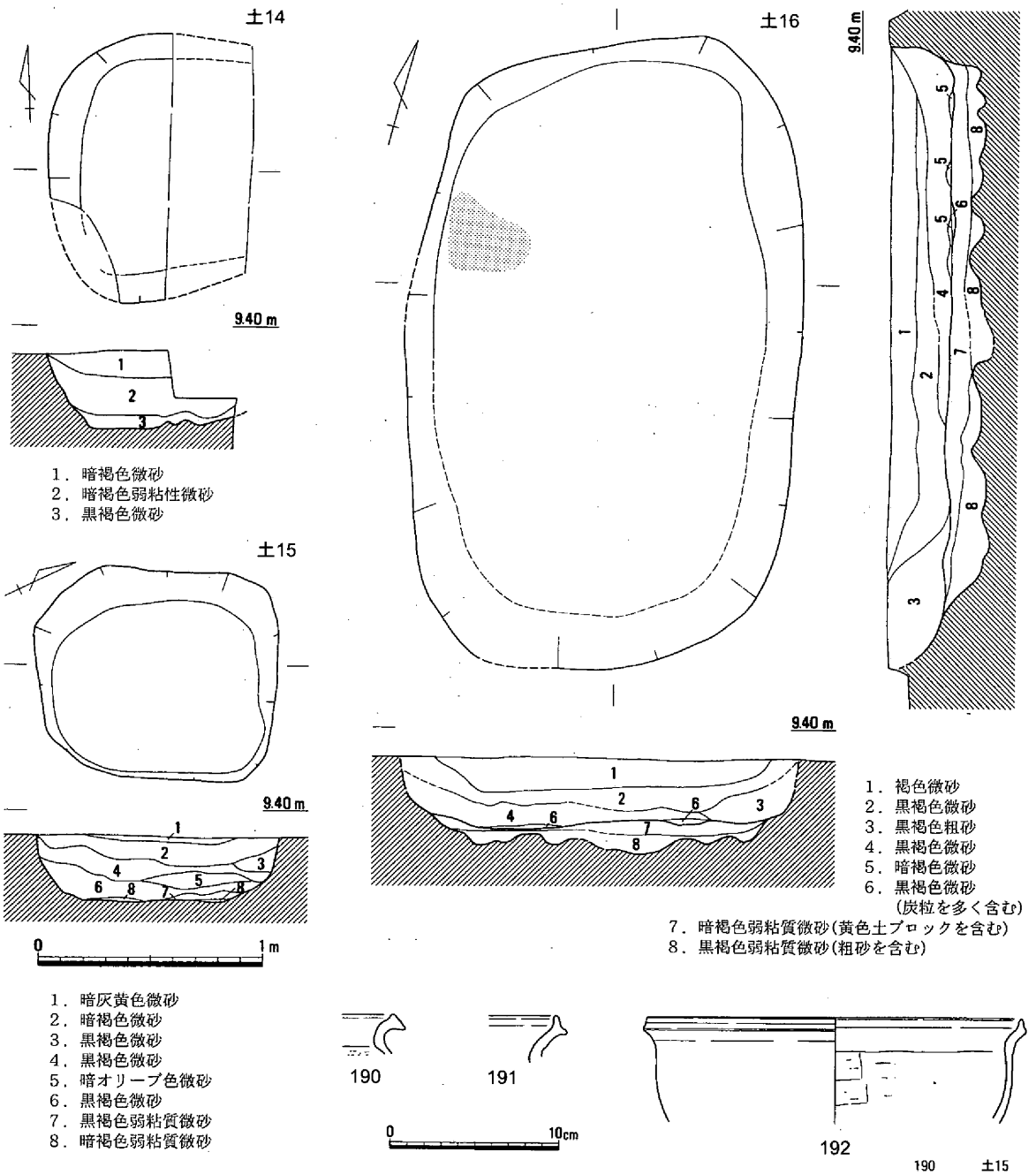
8区中央に位置し、土壙13に南西隅を切られている。また、東半は調査区外になる。平面形は1.2×0.9m以上の隅丸方形を呈すと考えられ、検出面からの深さは0.35m、底面の標高は8.94mを測る。出土遺物は土器小片が約60点あり、その特徴から弥・後・Ⅰの時期と推定される。（物部）

土壙15（第63図）

8区中央に位置し、土壙14の東、土壙13の北に隣接する。平面形は1.07×0.93mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.29m、底面の標高は8.99mを測る。底面は平らである。遺物は土器小片が約40点ほど混入していた。**190**は甕の口縁部で弥・後・Ⅰの特徴を示す。（物部）

土壙16（第63図）

8区中央部に位置し、土壙12・13・15の西に隣接する。平面形は2.80×1.75mの隅丸長方形を呈



第63図　土壙14～16・出土遺物（1/30・1/4）

190　土15
191・192　土16

し、検出面からの深さは0.47ｍを測る。底面は凸凹が著しいがその上に厚いところで約20cmの整地土（第７・８層）を施して平らな床面を作っている。床面上には一部に被熱面があり、炭粒の散布が確認された。遺物は土器小片が50点ほどみられたが、すべて埋土中から出土した混入遺物である。**191**は甕、**192**は鉢で、どちらも１㎜大以上の砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。土器の特徴から土壙の時期は弥・後・Ⅲと考えられる。（物部）

土壙17（第64図）

８区中央、土壙５の北約1.2ｍに位置する。平面形は1.62×1.60ｍの正方形を呈し、検出面からの深さは0.4ｍを測る。土壙16と同様に凸凹した底面上に整地土を施し、平らな床面を作っている。床面の標高は9.10ｍ。床面直上には炭粒を含む砂質土層が広く観察された。出土土器のほとんどは埋土中に混入したもので、小片60点ほどがあった。**193**・**194**は上方に拡張する口縁端部を持つ甕、**195**は甕の底部である。**195**の１点のみ床面に着地する。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。（物部）

土壙18（第65図）

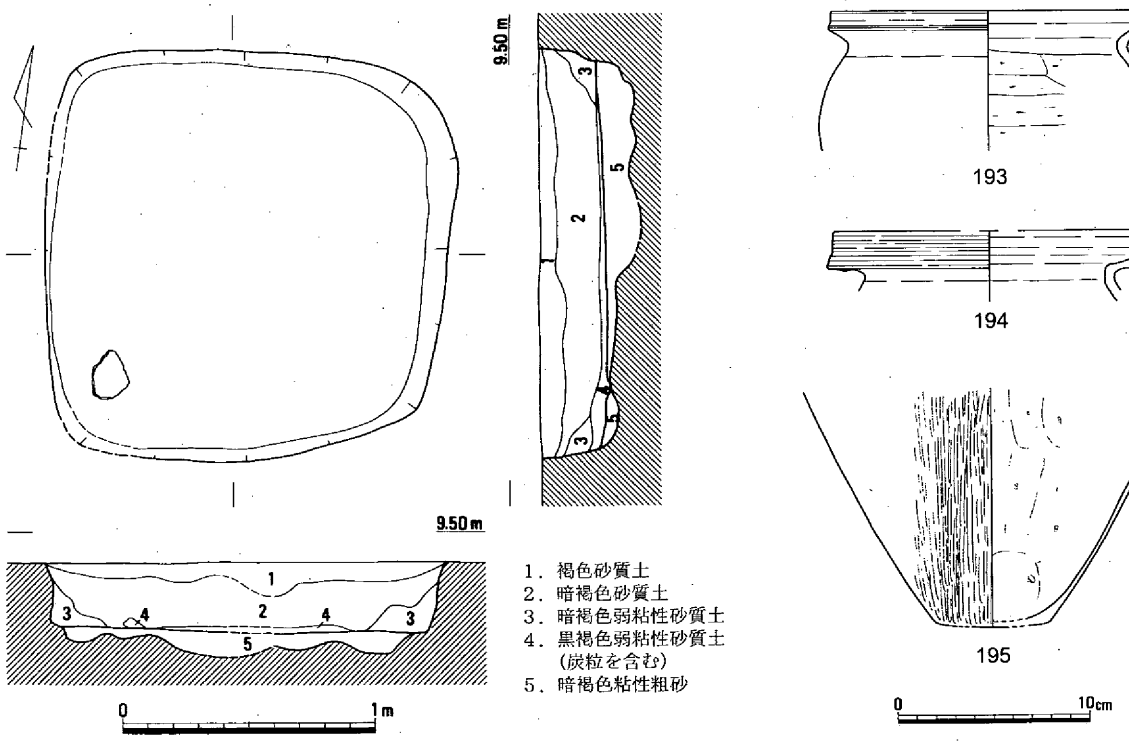
11区の南西部で検出した。北側を竪穴住居12に切られているため平面形、規模等は不明である。東西方向の長さは1.13m・検出面からの深さは0.26ｍを測る。床面は平らで立ち上がり比較的急である。出土遺物には**196**がある。当遺構の時期は弥・後・Ⅰであろう。（蛯原）

土壙19（第65図）

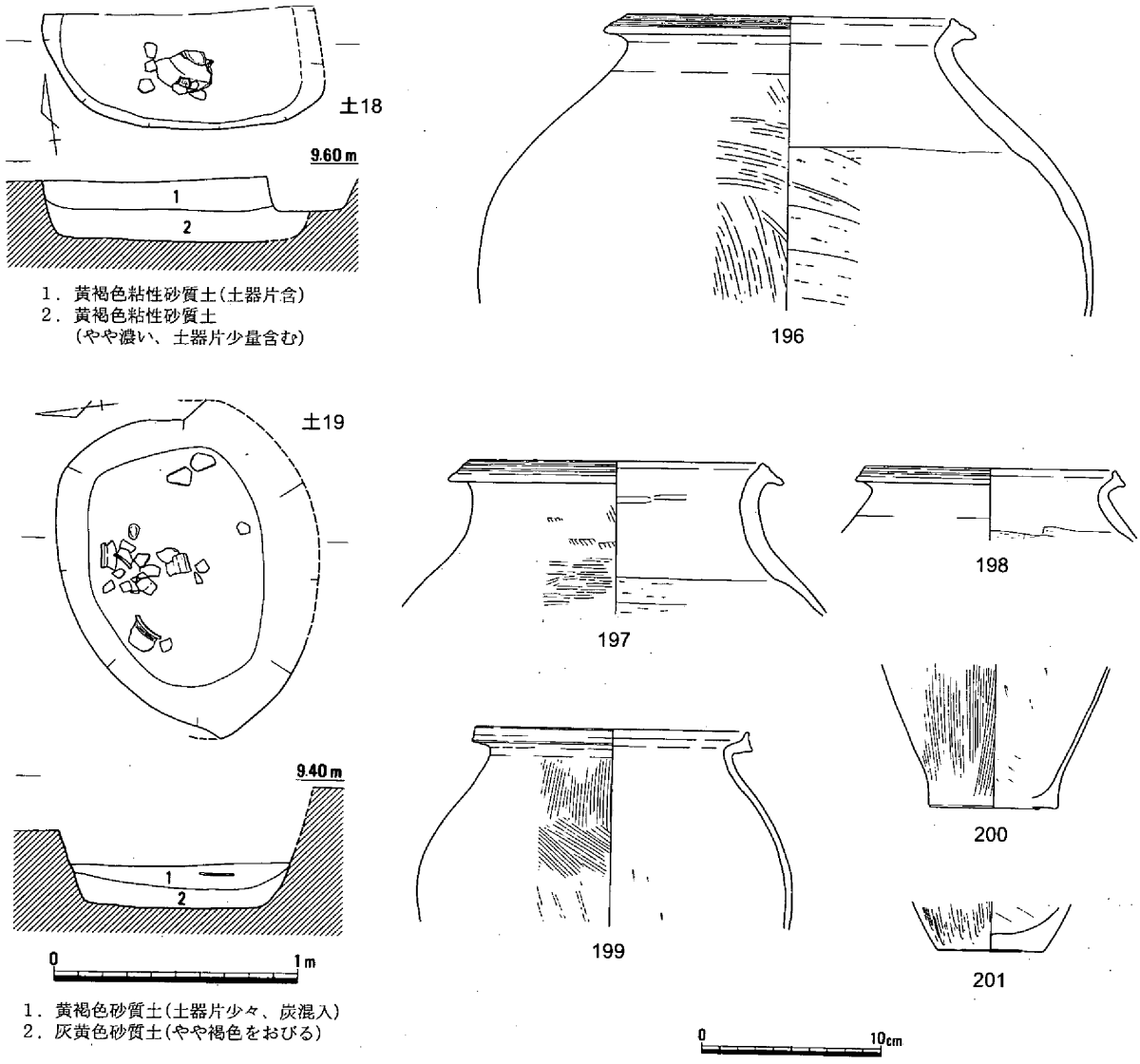
11区の南側において、竪穴住居12及び土壙18に切られた状態で検出した。平面形は楕円形を呈し床面の規模は0.98×0.74ｍを測る。また、床面は平らである。遺物は、弥生土器の壺**197**・甕**198**～**201**が出土した。時期は、弥・後・Ⅰであろう。（蛯原）

土壙20（第66図）

11区の南側において存在した遺構で、竪穴住居12の全掘後に検出した。平面形は1.3×1.19ｍの円



第64図　土壙17・出土遺物（１/30・１/４）



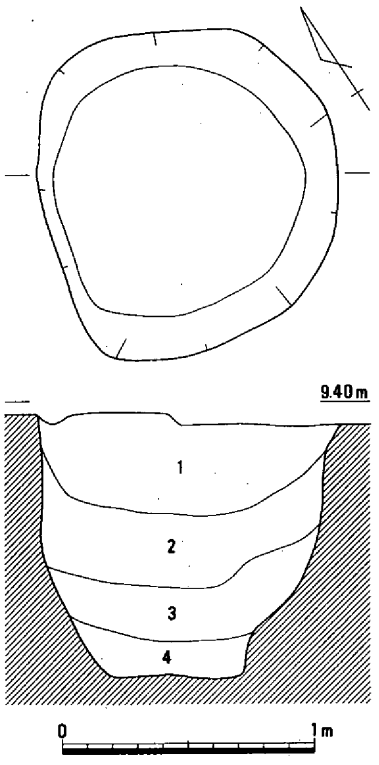
第65図　土壙18・19・出土遺物（１/30・１/４）

形を呈する。断面形は上半分はやや急に立ち上がるものの下部では幾分かすぼまりながら底部へと向かう。検出面からの深さは1.05mを測るが、竪穴住居３の下部に存在したため、本来は現存する以上に深かったことも考えられる。またこの土壙は、その形態と４層に分かれる埋土のうちの第４層付近より湧水のみられたことなどから、井戸として機能していた可能性もある。

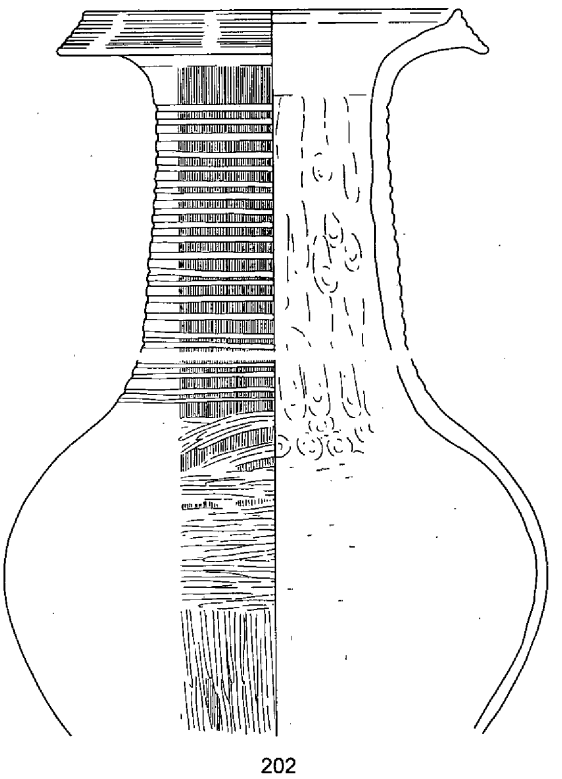
主な出土遺物は弥生土器の長頸壺202、壺204、甕203・205、高杯206～208、鉢209、台付鉢210・211、器台212がある。高杯の脚部にはヘラ描文を施す207と、円形文を施す208がある。なお台付鉢の210・211は同一固体であろうか。これらの遺物の多くが第２層ないしは第３層より出土しており、本来の機能を果たした後に投棄されたことも想定される。当土壙の時期は、出土遺物などから勘案して弥・後・Ⅰと思われる。（蛯原）

土壙21（第67図）

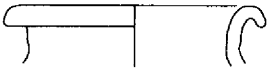
11区の南側で検出した遺構である。南側の一部を土壙20に切られているため規模は不明であるが平面プランは残存部から不整円形と思われる。東西方向の長さは1.17m、深さは0.14mをそれぞれ測る。床面は平らで、東側は急に西側は緩やかに立ち上がる。遺物は甕の底部213・高杯の脚部214がある。214には円形の透かしがある。この遺構の時期は弥・後・Ⅰであろう。（蛯原）

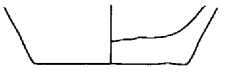


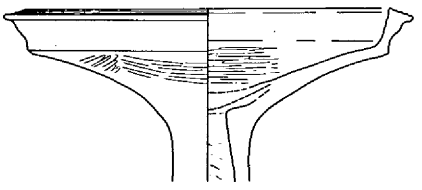
1．黄褐色砂質土
2．褐色砂質土
（土器片・炭を含む）
3．暗褐色粘性砂質土
（土器片・炭を含む）
4．灰色粘質土

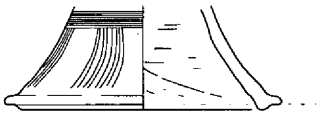

202

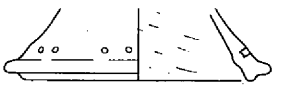
203

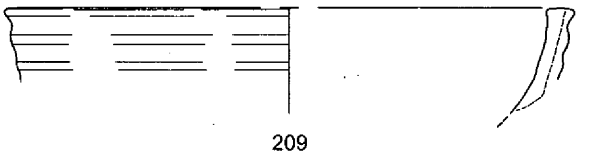

204

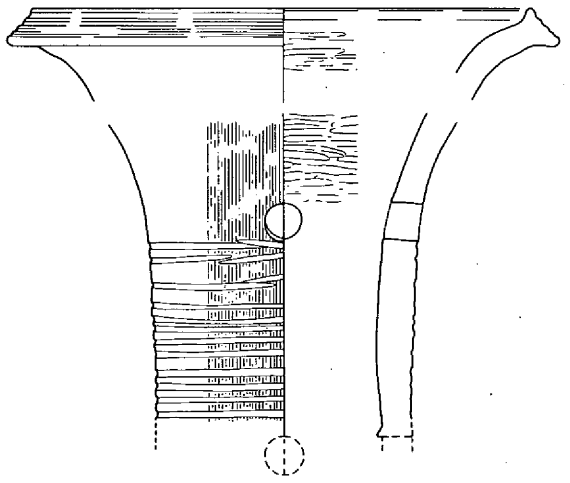

205

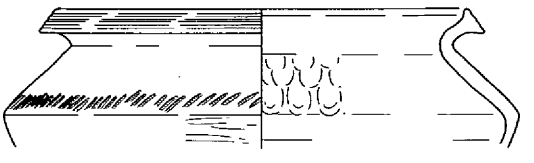

206

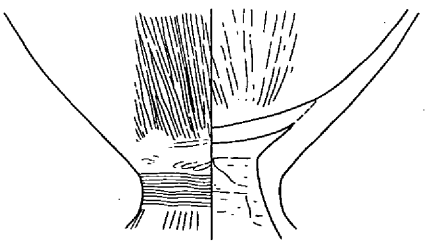

207


208


209

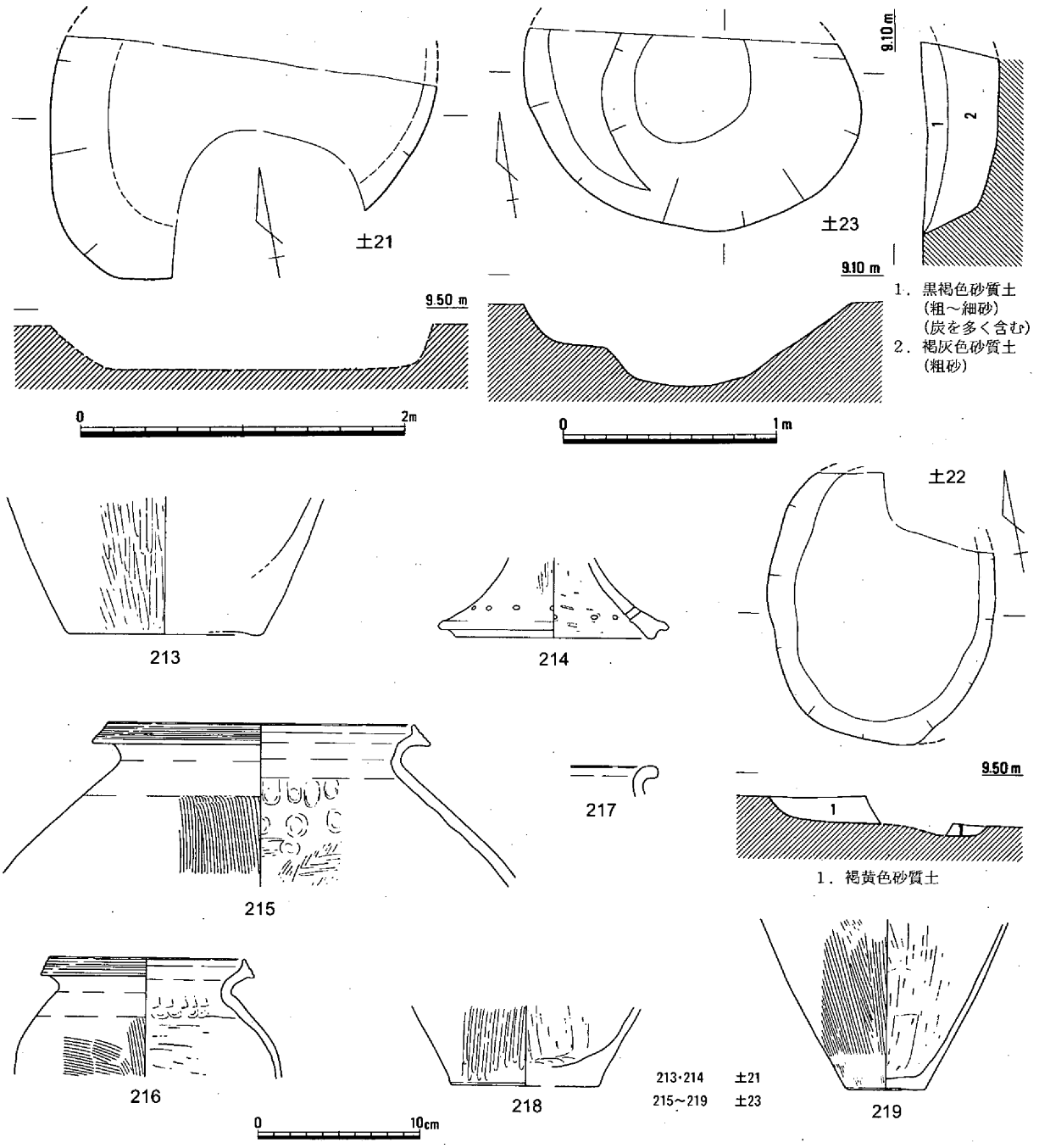

212


210


211

0　10cm

第66図　土壙20・出土遺物（１/30・１/４）



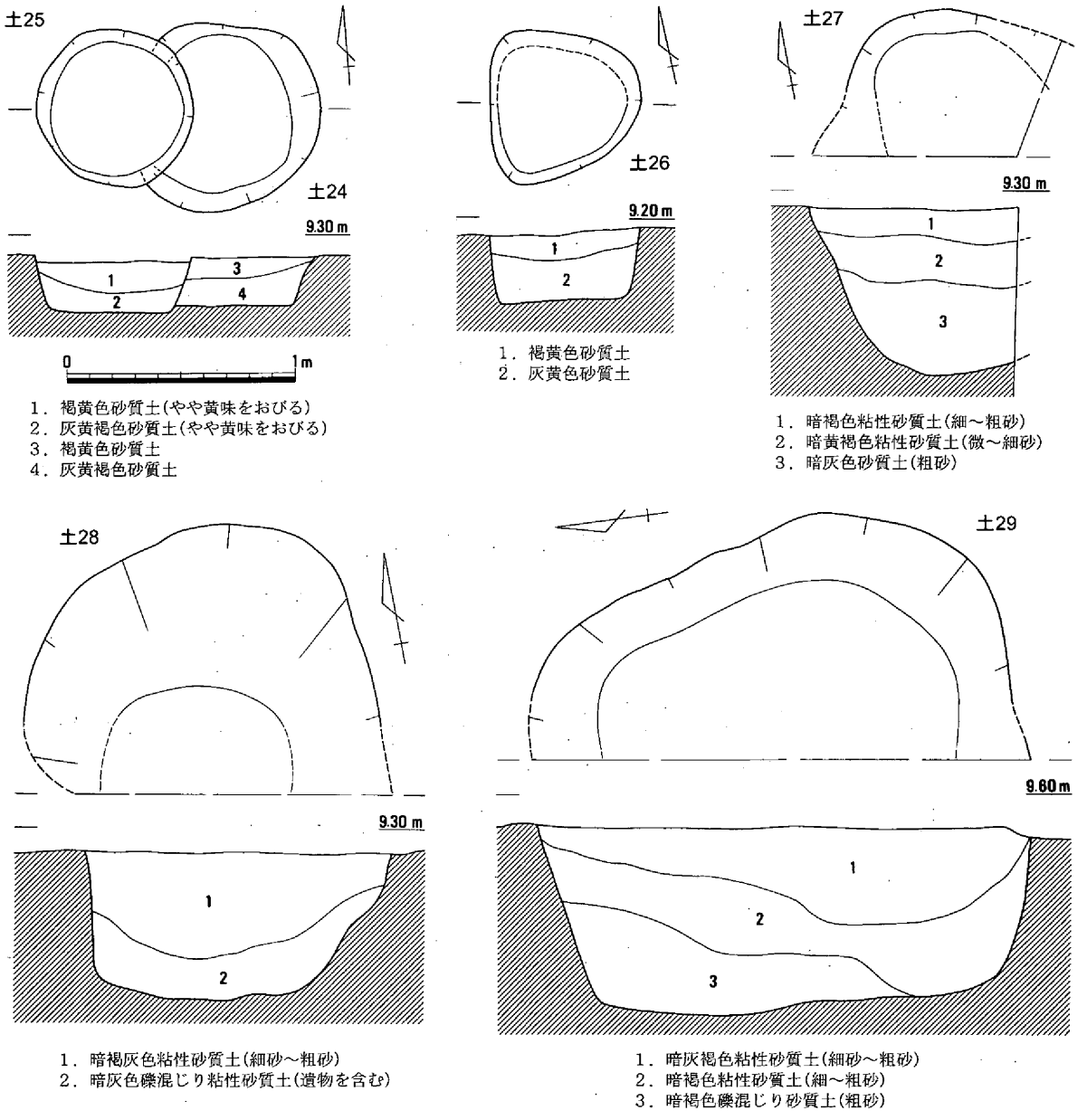
第67図　土壙21～23・出土遺物（１/40・１/30・１/４）

土壙22（第67図）

竪穴住居３と土壙21に切られて存在した遺構である。平面は楕円形を呈し規模は推定で1.26×1.07ｍを測る。検出面からの深さは0.18ｍである。床面は西から東に向けて緩やかに傾斜する。出土遺物は細片のみだが、他の遺構との関係・遺構内の埋土から弥・後・Ⅰと思われる。　（蛯原）

土壙23（第67図）

土壙26に隣接する位置で検出した遺構である。北半分は調査条件の制約により詳らかでないが、残存部より平面形は楕円形を呈すると想定される。残存部の規模は1.26×1.07ｍである。深さは検出面より0.4ｍを測る。床面は丸みを帯び掘り方の西側では二段掘りとなる。また、第１層には多くの炭が含まれていた。出土遺物には甕**215～219**がある。時期は弥・後・Ⅰであろうか。　（蛯原）



第68図　土壙24～29（１/30）

土壙24（第68図）

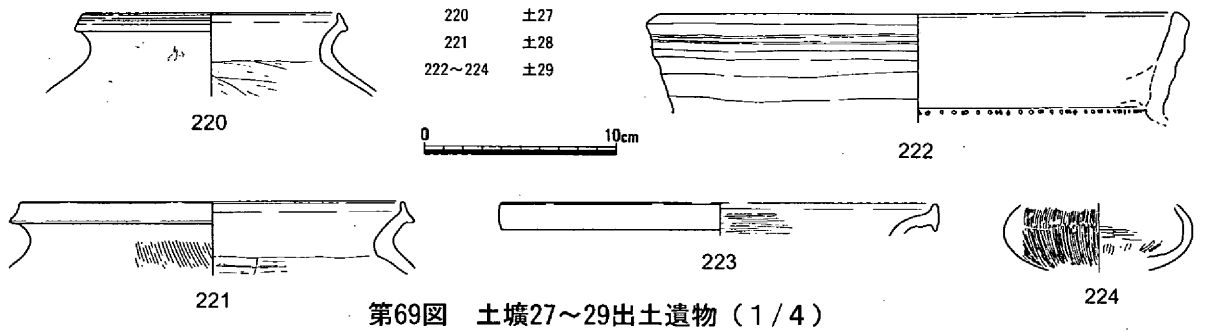
土壙25に切られる形で検出した。平面は円形で残存部の規模は0.82×0.6ｍを測る。出土遺物はなく時期の確定は困難であるが、埋土などから弥・後・Ⅲであろう。（蛯原）

土壙25（第68図）

土壙24の西に位置する遺構である。平面形は円形を呈し、0.69×0.69ｍの規模をもつ。深さは検出面から24cmを測り、床面は平坦である。堆積土は２層に分層できた。出土遺物は皆無で時期は特定しにくいが、埋土や、他の遺構との関係から弥・後・Ⅲと思われる。（蛯原）

土壙26（第68図）

土壙23の南側で検出した遺構である。平面形は不整方形をなし規模は0.65×0.63ｍである。深さは検出面から0.35ｍを測り、平坦な床面をもつ。埋土は２層に分層できるが、堆積はやや水平に近い。出土遺物が皆無なため時期は特定しにくいが、おそらく弥・後・Ⅲであろう。（蛯原）



第69図　土壙27～29出土遺物（１/４）

土壙27（第68・69図）

竪穴住居４の南端部を切る状態で検出した。この遺構は大半が側溝や壁の法面部分にかかる為全体の形状は詳細にしえないが、残存部より不整形のプランをもつと思われる。深さは検出面より0.73mを測り、床面は丸みを帯びる。遺物は甕**220**があり、当遺構の時期は弥・後・Ⅲであろう。　（蛯原）

土壙28（第68・69図）

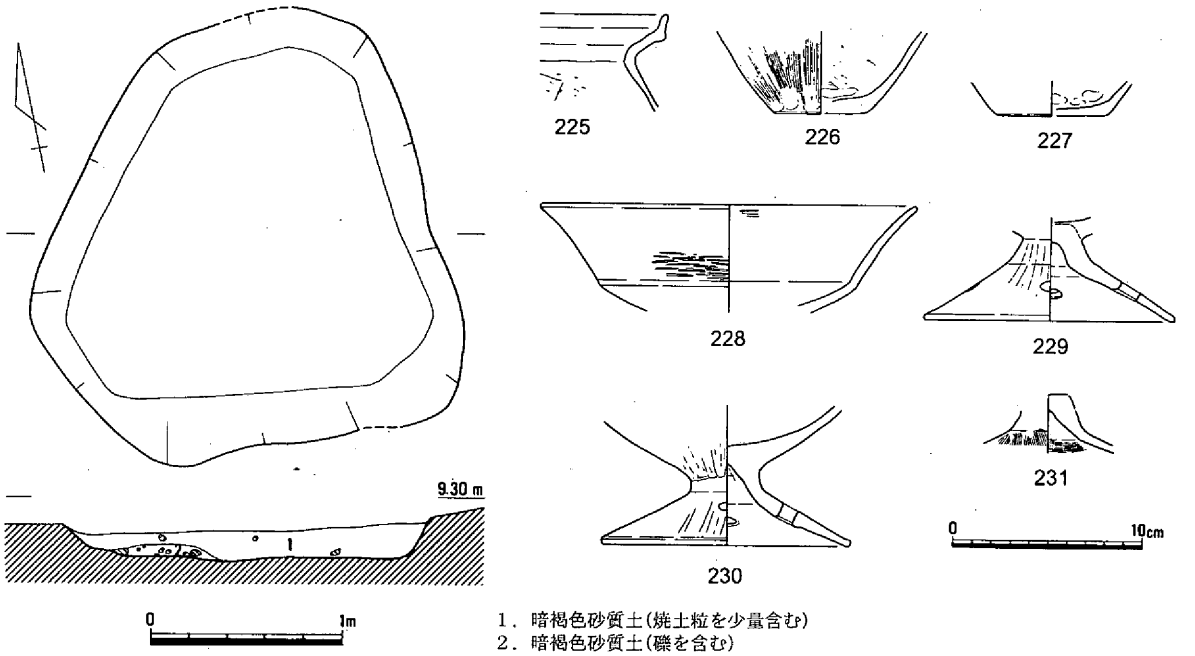
竪穴住居３の南東部分を切る位置にあった遺構である。この遺構の南側は側溝により切られている為全体の規模は不明である。平面は不整円形を呈し東西方向の長さは1.57mである。0.64mの深さをもち、床面及び壁面には凹凸がある。遺物には甕**221**があり、時期は弥・後・Ⅲであろう。　（蛯原）

土壙29（第68・69図）

竪穴住居３の中央部分を切り存在した遺構である。平面形は不整円形をなし南北方向の規模は2.16mである。検出面からの深さは0.82mあり床面は北側が幾分低くなっている。埋土は北側から南側に傾斜して堆積している。遺物には**222**～**224**があり、時期は弥・後・Ⅲと想定される。　（蛯原）

土壙30（第70図）

８区北部に位置し、竪穴住居６の南端を切っている。平面は2.30×2.26mの不正形であり、検出面からの深さは0.20m、底面の標高は8.96mを測る。埋土中から50点ほどの土器小片が出土した。口縁部が外湾気味に長く外傾して立ち上がる高杯**228**から時期は弥・後・Ⅳと考えられる。　（物部）



第70図　土壙30・出土遺物（１/40・１/４）

（４）溝

溝１・２（第71図）

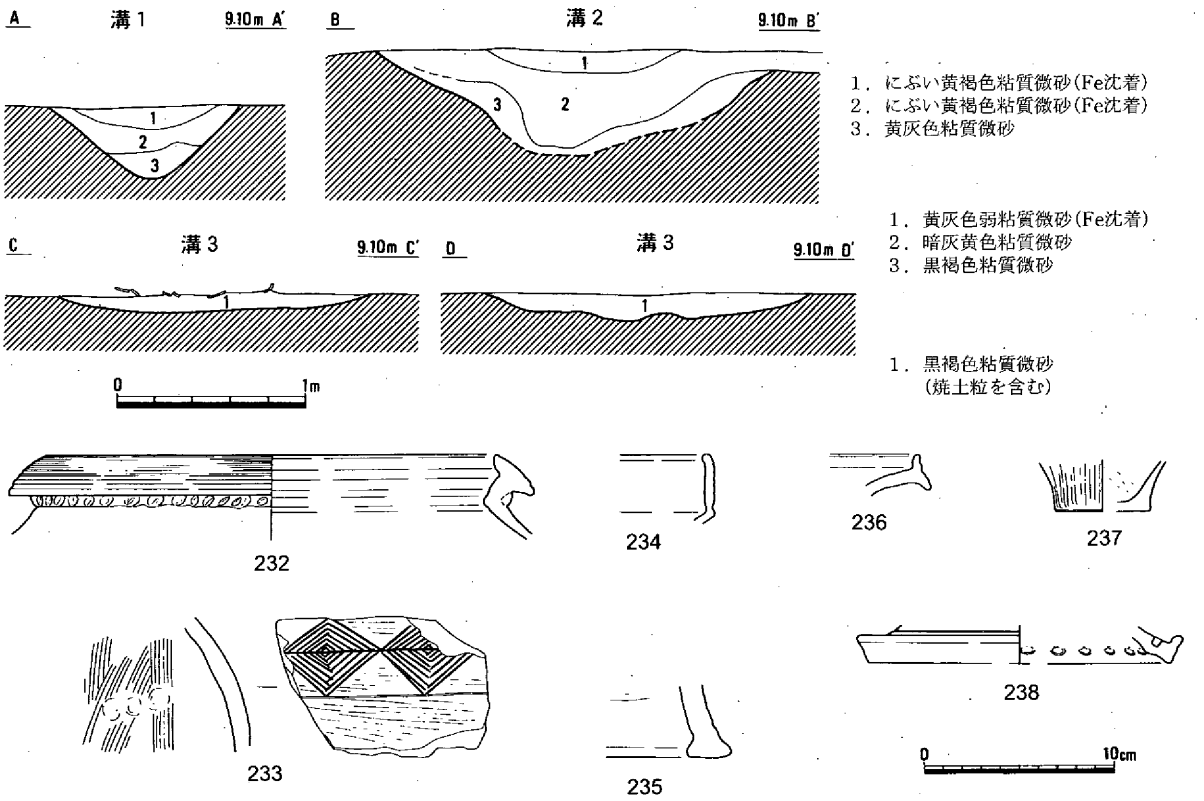
８区南半で検出された溝１と５区南半で検出された溝２は、位置関係から一連の溝と考えられる。三須畠田遺跡と三須河原遺跡の両微高地の間にある浅い低位部に立地する。溝幅は、検出面の高さの違いを考慮すると1.5m前後と推定される。断面形は逆三角形を呈する。平面においては、両溝は逆方向に僅かに湾曲する。溝２では、攻撃面にあたる北岸上部が外方へ広がっている。遺物は、溝１・２とも灰白色を呈する土器小片が少量出土した。**233**は甕か壺の肩部、**234**は高杯、**235**は回転台脚部の可能性がある。溝１・２の時期は土器の特徴から弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

溝３（第71～73図）

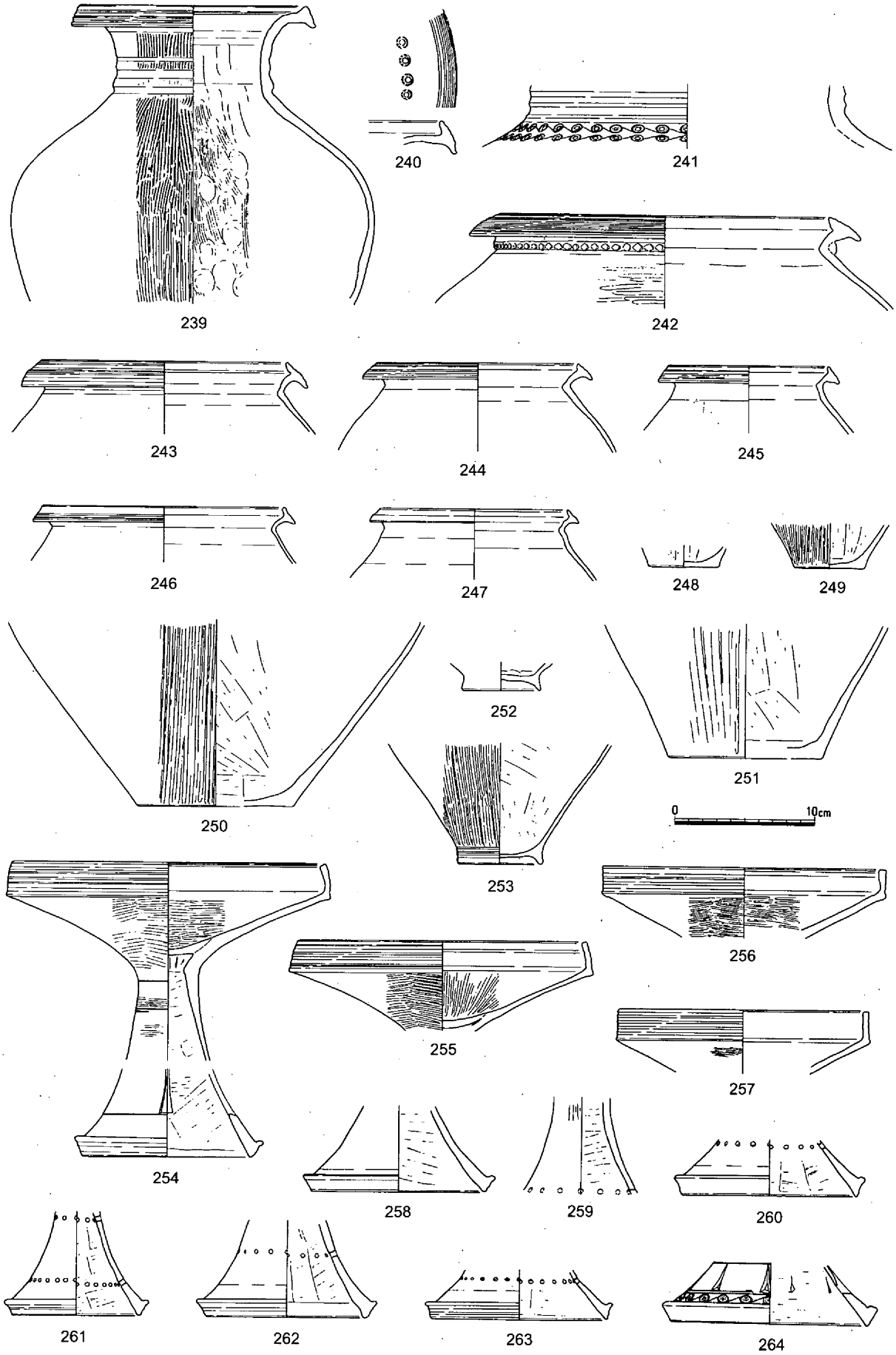
５区中央に位置し、三須畠田遺跡の微高地南端部から浅い低位部にかけて立地する。幅1.70m、検出面から深さ0.12mの浅いたわみ状の溝である。主軸はN-31°-E。出土遺物は多く、約７mの間隔をあけ、２箇所（第39図の斜線部）に集中していた。それぞれを比較したが時期、器種とも差はなかったので、一括して掲載した。大形の壺**241**の肩部には竹管文を斜線で繋ぐ文様が施されている。**276**は回転台と考えられる。**227**は土壙８で出土した把手？に類似する。**278**は器種不明。**Ｃ６・７**は表面が剥離した分銅形土製品である。溝の時期は弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

溝４（第74図）

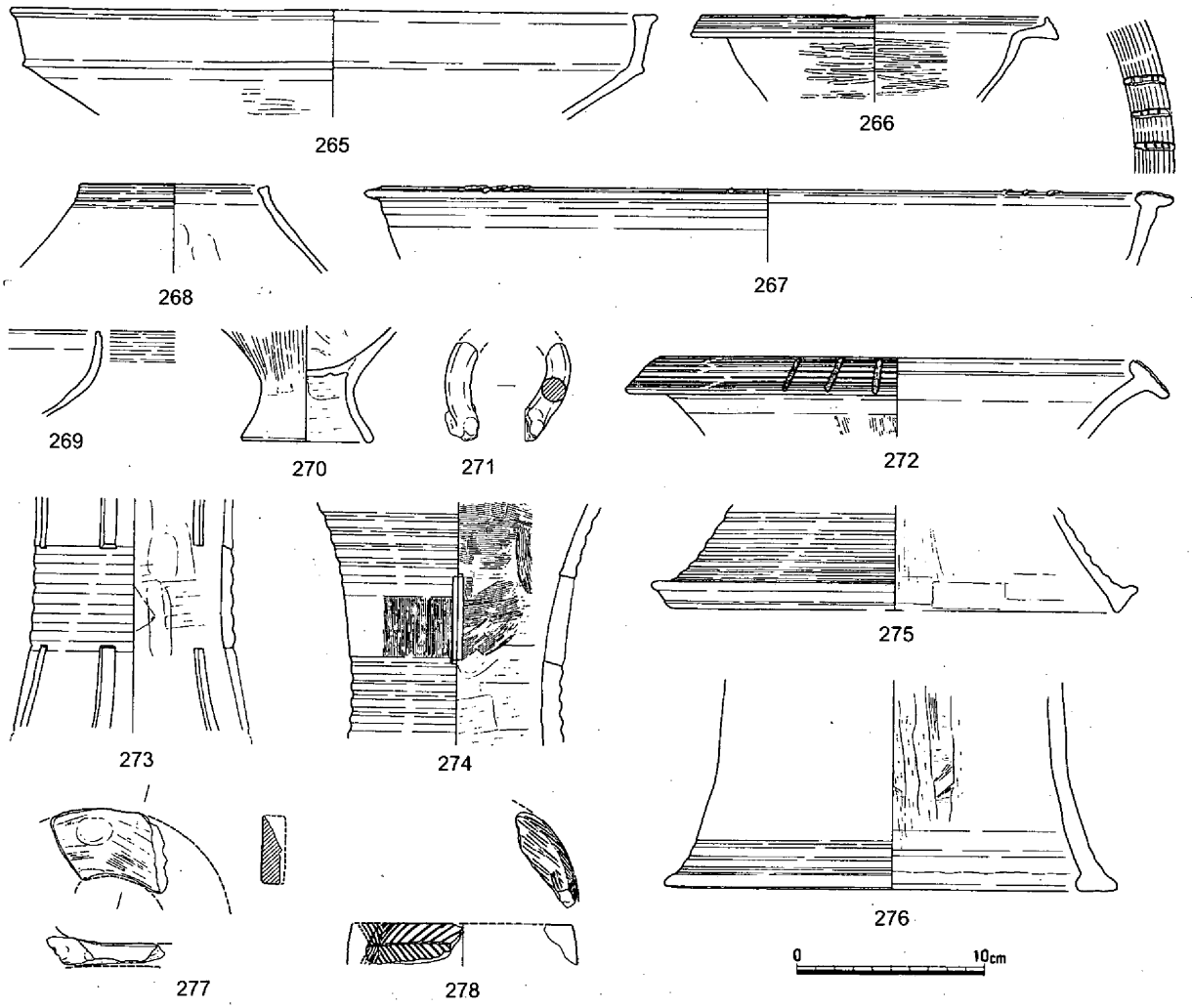
３区の北端に位置する。東部を溝９に切られ、それより東に検出されなかったので、あるいは土壙かもしれない。幅0.70m、深さ0.43m。ほぼ東西に主軸を持つ。埋土上層より、一括投棄されたような状態で土器が集中して出土した。**279**の壺はほぼ完形に復元された。それら土器の形態から時期は弥・中・Ⅲと考えられる。（物部）

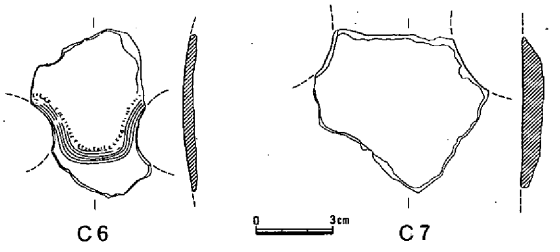


第71図　溝１～３・出土遺物（１/40・１/４）　232～235 溝１　236～238 溝２



第72図　溝３出土遺物１（１/４）





第73図　溝３出土遺物２（１/４・１/３）

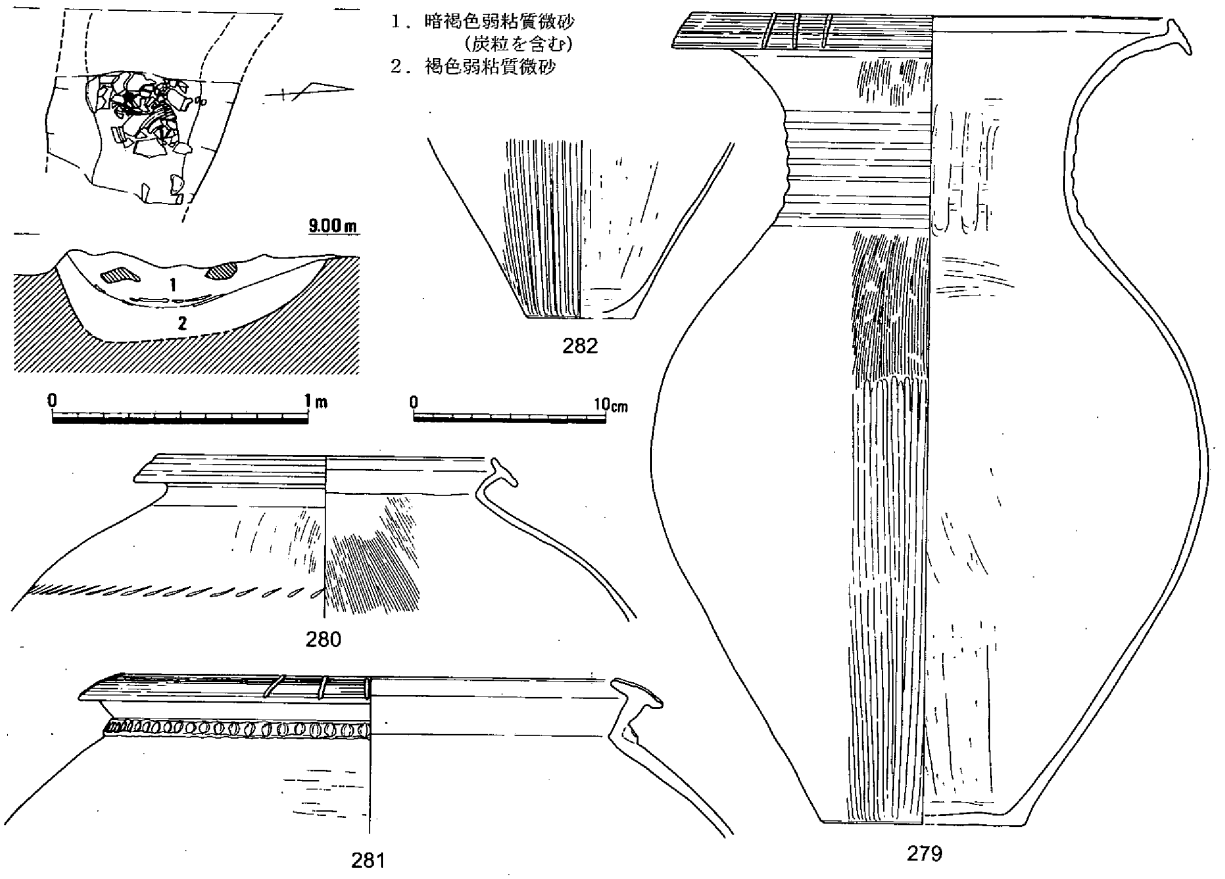
溝５（第75図）

３区南半、溝１の南約３ｍに位置し、浅い低位部に立地する。検出面での幅0.7ｍ前後、深さ0.14ｍを測る。出土土器は小片約20点。大半が灰白色を呈するが橙色のものもある。弥生後期か。（物部）

溝６・７・８・９（第75～79図　図版17）

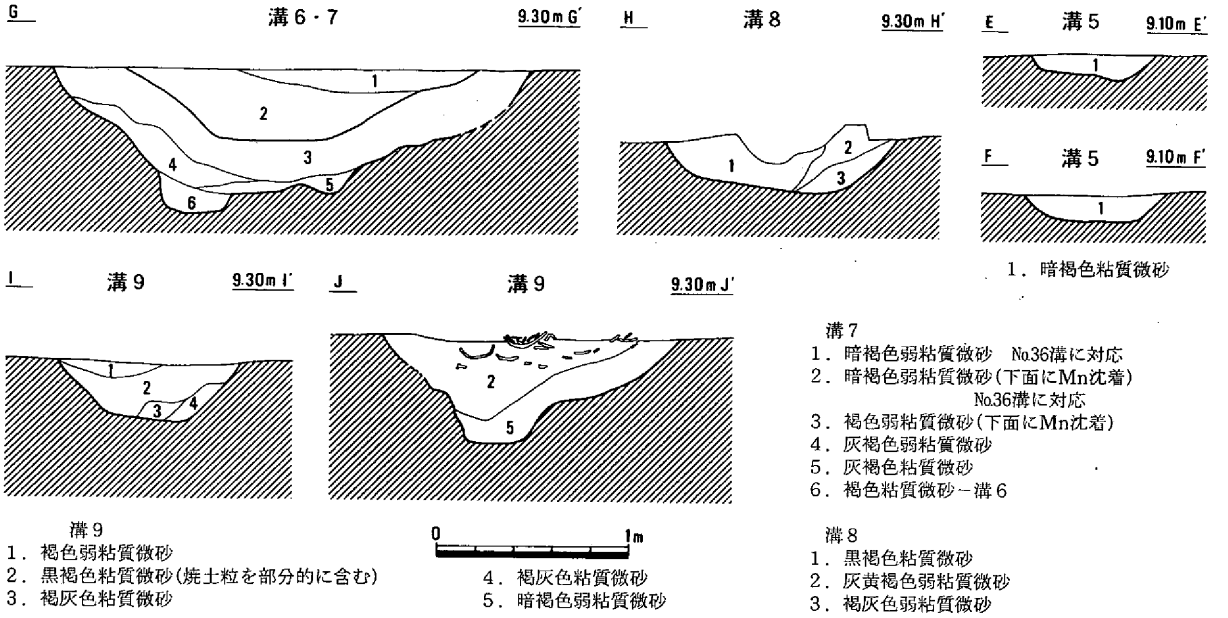
溝６は溝７に大部分を削平され、溝７の西側底面からのり面にかけて長さ4.5ｍにわたって検出された。残存していたのは溝の底部のみである。後述する一連の溝７・８・９と同様の流路を持っていた可能性がある。出土遺物は土器小片６点。すべて灰白色を呈し、弥・中・Ⅲの時期である。

溝７・８・９は一体の溝である。４区・３区北半・５区北半に位置し、微高地上からその南端および低位部にかけて立地する。溝９は溝７・８より底面の標高が20cm高く、溝７・８が本流、溝９は支流と考えられる。溝７の北方は総社市教委が平成３年度に調査した三須畠田遺跡Ａ地区溝１につながる。地形から溝７から溝８への水の流れが推定される。溝９はその南半部で基盤層下の礫層が上がっており、溝７へ流れ込んでいた可能性がある。溝７の上層からは360高杯や361甕など須恵器が３片出土していることから、この溝の埋没時期は６世紀後半代に求められる。溝６下層および溝８からは弥・中・Ⅲ、弥・後・Ⅰ、弥・後・Ⅲの各時期の遺物がみられ、溝の開削時期を確実につかむこと

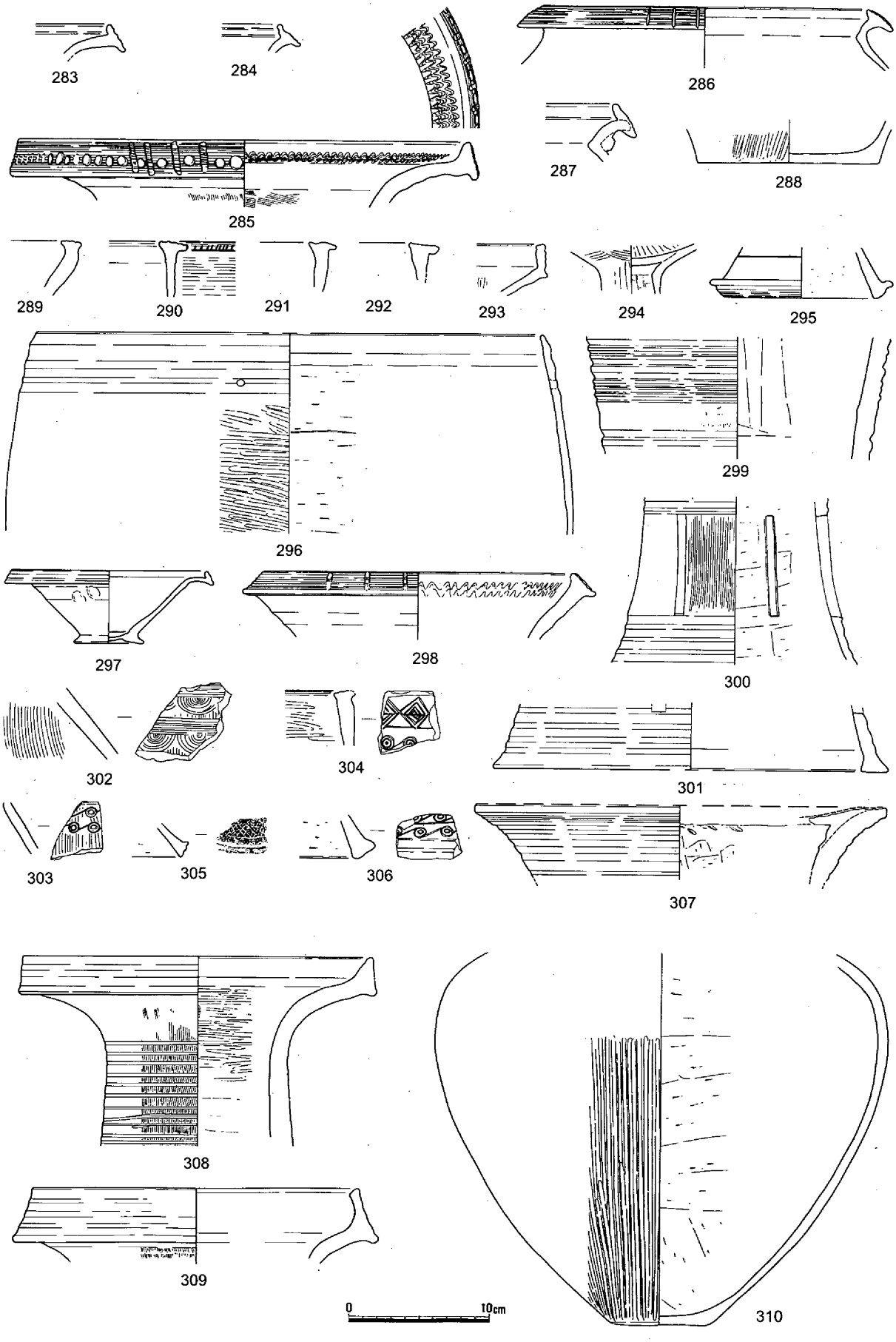


第74図　溝４・出土遺物（１/30・１/４）

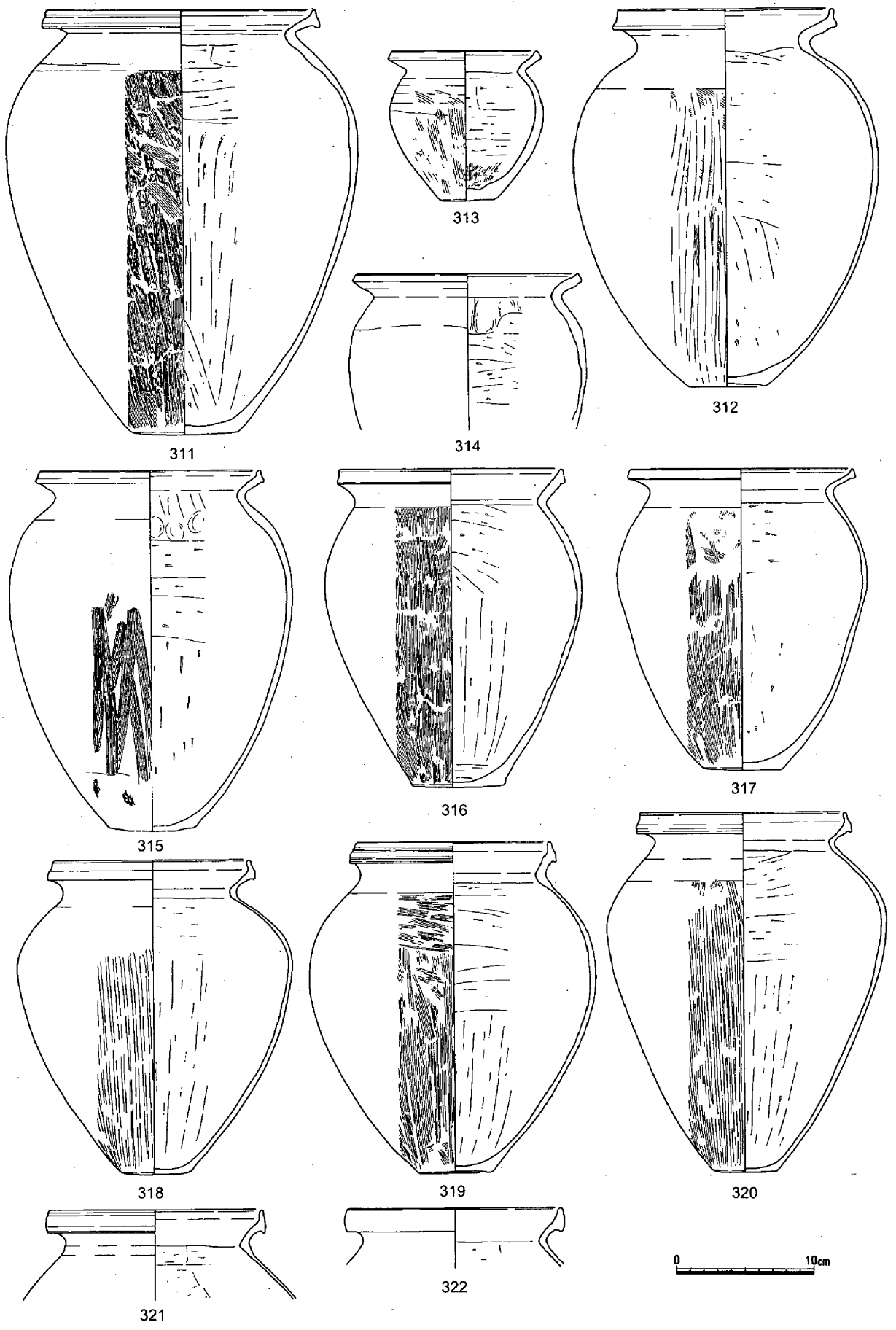
ができなかったが、量的に弥・後・Ⅲが多いことから、この時期に求めたい。溝９には溝を埋め尽くすように４箇所に大量の土器が投棄されていた。４箇所とも時期・器種に違いはなく、９割は弥・後・Ⅲ、ついで弥・中・Ⅲ、極少量の弥・後・Ⅰ～Ⅱ、そして上層に弥・後・Ⅳ、須恵器が数点みられた。溝９は弥・後・Ⅲの時期に機能を停止した可能性が強い。283～307は弥・中・Ⅲの時期の混入土器である。296は内面ヘラケズリで器壁の薄い鉢で類例のないもの。307は回転台形土器である。　（物部）



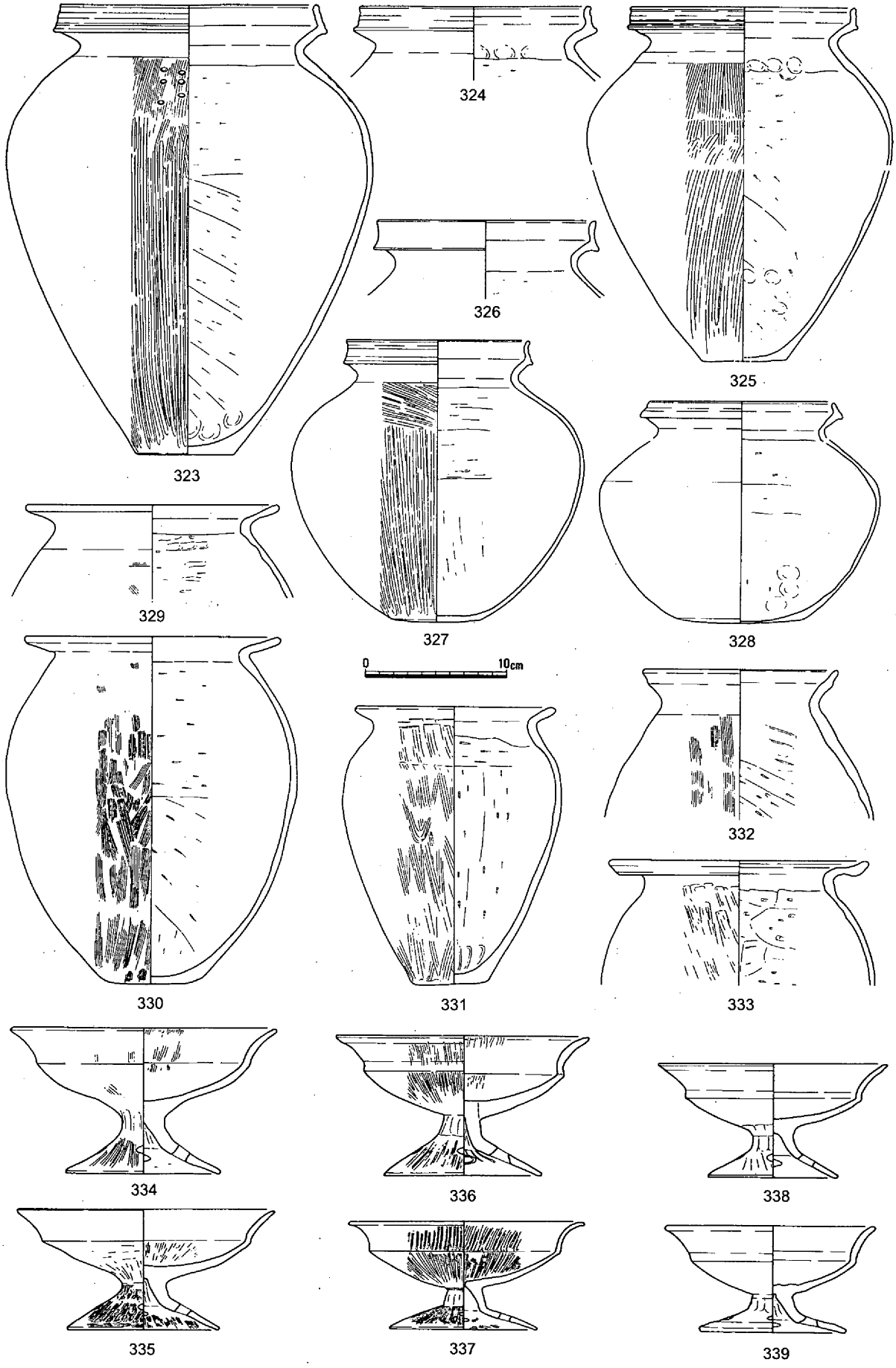
第75図　溝５～９（１/40）



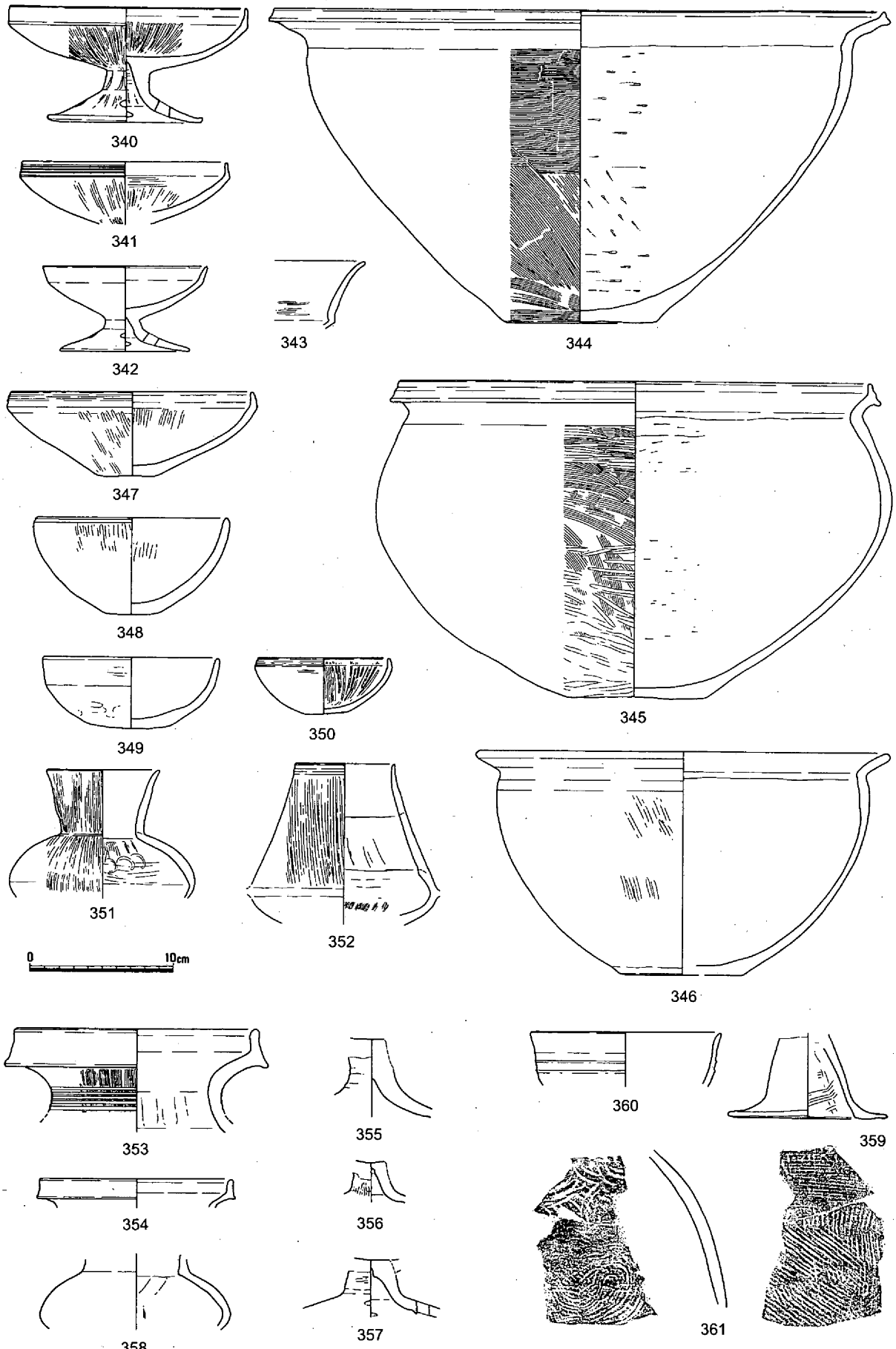
第76図　溝９出土遺物１（１/４）



第77図　溝９出土遺物２（１/４）

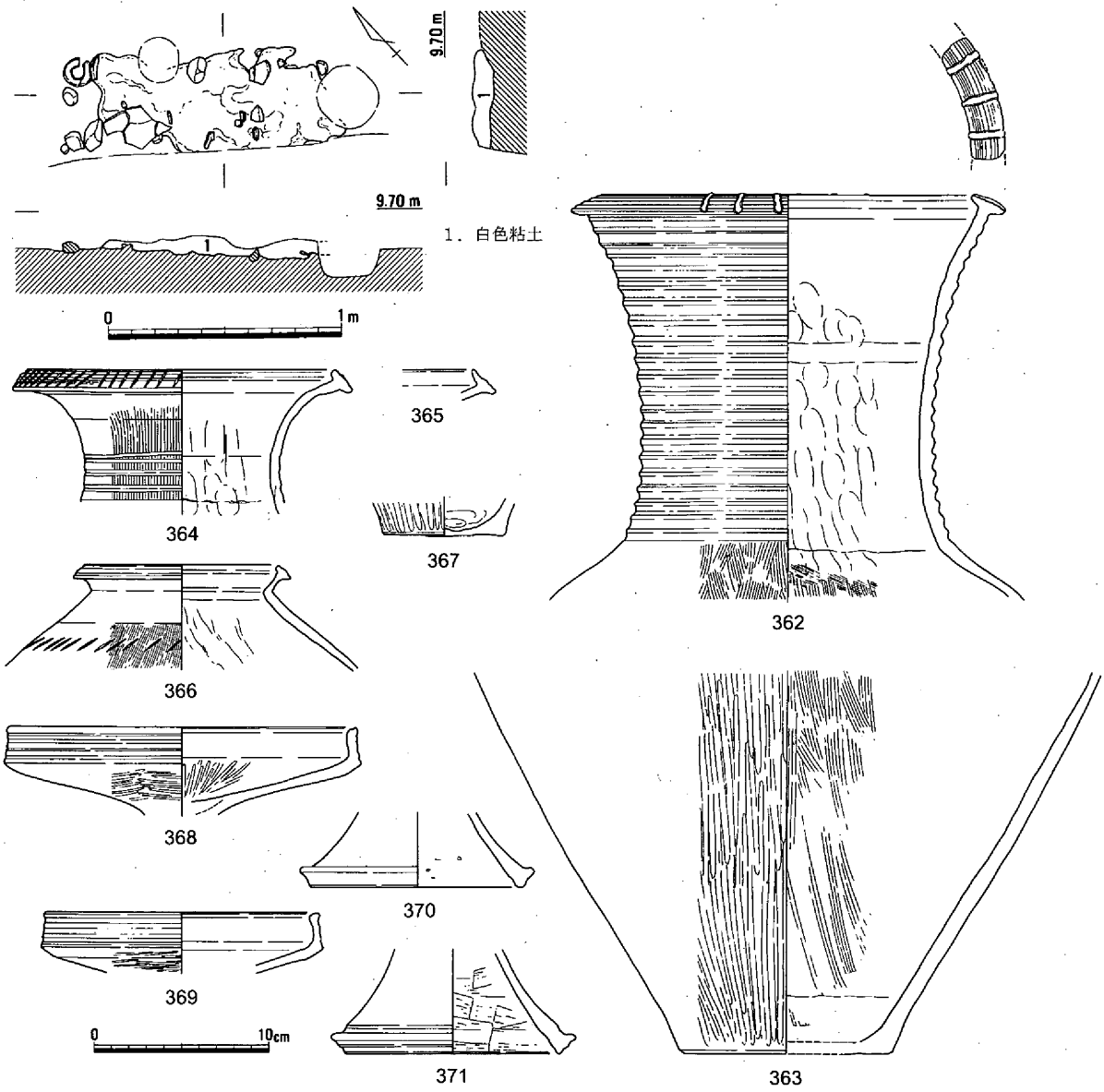


第78図　溝９出土遺物３（1/4）



第79図　溝９・７出土遺物４（１/４）

353～361　溝７



第80図　粘土塊・出土遺物（１/30・１/４）

（５）粘土塊（第80図　図版12）

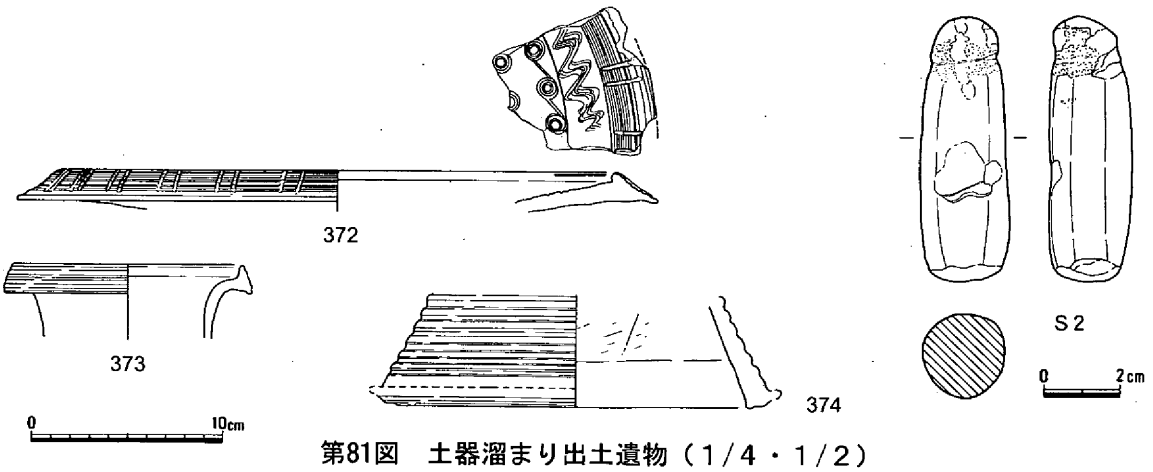
９区北部に位置し、竪穴住居８に一部切られる。大きさは、長さ1.05m、幅0.43m、厚さ0.09mを測る白色粘土で、土器の破片をかみ込んでいた。僅かな窪地に廃棄されたものと考えられた。時期は弥・中・Ⅲ。**362**壺、**366**甕、**369**高杯と粘土の胎土分析を行った。（第８章第３節）　（物部）

（６）土器溜まり（第81図）

土壙21の北側に土器の散布が見られる箇所が存在した。散布範囲は約３×１ｍを測る。出土遺物には壺**372**・**373**、器台**374**がある。壺**372**には口縁部に棒状浮文が、内面には波状文・竹管文・ヘラ描文が施されている。時期は弥・中・Ⅲであろう。　（蛯原）

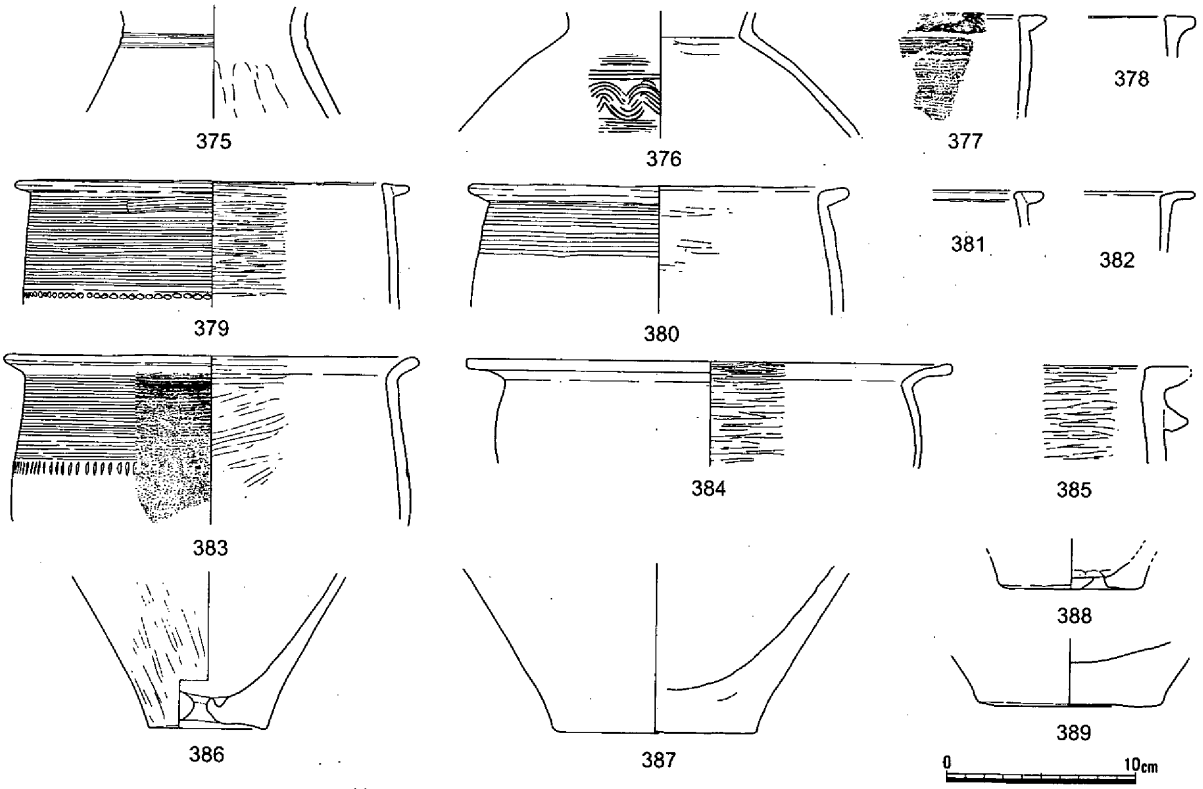
（７）遺構に伴わない遺物（第82～84図　図版18）

土器、土製品、石器がある。後・Ⅰ～Ⅲの時期の土器を紙面の都合上ほとんど割愛した。**375**・**376**は広口壺で、**375**は頸部に２条のヘラ描沈線、**376**は肩部に平行櫛描文と波状櫛描文を施す。**377**～**389**は赤褐色を呈する甕で、口縁部は倒「Ｌ」字形のもの**377**～**381**と水平またはやや上方に折り曲げたもの**382**～**384**がある。体部上半の沈線はすべて櫛描。**385**は甕か鉢で、口縁下に貼付突帯が付く。以

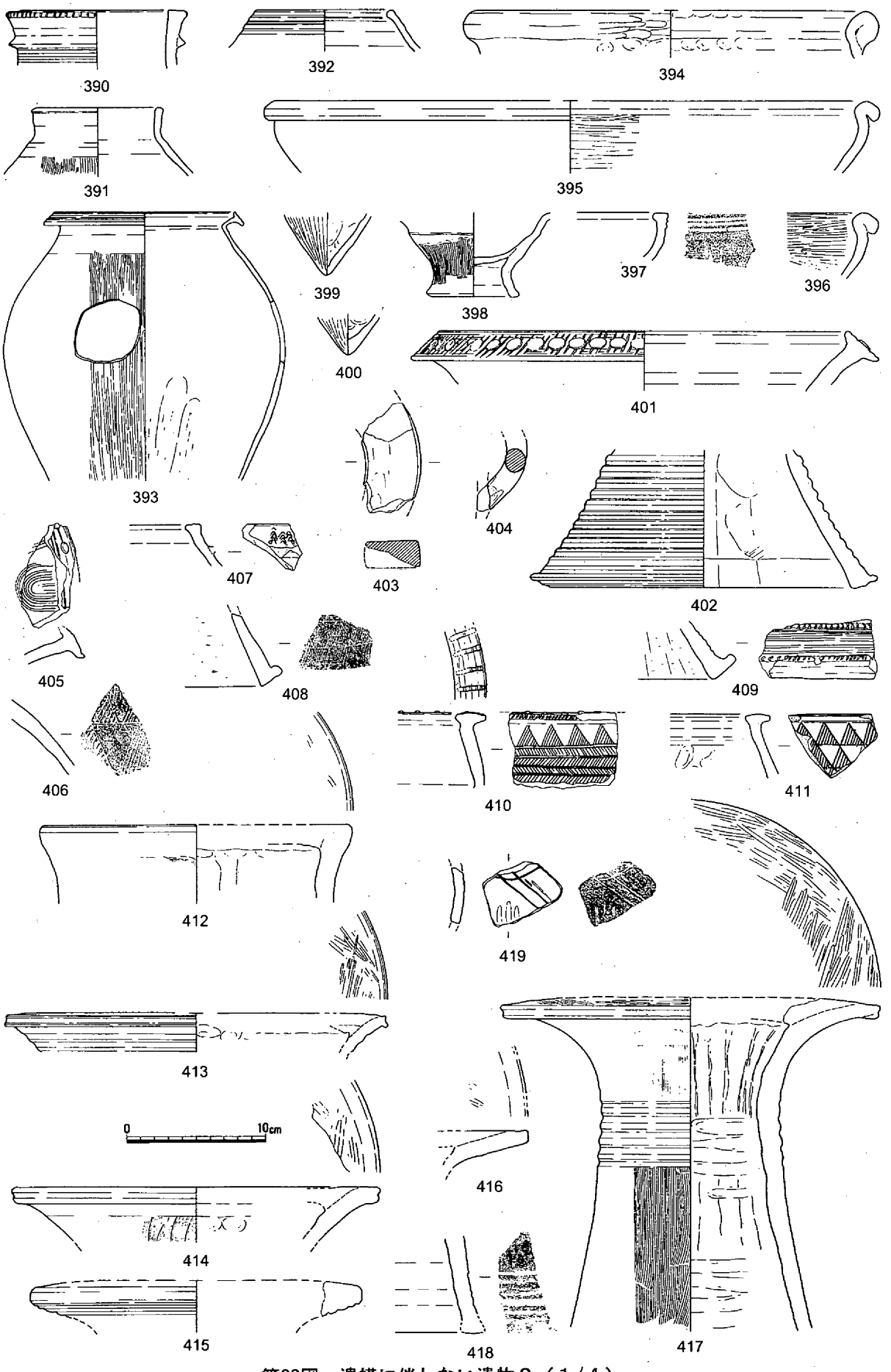


第81図　土器溜まり出土遺物（１/４・１/２）

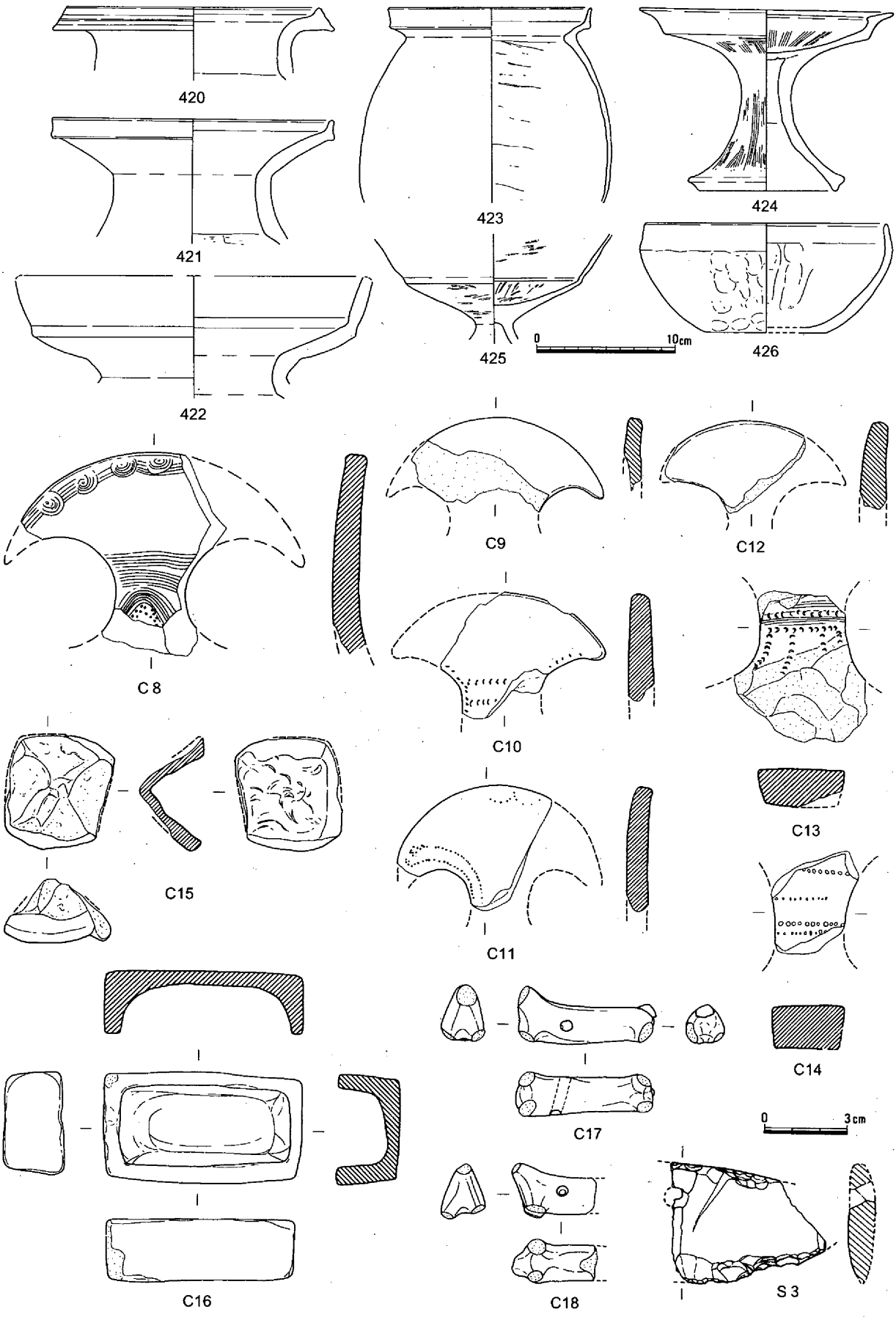
上は弥・前・Ⅱ～弥・中・Ⅱの土器で、９割以上が８・９・11区の微高地上から出土した。390～419は灰白色を呈し、砂粒の少ない土器で弥・中・Ⅲの時期に比定できる。393甕体部には直径４cmの穿孔がある。394～396は口縁部が玉縁状の鉢、399・400は外面に丁寧なヘラミガキを施した尖底で小形の鉢。把手には断面円形404と長方形403がある。施文も各種ある。412～417は回転台形土器。上面外縁部が外方へ大きく拡張する413～417と拡張しない412がある。上面径は22～30cm。器台としての機能が考えられる。413～417は11区から出土した。421～423・425・426は７区から出土し、弥・後・Ⅳに属す。Ｃ８～14は分銅形土製品。C13・14は分厚く、黄橙色を呈する。それ以外は灰白色を呈し、弥・中・Ⅲ～後・Ⅰの範疇に入るものと考えられる。C15は不明土製品。上面は剥離し、内面は押圧が著しい。C16は箱形土製品。C17・18は動物形土製品で尻尾の形状から鹿の可能性が高い。頭部と四肢を欠損し、胸部に穴を通している。以上の土製品の胎土は弥・中・Ⅲの土器と類似している。C16～18は11区から出土。Ｓ３は緑色片岩製の石包丁である。　（物部）



第82図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第83図　遺構に伴わない遺物２（１/４）



第84図　遺構に伴わない遺物３（１/４・１/２）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

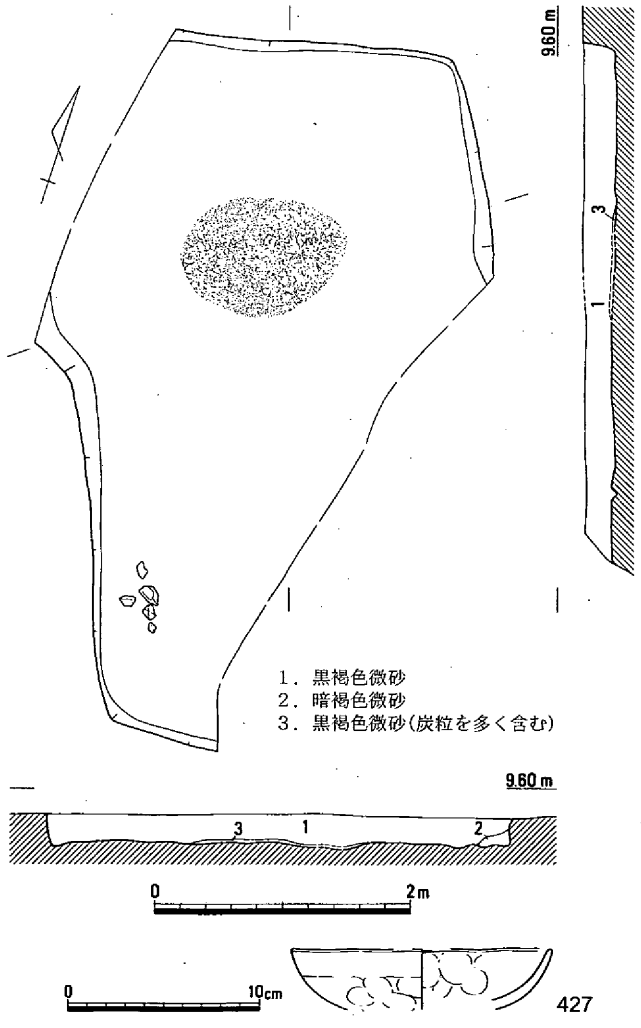
（１）竪穴住居

竪穴住居９（第85図）

８区南端部に位置し、竪穴住居２および土壙11の上部を切っている。また、南西部は現代の攪乱により削平され、北西部は調査区外になる。5.60×3.2～3.45m以上の北西部がやや張り出すような不正長方形を呈すると考えられる。検出面から底面までの深さは約20cm、底面の標高は9.18mを測る。壁体溝や柱穴は検出されなかった。貼床および整地土もなく、底面がそのまま床面となる。床面上には南西部に５～10cm大の小礫５点と中央部やや北寄りに1.2×0.8mの範囲に炭の散布が見られた。出土遺物は土器小片のみであり、ほとんどは弥・後・Ⅲ～Ⅳの時期のものである。そのうち何点かは竪穴住居２出土土器との接合が確認され、下層の遺構に伴う土器が混入しているものと考えられる。**427**は内外に押圧、ナデ調整が見られる土師器の鉢である。時期は古墳時代前期と思われる。　（物部）

竪穴住居10（第86図　図版13・18）

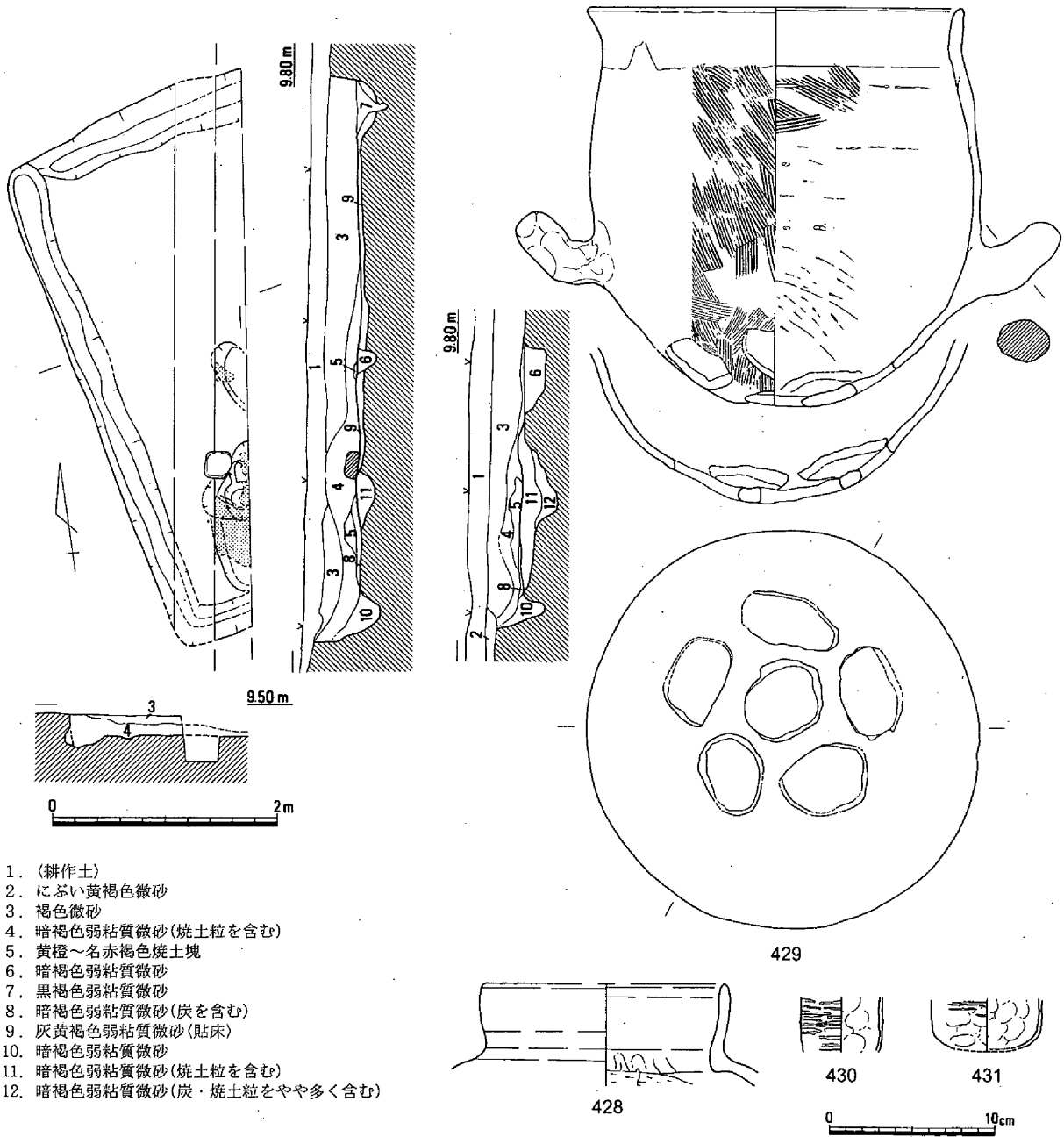
７区の南東隅に位置する。東側２/３は調査区外になる。平面形は4.34×2.0m以上の方形を呈し、検出面からの深さは約33cm、床面の標高は9.21mを測る。柱穴は確認されなかった。灰黄褐色の貼り床が見られる。住居の南西隅からやや東に寄った所に比較的大きな焼土塊が集中する。竈の残骸と考えられる。焼土塊を取り除くと炭粒を含む平らな床面があり、その面に焼土面は確認されなかったので、竈本体はこのすぐ東側の調査区外に在ると考えられる。また、焼土塊の北に接して被熱した四角い石が床着であり、使用痕などが見られないことから竈を構成する石材であった可能性がある。焼土塊下の床面下には深さ30cm程度の不正形な浅い土壙が確認された。埋土には焼土粒や炭粒を含んでいる。出土遺物には、口縁部が内湾気味に垂直に立ち上がる壺**428**、ほぼ完形に復元された甑**429**、小形で非常に器壁の薄い製塩土器**430**・**431**がある。その他須恵器の細片が２点ある。いずれも埋土中からの出土であり、**429**の甑片は北西部から一括して出土し、住居の埋没過程に投棄されたものと思われる。この住居の時期は、甑や製塩土器の形態から古・中・Ⅱと考えられる。また、壁体溝より、２cm大の黄色粘土塊が検出され、甑**429**とともに胎土分析を行った。　（物部）



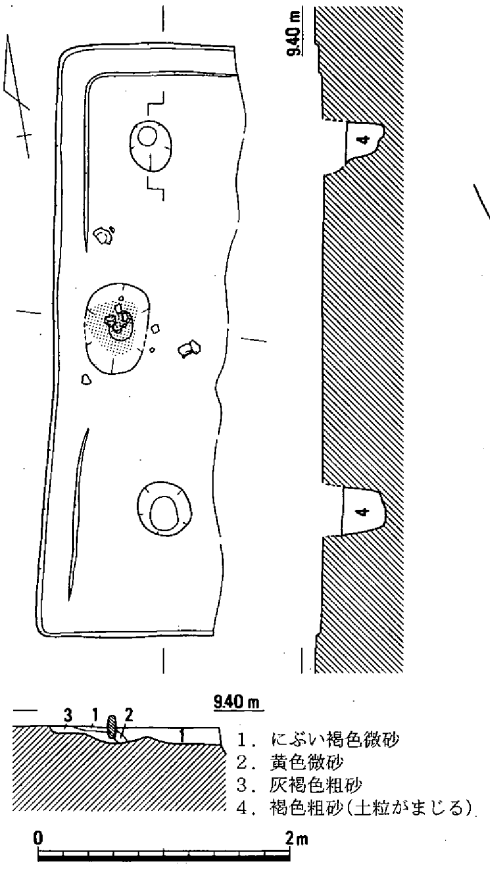
第85図　竪穴住居９・出土遺物（１/60・１/４）

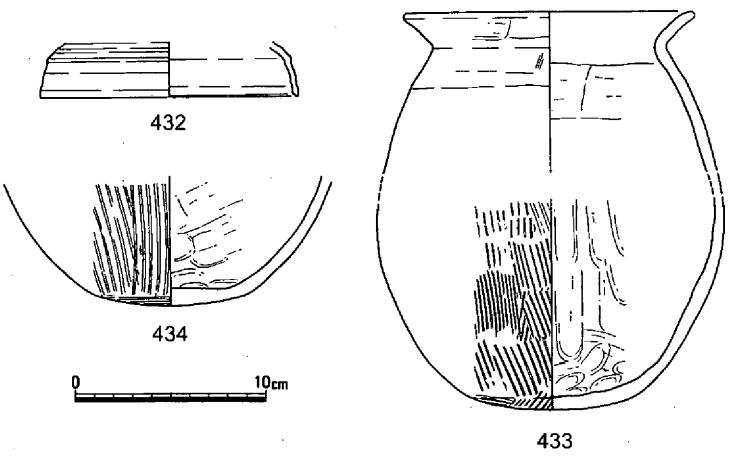
竪穴住居11（第87図）

７区の北半部、竪穴住居10の北約20mに位置する。住居の東半分以上を現代の攪乱によって削平されている。平面形は4.60×1.4m以上の方形を呈し、検出面からの深さは0.1m、床面標高は9.24mを測る。壁体溝はない。壁から20cm前後内側に僅かな段があり、その内側が２cmほど低くなっている。基盤層が粗砂のため、柱穴の確認は難航したが、壁に近い位置に２箇所、土混じりの粗砂が埋土の柱穴らしきものが確認された。そして、住居西辺中央に全体がよく焼けた浅い窪みと、その中央に被熱した支柱石が立った状態で検出された。支柱石はその根本を粘土で固めている。竈の痕跡と考えられる。出土遺物は少量である。**432**は須恵器杯蓋、**433・434**は土師器の甕で、外面に粗いハケメ、内面はヘラケズリ後ユビナデが見られる。**432・434**は竈内の窪みから、**434**は床面から出土した。それらの土器の特徴から住居の時期は古・中・Ⅱ古相と考えられる。（物部）



第86図　竪穴住居10・出土遺物（１/60・１/４）





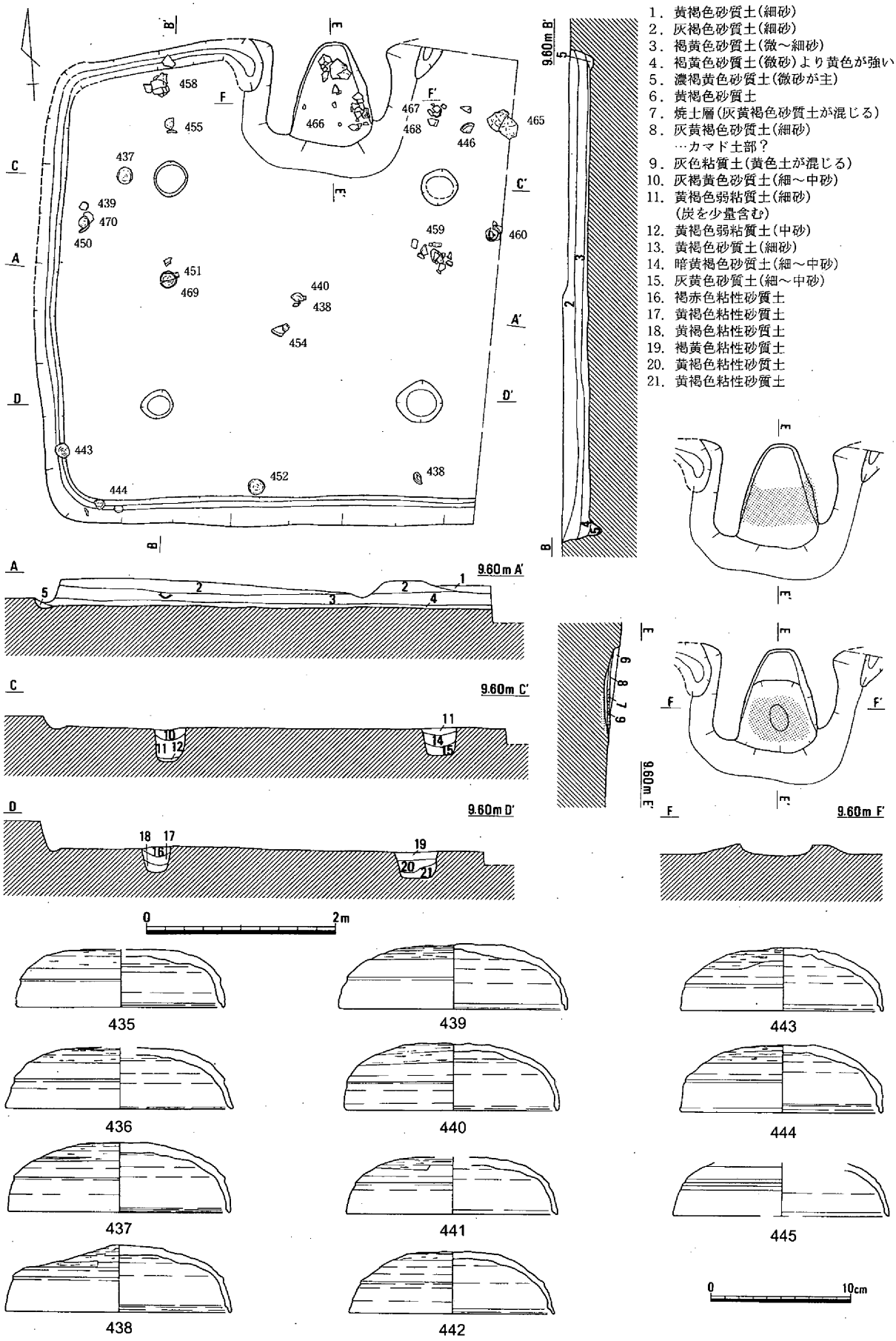
第87図　竪穴住居11・出土遺物（１/60・１/４）

竪穴住居12（第88～90図　図版13・19）

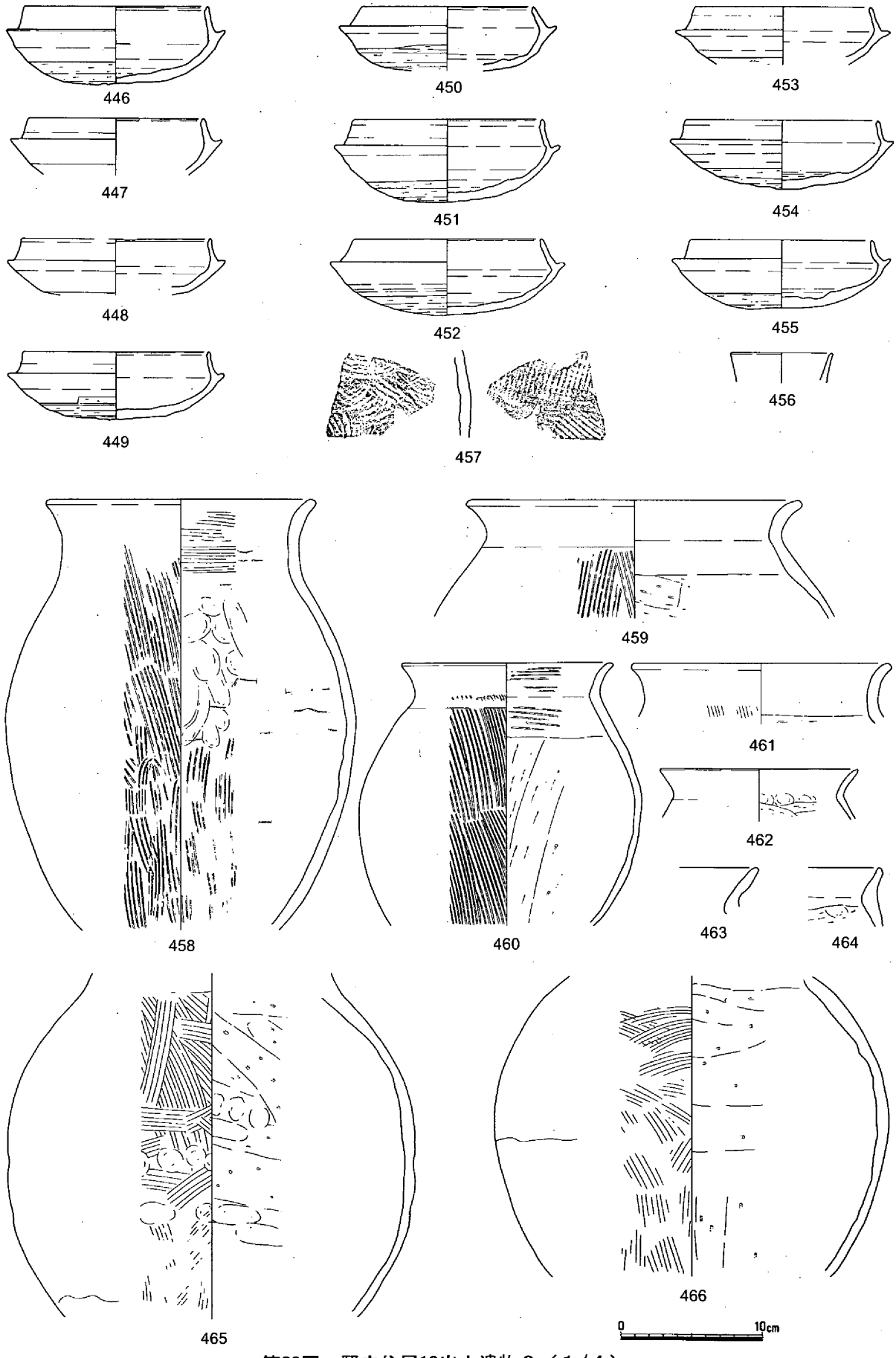
竪穴住居20に切られる状態で検出した。平面プランは方形をなし、南北5.26m、東西は残存部のみで4.92mをそれぞれ測る。検出面からの深さは0.28mで、標高9.02mの床面の周囲には幅0.2m、深さ0.15mの壁体溝を巡らせている。柱穴は４本から成り、それぞれの掘り方の径は0.35～0.5m、深さ0.3～0.38mであり、いずれの柱穴においても抜き取られたためか柱痕跡は見られなかった。また柱間距離は最大で2.84m、最小で2.34mを測りややばらつきが見られる。さらに、住居北壁の中央部分には造りつけのカマドが設けられており、壁体溝はカマドの周囲では途切れていた。このカマドは検出部分の長さ0.97mを測り、煙出し部は住居外には出ていない。燃焼部と思われる被熱面は灰色粘質土をはさみ２面存在し、少なくとも１度構築し直されていることが想定される。２面とも床面、壁面がよく焼けており、そのうちの上面から甕460が割れた状態で出土した。

主な出土遺物は須恵器杯蓋435～445、杯身446～455、提瓶456、甕457、土師器甕458～471、高杯472、鉢473・474、甑475、手づくねの鉢476、動物型土製品Ｃ１等がある。須恵器杯蓋・杯身は、ともに回転ロクロにより整形されており、回転方向は時計回りと半時計回りが存在する。多くが前者に属し、回転方向の判明するもののうち杯蓋は445、杯身は451・452・454・455が後者に属す。土師器甕は、体部が倒卵形をなすもの458・460・467・468と球形をなすもの465・466がある。外面はハケメ調整によるものが多数をしめる。その中で465はハケメ調整をした後に胴部にユビオサエがなされ、469は縦方向のヘラミガキが施されている。一方、内面の形態は、ヘラケズリをしているものが多く見られるがハケメの後ユビオサエをするもの458、ヘラケズリの後ユビオサエをするもの465、内部調整が完全になされず粘土紐の跡が明瞭に残るもの467・468がある。鉢473は一見製塩土器風である。

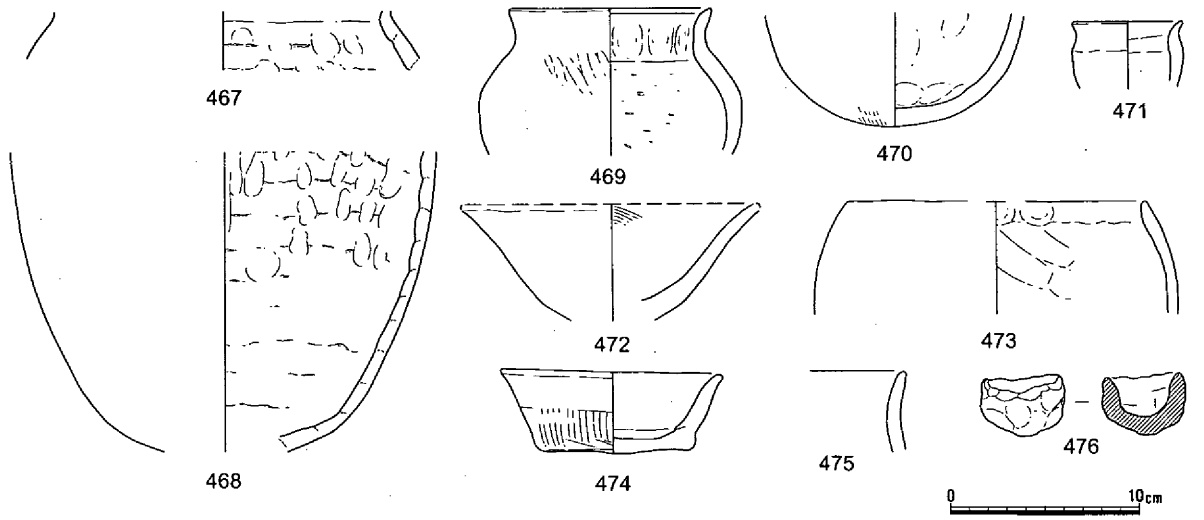
当遺構からは、須恵器、土師器が数量的に同程度出土している。その中で供膳具は一部土師器があるものの須恵器が多くを占め、他方、煮沸具は土師器が主体となっている。器のもつ機能によって性質の違う土器が使われている様子が現れている。さらに土器の出土地点に注目すると、概ねカマド周辺に煮沸具、そして、それを取り巻くように供膳具が分布する傾向が見られた。住居内の空間的な使い分けの結果であろうか。なお、埋土中には多量の弥生中期末から後期にかけての土器が混入してお



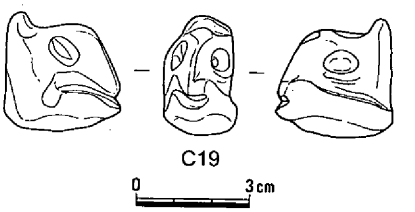
第88図　竪穴住居12・出土遺物１（１/60・１/４）



第89図　竪穴住居12出土遺物２（１/４）



第90図　竪穴住居12出土遺物３（１/４・１/２）



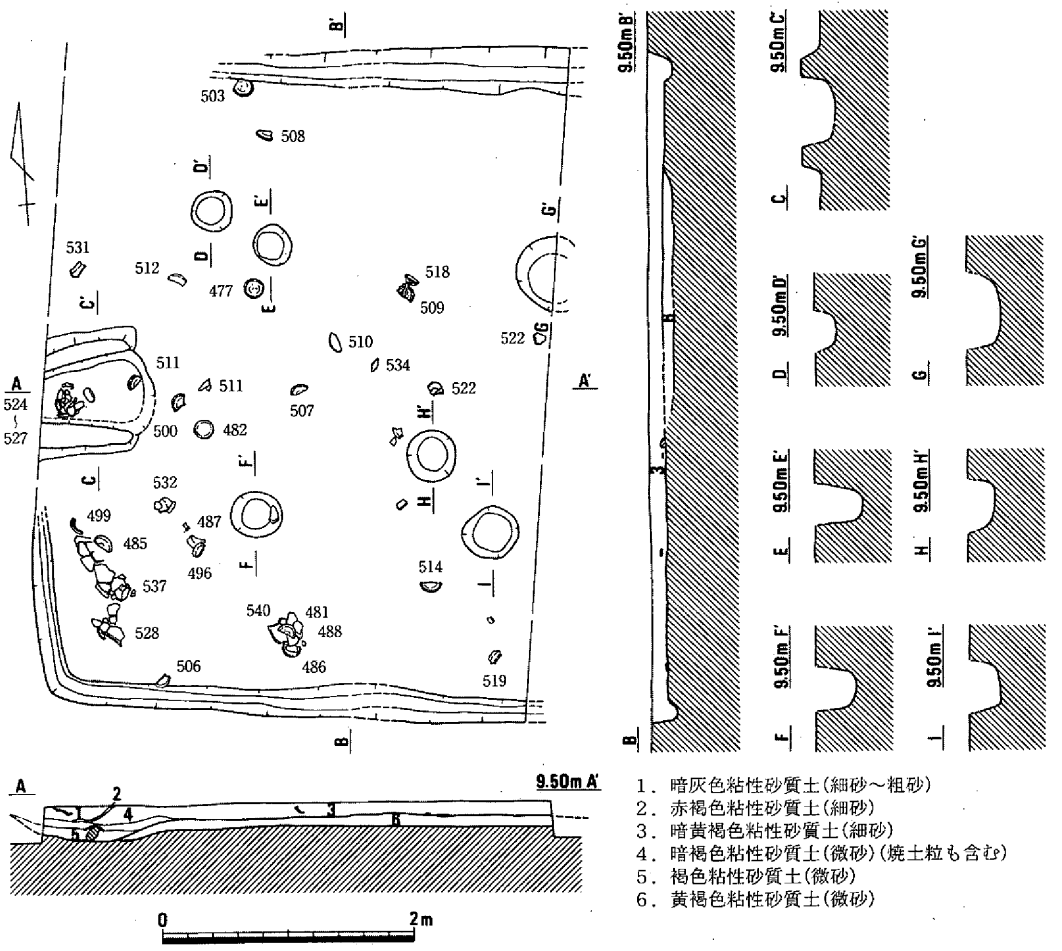
り、周辺にはそれらの時期の遺構も存在したことが想起される。この遺構の時期は古・後・Ⅰである。　（蛯原）

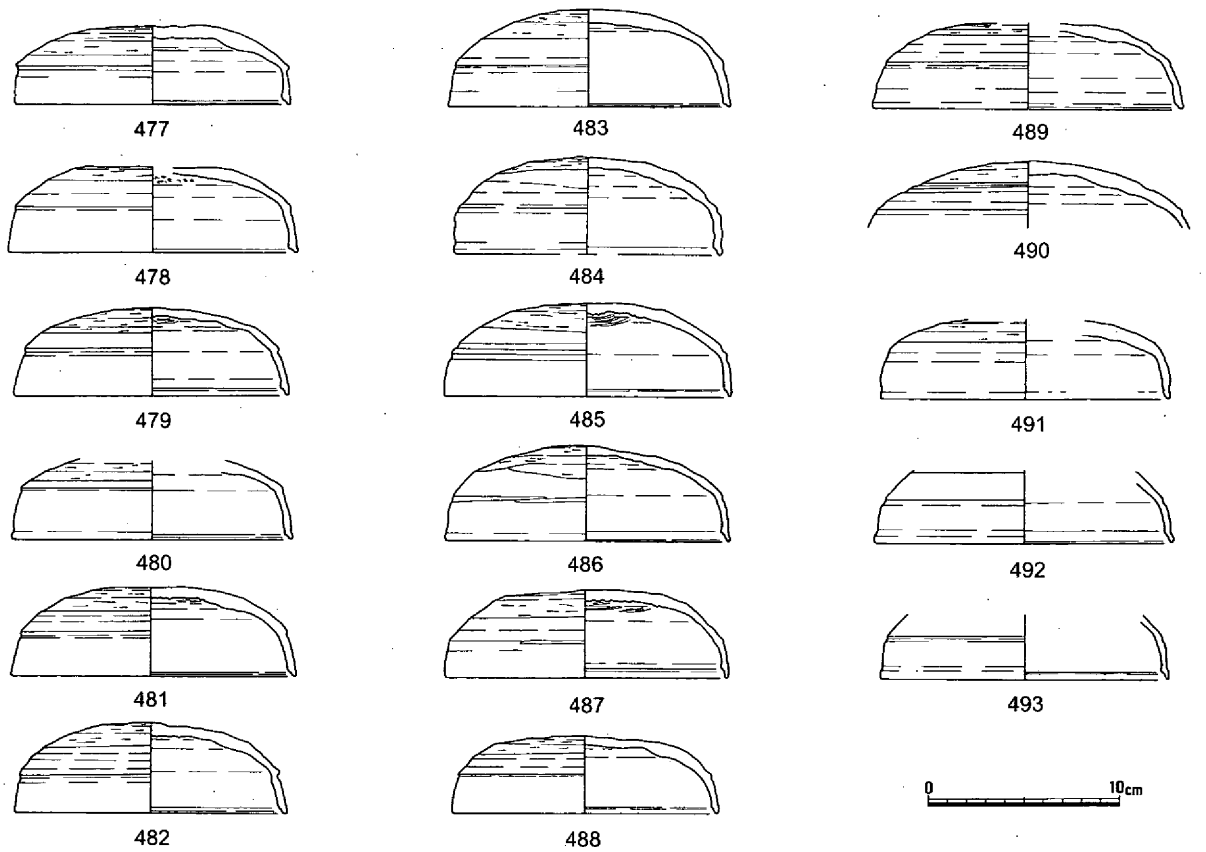
竪穴住居13（第91～94図　図版13・19・20）

11区のほぼ中央に位置する。方形の平面形を呈し、周囲に壁体溝がめぐっている。調査区の制約で東側は調査できていないが、大きさは長さ5.38m、残存幅は４m以上を測る。主軸はN-86°-Wである。住居の西辺のほぼ中央にカマドが存在する。カマドには被熱痕跡がみられ、左右に袖が残存する。カマドの中央部には支柱として利用されたと考えられる棒状の石が存在した。住居内からは柱穴と考えられる穴が検出されている。Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ⅰが主な柱穴と考えられ、４本の柱をもつ住居であったと推測できる。柱穴はいずれも浅く、床面から約0.3m前後を測る。住居内からは床面付近を中心に多くの土器片が出土している。須恵器は住居床面全体に散乱した状態で出土したのに対して、土師器の多くはカマド周辺を中心に出土している。

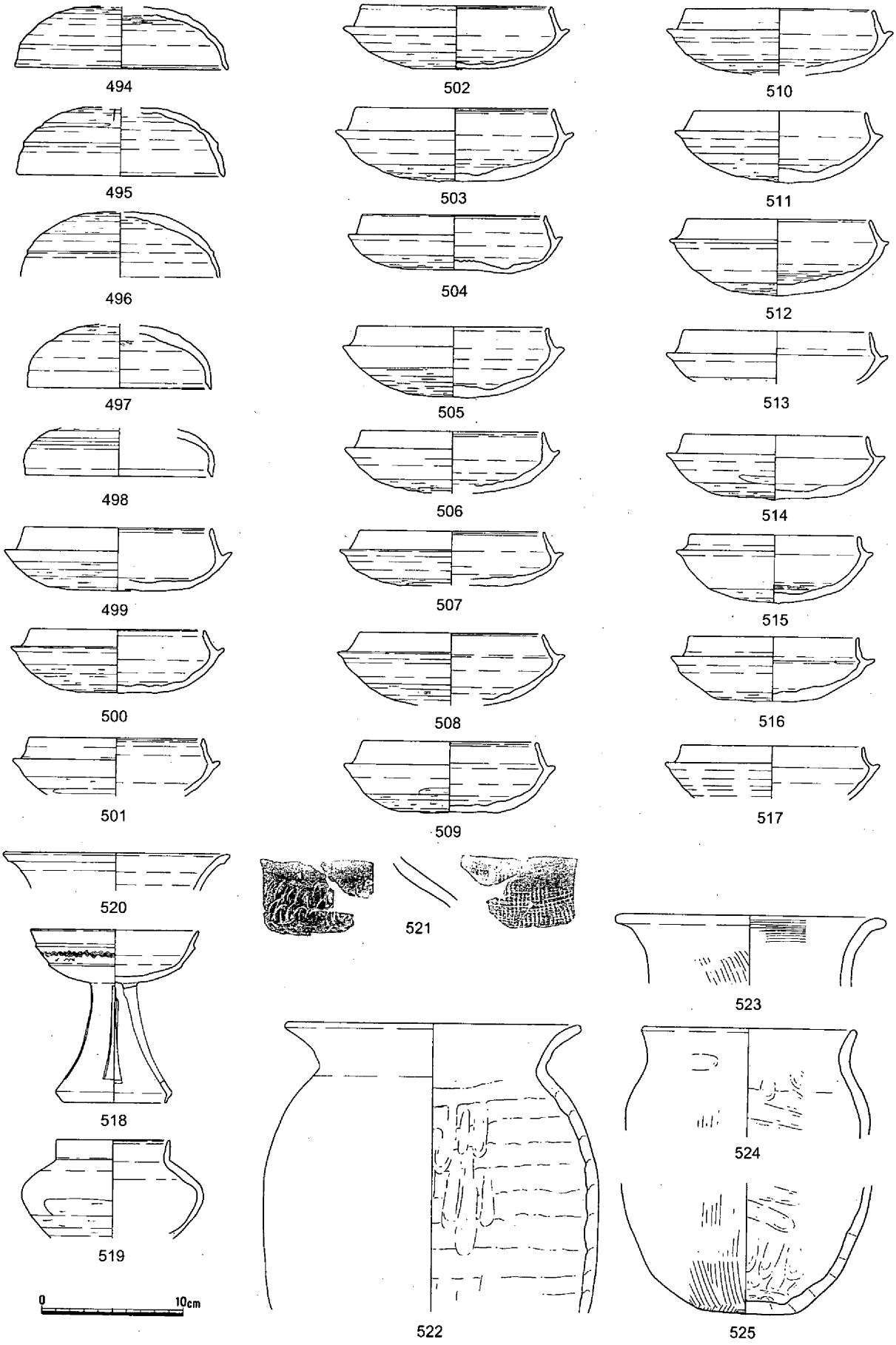
477～521は須恵器であり、その器種のほとんどは杯蓋および杯身である。**477～498**は須恵器杯蓋である。口径13～16.2cm、器高4.1～5.2cmを測る。天井部にはヘラケズリが施されている。**499～517**は須恵器杯身である。口径12～14cm、器高4.1～5.5cmを測る。これらの須恵器のうち、**478**、**489**、**481**、**482**、**485**、**487**、**494**、**497**、**502**、**504**、**515**の内面には同心円文の当て道具の痕跡がみられる。**518**は長脚の無蓋高杯である。杯部の中央付近に波状文が施されており、脚部には透しがみられる。**519**は短頸壺である。**520**は壺の口縁部である。**521**は破片であるが、壺か甕の体部と推測できる。外面には格子タタキが施されているが、内面の同心円文タタキはややすり消し気味である。**522～542**は土師器である。**522～532**は甕である。**522**は粘土紐の痕跡が顕著である。**524～527**は住居内のカマドの中に残っていた土師器である。**528**と**537**はカマドの南側で出土した。**533～536**は土師器高杯である。**537**は甕である。把手をもち、内外面に粗いハケメがみられる。**538**は把手である。**539**は羽釜の鍔である。**540～542**は甑である。**540**の内面にはハケメあるいは指頭圧痕がみられるが、**541**と**542**の内面はヘラケズリが施されている。またその他の遺物として製塩土器、玉類、石器が出土している。543～546は製塩土器である。**545**と**546**の外面にはタタキの痕跡がみられる。Ｊ１は滑石製玉である。Ｓ５は砥石で、流紋岩製である。重さは33.3ｇを測るが、両端が欠損している。

これらの出土遺物から住居跡の時期は古・後・Ⅰであると推測される。　（金田）

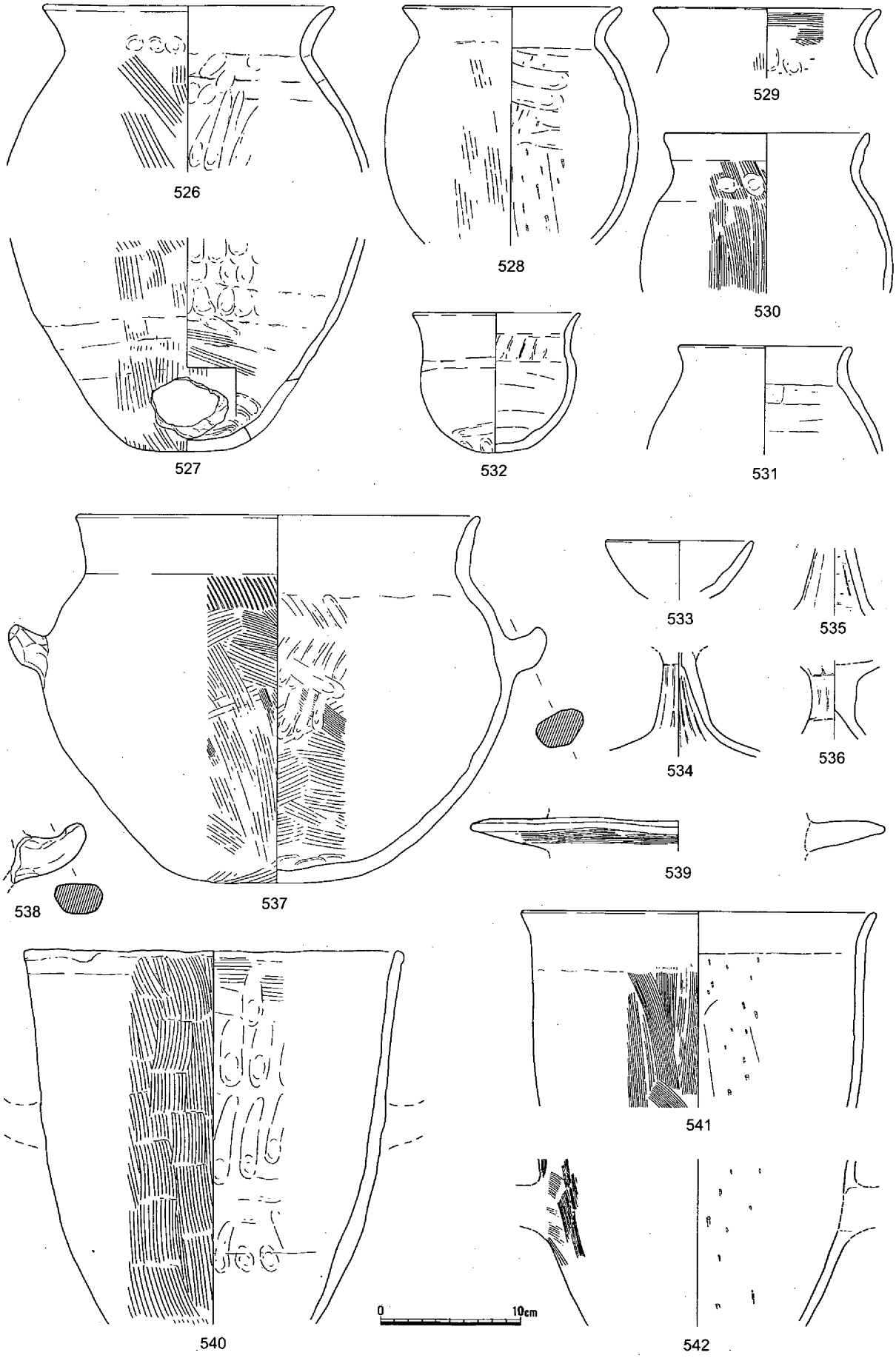




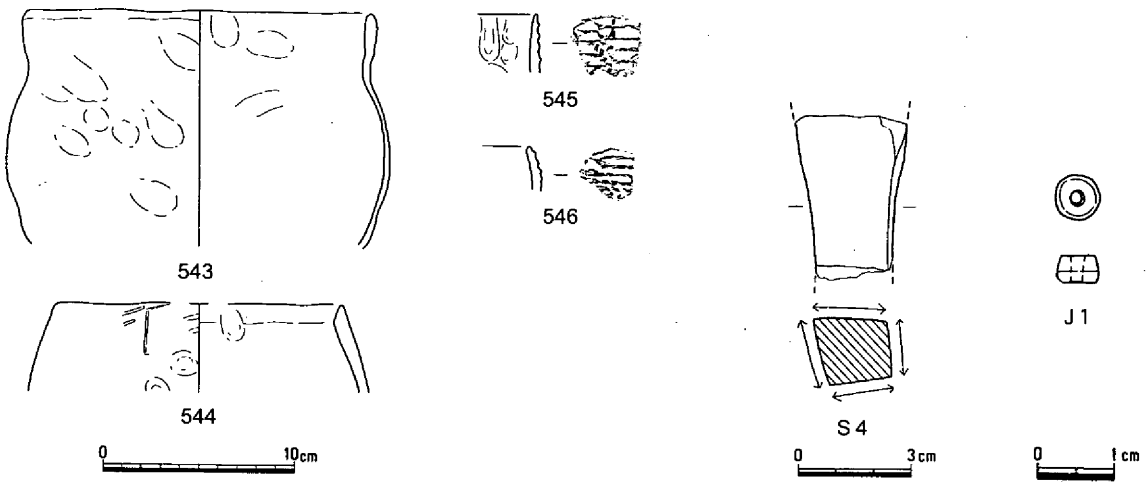
第91図　竪穴住居13・出土遺物１（１/60・１/４）



第92図　竪穴住居13出土遺物２（１/４）



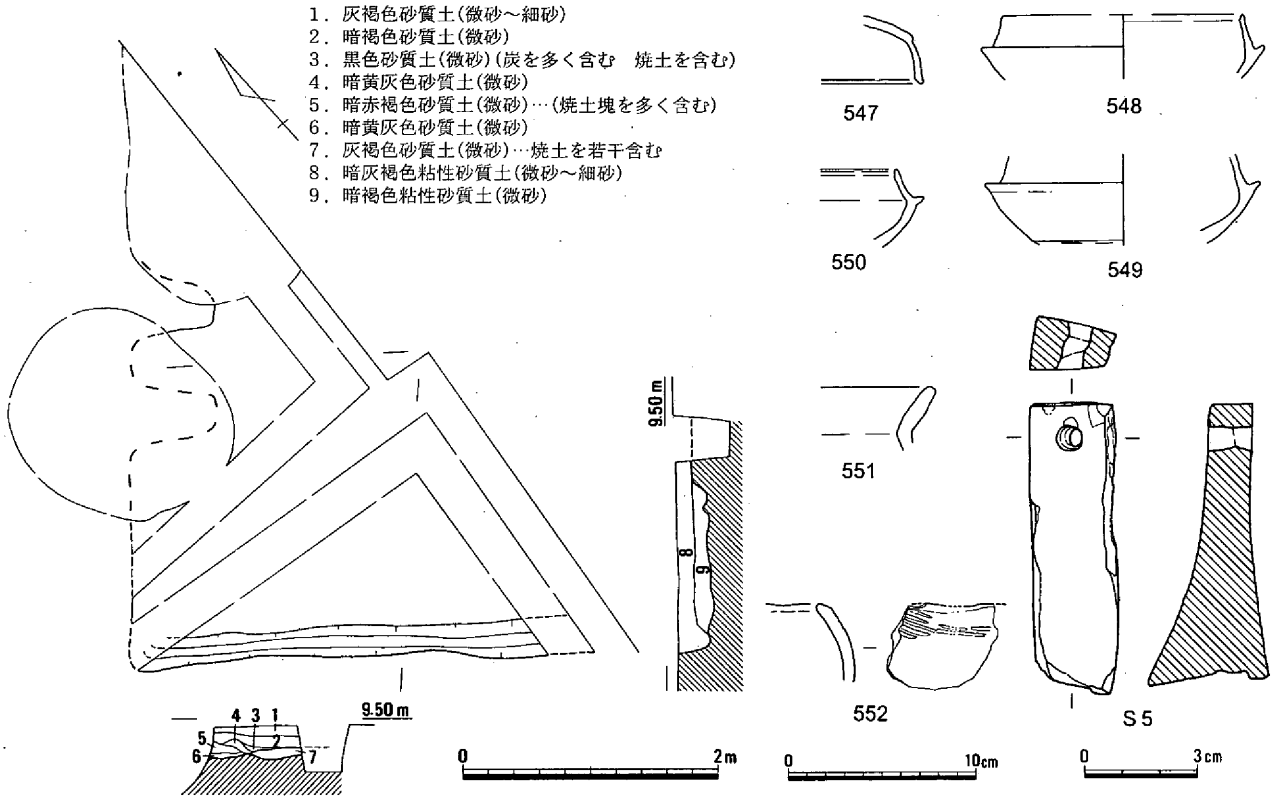
第93図　竪穴住居13出土遺物３（１/４）



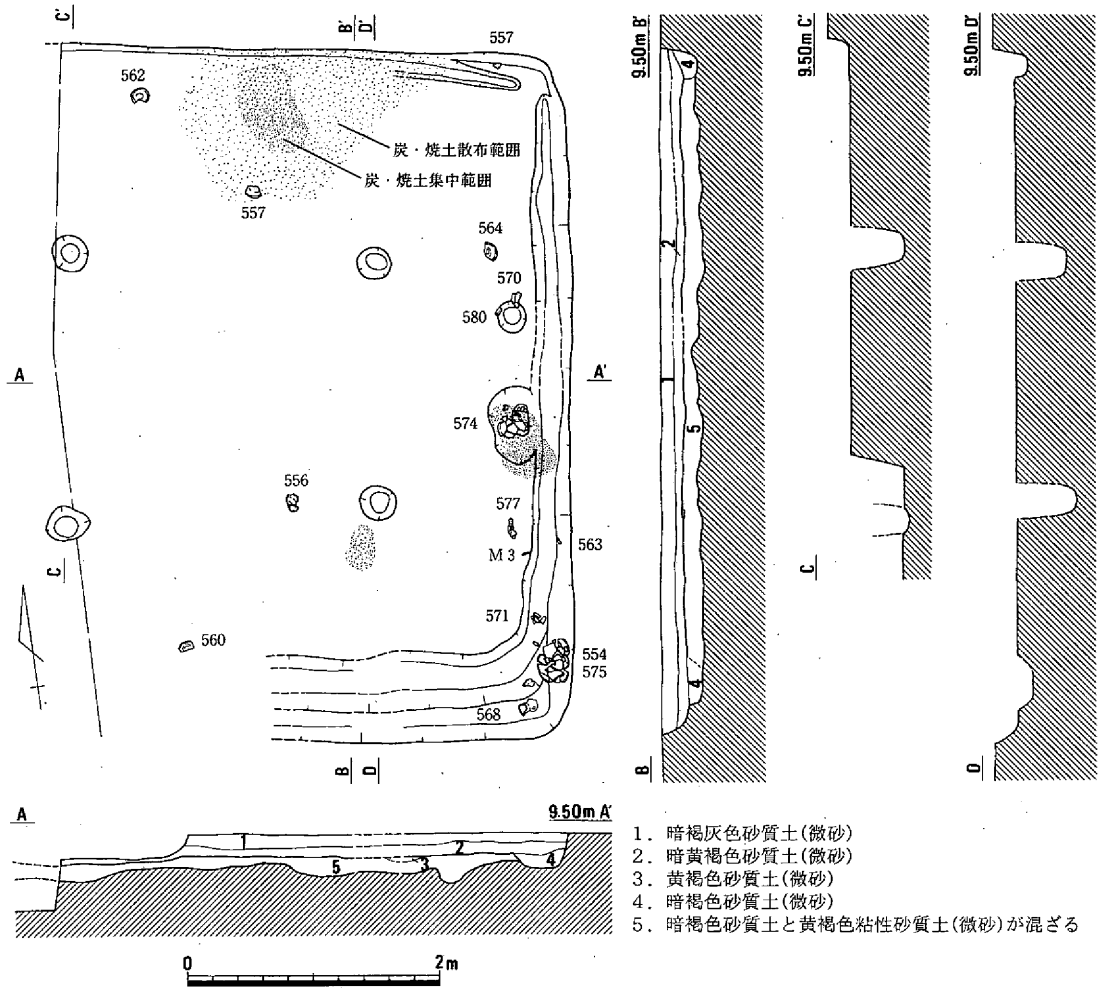
第94図　竪穴住居13出土遺物４（１/４・１/２・１/１）

竪穴住居14（第95図　図版20）

11区と12区の境に位置する。平面形は方形と考えられ、残存長3.5m、残存幅で2.85mを測る。主軸はN-50°-Wである。壁体溝が11区内で検出された。住居の北西側で被熱痕跡がみられカマドが存在していたことがわかった。カマドは土壙32および土壙43により大部分が破壊されていたが、かろうじてその一部を検出することができた。なお、柱穴は検出できなかった。住居埋土から小片であるが、須恵器・土師器等が出土している。**547**は須恵器杯蓋である。**548**～**550**は須恵器杯身である。**551**は土師器甕である。**552**は口縁部にタタキが施されており、製塩土器片と推測できる。**Ｓ５**は砥石である。穿孔がみられ、流紋岩製である。58ｇを測る。これらの出土遺物から、竪穴住居14は古・後・Ｉと推測できる。（金田）



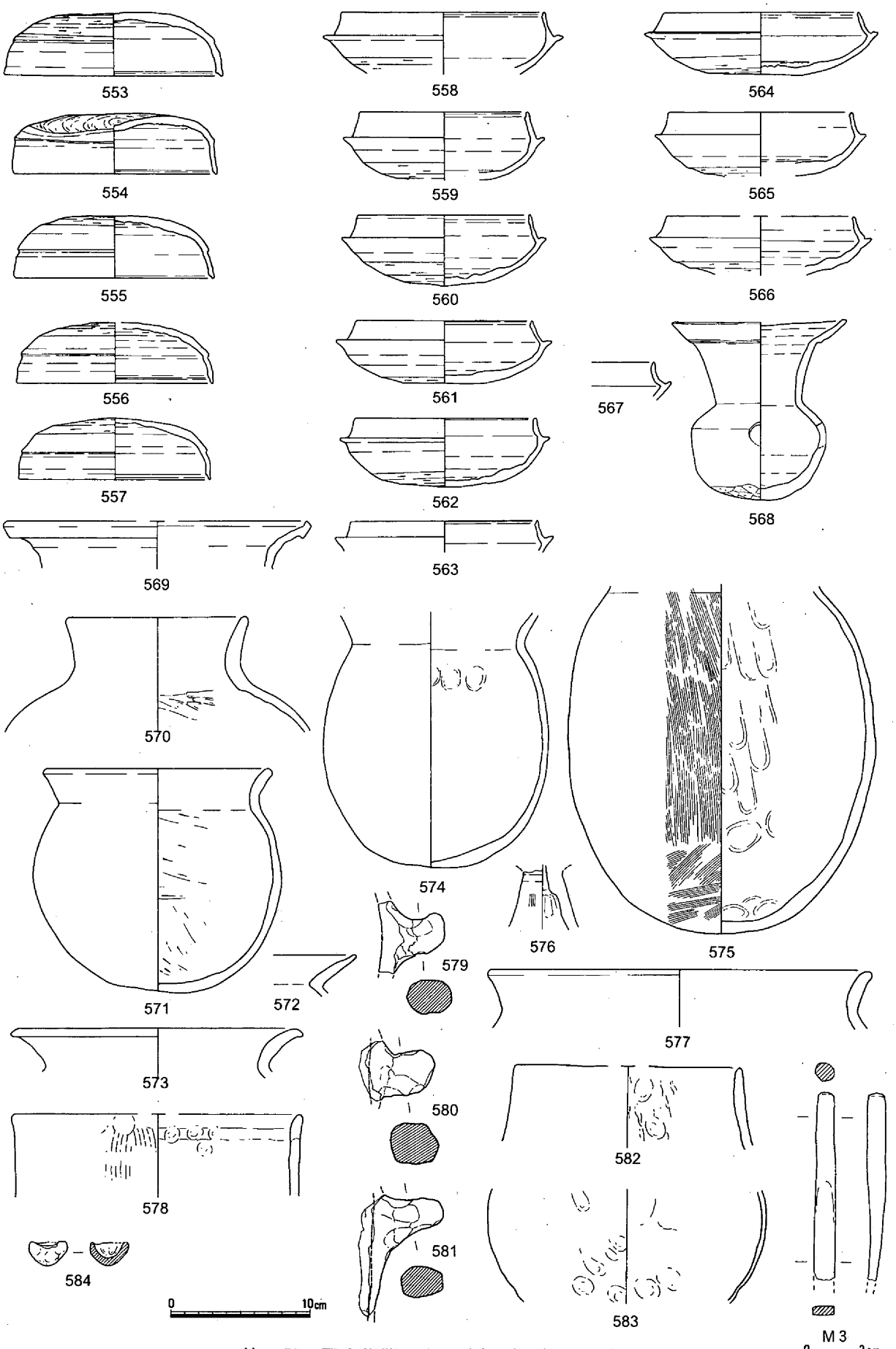
第95図　竪穴住居14・出土遺物（１/60・１/４・１/２）



第96図　竪穴住居15（１/60）

竪穴住居15（第96・97図　図版14・21）

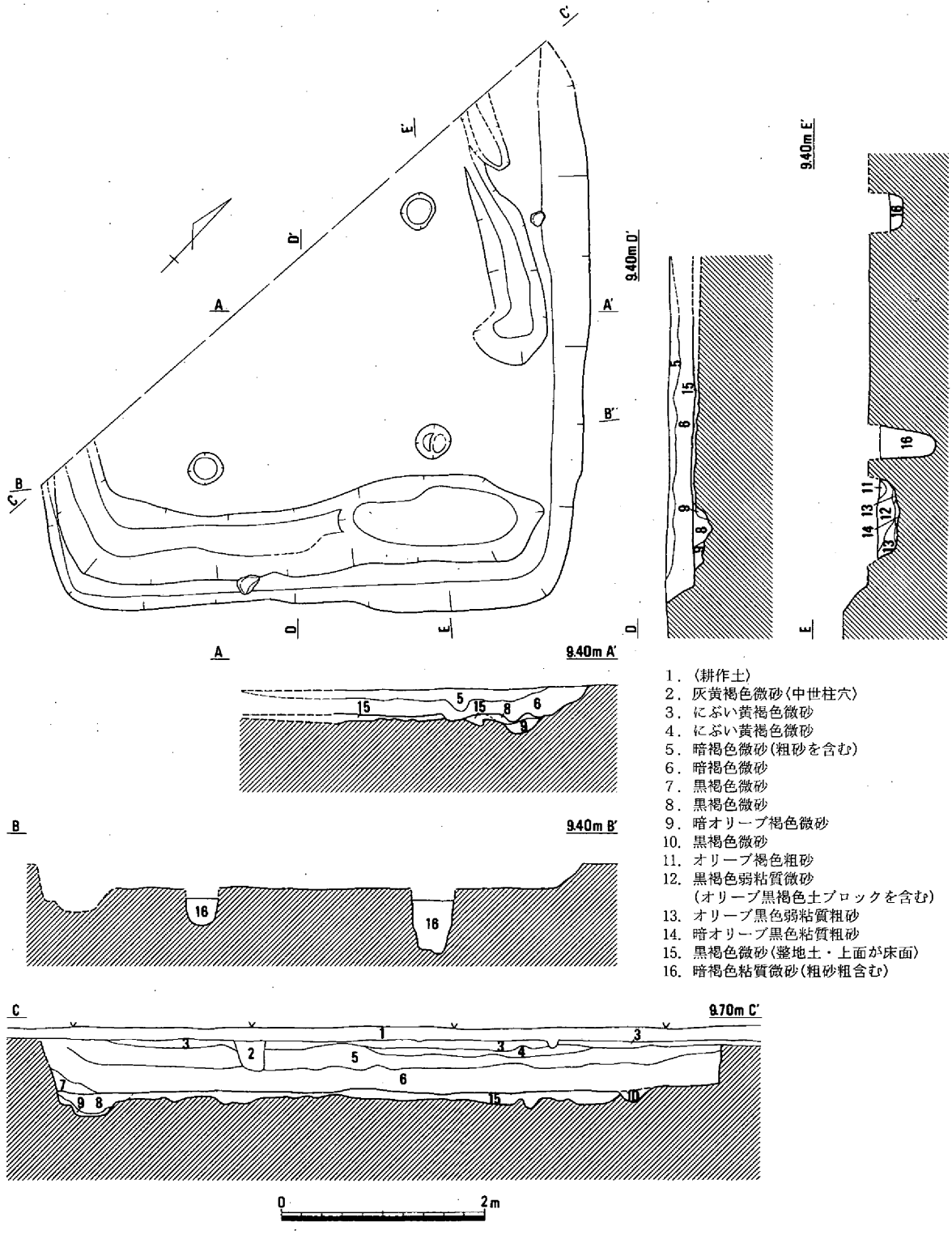
12区の南半部に位置する。方形の住居跡で、長さ5.49m、幅4.1m以上を測る。主軸はN－9°－Eである。住居跡の周辺には壁体溝が巡っているが、北辺部については壁体溝の存在が確認できなかった。また、南端部では壁体溝が、住居跡の側壁から30cm内側にみられた。住居床面は第２層下面と考えられるが、土層断面観察の結果、第２層の下の第５層においても人為的に掘り返されたような痕跡がみられた。このことから、住居15は建築前に床下を一度掘り返し、床を整えなおしたものと考えられる。床面には柱穴と考えられる穴が４基検出された。住居跡の北端の側壁付近で焼土や炭が散在する箇所が存在したが、カマドのような施設は検出されなかった。よってこの住居にはカマドは付設されていないか、あるいは住居跡の西側に付設されている可能性も考えられる。住居跡内からは須恵器・土師器等多くの遺物が出土した。**553**～**557**は須恵器杯蓋である。口径13.6～15.5cm、器高4.4～4.6cmを測る。**558**～**567**は須恵器杯身である。口径12～14.5cm、器高4.6～5.2cmを測る。なお、**564**の内面には同心円文の当て道具の痕跡がみられる。**568**は碗である。**569**は壺か甕である。**570**は土師器壺である。**571**～**575**は土師器甕である。**571**と**574**の内面の色調が上下で異なっており、液状のものを煮沸した痕跡がうかがえる。**576**は土師器高杯である。**577**は土師器甕である。**578**は甑である。**579**～**581**は把手である。**582**～**583**は製塩土器である。**584**は手捏ね土器である。**Ｍ３**は鉄器である。これらの遺物からこの住居跡の時期は古・後・Ⅰと考えられる。　（金田）



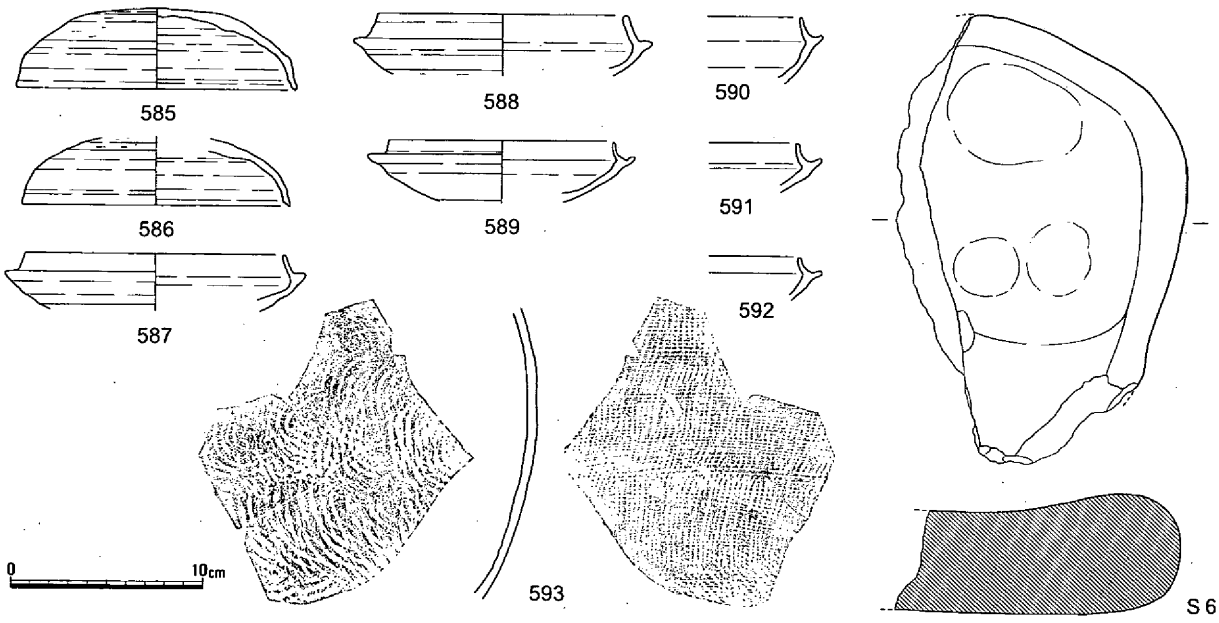
第97図　竪穴住居15出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居16（第98・99図）

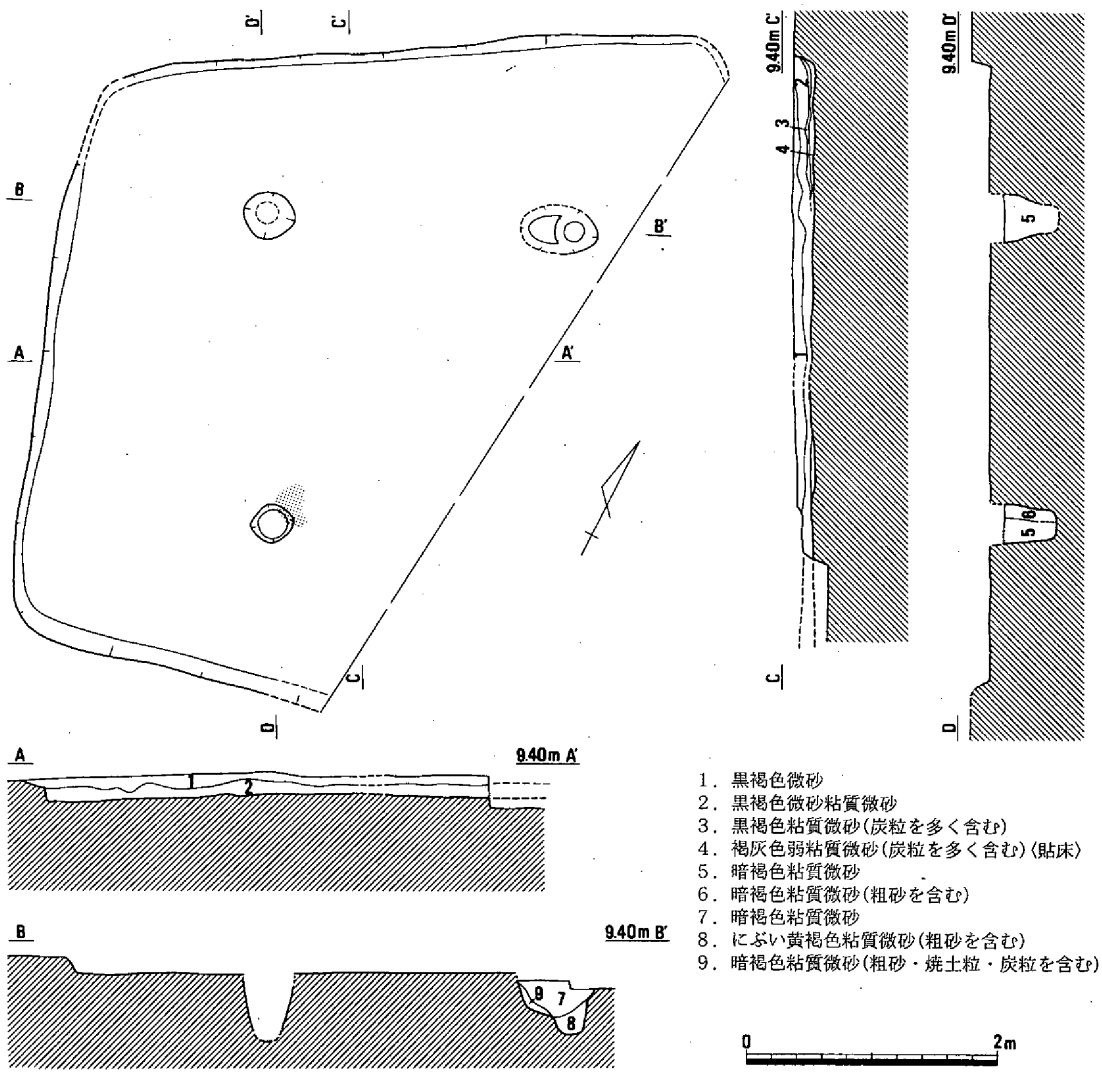
６区中央に位置し、三須畠田遺跡の今回の調査では一番南で検出された住居である。西半分は調査区外になる。平面形は5.21×4.95ｍの方形を呈し、検出面からの深さ約0.5ｍ、床面の標高8.86ｍを測る。底面上に整地土を施し平らな床面を作っている。床面の周囲に幅0.5～0.8ｍ、深さ0.15～0.3ｍの浅い溝が巡る。平面形は整ったものではなく、東辺では１ｍ程途切れ、幅も細くなる。整地土か



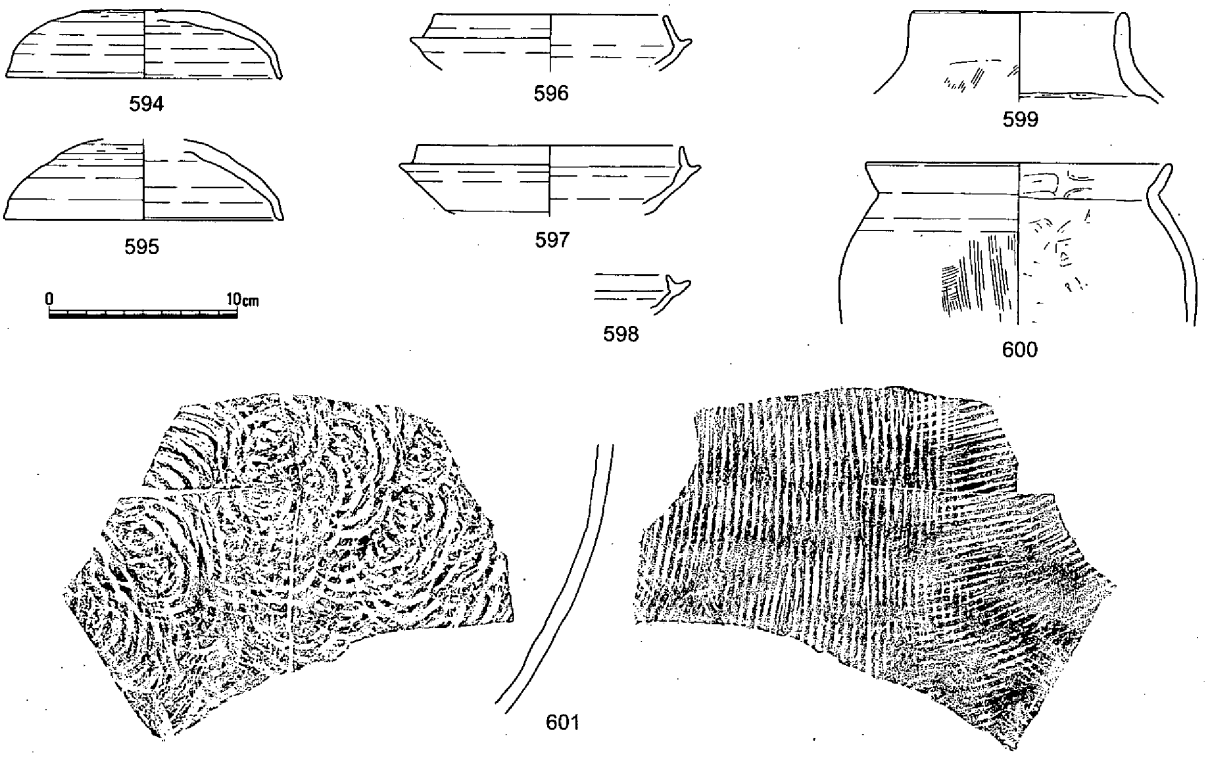
第98図　竪穴住居16（１/60）



第99図　竪穴住居16出土遺物（１/４）



第100図　竪穴住居17（１/60）



第101図　竪穴住居17出土遺物（１/４）

ら掘り込まれているように観察されたが、確信は持てなかった。いずれにしろ、すぐに埋め戻されたものと考えられる。柱穴は３基確認され４本柱と推定される。床面土を水洗した結果、５㎜大の鉄滓21点が検出された。鑑定の結果、椀形鍛冶滓・鍛冶滓・ガラス質滓・炉の粘土くずなどであった。椀形鍛冶滓の分析を行った。また、調査範囲内には焼土面、竈は検出されなかった。出土遺物には須恵器と花崗斑岩製石皿がある。**585・592**は床面、**586・590**は整地土から出土した。古・後・Ⅱ。（物部）

竪穴住居17（第100・101図）

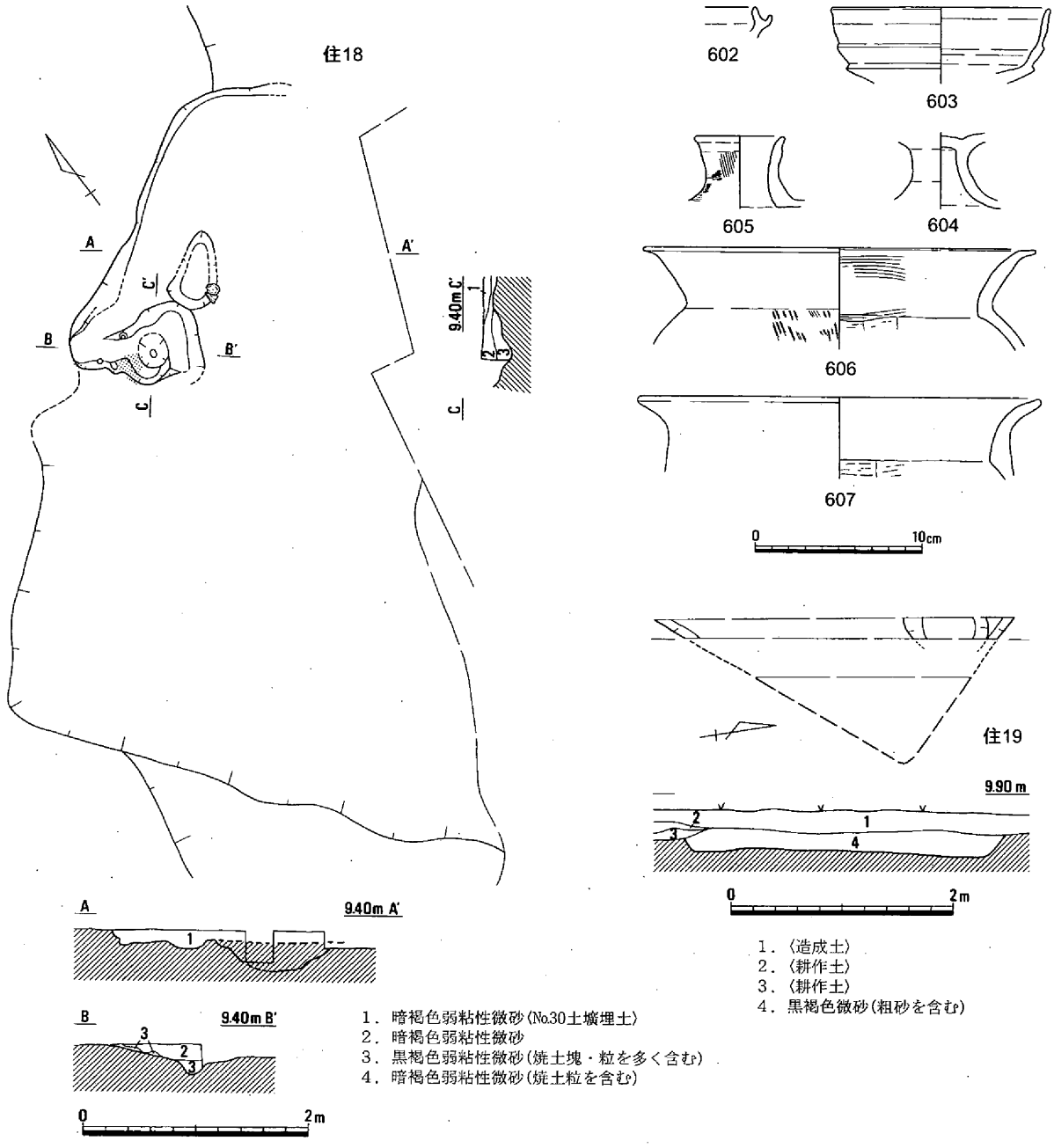
６区の北端、竪穴住居16の北東約４ｍに位置する。住居の東部約１/４は調査区外になる。平面形は5.20×5.0ｍの方形を呈し、検出面からの深さ0.15ｍ、床面標高9.14ｍを測る。一部に褐灰色の貼り床が見られる。柱穴は３基検出され、４本柱と推定される。南東側の柱穴に接して0.3×0.3ｍの範囲に焼土面が確認された。紫色に変色しており、弱い被熱である。床面土水洗の結果、鍛冶滓・ガラス質滓・炉の粘土くずなど41点が検出された。出土遺物は須恵器蓋杯**594**～**598**、甕**601**、土師器壺**599**、甕**600**などがある。いずれも埋土中から出土したものである。時期は古・後・Ⅱ。（物部）

竪穴住居18（第102図　図版14）

７区の北半に位置し、竪穴住居11の北に隣接する。土壙８・９の上部を切る。住居の南東半分は現代の攪乱により削平されている。6.00×4.2m以上の方形を呈し、北西壁中央に竈が付く。検出深約0.1ｍ、床面標高は9.17ｍを測る。柱穴は検出されなかった。竈の中央には支柱を置いたと思われる浅い窪みがある。竈の北東に接して0.7×0.4ｍ、深さ0.1ｍ程の浅い土壙があり、その北側肩口に炉壁および精錬滓が付着した箱形炉の炉底塊が床着で検出された。その他に鉄滓などは全く見られなかった。炉底塊の分析を行った。遺物は須恵器・土師器が少量ある。古・後・Ⅱ。（物部）

竪穴住居19（第102図）

７区中央、竪穴住居18の南西約４ｍに位置する。東側のコーナー部のみ検出された。平面形はお

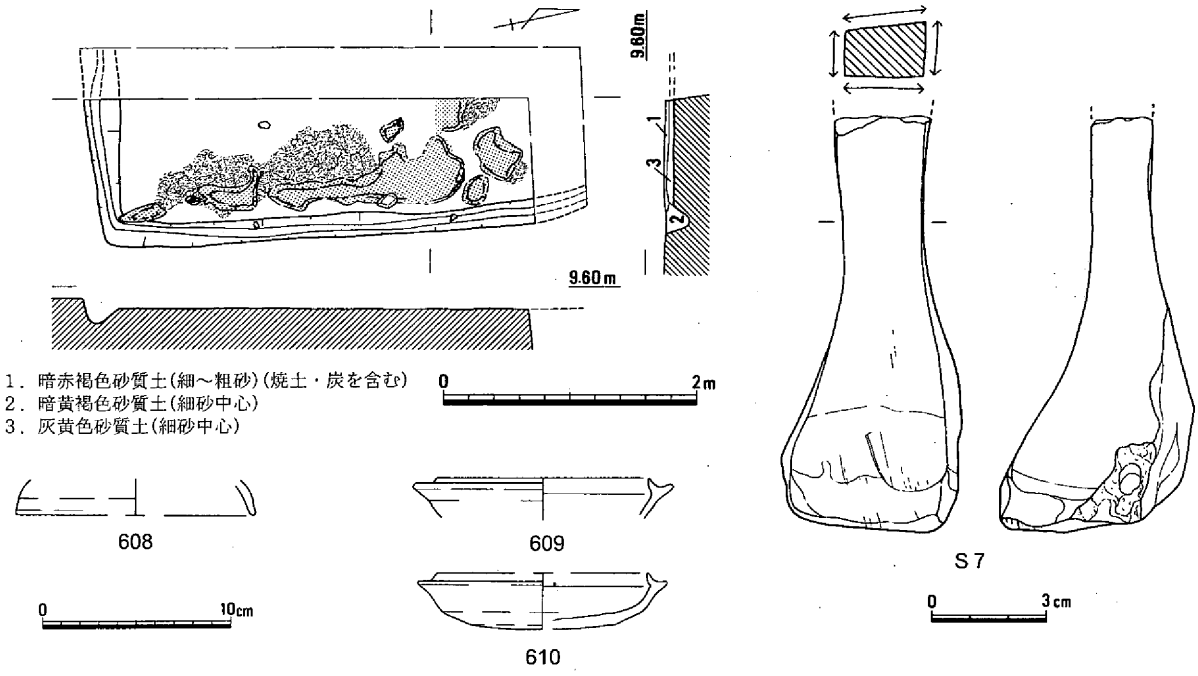


第102図　竪穴住居18・19・出土遺物（１/60・１/４）

そらく方形を呈すると考えられ、検出面からの深さは0.15m、床面標高は9.36mを測る。北東側壁際に浅い土壙が検出されたが、性格は不明。出土遺物はないが、埋土が竪穴住居18と似ていることから、時期は古墳時代後期に属すると考えられる。（物部）

竪穴住居20（第103図）

竪穴住居12の北西隅を切っている遺構である。調査条件により全体の南東部を検出するにとどまった。平面形は方形をなし、残存部は東西1.58m、南北3.94mを測る。遺構面からの深さは0.12mあり、壁面に沿うように幅0.25m、深さ0.18mの壁体溝が掘られていた。また、床面直上の広い範囲さらに埋土中にも焼土・炭が顕著に認められ、何らかの事情で強い火を受けたものと思われる。なお、精査は試みたものの主柱穴は確認できなかった。遺物は須恵器杯蓋608・杯身609・610、砥石Ｓ７などがある。このうちのＳ７は焼土の下部より出土しており、火を受けた時期に存在したのかも知れない。

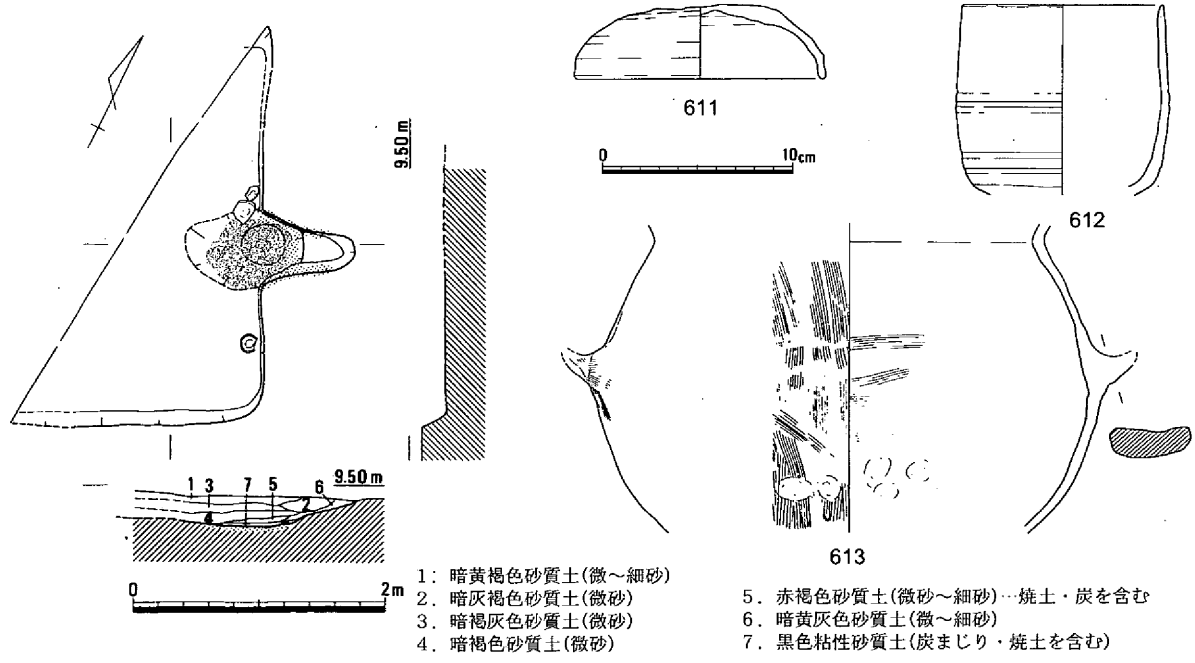


第103図　竪穴住居20・出土遺物（１/60・１/４・１/２）

この遺構の時期は出土した土器より古・後・Ⅱであろう。　（蛯原）

竪穴住居21（第104図）

12区の西端部に位置する。竪穴住居15の上面に位置し、それよりも新しい住居である。平面形が方形を呈する住居跡で、長さ3.1m、残存幅1.9mを測る。主軸はN-60°-Eである。なお、壁体溝は検出できなかった。住居の北東側にカマドを有し、埋土中には炭や焼土が混ざっている。また、被熱痕跡が明瞭に残っていたがカマドの袖部は検出できなかった。住居跡内から須恵器・土師器等の遺物が出土した。**611**は須恵器杯蓋である。**612**は椀である。**613**は土師器甕である。以上の出土遺物から、この住居跡の時期は古・後・Ⅱ（TK209）に比定できよう。　（金田）



第104図　竪穴住居21・出土遺物（１/60・１/４）

（２）土壙

土壙31（第105図　図版21）

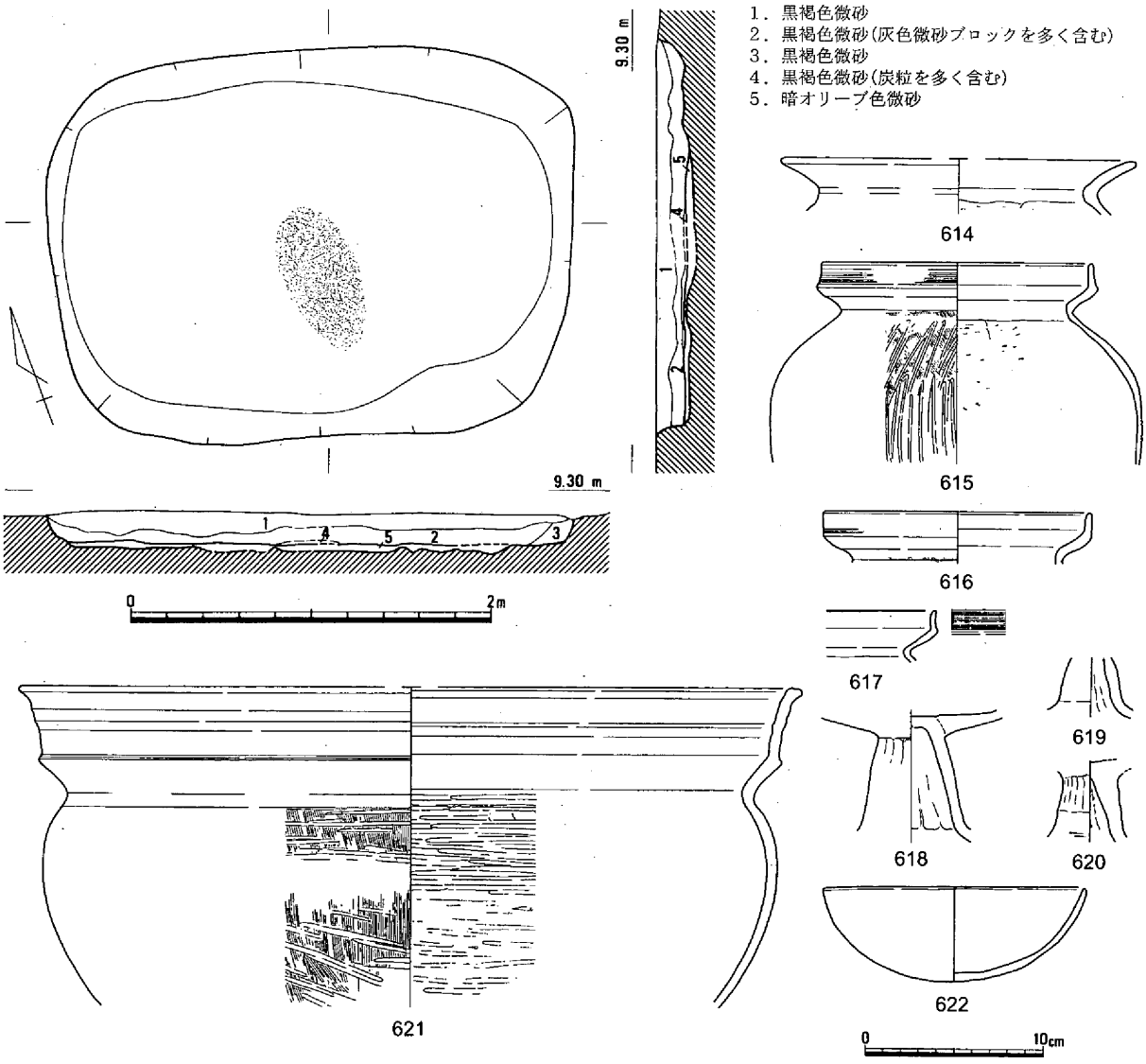
９区南部、竪穴住居５の北約1.5mに位置する。平面形は2.9×2.17mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.22mを測る。底面に整地土（第５層）を敷いて平らな床面を作っている。床面の中央やや南よりに0.8×0.4mの範囲に炭の散布が見られた。埋土中から土器片が少量出土した。**621**の二重口縁の鉢内外面には赤色顔料の塗布が見られる。時期は古・前・Ⅱと考えられる。　（物部）

土壙32（第106図）

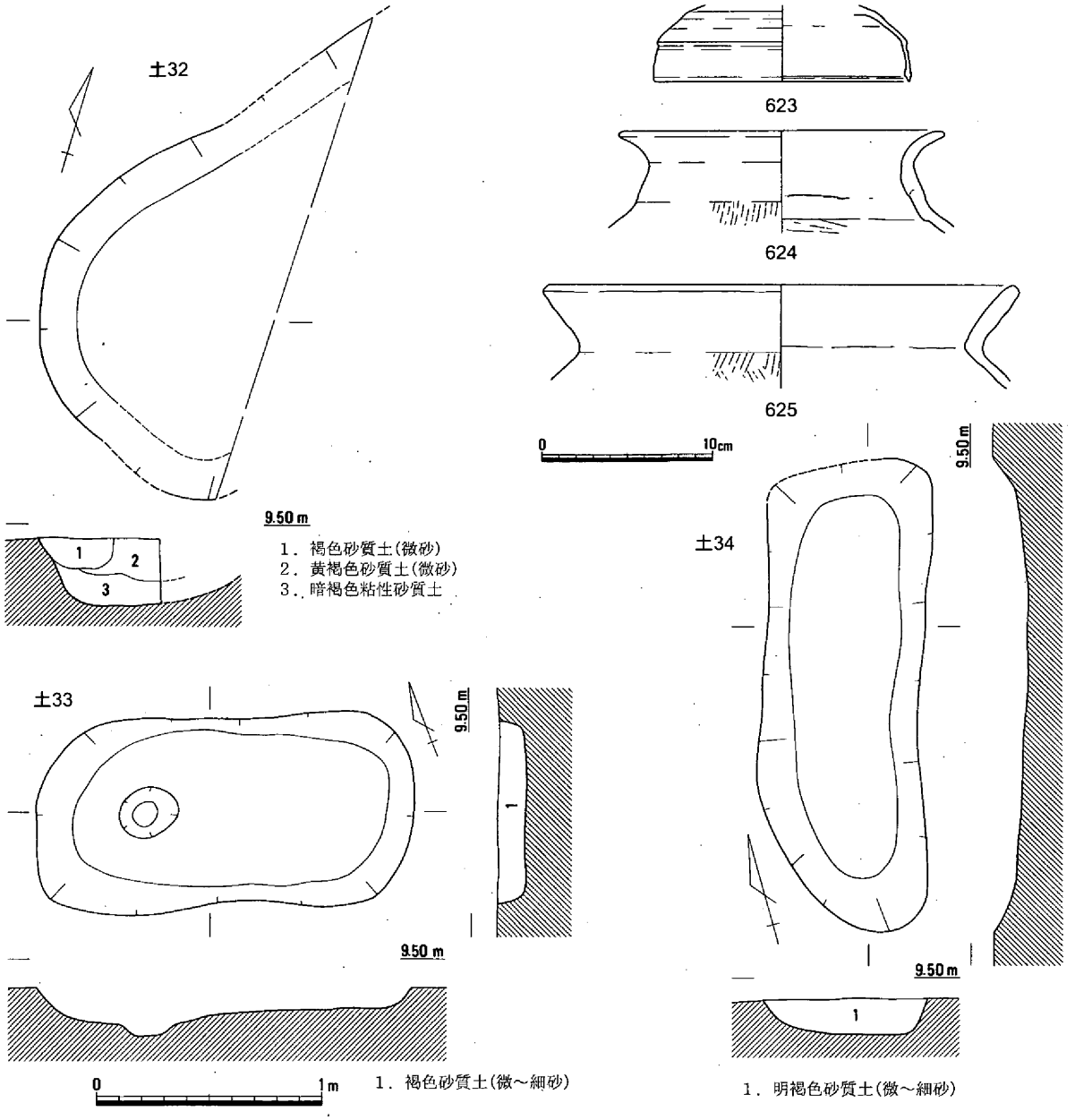
12区の南側に位置する。長さ1.45m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。隅丸長方形の土壙である。埋土中から須恵器や土師器が出土している。**623**は須恵器杯蓋である。**624**、**625**は土師器である。竪穴住居14を切っていることから、６世紀中葉以降に位置付けられよう。　（金田）

土壙33（第106図）

12区の北側に位置する。長さ1.67m、幅0.85m、深さ0.12mの隅丸長方形を呈する土壙である。この土壙の時期を特定する土器がないため、時期は不明であるが、埋土の色調等から古墳時代以降の土壙と考えられる。　（金田）



第105図　土壙31・出土遺物（１/40・１/４）



第106図　土壙32～34・土壙32出土遺物（１/30・１/４）

土壙34（第106図）

土壙33の北側に位置する。長さ2.08m、幅0.69m、深さ0.16mの隅丸長方形を呈する土壙である。時期を特定できる土器がないため、詳細な時期は不明であるが、埋土等から古墳時代の遺構と考えられる。（金田）

（３）溝

溝10（第107図）

３区南端、低位部に位置する。主軸は北西－南東。幅0.7m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土下層は粗砂を含む。出土遺物は土器細片１点のみ。この溝は平成３年度に総社市が調査した三須畠田遺跡Ｂ区溝－７と同一と考えられ、若干の須恵器含むことから古墳時代と推定されている。（物部）

溝11（第107図）

６区中央に位置する細い溝である。竪穴住居16と若干切り合うが前後関係は明らかにできなかった。

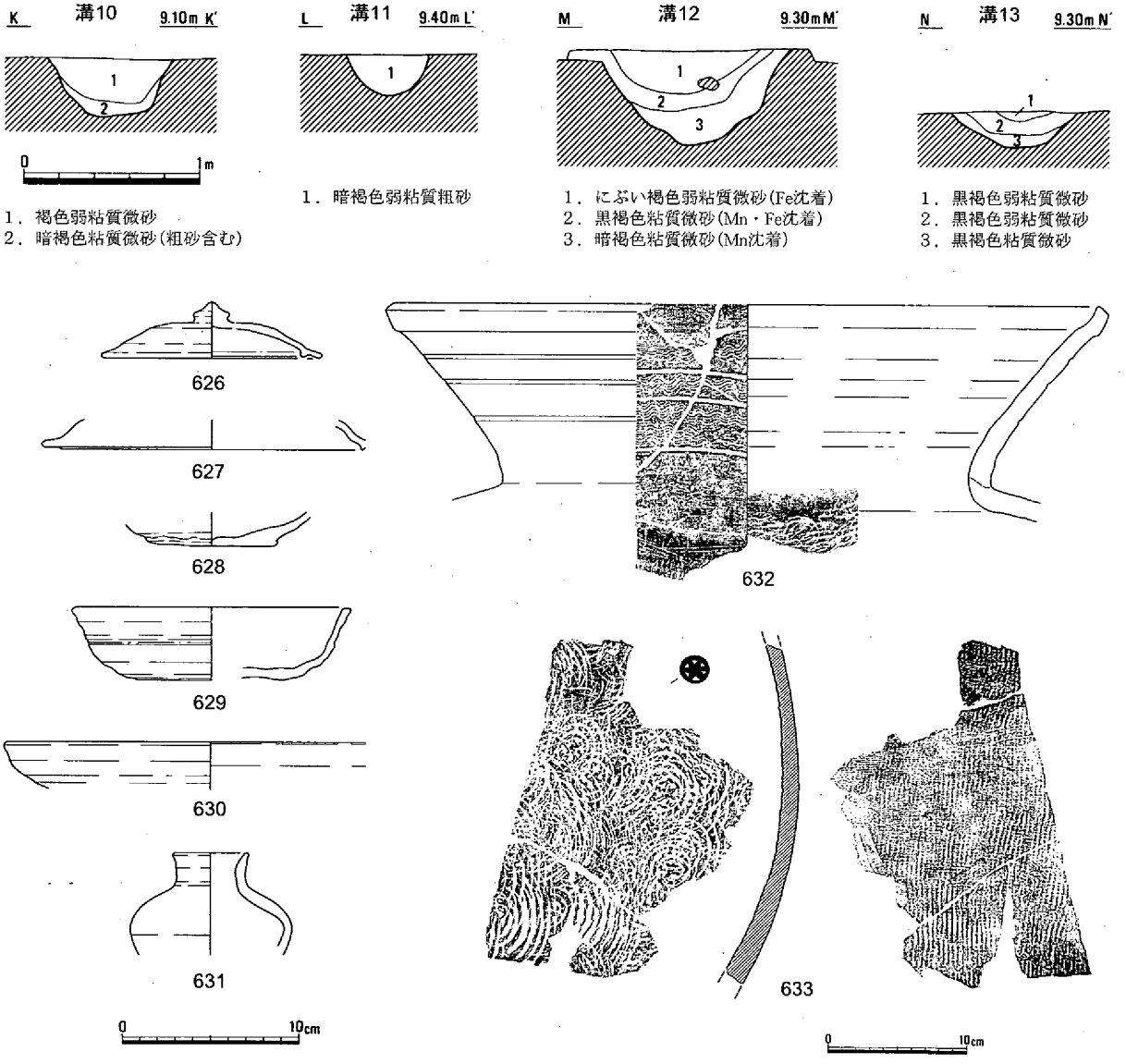
検出長3.8m、幅0.46m、深さ0.23mを測る。主軸は北東－南西。壁体溝かとも考えられたが、性格は不明。時期は竪穴住居16と埋土が似ていることから古墳時代後期の可能性がある。　（物部）

溝12・13（第107図）

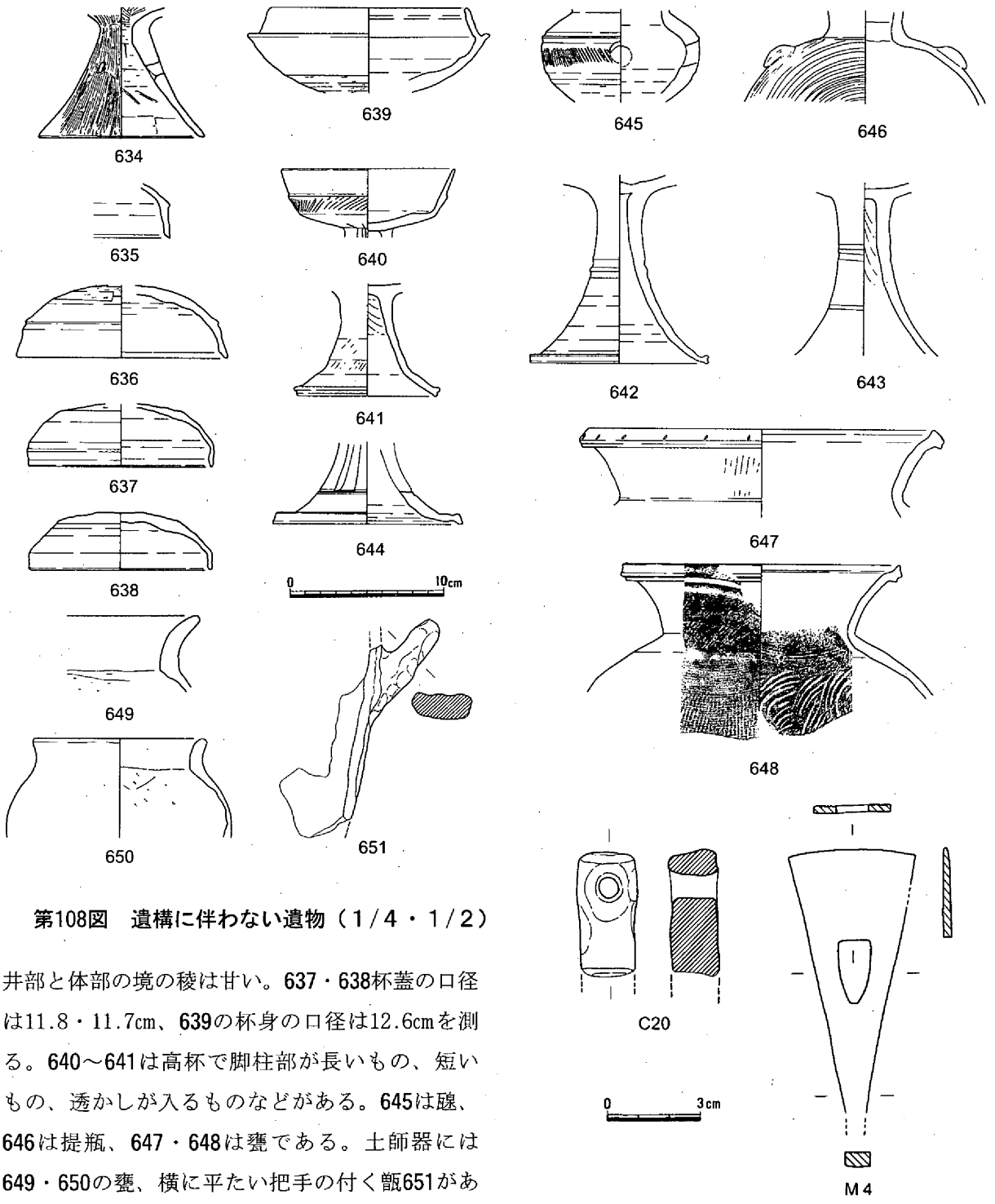
溝12は４区中央、溝13は５区と６区の境に位置する同一の溝である。検出幅1.08m、検出深0.53mを測る。溝13は中世の水田層に上部を削平されており、溝12に比べると検出面が低い。北西から東へ緩やかに湾曲しながら流れる。ちょうど弥・後・Ⅲの時期に中心を持つ溝８と重複する。出土遺物は溝12に多く、弥生時代後期の土器片がかなり混入しているが、須恵器が多数ある。**626**の蓋は宝珠状の摘みが付く。**627**の蓋は口径が大きい。**628**は杯、**629**は高杯と思われる。、**630**は皿、**631**は小形の直口壺、**633**は大甕で、口縁部外面に櫛描波状文、体部内面には車輪文が見られる。時期は古・後・Ⅲ、７世紀前半と考えられる。　（物部）

（４）遺構に伴わない遺物（第108図）

遺構に伴わない遺物は中近世の耕作土、現代の攪乱、側溝の掘り下げなどから出土したものと、異なる時期の遺構に混入したものである。**634**は受け部が筒状の小形器台である。**635・636**の杯蓋は天



第107図　溝10～13・溝12出土遺物（１/40・１/５・１/４）



第108図　遺構に伴わない遺物（１/４・１/２）

井部と体部の境の稜は甘い。637・638杯蓋の口径は11.8・11.7cm、639の杯身の口径は12.6cmを測る。640～641は高杯で脚柱部が長いもの、短いもの、透かしが入るものなどがある。645は鼓、646は提瓶、647・648は甕である。土師器には649・650の甕、横に平たい把手の付く甑651がある。C20は棒状土錘、M２は透かしのある方頭式鉄鏃である。635の小形器台とC12の棒状土錘は前期、その他はすべて後期に属すと推定される。三須畠田遺跡の遺構は前期・５世紀後半・６世紀前半・６世紀後葉～７世紀初頭・７世紀前半の各時期があり、これらの遺物の時期とほぼ合致する。（物部）

第４節　古代の遺構・遺物

（１）土壙

土壙35（第109図）

３区と４区の境に位置し、溝９を切る。平面形は3.59×1.05～0.85mの長い長方形を呈する。底面はほぼ平らであるが、北西端部は複雑に凸凹する。床面直上には一部に、貼床状の土が見られた。遺物は埋土中から須恵器の細片28点が出土した。652は須恵器杯蓋である。奈良時代前半。　（物部）

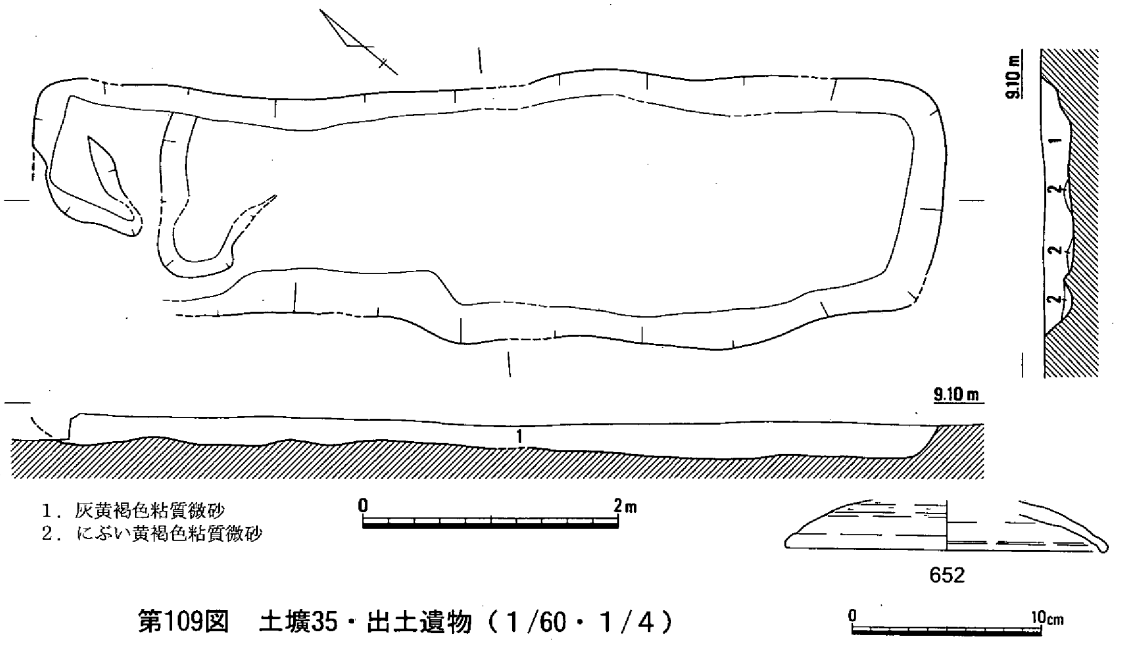
（２）溝

溝14・15（第110図）

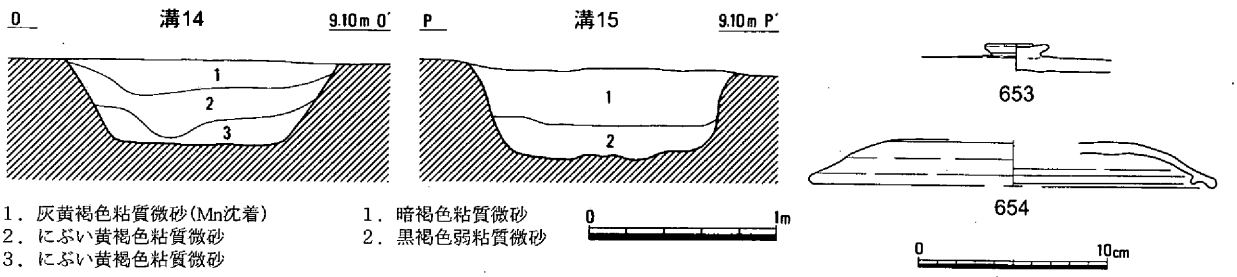
３区北半に位置する溝14と６区南半に位置する溝15は同一の溝である。検出幅は1.4m、検出深は0.45mを測る。流走方向は南西から北東である。溝断面形は幅広のU字形を呈し、粘質微砂が堆積する。埋土中には混入した弥生土器を多く含むが、須恵器が少量出土する。653杯蓋の摘みは上面中央が窪む。奈良時代前半期と考えられる。また、土壙35と主軸が直交することから、一連の遺構である可能性がある。　（物部）

（３）遺構に伴わない遺物（第111・112図　図版21）

中近世の包含層や側溝の掘り下げ、時期の異なる遺構から出土した遺物である。655～669、672～676が須恵器である。669甕体部片には車輪文が見られる。672～674は鍋で体部に沈線が２条巡

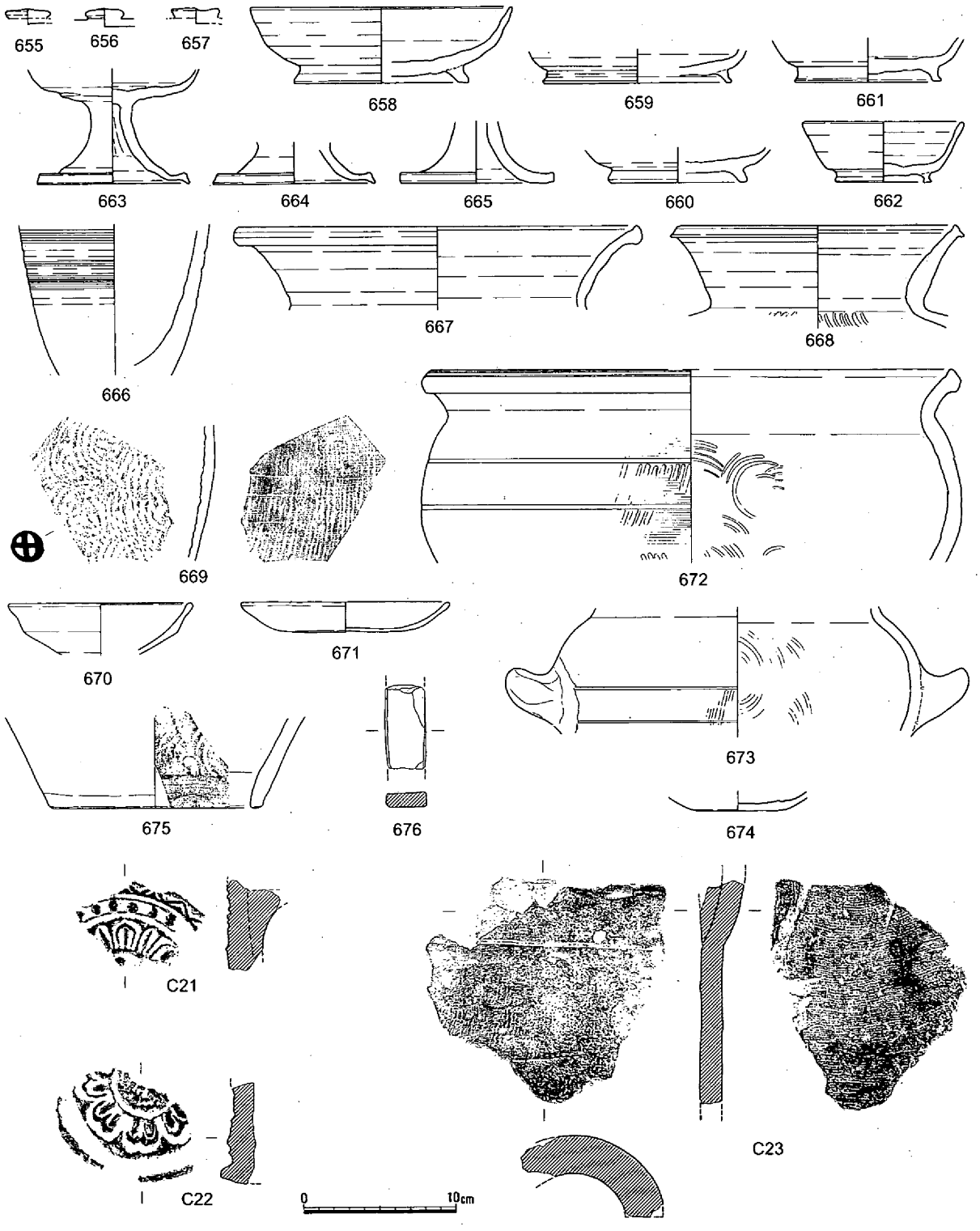


第109図　土壙35・出土遺物（１/60・１/４）

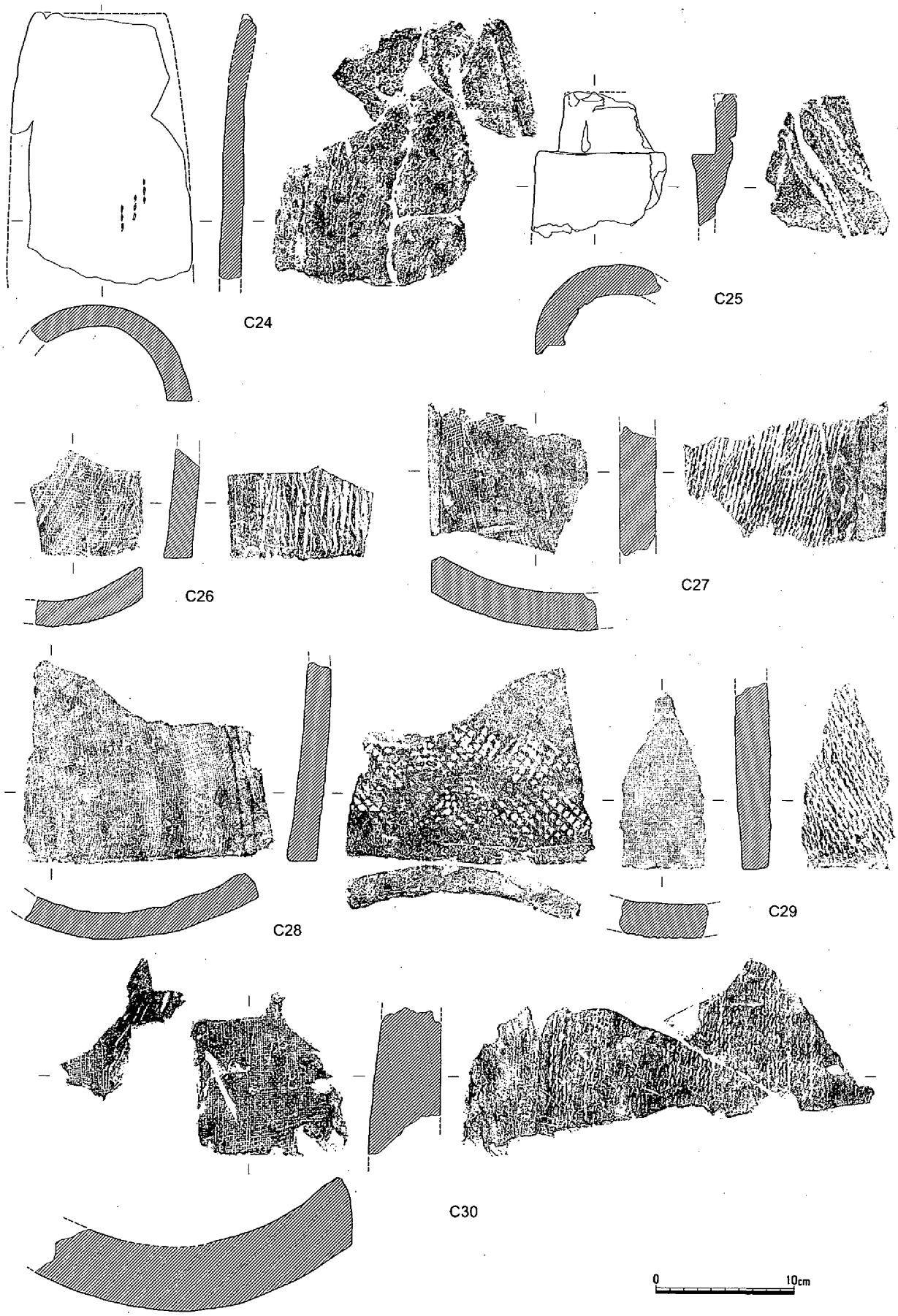


第110図　溝14・15・出土遺物（１/40・１/４）

る。焼成はやや不良。675は下端部に円孔の開く甑と思われる。676は甑の桟。670・671は土師器である。670は椀でにぶい黄橙色を呈する。671は底部外面に押圧のみられる皿。C21～C30は瓦である。遺跡全体では60点ほどの破片が出土した。大半は３～６区で検出され、７区より北ではほとんどみられなかった。C21は単弁７弁蓮華文軒丸瓦で、三須廃寺推定地出土瓦当の１類である。３区から出土し、３区から三須廃寺推定地中心までの距離は150ｍ程である。C22は複弁蓮華文軒丸瓦で、直径12.6cm、かなり摩耗している。相対的に奈良期の遺物が多く、平安期は少ない。　（物部）



第111図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第112図　遺構に伴わない遺物２（１/４）

第５節　中世の遺構・遺物

（１）掘立柱建物

掘立柱建物１（第113図）

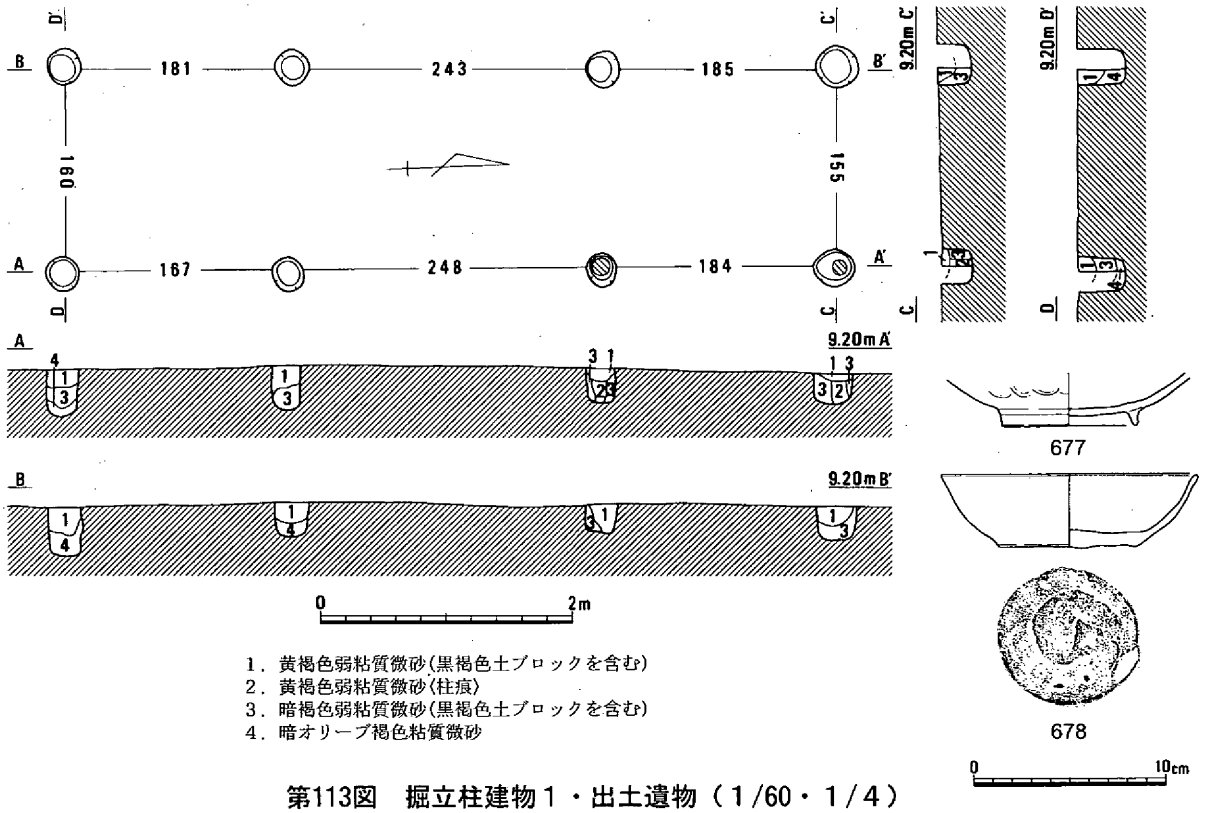
５区南半に位置する。後述する畦畔に伴うと考えられる溝に着られている。３×１間、棟方向はＮ－２°－Ｅでほぼ南北方向である。桁行３間の中間は2.45m前後で広く、両側は1.67～1.85mと狭い。柱穴は直径30cm前後の円形で、検出面からの深さは24～39cmである。直径0.15m弱の柱痕が確認されるものもある。それぞれの柱穴に土器細片が僅かに混入する。**677**早島式土器の椀、**678**は土師器の杯で底部はヘラ切りである。13世紀前後と考えられる。（物部）

掘立柱建物２（第114図）

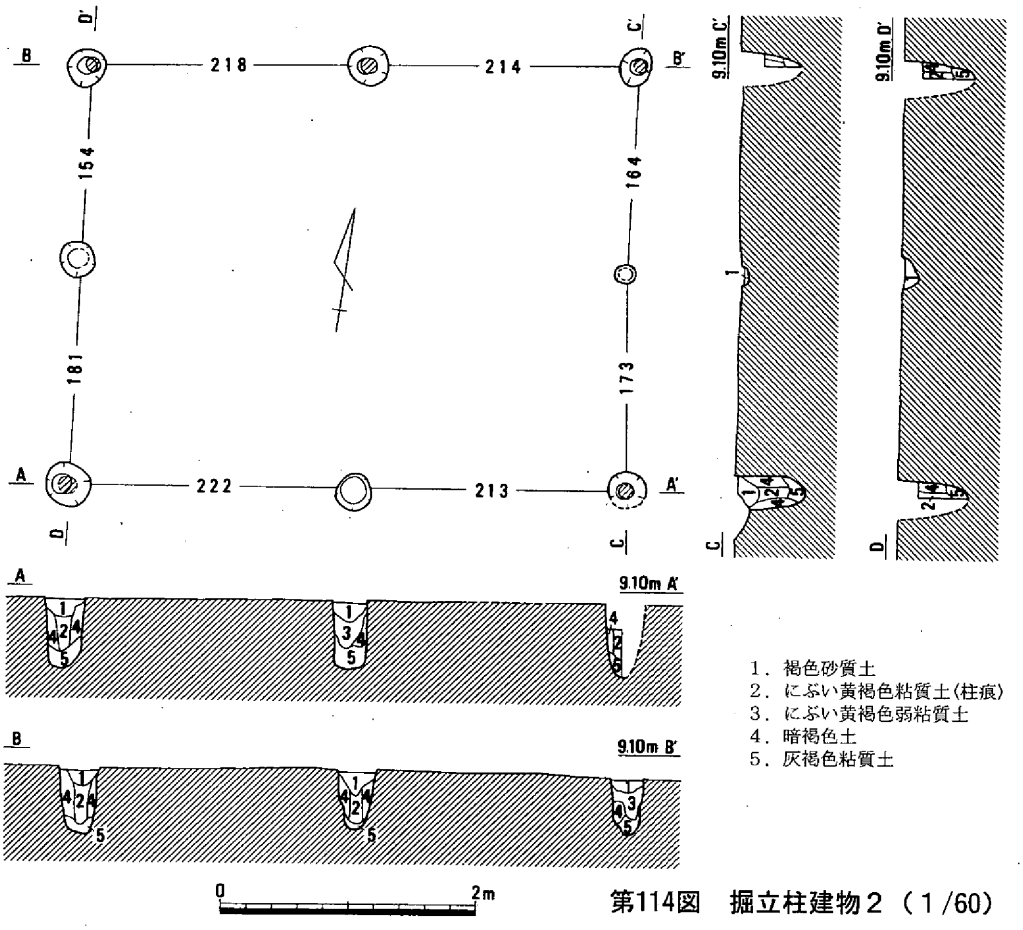
３区南よりに位置する。２×１間の掘立柱建物であり、梁間の中間の柱穴は他と比べ非常に浅いことから床を支える束柱と考えられる。桁行4.32～4.35m、梁間3.35～3.37ｍを測り、棟方向はＮ－81°－Ｅでほぼ東西方向である。柱穴は直径0.3m前後、検出面からの深さ0.45～0.55m、束柱と推定される柱穴は直径0.16～0.25m、深さ0.05～0.15ｍを測る。遺物は土器細片が僅かにあり、その中の早島式土器椀の細片２点や、周辺の柱穴の時期などから鎌倉時代と推定される。（物部）

掘立柱建物３（第115図）

３区の中央、掘立柱建物２の北約６ｍに位置する。１×１間の簡易な建物と考えられる。柱間距離は2.12～2.20ｍで、平面形は若干東西方向が長いがほぼ正方形を呈す。柱穴の直径は0.2～0.4m、検出面からの深さは0.2～0.3ｍを測る。この柱穴４基に囲まれた内側に直径2.2m前後、検出深７cm程の浅い窪みがある。埋土は柱穴と同様の白っぽい微砂であることから、一連の遺構である可能性がある。性格は不明。遺物は各柱穴、窪み埋土に土器細片が少量混入していた。**679**・**680**の早島式土器



第113図　掘立柱建物１・出土遺物（１/60・１/４）

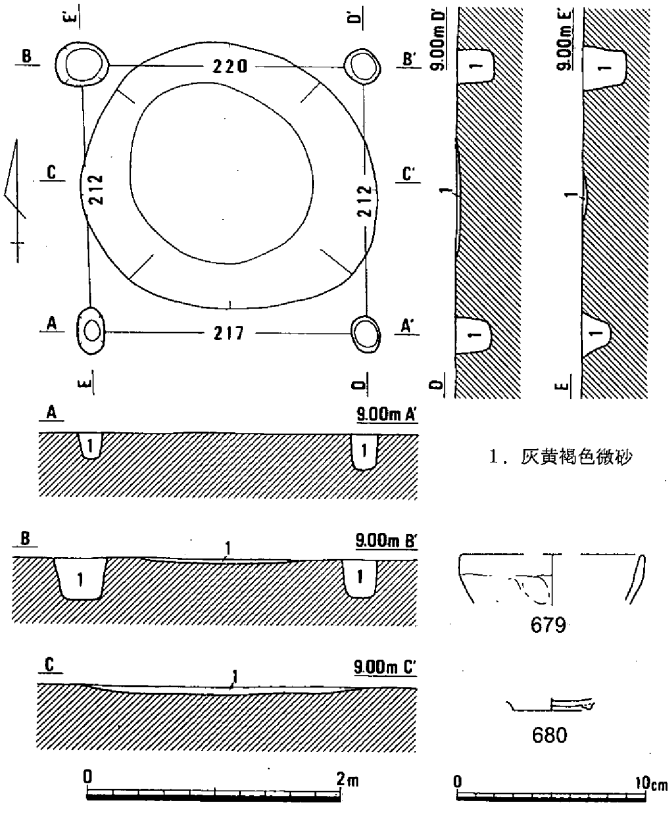


第114図　掘立柱建物２（１/60）

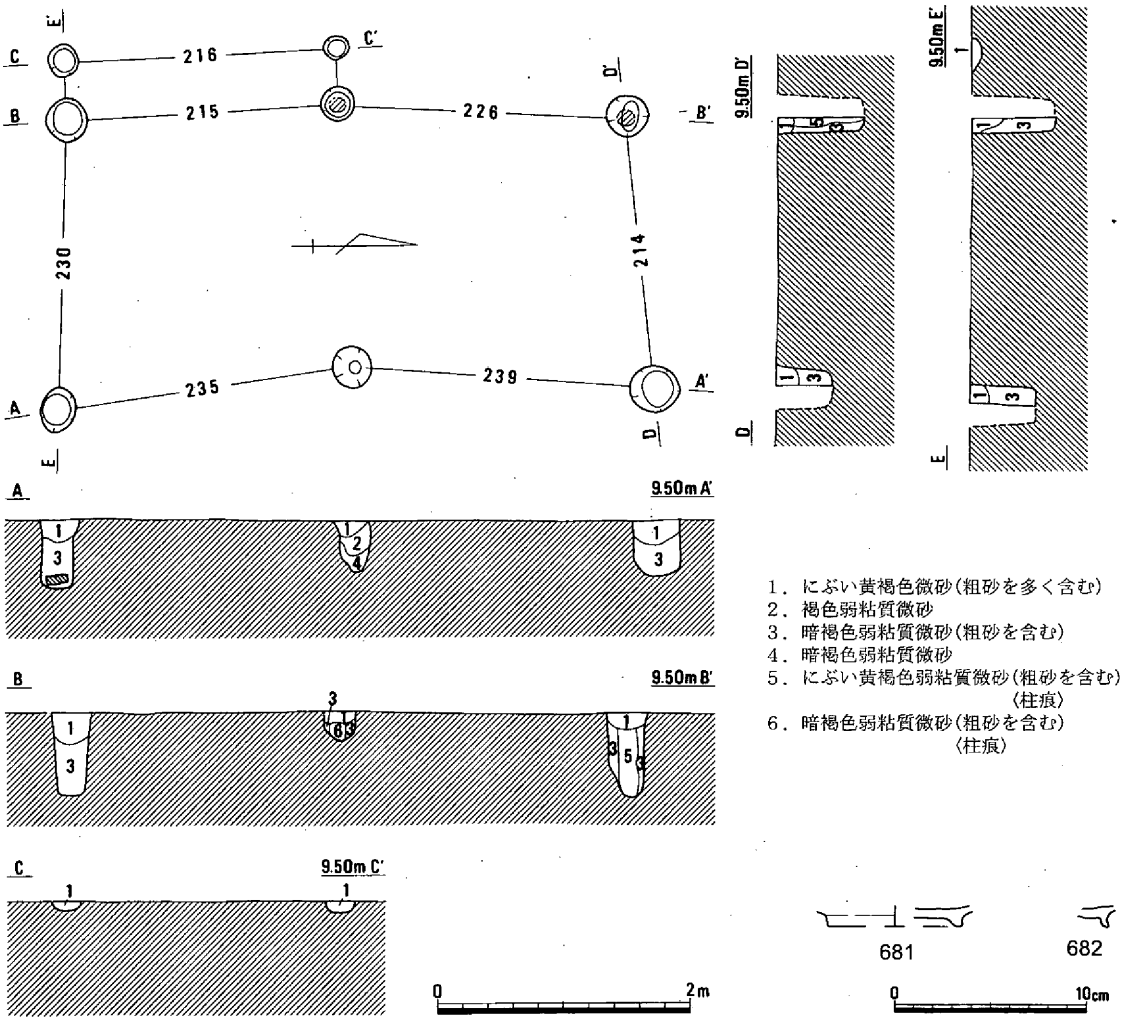
椀の特徴から時期は13世紀末と考えられる。（物部）

掘立柱建物４（第116図）

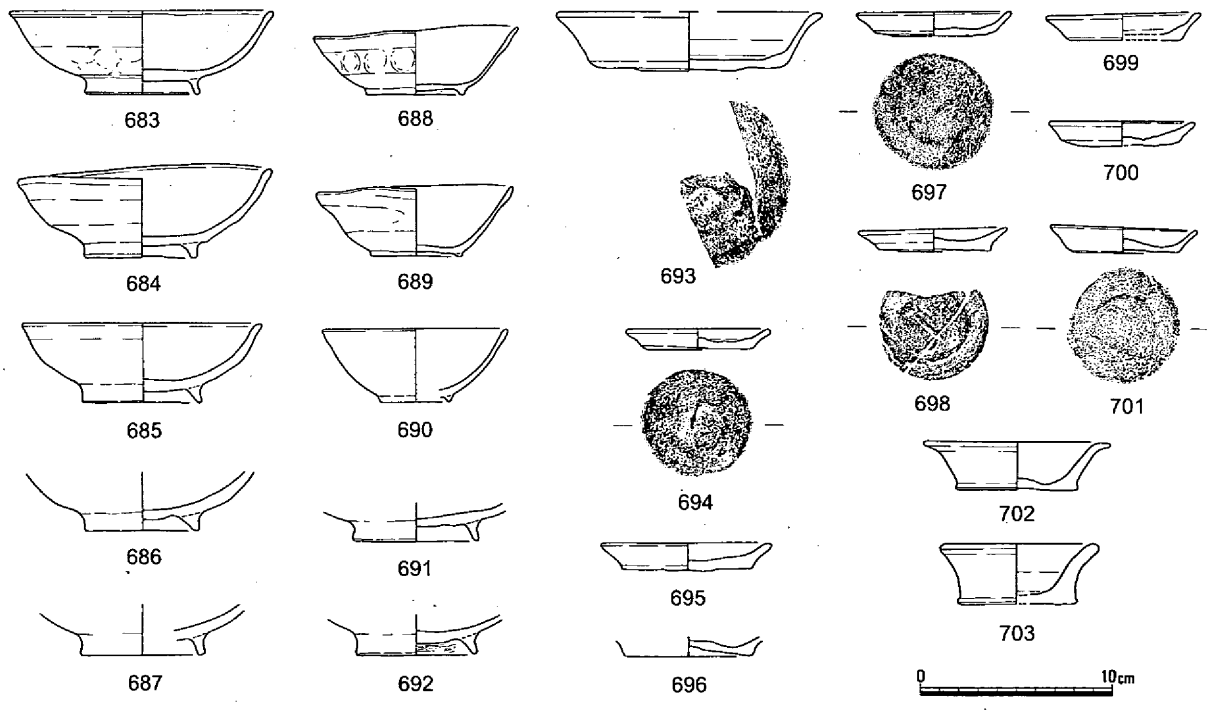
６区北半に位置する。２×１間の掘立柱建物で桁行4.74・4.41m、梁間2.39・2.15mを測る。棟方向はＮ－１°－Ｗでほぼ南北である。柱穴の直径は0.26～0.4m、四隅の柱穴の深さは0.5～0.67mと深く、梁間中間の柱穴は0.23～0.4mと浅い。この梁間中間の柱穴は四隅の柱穴を結ぶ直線上に乗らず、束柱かもしれない。南西隅の中穴には礎石が設置されている。また、この掘立柱建物には南西部に直径0.2m前後、深さ0.1mの小さな柱穴が２基伴う。縁側のような施設ではなかろうか。遺物は各柱穴に土器細片が少量混入する。681・682は早島式土器椀である。時期は鎌倉時代。（物部）



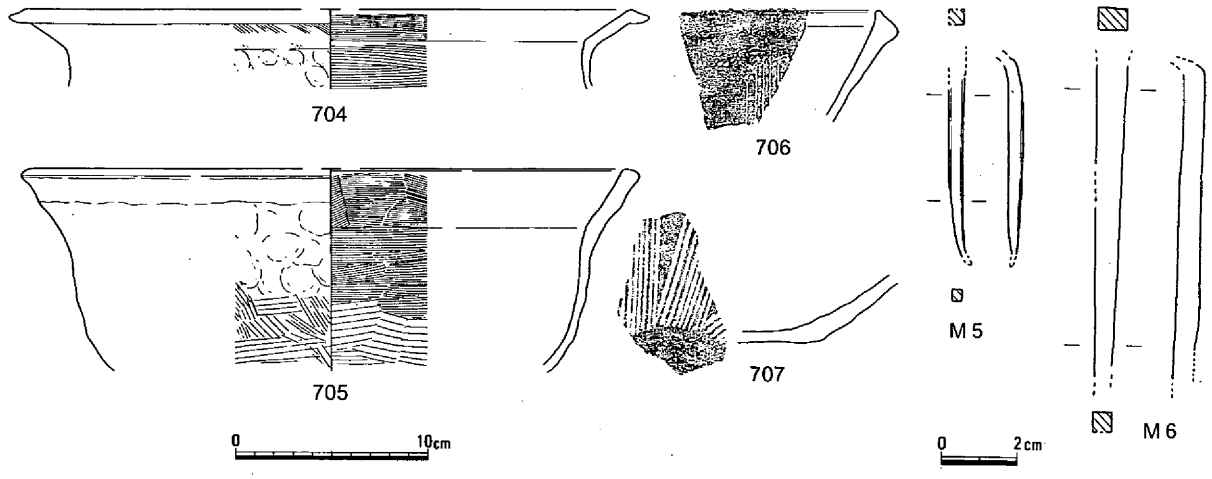
第115図　掘立柱建物３・出土遺物（１/60・１/４）



第116図　掘立柱建物４・出土遺物（１/60・１/４）



第117図　柱穴出土遺物１（１/４）



第118図　柱穴出土遺物２（１/４・１/２）

（２）井戸（第119図）

４区南半東側調査区境に位置し、堀り方の東半分は調査区外になる。また、土壙38に南側上部を切られる。平面形は直径約2.4ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.65ｍ、底面の標高は7.26ｍを測る。断面形は擂鉢状を呈し、埋土下半は粘土が堆積する。出土遺物は土器小片30点ばかりと曲げ物の破片が１点あった。**708**～**710**は早島式土器椀で、**708**は口径約14cm、内外ナデ調整であり、13世紀前後と考えられる。（物部）

（３）土壙

土壙36（第120・122図）

３区南半、竪穴住居２の北東約１ｍに位置する。平面形は1.80×0.97ｍの長方形を呈する。検出面からの深さは0.1ｍを測る。遺物は埋土中から土器小片30点ほどが出土したのみである。**713**は早島式土器椀で内外面はナデ、口径は11.8cm前後である。他に竈片、鍋片がある。鎌倉時代。（物部）

土壙37（第120・122図）

４区北半に位置する。現代の攪乱に若干切られている。平面形は1.67×1.57ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.56ｍ、底面の標高は8.43ｍを測る。**715**～**717**土師器鍋、**718**は亀山焼系擂り鉢、**C31**備前焼転用の円盤。時期は15世紀後半と考えられる。（物部）

土壙38（第120図）

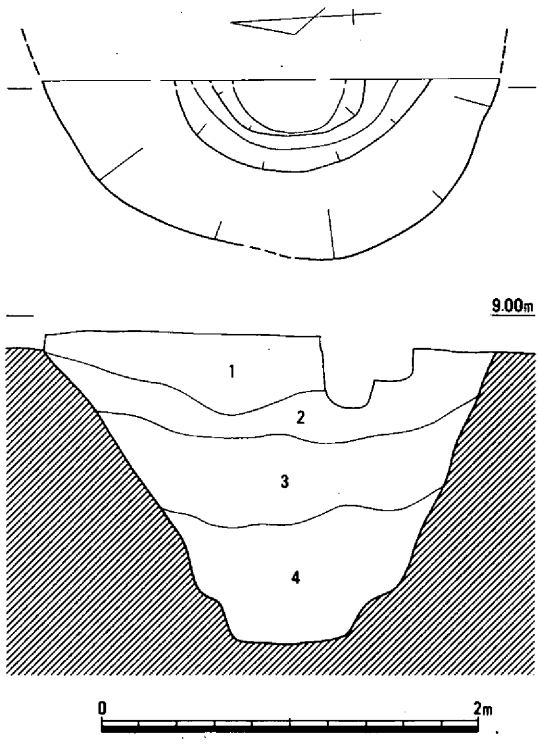
４区南半東側調査区界に位置し、井戸を切っている。土壙東半部は調査区外になる。平面形は1.72以上×1.38ｍの隅丸長方形を呈すると考えられ、検出面からの深さは0.06ｍを測る。埋土には退化した高台を持つ早島式土器椀の細片があり、14世紀前後頃と推定される。（物部）

土壙39（第121・122図）

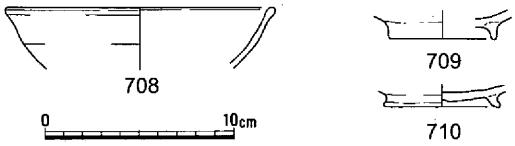
４区南半に位置する。土壙40の西に接し、土壙墓３に南東部を切られる。平面形は1.04×0.55ｍの隅丸長方形状を呈し、検出深は0.03ｍと浅い。土壙の南東隅に早島式土器椀**712**が伏せた状態でつぶれていた。内外面はナデ、口径13.9cm、器高5.6cmを測る。12世紀末頃か。（物部）

土壙40（第120・122図）

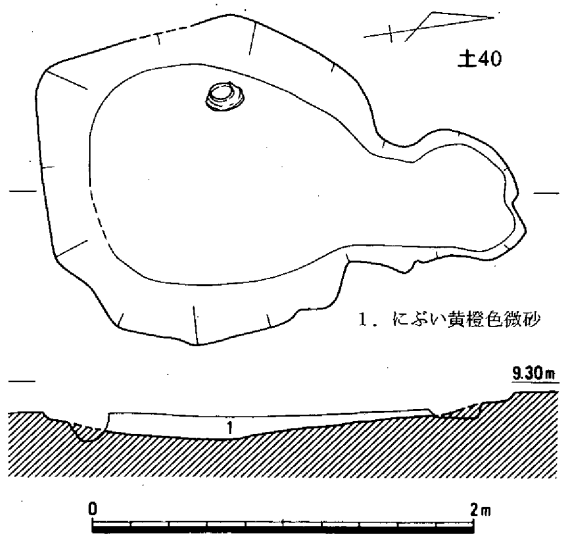
４区南半に位置する。土壙39に接し、土壙墓３を切っている。平面形は2.47ｍ×0.67～1.7ｍの不正形であり、検出面からの深さは0.19ｍと浅い。埋土中から完形の早島式土器椀**711**が出土したが、後述する土壙墓３が14世紀前後と考えられるので、混入したものだろう。（物部）



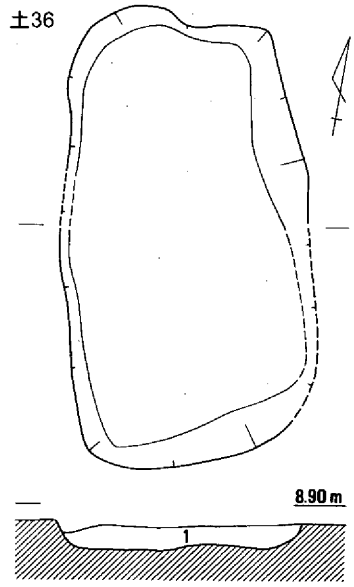
1．にぶい黄褐色土(礫を含む)
2．にぶい黄褐色土
3．黄灰色弱粘質微砂
4．オリーブ黒色粘土



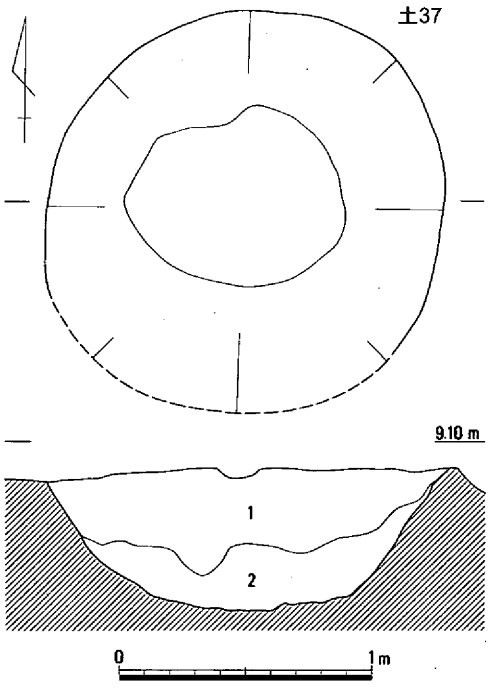
第119図　井戸・出土遺物（１/40・１/４）



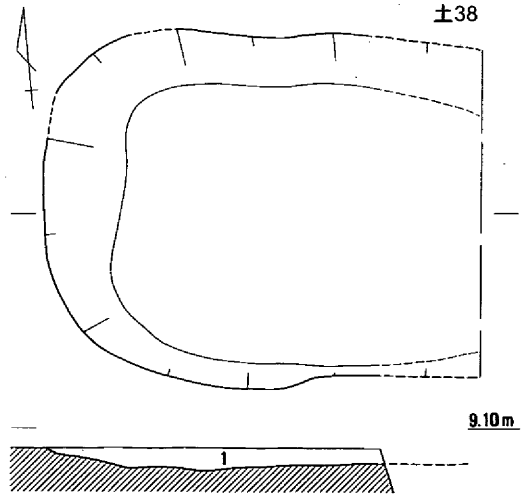
1．にぶい黄橙色微砂



1．にぶい黄褐色微砂(基盤土ブロック混入)

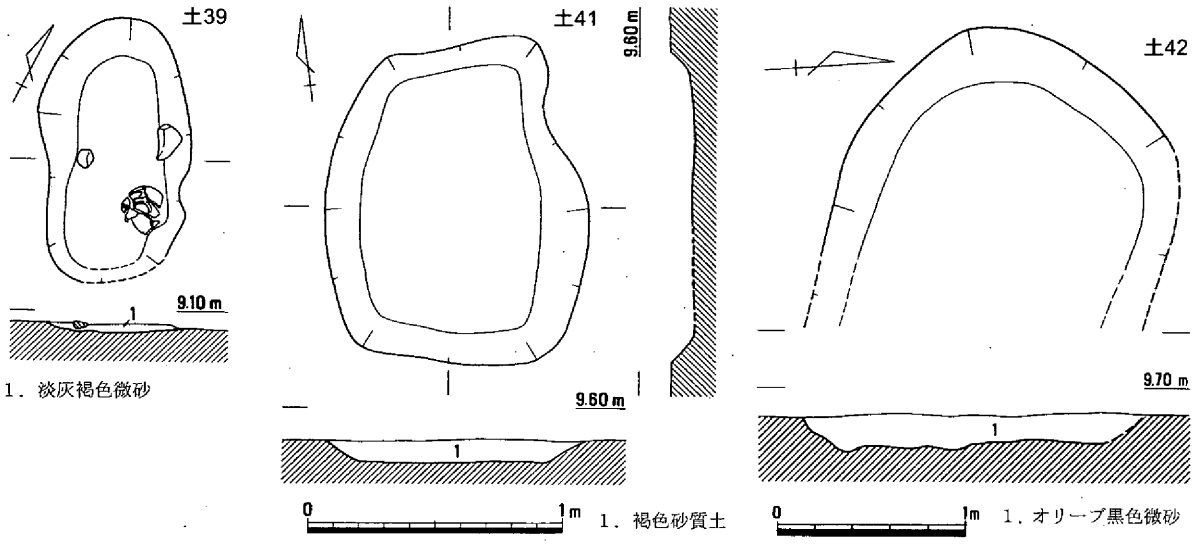


1．にぶい黄褐色粘質微砂(褐色土ブロックを含む)
2．灰色粘質微砂



1．暗灰黄色粘質微砂

第120図　土壙36～38・40（１/40・１/30）



第121図　土壙39・41・42（１/40・１/30）

土壙41（第121・122図）

８区のほぼ中央に位置する。平面形は1.29×1.04mの不正長方形を呈し、検出面からの深さは0.09mを測る。埋土中より早島式土器椀の小片714が１点あった。14世紀前後と考えられる。　（物部）

土壙42（第121図）

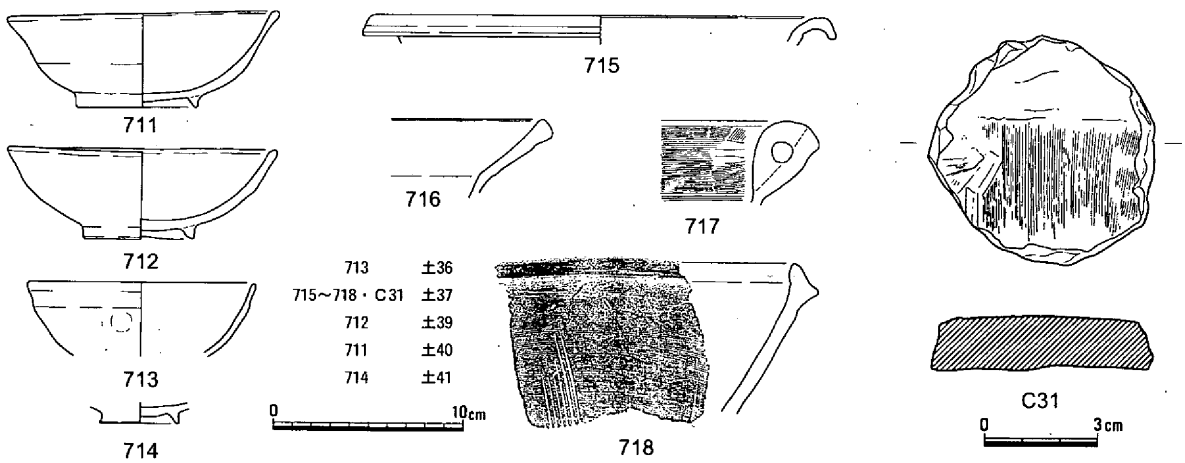
８区北半東側の調査区境に位置する。土壙の東半は調査区外になる。平面形は1.63m以上×1.70mの隅丸長方形状を呈すると推定され、検出面からの深さは0.17mと浅い。埋土中から土器小片３点および鉄釘と考えられる鉄器片１点出土した。墓の可能性もある。時期は中世。　（物部）

土壙43（第123図）

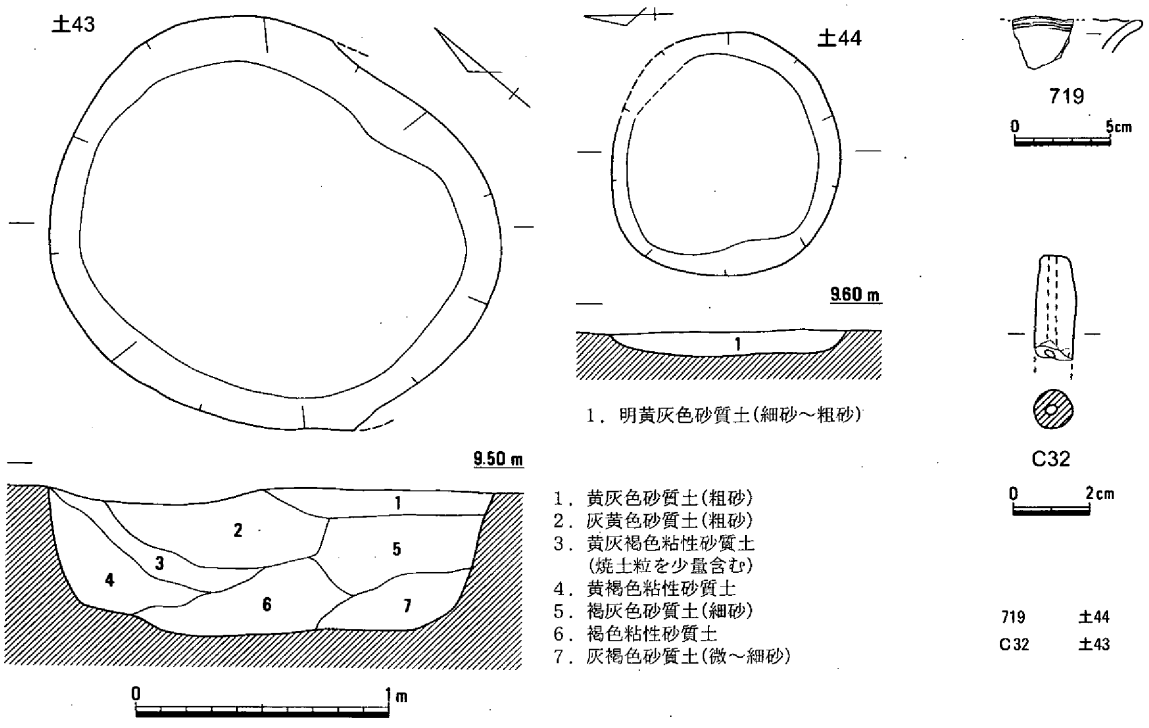
12区の南側に位置する。円形の土壙であり、長径1.79m、短径1.56m、深さ0.59mを測る。井戸のような用途が推測されるが、詳細は不明である。土壙内から主に弥生土器片が出土したが、検出面や埋土の状況から中世の遺構の可能性が高い。　（金田）

土壙44（第123図）

12区の北側に位置する。径約0.9mの円形の土壙である。図示できないが、中世の土師器と思われる小片が出土していることから、中世の遺構であると考えられる。　（金田）



第122図　土壙36・37・39・40・41出土遺物（１/４・１/２）



第123図　土壙43・44・出土遺物（１/30・１/４・１/２）

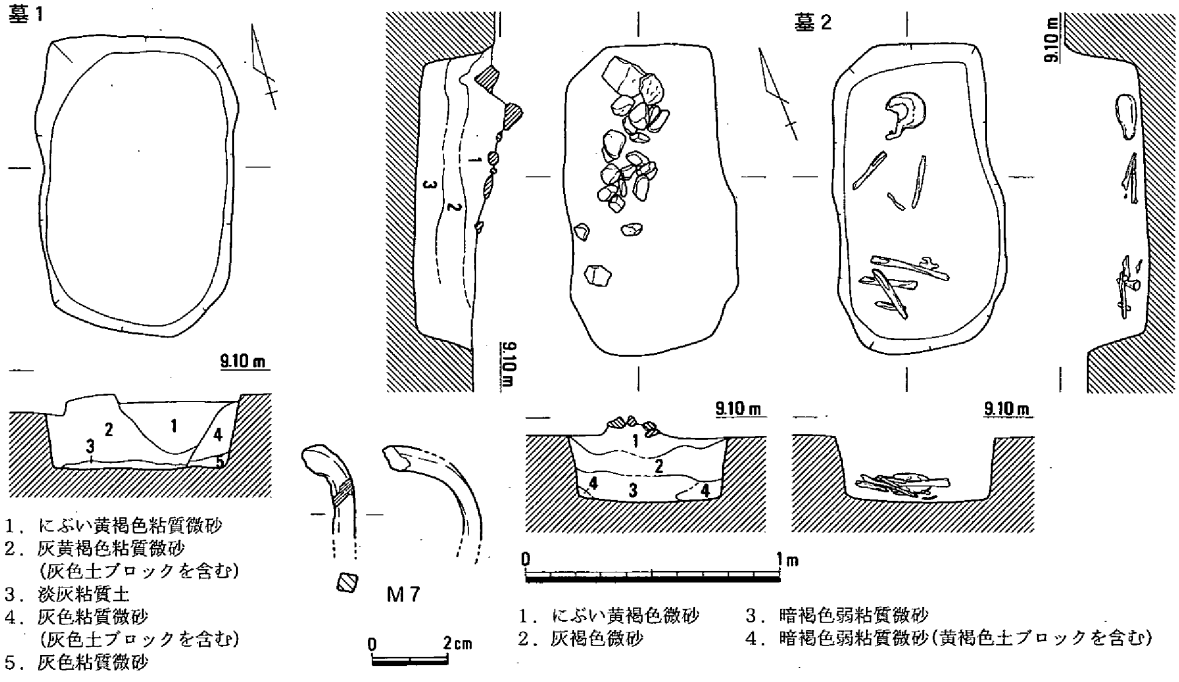
（４）土壙墓

土壙墓１（第124図）

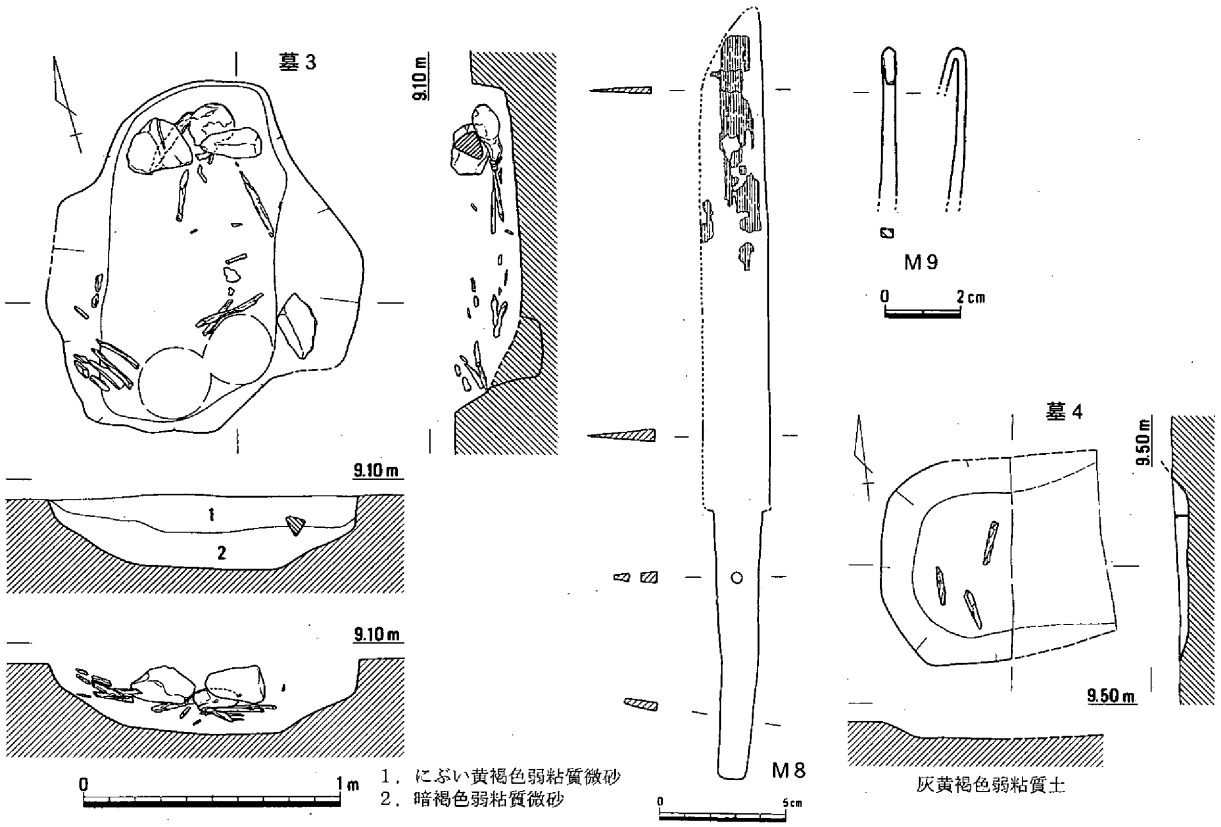
５区北端に位置する。後述の畦畔に伴う溝に切られている。平面形は1.17×0.77ｍの長方形を呈す。主軸はＮ－30°－Ｅ。断面の土層において木棺の痕跡らしき縦に入るラインを検出。埋土中から鉄釘Ｍ７が出土。人骨は検出されない。時期は畦畔が室町期と考えられるのでそれ以前。　（物部）

土壙墓２（第124図）

４区南半に位置する。土壙40の南、土壙墓３の東に隣接する。平面形は1.22×0.60～0.65ｍの



第124図　土壙墓１・２・出土遺物（１/30・１/２）



第125図　土壙墓３・４・出土遺物（１/30・１/３・１/２）

長方形を呈す。検出深0.25m。主軸はＮ－22°－Ｅ。埋土最上面のやや北西より0.9×0.3mの範囲に５～20cm大の礫の集積がみられた。人骨は頭、腕、足の骨が遺存した。頭位は北向き、西に体を横向けて足を曲げて埋葬している。埋土中に高台の退化した早島式土器椀の細片が混じっていることから14世紀前後頃と考えられる。歯の鑑別を依頼した（第８章第１節）。（物部）

土壙墓３（第125図）

４区南半に位置する。土壙墓２の西に隣接し、土壙40に切られている。1.40×1.22～0.80mの不整長方形を呈す。主軸はＮ－13°－Ｅ。人骨は頭、腕、足の骨が遺存した。西に体を横向けて足を曲げて埋葬している。頭部西側に鉄製短刀**Ｍ８**が副葬されている。また、頭骨と短刀の直上に20cm大の礫が乗っていた。木棺の腐朽により落ち込んだものだろうか。他に鉄釘が**Ｍ９**など３点出土。埋土中に高台の退化した早島式土器椀の細片が混じっていることから14世紀前後頃と考えられる。（物部）

土壙墓４（第125図）

９区北半、東側の調査区境に位置し、東半分は調査区外になる。平面形は0.9以上×0.80mの長方形を呈す。検出深0.07m、主軸はＳ－82°－Ｅ。足の骨が遺存する。頭位は東向き。埋土中に早島式土器の細片が少量混入している。時期は中世。（物部）

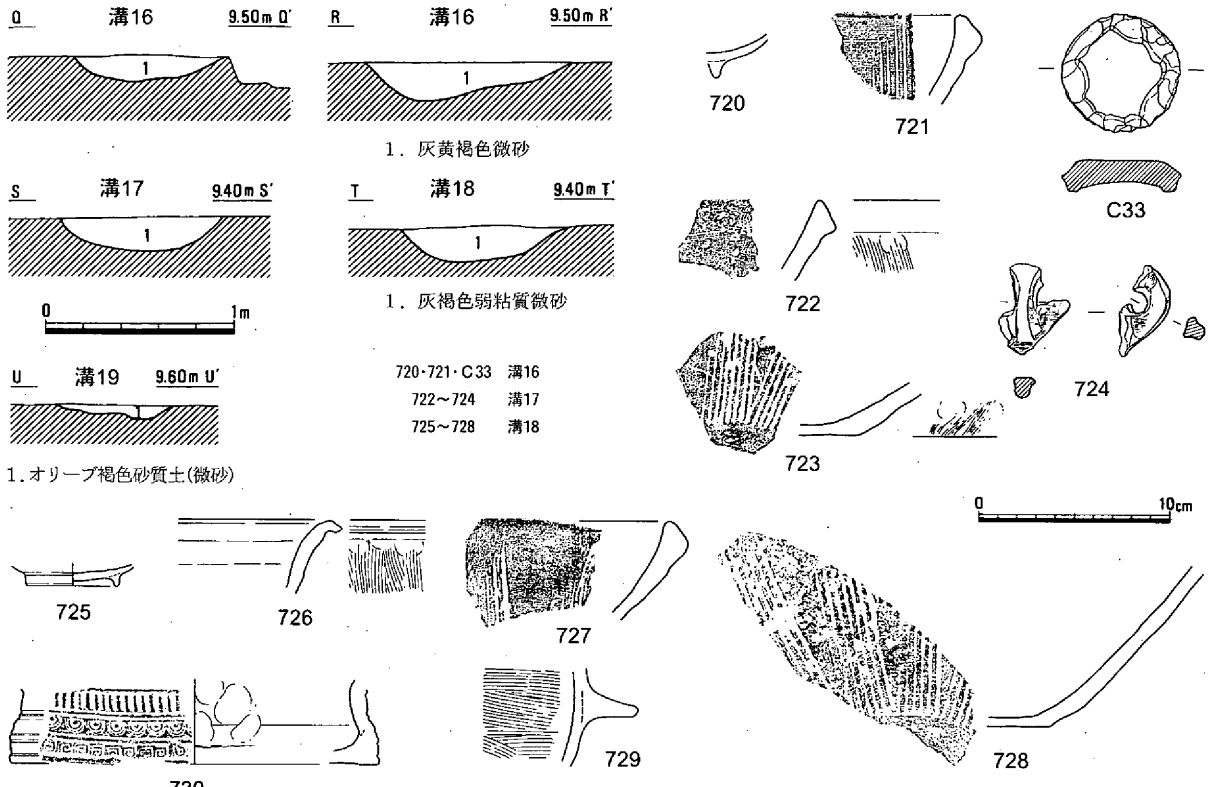
（５）溝

溝16（第126図）

４区北半に位置する。幅0.8～1.08m、深さ0.2mを測る。西から東へ流れていたと考えられる。早島式土器椀**720**、亀山焼系擂鉢**721**、青磁椀転用の円盤**Ｃ33**などが出土。15世紀前半頃。（物部）

溝17・18（第126図）

溝17・18は６区南半に位置し、同一の溝と考えられる。北から南に直線的に延び、一旦２m程途



第126図　溝16～19・出土遺物（１/40・１/４）

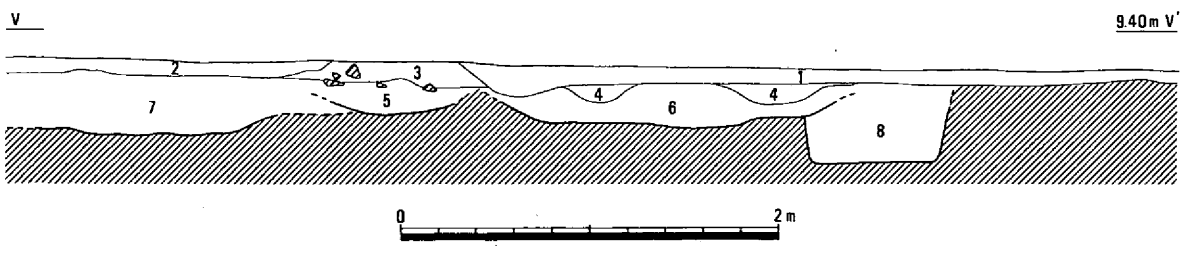
切れ、再び緩やかに湾曲しながら西に流れる。幅0.5～1.0m、深さ0.18m。出土遺物には、早島式土器椀、鍋、羽釜、亀山焼系の擂鉢、風炉などがある。時期は15世紀頃前半と推定する。　（物部）

溝19（第126図）

９区北端部に位置する。検出幅0.6m、深さ0.07mの浅い溝である。土器小片が３片出土したが、正確な時期は不明。10区旧河道下がり部の水田に伴う溝と主軸が同じことから、室町時代か。　（物部）

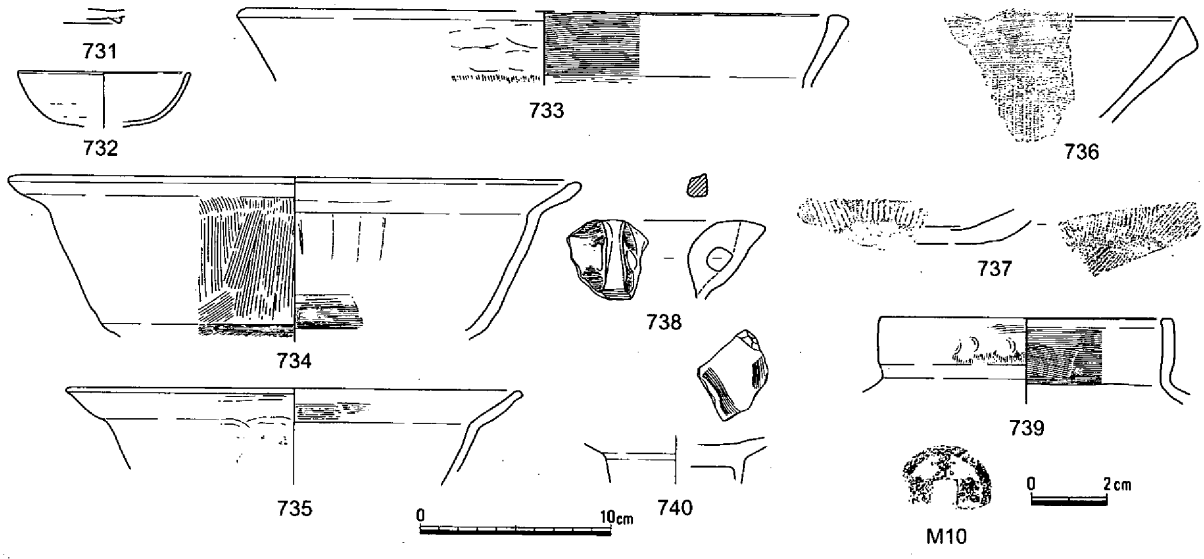
（６）畦畔（第127・128図）

５区および６区南半に位置する。盛り土を確認できたのは５区と６区の境約５ｍで、それ以外は畦畔の両側に掘られた浅い溝のみ検出された。この溝は２条１対で２対あるので畦畔の改修が想定される。掘立柱建物１、土壙墓１を切っている。検出長39m、基部の幅1.2m、上面の幅0.7m以内、検出面までの盛り土の高さ0.13mを測る。盛り土内部に拳大の礫が多くみられた。畦畔に伴う水田層および段が２箇所で検出された。溝17南端と溝15北端を結ぶ地点に１段、溝13の北に１段あり、南に



1．にぶい黄褐色弱粘質微砂(Fe・Mn粒を含む)(水田層)
2．にぶい黄褐色弱粘質微砂(Fe・Mu粒を含む)(水田層)
3．灰黄褐色(Fe・Mn粒を含む)(6-19畦畔)
4．にぶい黄褐色弱粘質微砂(畝状遺構)
5．灰黄褐色粘質微砂(5-6溝)
6．にぶい黄褐色(5-4溝)
7．灰黄褐色粘質微砂(5-7溝)
8．にぶい黄褐色弱粘質微砂(5-62墓)

第127図　畦畔（１/40）

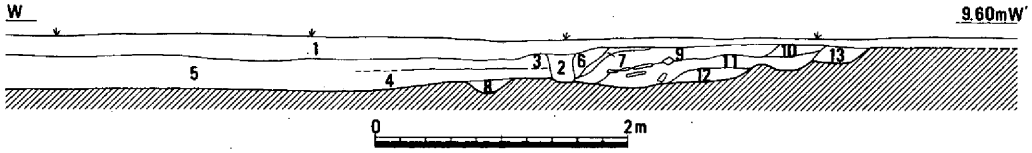


第128図　畦畔出土遺物（１/４・１/２）

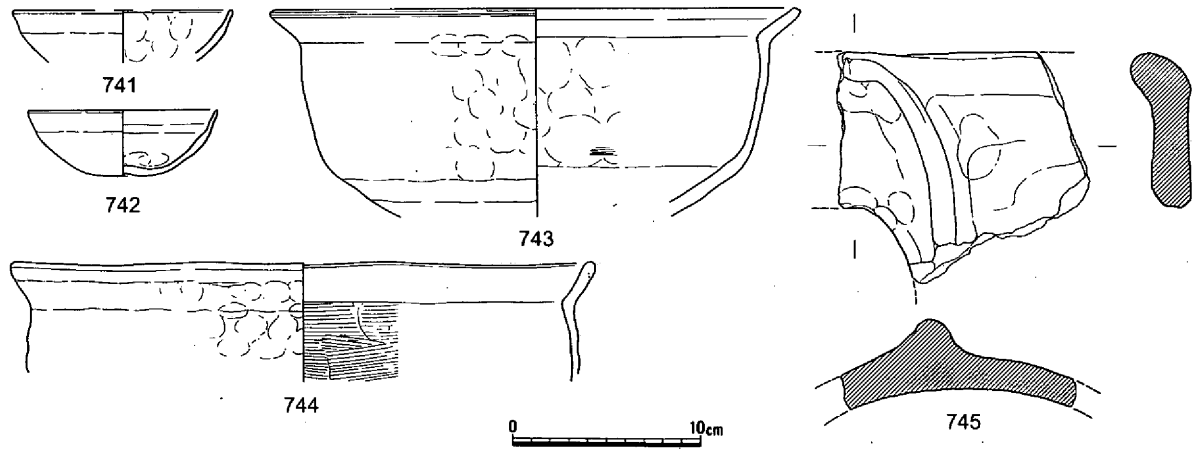
下がる。第128図は畦畔盛土、溝、水田層から出土した遺物である。731・732早島式土器椀、733～735・738土師器鍋、736・737は内面ハケメ調整の亀山焼系擂鉢、739は瓦質の釜、740は櫛描きのみられる青磁椀、Ｍ８は初鋳1004年の銅銭「景徳元寶」である。時期は15世紀前半頃と考える。　（物部）

（７）下がり（第129・130図）

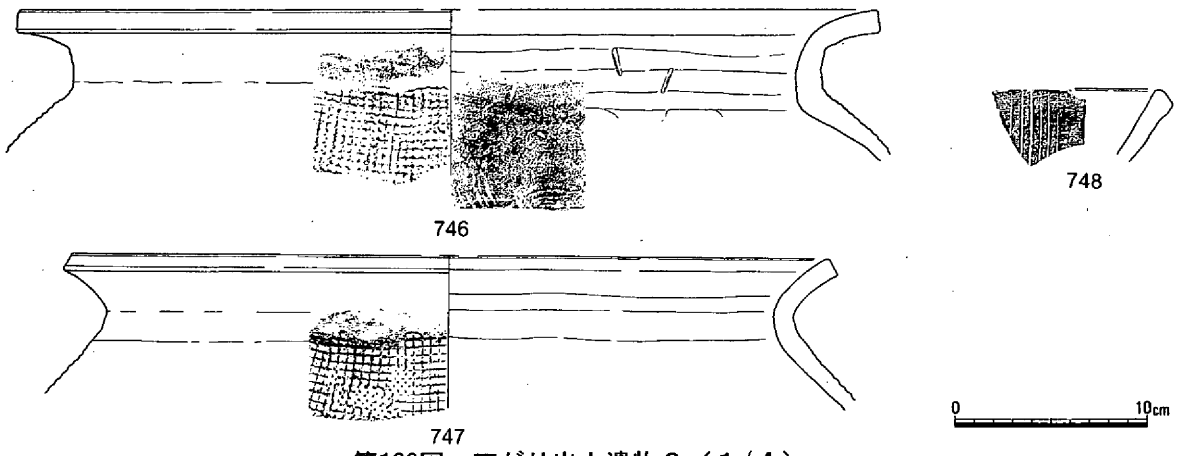
10区に位置する旧河道南岸の下がりである。緩やかな下がりであり、水田として利用されている。水田層は現代と、灰色・黄色粘質土の互層である近世の二時期が確認されるが、それ以前の水田に伴



1．耕作土(現代水田層)
2．暗渠
3．灰黄褐色粘質土
4．明黄褐色粘質土
5．３・４層の互層
6．にぶい黄橙色砂質土(固い)
7．にぶい黄橙色砂質土(やや黄色っぽい・固い)
8．灰黄褐色粘質土
9．にぶい黄褐色砂質土(固い)
10．褐色砂質土
11．暗褐色弱粘性砂質土(固い)
12．灰黄褐色粘質土
13．暗褐色砂質土



第129図　下がり・出土遺物１（１/60・１/４）

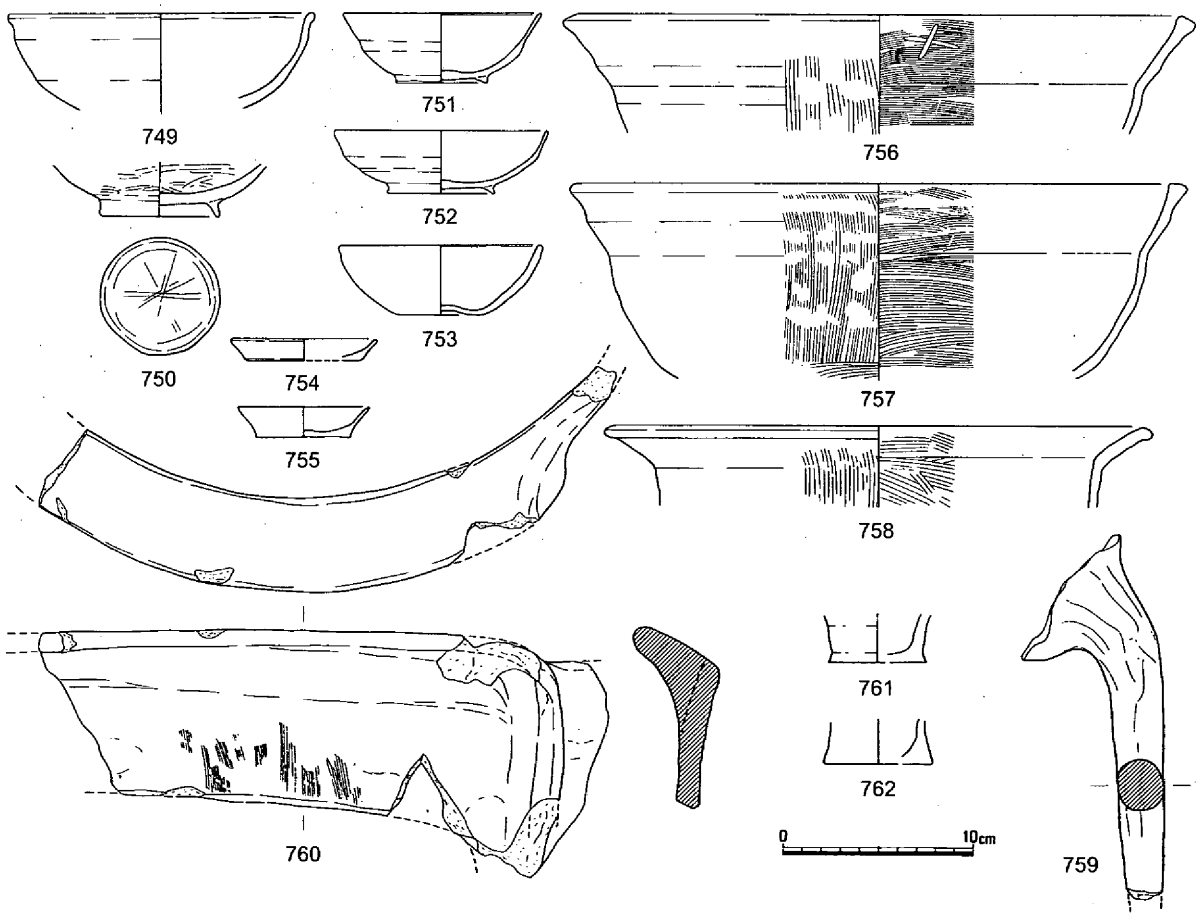


第130図　下がり出土遺物２（１/４）

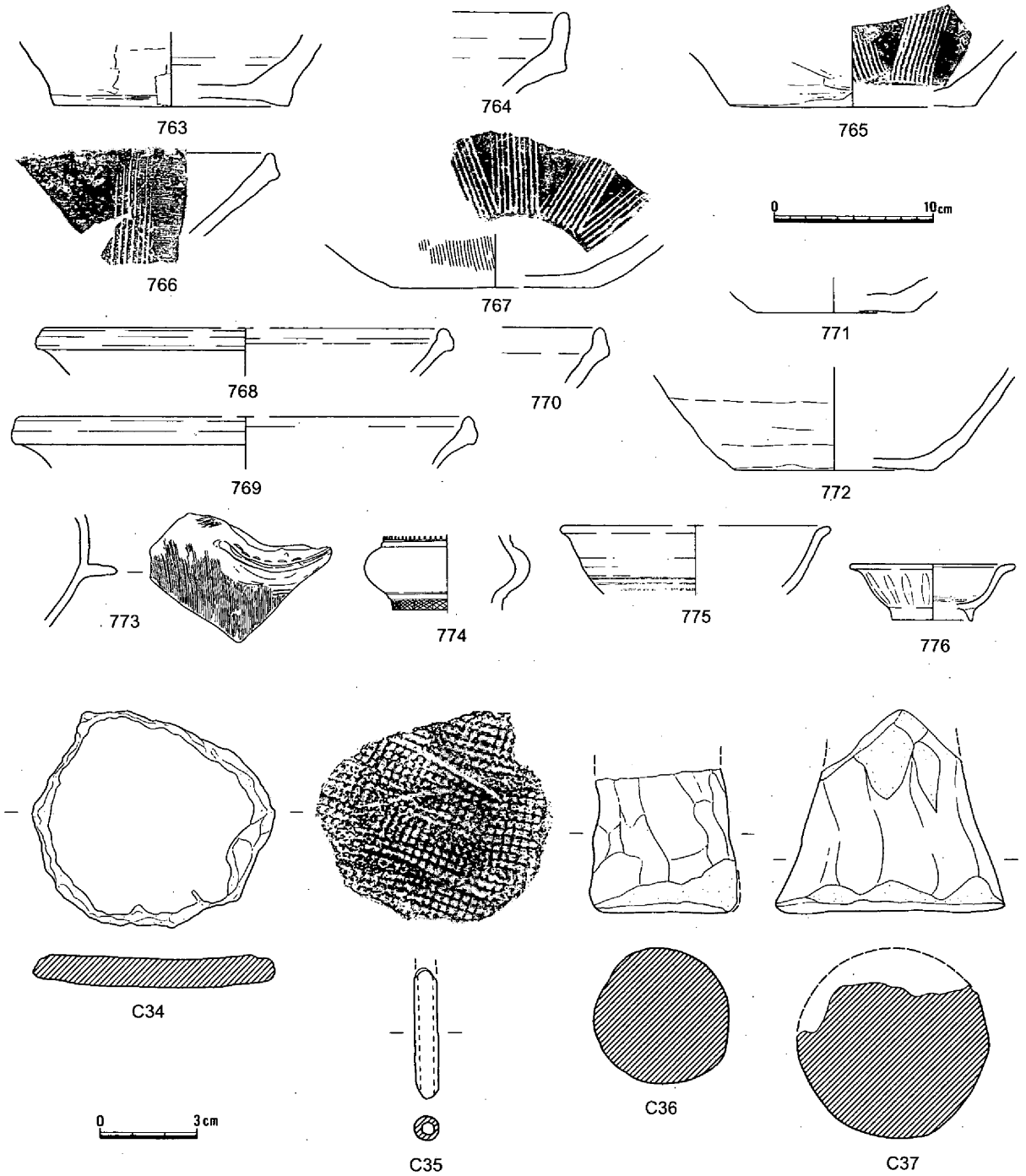
う溝も検出された。また肩部には土手あるいは畦畔と考えられる固く締まった盛り土層が確認された。その盛り土中には礫や土器片が多く投棄されている。**741・742**は早島式土器椀で**742**は高台が付かない。**743・744**土師器鍋、**745**竈、**746・747・748**は亀山焼の甕と擂鉢である。時期は14世紀代と考えられる。（物部）

（８）遺構に伴わない遺物（第131・132図）

大半が３～６区の中世～近世・現代の水田耕作土から出土したものである。**741**～**753**は早島式土器椀で、**749**は口径15.9cm、**750**は内外面にヘラミガキがみられ、底部外面には２条１単位の線刻を４単位、放射状に描いた記号がある。**751**の口径は10.4cm、器高4.8cm、**752**の口径11.2cm、器高5.6



第131図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第132図　遺構に伴わない遺物２（１/４・１/２）

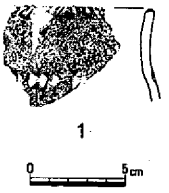
cm、753はいわゆるへそ椀で口径10.6cm、器高3.7cmを測る。754・755は土師器皿、756～759は土師器鍋で、756の口縁部内面には「十」のヘラ記号がある。760は竈の正面上部片。761・762は吉備中山型とされる小杯である。763は備前焼の甕、764・765は備前焼の擂鉢である。766・767は亀山焼系の擂鉢、768～772は東播系の鉢で、灰白色を呈し、砂粒の多い胎土を持つ。773は瓦質土器の鍋で薄く湾曲する把手が付く。774は奈良火鉢と呼ばれる瓦質土器の風炉である。775・776は青磁の椀と皿である。土製品には亀山焼甕体部を転用した円盤Ｃ34、土錘Ｃ35、灰白色を呈する不明品のＣ36・Ｃ38がある。

（物部）

第５章　井手見延遺跡

第１節　調査の概要

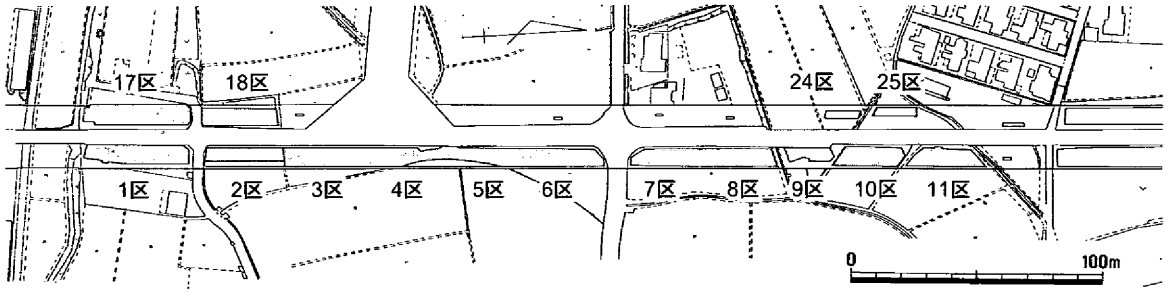
井手見延遺跡は、総社市井手字見延に所在する弥生時代～中世の集落遺跡で、北緯34°40′24″、東経133°46′24″に位置する。この遺跡は、昭和50年に文化庁より刊行された遺跡地図において金井戸見延遺跡として周知されていた。しかし、今回の調査によって低位部を挟んで南北二つの微高地に区分されることが明らかとなり、なおかつ調査地点が大字井手に含まれることから、南側の微高地と低位部を併せて井手見延遺跡と呼称することとした。



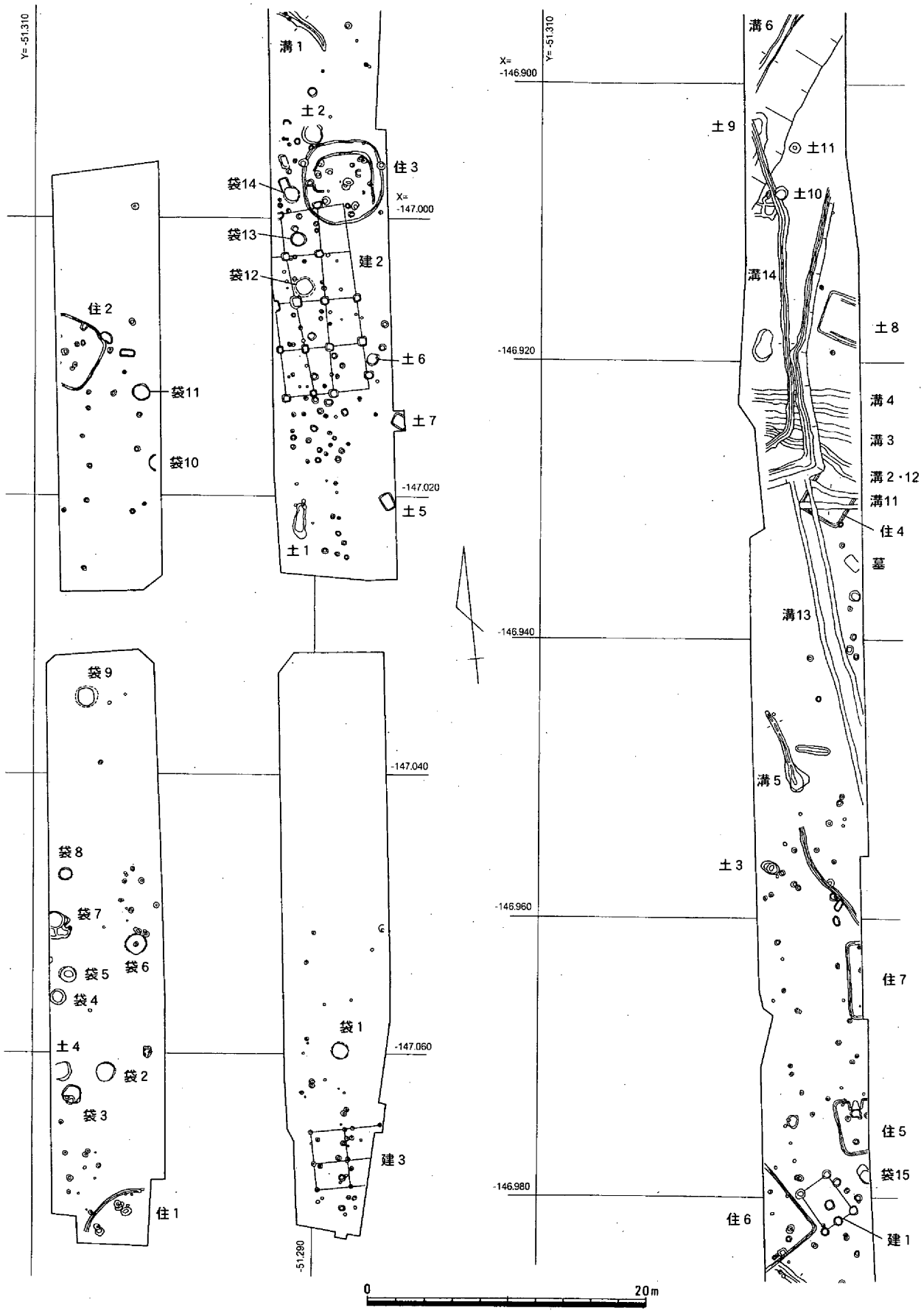
第133図　基盤層出土の縄文土器（１/４）

この遺跡の北端は、南西から北東に走る幅約50ｍの低位部によって井手天原遺跡と隔てられている。また、その南端は西から東へ走る幅約90ｍの旧河道によって三須畠田遺跡と区切られている。この河道と低位部に挟まれた微高地は、調査地点の東側に東西約250ｍ、南北約400ｍの規模で広がっており、造成工事に伴い総社市教育委員会によって調査された金井戸鴻崎遺跡もこの微高地上に立地している。現在、遺跡の大半は水田として利用されており、井手天原遺跡に比べ農村としての景観が保持されている。標高10.2ｍを測る微高地部分では、厚さ40㎝ほどある近世～現代水田層の下に砂層が広がっているが、弥生時代～中世にわたる遺構はこれを基盤として掘りこまれている。一方、低位部では古代～近世の水田層が厚さ約１ｍにわたって重複しており、下層の標高は9.0ｍを測る。また、ここでは明治以降に大幅な地上げが行われており、現在の景観が形成されたのは近時のことのようである。

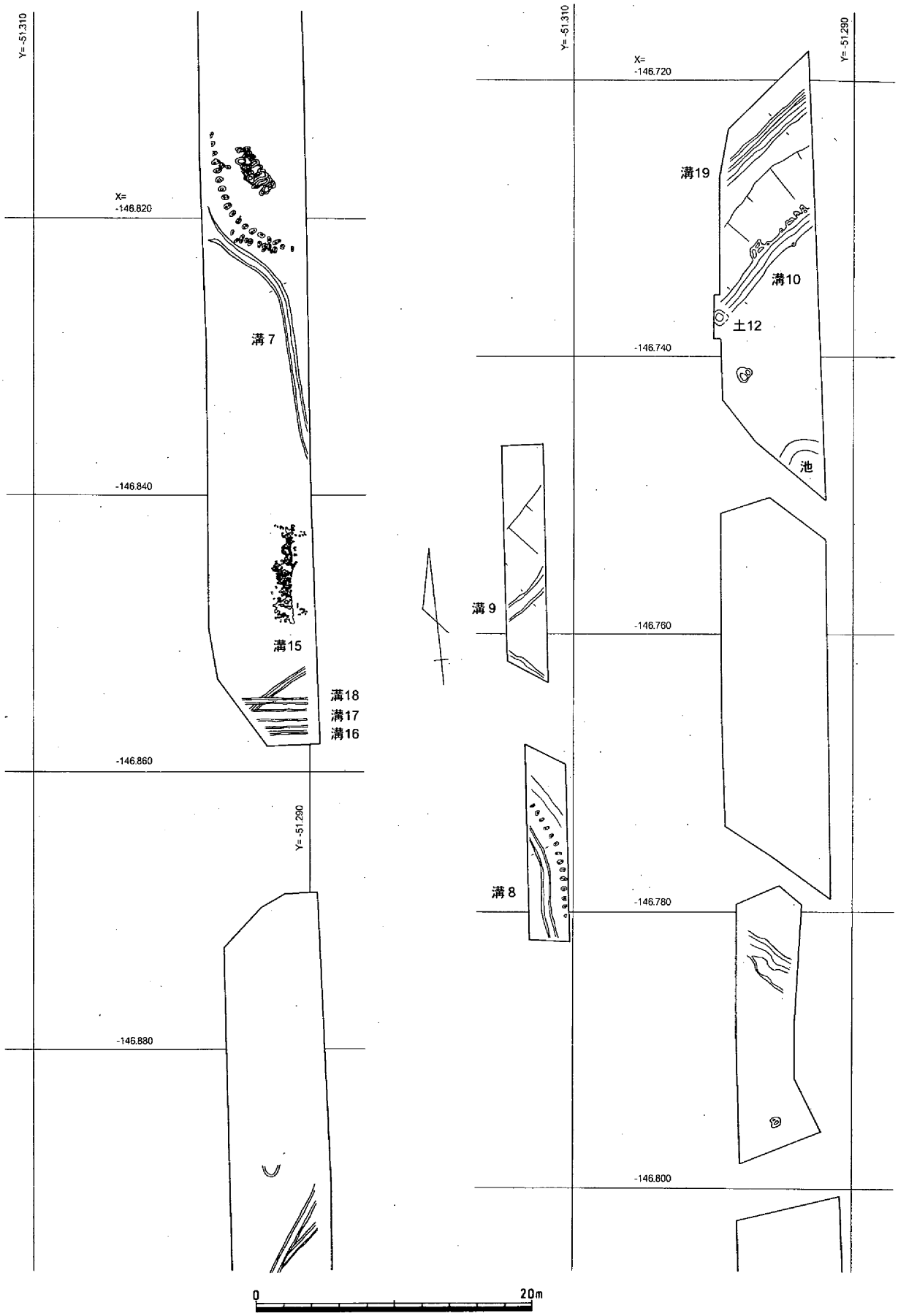
今回の調査で明らかとなった遺構のうち、最も古く位置付けられるものは弥生中期前半のものであるが、その基盤となる砂層からは縄文時代晩期の土器が出土しており、この遺跡の形成がこの時期まで遡る可能性がある。弥生時代の遺構の大半は後期前半に属するが、これは中期後半や後期後半が遺跡の主体をなす三須畠田遺跡、井手天原遺跡とは対照的であり、両者が補完的な役割を果たしていたものと推測される。このような関係は古墳時代前期まで続くが、古墳時代後期には独立した集落がそれぞれ営まれるようである。しかし、この時期にはいずれの遺跡においても鉄器生産が行われていることからすれば、それらが全く無関係であったとも思われない。古代の遺構には掘立柱建物や土壙、溝などがあり、低位部も水田として利用され始めている。土器や瓦など多量の遺物が出土したが、その中には陶硯も含まれており、付近に公的施設の存在も予想される。しかし、中世の遺構は少なく、集落の中心は東側にあるものと思われる。近世に入ると耕作にかかわる溝が微高地上にも見られるようになり、この時期に遺跡一帯の水田化が推し進められたものと思われる。（亀山）



第134図　調査区配置図（１/3000）



第135図　遺構全体図１（１/400）



第136図　遺構全体図２（１/400）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

（１）竪穴住居

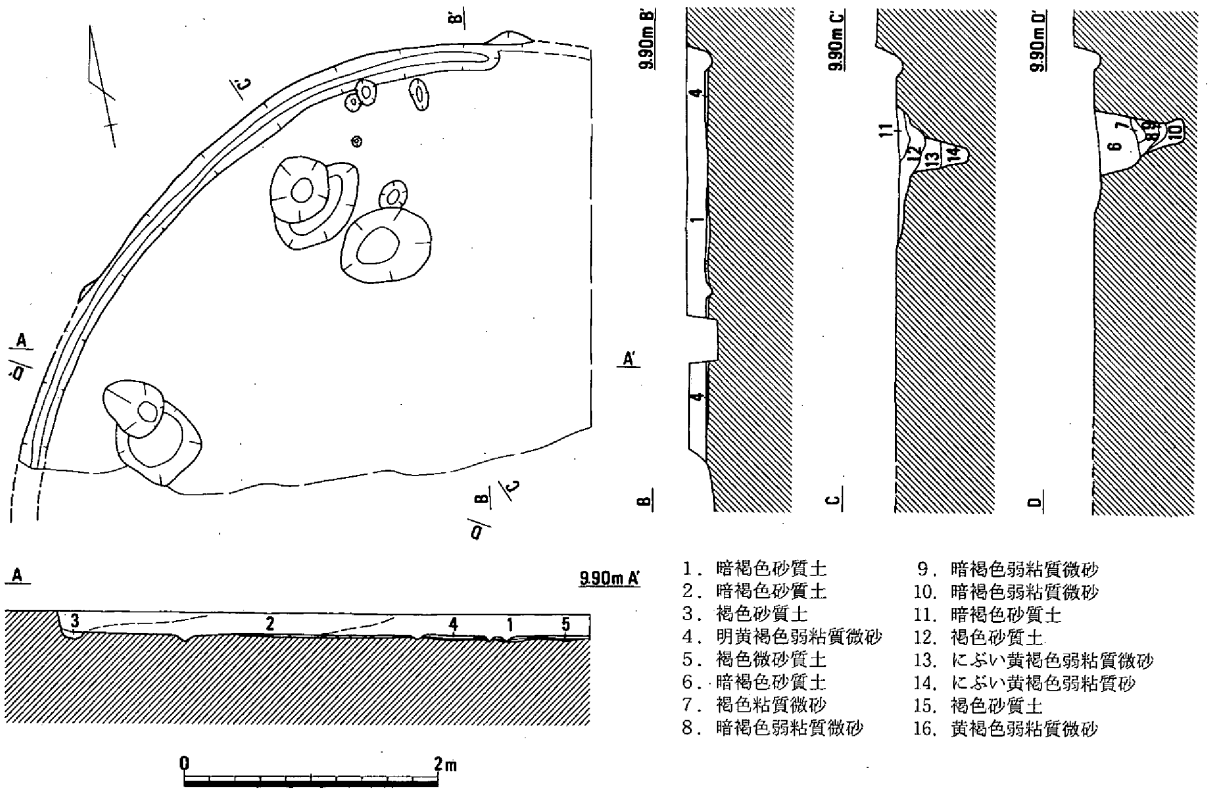
竪穴住居１（第137・138図　図版22・26）

17区南端に位置する。住居の東１/４は調査区外になり、南１/２は現代の用排水路によって掘削されている。このことから、井手見延遺跡の微高地南端は少なくとも10m程度は現状より南に延びていたと推測される。用排水路は旧河道の名残と推定されているもので、いつの時期かははっきりとしないが、微高地の南端を削る大規模な掘削があったとみられる。

竪穴住居の平面形は円形を呈し、直径は推定7.8m、検出面からの深さは約0.2m、底面の標高9.48ｍを測る。底面には明黄褐色弱粘質微砂の貼り床（第４層）を厚さ１cm弱程度施している。中央部付近では貼り床が２面認められ、床の貼り直しが行われている。壁体溝は幅約0.15m、深さ約６cmを測る。北部で一旦途切れるようである。直径0.7m、深さ0.6m程度の柱穴が２基検出された。８～９本柱と推定される。壁体溝から柱穴の中心までの距離は0.6～0.8mである。検出された柱穴２基のうち北側の柱穴の南東に隣接する楕円形の堀り方は、深さ６cmの浅い窪みである。埋土は砂っぽく、東から流入した状況がみられた。

出土遺物は少ない。土器は埋土中からの出土である。**２**はにぶい黄橙色を呈する甕で、内面はヘラケズリを頸部下まで施す。**３**は橙色を呈する高杯脚部で端部が拡張する。外面には数条の沈線文があり、また小径の円形透かしが施されている。Ｊ１は緑色凝灰岩製と考えられる管玉である。長さ1.8cm、直径0.6cm、床面から出土した。

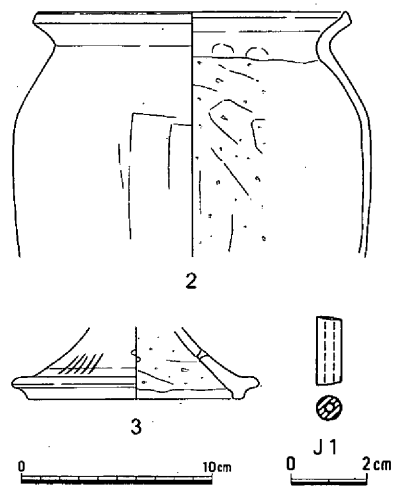
以上、土器の特徴から弥・後・Ⅰに比定される。　（物部）



第137図　竪穴住居１（１/60）

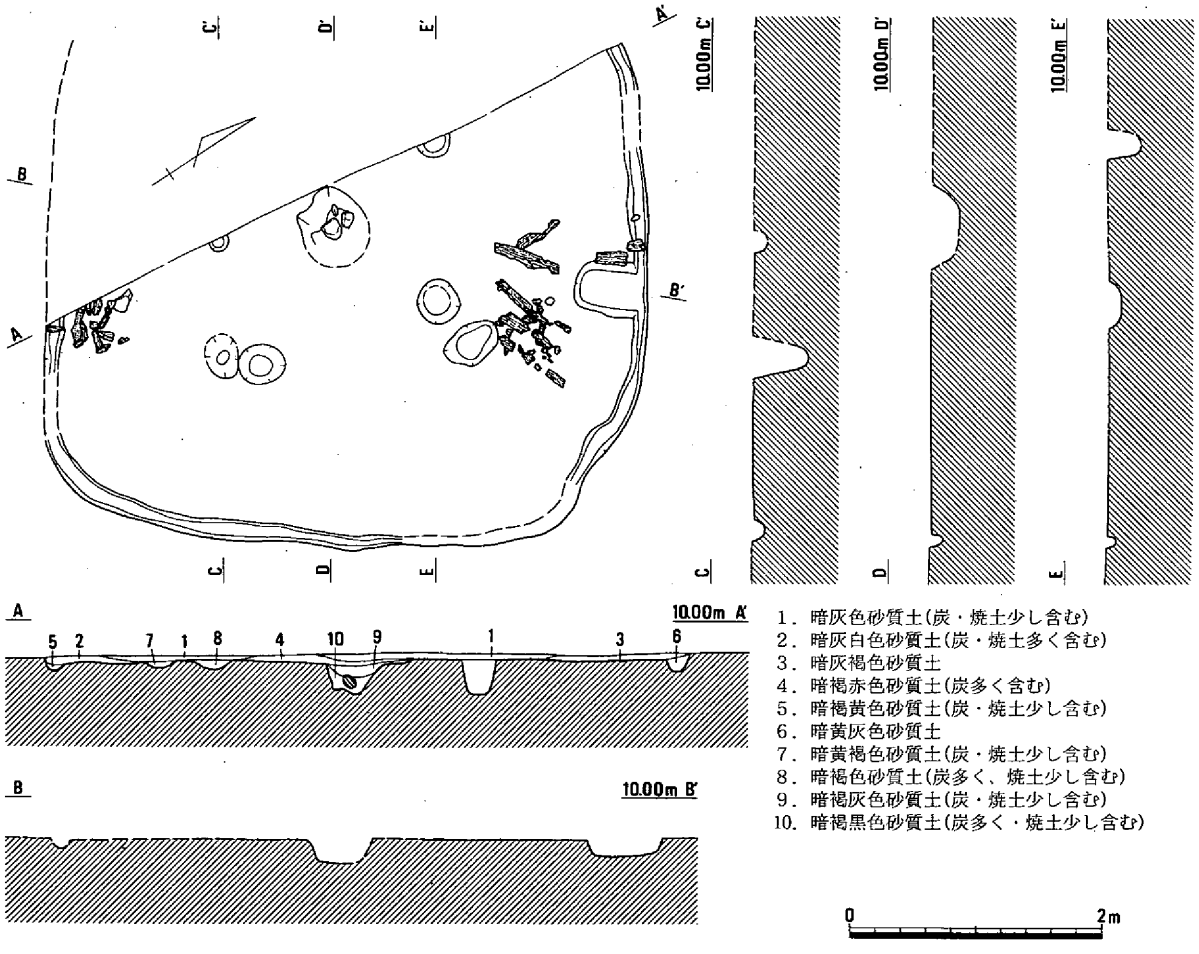
竪穴住居２（第139・140図　図版22）

18区の中央西よりに位置する。検出面での平面形は、西側約１/３が調査区外となるため明確ではないが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、計測可能な部分で長軸4.78m、短軸4.04mを測る。床面中央部において中央穴を、住居北辺の中央付近で隅丸方形の土壙を検出した。中央穴の埋土中には炭、焼土を含むが、被熱痕跡は確認できなかった。床面において炭化材を検出し、さらに床面直上の埋土中に炭、焼土を多く含むことから、この竪穴住居は焼失したものと推測する。

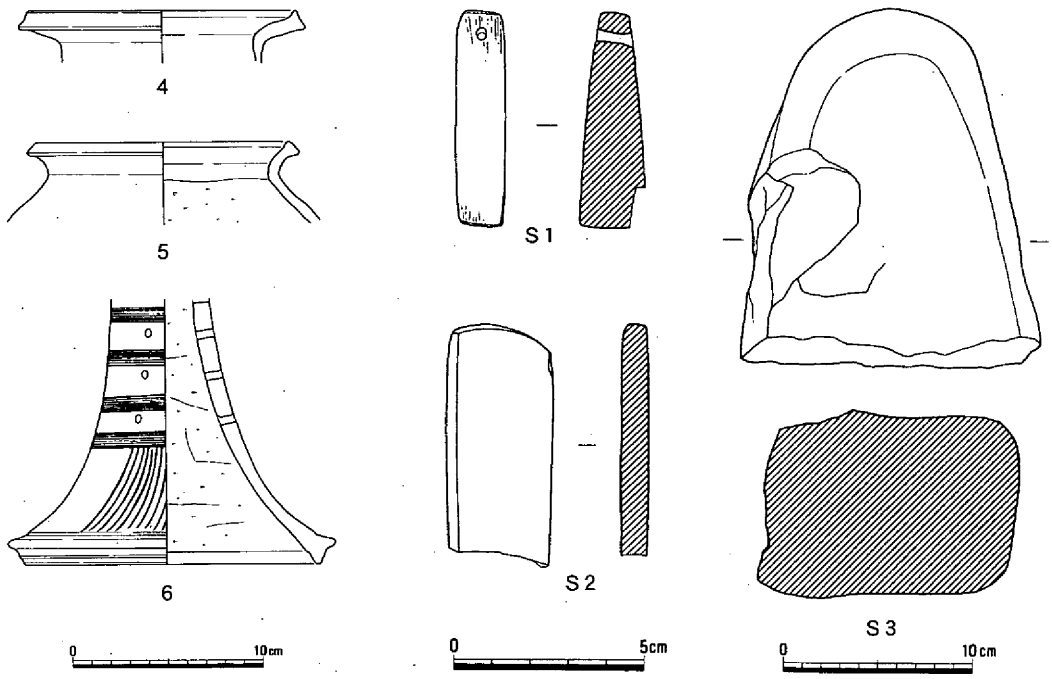


第138図　竪穴住居１出土遺物（１/４・１/２）

遺物は弥生土器、石器が出土した。壺４は外面にススが付着する。口径13.9cm。甕５は中央穴より出土した。内面は頸部までヘラケズリが及ぶ。口径13.1cm。高杯６は床面の炭化材とともに検出した。残存する脚柱部には７条１単位の櫛描直線文が４本廻り、透かし孔をその間に穿つ。脚裾部には12本１単位のヘラ描沈線文を施す。Ｓ１～３は砥石である。Ｓ１は穿孔が確認できることから、提げ砥としての機能が推察される。穿孔は両側より施されたものである。北側の壁体溝より出土した。Ｓ３は中央穴より出土した。火を受けた痕跡が確認できる。それぞれの石材は、順に流紋岩、ホルンフェルス、凝灰岩である。遺構の時期は弥・後・Ⅰに属する。　（重根）



第139図　竪穴住居２（１/60）



第140図　竪穴住居２出土遺物（１/４・１/２）

竪穴住居３（第141・142図）

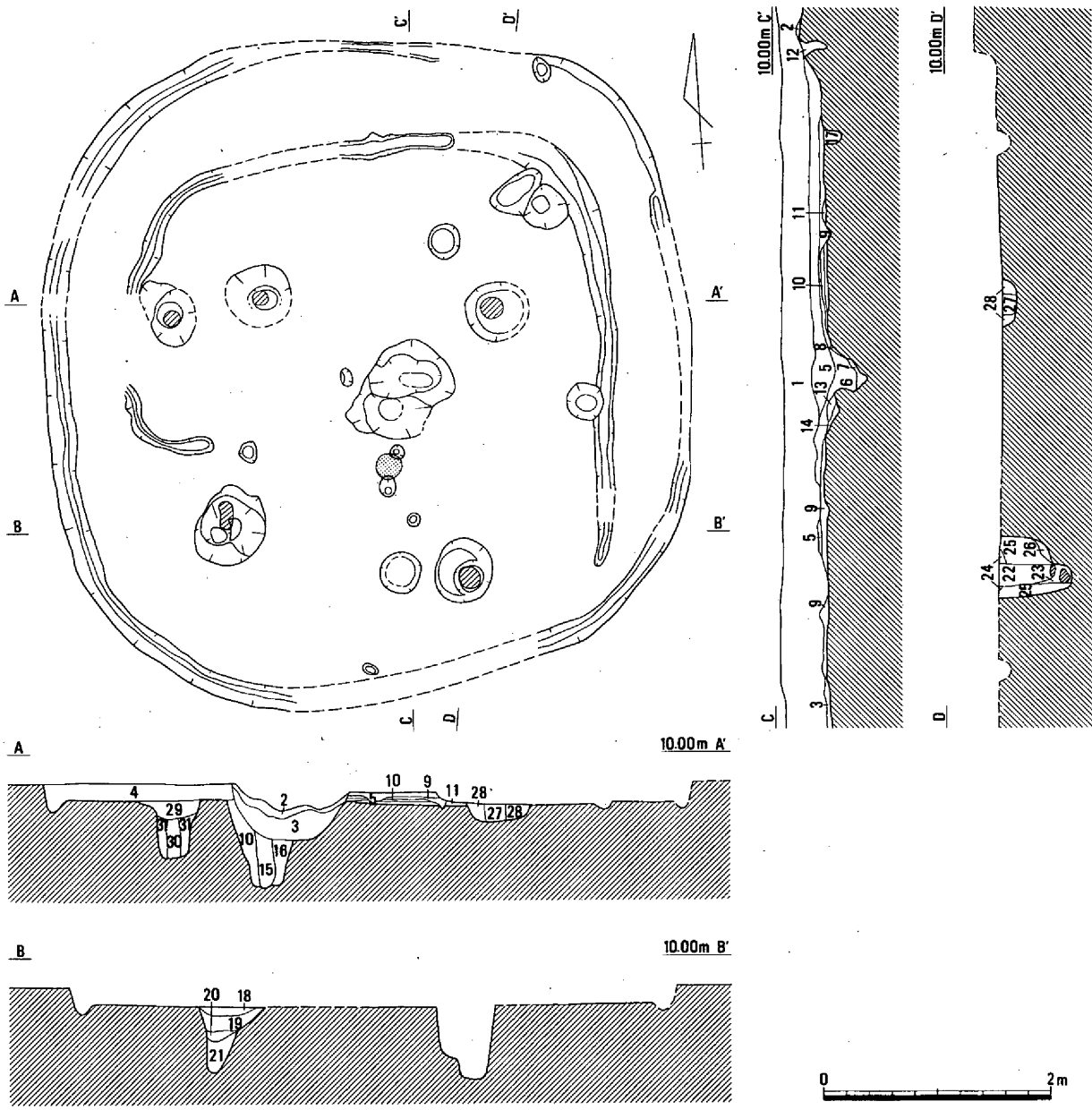
２区の南寄りに位置する竪穴住居である。隅丸方形を呈する平面形の住居を拡張して、円形の住居に建て替えたものと考えられる。その中央部は、現代の撹乱による改変を大きく受けている。

隅丸方形の住居は、東辺と北・西辺の壁体溝の一部を検出したもので、東西長は4.28mを測る。主柱穴は、円形の平面形を呈する４本と考えられ、いずれも柱痕跡を検出している。その規模は径0.6～0.75m、検出面からの深さ0.18～0.75mを測るが、他の３本と比較して北東側の１本が浅くなる。中央穴は、拡張後のものと重複するが、切り合い関係から南側に位置するほうと考えられる。その周囲には顕著な炭層の拡がりを確認している。また、中央穴から0.15m南に位置する被熱面は、検出状況からこの住居に伴うものと考えられる。

拡張後の住居は、ほぼ円形に復元される平面形をもつものである。検出時の規模は、南北長5.93m、東西長5.74m、検出面から床面までの深さは0.13mを測る。床面の標高は9.59mである。壁体溝は、北東部の一部で途切れるほかは全周する。主柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、北西側の１本を現代の撹乱で欠くものの、６本で構成されるものと考えられる。隅丸方形の主柱穴と重複する位置にある南西側の１本が径0.60mを測るほかは、0.35～0.5mと拡張前のものと比較して規模の小さいものとなる。中央穴は、床面からの深さで0.6mを測り、炭と焼土塊を顕著に含んでいる。

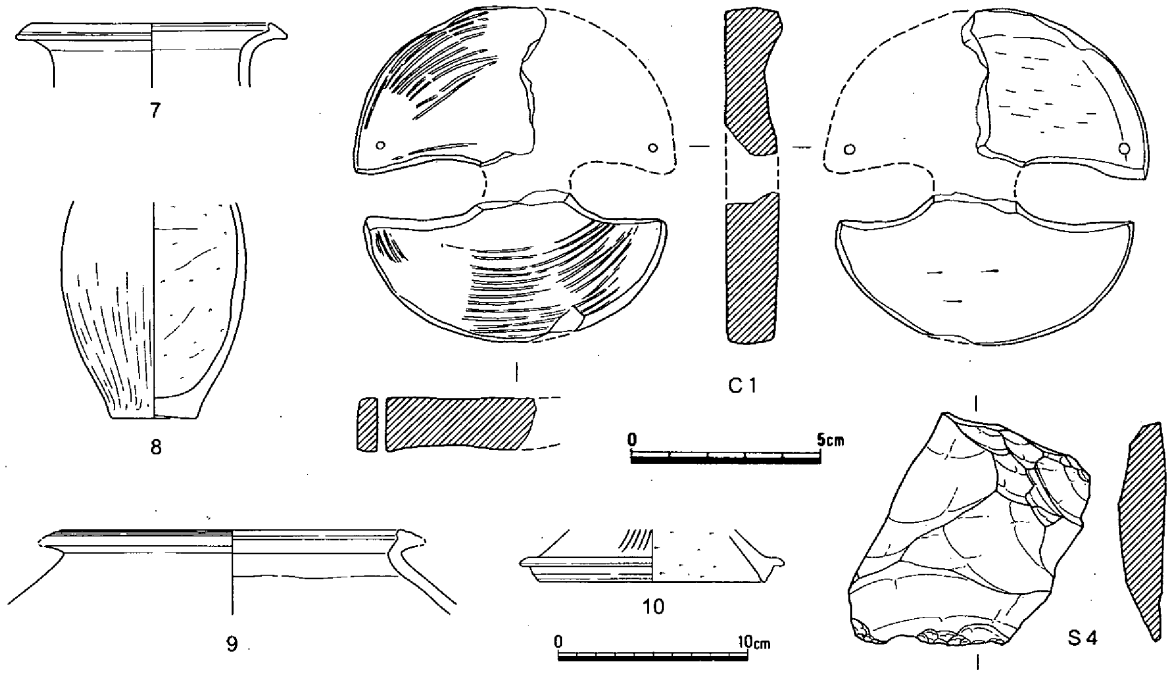
図示した出土遺物は、弥生土器、土製品、石器である。**７**は口縁端部を拡張する長頸壺である。**８・９**は甕で、いずれも内面胴部上半に横方向のヘラケズリを施している。**10**は高杯の脚部で、外面に櫛描沈線文を施し、端部を肥厚する。**Ｃ１**は分銅形土製品である。その復元形は上半部と下半部がほぼ同大の対象形で、上下間の抉りが深いものである。上半部の先端近くには、表裏を貫通する穴がみられる。また、表面には分銅形の弧に沿うように多数の櫛描文が施される。**Ｓ４**はサヌカイト製のスクレイパーである。

出土遺物は、拡張後の住居からのものが大半であり、時期は弥・後・Ⅰと考えられる。また、住居周辺には近接する時期の袋状土壙が存在しており、それらとの有機的関係が想定される。　（高田）



1．現代撹乱
2．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
3．にぶい黄色粘質土(炭・焼土少し含む)
4．黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む)
5．黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
6．黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む)
7．暗黄灰色粘質微砂(炭・焼土含む)
8．焼土ブロック
9．炭層
10．明黄色微砂
11．にぶい黄色粘質微砂
12．黄褐色粘質微砂
13．明黄灰色粘質微砂
14．黄茶灰色微砂(炭・焼土含む)
15．にぶい黄褐色粘質微砂
16．にぶい黄褐色粘質微砂
17．暗黄灰色微砂
18．黄褐色砂質土
19．暗茶褐色砂質土(炭含む)
20．暗灰褐色砂質土(炭含む)
21．暗灰褐色粘質微砂
22．暗灰茶褐色砂質土(炭・焼土多く含む)
23．暗灰色粘質微砂
24．にぶい茶褐色粘質微砂(炭含む)
25．暗黄灰色粘質微砂
26．暗灰褐色砂
27．褐灰色砂質土
28．にぶい黄褐色粘質微砂(炭含む)
29．黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む)
30．暗茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む)
31．暗黄灰色粘質微砂(炭・焼土少し含む)

第141図　竪穴住居３（１/60）

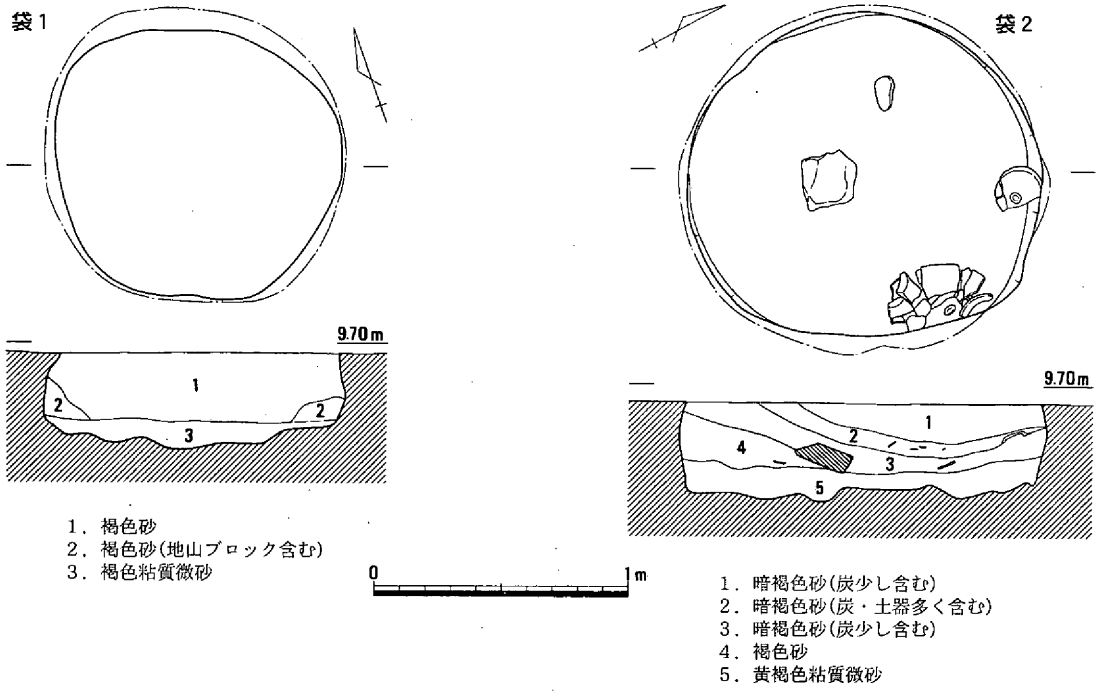


第142図　竪穴住居３出土遺物（１/４・１/２）

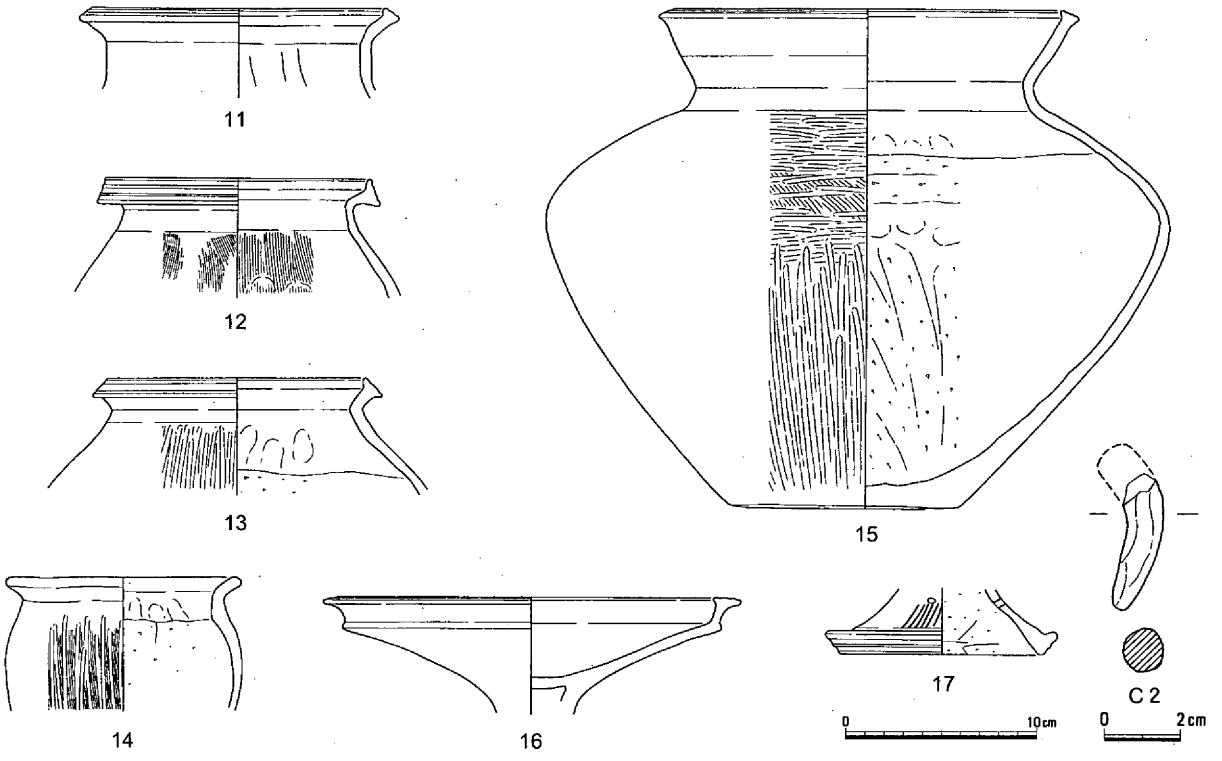
（２）袋状土壙

袋状土壙１（第143図）

１区南半部に位置する。平面形は円形を呈す。検出面での直径1.16m、底面径12.8m、検出面からの深さ0.38mを測り、底面の標高は9.28mである。底面上に厚さ10cm前後の褐色粘質微砂（第３層）を敷き詰め、水平な床面を作っている。出土遺物は小片が少量であり、遺構の時期を推定しがたいが、周囲で検出された袋状土壙と同様な形態であることから弥生時代後期と考えられる。　（物部）



第143図　袋状土壙１・２（１/30）

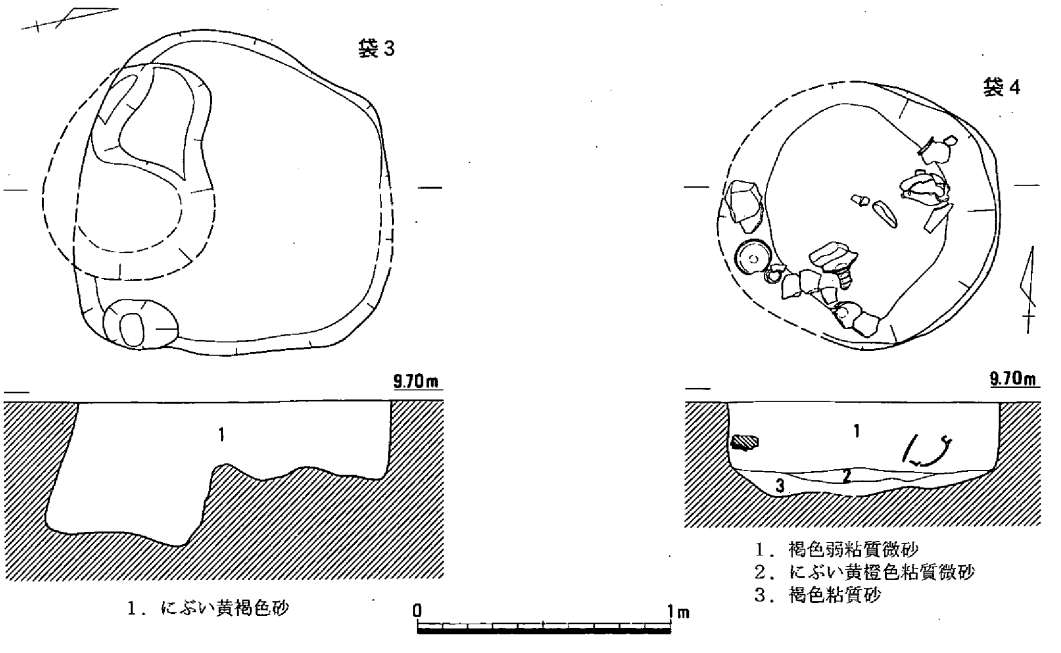


第144図　袋状土壙２出土遺物（１/４・１/２）

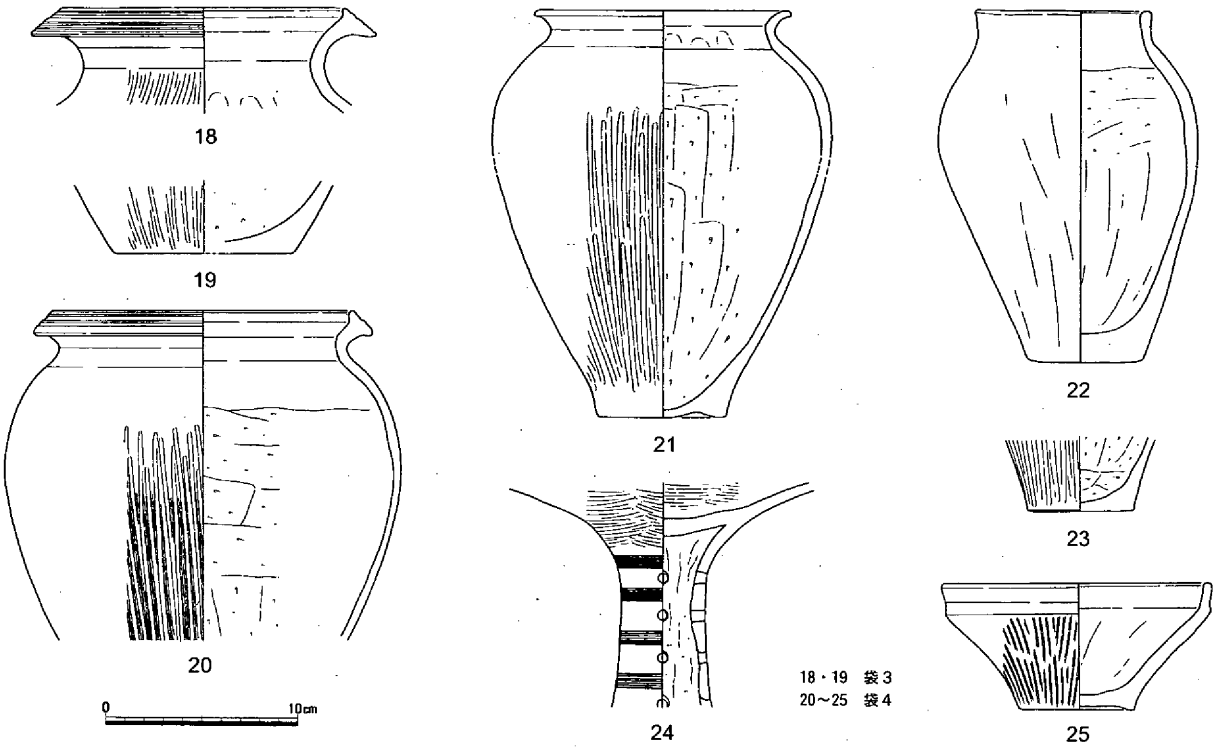
袋状土壙２（第143・144図　図版26）

17区の南半部、竪穴住居１の北約８ｍに位置する。平面形円形を呈し、検出面での直径1.40m、底面径1.28m、検出面からの深さ0.36mを測る。底面の標高は9.24mで、底面は微高地の基盤である粗砂層に達している。底面上には黄褐色を呈する整地土（第５層）がみられ、水平な床面を作っている。埋土は炭粒を多く含む。

出土遺物は土器の小片が多く、埋没初期に流入あるいは投棄されたものである。11は黄橙色を呈



第145図　袋状土壙３・４（１/30）



第146図　袋状土壙３・４出土遺物（１/４）

する壺で、短頸に短く外傾する口縁部を持つ。胎土は２㎜大の砂粒を含む。**12・13**は橙色を呈する甕で、頸～肩部内面にはハケメや指頭圧痕がみられる。**14**は口縁端部を丸く収める小形の甕である。**15**はにぶい橙色を呈する壺で、算盤玉状に張り出した胴部と内湾気味に外傾して立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚する。体部外面はハケメ調整の後、肩部に横方向のヘラミガキ、体部下半部に縦方向のヘラミガキが施される。胎土は２㎜大以上の砂粒を含む。**16・17**は橙色を呈する高杯で、口縁端部は外方へ肥厚する。**Ｃ２**は土製の勾玉と考えられる。これらの土器は時期は弥・後・Ⅰの特徴を示す。（物部）

袋状土壙３（第145・146図）

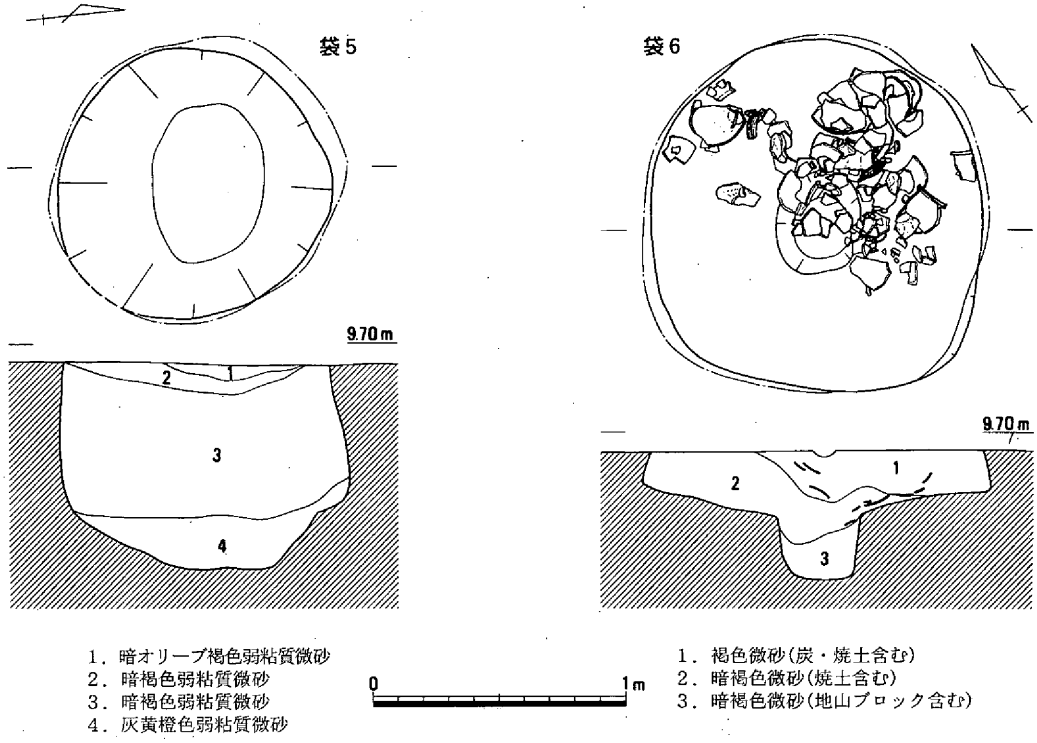
17区南半、袋状土壙２の南西約1.5ｍに位置する。検出面での平面形は不整円形を呈し、直径1.39ｍを測る。検出面からの深さ0.3ｍで一旦平坦面を作り、さらに南半部の0.9×0.7ｍの範囲を深さ0.3ｍほど壁をえぐるように堀窪めている。埋土は一様ににぶい黄褐色砂質土で整地土層はみられなかった。

遺物は埋土中から小片の土器が少量出土した。**18**は橙色を呈する壺で、胎土は２㎜大以上の砂粒を含む。**19**はにぶい橙色を呈する甕の底部で、胎土は２㎜大以上の砂粒を含む。弥・後・Ⅰの範疇と考えられる。（物部）

袋状土壙４（第145・146図　図版23・26）

17区中央部、袋状土壙３の北約６ｍに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.11ｍ、底面の直径1.09ｍ、検出面から底面までの深さ0.38ｍ、底面の標高9.13ｍを測る。底面上には厚さ0.15ｍ前後の整地土（第２・３層）を施し、平らな床面を作っている。特に第２層は黄色味がかった粘性の比較的強い貼り床状の土である。

出土遺物は床面付近に遺存し、完形に近いものが多い。床面に設置したものもあるが、壁際の土器は床面からやや浮いており、この袋状土壙廃棄直後に投棄されたものと考えられる。**22**は壺で口縁



第147図　袋状土壙５・６（１/30）

部は直立して立ち上がりそのまま丸くおさまる。また底部は分厚い。**20・21・23**は甕で、**21**の口縁部は短く外湾し端部は丸くおさまる。**24**は赤橙色を呈する高杯で、杯部外面には多角形のヘラミガキ、脚柱部外面には条の沈線文と小径の円形透かしが交互に４段確認される。**25**は橙色を呈する鉢でほぼ完形である。口縁部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさまる。外面には粗いハケメが見られる。以上の土器の胎土はすべて２㎜大以下の砂粒を含む。遺構の時期はこれらの土器の特徴から弥・後・Ⅰである。（物部）

袋状土壙５（第147図）

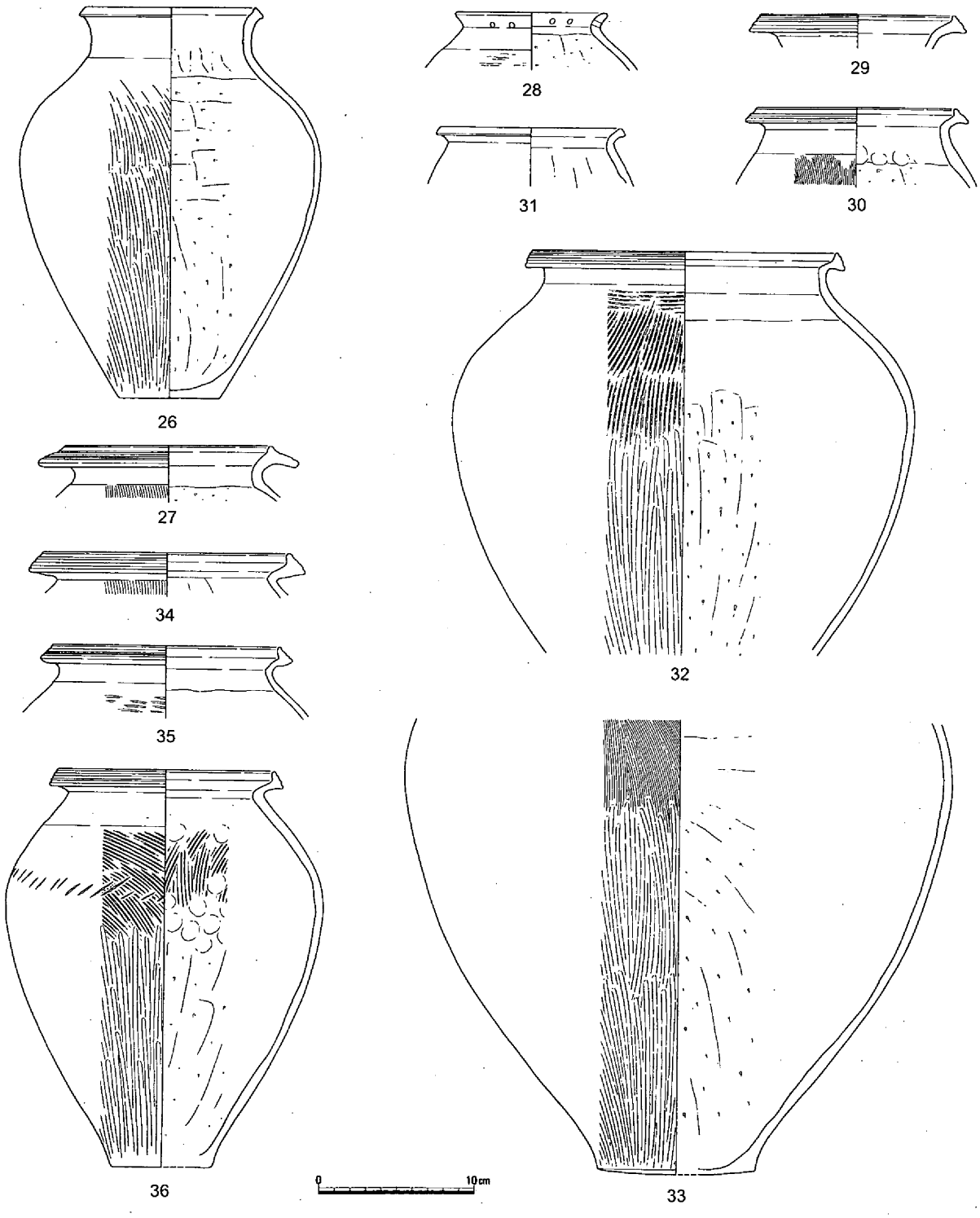
17区中央部、袋状土壙４の北0.8mに隣接する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.09m、底面での直径1.19m、検出面からの深さ0.82m、底面の標高8.80mを測る。埋土最下層（第４層）は黄色味を帯びた弱粘質微砂で整地土の可能性がある。

出土遺物は埋土中から土器小片が少量出土した。時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（物部）

袋状土壙６（第147～149図　図版23・26）

17区中央部、袋状土壙５の北東約４mに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.45m、底面での直径1.48m、検出面からの深さ0.51m、底面の標高9.40m前後を測る。埋土中には焼土粒や炭粒が含まれる。整地土はみられない。底面中央に直径0.32～0.40m、深さ0.27mの円形の穴が掘られている。柱痕は確認されないが柱穴の可能性があり、簡易な覆い屋を想定できる。

出土遺物は多量の土器片が埋土中に多く包含されていた。**26・29**は壺、**27・30～40**は甕、**41～43**は高杯である。色調はすべて褐色・橙色・赤褐色を呈する。胎土は１㎜～２㎜大の砂粒を含むものがほとんどである。壺・甕の体部内面の調整は、頸部直下までヘラケズリが及ぶものと、最大径あたりでヘラミガキが止まり、肩部内面はハケメ・押圧のみられるものと２種類が混在する。**28**の壺口頸部に円孔が２箇所みられる。**32・35・36・89**の甕は体部外面にタタキ痕が残る。**41**高杯の口縁部は

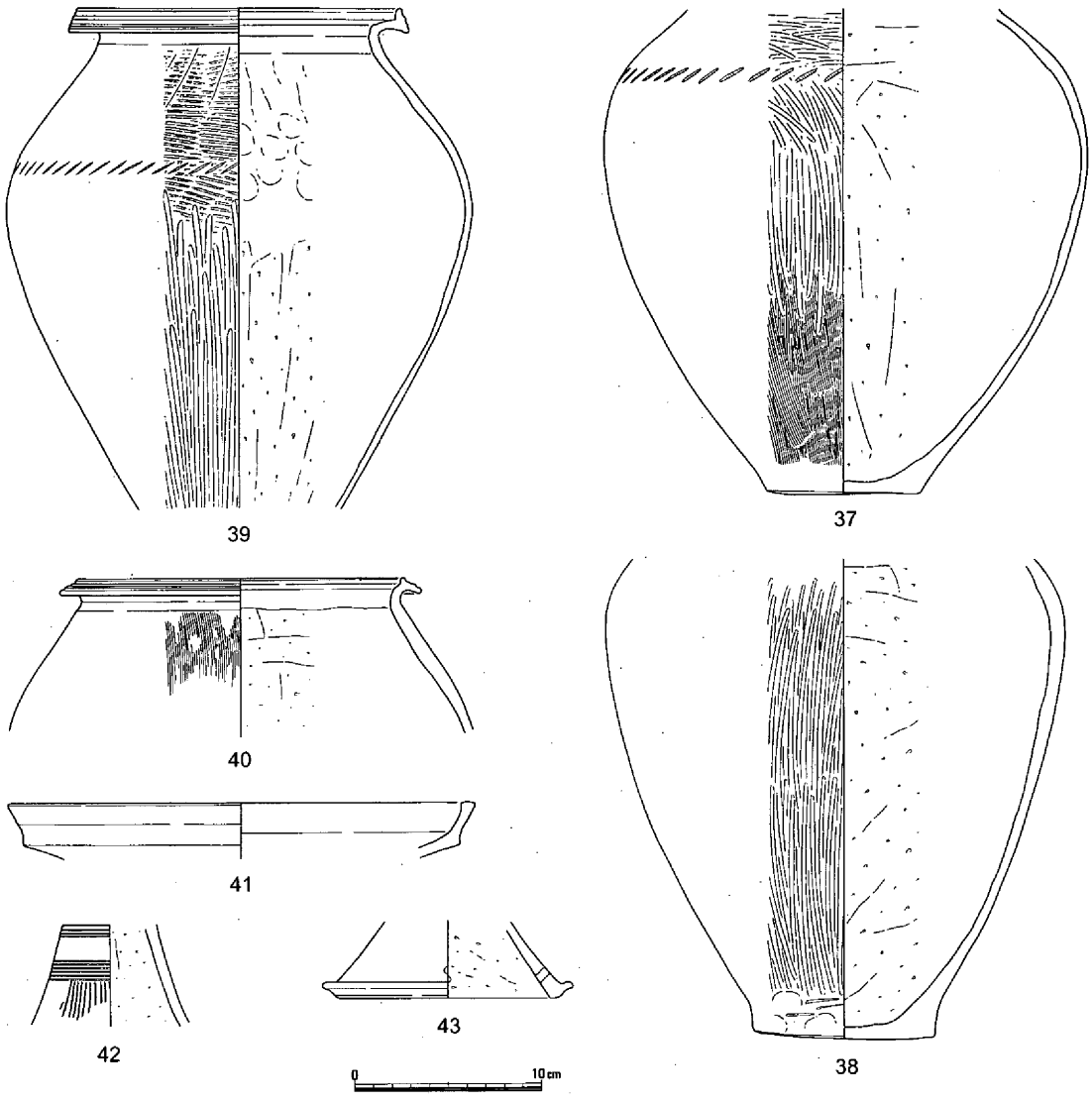


第148図　袋状土壙６出土遺物１（１/４）

やや外傾して立ち上がり、端部は僅かに拡張する。これらの土器の特徴から袋状土壙６の時期は弥・後・Ⅰに比定される。（物部）

袋状土壙７（第150図）

17区中央部、袋状土壙５の北約３ｍに位置する。西側一部は調査区外になる。検出時においては不正形な平面形を呈しており、いくつかの土壙が切り合っているものと考えた。平面・断面を慎重に観察しながら掘り下げたが、切り合いは全く認められなかった。埋土を全て除去した段階で、底面に

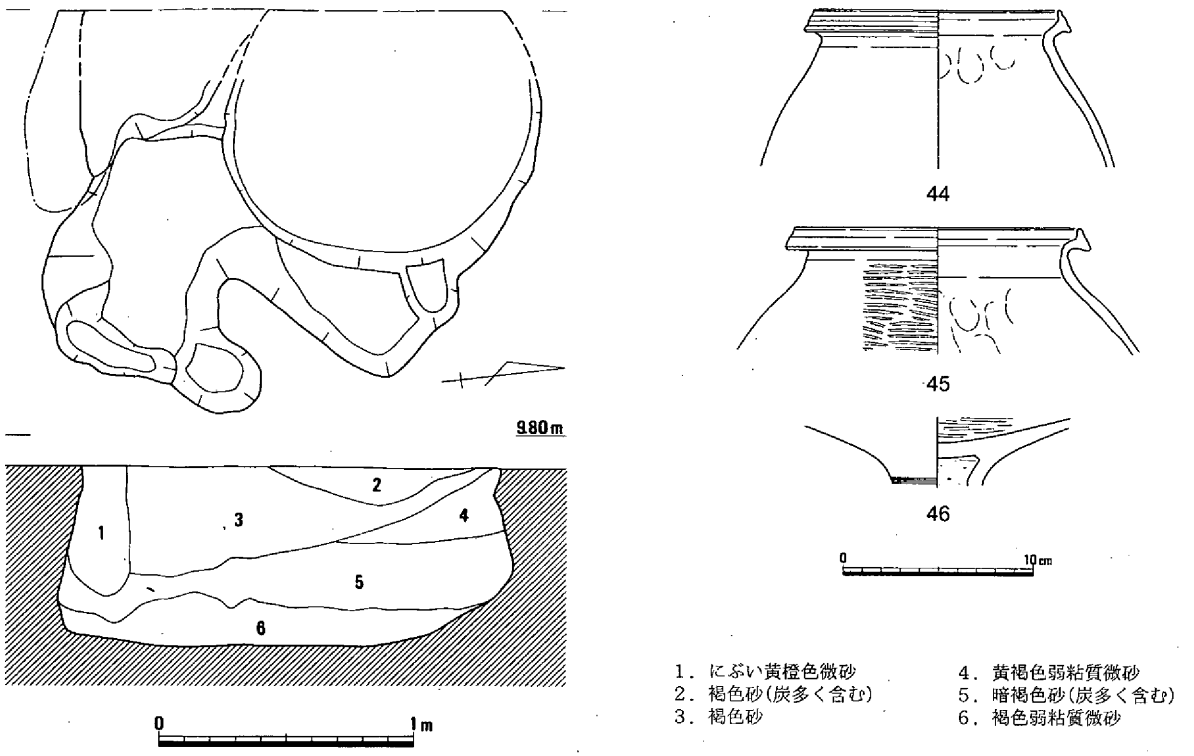


第149図　袋状土壙６出土遺物２（１/４）

袋状土壙の基部と思われる直径1.16mの円形をした部分を確認した。堀り方上部の東側にある乱れたような落ち込みは、壁面が崩れたものと考えられるが、南側に延びる窪みはその南壁が袋状土壙と同様に下部が上部より広くなっており、自然の崩れとは考えにくい。よって、平面円形の袋状土壙の南側を拡張したものと考えたい。検出面からの深さは0.72m、底面の標高は8.96mを測る。遺物は埋土中から土器小片が出土した。**44・45**は甕で頸～肩部内面ユビナデの圧痕がみられる。**45**甕のみ灰白色を呈し、胎土に含まれる砂粒も１㎜以下である。肩部外面にはタタキ痕が残る。**46**は円盤充填の高杯である。これらの土器から袋状土壙７の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。　（物部）

袋状土壙８（第151図）

17区中央部、袋状土壙７の北約2.5mに位置する。円形を呈し、検出面での直径0.84m、底面の直径0.92m、検出面からの深さ0.28m、底面の標高9.32mを測る。底面は微高地の基盤層である粗砂層に達している。底面上にみられる褐～黄褐色粘性砂質土（第３・４層）は上面が少し凸凹するが整地土の可能性がある。遺物は埋土中から土器小片が少量出土した。**47**は甕の口縁で、赤褐色を呈し、胎土には２㎜大の砂粒が含まれる。時期は弥生時代後期前半と推定される。　（物部）

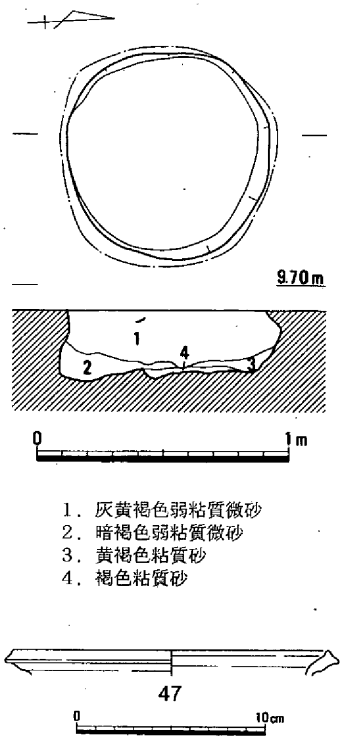


第150図　袋状土壙７・出土遺物（１/30・１/４）

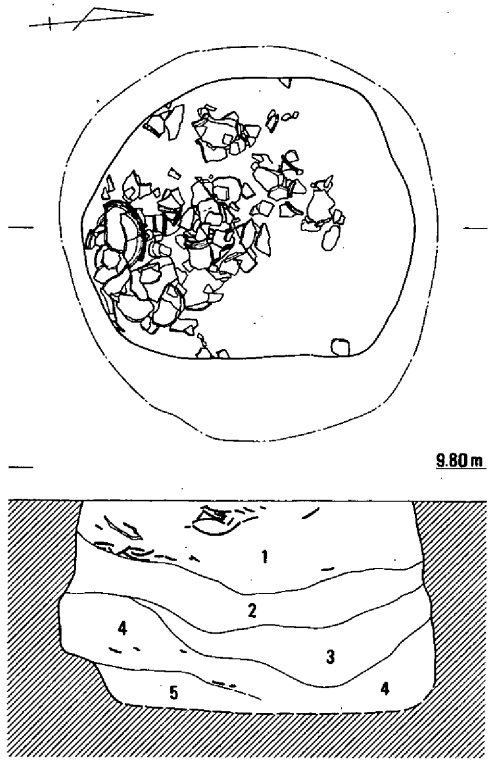
袋状土壙９（第152・153図　図版27）

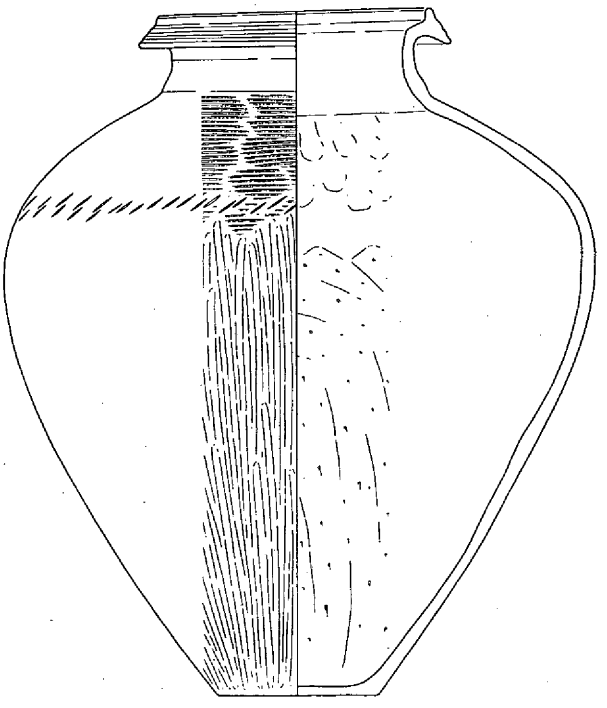
17区北部、袋状土壙８の北約11mに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.32m、底面での直径1.56m、検出面からの深さ0.85m、底面の標高8.82mを測る。土壙底部は微高地の基盤層である粗砂層を約20cm掘り込んであり、湧水が著しく、埋土や底面の状況を精査することができなかった。埋土の第１・５層は炭粒を多く含む。第３層は基盤土ブロックを多く含み壁面の崩落土と考えられる。

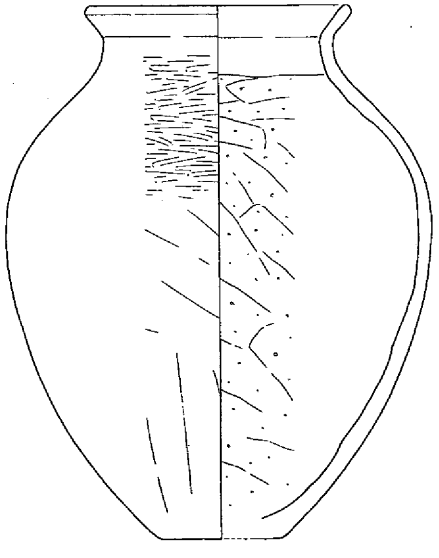
出土遺物は土器片が多量にある。第１層および第４層に包含されていたが層位による土器の形態差は特にみられなかった。**48・50～52**は壺である。壺**48**は橙色を呈し胎土には２㎜大の砂粒を含む。体部外面は横方向のハケメ調整の後、下半部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は底部から最大径あたりまでヘラケズリ、肩部は押圧がみられる。壺**50**は短く外湾して立ち上がる口縁を持ち、端部は丸くおさまる。胎土は２㎜大の砂粒を含む。壺**51・52**は長頸壺で、**51**は無文で内傾して立ち上がる頸部に短い口縁部が付く。**52**はヘラ描き沈線がみられる直立する頸部を持ち、口縁部は緩やかに外湾する。**49・53～66**は甕である。甕**49**は肩部外面に横方向のヘラミガキがみられる。灰黄褐色を呈し、胎土は２㎜大以上の砂粒を含む。**49**以外は口縁端部が拡張・肥厚するもので、褐色あるいは橙色を呈し１㎜大以上の砂粒を含む。甕**54**の内面は頸部直下までヘラケズリが施される。その他のものは肩部内面は押圧・ユビナデである。

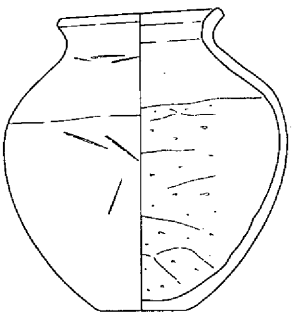


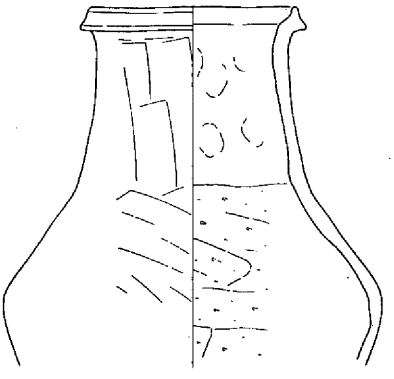
第151図　袋状土壙８・出土遺物(１/30・１/４)

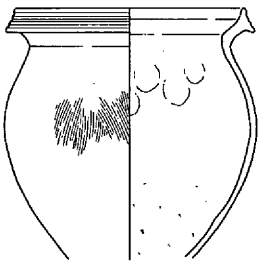


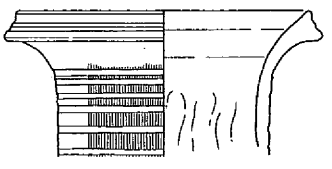


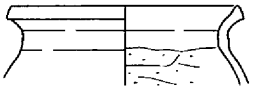


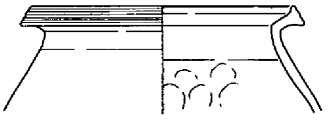


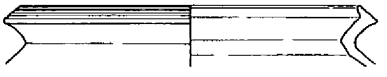


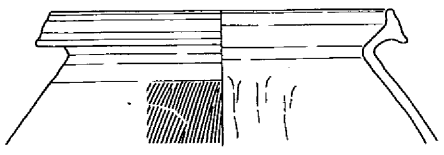




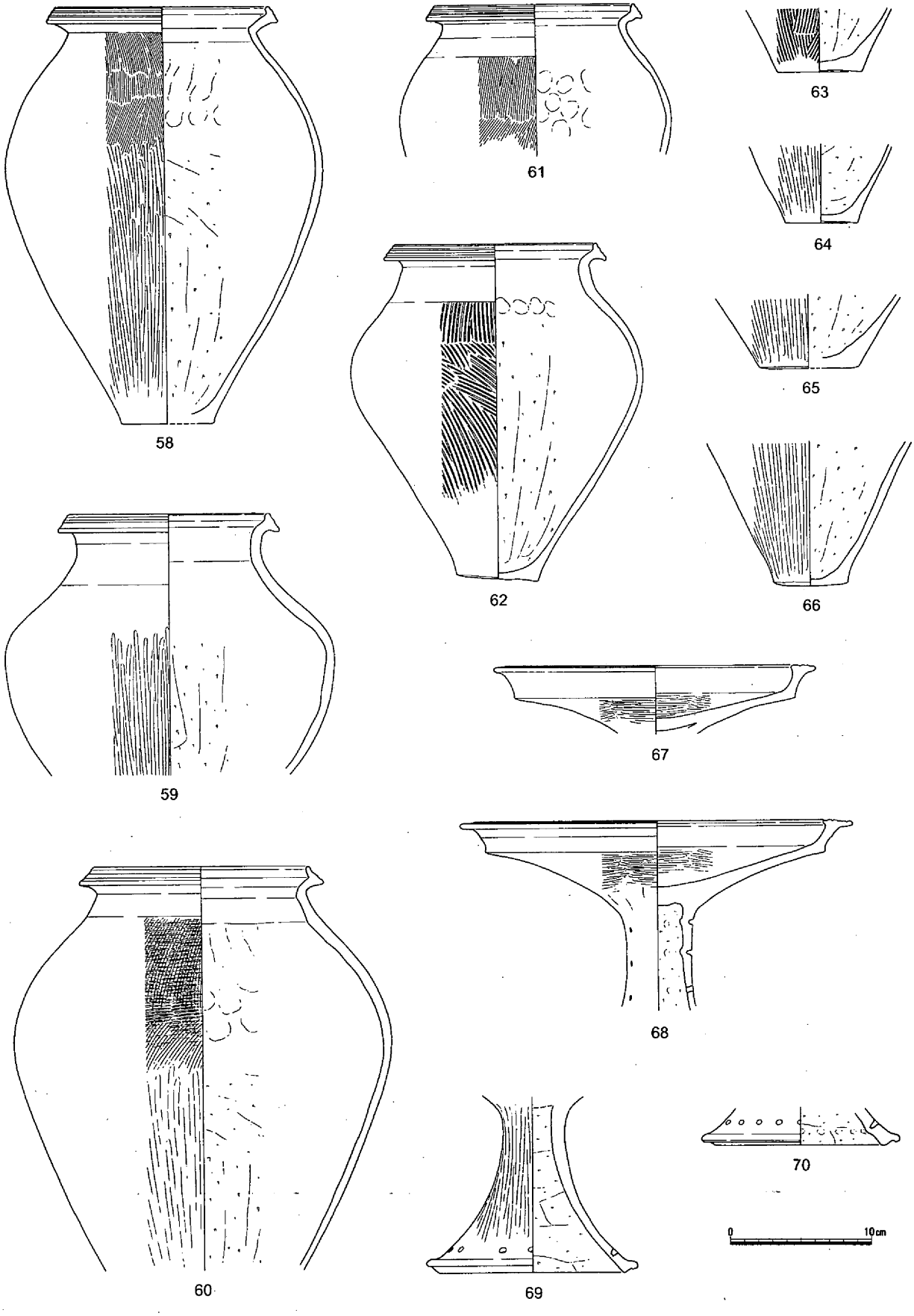








第152図　袋状土壙９・出土遺物１（１/30・１/４）



第153図　袋状土壙９出土遺物２（１/４）

また、体部外面の調整は基本的ハケメ調整の後、下半部にヘラミガキを施す。甕60のように肩部にタタキ痕が残るものもある。甕62はヘラミガキがみられないものである。67～70は高杯で、橙色を呈し、２㎜大以上の砂粒を含む。口縁端部は外方に大きく拡張し、杯部内外面には多角形のヘラミガキが施される。脚端部も外方に拡張し、脚柱部・脚裾部に小径の円孔がみられるが、貫通していないものが大半である。

袋状土壙９の時期はこれらの土器の特徴から弥・後・Ⅰに比定される。（物部）

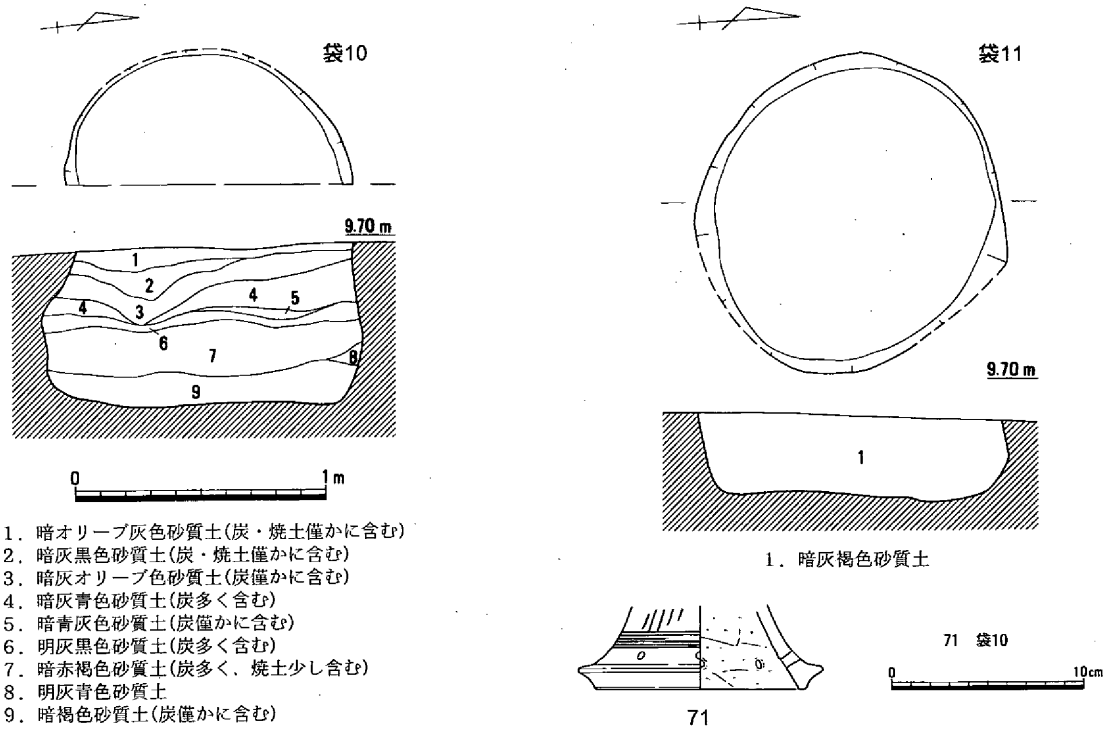
袋状土壙10（第154図）

18区の南東部において検出した。竪穴住居跡２から約７ｍ南東に位置する。検出面での平面形は、東側約１/２が調査区外となるため明確ではないが、おおよそ円形を呈すると考えられる。上面で径1.14m、底面で径1.27ｍを測り、壁面は内傾する。深さは0.64m残存していたが、上部は後世の削平を受けていると推測する。底面は平坦である。この土壙の断面形は底部付近でやや広がる、いわゆる袋状を呈する。埋土中には部分的に炭を多く、焼土を少量含む。

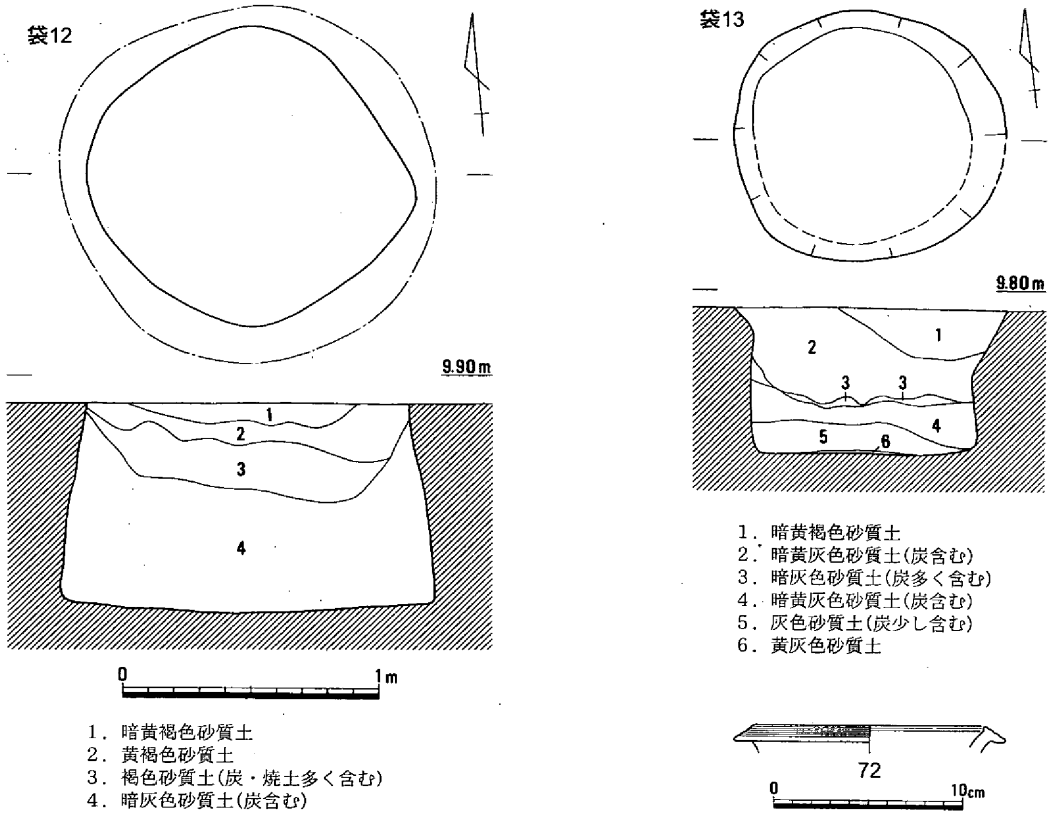
遺物は弥生土器細片が出土した。高杯71は脚部の一部のみ出土した。脚の外面裾部には櫛書き直線文が、そのやや上には篦書き沈線文が施される。櫛書き沈線文のやや下には丸い透かし孔を穿つ。この遺構の時期は弥・後・Ⅰに属すると考える。（重根）

袋状土壙11（第154図）

18区の南東部において検出した。竪穴住居跡２から約３ｍ南東に、袋状土壙10から約４ｍ北に位置する。検出面での平面形はおおよそ円形を呈する。上面で径1.28m、底面で径1.17ｍを測る。深さは0.36m残存するが、上部は後世の削平を受けていると推測する。底面は平坦である。断面形は底面付近でやや広がる。この土壙の時期は周りの遺構の時期、埋土より判断すると、弥生時代後期の中に収まると推察するが、土器が出土していないため正確には不明である。（重根）



第154図　袋状土壙10・11・出土遺物（１/30・１/４）



第155図　袋状土壙12・13・出土遺物（1/30・1/4）

袋状土壙12（第155図）

２区の中央西側に位置し、袋状土壙13・14とともに約２m間隔で直線上に並んでいる状況で検出された袋状土壙である。これら３基のうち一番南側に所在する。

検出された平面形は1.29×1.2mのやや楕円形である。標高8.95mを測る底面は平坦で、径1.49mのやや円形を呈し、深さは検出面から0.84mである。壁面はハの字状に立ち上がり、断面台形状を呈している。埋土は４層に分けられ、第３層中には炭・焼土を多く含んでいた。

遺物は土器小片とサヌカイト製の剥片が出土している。

時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（小嶋）

袋状土壙13（第155図）

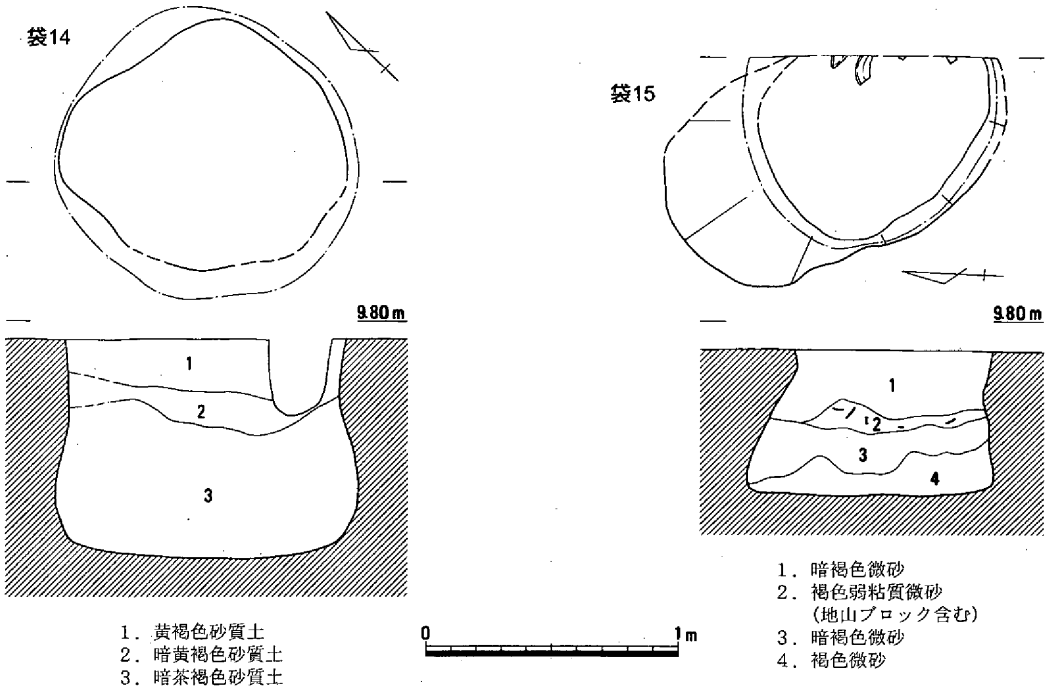
竪穴住居３から約1.5m南側で検出された土壙である。前述した袋状土壙12と後述する袋状土壙14の中間に位置している。

平面形は検出面で径1.08mの円形を呈している。検出面から約0.58mの深さの底面は平坦で、標高9.15mを測る。底面の平面形は径0.87mの円形である。側壁は底面から約0.3m付近までほぼ垂直に立ち上がるが、それより上部では逆ハの字状に開いている。埋土は６層に分けられ、第３層には炭を多く含んでいた。

出土遺物には弥生土器**72**があるが、そのほかの土器は小片で図示できるものはなかった。**72**は口縁部に凹線が３条入った甕である。時期は弥生時代後期に比定される。（小嶋）

袋状土壙14（第156図）

直線上に並んでいる袋状土壙のうち一番北側に位置し、竪穴住居３の西側に隣接して検出された。検出面の平面形は1.14×1.0mを測る不整形な円形を呈しており、底面形は径約1.0mの円形であ



第156図　袋状土壙14・15（１/30）

った。検出面から0.88m低い底面はやや凹状を示し、一番低いところで標高8.85mを測る。断面形はややフラスコ状を呈している。

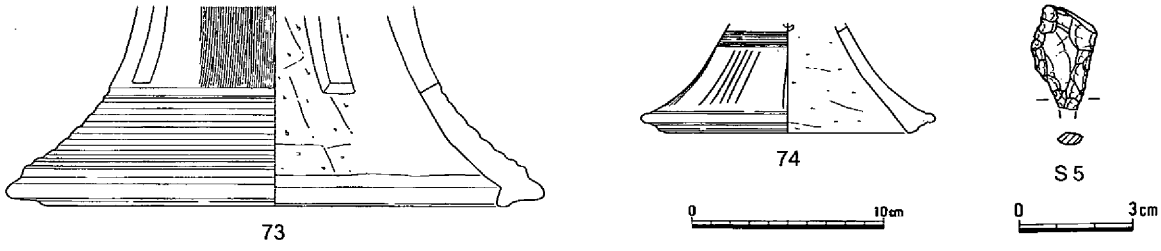
時期は土器が少量出土しているのみであるため明確に特定できないが、埋土等の状況から弥生時代後期と想定される。（小嶋）

袋状土壙15（第156・157図　図版23）

３区中央部、袋状土壙14の北東約20mに位置する。東壁沿いで検出され、堀り方の１/３は調査区外になる。また、堀り方の北西部は浅く崩れている。平面形は円形を呈し、検出面での直径は0.95m、底面の直径は1.03m、検出面からの深さ0.58m、底面の標高9.11mを測る。

出土遺物は第２層に包含されており、埋没過程で投棄あるいは流入したものと考えられる。土器・石器がある。**73**は浅黄橙色を呈する器台で、裾部外面には凹線文がみられ、筒部には長方形の透かしが４方向に穿たれている。胎土には２㎜大以下の砂粒が含まれる。**74**は橙色を呈する高杯で、裾部には縦方向の沈線文が８単位みられる。脚註部には小径の円形透かし孔がある。**Ｓ５**はサヌカイト製の石錐である。

土器の特徴から袋状土壙15の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（物部）



第157図　袋状土壙15出土遺物（１/４・１/２）

（３）土壙

土壙１（第158図）

２区の南西端で検出した。長軸2.61m、短軸0.92mを測る不整形な楕円形を呈している。検出面からの深さは0.25mを測り、断面形はやや船底形を呈している。

出土遺物には弥生土器**75・76**やサヌカイト製の石鏃・剥片などがある。**75**は壺の頸部で、内面は頸部の中程までヘラミガキが施されている。**76**は口縁部下に櫛描沈線を施し、その下には刺突紋が一列巡らされている甕である。時期は弥・中・Ⅱである。（小嶋）

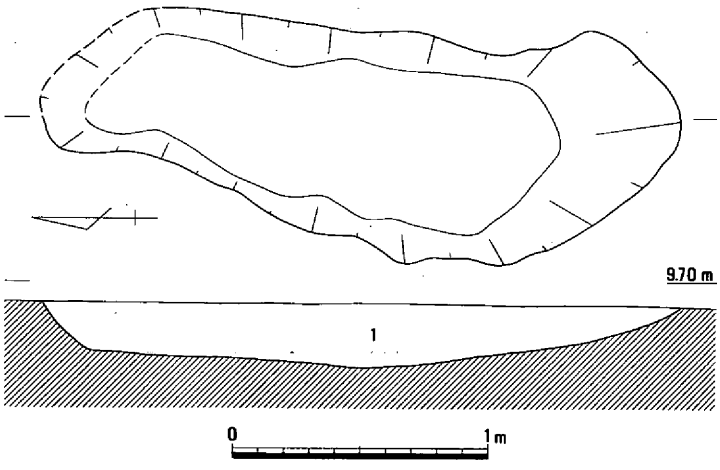
土壙２（第159図　図版27・28）

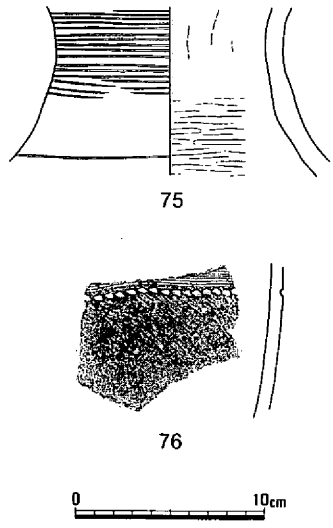
２区と３区の境目に所在している。規模は、北辺が調査時の側溝により削平を受けているが、径1.58mの円形を呈していたと思われる。検出面から0.28mの深さを測る底面は平坦で、径約1.2mの円形を呈している。壁面は若干上方に向かって開いており、調査時の所見等から貯蔵穴の可能性も指摘できる。

出土遺物には弥生土器**77**～**86**や石器**Ｓ６**～**Ｓ９**などがある。**79**の壺は、肩部に平行櫛描文と櫛描波状文を交互に配し、下端に刺突文が施されている。**78**の甕は、体部に一列の刺突文が巡らされている。**80・82**の甕は口縁部をくの字状に折り曲げ、口縁部下に櫛描沈線、その下に刺突文を配し、体部内面にはヘラミガキを施している。**81・83・84**は口縁部を逆Ｌ字形に折り曲げ、口縁部下に櫛描沈線が施されている甕である。石器はいずれもサヌカイト製で、石鏃**Ｓ６**～**Ｓ８**、楔形石器**Ｓ９**がある。この土壙の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（小嶋）

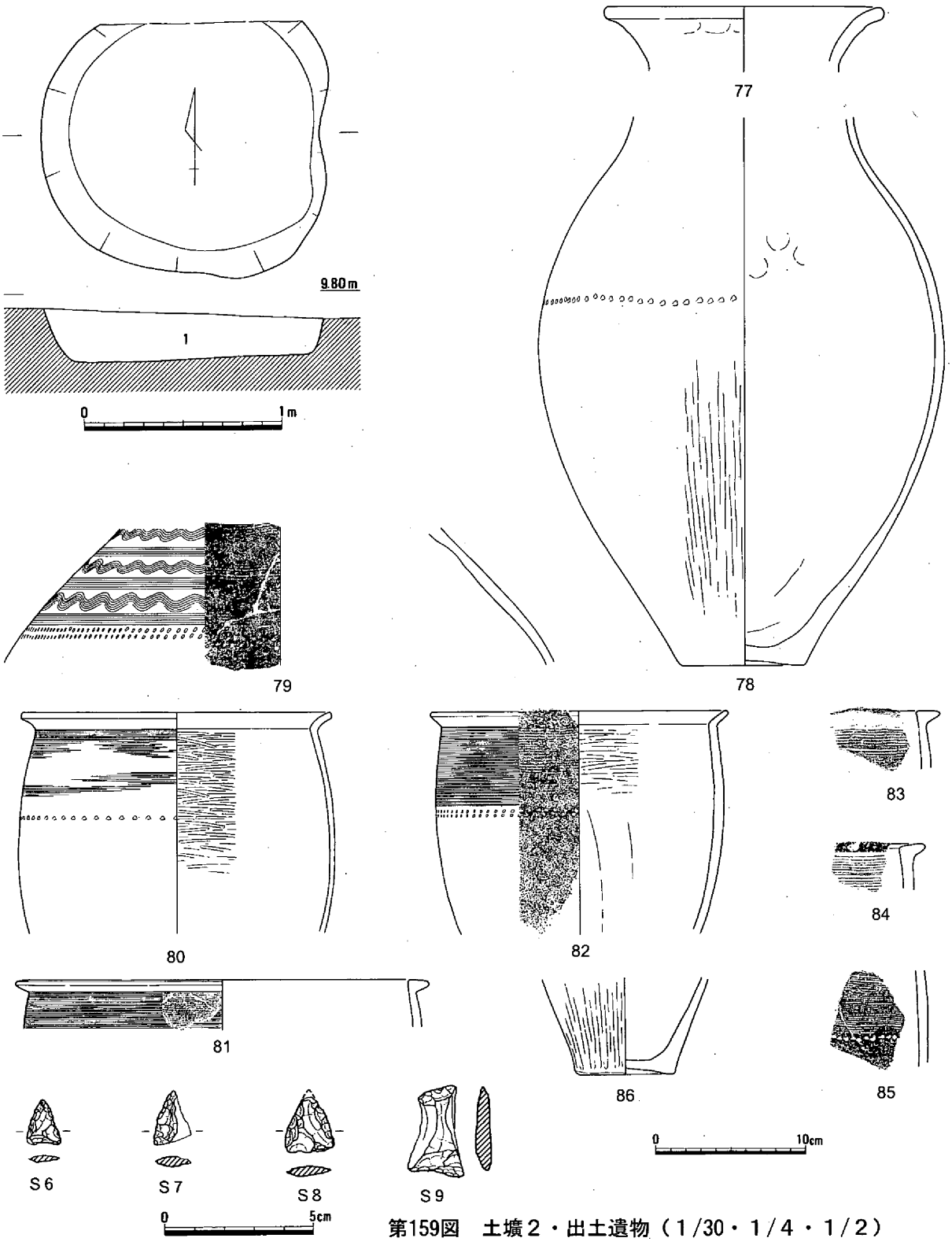
土壙３

４区の南半、土壙２の北約33mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.29m、短軸0.84m、検出面からの深さ0.66mを測る。北西壁に幅0.2m程の段を設けている。埋土は周囲から土が流入した状況がうかがわれる。第２・４層は多量の焼土粒と炭粒を含んでいる。遺物は埋土中から土器の小～細片が約50点出土した。それらの土器片は赤褐～褐色を呈し、胎土は２㎜大以上の砂粒を多く含む。多条の平行櫛描文や斜め外方に屈曲する短い口縁部がわずかにみられることから、弥生中期前半に比定される。（物部）





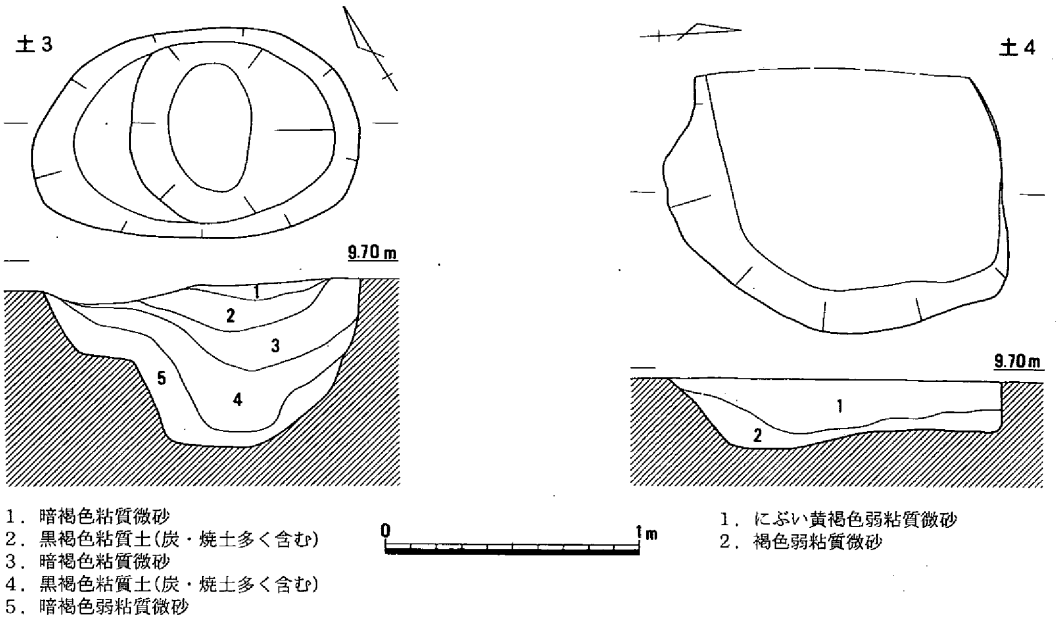
第158図　土壙１・出土遺物（１/30・１/４・１/２）



第159図　土壙２・出土遺物（１/30・１/４・１/２）

土壙４（第160図）

土壙４は17区南半に位置し、袋状土壙３の北西に隣接する。掘り方の西端部は調査区外になる。平面形はやや歪んだ円形を呈し、検出面での直径1.44m、底面の直径1.05m、検出面からの深さ0.28m、底面の標高9.39mを測る。深さが浅く土壙として取り扱ったが、袋状土壙の基底部の可能性がある。遺物は土器小片が僅かに出土したのみである。時期を決めがたいが、周辺の袋状土壙群と一連のものと思われ、弥生時代後期前半ととらえたい。　（物部）



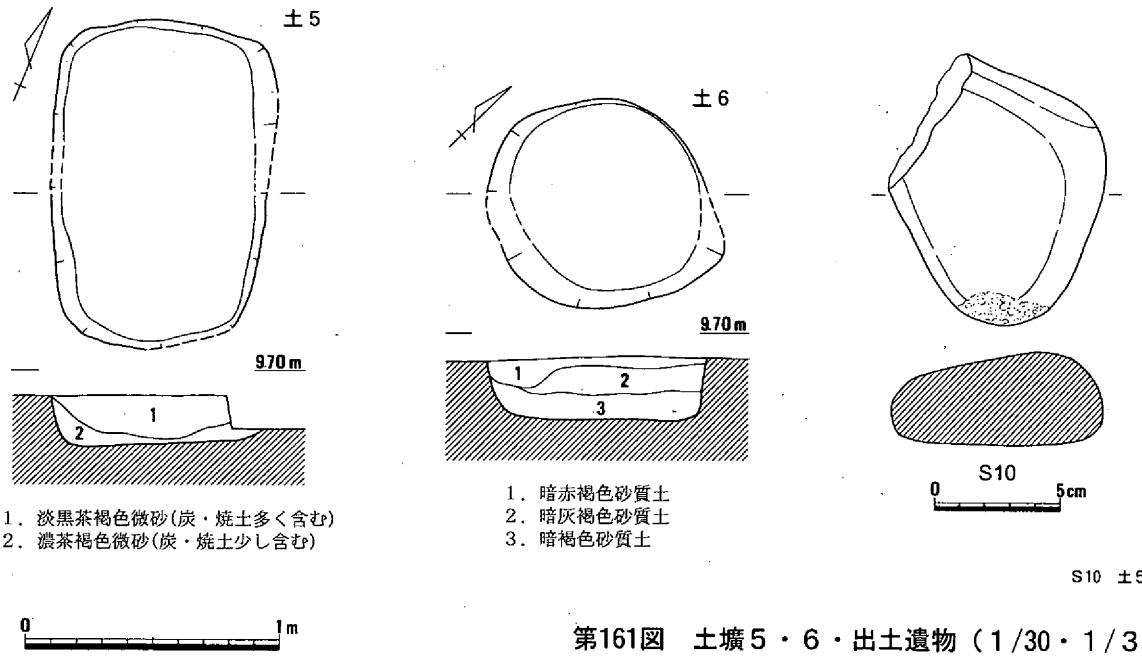
第160図　土壙３・４（１/30）

土壙５（第161図）

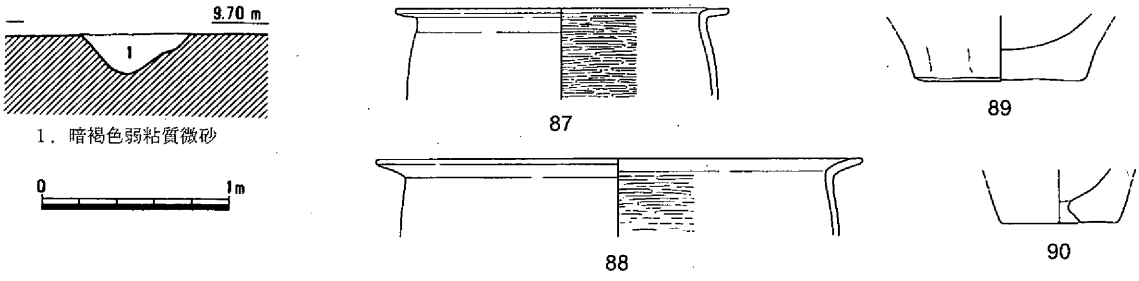
２区の南よりで検出された土壙である。平面形は長方形を呈し、長さ1.31m、幅0.88m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土中には炭や焼土が含まれるが、被熱の痕跡は認められなかった。土壙内からは弥生土器片および石器が出土している。S10は敲石である。凝灰岩製で、一部欠損している。残存長10.7cm、残存幅8.6cm、厚さ3.8cm、重さ420ｇを測る。時期は出土した土器等から弥・後・Ⅰであると推測できる。（金田）

土壙６（第161図）

２区の中ほどで検出された土壙である。平面は円形をなす。長径0.97m、短径0.84m、検出面からの深さは0.25mを測る。土壙の形態から貯蔵穴の可能性も考えられる。土壙内から土器片が若干出土している。これらの遺物等からこの土壙６の時期は弥生時代後期であると推測できる。（金田）



第161図　土壙５・６・出土遺物（１/30・１/３）



第162図　溝１・出土遺物（１/４）

（４）溝

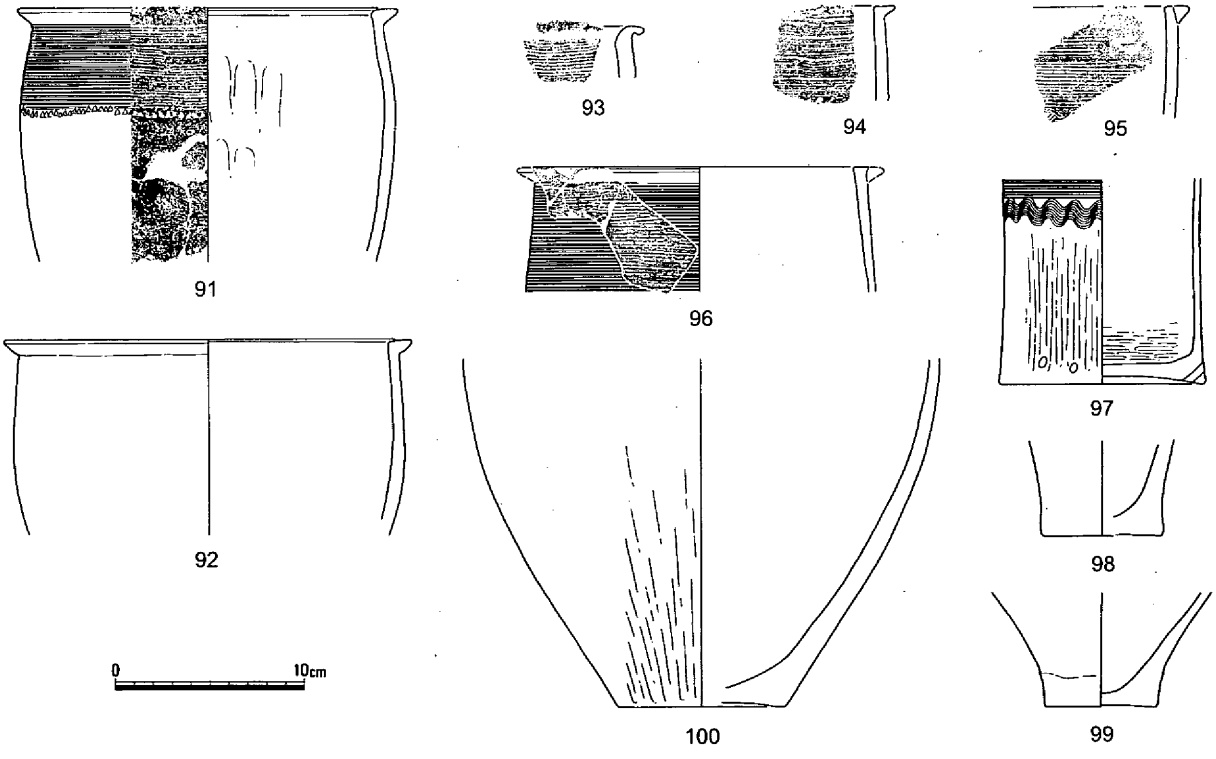
溝１（第162図）

溝１は３区の南半に位置する。検出長4.38m、検出幅0.6m、検出面からの深さ0.21mを測る。南東－北西に主軸をとる。北西部は竪穴住居６によって削平されており、南東部は若干南に向きを変えながら底面の標高を上げ途切れる。遺物は埋土中から土器片が少量出土した。**87**～**90**は甕で、赤橙～黄橙色を呈し、胎土には２㎜大以下の砂粒を含む。口縁部は外方に屈曲し、肩部はあまり張り出さず無文である。底部は厚く、穿孔のみられるものがある。時期は弥・中・Ⅱ初頭と思われる。（物部）

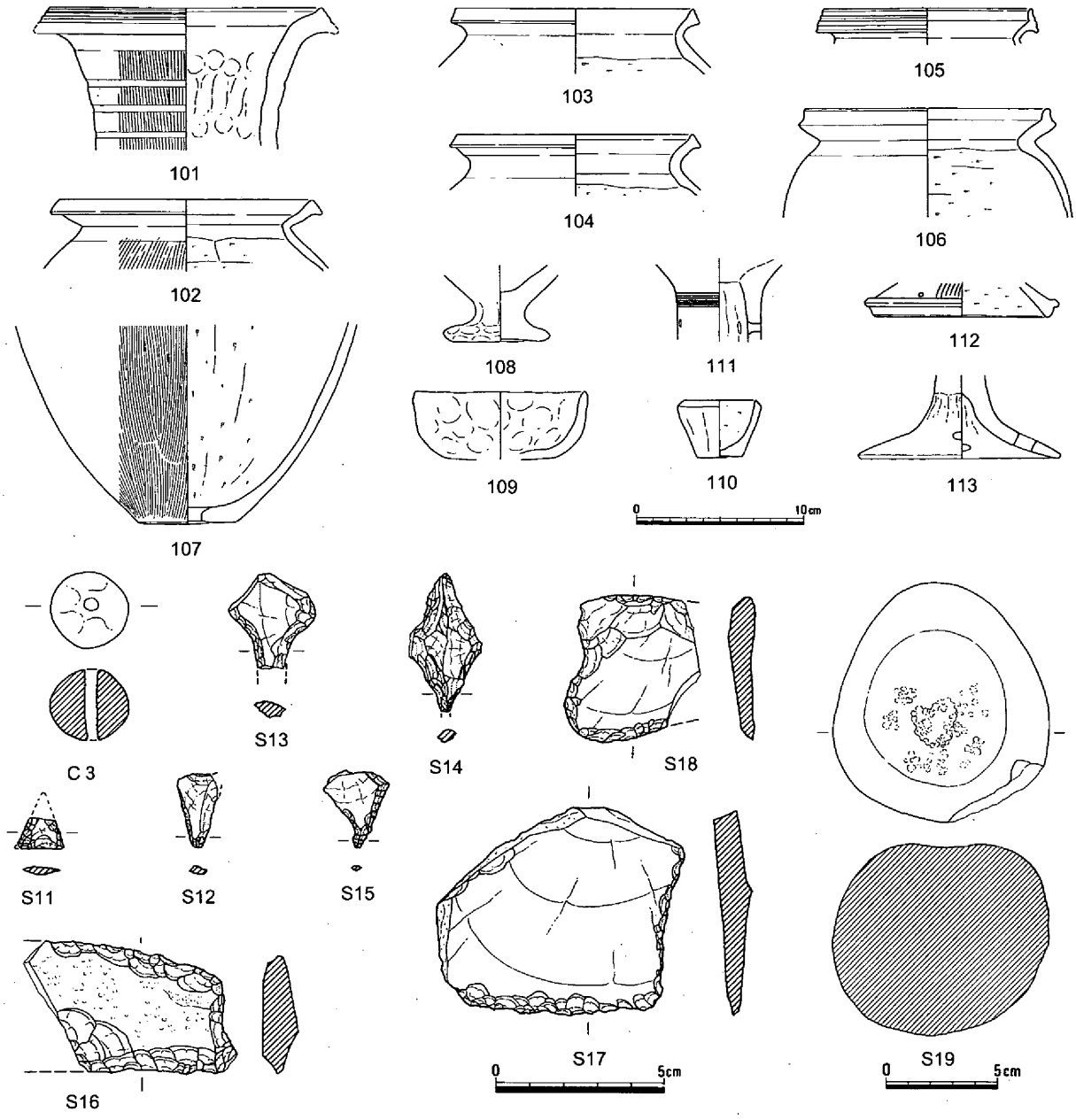
（５）遺構に伴わない遺物（第163・164図）

遺構に伴わない遺物には、弥生土器のほか、石器や土製品がある。これらは遺構検出段階で出土したもののほか、時期の異なる遺構へ混入したものも含まれている。

91～**96**は倒Ｌ字形の口縁部をもつ瀬戸内型甕で、口径20.0cmを測る**91**では口縁下に多条の櫛描沈線をめぐらし、その下端には刺突文を施している。**97**はコップ形土器で、外面は櫛描文で飾り、内面をヘラミガキで仕上げている。これらの土器は器表の風化が甚だしく、なおかつ砂粒の多い胎土から一見して後期の土器と区別できる。



第163図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第164図　遺構に伴わない遺物２（１/４・１/２）

101は長頸壺で、径15.8cmを測る口縁部は肥厚して外傾する面をなし、上方にむかって広がる頸部は外面をハケメで調整したのち数条の凹線をめぐらす。甕**102**～**106**は口縁部が肥厚して外傾する面をなすものが多いが、**105**のように上方に拡張して凹線を飾るものもある。外面はナデないしハケメ、内面はヘラケズリで調整しており、**107**の底部には穿孔が認められる。高杯は一体づくりの**111**・**112**と別づくりの**113**がある。**108**・**109**は粗製の鉢で、内外面にユビオサエの痕を顕著に残す。

Ｃ３は径2.3cmの土玉で、重量は9.8ｇある。石器にはサヌカイト製の打製石器**Ｓ11**～**18**と円礫を利用した凹石**Ｓ19**がある。**Ｓ11**は平基式の石鏃で、先端を欠いているが長さ1.7cm、幅1.3cm、重量0.5ｇほどに復元される。石錐のうち**Ｓ12**・**15**は、長さ２cm、厚さ0.4ほどの三角形をなす剥片の先端側面を調整して刃部を作り出している。**Ｓ16**は幅4.2cmの石包丁で、折損した後スクレーパーとして再利用している。**Ｓ18**は不定形の石器で、側面に抉りを設けている。**Ｓ19**は凹石で、長さ10.7cm、幅9.6cm、重量1.28ｇを測る玢岩の円礫を利用したものである。　（亀山）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

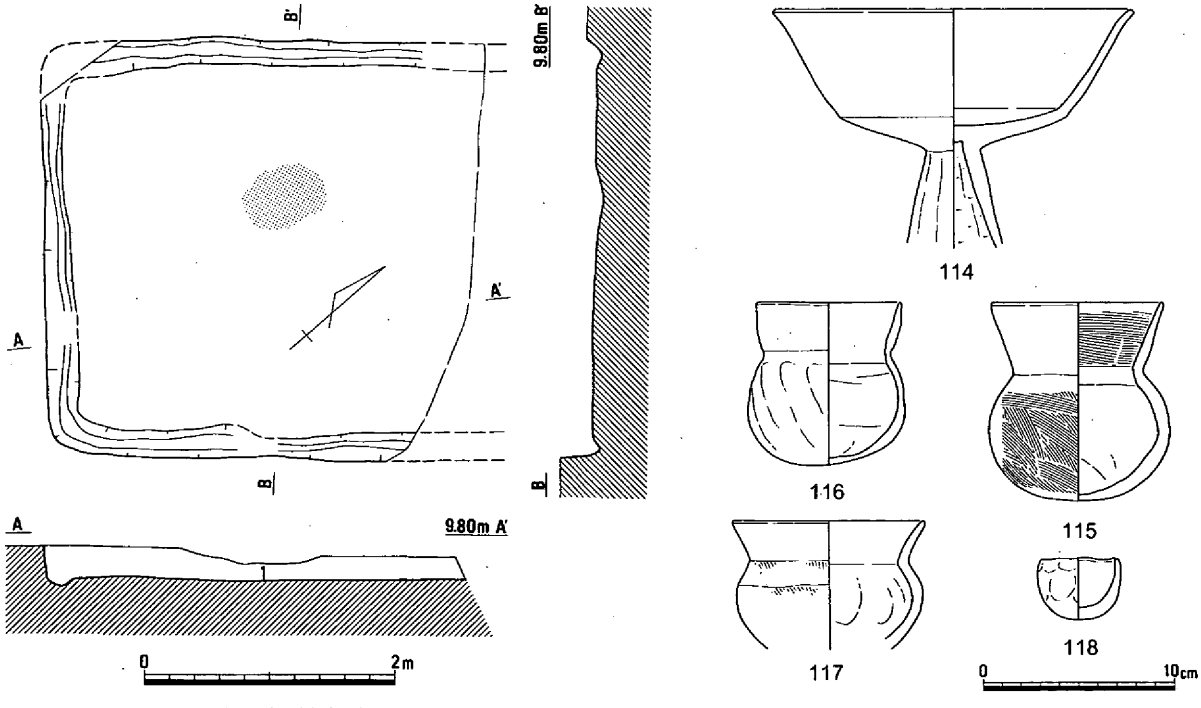
（１）竪穴住居

竪穴住居４（第165図　図版28）

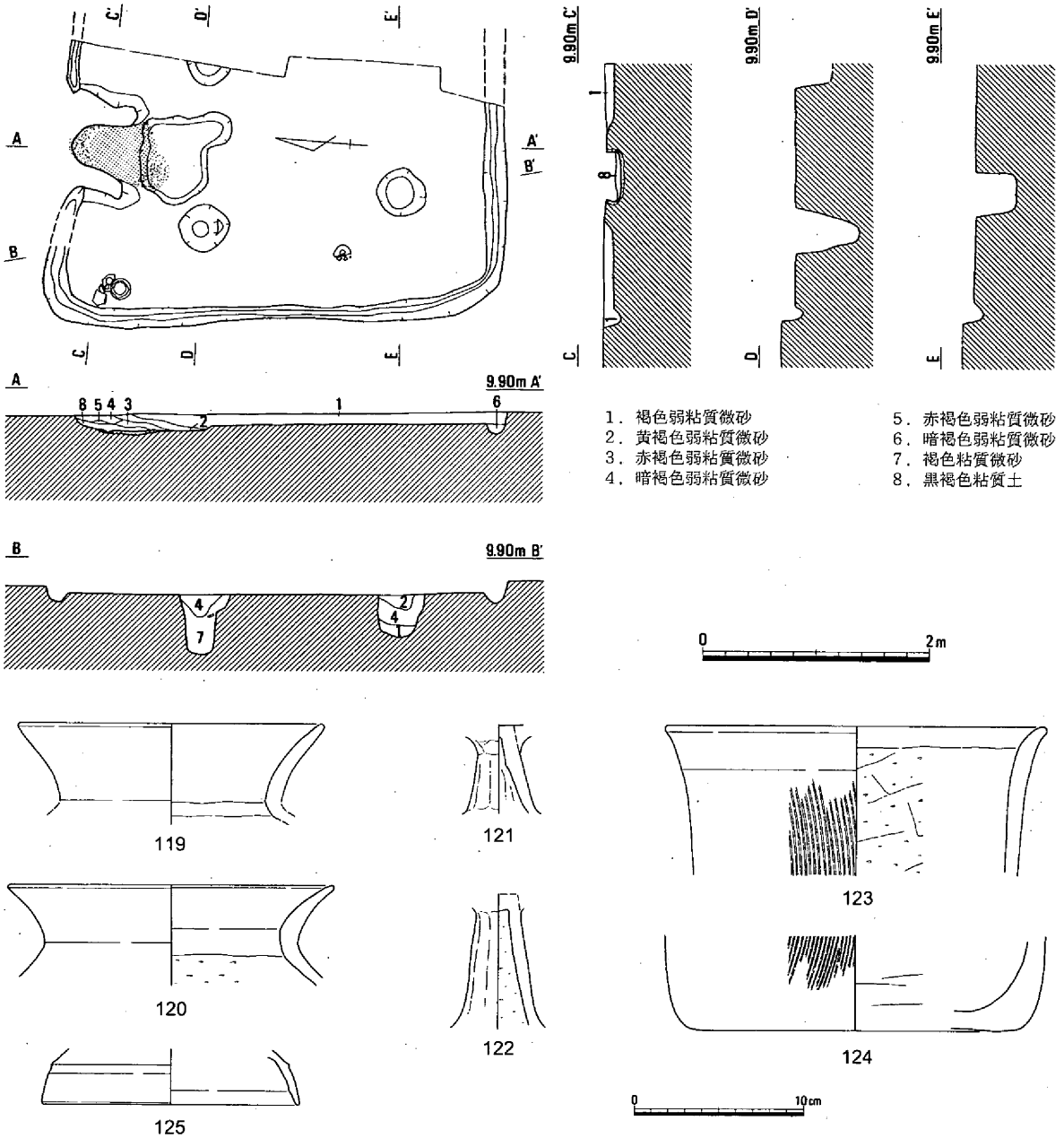
４区の北東隅に位置する隅丸方形の竪穴住居で、中世の溝11に上面の一部を、溝12に北東部を削平されている。竪穴住居４の短辺は3.34ｍであるが、長辺は残存長で3.52ｍを測る。検出面から床までの深さは約0.3ｍである。主軸はＮ－49°－Ｗである。床面の周辺には幅約20cm、深さ５cmの壁体溝がめぐっており、床面中央のやや北西よりで長径約0.65ｍ、短径約0.45ｍの範囲で焼土面を検出した。なお、柱穴は精査したが検出することができなかった。竪穴住居内には炭を若干含む暗褐色砂質土が堆積しており、中から土師器片および鉄器が出土した。**114**は高杯である。**115**～**117**は壺である。**118**は手捏ね土器で、口径4.0cm、器高3.3cmを測る。竪穴住居４は古・中・Ⅰに比定できる。（金田）

竪穴住居５（第166図　図版24）

竪穴住居５は３区北半の東壁沿いで検出された。造り付けカマドを持つ方形の住居で、東部１/４は調査区外になる。南北4.05ｍ、東西2.56ｍ以上、検出面からの深さ0.1ｍ、床面の標高9.58ｍを測る。主軸はＮ－７°－Ｗでほぼ南北である。壁体溝が確認され、カマドの部分で途切れる。カマドは北辺のほぼ中央に位置し、基部が良好に遺存した。カマド内部はよく被熱し赤色に変色しおり、底面中央部は被熱硬化がみられる。また、支柱石を立てたと考えられる浅い小さな穴も確認されたが、支柱石は検出されなかった。被熱面直上には厚さ５cm前後の粘土化した炭の堆積層がある。カマド前面部は深さ４cmほど浅く窪む。柱穴は３基検出され、４本柱と推定される。直径約0.4ｍ、深さは0.45ｍ前後である。出土遺物は、須恵器**125**と土師器**119**～**124**および鉄滓がある。**119**は壺、**120**は甕であり、どちらも外湾気味に外傾して長く伸びる口縁部を持ち、胎土に３㎜以上の砂粒を含む。**121**・**122**



第165図　竪穴住居４・出土遺物（１/60・１/４）

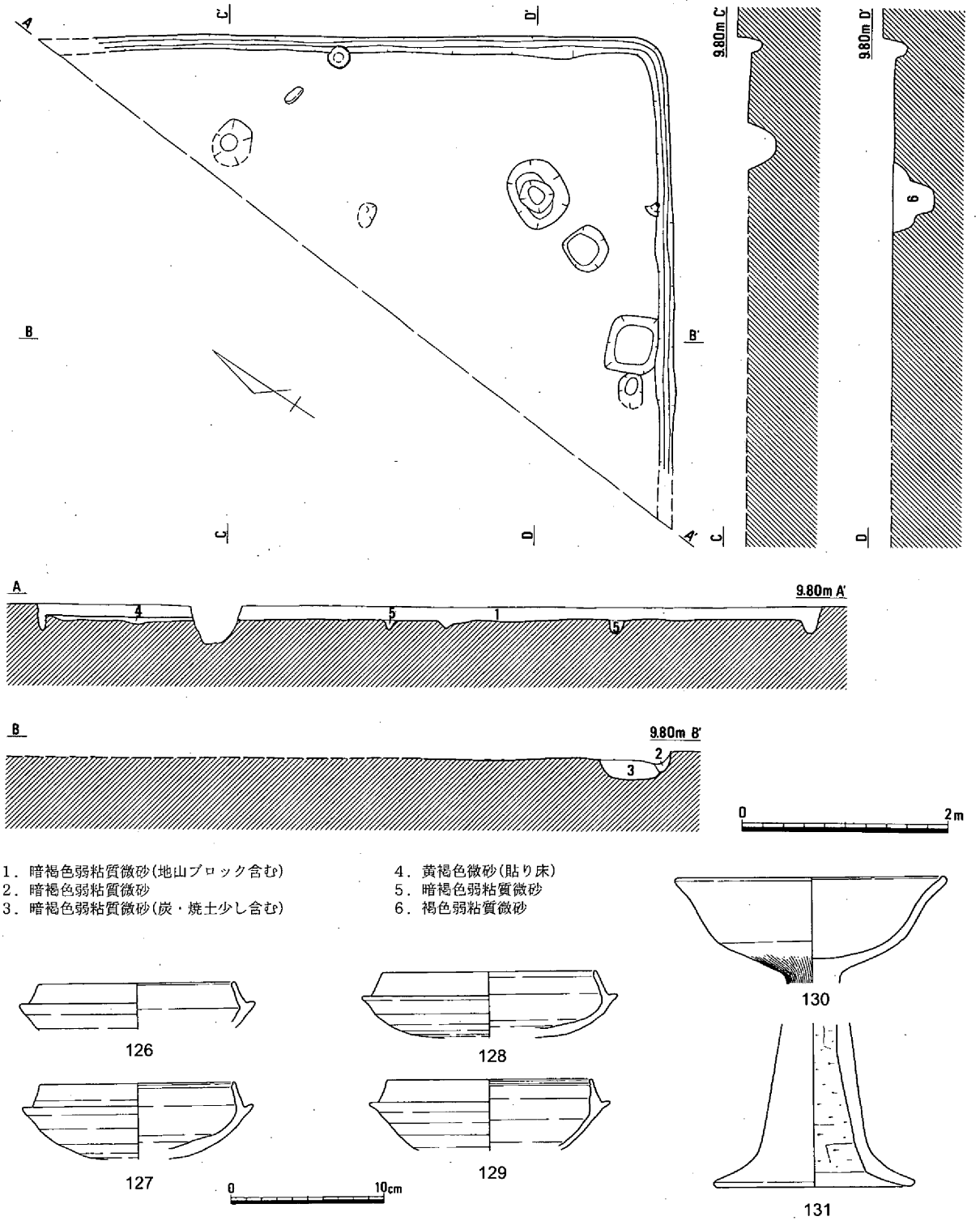


第166図　竪穴住居５・出土遺物（１/60・１/４）

は高杯、123は甑である。124は器種不明で胎土は３㎜大前後の砂粒が非常に多い。内面底部は強い横ナデ調整である。125は須恵器杯蓋で、口径14.8cm、灰色を呈する。鉄滓は重さ0.05gの鍛冶滓微小片で床面直上の埋土中から２点出土した。時期は古・後・Ⅰと推定される。　（物部）

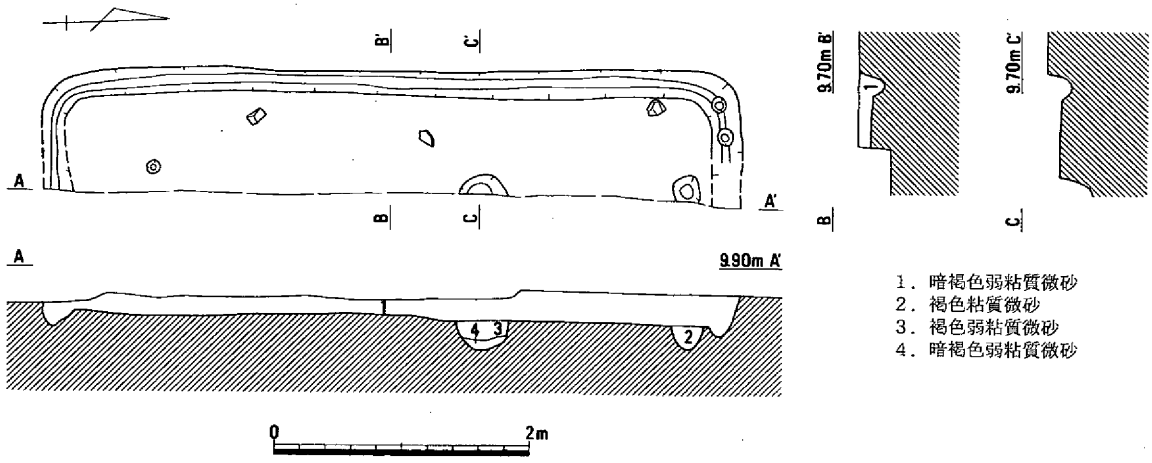
竪穴住居６（第167図　図版24）

竪穴住居６は３区中央、竪穴住居５の南西約５ｍに位置する。住居の西半分は調査区外になる。壁体溝を持つ方形の住居で、検出値6.14ｍ以上×4.82ｍ以上、検出面からの深さ0.1ｍ前後、床面の標高9.56ｍを測る。柱穴は２基確認され、４本柱と推定される。カマドは検出されていないが、調査区外の住居北西辺か南西辺に存在する可能性がある。また南東辺中央部には0.57×0.49ｍ、深さ0.20ｍの方形の土壙がある。断面ではこの方形土壙の埋土を壁体溝が切っているように観察されたが、明瞭ではなかった。住居底面上の一部、溝１との重複部分に黄褐色微砂の貼り床がみられた。出土遺



第167図　竪穴住居６・出土遺物（１/60・１/４）

物には須恵器126～129と床面出土の土師器130・131、および鉄滓がある。須恵器は全て蓋杯の杯身で口縁端部内面には僅かに段が残る。130・131は土師器高杯で明赤褐色を呈する。鉄滓は床面および床面直上の埋土中から180片程出土し、大半は１g以下、大きなもので33g、小さなものは0.01g以下の微小なものである。30cm四方の方眼を組み土壌を採取、水洗した。鑑定の結果、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄片などを含む。精錬滓の可能性のあるものも若干みられたが断定はしがたい。周辺に鍛冶炉が存在したことは間違いない。時期は古墳時代後期前半と考えられる。　（物部）

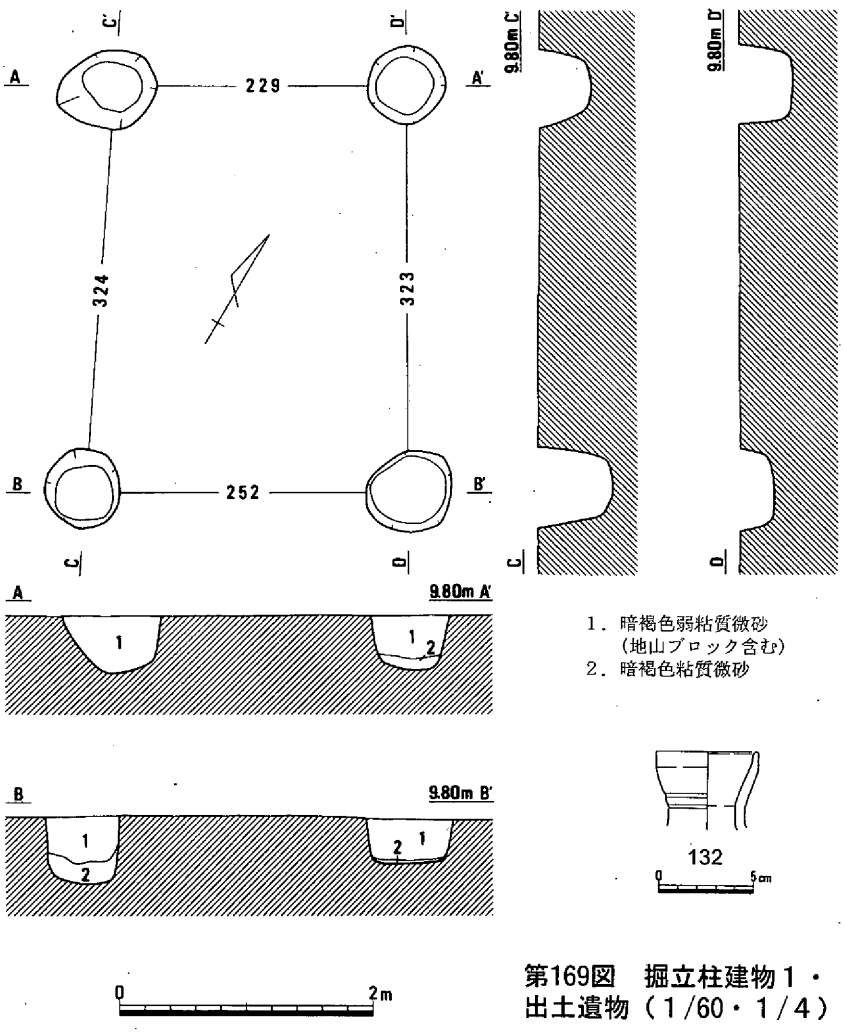


第168図　竪穴住居７（１/60）

竪穴住居７（第168図）

竪穴住居７は４区南端、竪穴住居６の南約5.5ｍに位置する。住居の大半は調査区外になる。南北5.49m、東西1.0ｍ以上、検出面からの深さ0.1ｍ前後、床面の標高9.60ｍを測る。壁体溝を持つ。柱穴・カマドは調査範囲内からは検出されなかった。遺物も僅かで、埋土中から土師質の土器小片が約30片ほど出土したのみである。周辺の遺構や遺物の状況から古墳時代後期と考えられる。　（物部）

（２）掘立柱建物



第169図　掘立柱建物１・出土遺物（１/60・１/４）

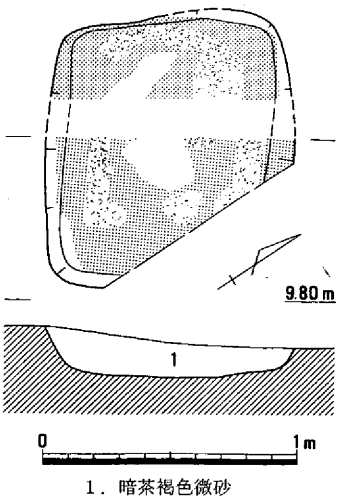
掘立柱建物１（第169図）

掘立柱建物１は４区中央部に位置し、竪穴住居６の東に隣接する。桁行3.24ｍ、梁間2.52～2.29ｍを測る１×１間の建物である。柱穴は直径0.6～0.7ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.5ｍ前後である。埋土は粘性の違いによって分層されるが、柱痕跡は確認されなかった。遺物は土師質の土器細片が少量と、南東部の柱穴より平瓶口縁部と思われる須恵器片**132**が出土しており、時期は古墳時代後期と推定される。また周辺には同様の形態・規模の柱穴が４基確認され、おそらく同じ時期のものと考えられる。　（物部）

（３）土壙

土壙７（第170図）

２区の南よりに位置する。土壙の南東隅は調査区外に位置するため調査を行っていない。平面形が方形を呈し、長さ約１m、幅0.98m、検出面からの深さは約0.2mを測るいわゆる焼成土壙である。土壙内には暗茶褐色土が堆積していたが、土壙の底面の中央付近を中心に炭が残存しており、土壙全体にわたって被熱痕跡がみられた。土壙内から若干の土器片が出土している。これらの出土遺物および他遺跡の焼成土壙例から、土壙７の時期は古墳時代後期に比定することが可能であろう。（金田）



第170図　土壙７（１/30）

（４）溝

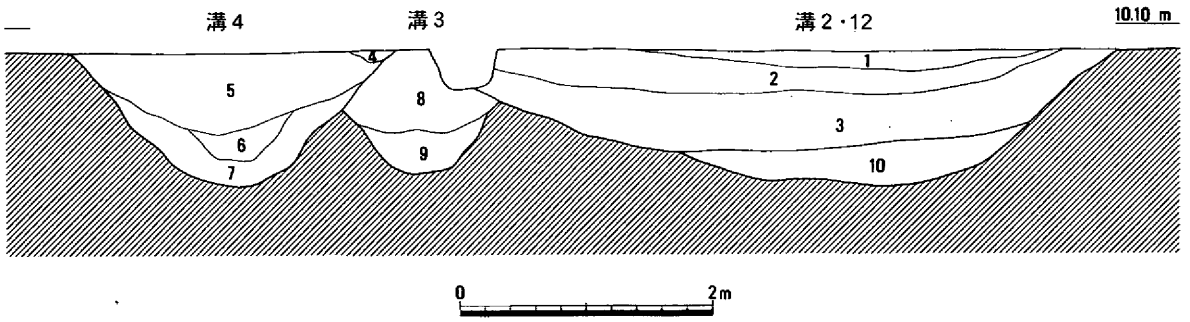
溝２～４（第171～174図　図版29）

４区と５区の境付近に位置する溝群である。溝２～溝４は切り合い関係にあり、溝３が溝２・溝４に切られており、一番古い時期のものである。

溝２は一番南に位置するもので、幅2.8m以上、検出面からの深さは0.3mを測る。溝２の上面には中世の溝12（第１～３層）が存在している。そのため、竪穴住居４との直接の切り合い関係は不明であるが、竪穴住居より古いものである可能性がたかい。溝内から若干の土器片が出土しており、古墳時代前期の溝であると考えられる。

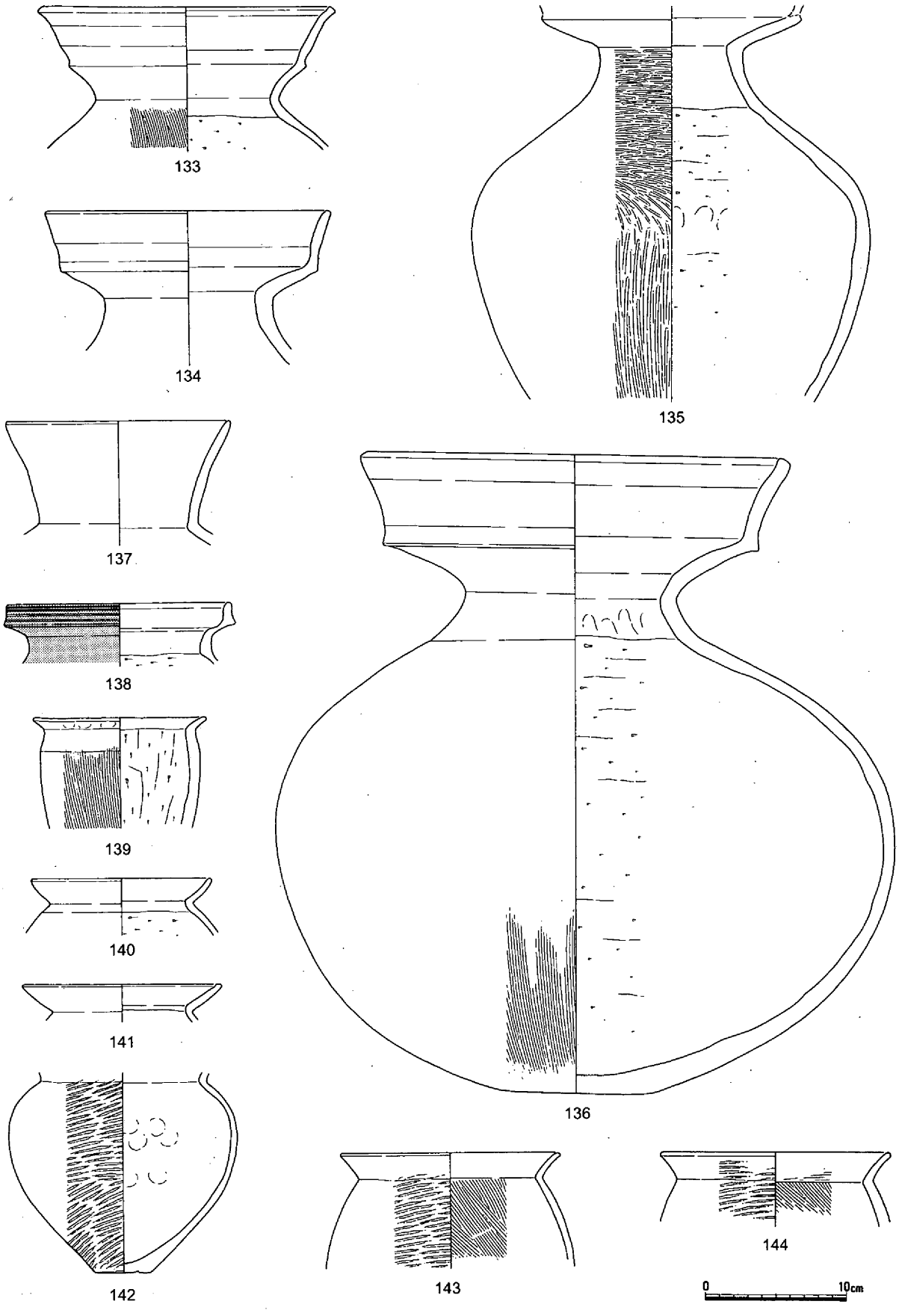
溝３は溝２と溝４の間に位置し、幅1.82m以上、検出面からの深さは0.95mを測る。溝内から土器片が若干出土している。溝３の埋没時期は溝２と溝４との関係から古墳時代前期と推測できるが、掘削時期は弥生時代後期にさかのぼる可能性がある。

溝４は一番北に位置するもので、幅1.82m、検出面からの深さは1.05mを測る。溝内から多くの弥生土器片および土師器片が出土した。133～137は壺である。133～136は二重口縁を持つ壺である。137は直口壺である。138～165は甕である。138は口縁部に櫛描沈線が施されており、外面に赤色顔料が塗布されている。139～144は「く」の字状の口縁をもつ甕である。そのうち、142～144の体部外面にはタタキメの痕跡がみられる。145～165は二重口縁をもつ甕で、153～162は口縁部に櫛描沈線をもついわゆる吉備型甕である。口縁部は上方にまっすぐ立ちあがるか、やや外反するものが多い。163～165は大きく外反する二重口縁をもつ甕である。166～172は高杯である。いずれも短脚の高杯

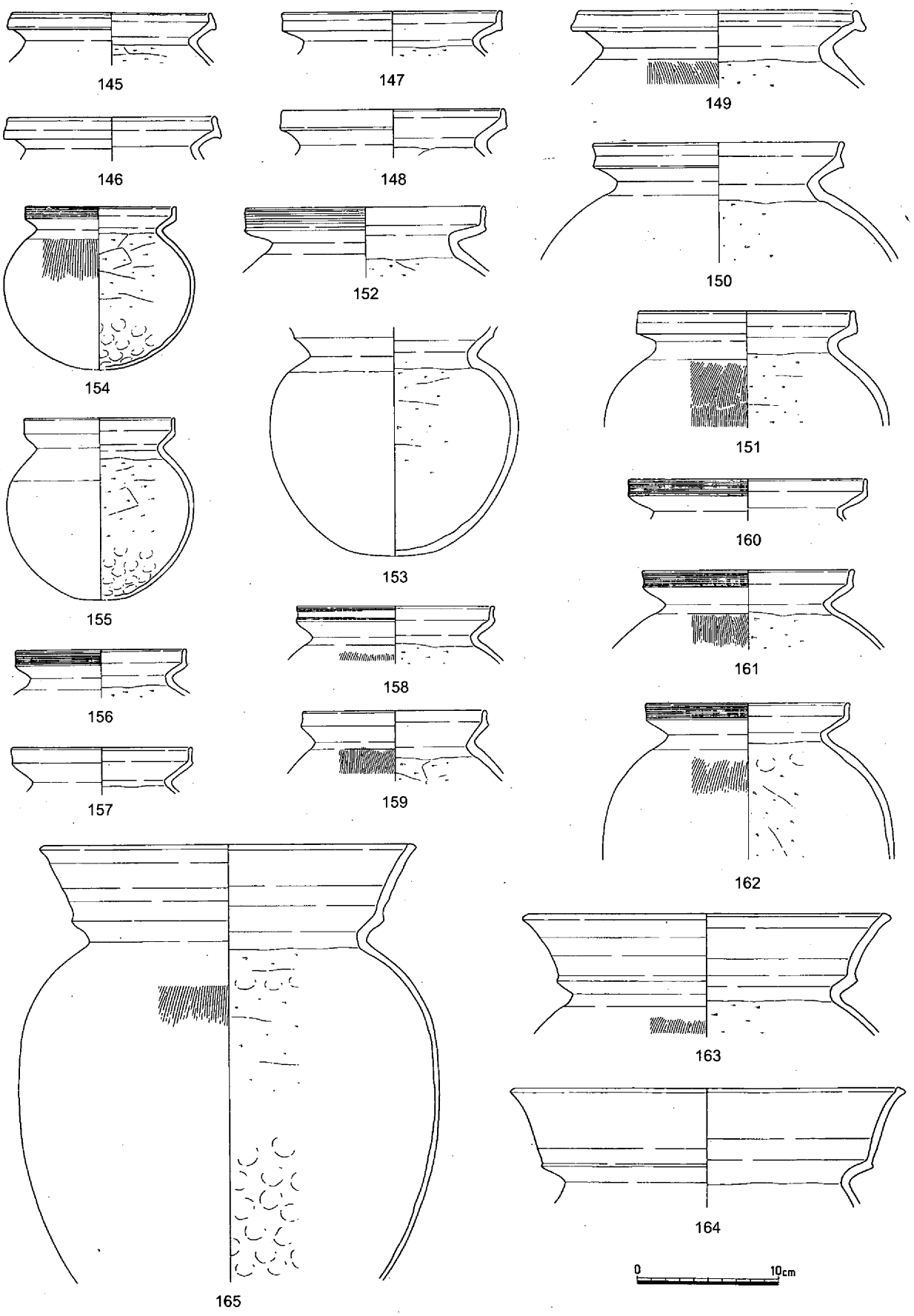


1．灰褐色細砂(マンガン沈着)<溝12埋土>
2．茶灰色砂(礫含む)<溝12埋土>
3．灰茶色砂(礫含む)<溝12埋土>
4．明灰褐色微砂<溝４埋土>
5．黒茶褐色砂<溝４埋土>
6．茶褐色砂<溝４埋土>
7．茶褐色粘質土<溝４埋土>
8．暗茶褐色微砂<溝３埋土>
9．灰茶色粘質土<溝３埋土>
10．茶褐色粘質微砂<溝２埋土>

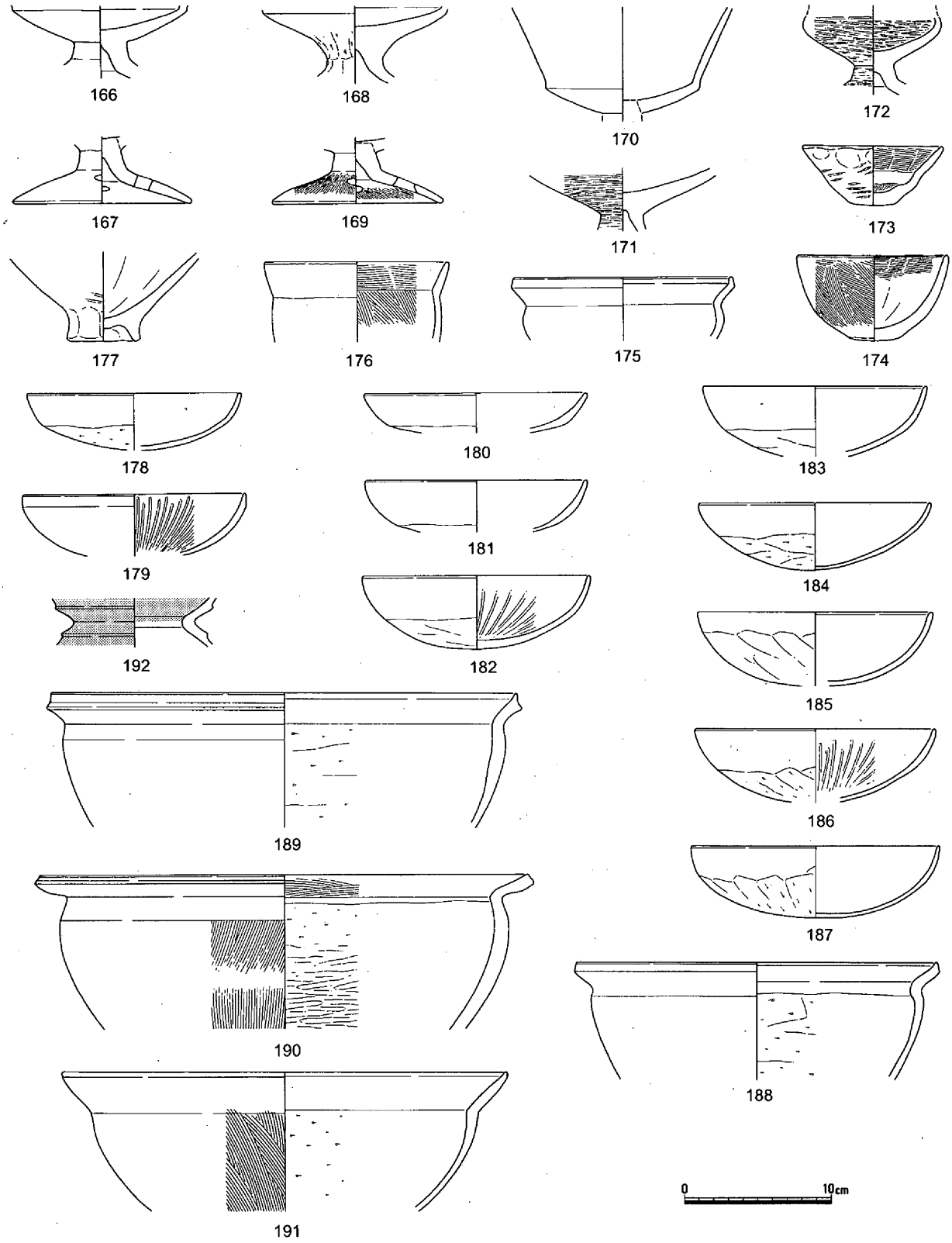
第171図　溝２～４（１/60）



第172図　溝４出土遺物１（１/４）



第173図　溝４出土遺物２（１/４）



第174図　溝４出土遺物３（１/４）

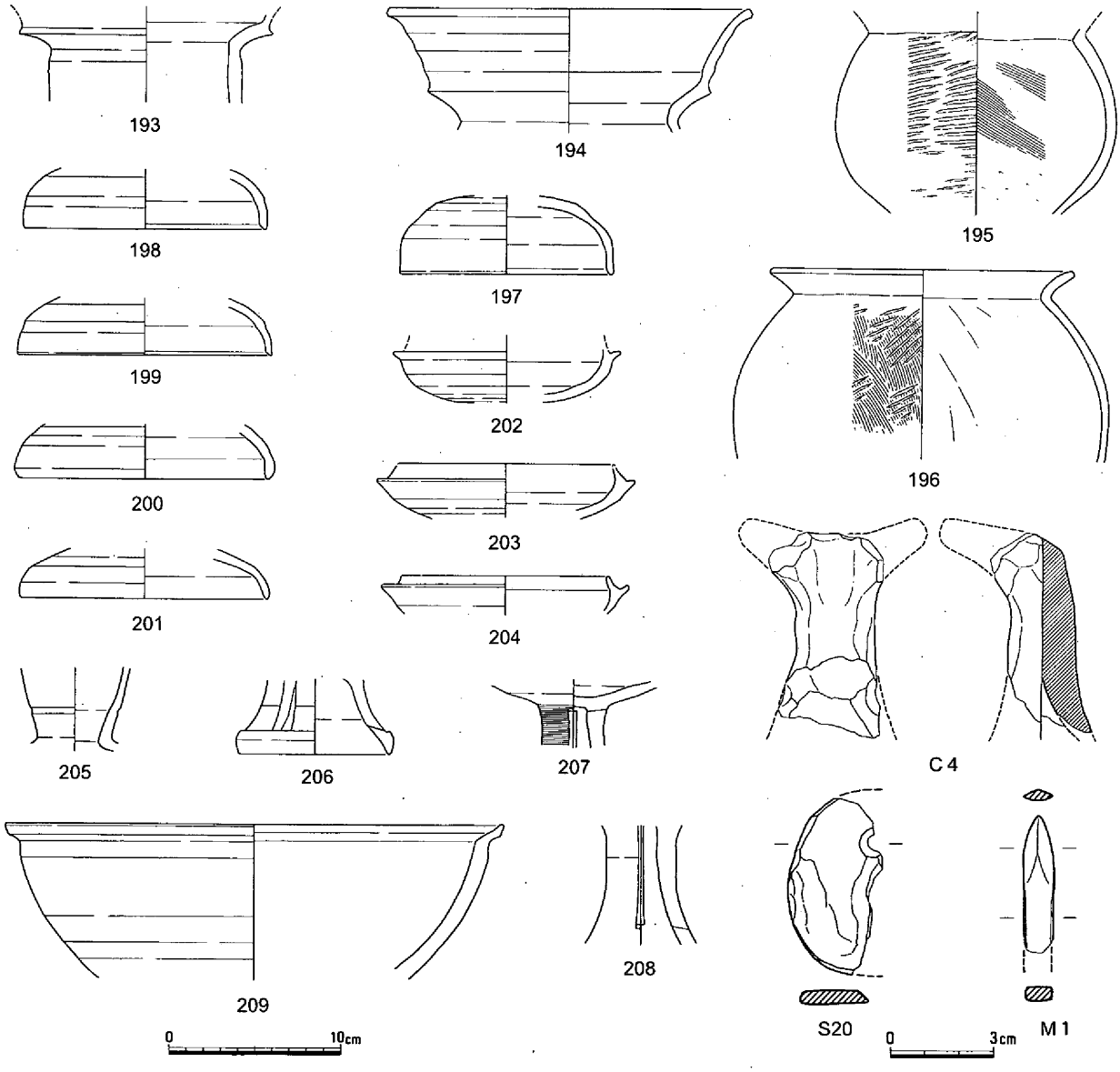
である。173～191は鉢である。そのうち、178～187は皿形をなす鉢である。192は鼓形器台で、外面に赤色顔料が塗布されている。このように、溝４から出土した土器群は弥・後・Ⅳに遡る土器を含むものの古・前・Ⅱに属する土器もみられることから、溝４の廃絶時期は古・前・Ⅱ頃であると推測できる。（金田）

（５）遺構に伴わない遺物（第175図）

遺構に伴わない遺物には、土師器・須恵器のほか石製品、土製品、金属製品がある。**193**は壺の頸部で、筒状をなす頸部から屈折して開く二重口縁をもつ。口径20.6cmを測る**194**は屈曲する頸部から外反して開く口縁をもつ在地の壺である。**195・196**はく字形の口縁をもつ甕で、内面はナデとハケメで調整し、外面には平行タタキの痕跡をとどめる。これらは溝４に伴う可能性がある。

須恵器には蓋杯・高杯・平瓶・器台がある。蓋杯は６世紀前半の**197・202**、中葉の**198・199**、後半～末の**200・201・203・204**に分けられる。高杯も、短脚３方透かしの**206**は６世紀前半に、長脚２方透かしの**207・208**は６世紀末に位置付けられる。**205**は平瓶の口頸部、**209**は器台の受け部で、いずれも６世紀末に属するものと思われる。

Ｃ４は中実ぎみにつくられた土製支脚で、２本の支持部と脚部を欠いている。低位部から出土した**Ｓ20**は緑泥片岩製の有孔円板で、過半を失っているものの径4.9cm、厚さ0.4cmの円板状に復元される。鉋**Ｍ１**は基部を欠いているものの現状で長さ3.9cm、幅0.9cmを測る。　（亀山）



第175図　遺構に伴わない遺物（１/４・１/２）

第４節　古代の遺構・遺物

（１）掘立柱建物

掘立柱建物２（第176図　図版25）

２区の中央部に位置する建物である。北西側は調査区外のため検出されず、北東端と南東端の柱穴は認められなかったが、桁行４間、梁間３間の南北棟と考えられる掘立柱建物である。棟方向はＮ－１°－Ｅであった。この掘立柱建物は桁行の柱通りが直線的ではなく、梁間の柱通りも断面図に示したＡ－Ａ’・Ｂ－Ｂ’を除き直線的ではなかった。

建物の規模は、桁行全長が13.39～12.96m、梁間全長が5.94～5.95mを測り、床面積は78.2㎡と推定される。梁間の柱間距離は一定しておらず、1.41～2.75mと最大約1.3mの差を測る。特に南北の梁間で２間目の差が大きかった。桁行の柱間距離は3.05～3.57mであった。

柱穴の掘り方は平面方形を呈しているものが多い。掘り方は建物と同様にほぼ南北に沿う形で方形に掘られている。規模は主に0.6m四方のものが多いが、最大のもので長辺0.92m、短辺0.8mを測る。深さは0.16～0.6mであった。掘り方底面は平坦である。柱穴痕跡も認められ、それから判断すると柱は径0.2mほどのものを用いていたようである。柱は掘り方の中心に据えられていたものが多いが、掘り方の縁に立てられていたものも存在する。

この建物は柱通りが直線的ではなく、柱間距離も一定していないことから、建物として纏まることに関して疑問を持つが、この建物の周囲に方形の掘り方を持つ柱穴が存在していないことから建物として図示した。

出土遺物は少なく、図示できるものも認められなかった。

時期は、建物の構造と土器から古代に属すると考えられる。（小嶋）

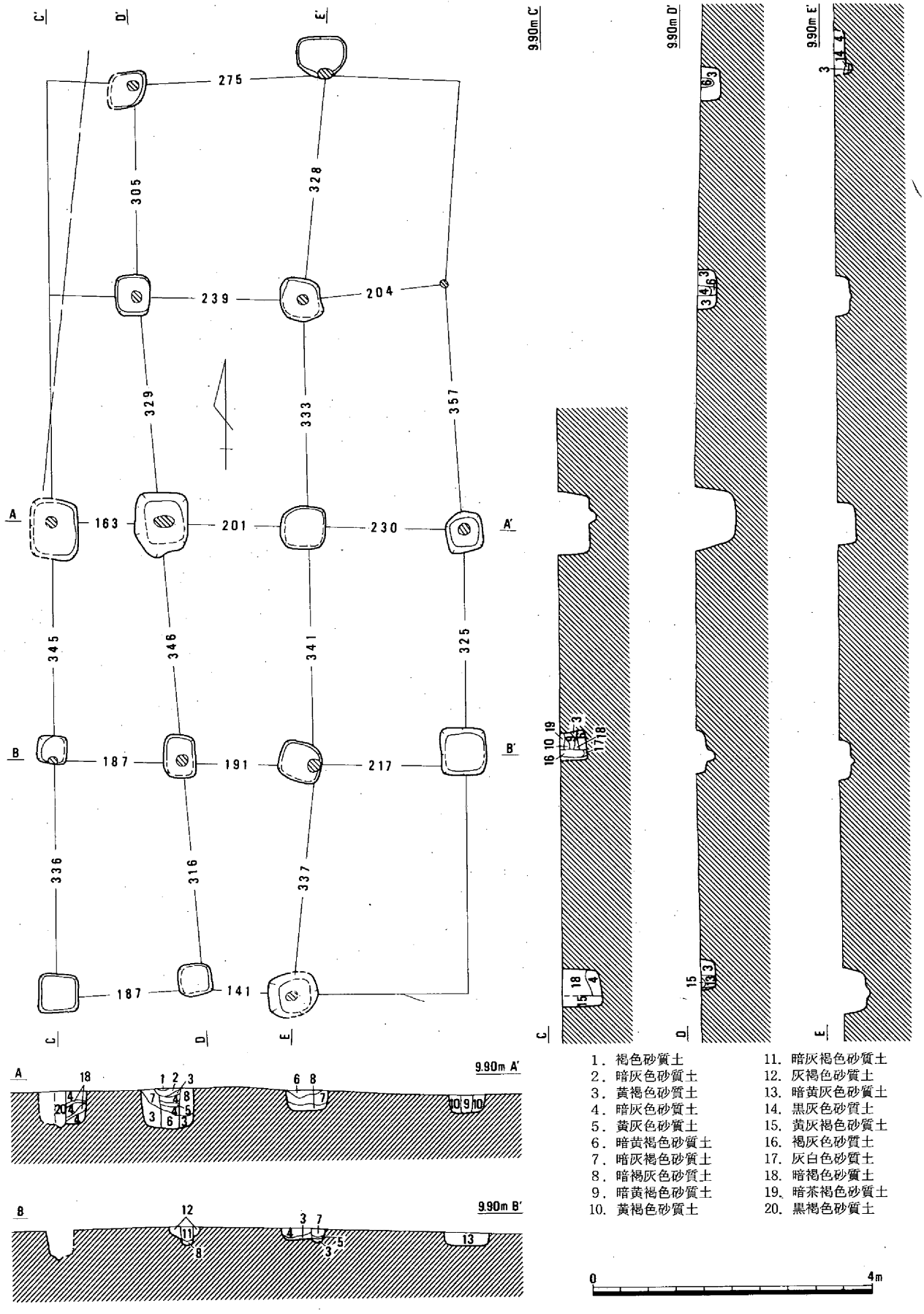
（２）土壙

土壙８（第177図　図版25）

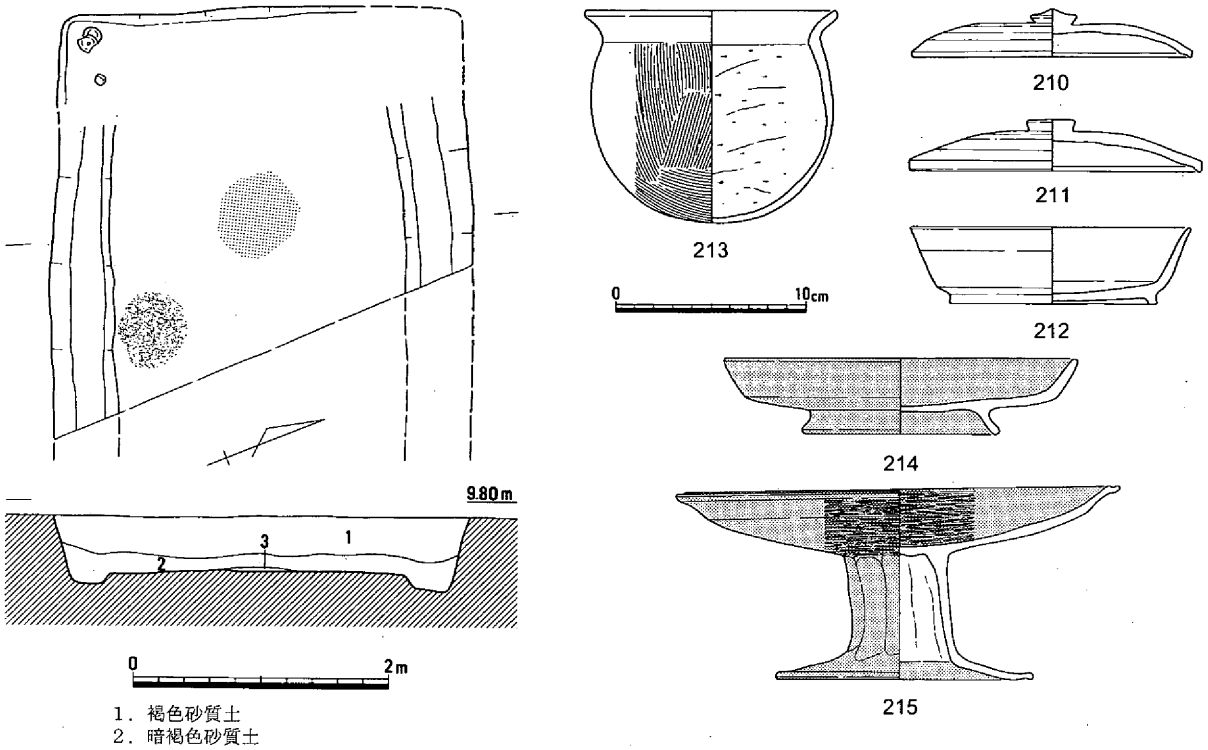
５区の南よりに位置する。方形の平面形を呈する土壙で、南東部は調査区外のため未調査である。土壙８は西辺で3.25m、南辺で3.4m以上、検出面からの深さで0.46mを測る。土壙底面の北辺と南辺では幅約50cm、深さ10cm程度の溝が設けられているが、西辺部については調査区境に位置していたこともあって溝の存在を確認できていない。なお、土壙の中央部には径約0.6mの範囲で被熱痕跡がみられた。土壙内から土師器片や須恵器片が出土した。**210**～**211**は須恵器蓋である。**212**は須恵器杯である。**213**は土師器甕である。**214**は土師器皿である。**215**は土師器高杯である。**214**と**215**の土師器の内外面には赤色顔料が塗布されている。**211**と**212**は南西隅でセットになって出土した。これらの出土遺物から土壙８は奈良時代に比定できる。（金田）

土壙９（第178図）

土壙９は６区南端西壁沿いに位置し、南東の微高地から北西に向けてなだらかに下がる斜面部の基盤層上面で検出された。平面形は不正形で西方の調査区外に向けて大きく広がり、深さも徐々に深くなる。土壙として取り扱ったが、自然の窪みの可能性もある。埋土上層、東側肩口部分の第178図の網目の範囲に多量の鉄滓が溜まっていた。鉄滓は中・小形の椀形鍛冶滓や鍛造剥片、ガラス質滓などの鍛冶滓であり、羽口も２点混入していた。鉄滓は１～２cm大が主で、総点数400点前後、総重量約4.3kg。羽口は直径６～７cmと小形である。これらは東の微高地方向からの流入あるいは廃棄と考



第176図　掘立柱建物２（１/80）



第177図　土壙８・出土遺物（１/60・１/４）

えられ、微高地部に鍛冶炉が存在すると思われる。時期は、土壙９の直上層が古代の水田層と推定されることから、それ以前おそらく古代の中に収まるものと考えられる。また、６・７区の包含層中に同様の鉄滓や羽口がかなりの量含まれており、大半は古代の遺物と思われる。（物部）

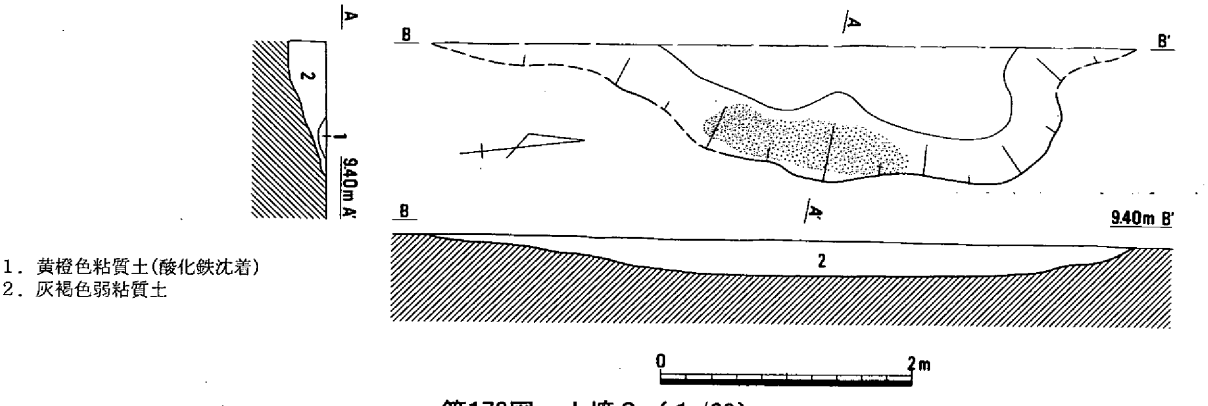
（３）溝

溝５（第179図）

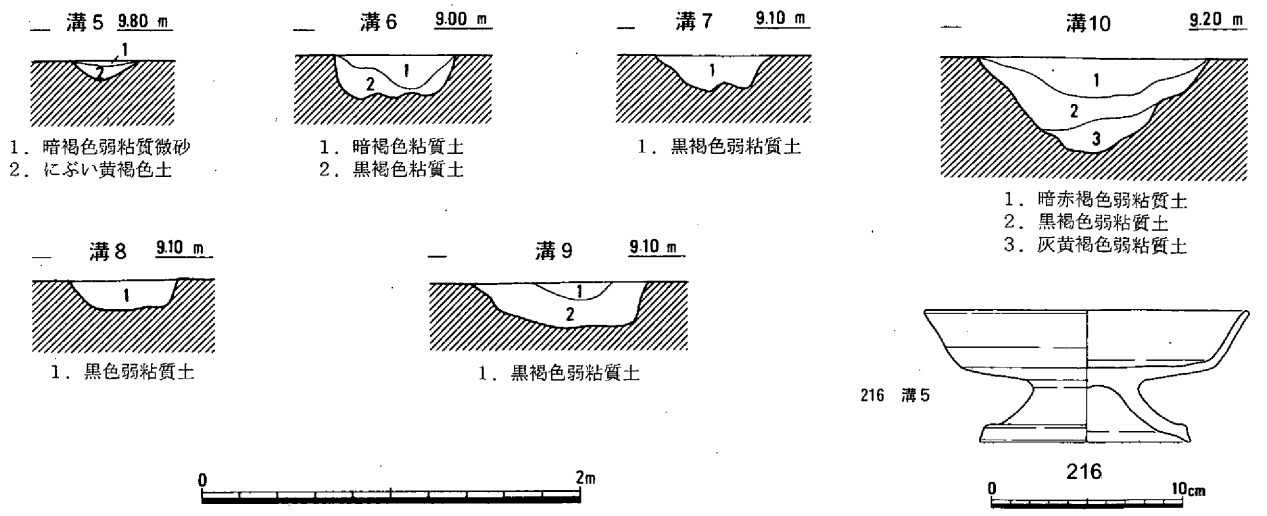
溝５は４区南半に位置し、微高地上に立地する。ゆるやかに蛇行しており、主軸はおよそ北北西－南南東である。検出長16.5m、検出幅0.43m、検出深0.12mを測る。検出長の中央付近で2.4m程溝が途切れる。この途切れる部分の北側溝端部は幅1.4m、深さ0.3mに広く深くなっている。出土遺物は、土師器の細片が少量と須恵器高杯**216**がある。溝５の時期は奈良時代と推定される。（物部）

溝６（第179図）

溝６は６区南半に位置し、微高地から低位部への斜面下端に沿って検出された。南南西から北北東へ流走している。検出長12.08m、検出幅0.68m、深さ0.25mを測る。また、溝６とほぼ重複し、より地形に沿って延びる溝も確認された。これらは水田に関連した溝と考えられる。時期は出土遺物



第178図　土壙９（１/60）



第179図　溝５～10・出土遺物（１/40・１/４）

か少なく決めがたいが、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。　（物部）

溝７・８（第179図）

溝７は７区北半から８区にかけて、溝８は24区で検出され、形態や位置関係から同一の溝と考えられる。低位部のほぼ中央に立地し、北北西から南南東に向けて蛇行しながら走っている。検出長29.04ｍ、検出幅0.8ｍ前後、検出深0.17ｍを測る。この溝の北東約0.8ｍの間隔をあけて柵列状遺構が確認された。一つ一つの平面形は0.3～0.4×0.2ｍの楕円形または数字の８の字形を呈しているが、直径約0.2ｍ、深さ0.17ｍ前後の円形の穴が２基切り合っている状況が確認された。溝７・８に沿って蛇行して検出されたことから、この柵列状遺構は溝７・８との関連が強いと考えられるが、その性格は不明である。時期は、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。　（物部）

溝９・10（第179図）

溝９は25区、溝10は11区で検出され、同一の溝である。井手天原遺跡の微高地から低位部にかけて南東方向に下がる斜面下端に立地する。南西から北東へ地形に沿って延びる。検出幅1.01～1.20ｍ、検出深0.23～0.49ｍ。時期は、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。　（物部）

（４）遺構に伴わない遺物（第180～184図）

遺構に伴わない遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦などがあるが、その多くは低位部から出土したものである。

須恵器には杯、蓋、皿、鉢、高杯、壺、瓶、甕、甑がある。杯は高台をもつ**226～231**ともたない**217**とがあり、前者が主体を占める。**217**は口径12.8cmを測り、尖りぎみにおさめた口縁端部はわずかに外反する。**226～231**はずれも断面矩形の高台をもつ。このうち、**226～229**は口径13.4～14.8cm、器高3.7cmで、口縁部が外反ぎみに斜め上方へ延びる**226・228**と、直線的に開く**227・229**に分けられる。また、**230・231**は全形を知り得ないが、径に比して器高が高い杯である。蓋**218～223**は、径が15cm前後の**224・225**と20cm前後の**222・223**に分けられる。後者は大形の杯のほか高台をもつ皿と組み合う可能性がある。つまみは宝珠形の**218**やボタン形の**219・221**、碁石形の**220**などがある。

皿には径30.2cmの大形の**232**と15.4～16.4cmの**233～237**がある。後者はさらに直立する口縁部の先端を丸くおさめる**233・234**と平坦な面をもつ**235・236**、口縁部が斜め上方にのびる**237**に区分される。

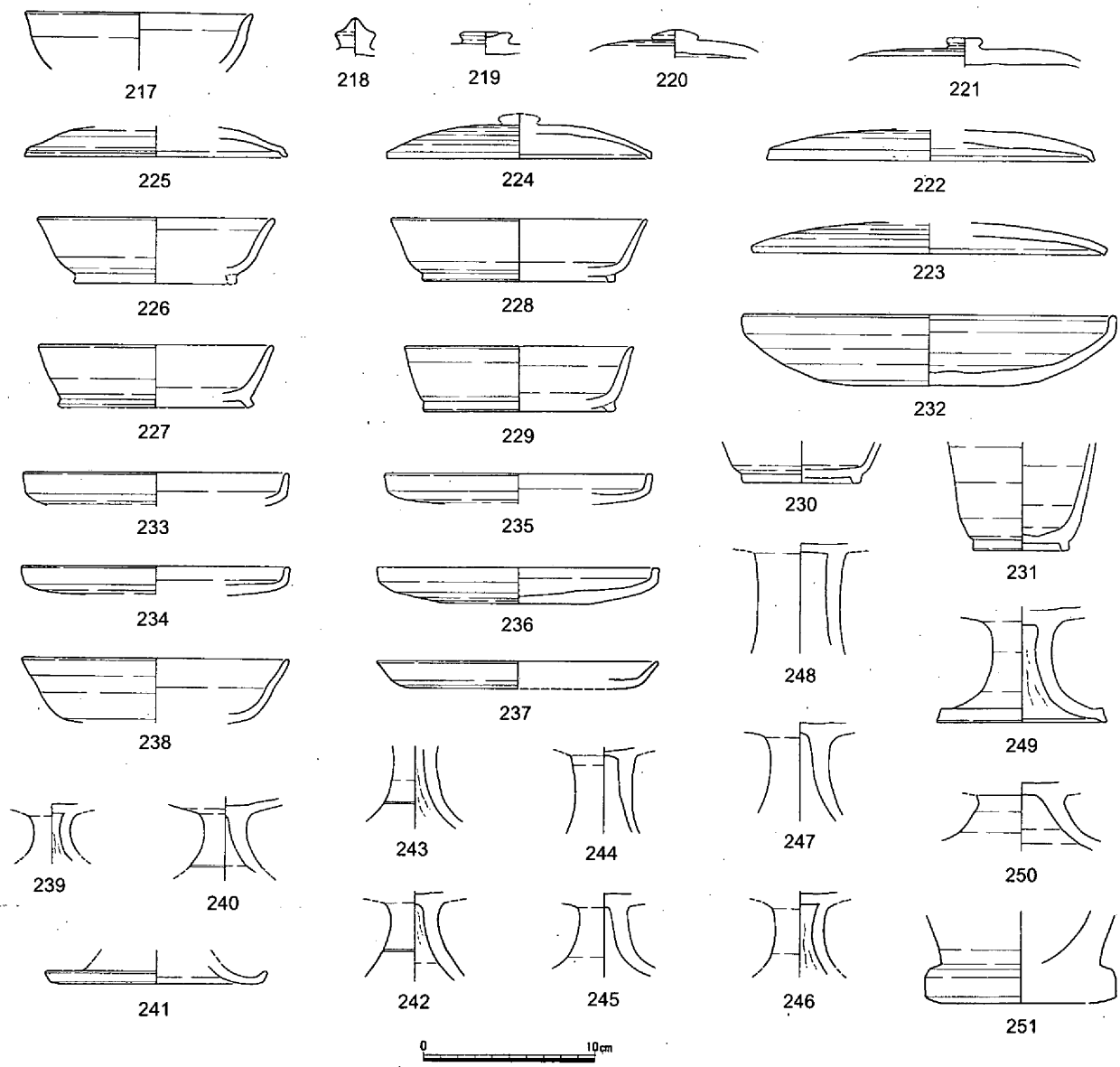
高杯**238～250**には全形を知り得るものはないが、小形で短い脚部をもつ**239～247**、長い筒形の脚部

を備えた248、低い脚部の250などに分けられる。

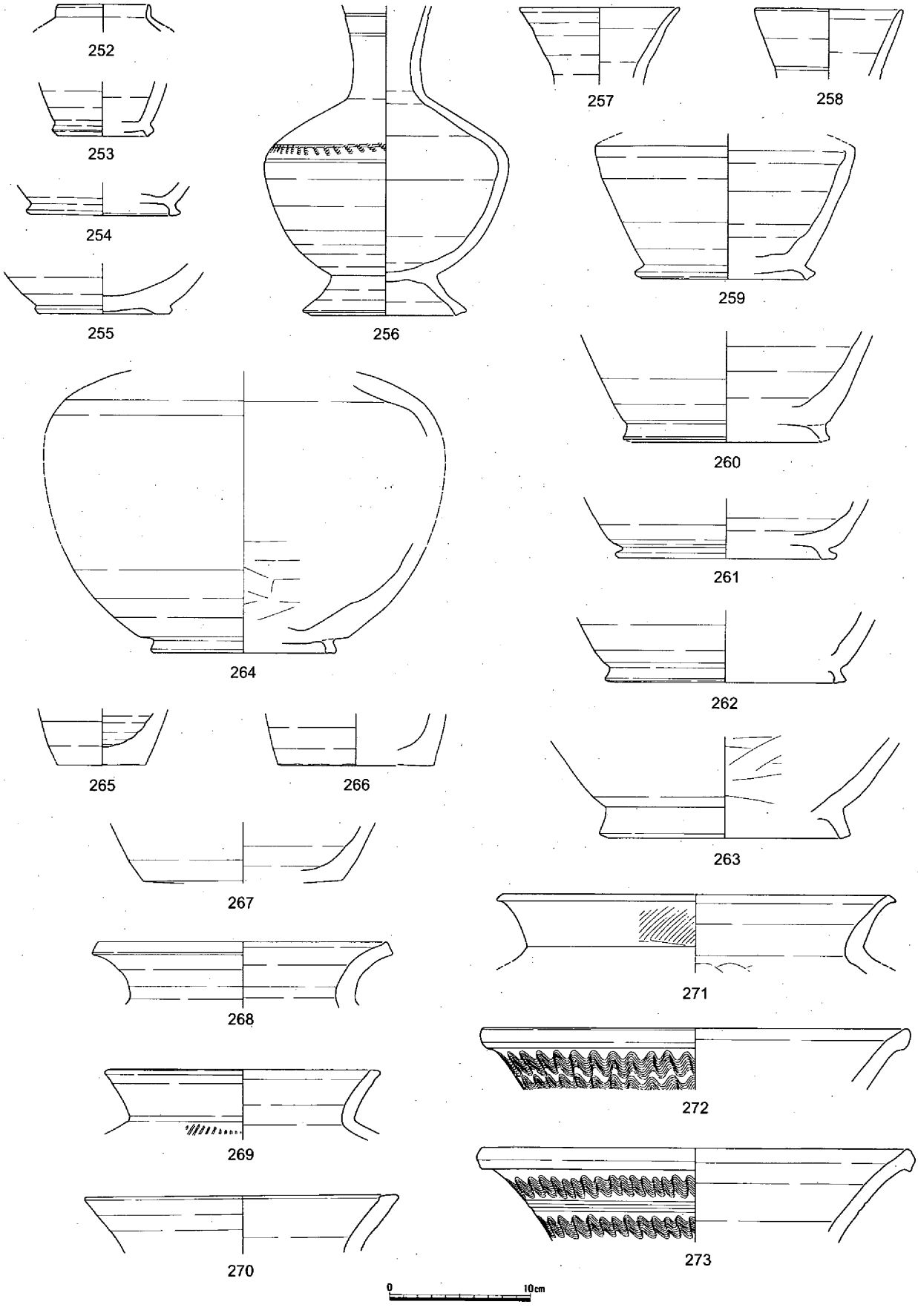
鉢251は径9.2cmを測る底部のみであるが、直線的に斜め上方へ広がる口縁部をもつものと思われる。壺には短頸壺と長頸壺がある。252は小形の短頸壺で、口径6.2cmを測る。264は胴径28.4cmを測る大形の短頸壺で、灰白色の胎土をもち、外面に黄緑色の自然釉がかかる。長頸壺256・257のうち、256は溝５の検出段階で出土したものである。口縁部を欠いているが、胴径17.3cm、現存高21.8cmを測る。長い頸部には２条の沈線をめぐらし、屈折して肩の張る体部には刺突文を飾る。また、底部には下方に長く広がる高台を貼り付けている。

268～270は口径18.2～21.8cmを測る中型の甕で、屈曲して広がる口縁端部は面をもって終わる。236～238は大型の甕で、口径26.8～29.6cmを測る。このうち237・238は口縁端部が肥厚して段をなし、外反する頸には波状文を二段に飾る。

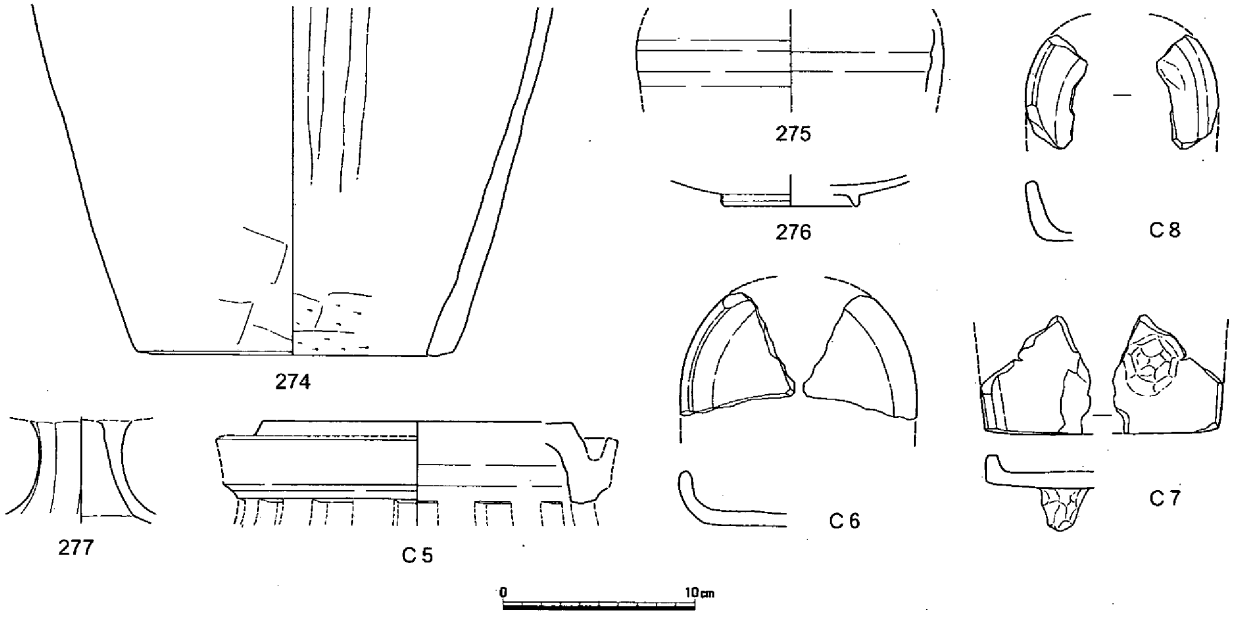
239は溝５に伴う可能性のある甑で、底径14.6cmを測る。甑か鍋のものと見られる把手も数点出土している。



第180図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第181図　遺構に伴わない遺物２（１/４）



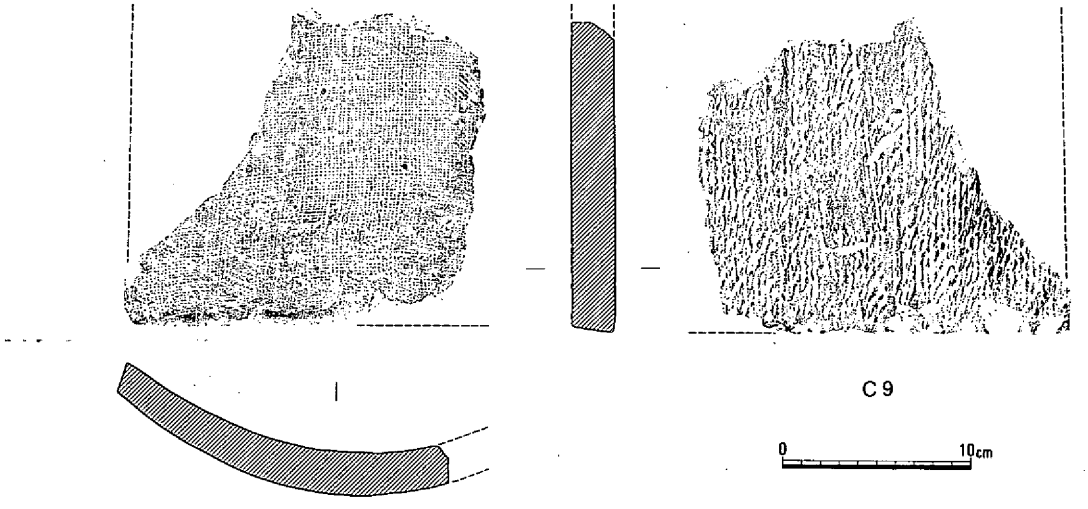
第182図　遺構に伴わない遺物３（１/４）

灰釉陶器には胴径16.2cmの壺240と、底径6.8cmを測る皿241がある。

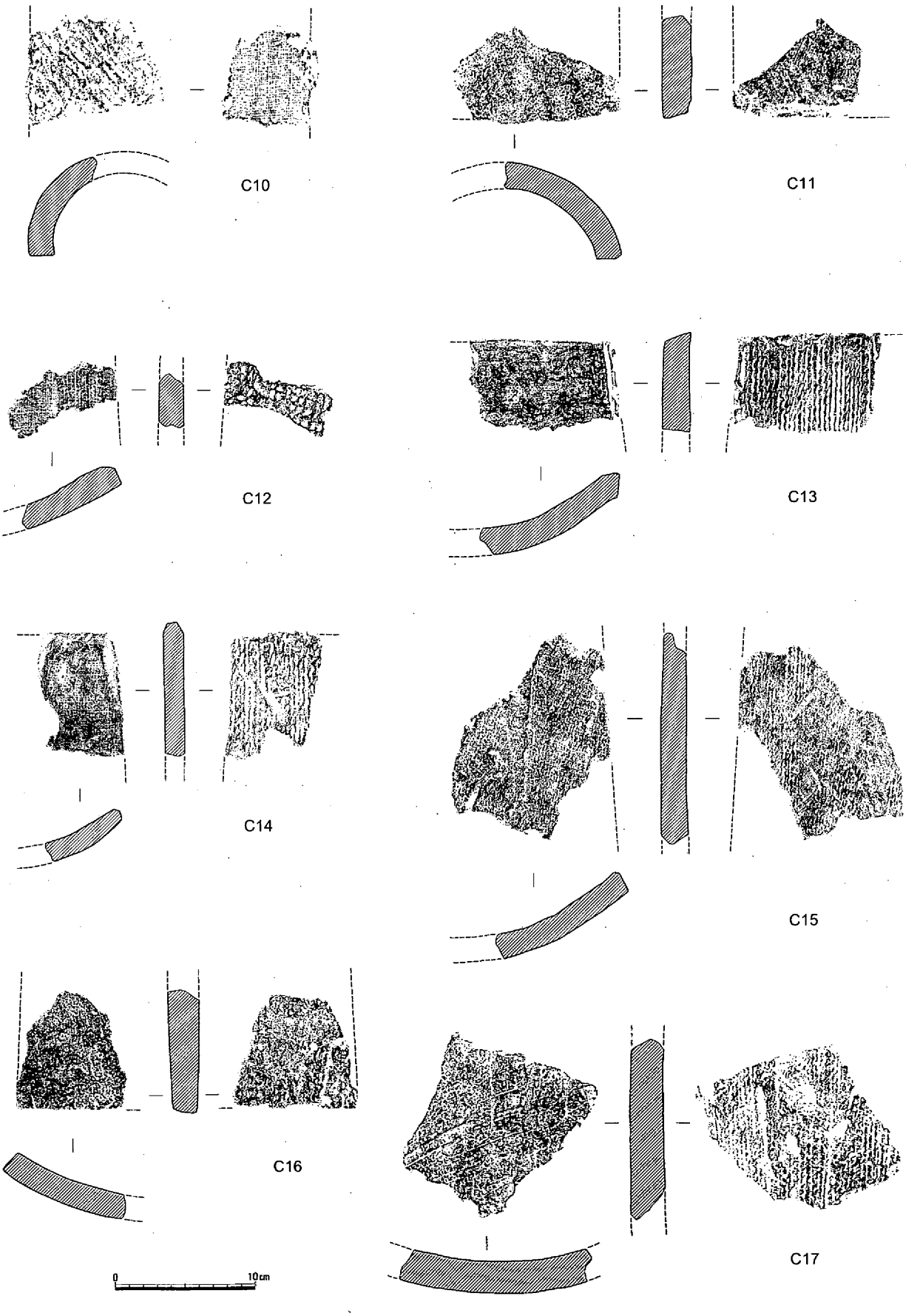
土師器には高杯・甕・竈があるが、甕・竈についてはいずれも小片のため、ここでは脚部外面を面取りする高杯242のみを図示した。

陶硯には、円面硯と風字硯がある。**Ｃ５**は円面硯の陸から海部の破片で、陸部径16.0cmを測る。脚部を欠いているが長方形の透かしを飾るものと推察される。風字硯は３点出土した。**Ｃ６・８**は海の、**Ｃ７**は陸の破片で裏面に長さ2.2cmの突起が残る。いずれも胎土が粗く、焼きもあまい。

瓦は９点出土したが、そのうち丸瓦は２点、平瓦は７点ある。**Ｃ９・10**は丸瓦で、**Ｃ９**は凸面に縄目を残すのに対し、**C10**はナデで仕上げている。これらは玉縁式と見られ、側面に内側からヘラで分割した痕跡が認められるものもあり、津寺遺跡のものと共通点が多い。平瓦は凸面に縄目を残すものが大半であるが、**C11**のように格子目タタキを施すものも認められた。　（亀山）



第183図　遺構に伴わない遺物４（１/４）



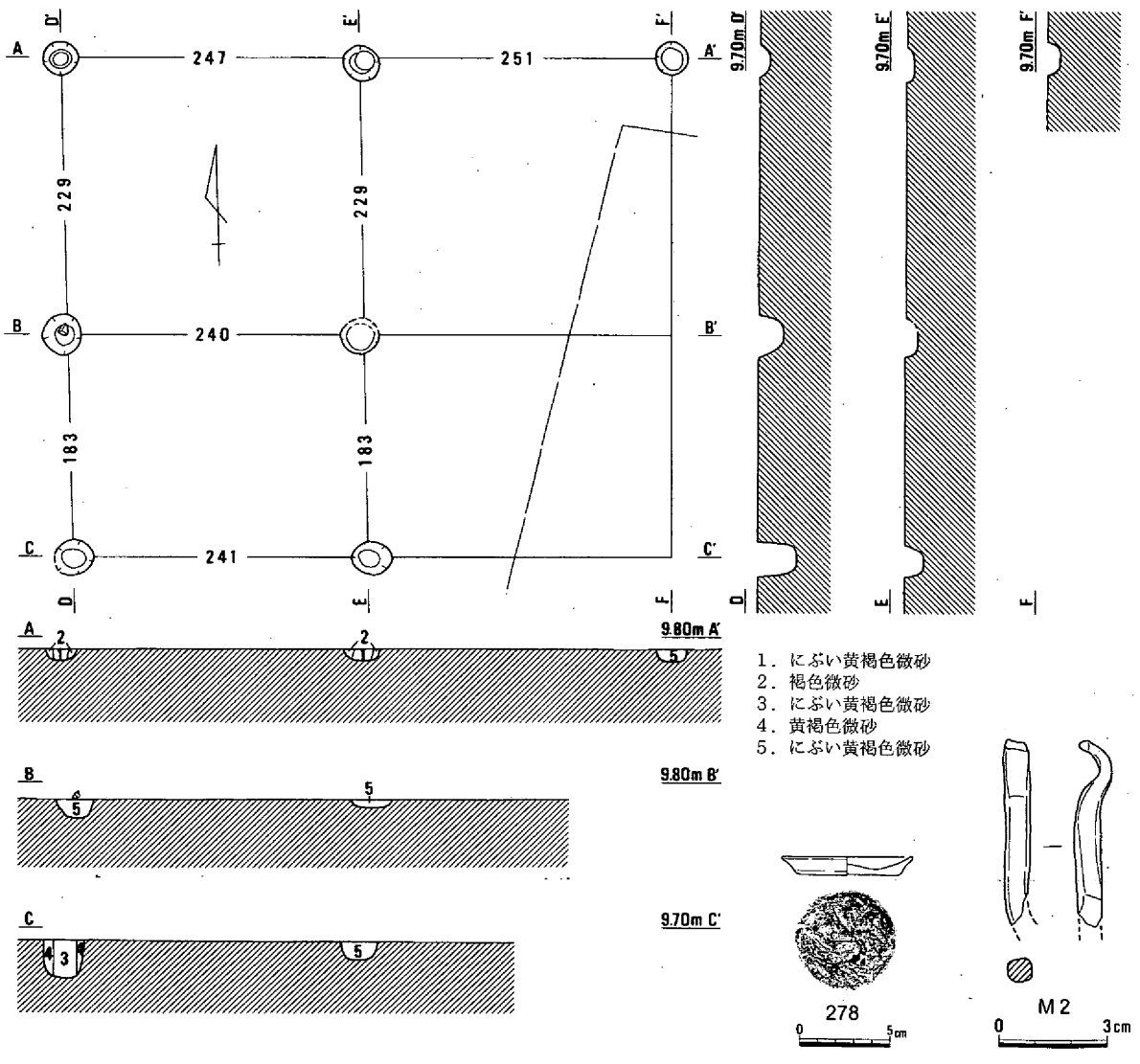
第184図　遺構に伴わない遺物５（１/４）

第５節　中・近世の遺構・遺物

（１）掘立柱建物

掘立柱建物３（第185図）

掘立柱建物３は１区南端部に位置する。調査区内で検出されたのは２×２間であるが、東西両側にさらに延びる可能性はある。桁行の総長は4.98mで、その柱間距離は2.51～2.41mを測る。張間の総長は4.12mで、その柱間距離は2.29～1.83mを測る。棟方向はＮ－89°－Ｗで、ほぼ東西方向である。柱穴は直径0.3m前後の円形を呈し、検出面からの深さは、南西角の柱穴が0.30mで、それ以外は0.15～0.09mと浅い。柱痕跡が確認された柱穴は３基あり、柱痕は直径0.13～0.17mの円形である。出土遺物は少量ある。278は黄橙色を呈する土師器の小皿で、口径7.0cm、底部外面はヘラ切り後、簡単にナデている。これ以外の土器片は細片のみで、中には早島式土器椀の破片が含まれる。Ｍ２は鉄製の釘で、頭部を折り曲げている。時期は土器の特徴から14世紀頃と推定される。また、中世の柱穴は１区北半では全く検出されず、隣の17区でも同じような状況であった。この周辺は大規模な地下げが行われたと伝えられており、その際に削平された可能性もある。（物部）



第185図　掘立柱建物３・出土遺物（１/60・１/４・１/２）

（２）土壙

土壙10（第186図）

土壙10は５区と６区の境に低位部に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.96m、検出面からの深さは0.42m、底面の標高8.46mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色の弱粘質～粘質土で下層には砂質土が薄くある。また、埋土中には５～20cm大の川原石が10個ほど包含されていたが、礎石というようなものではなく混入あるいは投棄されたものと考えられる。出土遺物は土器細片が20片ほどである、やや黄色味がかっているが早島式土器椀の破片と思われるものがあり、また、鎌倉時代と考えられる溝14を切っていることから、土壙10は鎌倉時代以降と考えられる。（物部）

土壙11（第186図）

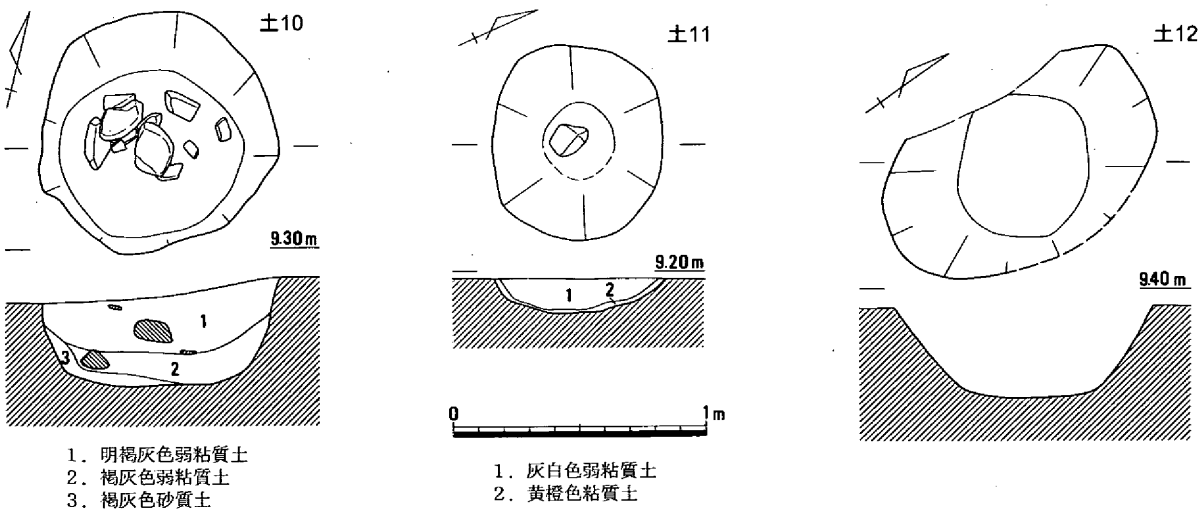
土壙11は６区南端、土壙10の南南西約2.5mに位置する。土壙10と同様に低位部に立地する。平面形は円形を呈し、直径0.78m、検出面からの深さ0.36m、底面の標高は9.04mを測る。断面形は浅い椀形で、埋土は灰白色粘質土で底面には鉄分が沈着している。内部に10cm大の礫が１点みられた。遺物はほとんどない。埋土が低位部にみられる中世の水田層とよく似ていることから、土壙11の時期も中世と考える。（物部）

土壙12（第186図）

土壙12は11区西壁沿いに位置し、低位部に立地する。溝10を切る。平面形は楕円形を呈す。埋土は黄灰色微砂で基盤土のブロックを含む。遺物は土器細片のみ。時期は中世と推定される。（物部）

（３）土壙墓（第187図）

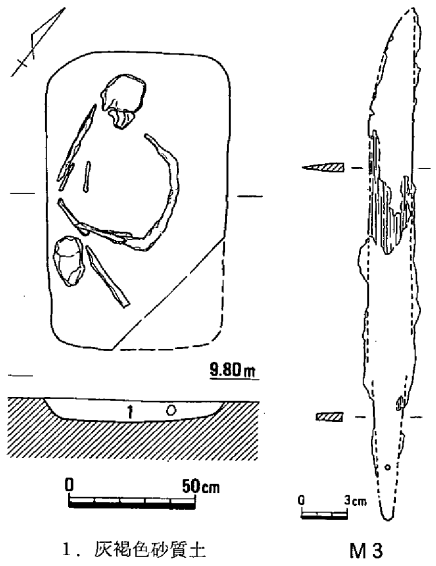
４区の中央付近に位置する土壙墓である。長方形の掘り方を呈しており、長さ1.19m、幅0.73mを測る。検出面からの深さは約９cmで、土壙墓の上面は著しい削平を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。土壙墓内から人骨一体分を検出した。人骨の保存状況は良くなく、人骨の取り上げはできない状態であったが、頭蓋骨および背骨や四肢骨の一部など主要な骨格部分の位置は確認することができた。このことから、遺体の頭位はN－37°－Wで、右側臥屈葬であったことがわかる。土壙墓内から小刀が、ちょうど被葬者の手に握られていたかのような位置で出土した。また、脛に近接して径約20cm程度の礫が検出された。なお、土壙墓内から土器片や釘等の出土はなかったが、土壙墓８は鎌倉時代頃に属するものと推定できる。（金田）



第186図　土壙10～12（１/30）

（４）溜池状遺構（第188図）

溜池状遺構は11区南端部に位置し、低位部に立地する。その約３/４は調査区外になる。南隣の10区まで延びないことから、平面径は５ｍ前後、深さ2.2ｍの規模と推定される。埋土の下半は粘土（第８層）が一様に堆積している。上層は基盤土ブロックを多く含む褐色微砂で人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物には土器小片が少量と、獣骨がある。**279**は備前焼の擂鉢。獣骨は第８層に包含され、その一部を取り上げたが、大半は調査区外に残存する。牛骨と考えられ、下顎骨、脊椎、肩甲骨、四肢骨がみられた。下顎骨は２個体分ある。散乱したような出土状況であった。時期は15世紀以降と考えられる。（物部）



第187図　土壙墓・出土遺物（１/30・１/５）

（５）溝

溝11（第189図）

４区の北よりに位置する。古墳時代の竪穴住居４の上面で検出された。幅は1.73ｍで、検出面からの深さは約0.4ｍである。溝11は西端を溝13に切られており、溝13より古い時期の溝であると考えられ、鎌倉時代から室町時代にかけての溝であると推測できる。（金田）

溝12（第189・171図）

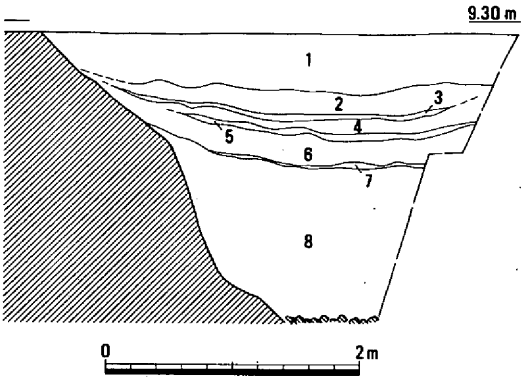
４区の北よりで検出された東西に走る溝である。古墳時代の溝２の上層に位置し、竪穴住居４の北東部を切っている。幅は2.8ｍで、検出面からの深さは0.78ｍを測る。鎌倉時代から室町時代にかけての時期の溝である可能性が考えられる。なお、溝内から古代瓦**Ｃ９**が出土した。（金田）

溝13（第189・190図）

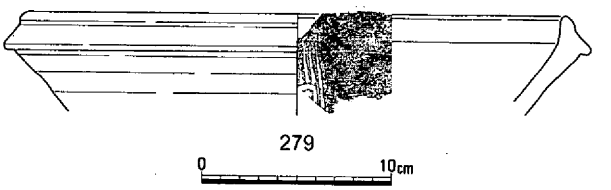
４区に位置する。幅約1.1ｍ、検出面からの深さは約0.3ｍを測る。溝は調査前の水田畦畔とほぼ同じ位置に存在していることから、溝13は調査区の東側に広がる微高地の西側縁辺部をめぐっていたものが、埋没後にその位置が水田畦畔へと踏襲されたことがわかる。溝内から土師器、須恵器、亀山焼、備前焼等が出土している。**280**～**281**、**282**は土師器鍋である。**283**は備前焼擂鉢である。これらの出土遺物から、溝13の時期は室町時代に比定できよう。（金田）

溝14（第189図）

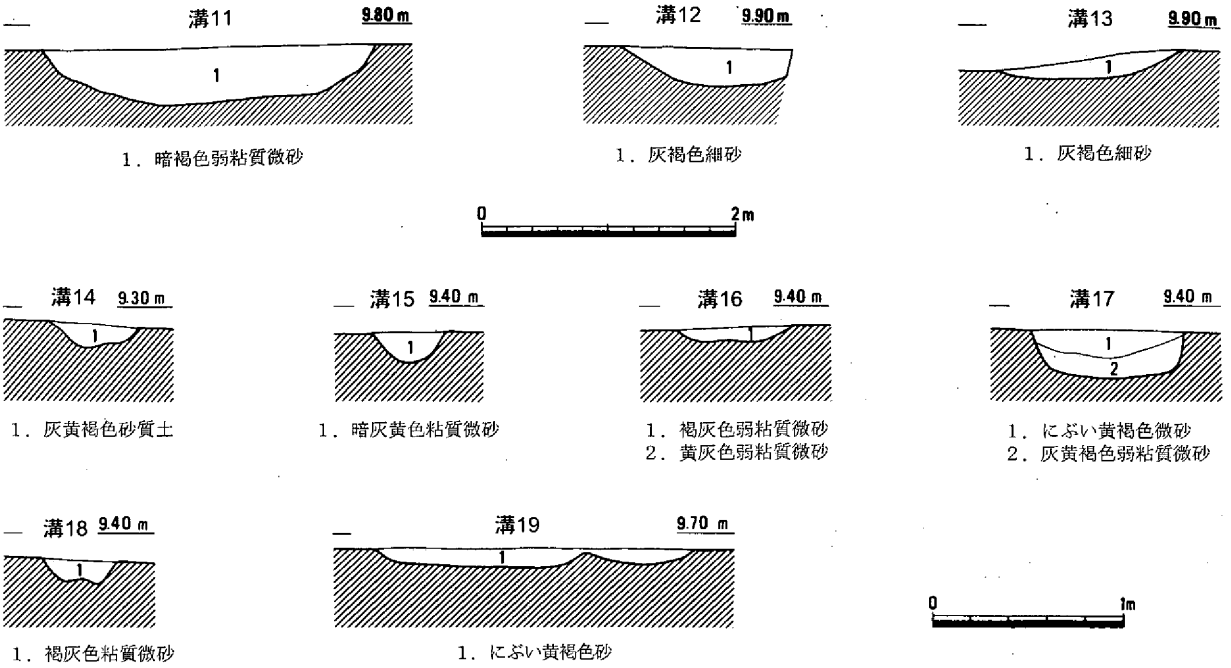
溝14は５区から６区にかけて検出された。低位部に立地し、水田に伴う溝と考えられる。南西か



1．褐色微砂
2．にぶい黄褐色粘質微砂
3．灰色粘土
4．暗灰黄色粘質微砂
5．暗オリーブ灰色粘土
6．灰色粘質微砂
7．暗オリーブ灰色粘土
8．暗オリーブ灰色粘土



第188図　溜池状遺構・出土遺物（１/60・１/４）



第189図　溝11～20（１/60・１/40）

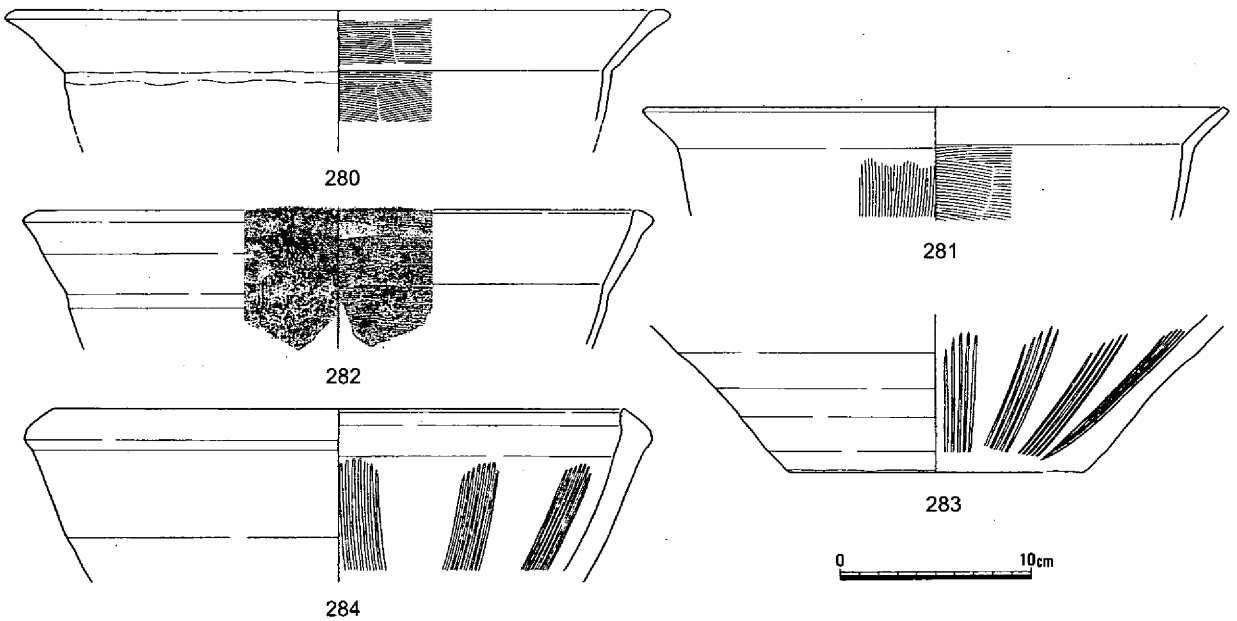
ら北北西に鉤形に屈曲する。検出長25.01m、検出幅0.77m、検出深0.12mを測る。出土遺物は土器細片が少量ある。その中に高台の付く早島式土器椀がみられ、このことから時期は鎌倉時代と推定される。また、溝14のすぐ東に同様の水田に伴う溝があり、時期は近世である。時期が下るに従って微高地の端部を掘削して水田化した様子がうかがえる。　（物部）

溝15（第189図）

７区南端、低位部に位置する。水田に伴う溝である。溝17・18に切られている。南西から北東に僅かに湾曲して延びる。遺物は僅かである。中世の水田層を切っており、時期は中世以降。　（物部）

溝16（第189図）

７区南端、併走する溝16～18のうち一番南に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。



第190図　溝13出土遺物（１/４）

ほぼ東西に主軸を持ち、現代の水田畦畔と同一方向である。時期は近世以降である。（物部）

溝17（第189図）

７区南端、併走する溝16～18のうち中央に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。埋土下層に５～20cm大の礫や粗砂を含む。層位から時期は近世以降で、溝16より新しい。（物部）

溝18（第189図）

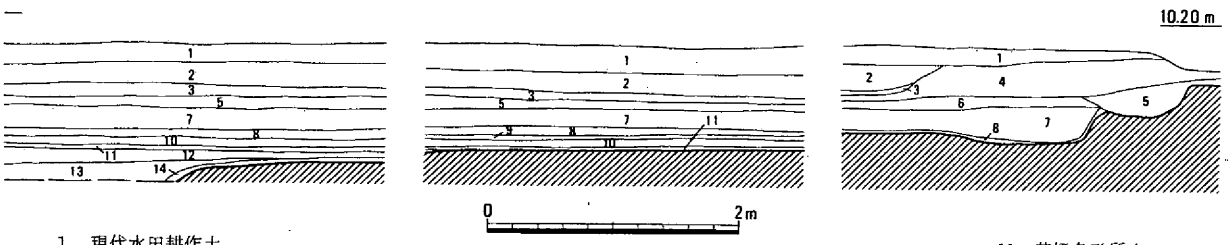
７区南端、併走する溝16～18のうち一番北に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。層序から溝16→17→18の順で新しくなり、おそらく水田畦畔が少しずつ北へ移動した状況を示すものと考えられる。（物部）

溝19・20（第189図）

溝19・20は11区北端、井手天原遺跡の所在する微高地南端部に位置する。両者は南西－北東方向に併走し、溝19が溝20を僅かに切っている。水田に伴う溝である。遺物は皆無であった。時期は層序から近世以降と考えられる。（物部）

（６）水田（第191図）

井手天原遺跡の所在する北の微高地と、井手見延遺跡や金井戸鴻崎遺跡の所在する南の微高地の間は低位部となる。北西方向から南下する低位部と南西方向から北上する低位部がちょうど調査区の部分で連結し、11区の北西方向へ抜けていると推定される。低位部の幅は40～50mと考えられるが、調査区が連結部にあたるため、調査区における低位部の幅は５～11区まで200m近くある。微高地の基盤層上面の標高は9.85m前後、低位部の基盤層上面の標高は約9.00mで、比高差は約0.85mである。この低位部には古代から現代までの水田層がみられた。第191図は５～６区の東壁断面図である。第１層は現代水田耕作土、第２層は第１層に伴う客土である。第３層は近代の水田耕作土、第７層は近世の水田耕作土で、漂白層と鉄分の沈着した明黄褐色を呈する層の互層である。第10層は灰色を呈する粘質土で中世の水田耕作土と考えられる。第11層は鉄分の沈着層である。第12層も中世の水田層と推定される。第13層は黒褐色弱粘質土で古代の水田層と考えられ、基盤が低いところでは３層に分層される。第11層上面および第13層上面では、それぞれ第10層および第12層の中世水田層に伴う畝状遺構が全面で検出された。その畝状遺構はほぼ現在の水田の区画ごとに方向が異なる状況がみられ、現在の水田区画が中世までさかのぼることが確認された。また、褐色弱粘性砂質土の基盤層上面で土壙９や溝６～10、柵列状遺構が検出されたが、さらに第13層の古代水田層に伴うと考えられる鋤痕を７～10区にかけて部分的にではあるがかなりの範囲で確認した。鋤痕は幅15cm前後の平面三角形を呈する。古代以前の土層は認められなかった。（物部）



1．現代水田耕作土
2．造成度
3．近代水田耕作土
4．にぶい黄橙色砂質土
5．にぶい黄褐色砂質土
6．にぶい黄橙色砂質土
7．明黄褐色砂質土
8．黄橙色粘質土
9．灰黄色砂質土
10．灰色粘質土
11．黄橙色砂質土
12．灰白色弱粘質土
13．黒褐色弱粘質土
14．暗褐色砂質土

第191図　低位部土層断面図（１/60）

（７）遺構に伴わない遺物（第192・193図）

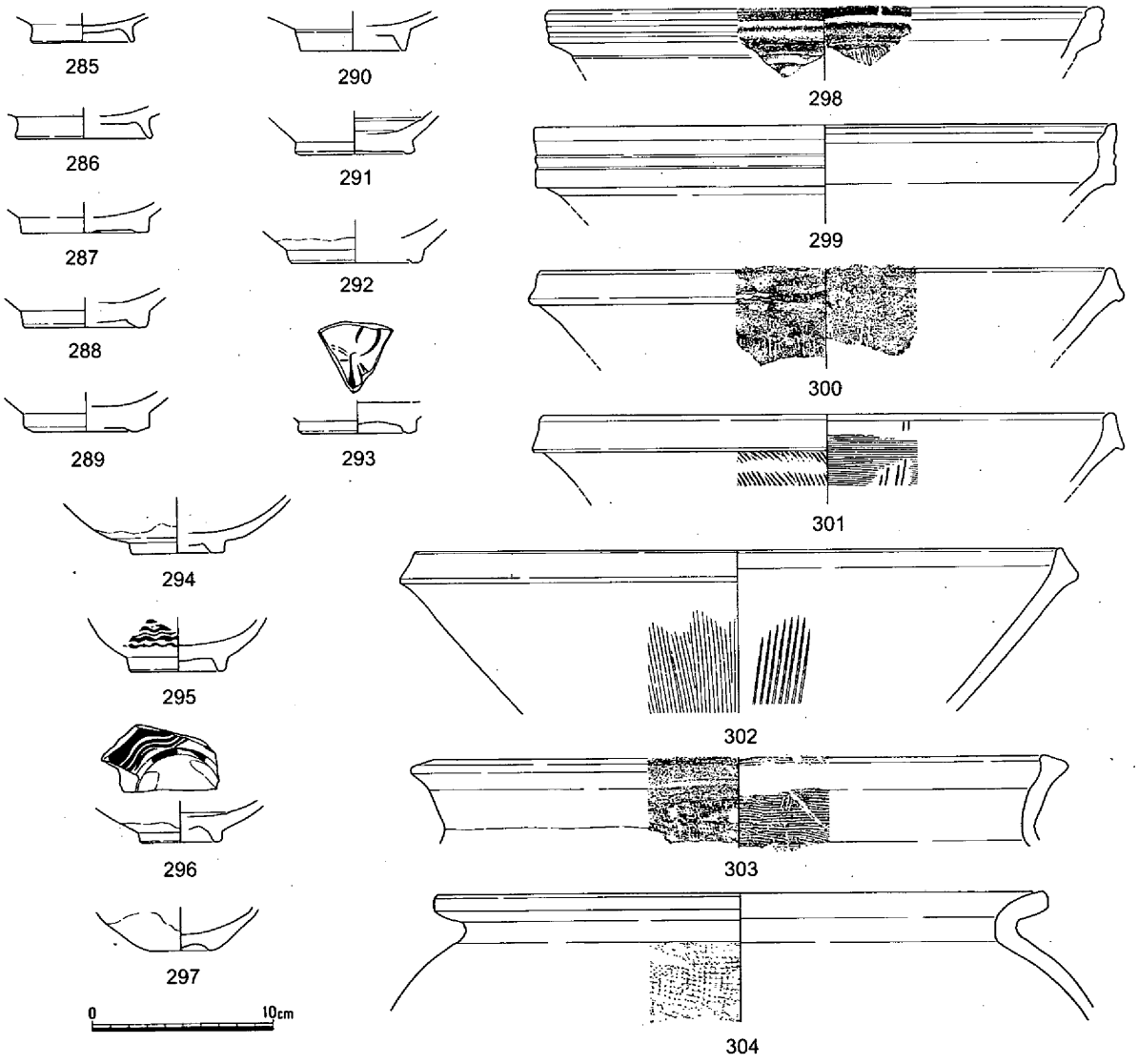
遺構の検出や水田を掘り下げる過程で、土師器や陶磁器、土製品、金属製品などが出土している。土師器**285・286**はいわゆる早島式土器の椀で、高台径5.5cmの**285**と7.4cmの**286**とがある。

白磁**287～292**はいずれも碗の底部であるが、高台が低く削り出しの浅い**287～289・291・292**と、直立する高台が細く高い**290**に分けられる。**293**は竜泉窯系の青磁碗で、高台は低い矩形をなし、内底には劃花文を飾る。これらは主に低位部の水田層から出土している。

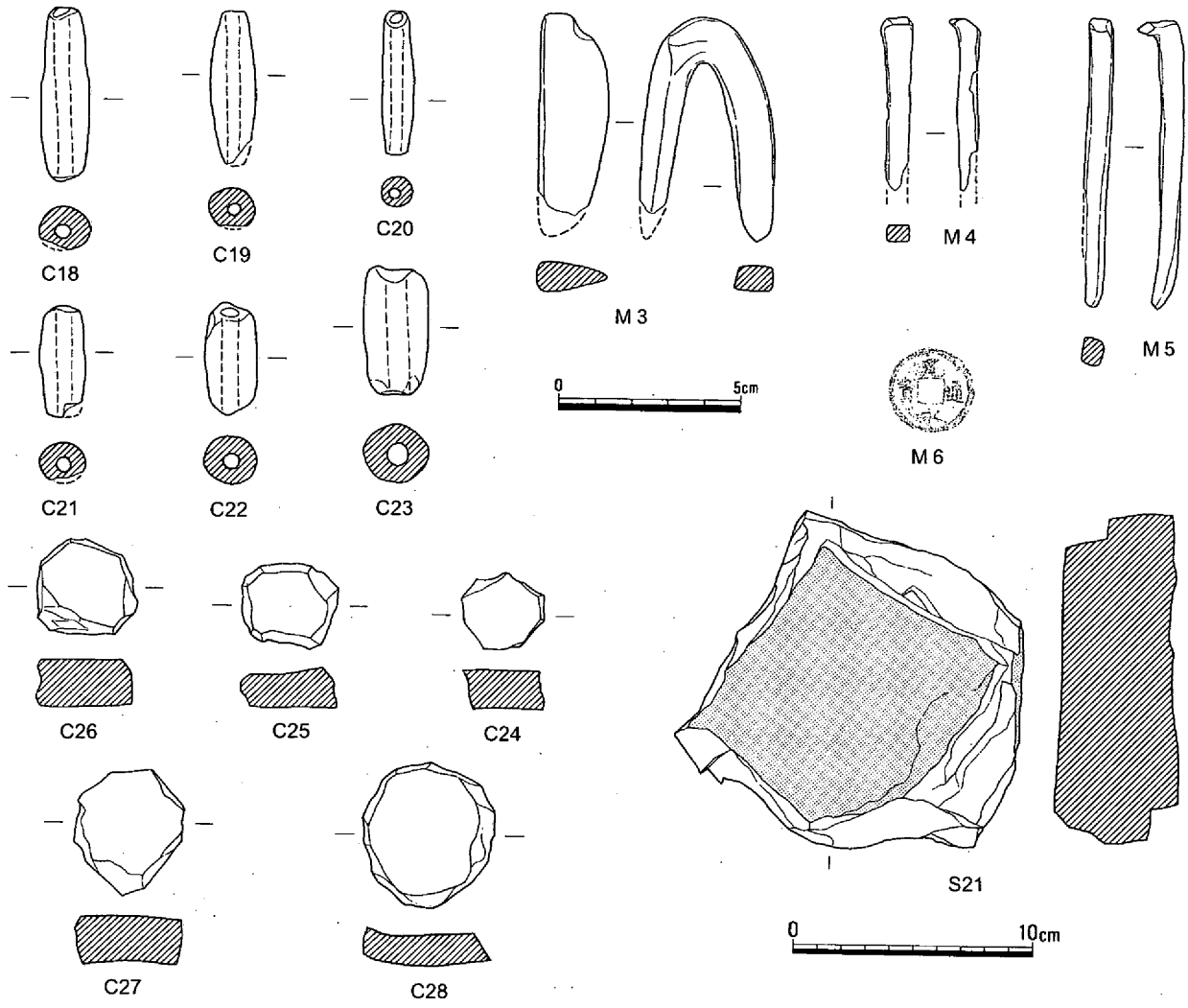
295～297は肥前陶器である。このうち**295・296**は刷毛目唐津と呼ばれる椀と鉢で、概ね18世紀代に位置付けられる。また、天原遺跡の包含層出土品と接合関係にある**297**は低位部の客土から出土した。見込みには胎土目を残し、16世紀末の所産である。

299は備前焼、**298**は関西系の擂鉢で、いずれも口径32cmを測る。**299**は二重になる口縁部の幅が狭く、なおかつ擂目が全面に施されることから18世紀に位置付けられる。このほか備前焼には甕の胴部破片が若干出土している。

亀山焼には擂鉢と甕がある。擂鉢は口径23.4cmを測る**300・301**と26.6cmの**302**があるが、いずれも軟質に焼成されている。口縁端部は肥厚して内傾する面をなし、直線的に広がる体部は内外面を粗いハ



第192図　遺構に伴わない遺物１（１/４）



第193図　遺構に伴わない遺物２（１/３・１/２）

ケメで調整したうえ内面に擂目を放射状に施している。甕には須恵質の**304**と瓦質の**303**がある。口径25.0cmを測る**304**は、口縁部が屈曲して水平に短く延び鈍い面をなしておわる。体部外面には格子目タタキを残し、内面はナデで仕上げる。**303**は斜め上方に延びる口頸部で、その端部は肥厚して平面をなす。口径25.2cmを測り、内外面をヨコナデと粗いハケメで仕上げる。

土製品には土錘と面子がある。土錘はいずれも細長い管状をなし、長さ4.0～4.9cm、径0.8～1.4cm、重量2.7～7.8ｇの**C18～22**と、長さ3.6cm、径1.8cm、重量10.7ｇの**C23**に分けられる。面子**C24～28**はいずれも須恵器の壺・甕片を円板状に打ち欠いたもので、径2.2～4.9cm、厚さ0.9～1.3cm、重量6.3～15.8ｇを測る。これらはいずれも低位部の水田層から出土している。

金属製品には鉄釘のほか不明金具や銅銭がある。**Ｍ３**は低位部の畝状をなす遺構から出土した用途不明の金具で、近世まで下るものと思われる。鉄釘**Ｍ４・５**のうちほぼ完存する**Ｍ５**は、頭部を折り曲げた角釘で、長さ7.9cm、幅0.6cm、重量8.8ｇを測る。**Ｍ６**は、低位部から出土したいわゆる新寛永銭である。

Ｓ21は柱穴の礎板に転用されていた砥石である。長さ13.0cm、幅12.1cm、厚さ5.1cmの板状を呈し、広口面と小口面に使用痕が認められる。香川県産の古銅輝石安山岩で、石室石材として搬入されたものを転用した可能性がある。（亀山）

第６章　井手天原遺跡

第１節　調査の概要

井手天原遺跡は、総社市井手字天原に所在し、北緯34°40′38″、東経133°46′23″に位置している。当初、金井戸見延遺跡として調査に着手したが、幅50mほどの低位部を挟んで南と北に微高地が確認されたことから、北側の微高地をその地名をとって井手天原遺跡と呼称することとした。検出された微高地は南北150mを測るが、その北端は国道180号を越えて広がっていることがその後の調査で確認されており、南北約300mほどの東西に延びる微高地上に立地しているものと思われる。同じ微高地上において、西側では金井戸天原遺跡、東側では金井戸天神遺跡と接しており、これらが一体となって機能していた可能性も考えられる。

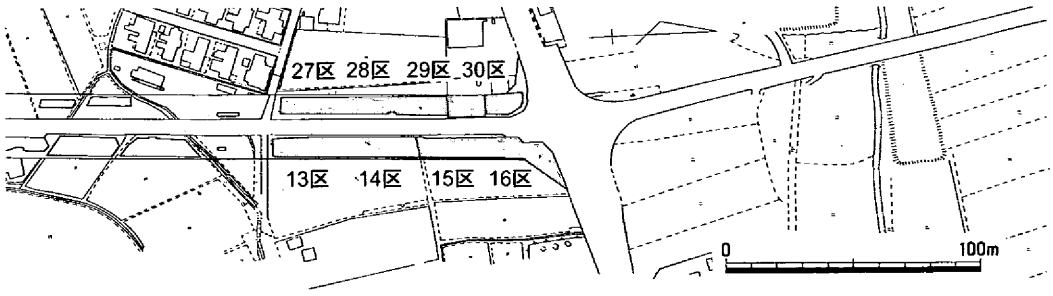
遺跡の現況は水田として利用されているが、近年の市街地調整事業によって国道周辺の宅地化が急速に進んでいる。標高10.1mの地表面下には厚さ約40cmの近・現代の水田層が広がっている。その下には黄褐色の砂質土が堆積しており、弥生時代～中世にわたる遺構はこの上面から掘りこまれている。この遺跡の形成がはじまるのは弥生時代後期である。今回の調査では土壙４基を検出するに留まったが、水道管埋設に伴う立会調査では交差点の北東角で後期の竪穴住居が検出されており、安定した集落が営まれていたものと思われる。

古墳時代に入ると遺構は増加し、竪穴住居９軒、建物１棟、土壙３基、溝１条を数える。これらは前～後期の各期にわたっており、弥生時代末から継続して集落が営まれていた様子が窺える。また、竪穴住居の中には鍛冶滓を出土するものがあり、井手見延遺跡と同様に集落内で鉄器生産が行われていたことを示している。

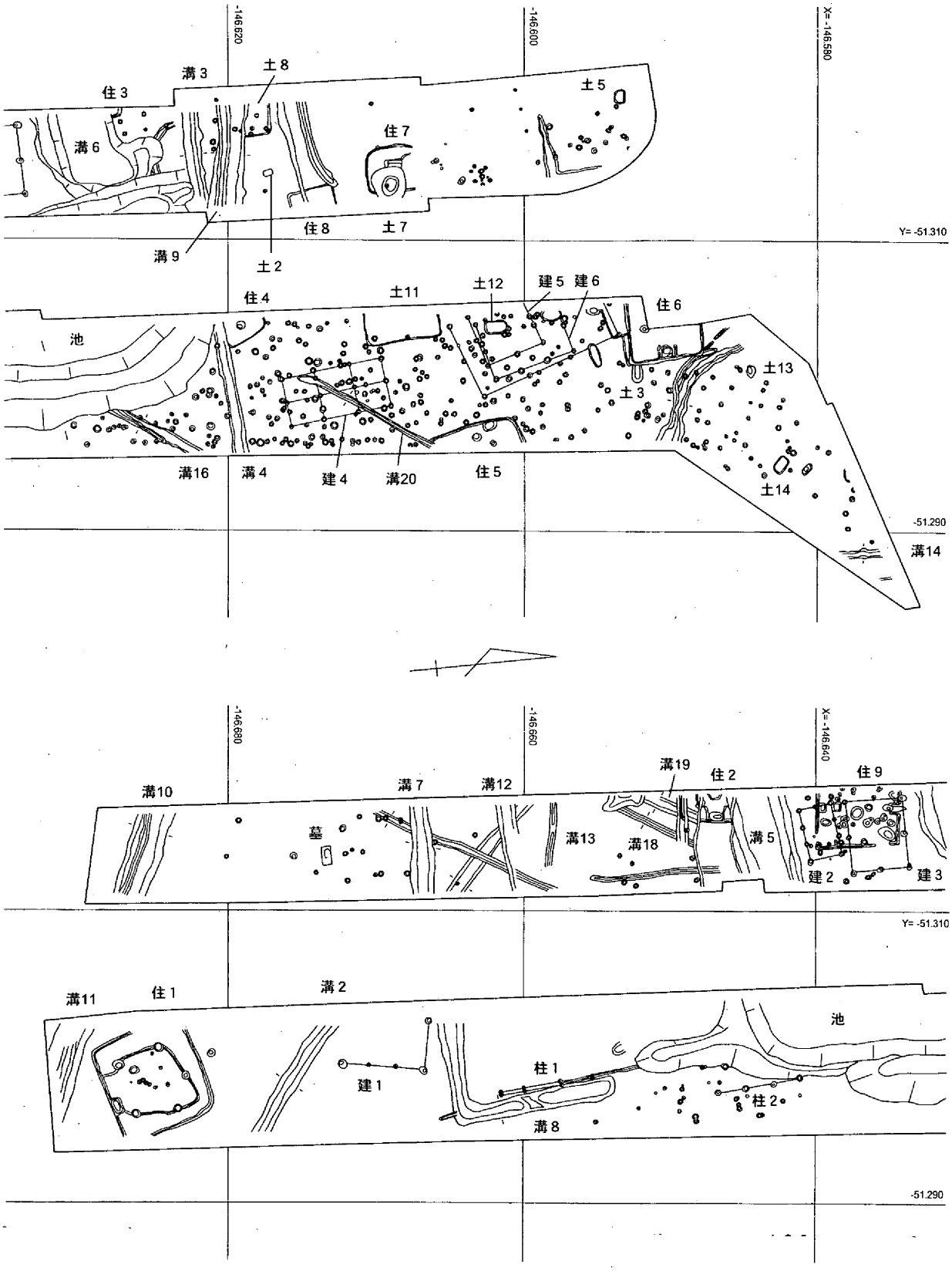
古代の遺構には掘立柱建物１棟、溝１条がある。奈良時代には溝しか確認できず、居住地としての利用はなされていなかった可能性があるが、平安時代後期には再び掘立柱建物が現れており、中世に展開する集落の先駆けをなすものとして理解される。

中世には、掘立柱建物６棟のほか、土壙５基、土壙墓１基、溜池状遺構、溝15条がある。掘立柱建物は北側に集中する傾向にあり、その多くは鎌倉時代に属するものと思われる。区画を思わせる溝も見られることから、屋敷を構成していた可能性がある。また、溜池状遺構は室町時代後期に掘削された後、江戸前期に掘り直しが行われている。

このほか、包含層から出土した陶器に、井手見延遺跡の客土から出土した陶器との接合関係が認められ、明治以降に採土を兼ねた地下げが行われていたことが判明した。（亀山）



第194図　調査区配置図（１/3000）



第195図　遺構全体図（１/400）

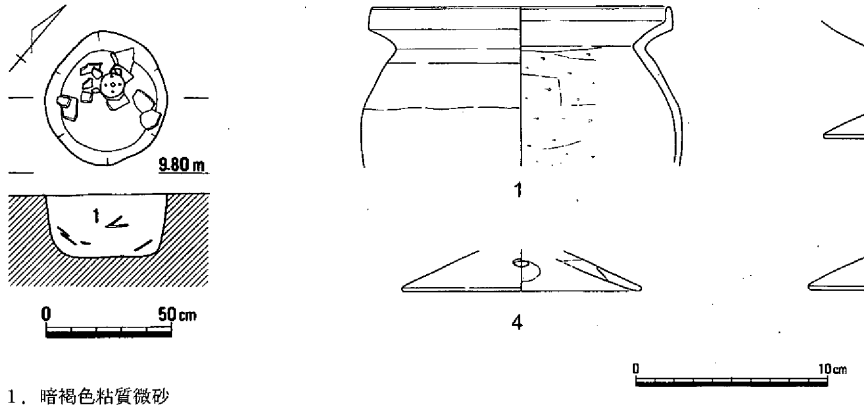
第２節　弥生時代の遺構・遺物

（１）土壙

土壙１（第196図）

土壙１は27区中央部に位置する。平面形は直径0.5m前後の円形を呈し、検出面からの深さ0.25m、底面の標高9.47mを測る。断面形はU字形である。埋土中に土器片が比較的多く包含されていた。１は灰白色を呈する甕、２～４は橙～明赤褐色を呈する短脚の高杯である。高杯２は内外面に細かいハケメが見られ、胎土は精良である。高杯３は脚部外面に横方向の細かいヘラミガキが施されている。胎土は精良である。

これらの土器の特徴から土壙１の時期は弥・後・Ⅳと推定される。土壙１の形状は柱穴に類似するが、周辺には中世の柱穴が僅かに検出されたのみである。（物部）



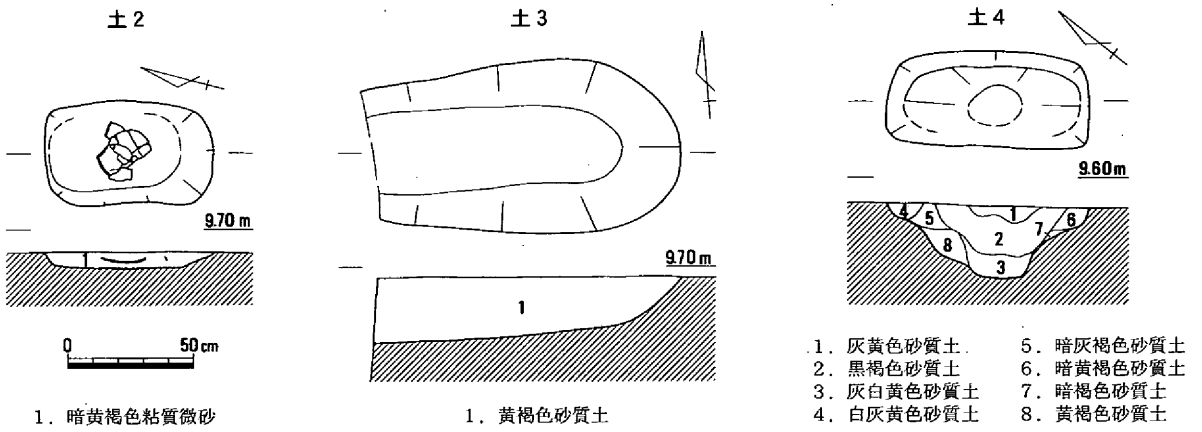
1．暗褐色粘質微砂

第196図　土壙１・出土遺物（１/30・１/４）

土壙２（第197図）

30区の南寄りに位置する土壙で、長軸をほぼ南北にもつ隅丸長方形の平面形を呈する。その規模は長軸0.67m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.06mを測り、ほぼ平坦な底面の標高は9.55mである。埋土は暗黄褐色粘質微砂の単層で、遺物は同一個体と考えられる甕片を土壙中央の底面からやや浮いた状態で検出している。

土壙の時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期に属するものと考えられる。（高田）



1．暗黄褐色粘質微砂

1．黄褐色砂質土

1．灰黄色砂質土
2．黒褐色砂質土
3．灰白黄色砂質土
4．白灰黄色砂質土
5．暗灰褐色砂質土
6．暗黄褐色砂質土
7．暗褐色砂質土
8．黄褐色砂質土

第197図　土壙２～４（１/30）

土壙３（第197図）

16区に所在し、竪穴住居６に西側を削平されている。規模は現状で長さ1.26m、幅0.69mを測り、平面楕円形を呈する土壙である。深さは検出面から0.26mを測り、西側に向かい徐々に下がっている。埋土は黄褐色砂質土の１層である。

時期は、遺物が出土していないが、埋土の状況などから弥生時代後期と考えられる。（小嶋）

土壙４（第197図）

16区の北側に位置する土壙である。検出面での平面形は長辺0.79m、短辺0.38mを測る長方形を呈している。深さは0.39mを測り、底面は中央部で径0.2m程の円形を呈している。断面形は東側が二段、西側が三段となっている。埋土は８層からなり、第１～３層は炭・焼土を多く含んでいた。

出土土器は少なく小片であったため図示できなかった。

時期は弥・後・Ⅳである。（小嶋）

（２）遺構に伴わない遺物（第198図）

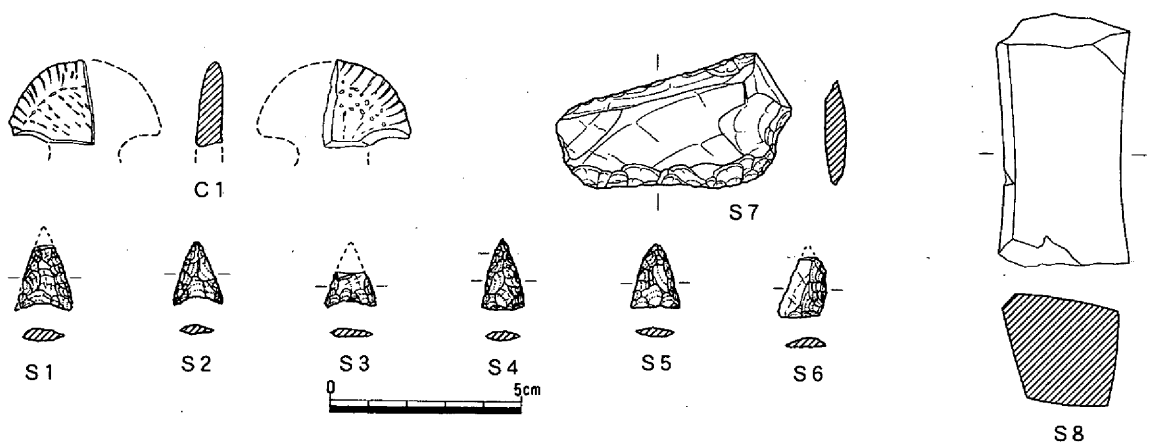
古墳時代の竪穴住居や中世の溝などから弥生時代の遺物が若干出土している。これらは、その特徴から弥生中～後期に属するものと推定される。

Ｃ１は分銅形土製品の一部で、幅４cm、厚さ0.8cm余りの小形品になるものと思われる。弧状をなす縁に沿って斜めの刻み、その内側に棒状工具による刺突が、両面から密に施される。後期前半に位置付けられるもので、粗砂を含む胎土をもち、黒褐色の外観を呈する。竪穴住居５の柱穴内から出土した。

石器には、サヌカイト製の石鏃**Ｓ１～６**とスクレーパー**Ｓ７**、流紋岩製の砥石**Ｓ８**とがある。石鏃は凹基式**Ｓ１～３**と平基式**Ｓ４～５**に区分される。前者は長さ1.6～2.3cm、幅1.3～1.4cm、重量0.4～1.0ｇを測る。後者は長さ1.7～1.8cm、幅1.2～1.3cm、重量0.5～0.6ｇを測る。長さ1.6cm、幅1.2cmを測る**Ｓ６**は、２側辺に調整を加えているものの整った形状をなしておらず、石鏃の製作途上で廃棄されたものと思われる。

Ｓ７は、長さ6.2cm、幅3.6cm、厚さ0.6cmを測る小形のスクレーパーで、一側辺に調整を加えて刃部としている。中世の溝から出土した。

Ｓ８は流紋岩製の砥石で、一辺3.5～3.8cmの方柱状をなし、両端を欠いているものの現状で6.6cmを測る。遺構検出中の出土である。（亀山）



第198図　遺構に伴わない遺物（１/４・１/２）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

（１）竪穴住居

竪穴住居１（第199～201図　図版30・34）

13区の最も南に位置する。検出面での平面形は方形を呈する。規模は、計測可能な部分で長軸約7.30m、短軸約6.86mを測る。主柱穴は、平面形が方形にもかかわらず５本有する。柱穴間においては、南辺を除いてそれぞれを結ぶ浅い溝を確認した。床面の周囲には壁体溝が巡る。柱穴間を結ぶ溝と壁体溝の間には高床部を設ける。住居南辺中央やや東よりにおいて方形の土壙を、床面中央やや西よりにおいて長楕円形の土壙を検出した。また、床面中央付近で焼土面を３箇所検出した。この内最も南の焼土面は非常によく焼け締り、その下には堀込みを確認することができた。

埋土中および床面直上からは炭化材、炭、焼土を多く検出した。炭化材は外から中央に向かう形で出土し、多くが屋根材の一部であったことが推察される。主柱は確認できない。焼土は炭化材の上層より出土し、これも屋根材の一部だったと推測できる。この竪穴住居は焼失したものと考える。その焼失原因には、柱穴において柱痕が確認できないこと、柱穴の埋土中に炭、焼土を多く含むこと、さらには使用に耐え得る土器が出土しないことから、竪穴住居をある程度解体した後に火を放つ、意図的な放火が想定できるのではないか。ところで、出土した炭化材の樹種鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼したところ、コナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節の二種類があるとのことであった。

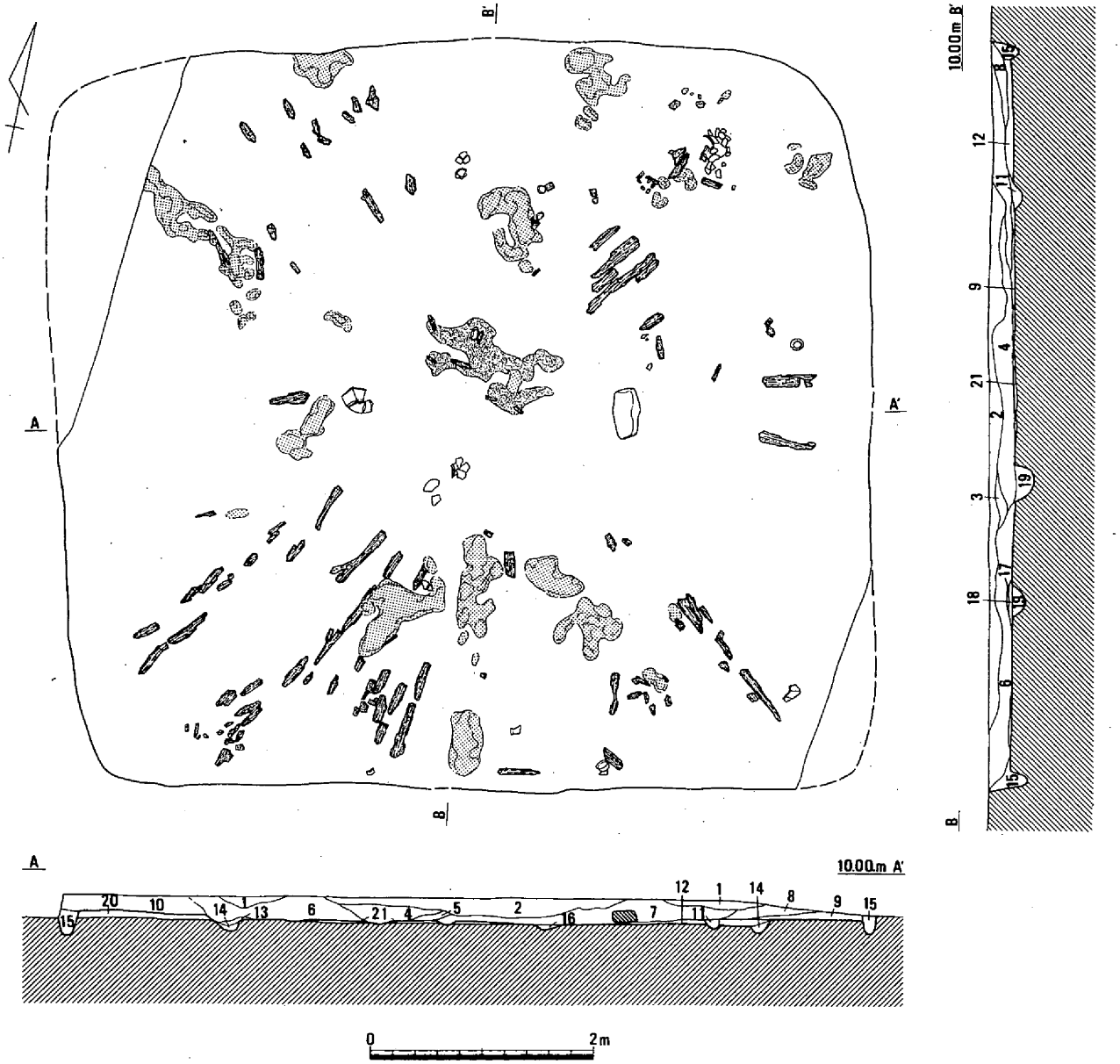
遺物は土師器、石器、鉄器が出土した。いずれも床面、あるいは炭化材・焼土とともに床面直上の埋土中より出土した。甕**５**は体部外面に煤が付着する。体部内面はケズリの後、工具によるナデをおこなう。甕**６・７・９・10**は口縁部に櫛描き沈線文を施す。いずれも体部内面の調整技法はケズリである。**10**の体部外面はハケ調整の後、ミガキにより仕上げる。煤が付着する。高杯**11**は杯部内外面ともにミガキ、工具によるナデにより仕上げる。高杯**12・13**は脚柱部のみ出土した。両者とも胎土は精製されたもので、外面の調整はミガキである。**12**は屈曲部付近に丸い透かし孔を穿つ。**14～17**は鉢である。鉢**15**は外面において木葉圧痕を確認した。これは、土器形成の調整過程がすべて終了した後、木の葉を沿えて再度その形を整えた痕跡であろう。**Ｍ１**は鉄鏃破損品である。残存重量は4.2g。**Ｓ９**は流紋岩製砥石の破損品である。遺構の廃絶時期は古・前・Ⅱの中に収まると考える。　（重根）

竪穴住居２（第202図　図版30・34）

竪穴住居２は28区北半部、竪穴住居１の北北西約37mに位置する。調査区の西壁沿いで検出され、住居の西半は調査区外になり、北端部は溝５によって切られている。壁体溝・高床部・方形土壙を持つ平面方形を呈する竪穴住居である。規模は推定で南北5.0m、検出面からの深さ0.25mを測る。床面の標高は9.36mである。柱穴は床面南東部の高床部内側角に１基検出されたことから、４本柱と考えられる。柱穴の直径は0.45×0.72mで、深さは0.27mを測る。床面の周囲には高床部がみられ、幅0.9m、高さ６cm前後を測る。また、東辺の中央部は1.15mにわたって高床部が途切れ、そこにやや不正形ではあるが方形土壙を設置している。方形土壙の規模は0.9×0.6m、深さ0.3mで、壁は垂直にちかい。さらに、床面中央部は深さ７cm前後深くなっており、その平面形は楕円形を呈すると思われる。

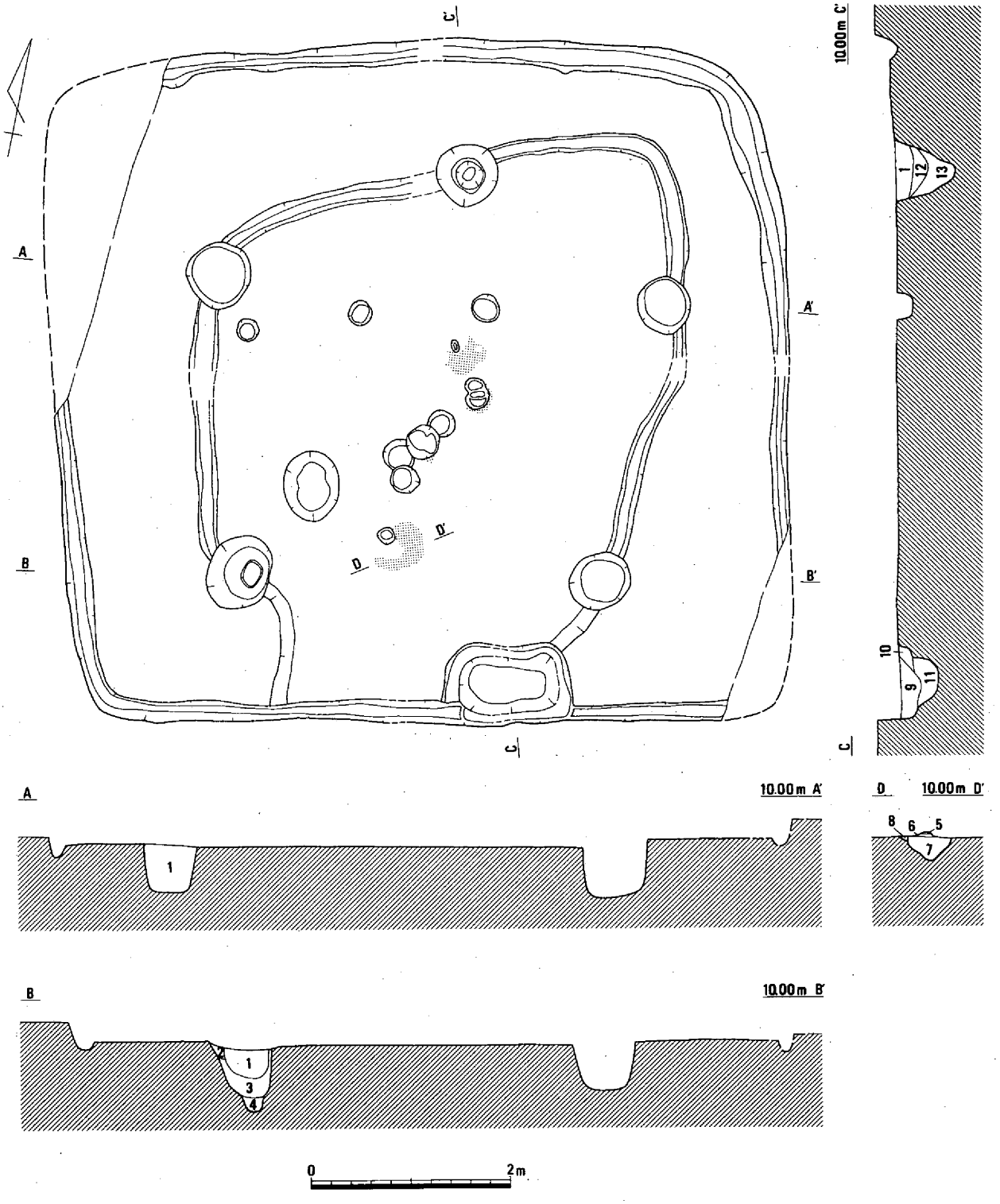
遺物は埋土中から土師器が多く出土した。**18**は浅黄橙色を呈する甕で、口縁端部外面に櫛描沈線

がみられる。体部が内面過半には指頭圧痕が著しい。23～27はにぶい橙色を呈する小形の壺で、口縁部は大きく外方に開き、底部は丸底である。25壺の胎土は精良である。鉢には小形と大形があり、小形の鉢には口縁部が体部からそのまま内湾し丸くおさまる皿形の鉢19～22と、口縁部が屈曲して外傾して伸びる鉢28、口縁部が甕の口縁部のように短く立ち上がる鉢29の３種類がある。鉢19～22はにぶい黄橙色～にぶい赤褐色を呈し、外面過半はヘラケズリを施す。胎土は１㎜以下の砂粒を含む。



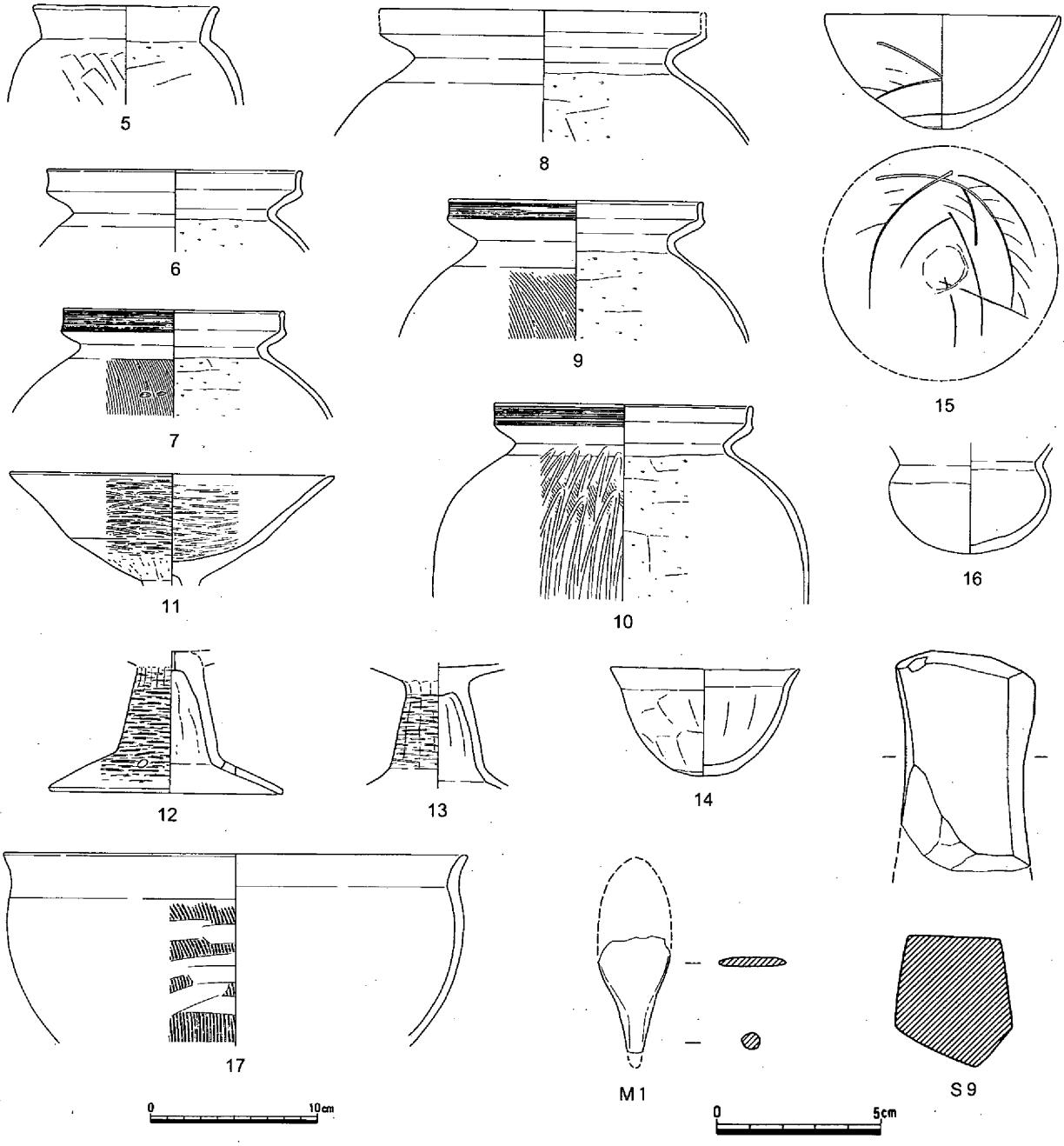
1．灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
2．暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
3．暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土多く含む)
4．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
5．黄褐色粗砂(炭・焼土少し含む)
6．暗灰黄色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
7．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
8．灰褐色砂質土(炭多く、焼土少し含む)
9．黄褐色砂質土(炭多く、焼土少し含む)
10．暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土含む)
11．暗灰褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
12．暗灰黄色砂質土(炭・焼土少し含む)
13．にぶい黄色砂質土
14，暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む)
15．褐灰色砂質土(炭・焼土少し含む)
16．暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む)
17．焼土層
18．炭層
19．暗褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
20．暗灰黄色砂質土(高床部造成土)
21．明黄色粘質微砂(貼り床)

第199図　竪穴住居１検出状況（１/60）



1．にぶい黄褐色砂質土(炭・焼土含む)
2．暗黄褐色砂質土(炭・焼土含む)
3．暗黄褐色粘質砂(炭・焼土含む)
4．黄色粗砂
5．焼土層
6．炭層
7．暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む)
8．暗黄灰色砂質土(焼土含む)
9．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
10．暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
11．褐灰色砂質土(炭・焼土少し含む)
12．黄灰色粘質粗砂(炭・焼土少し含む)
13．にぶい黄色粘質粗砂(炭・焼土含む)

第200図　竪穴住居１（１/60）



第201図　竪穴住居１出土遺物（１/４・１/２）

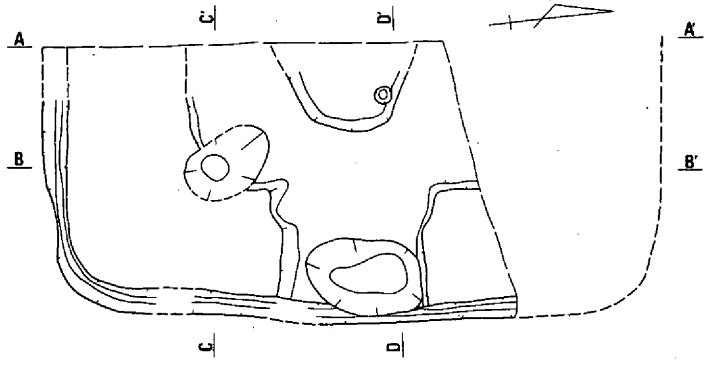
30・31は二重口縁を持つ大形の鉢で、橙色～にぶい橙色を呈する。鉢30の口縁部端部は僅かに内湾して立ち上がり先端もそのまま収まる。32はにぶい橙色を呈する高杯で、脚部は中空気味である。胎土は１～２㎜大の砂粒を含む。

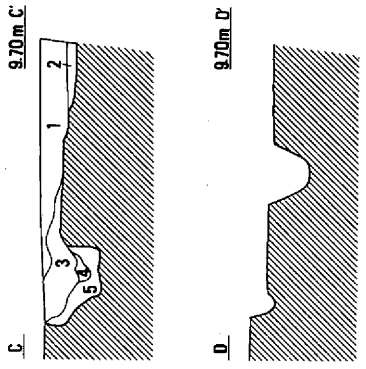
時期はこれらの土器の特徴から、古墳時代前期前半と考えられる。（物部）

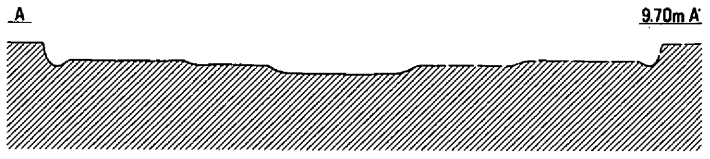
竪穴住居３（第203図）

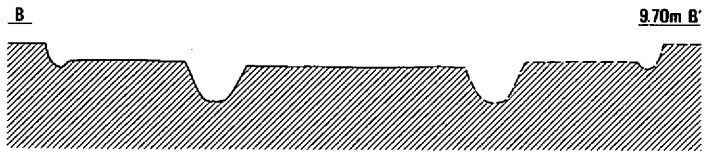
竪穴住居３は29区北部の西壁沿いに位置する。住居の大半は溝６によって削平されており、検出されたのは北東角部分だけである。壁体溝を持つ方形の竪穴住居と考えられる。壁体溝の幅約0.14m、深さ約８cm、床面の標高は9.51mを測る。

出土遺物は無く、従って、古墳時代という以上に時期を限定し難い。（物部）

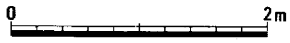


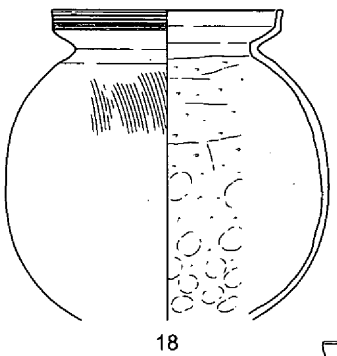


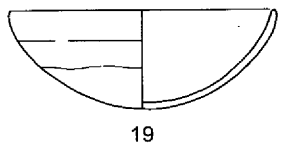


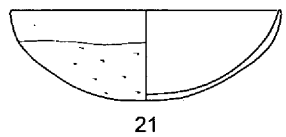


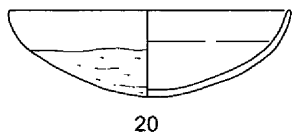
1．暗褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土
3．褐色砂質土
4．にぶい黄橙色微砂混じり粘土
5．灰色細砂
6．にぶい黄橙色粘土

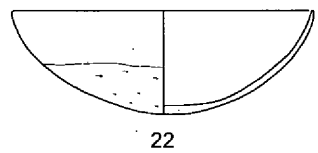


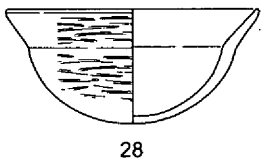


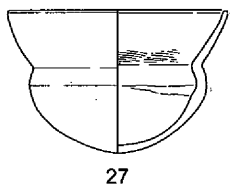


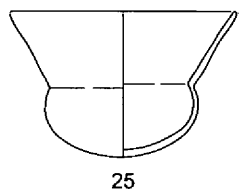


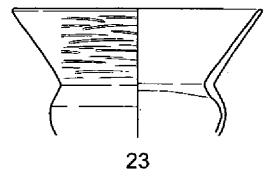


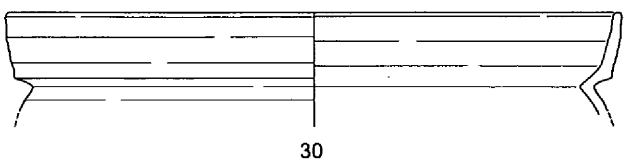


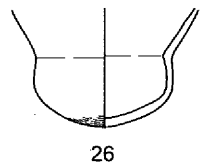


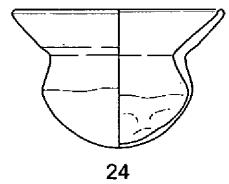


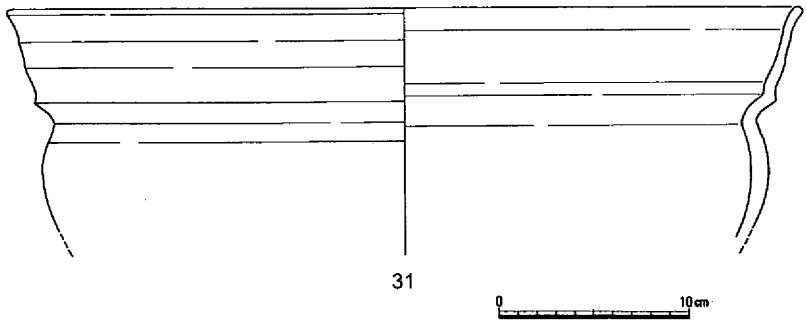


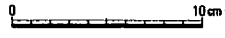


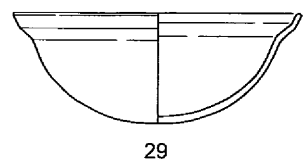


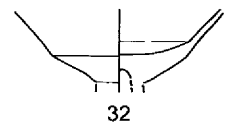




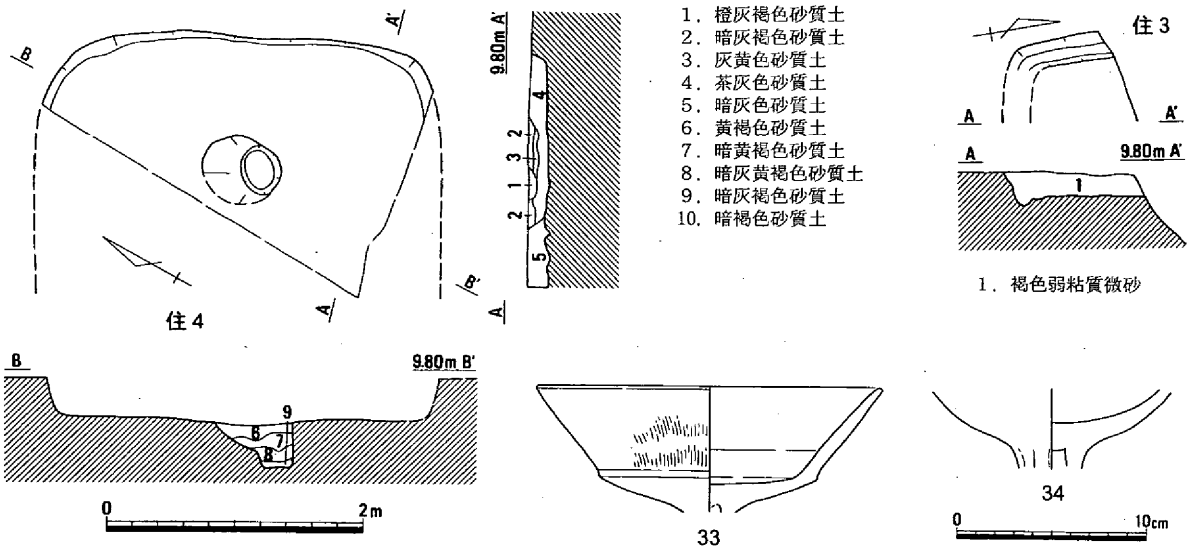








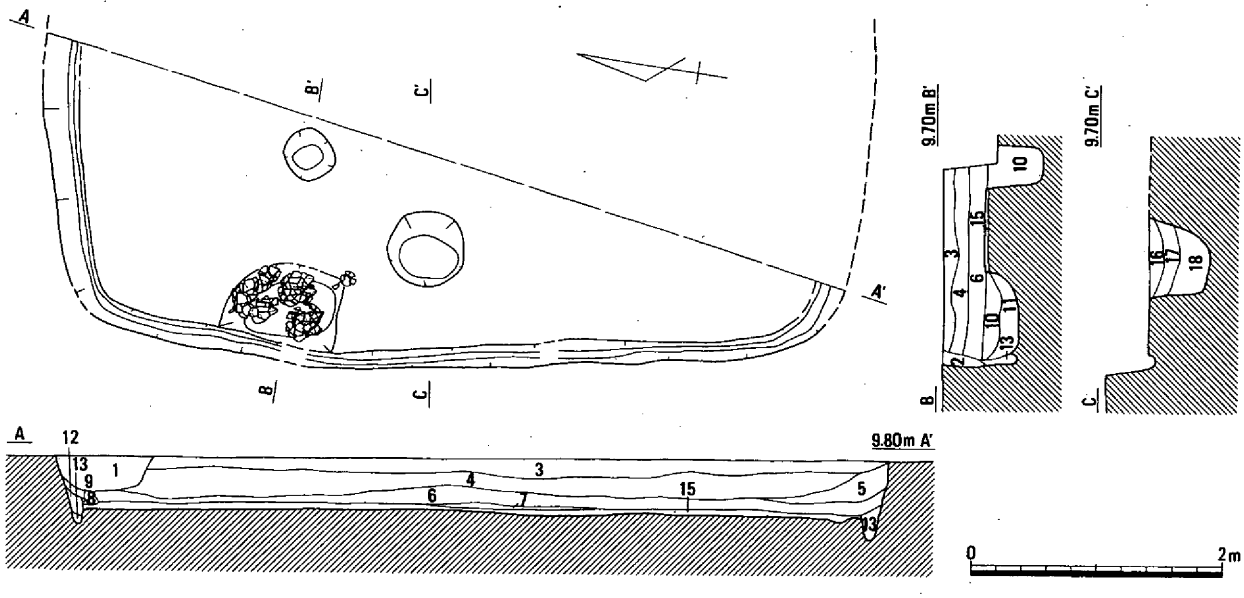
第202図　竪穴住居２・出土遺物（１/60・１/４）



第203図　竪穴住居３・４・出土遺物（１/60・１/４）

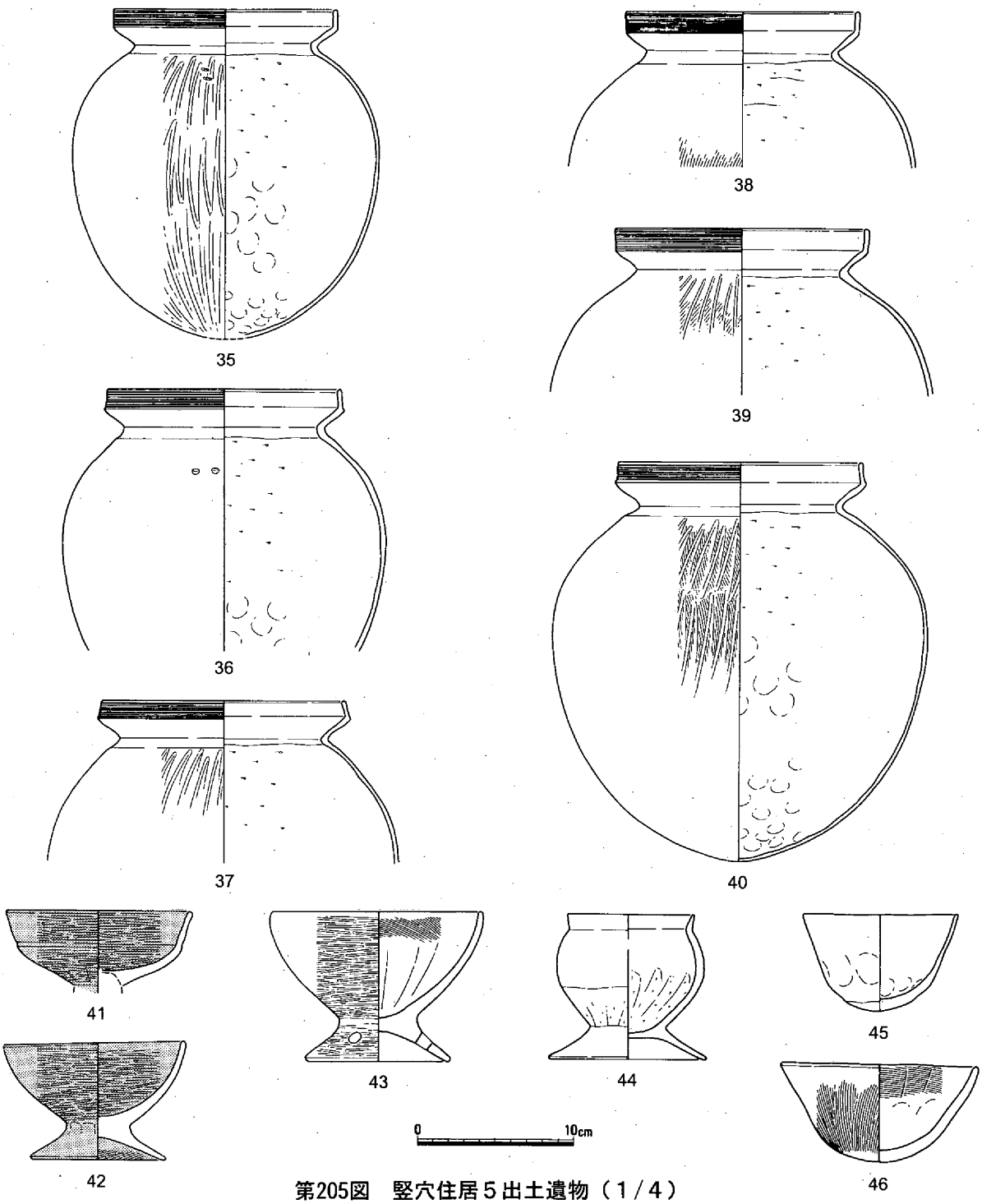
竪穴住居４（第203図）

15区の中央西側に位置する。平面形は、南側を溝４により削平され、西側は調査区外に及んでいるため不明であるが、一辺約３ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。床面は検出面から約0.3ｍを測り、ほぼ平坦であった。壁体溝は認められない。柱穴は一基認められ、楕円形の掘り方をもち、深さは0.35ｍを測る。この柱穴の位置から主柱穴は２基と考えられる。遺物は**33・34**の高杯が出土しており、時期は古墳時代前期前半と考えられる。（小嶋）



1．暗褐灰色砂質土
2．暗黄褐色粘質微砂
3．黒褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
4．にぶい黄褐色砂質土(炭・焼土含む)
5．灰褐色砂質土
6．暗黄褐色砂質土
7．黄灰色砂質土(炭・焼土多く含む)
8．暗黄灰色砂質土(炭・焼土含む)
9．暗灰褐色砂質土
10．にぶい黄褐色砂質土(明黄灰色微砂含む)
11．暗茶褐色粘質微砂
12．暗黄褐色砂質土
13．暗褐色砂質土
14．暗茶褐色砂質土(炭・焼土少し含む)
15．明黄褐色砂質土(貼り床)
16．暗茶灰色砂質土(炭・焼土少し含む)
17．暗茶褐色粘質微砂(炭・焼土少し含む)
18．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土少し含む)

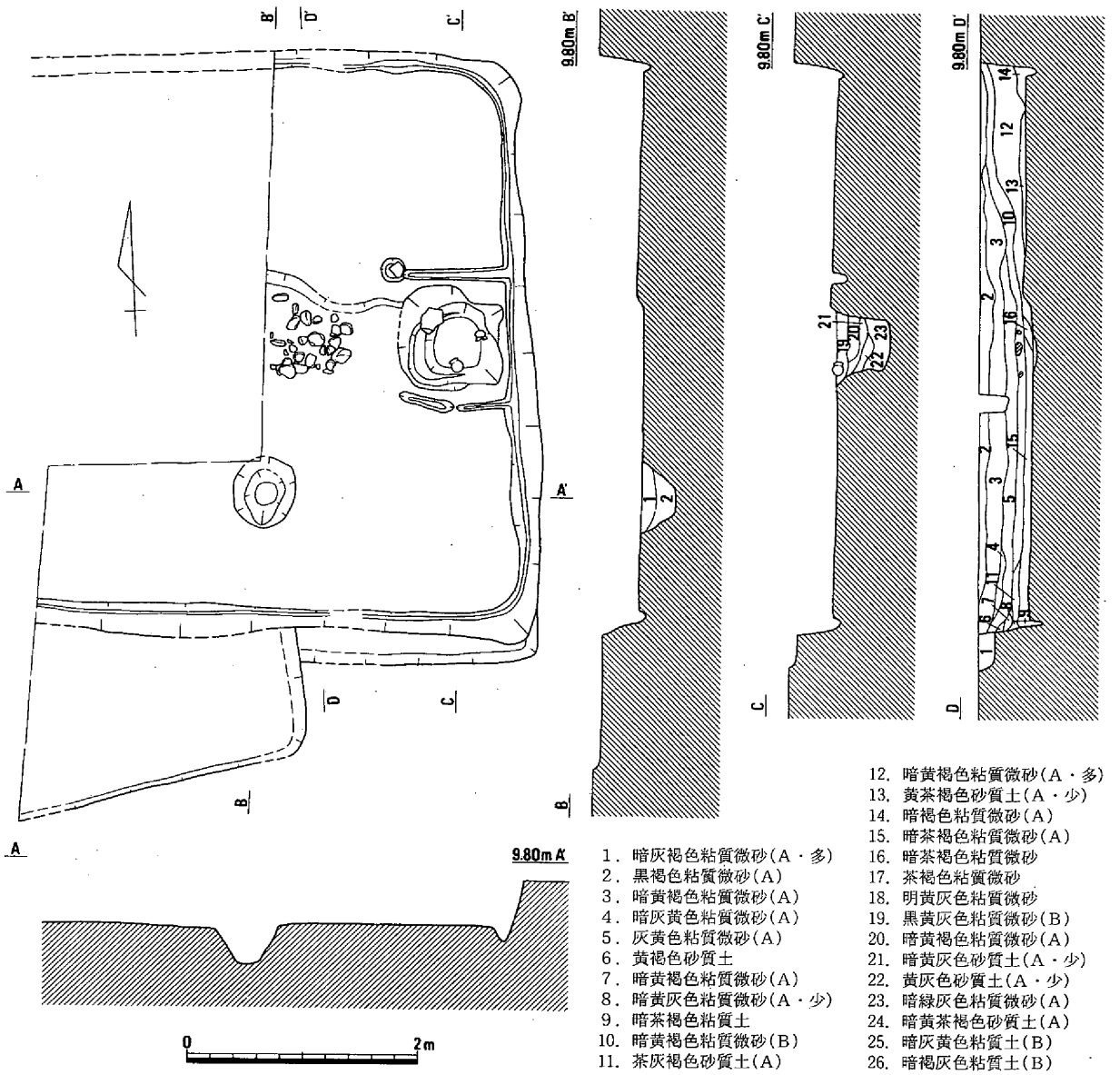
第204図　竪穴住居５（１/60）



第205図　竪穴住居５出土遺物（１/４）

竪穴住居５（第204・205図　図版34）

15区の北東隅で検出され、竪穴住居４の北東約７ｍに位置する。大部分が調査区外に存在し、約１/４を検出したにすぎないが、一辺約6.3mを測る隅丸方形を呈していたと考えられる。検出面から約0.4mの深さを測る床面は平面隅丸方形を呈し、約0.2mの深さの壁体溝に囲まれている。西辺の中央北側には壁に沿って長辺0.9m、短辺0.6m、深さ0.25mの方形土壙が確認された。この土壙からは**35・37・40**の土器が出土している。床面は明黄褐色砂質土で貼り床されていた。遺物は、**35～40**の口縁部に櫛描沈線文を施す甕、内外面に赤色顔料が塗られている**41**の高杯・**42**の鉢と**43～46**の鉢が出土している。時期は古・前・Ⅱと考えられる。（小嶋）



A：炭・焼土を含む　　多：多く含む
B：炭・焼土・地山土を含む　　少：少し含む

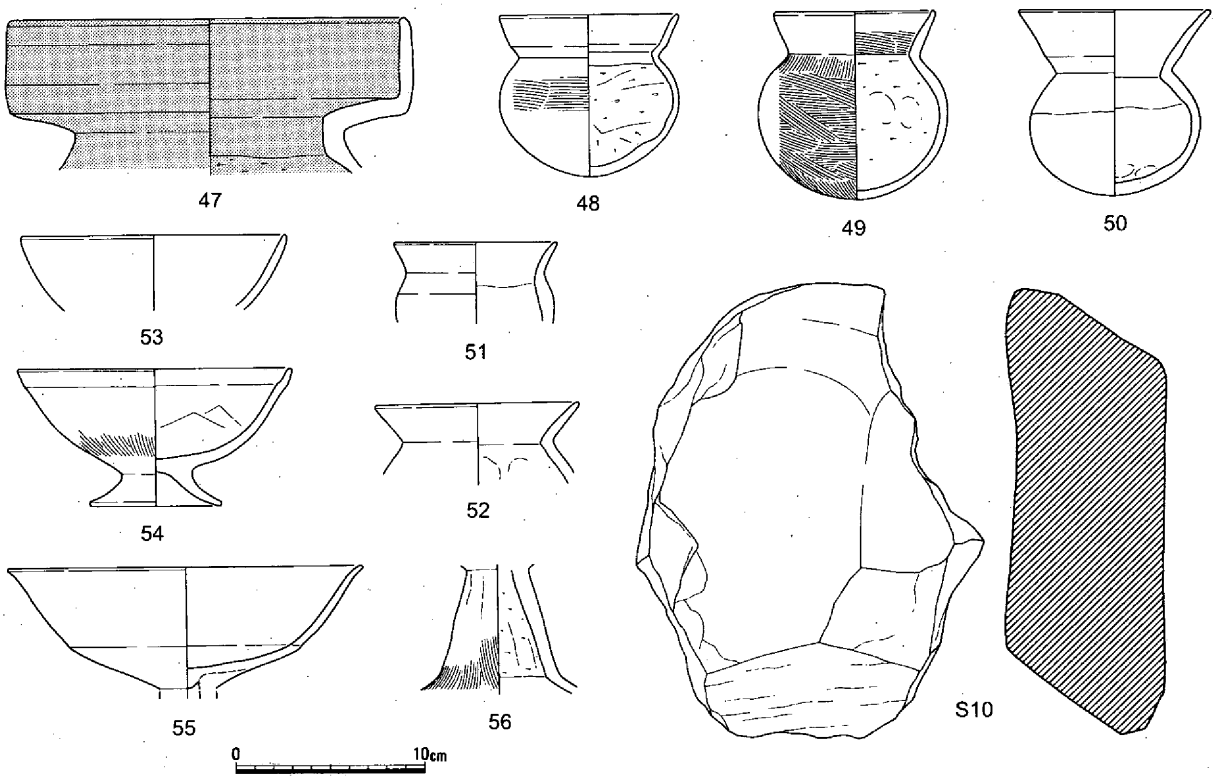
第206図　竪穴住居６（１/60）

竪穴住居６（第206・207図　図版31・35）

16区の中央西端で検出した竪穴住居である。西辺と北辺の一部は調査区外となるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。検出時の規模は、南北長5.12m、深さ0.45m、床面最深部の標高9.2mを測る。床面には、北東部に高さ0.1mの高床部を造りつけ、東辺中央に接して0.9×0.95m、深さ0.5mの方形土壙を設けている。壁体溝は各辺に沿う幅の狭いもので、深さ0.1m前後を測る。また、この壁体溝から方形土壙を挟む位置には２条の間仕切り溝が延びる。主柱穴は２本と推定され、検出した１本の規模は径0.6m、深さ0.3mを測る。住居のほぼ中央と考えられる位置には拳大程度の円礫が集中している。なお、南辺に接する２カ所の浅い落ち込みは、竪穴住居６に先行する遺構である。

図示した遺物のうち、**47**～**56**は土師器で壺・鉢・高杯の器種がある。**47**は壺の二重口縁部で、内外面に赤色顔料を塗布する。**54**は山陰系と考えられる台付鉢である。**48**～**50**は完形品の小形丸底壺で、いずれも方形土壙の上層部からの出土である。**S10**は花崗岩製の石皿である。

竪穴住居の廃絶時期は、出土遺物から古・前・Ⅲと考えられる。　（高田）



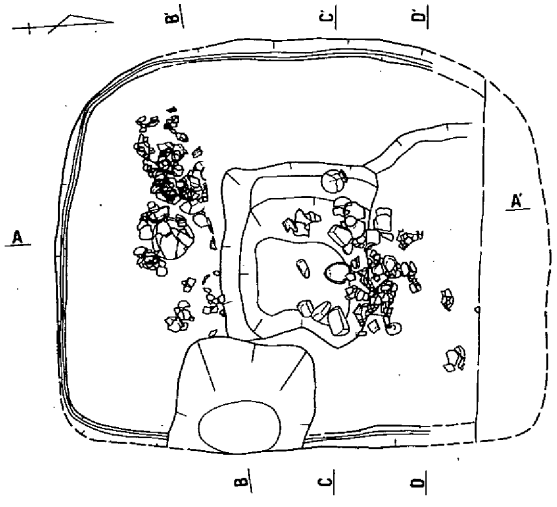
第207図　竪穴住居６出土遺物（１/４）

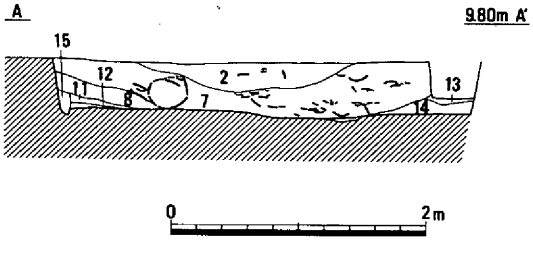
竪穴住居７（第208～212図　図版31・35）

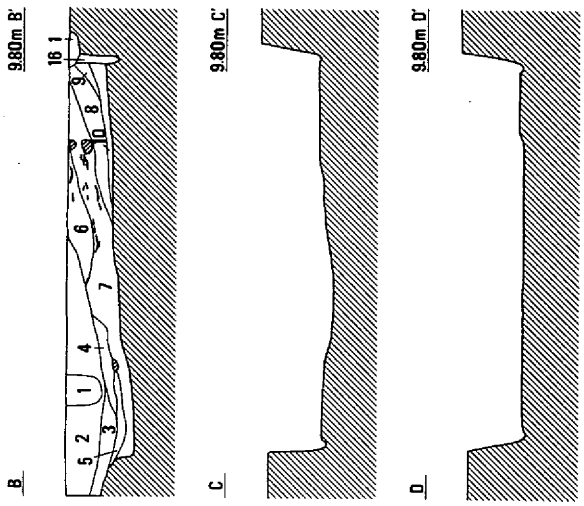
30区のほぼ中央で検出した竪穴住居で、上部に土壙７が位置する。調査区境となるために北辺を検出していないが、直線的な東・南辺とやや弧を描く西辺の構成から平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。検出時の規模は、東西長3.29m、深さ0.5m、床面最深部の標高9.04mを測り、周辺の竪穴住居と比較して最も低位となる。床面の構造は、周囲に幅0.8～1.2mの高床部を造りつけるが、北辺については一段低く不明瞭なものとなる。東辺の中央からやや南寄りには0.9×1.1m、深さ0.12m程度の浅い方形土壙を検出している。壁体溝は、垂直近くに立ち上がる壁に沿って巡る幅の狭いもので、不明な北辺を除く各辺で検出しているが、東辺では方形土壙に一部切られている。なお、柱穴その他の構造は認められなかった。埋土は、第208図断面の第11層の粗砂以外はほぼ近似した土質である。壁体溝から立ち上がる第15・16層は、壁体に沿って置かれた木質等の土質化したものと推定される。なお、第１層は中世柱穴の埋土、第２～５層は後述する土壙７の埋土である。

遺物は第６・７層にほぼ集中し、大量の投棄状況を示す。図示した**57～140**は土師器で、壺・甕・高杯・鉢・手焙り形土器・器台・製塩土器の器種がある。**57～75・112・114**は壺である。**57～62**は短い頸部をもつもので、**60**の外面にはタタキ成形痕がみられる。**63**は直立ぎみの口縁をもち、端部を丸く収める。**64～75**は外反する二重口縁で端部に面をもつものが多い。**66**は内外面に赤色顔料を塗布し、**74**は体部穿孔をする。**112**は手捏ねである。**76～97**は甕である。「く」字口縁**76～81**と、二重口縁**82～97**があり、二重口縁には櫛描沈線をもつものとナデるものがある。また、**86・91・93・94**の肩部には刺突記号がある。**98～111**は高杯である。脚柱部から屈曲して開く裾部に４つの透かし穴をもつものが多い。**113・115～120**は小形丸底壺である。**121～132**は鉢で体部外面をヘラケズリする。**133**は大形鉢、**134・135**は手焙り形土器、**136～138**は鼓形器台、**139・140**は製塩土器である。

竪穴住居の廃絶時期は、出土遺物が概ね示す古・前・Ⅱに近いものと考えられる。　（高田）

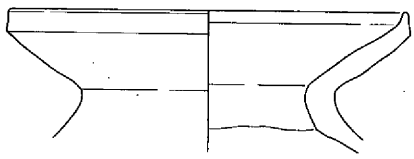


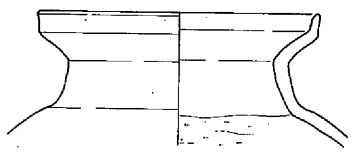


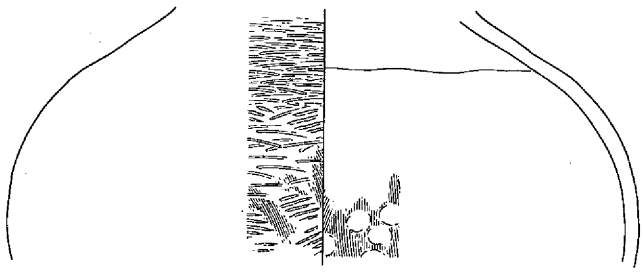


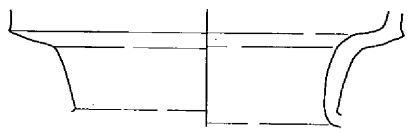
1．柱穴埋土
2．暗黄灰色粘質微砂(A)
3．にぶい黄褐色粘質微砂(A)
4．暗褐色粘質微砂(C)
5．褐灰色粘質微砂(A・少)
6．暗黄色粘質微砂(B)
7．にぶい灰黄褐色粘質微砂(B・多)
8．灰黄褐色粘質微砂(A・少)
9．暗黄褐色粘質微砂
10．暗灰褐色粘質土(A・多)
11．暗黄灰色粘質粗砂(A・少)
12．灰黄褐色粘質微砂(A)
13．黄褐色粘質微砂(A)
14．黄褐色粘質微砂(A・少)
15．暗褐色粘質微砂(A)
16．茶灰色微砂(A・少)

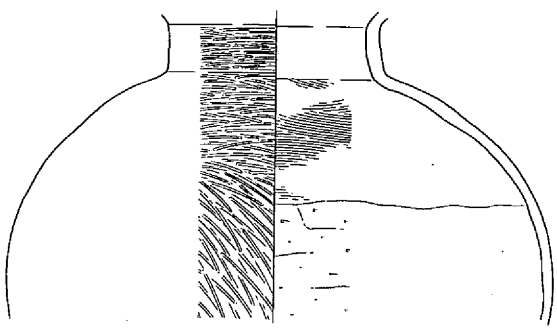
（A：炭・焼土を含む　B：土器・炭・焼土を含む　C：地山ブロックを含む　多：多く含む　少：少し含む）

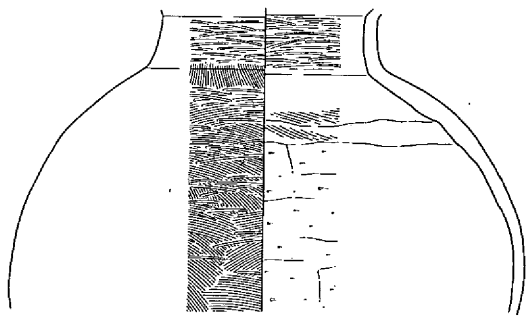

57

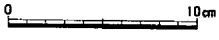

58


60

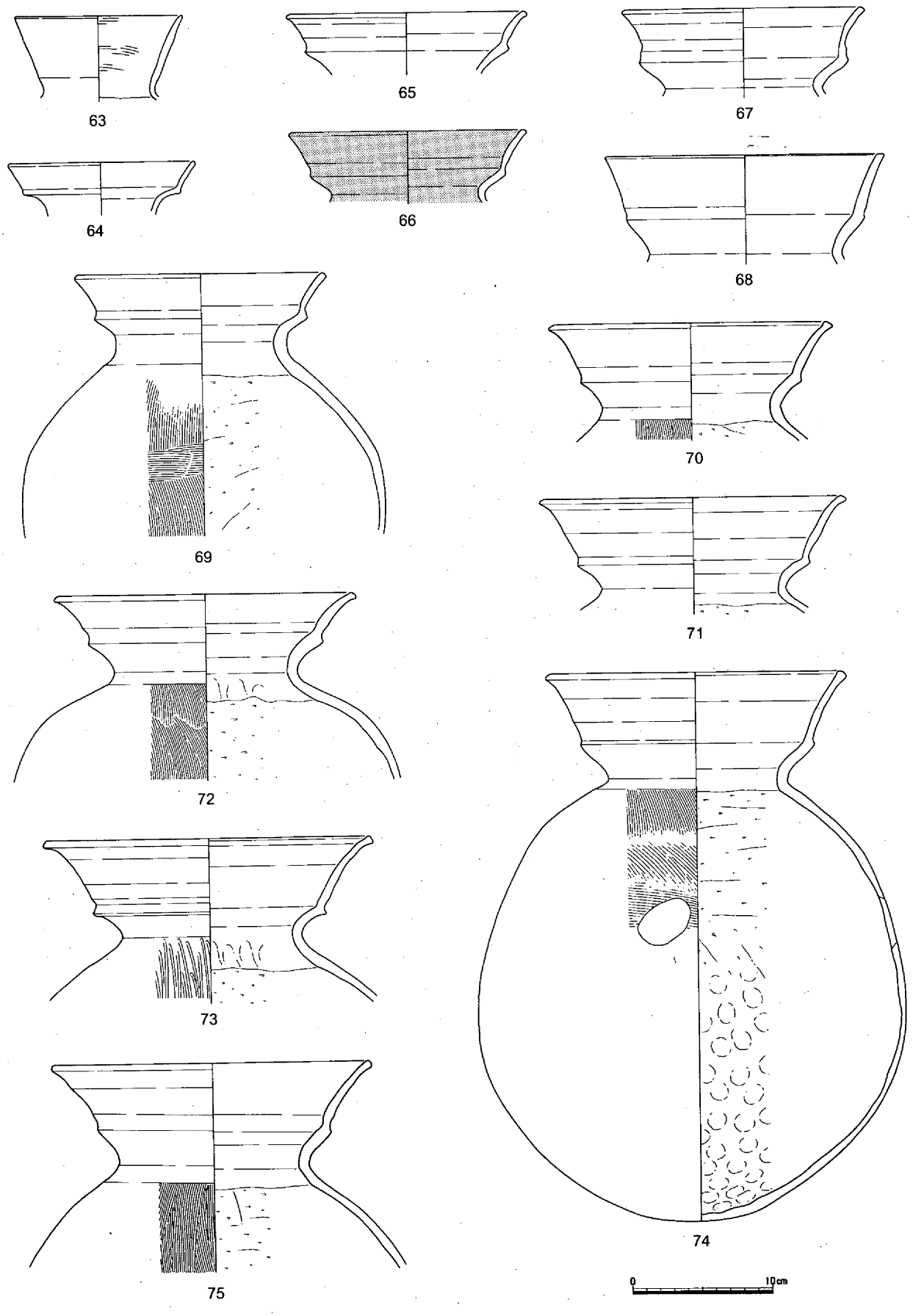

59


62

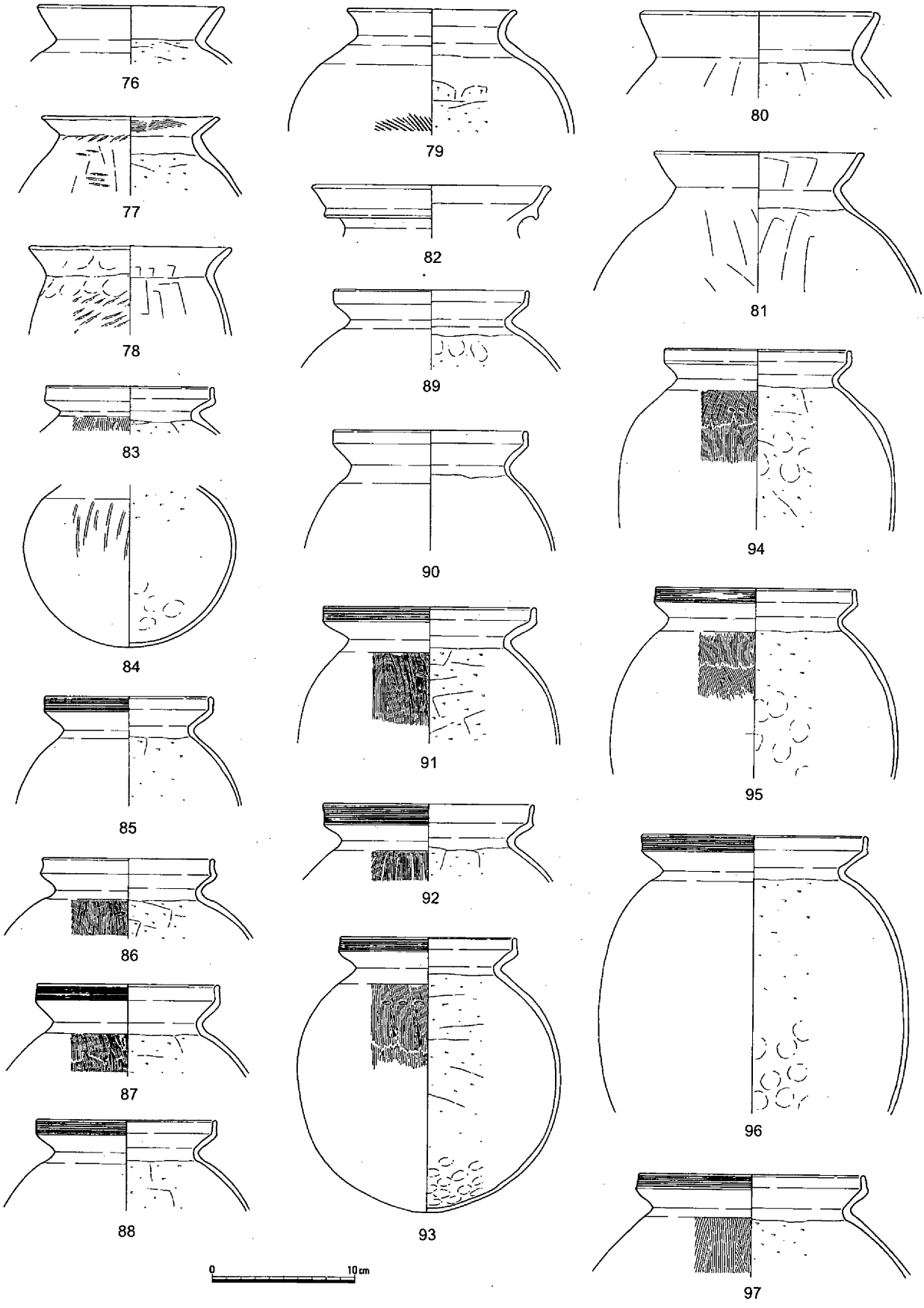

61



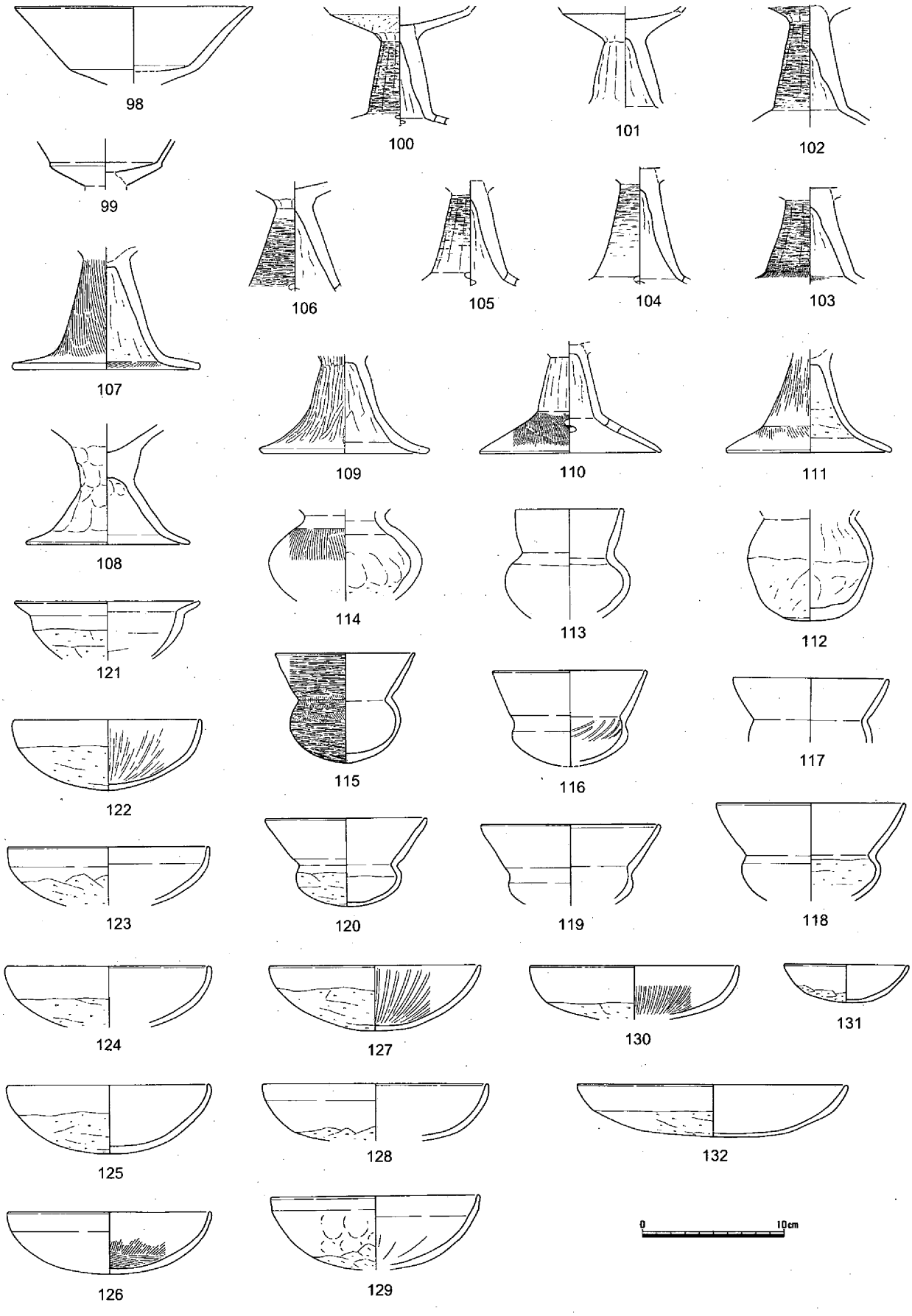
第208図　竪穴住居７・出土遺物１（１/60・１/４）



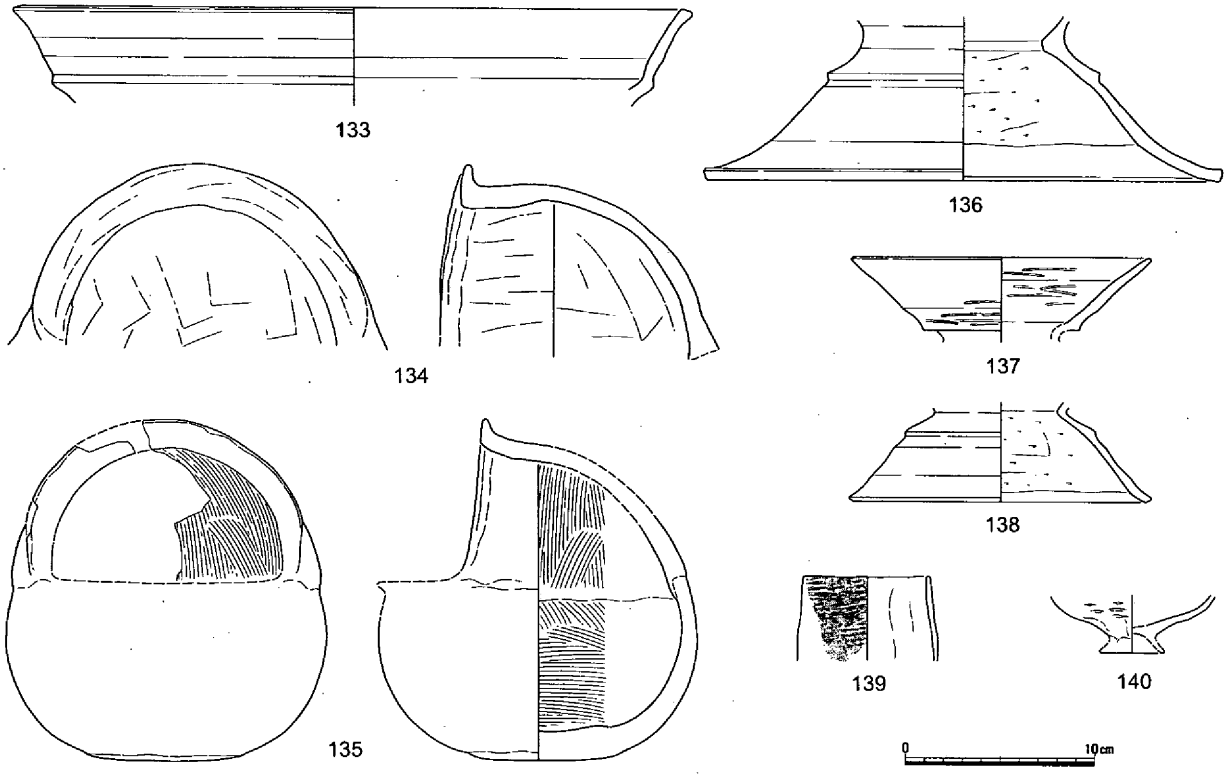
第209図　竪穴住居７出土遺物２（１/４）



第210図　竪穴住居７出土遺物３（１/４）



第211図　竪穴住居７出土遺物４（１/４）



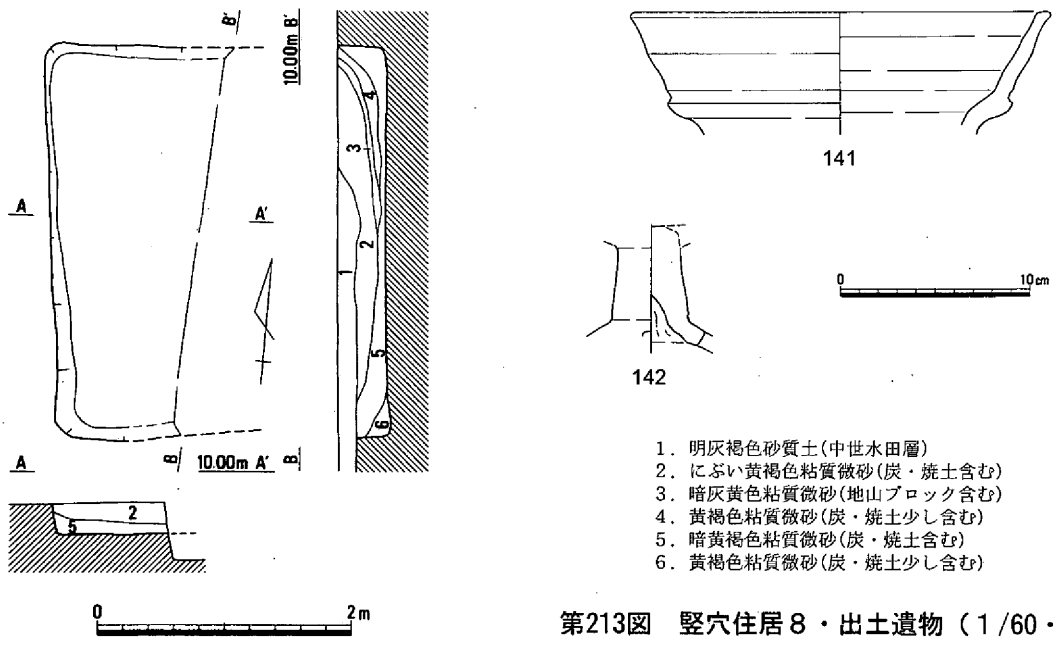
第212図　竪穴住居７出土遺物５（１/４）

竪穴住居８（第213図）

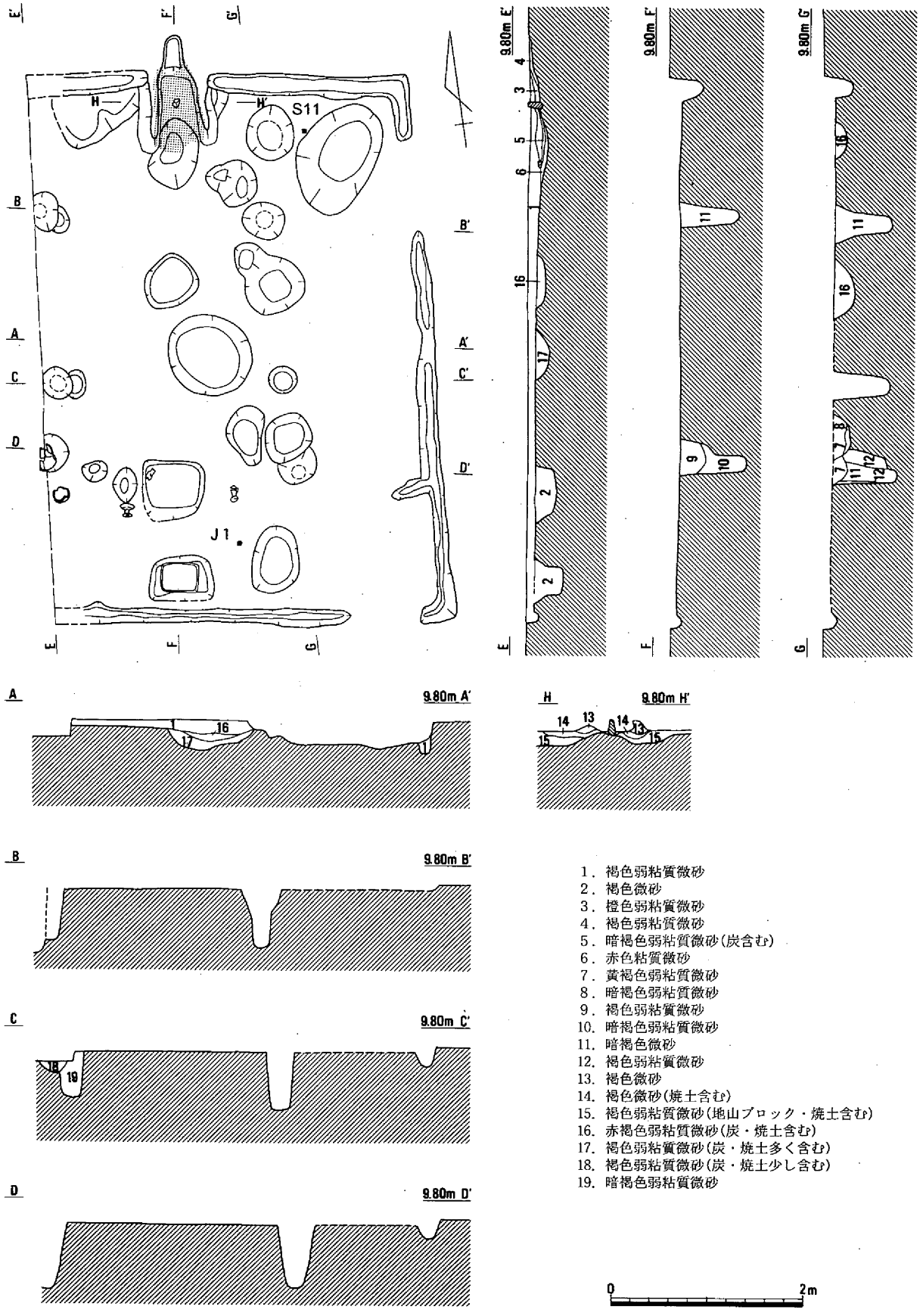
竪穴住居７の南約2.5mに位置するもので、東半部は調査区外となる。平面形は方形を呈すると考えられ、ほぼ平坦な床面から壁が垂直に立ち上がる。検出時の規模は南北長3.13m、深さ0.38m、床面の標高9.3mを測り、検出範囲において柱穴やその他の床面構造は認められない。

出土遺物は土師器と２点の鍛冶滓で、そのうちの１点は凹面にガラス質が付着した椀形滓である。

竪穴住居の時期は、検出状況と出土遺物から古・前・Ⅱと考えられる。　（高田）

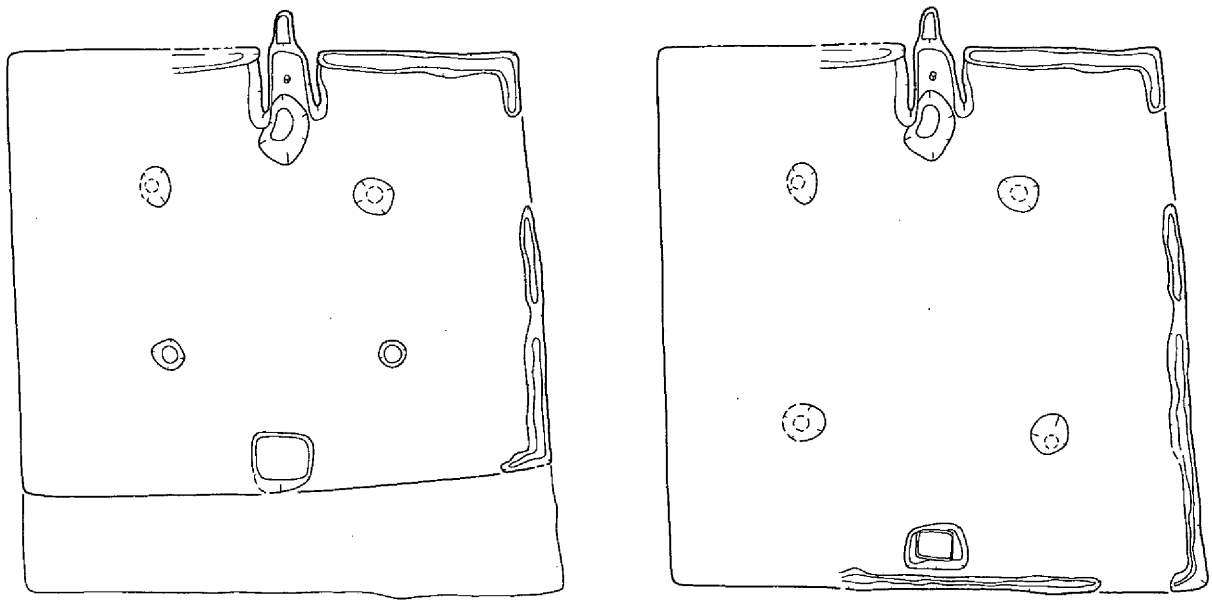


第213図　竪穴住居８・出土遺物（１/60・１/４）

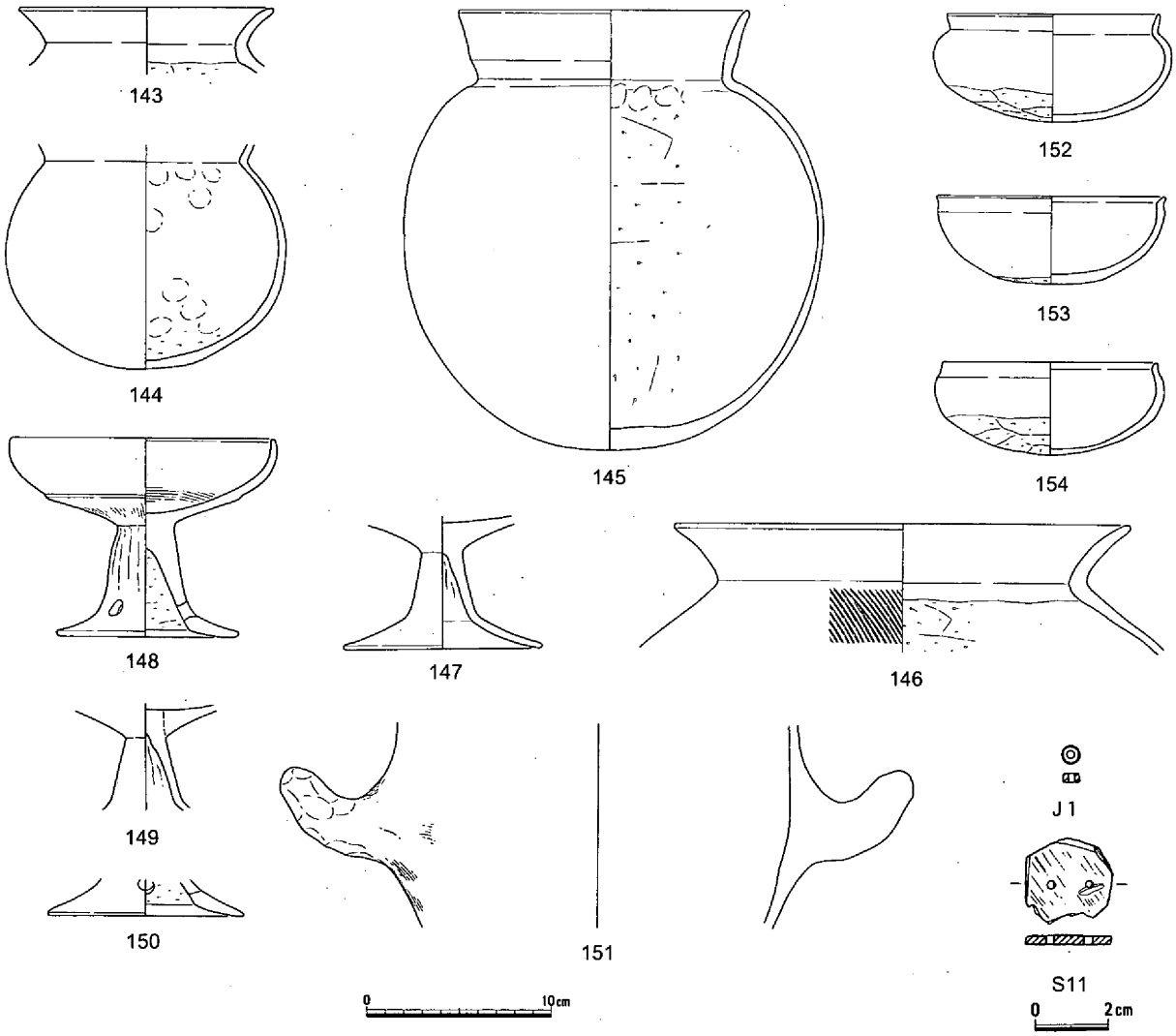


1．褐色弱粘質微砂
2．褐色微砂
3．橙色弱粘質微砂
4．褐色弱粘質微砂
5．暗褐色弱粘質微砂(炭含む)
6．赤色粘質微砂
7．黄褐色弱粘質微砂
8．暗褐色弱粘質微砂
9．褐色弱粘質微砂
10．暗褐色弱粘質微砂
11．暗褐色微砂
12．褐色弱粘質微砂
13．褐色微砂
14．褐色微砂(焼土含む)
15．褐色弱粘質微砂(地山ブロック・焼土含む)
16．赤褐色弱粘質微砂(炭・焼土含む)
17．褐色弱粘質微砂(炭・焼土多く含む)
18．褐色弱粘質微砂(炭・焼土少し含む)
19．暗褐色弱粘質微砂

第214図　竪穴住居９（１/60）



第215図　竪穴住居９ａ・ｂ（１/80）



第216図　竪穴住居９出土遺物（１/４・１/２）

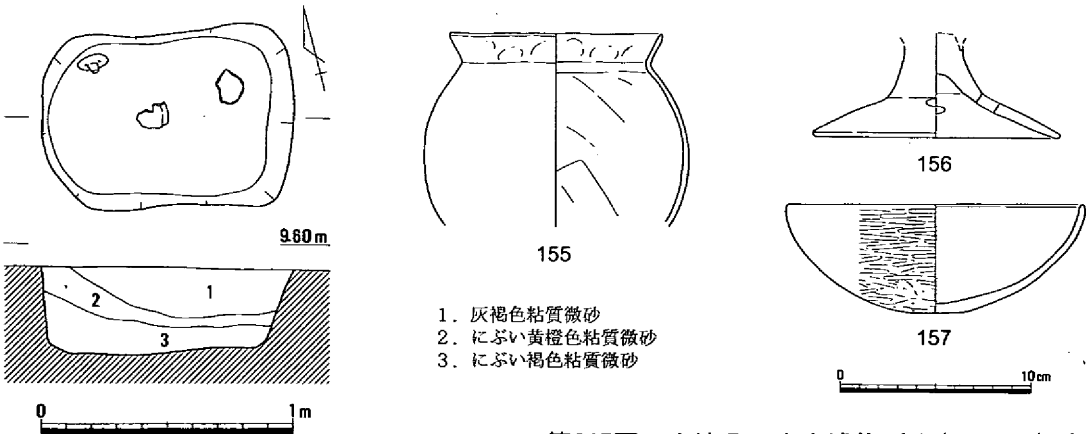
竪穴住居９（第214～216図　図版31・36）

29区中央部、竪穴住居２の北約５ｍに位置する。住居の西辺部は調査区外になり、また後世のたわみ状の攪乱が東半部を削平している。竪穴住居９は造り付けカマドや方形土壙、壁体溝を持つ方形の住居で、南辺のみを約１ｍ拡張している。便宜上、拡張前の住居を住９a、拡張後の住居を住９bとする。住９aの南壁は住９bによって削平されているが、僅かに東壁から屈曲して内側に入る壁体溝と南辺の中央部に設置されたと考えられる方形土壙により、住９aの南辺の位置を推定することができる。南北4.71ｍ、東西推定5.6ｍを測る。柱穴４基のうち北側の２基はおそらく住９bのものと共有あるいは重複していたものと思われる。カマドについては両袖の下層に焼土粒や地山ブロックを含む土で埋まった不正形な窪みがそれぞれ検出された。これをカマドを造り替えた痕跡と考え、住９aもカマドを持っていたと推定する。南北の柱穴間距離は1.72～1.80ｍである。カマドの対面にある方形土壙は0.6×0.65ｍの長方形を呈し、深さは0.17ｍを測り、壁は垂直にちかい。埋土中から土師器の甑**151**が出土した。住９bは南北5.78ｍ、東西推定5.65ｍの方形を呈する。柱穴は４基で南北の柱穴間距離は2.59～2.72ｍである。カマドは北辺中央部に位置し、支柱石が残存する。焚き口部の床面は深さ８cmほど窪んでいる。南辺中央部の方形土壙は、壁体溝より内側に位置し、２段に掘り込まれている。上段の掘り方は0.47×0.67m、深さ0.15ｍを測り、下段は0.30×0.39m、深さ0.21ｍを測る。下段の壁はほぼ垂直である。また床面には炭粒や焼土粒を多く含む弱粘質微砂で埋まった浅い窪みが幾つもみられ、床面の整地に関係するように思われる。遺物は、床面に接地して検出された。**143**～**146**は甕で、にぶい黄橙色を呈し、胎土は２㎜大以上の砂粒を含む。**145**甕は口縁部がかなり直立気味に立ち上がり、外面下部にわずかに稜がある。**148**～**150**は高杯で橙色を呈し、胎土は１㎜以上の砂粒を含む。杯部は浅く、口縁部は内湾し、下端に段を有する。**152**～**154**は外面過半にヘラケズリを施す鉢である。橙色を呈し、胎土に１㎜以上の砂粒を含む。明瞭な肩部を有し口縁部が短く立ち上がる**152**と肩部が明瞭でなく口縁部は僅かに癖を持つ**153**・**154**とがある。**Ｊ１**は滑石製の臼玉、**Ｓ11**は緑色片岩製の双孔円盤である。時期は古墳時代後期前半と考えられる。　（物部）

（２）土壙

土壙５（第217図）

30北区の北端近くで検出された土壙である。隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長さ1.0m、幅0.72m、深さ0.35ｍを測る。断面形は台形を呈し、底面は平坦に掘削されている。埋土は３層に分層でき、最上層部には新しい時期の遺物が混入していたが、下層部からは土師器が出土した。**155**は甕で、



第217図　土壙５・出土遺物（１/30・１/４）

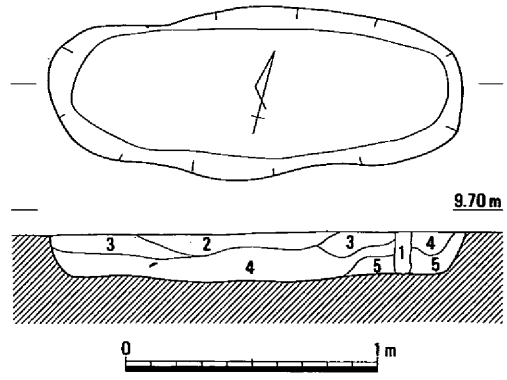
口径12.2cmを測る。**156**は高杯で、底径13.0cmを測る。**157**は鉢で、口径15.4cm、器高5.7cmを測る。

これらの出土遺物から、土壙の時期は古・前・Ⅰに位置づけられる。（岡本）

土壙６（第218図）

16区の中央で検出され、竪穴住居６の南約２ｍに位置する。平面形は、長さ1.64m、幅0.69mの長楕円形を呈している。検出面からの深さ0.2mを測る底面は、平坦であった。埋土は５層に分かれ、第２～５層には炭・焼土を含んでいた。

図示できる遺物はないものの、この土壙の時期は古墳時代前期と考えられる。（小嶋）



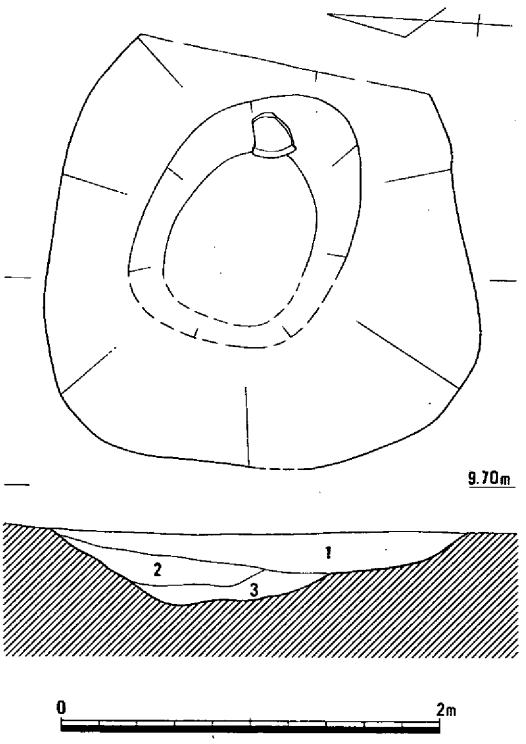
1．灰褐色砂質土
2．黄褐色砂質土(炭・焼土含む)
3．灰黄色砂質土(炭・焼土含む)
4．灰黄褐色砂質土(炭・焼土多く含む)
5．黄灰褐色砂質土(炭・焼土含む)

第218図　土壙６（１/30）

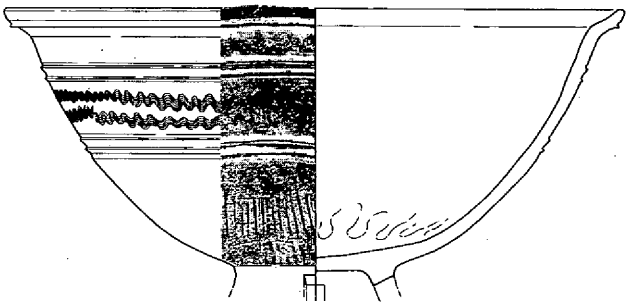
土壙７（第219図　図版36）

竪穴住居７上にほぼ重なるように位置する土壙である。東側の一部は調査区外に延びると考えられ、検出時の平面形態は不整円形を呈する。その規模は南北2.29m、東西2.31m、深さ0.38mを測る。底は二段に落ち込み、ほぼ平坦な最底面の標高は9.07mである。埋土は３層で、いずれも炭と焼土を顕著に含んでいる。図示した出土遺物はいずれも須恵器で、器台**158**は受け部外面の２本１対の凸線間に波状文を施し、脚部に長方形四方透かし穴をもつ。器台脚部**159**は二段の透かし穴をもつもので、**158**とは別個体と考えられる。**160**は杯蓋である。

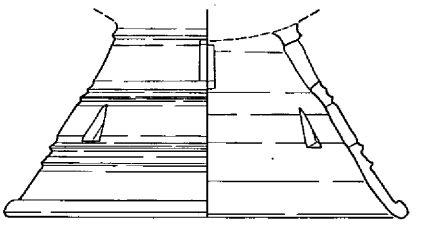
土壙の時期は、検出状況と出土遺物から古・中・Ⅱと考えられる。（高田）



1．暗黄灰色粘質微砂(炭・焼土含む)
2．灰黄褐色粘質微砂(炭・焼土含む)
3．暗褐色粘質微砂(炭・焼土含む)



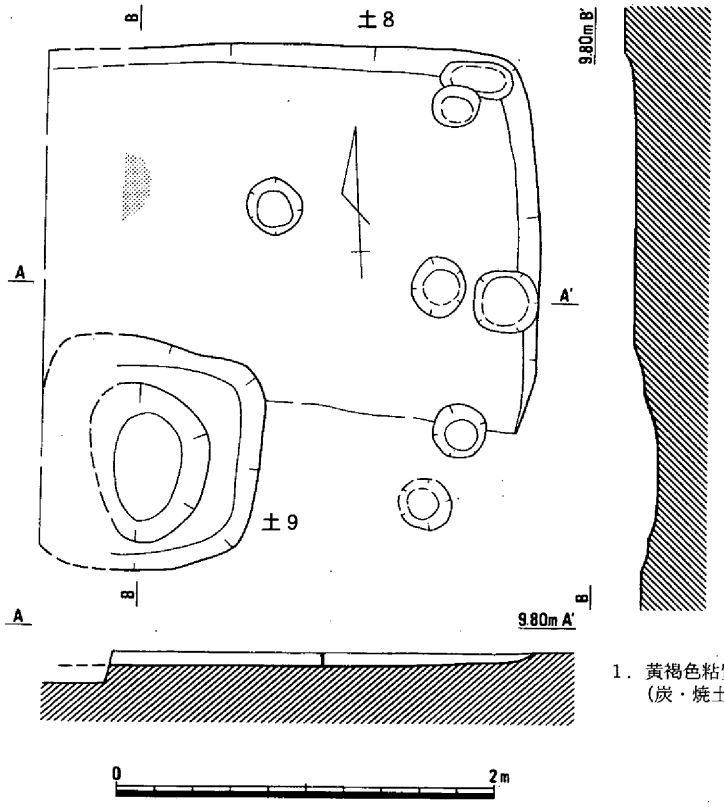
158



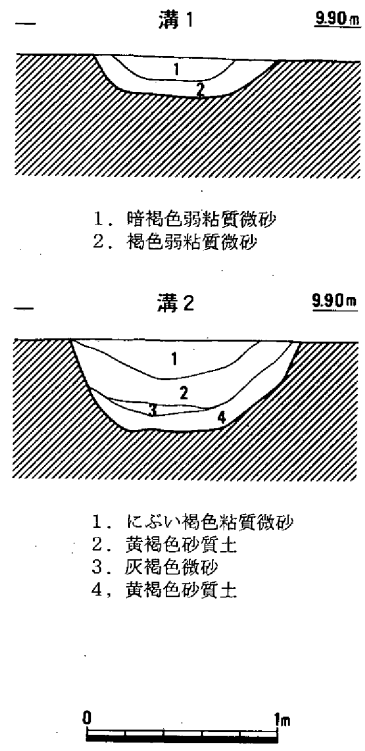
159

160

第219図　土壙７・出土遺物（１/40・１/４）



第220図　土壙８・９（１/40）



第221図　溝１・２（１/40）

土壙８・９（第220図）

竪穴住居８の南西約4.5mに位置する２基の土壙である。いずれの土壙も西側は調査区外に延び、土壙８の南側は中世以降の溝９に切られる。土壙８の検出時の平面形態は方形を呈し、規模は2.21m×2.06m、深さ0.07mを測る。その底面はほぼ平坦で、東側部分に径0.3m前後の柱穴を検出している。土壙９の平面形態も方形を呈し、検出時の規模は1.26m×1.19m、深さ0.12mを測り、底面は二段に落ち込む。遺物は土壙９で古・中・Ⅱと考えられる土師器片がわずかに出土している。

土壙の時期は、検出状況等から土壙９が古・中・Ⅱ、土壙８がそれ以降と考えられる。　（高田）

（３）溝

溝１・２（第221図）

溝１は27区南半、溝２は13区中央に位置し、直線的に伸びる同一の溝である。検出長は17.97m、検出面での幅は1.20～0.95m、検出面からの深さは0.50～0.21mを測る。北西から南東への流れが想定される。断面形はU字形を呈し、埋土は褐色の弱粘質微砂～砂質土で底面にはマンガンの沈着がみられる。出土遺物は土器細片が４点あるのみで、時期の限定は難しいが、埋土が竪穴住居９などに似ていることから古墳時代後期頃と推測する。　（物部）

（４）遺構に伴わない遺物（第222図）

遺構を検出する段階で、土師器や須恵器を出土している。**161**は、筒状の頸部から屈折して開く二重口縁をもつ非在地系の壺で、竪穴住居２の周辺から出土した。口径12.2cmを測る**164**は屈曲する二重口縁をもち、球形をなす体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。**165**は、口径8.2cm、器高9.5cmを測る小形の壺で、体部外面をハケメ、内面をナデないしユビオサエで調整する。**167**の高杯と伴出した。

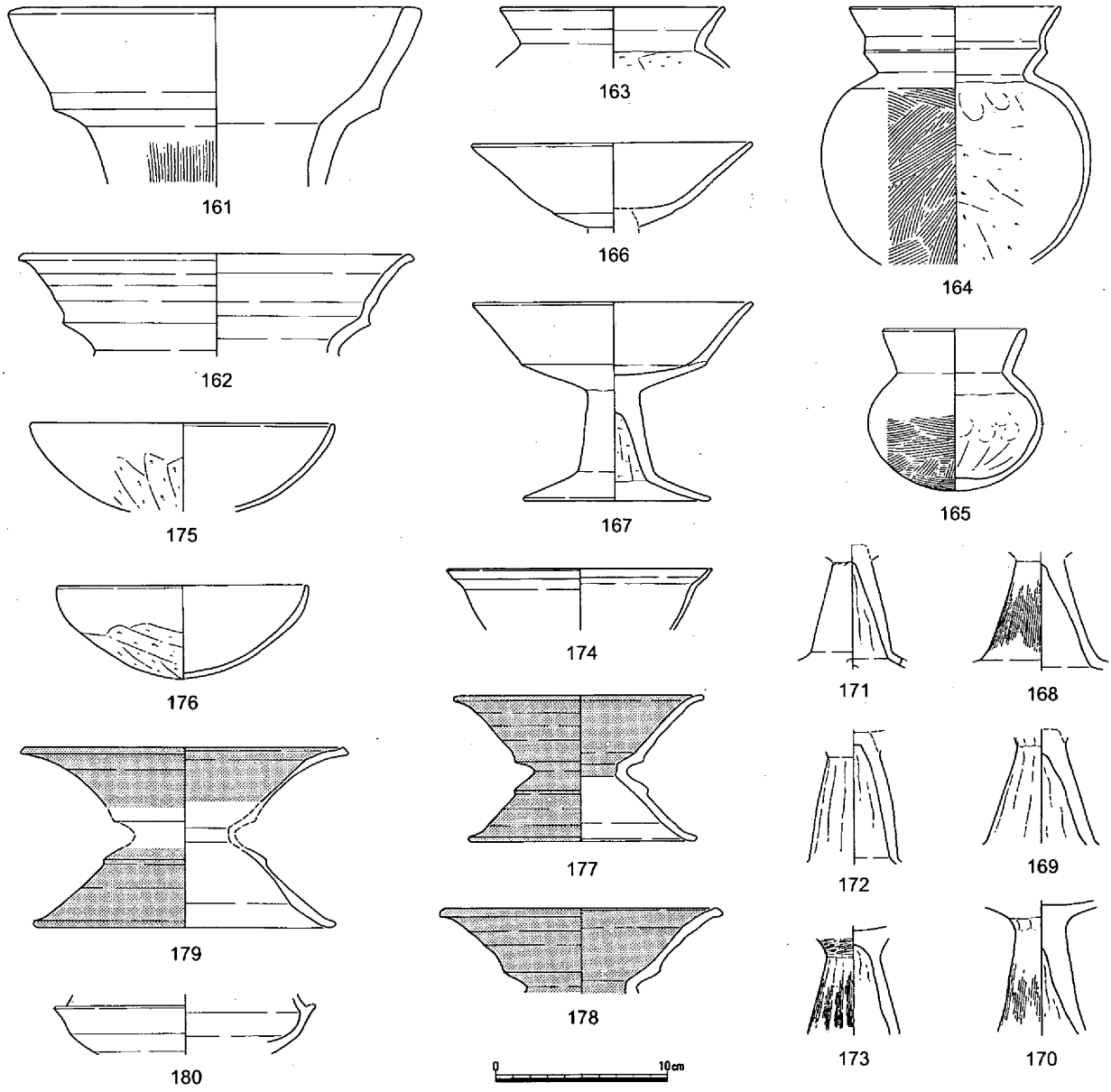
甕163はく字形の口縁部をもち、口径12.8cmを測る。出土状況から竪穴住居２に伴う可能性がある。

高杯には166～173がある。166は高杯の杯部で、16.2cmを測る口径に比して底部は狭い。167はほぼ完形に復元できた高杯で、口径16.4cm、脚径11.0cm、器高11.7cmを測る。脚部には透かし孔がなく、内面はヘラケズリで調整する。竪穴住居７の周辺で出土した168～173は別づくりの脚部で、中実ぎみにつくられた内面には絞り目を残し、171では裾部に４つの透かし孔を穿つ。

鉢には二重口縁をもつ174と皿形をなす175・176とがある。174は精良な胎土をもつのに対し、175・176は壺や甕と胎土を共通にし底部外面をヘラケズリで調整する。

177～179は鼓形器台で、外面をヨコナデ、内面をヘラケズリとナデで調整した後、赤色顔料を塗布している。いずれも竪穴住居２の付近から出土しており、山間部からの搬入品と見られる。

180は表土から出土した須恵器の杯で、たちあがりと底部を欠いているが６世紀後半に位置付けられる。（亀山）



第222図　遺構に伴わない遺物（１/４）

第４節　古代の遺構・遺物

（１）掘立柱建物

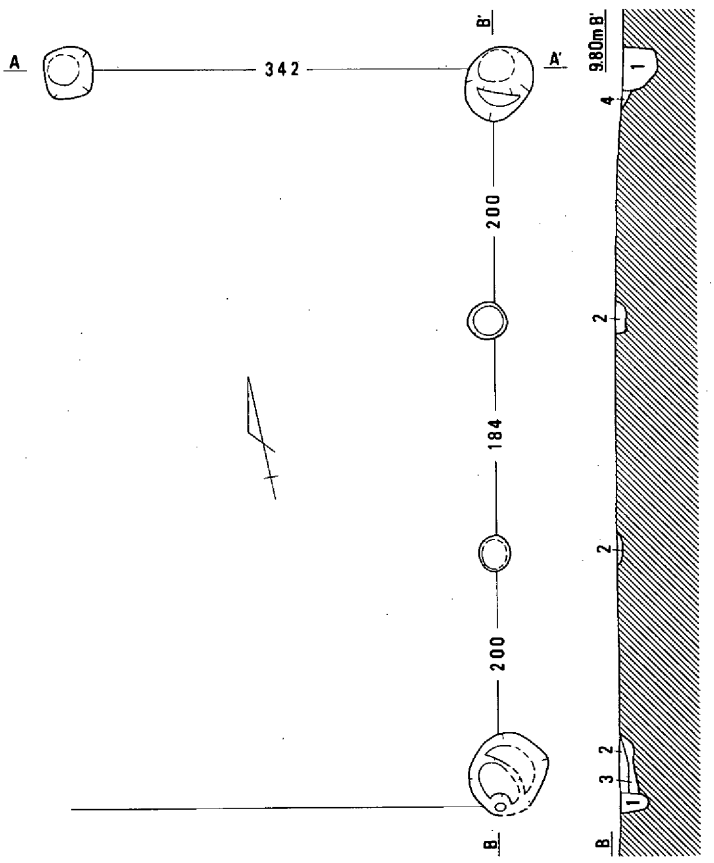
掘立柱建物１（第223図）

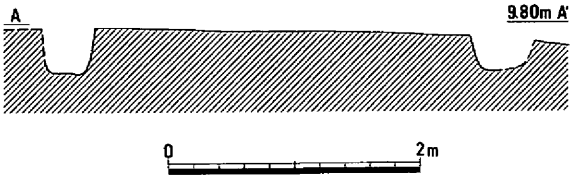
弥生時代の溝２と中世の溝８に挟まれた位置で検出した掘立柱建物である。周囲に柱穴がみられず、いずれの柱穴の埋土も近似することから建物としてまとめた。西側が調査区外となるために建物の北・東辺のみ検出している。その規模は、桁行が３間で全長5.84m、梁間は１間で3.42mを測るが、梁間はさらに調査区外に延びる可能性がある。棟方向はＮ－12°－Ｅとなる。また、桁側の柱間距離は、北から２m、1.84m、２mを測り、ほぼ揃うことを指摘できる。

柱穴の平面形はいずれも円形か楕円形を呈し、その径は角の３本で0.4～0.65m、桁側の間２本で0.3m前後を測る。検出面からの深さは、角の３本で0.23～0.38m、桁側の間２本で0.03～0.08mを測る。埋土はいずれも近似するもので、炭と焼土を比較的顕著に含んでいる。

出土遺物は、弥生土器片と土師器片がわずかに出土したのみである。

建物の時期については、周囲の中世遺構と軸方向が異なることと、出土遺物から古代に属する可能性を指摘しておきたい。（高田）





1．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土少し含む)
2．黄褐色粘質微砂(地山ブロック含む)
3．暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む)
4．黄灰色砂質土(砂・焼土多く含む)

第223図　掘立柱建物１（１/60）

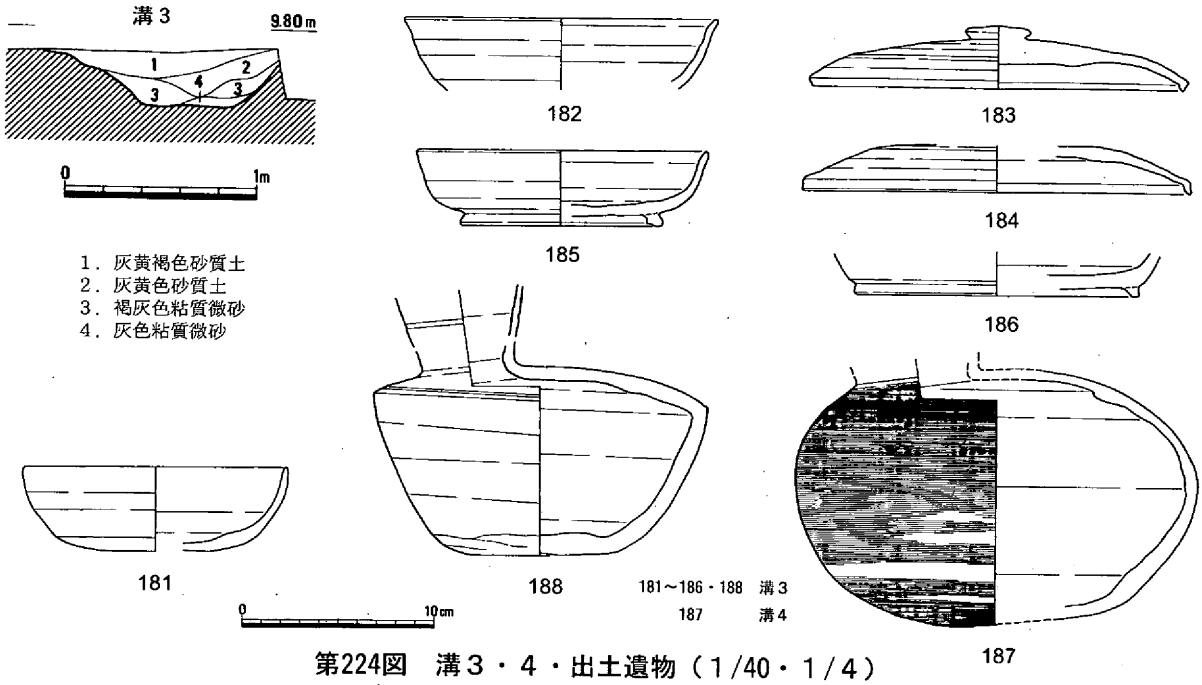
（２）溝

溝３・４（第224図）

30区南端で検出した溝３と15区で検出した溝４で、検出状況から両者は同一の溝と考えられる。西南西から東北東に向かって直線的に流走するもので、検出時の規模は幅1.2m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で鉄分の顕著な沈着がみられる。遺物は溝３でまとまった量の出土がみられたが、溝４は少量であった。

図示した遺物はすべて須恵器で、杯・蓋・平瓶の器種がある。**183**は蓋で、扁平な碁石状のつまみをもち、折り返した口縁が逆三角形を呈する。**185**は杯で、ハの字状に開く高台が付く。

出土遺物から、溝の時期は奈良時代と考えられる。（高田）

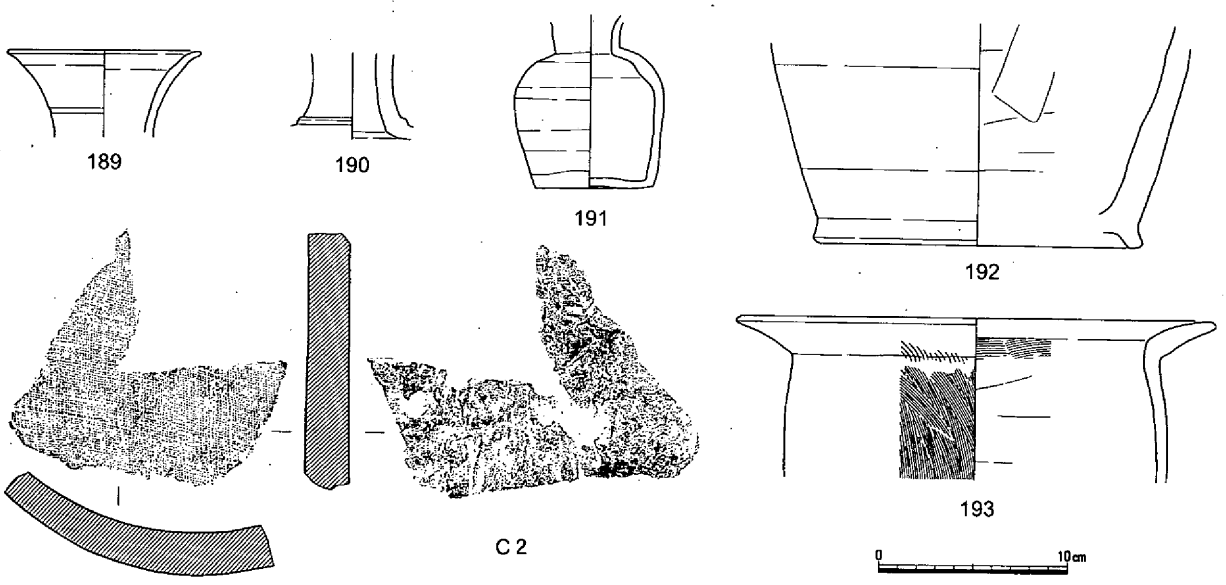


第224図　溝３・４・出土遺物（１/40・１/４）

（３）遺構に伴わない遺物（第225図）

遺構を検出する段階で、８～10世紀の土師器や須恵器、瓦などが出土しているが、その量は井手見延遺跡に比べてはるかに少ない。

須恵器には壺・瓶・甕があるが、甕については図化できなかった。**190**は上方に向かって緩やかに開く長頸壺の口縁部で、口径は10.1cmを測る。**190**は精良な胎土をもつ瓶の頸部で、体部との境界に突帯をめぐらす。胴径7.8cm、現存高9.1cmを測る小型の瓶**191**は、口縁部を欠いているもののほぼ完形で出土したが、作りは粗く、形も歪である。**192**は高台を貼り付けた壺の底部で、底径16.1cmを測る。**193**は溝11の周辺で出土した土師器の甕である。25.5cmを測る口縁部は体部から屈折して水平に開き、その端部は面をなして終わる。筒状の体部は外面を粗いタテハケで調整し、内面をヨコハケの後ナデで仕上げる。**Ｃ２**は平瓦で、凸面には粗い縄目タタキを施し、凹面には布目を残す。　（亀山）



第225図　遺構に伴わない遺物（１/４）

第５節　中・近世の遺構・遺物

（１）掘立柱建物

掘立柱建物２（第226図）

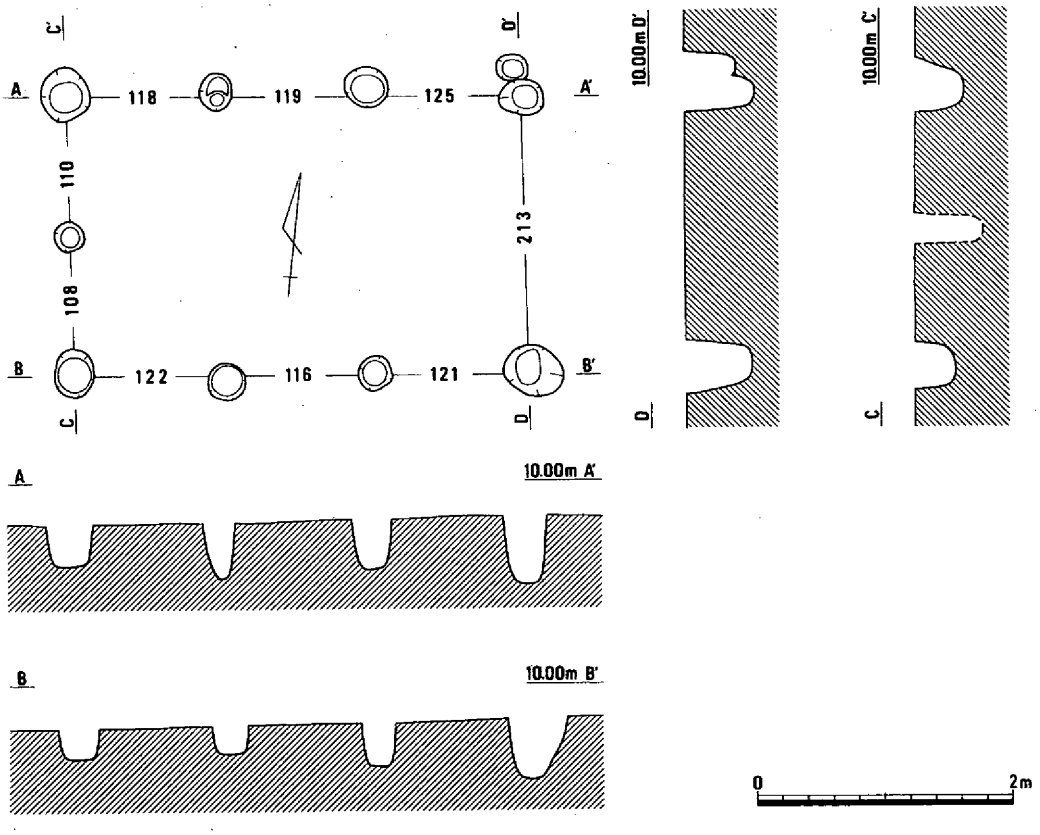
掘立柱建物２は29区南半、溝５のすぐ北側に位置する。３×２間の建物と考えられるが、桁行の東辺には中央に柱穴が検出されなかった。規模は、桁行は3.62×3.59m、柱間距離は1.25～1.16mを測る。梁間は2.18×2.13m、柱間距離は西辺1.08～1.10m、東辺2.13mを測を測り、柱間距離が比較的短い。棟方向はＮ－84°－Ｅである。柱穴は円形を呈し、直径0.24～0.40m、検出面からの深さ0.25～0.55mを測り、西から東へ深くなる傾向がみられる。柱穴内にはにぶい黄褐色砂質土が堆積し、柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物は埋土中に僅かであるが、早島式土器椀の細片が混入していることから、この建物の時期を中世に求めることができる。（物部）

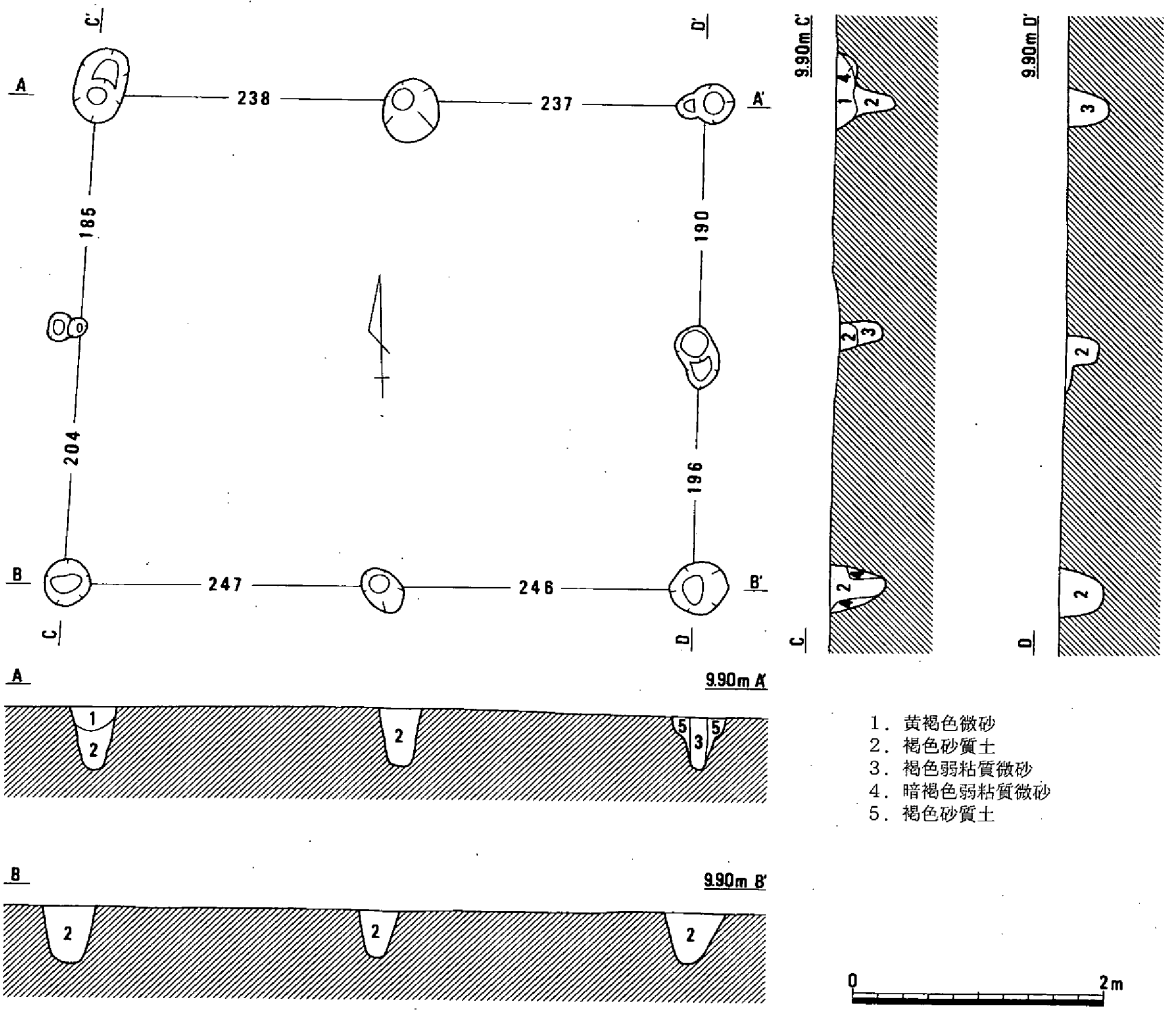
掘立柱建物３（第227・233図）

掘立柱建物３は29区南半に位置し、掘立柱建物２の北、溝６の南に隣接して検出された。２×２間の建物と考えられ、規模は、桁行は4.93×4.75m、柱間距離は2.47～2.37mを測る。梁間は3.89×3.86m、柱間距離は2.04～1.85mを測る。棟方向はＮ－88°－Ｗである。柱穴は直径0.30～0.44mの円形を呈し、検出面からの深さ0.4m前後である。梁間の柱間の柱穴は他の柱穴と比べ直径・深さともにひとまわり小さく、束柱のようなものかもしれない。

出土遺物は各柱穴埋土中から土師質の土器細片が少量みられたが、そのほとんどは下層の竪穴住居



第226図　掘立柱建物２（１/60）



第227図　掘立柱建物３（１/60）

９からの混入である。その中に**194**黒色土器の椀の小片が１点だけ混じっていた。いわゆる内黒と呼ばれるもので、黄褐色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。この土器の時期は11世紀頃と考えられるが、柱穴埋土が中世の柱穴埋土と酷似することから11世紀～中世ととらえたい。　（物部）

掘立柱建物４（第228・233図）

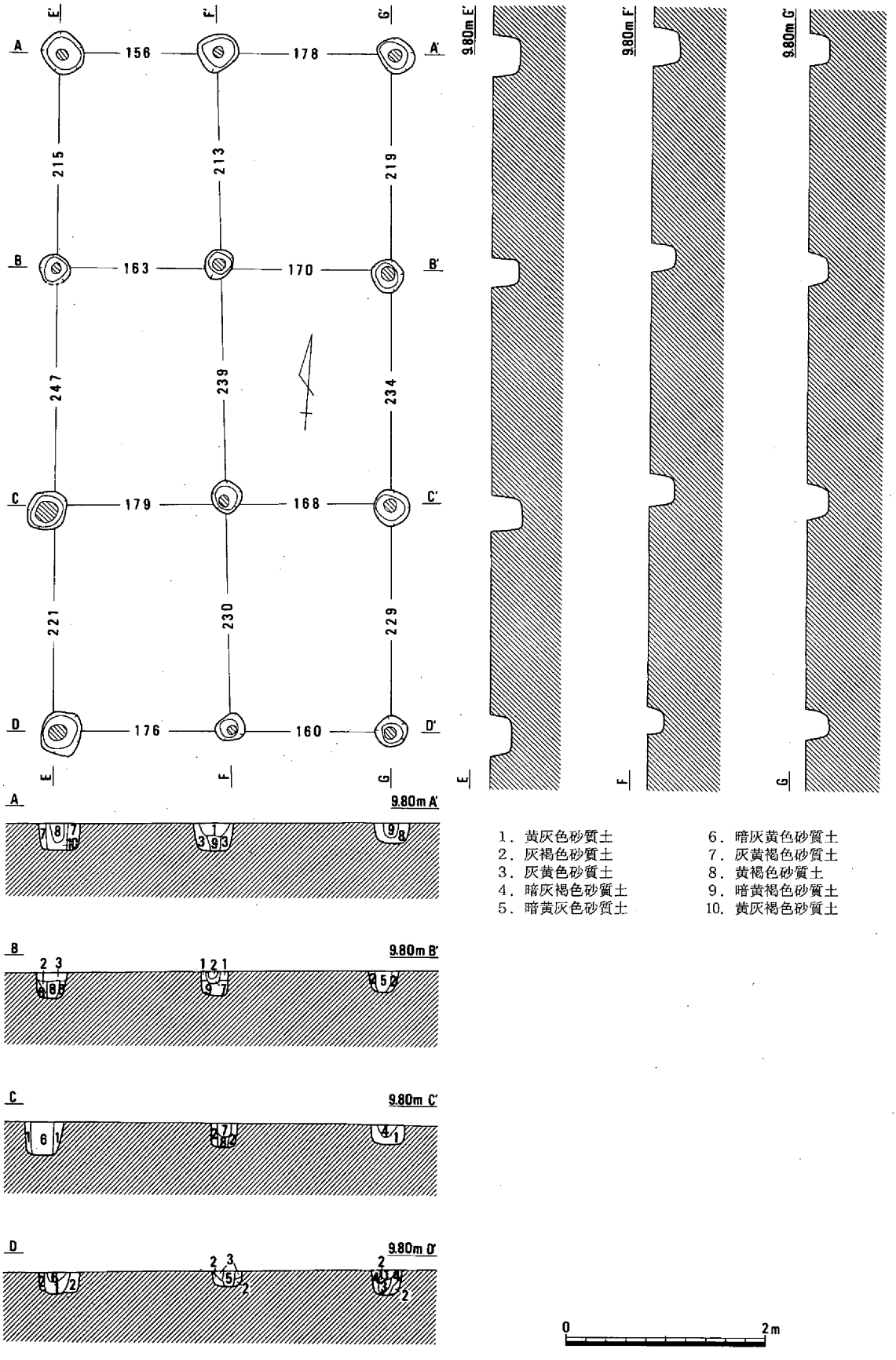
15区の中央で検出された、桁行３間、梁間２間の南北棟と考えられる総柱の掘立柱建物である。棟方向はＮ－４°－Ｗであった。

この建物の平面形はほぼ長方形を呈しているが、中央の桁行が東西の桁行と比べると若干東西に振っている。建物の規模は、桁行全長6.83～6.82m、梁間全長3.36～3.34m、面積22.8㎡を測る。柱間距離は、桁行が2.47～2.13m、梁間が1.79～1.56mである。

柱穴の掘り方は、径約40cm、深さ約30cm程度の平面円形を呈するものが多い。すべての柱穴から柱痕跡が確認され、それらは掘り方中央に位置している。柱材は10～20cmのものが使用されていたと推定される。

遺物は土師器の椀**195**・**204**・**207**と土師器の皿**214**・**217**などが出土している。**214**は底部ヘラキリである。

これらの遺物から時期は中世（13世紀前半）と思われる。　（小嶋）



1．黄灰色砂質土
2．灰褐色砂質土
3．灰黄色砂質土
4．暗灰褐色砂質土
5．暗黄灰色砂質土
6．暗灰黄色砂質土
7．灰黄褐色砂質土
8．黄褐色砂質土
9．暗黄褐色砂質土
10．黄灰褐色砂質土

第228図　掘立柱建物４（１/60）

掘立柱建物５（第229図）

16区の南西で検出され、掘立柱建物４の北約５ｍに位置している側柱の掘立柱建物である。掘立柱建物６・７の内側から検出されているため、掘立柱建物６・７との同時併存はあり得ない。桁行は２間、梁間は、西側が調査区外のため不明であるが、現状で２間である。建物の規模は、桁行が全長4.02m、柱間距離2.11～1.91m、梁間が全長3.57m、柱間距離2.01～1.71mを測る。平面約0.35mの円形を呈する柱穴は、深さ約0.4mに掘り下げられていた。柱穴からは柱痕跡も認められ、それから推定される柱の径は約0.1mである。建物の主軸はＮ－15°－Ｗである。

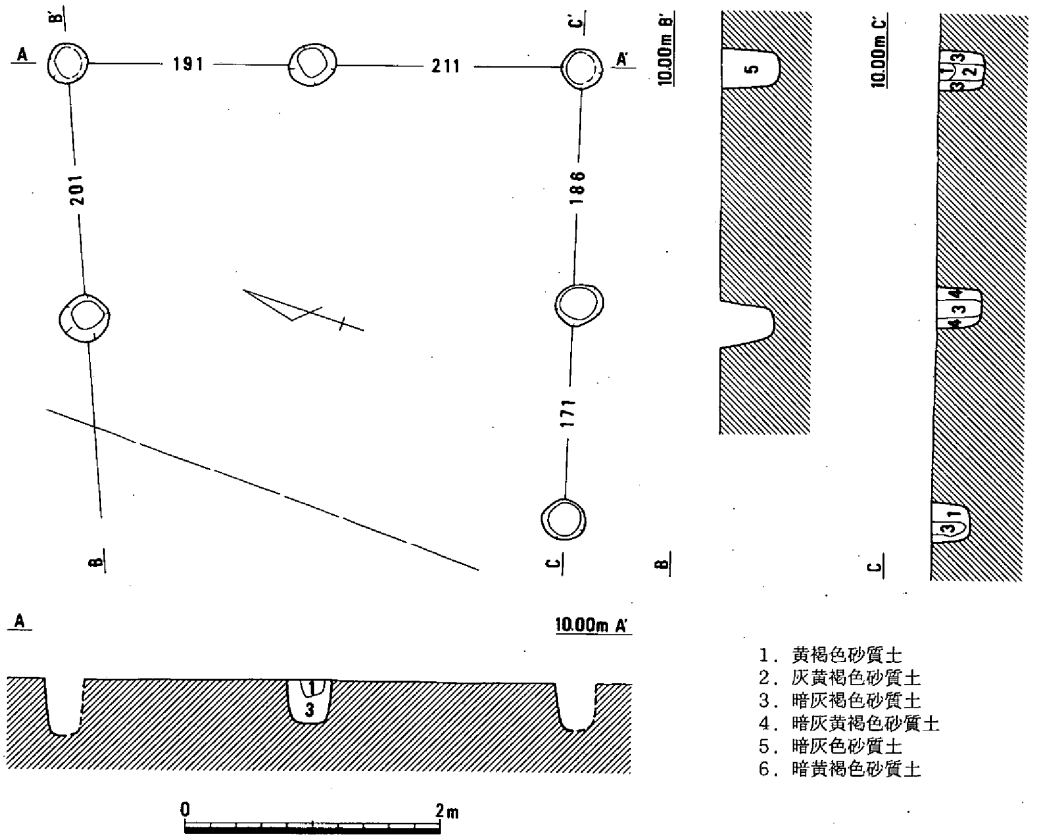
実測に耐えられる遺物はないが、土師器の椀・皿などが出土している。時期は、遺物と埋土の状況から中世と考えられる。（小嶋）

掘立柱建物６（第230・233図）

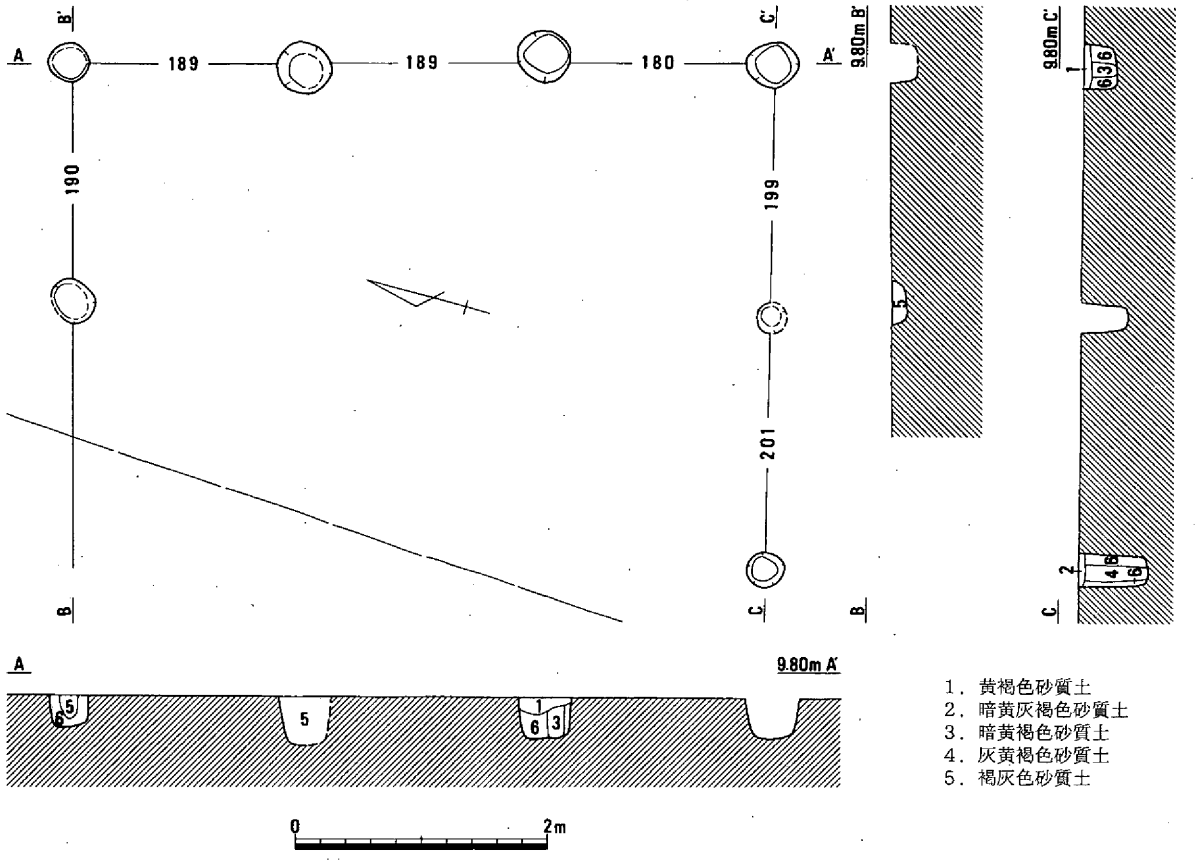
16区の南西で検出され、掘立柱建物５を囲むような状況で検出された側柱の掘立柱建物である。また、掘立柱建物７の内側に所在しているため、掘立柱建物５・７との同時併存は考えられない。主軸は掘立柱建物５・７とほぼ一致している。建物は、西側が調査区外のため不明であるが、桁行が３間、梁間が現状で２間である。規模は桁行全長5.57m、梁間全長4.0m、面積22.2㎡を測る。柱間距離は桁行が1.89～1.8m、梁間が2.01～1.9mである。柱穴は径0.45～0.25mの円形を呈している。深さは南西端の柱穴が一番深く0.55mを測り、北西端のものが一番浅く0.13mである。柱穴から柱痕跡も認められ、それから推定される柱の径は約0.1mである。

出土遺物は土師器の椀**196**などが出土している。

この建物の時期は、中世（13世紀後半）と考えられる。（小嶋）

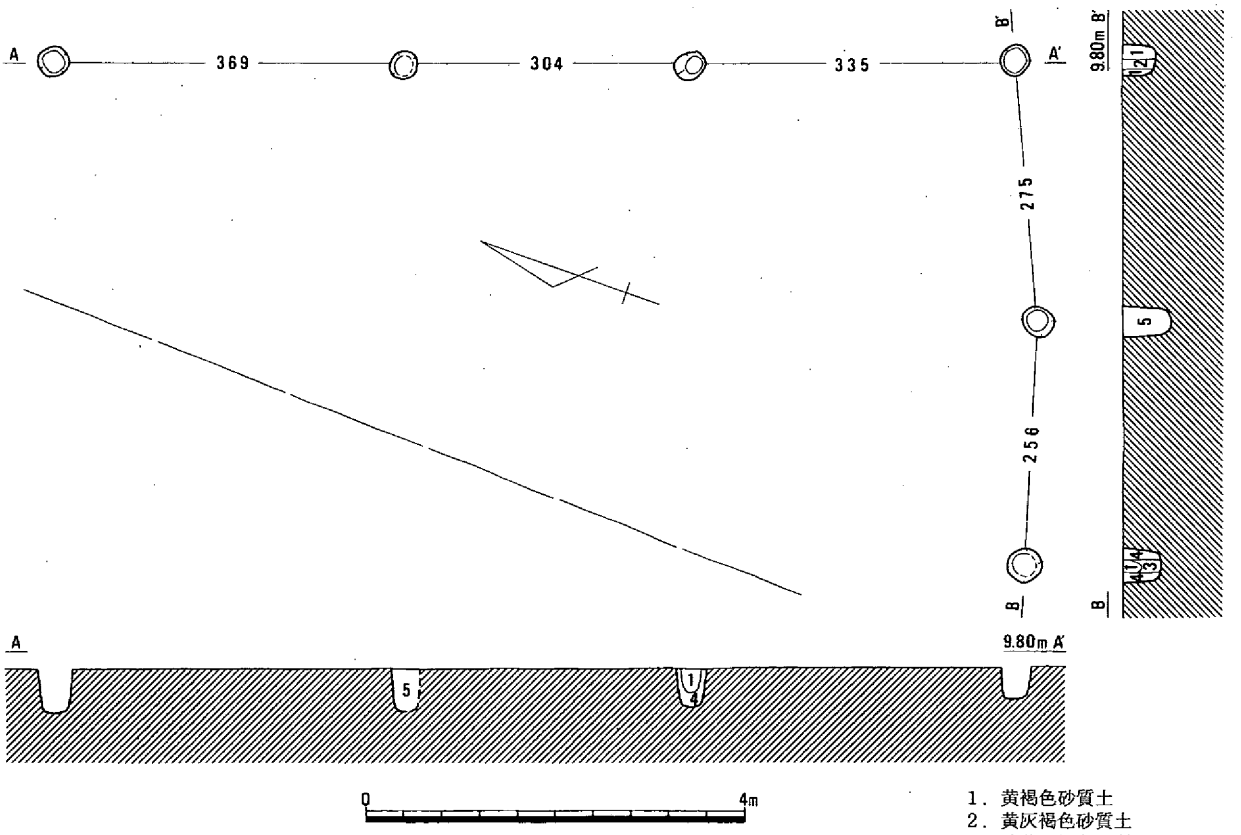


第229図　掘立柱建物５（１/60）



1．黄褐色砂質土
2．暗黄灰褐色砂質土
3．暗黄褐色砂質土
4．灰黄褐色砂質土
5．褐灰色砂質土

第230図　掘立柱建物６（１/60）



1．黄褐色砂質土
2．黄灰褐色砂質土
3．暗黄灰褐色砂質土
4．暗黄褐色砂質土
5．暗灰色砂質土

第231図　掘立柱建物７（１/80）

掘立柱建物７（第231図）

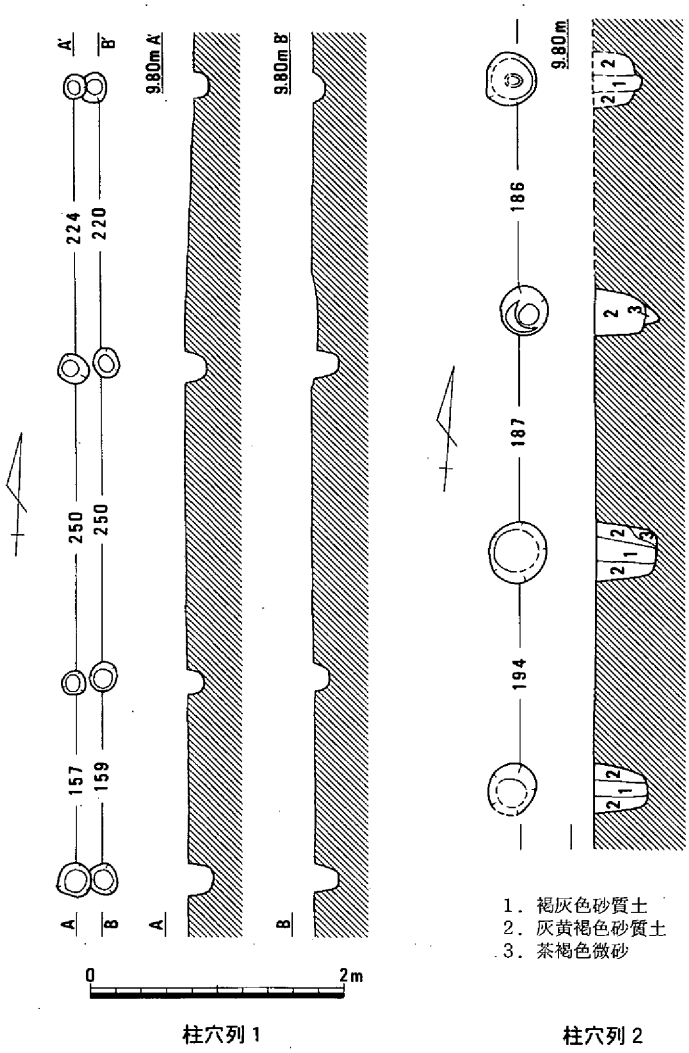
16区の南西で検出された、現状で３×２間の側柱の掘立柱建物である。建物の主軸はＮ－19°－Ｗである。掘立柱建物５・６を囲むように位置しているため掘立柱建物５・６との同時併存は考えられない。建物は、西側が調査区外のため規模は不明であるが、桁行全長10.08m、梁間全長5.31m、面積53.4㎡を測る。柱間距離は桁行が3.69～3.04m、梁間が2.75～2.56mとかなり広くなっている。柱穴の掘り方は径0.3m程の円形を呈し、深さは約0.4mである。

時期は出土遺物や埋土の状況から中世に比定される。（小嶋）

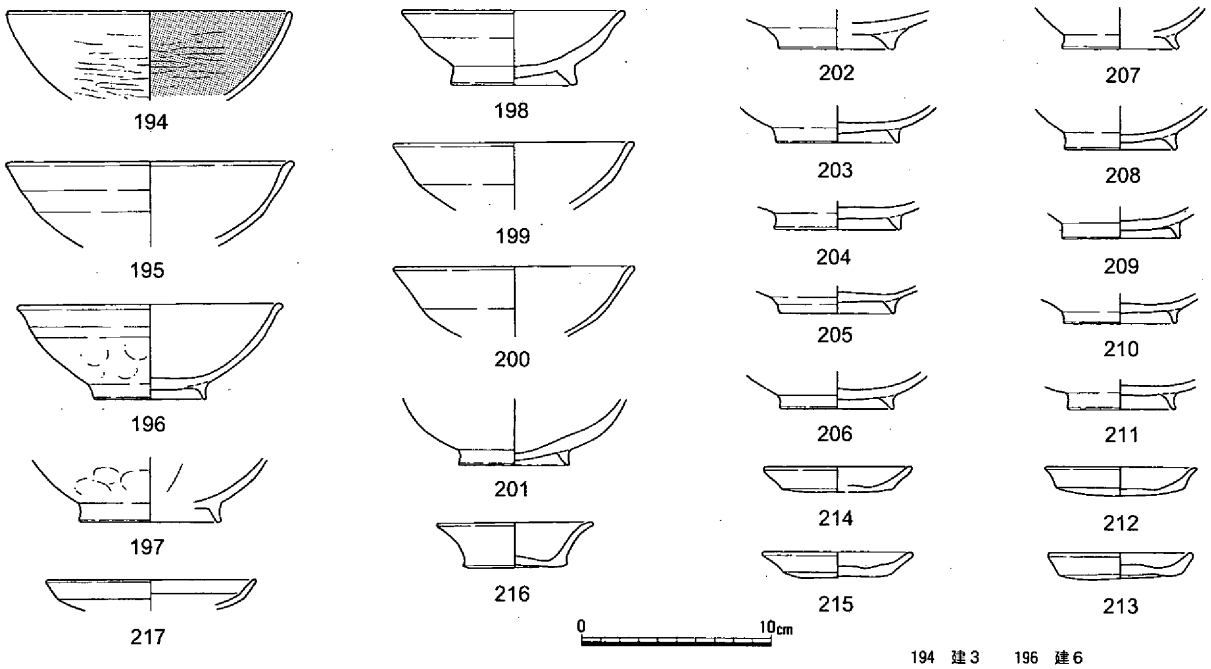
柱穴列１・２（第232図）

溜池状遺構の南東部で検出したほぼ南北方向の柱穴列である。柱穴列１は全長6.3m前後の重複する二本の柱穴列で、西側が新しい。柱穴列２は全長5.67mを測る柱間３間の柱穴列で柱痕跡をもつ。

時期は中世と考えられる。（高田）



第232図　柱穴列１・２（１/60）



194　建３　　196　建６
195・204・207・214　建４

第233図　掘立柱建物出土遺物（１/４）

（２）土壙

土壙10（第234図）

土壙10は28区中央部の西壁沿いに位置し、溝18・19を切っている。平面形は不正形で、２/３は調査区外に伸びているものと思われる。検出長3.02m、検出幅1.11m、検出面からの深さ0.79mを測る。埋土上層には礫を多く含む粗砂層がみられる。

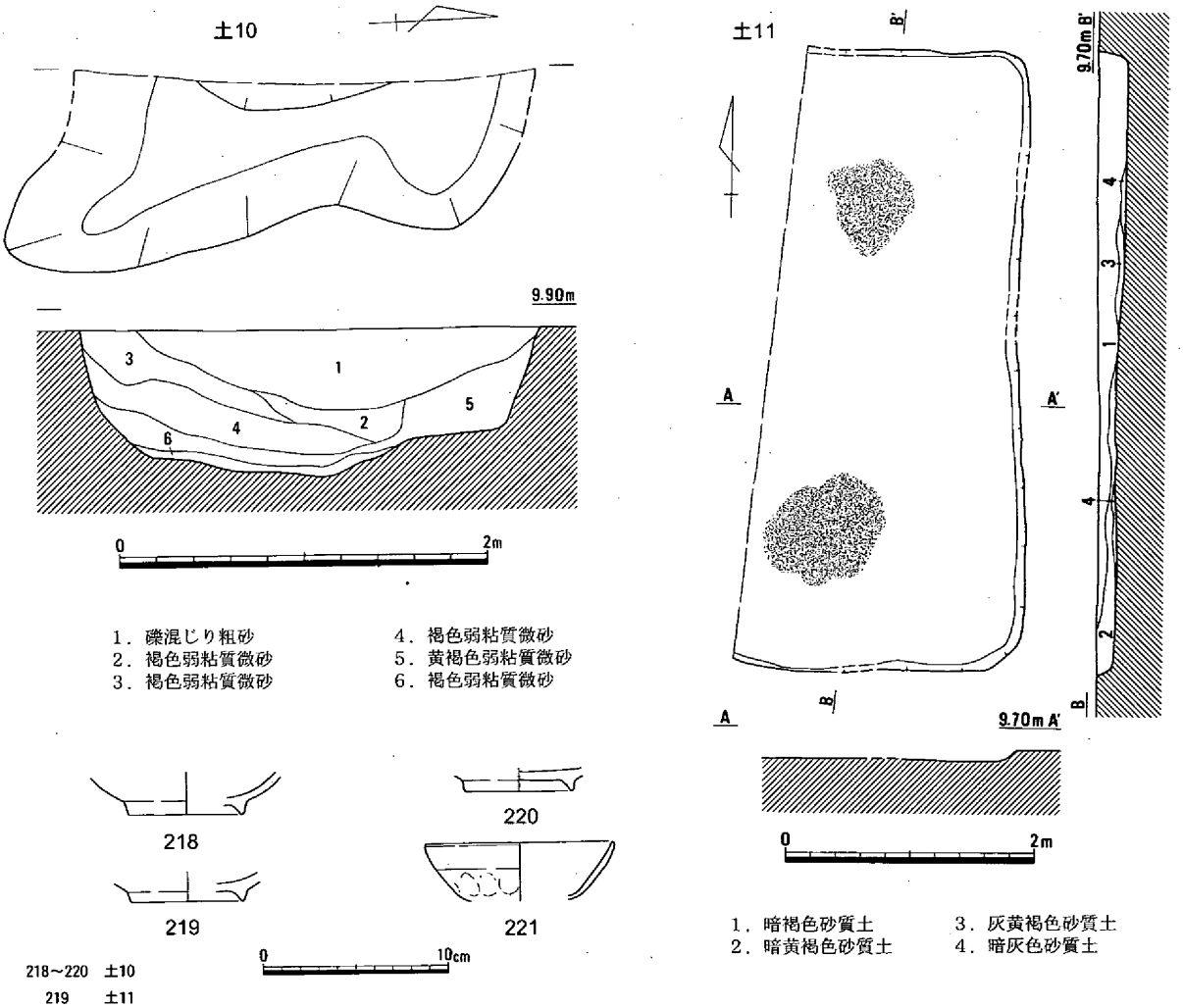
出土遺物は土器小片が少量であった。221はにぶい橙色を呈する土師器の椀で、口径は10.0cmを測る。胎土は精良である。時期は土器の特徴から14世紀頃と考えられる。（物部）

土壙11（第234図）

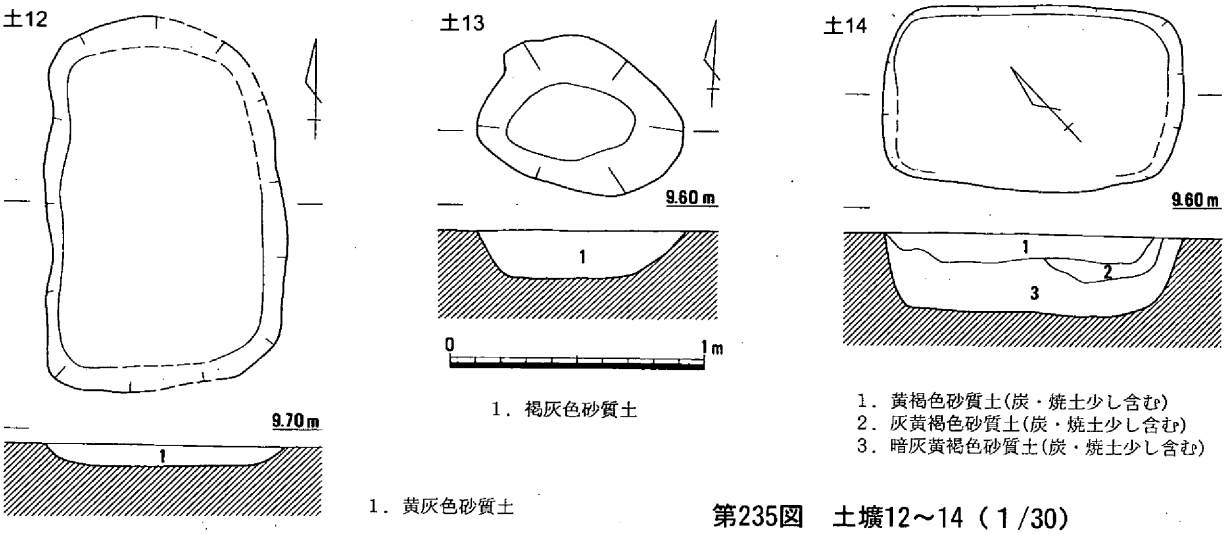
15区の北西隅で検出され、掘立柱建物５～７の南に位置している竪穴状の土壙である。西側は調査区外のため不明であるが、平面方形を呈していたと考えられる。規模は、現状で長さ5.02m、幅2.33mである。深さは検出面から0.23mを測り、底面は平坦で方形を呈している。底面上には炭の集中域が南北に２カ所認められた。両者とも平面は不整円形を呈し、規模は北側のものが径約0.8m、南側のものが径約１mである。この炭の周りや底面上には被熱痕跡は認められなかった。この遺構がどのような用途で使用されていたのか不明であるが、形態的には竪穴住居に近似している。

出土遺物は218～220の土師器の椀の底部が出土している。

時期は中世（13世紀前半）と考えられる。（小嶋）



第234図　土壙10・11・出土遺物（１/60・１/40・１/４）



第235図　土壙12～14（１/30）

土壙12（第235図）

16区の南西において検出された遺構である。平面形は不整方形を呈している。規模は長さ1.49m、幅0.93m、深さ９cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面は平坦であった。埋土は黄灰色砂質土の一層のみであった。

出土遺物から、時期は中世（13世紀後半）と考えられる。（小嶋）

土壙13（第235図）

16区の北西隅で検出された遺構である。規模は長径0.79m、短径0.6mを測り、平面楕円形を呈している。深さは検出面から0.19mを測り、断面形は皿状である。底面は平坦であった。埋土は褐灰色砂質土であった。

出土遺物から時期は中世の範囲に収まると考えられる。（小嶋）

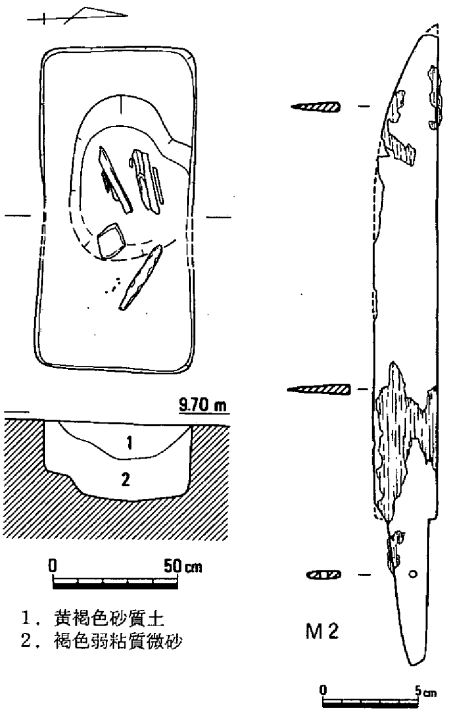
土壙14（第235図）

16区の北東側、土壙13から東へ約７mで検出された遺構である。平面形は方形を呈し、長さ1.2m、幅0.74mを測る。深さは0.32mを測り、底面はほぼ平坦であった。埋土は３層に区分され、すべて炭・焼土を含んでいた。

遺物は出土していないが、検出状況等から、時期は中世と考えられる。（小嶋）

（３）土壙墓（第236図　図版33・36）

土壙墓は27区の中央部で検出された。平面形は長さ1.30m、幅0.64mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.30mを測る。底面の標高は9.35m、主軸はＮ－87°－Ｗである。壁はほぼ垂直で、底面は中央部が若干窪む。内部には人骨が遺存したが保存状態は悪く、歯の細片と足の大腿骨あるいは脛骨が確認された。骨の出土状況から頭を東に両足を曲げて埋葬されている。頭部の北側に鉄刀が１本副葬されていた。木棺の痕跡は確認されなかった。時期は埋土から中世と推定される。（物部）



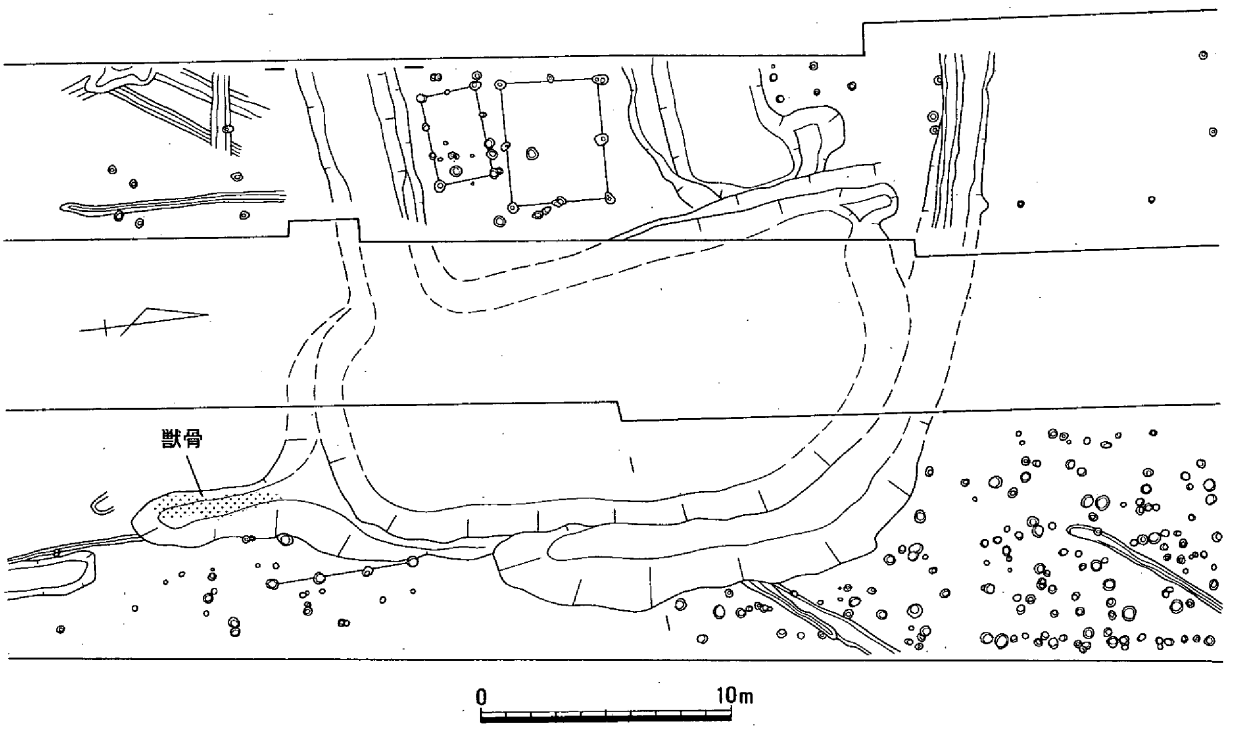
第236図　土壙墓・出土遺物（１/30・１/４）

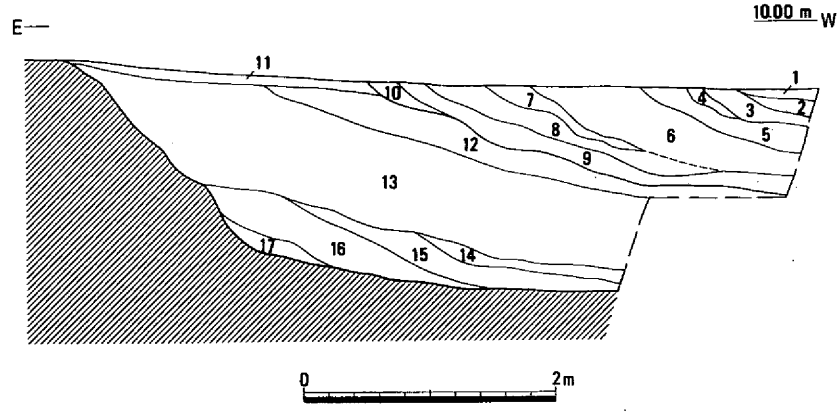
（４）溜池状遺構（第237・238図　図版33）

建物２・３の東側に位置するもので、中央に未調査部分がある。平面形は長径約25m、短径約15mの長楕円形と推定され、最深部の標高は8.85mを測る。南西から溝５が、北西から溝９が接続すると考えられる。また南東部には幅約２m、長さ約８mの溝状部分があり、獣骨の大量遺棄がみられた。

出土遺物は土師器、備前焼、京焼、肥前陶磁器と獣骨である。222～235は土師器で、222・223は高台付椀、224～226は小皿、235は鉢である。236は備前焼の擂鉢、237は甕である。237は口縁を玉縁状に折り返している。227は京焼系の椀である。肥前陶磁器は鉢228・230・234、皿229・231、碗232・233である。228は見込みに砂目積み跡が３カ所みられる。231は蛇の目高台の染付、232・233は染付の筒形碗である。234は鉄釉の片口鉢である。獣骨は南東部溝状部分の２×１mの範囲にほぼ集中するもので、鑑定可能な個体はすべてウシとウマであった。下顎骨の大量出土に特徴がある。

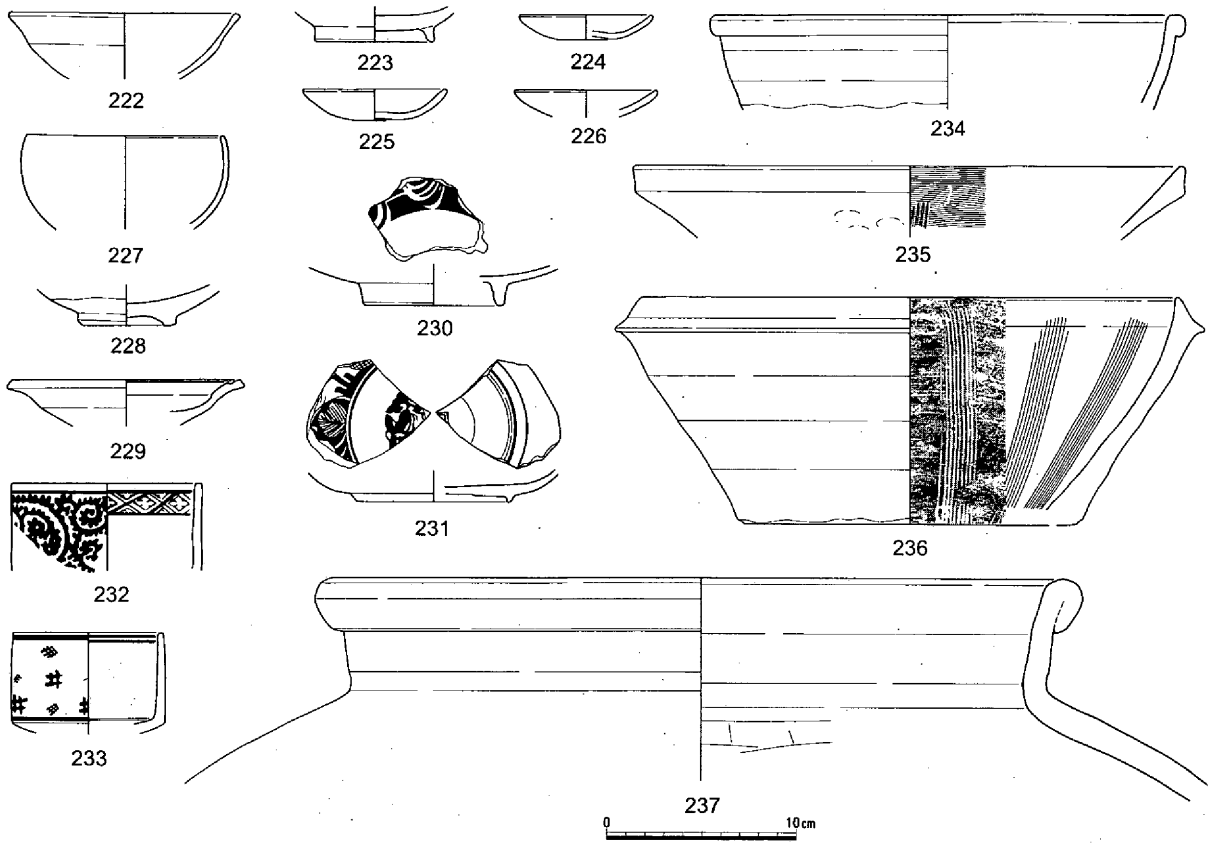
遺構の存続時期は、出土遺物と周辺の遺構との関連から、鎌倉時代以降に使用が始まり、最終的な廃絶は19世紀代と考えられる。（高田）





1．黄茶色礫混じり土
2．灰色粘質微砂(鉄・マンガン沈着)
3．灰褐色粗砂(鉄・マンガン沈着)
4．灰褐色粘質微砂(粗砂混じる)
5．灰色粘質微砂(灰白色微砂混じる)
6．茶褐色土
7．青灰色粘質砂(鉄・マンガン沈着)
8．暗灰色粘土(植物遺体含む)
9．褐灰色礫混じり砂
10．灰色粘土
11．灰茶色微砂(炭・焼土少し含む)
12．灰茶褐色微砂
13．灰色粘質微砂(灰白色微砂混じる)
14．暗灰色粘質微砂
15．暗灰色粘質砂(植物遺体含む)
16．灰色粘質微砂(粗砂混じる)
17．暗緑灰色粘質砂(植物遺体混じる)

第237図　溜池状遺構（１/300・１/60）

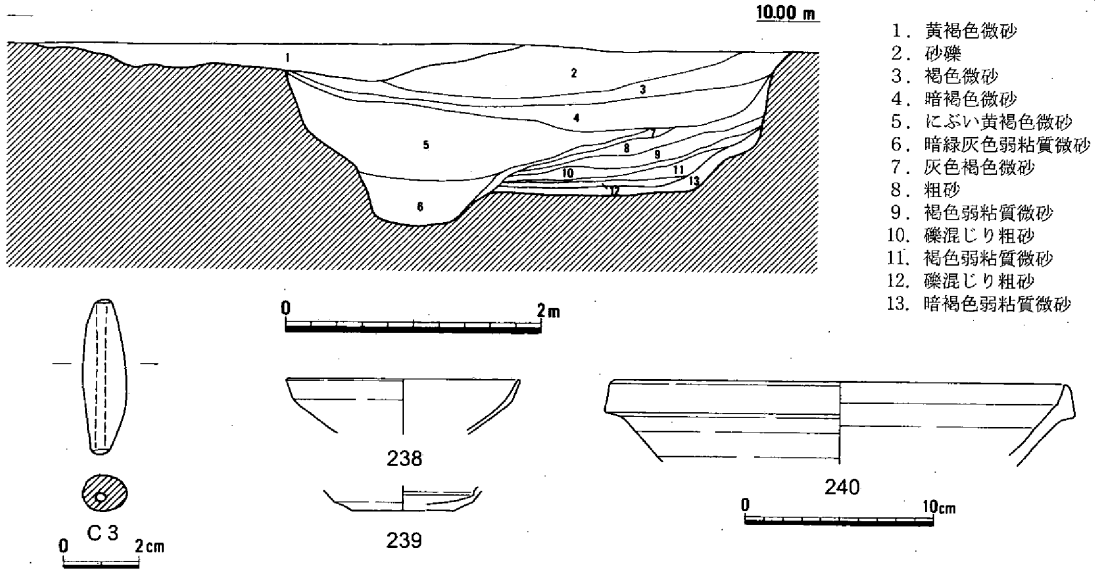


第238図　溜池状遺構出土遺物（１/４）

（５）溝

溝５（第239図）

溝５は28区と29区の境に位置し、掘立柱建物２のすぐ南で検出された。竪穴住居２を切っている。主軸を西南西－東北東にとり、東側で溜池状遺構に接続していると推定される。検出長6.07m、検出幅3.88m、検出面からの深さ1.43mを測る。溝底部は微高地の基盤である粗砂層を突き抜け、砂礫層に達している。底面の標高は8.34mを測る。断面の土層から少なくとも１回の掘り直し（第２

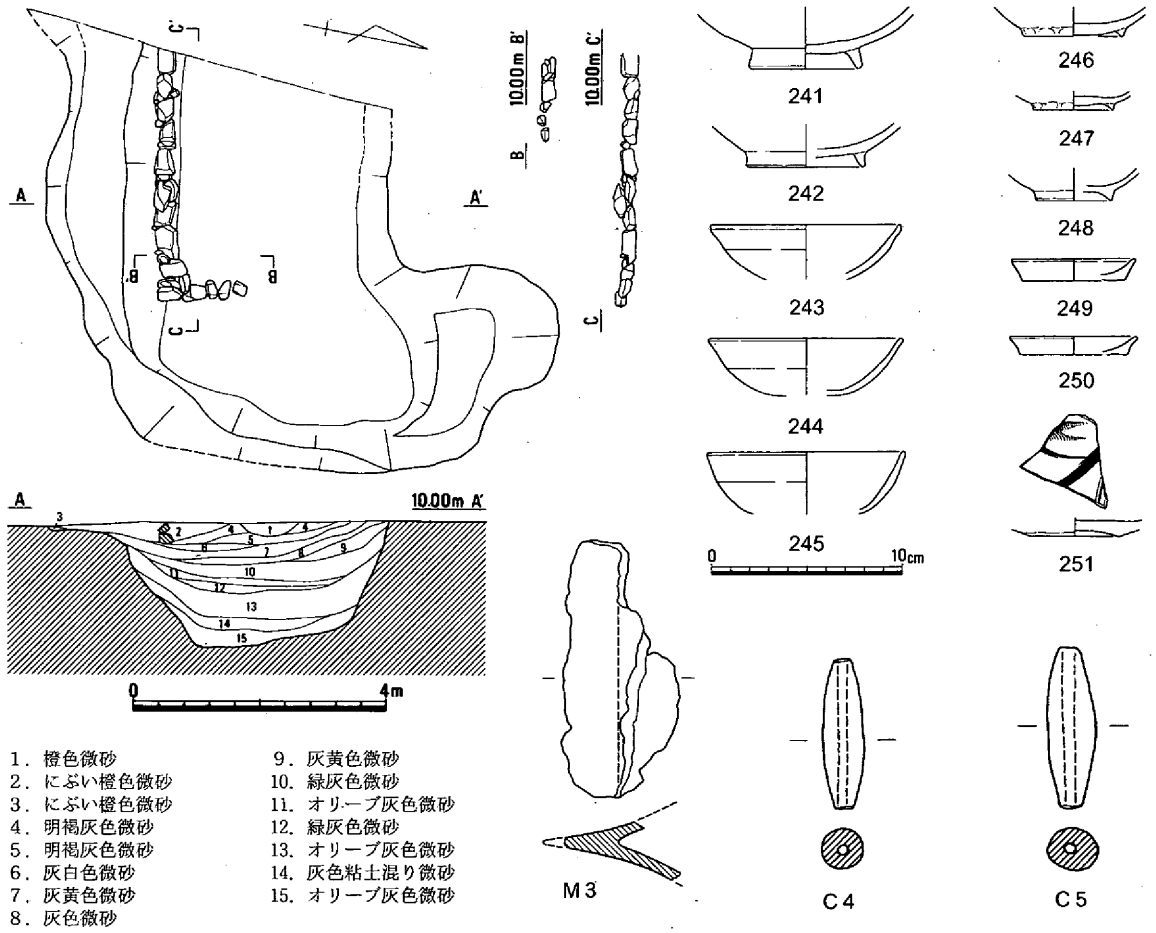


第239図　溝５・出土遺物（１/60・１/４・１/２）

～７層）が観察され、掘り直し以前の堆積層（第８～13層）は弱粘質微砂と粗砂の互層である。周囲で検出される溝と比べると規模が格段に大きい。遺物は埋土中から土器小片や土製品が出土した。**238**は白橙色を呈する土師器の椀で、器壁が非常に薄い。**239**は青磁の皿、**240**は東播系の捏鉢である。この他に土師器の鍋や竈の小片が多くみられる。**Ｃ３**は土錘である。時期は土師器椀の特徴などから14世紀以降と想定される。（物部）

溝６（第240図）

溝６は29区北半、溝５の北約９ｍに位置する。主軸を溝５と同様に西南西－東北東にとるが、東側の溜池状遺構には接続せず、東端部は北北西に屈曲し、そこで閉じる。溜池状遺構が掘り方の肩部を切る。検出長6.45ｍ、検出幅4.53ｍ、検出深2.0ｍを測る。溝底部は微高地の基盤である粗砂層を突き抜け、砂礫層を掘り込んでいる。底面の標高は7.80ｍ。埋土は微砂が下部から上部まで皿状に堆積しており、埋没の最終段階である幅２ｍ、深さ0.3ｍ程の浅い溝になった段階で石組が築かれている。石組みは溝の中央にＬ字形に組まれ、２段以上積まれていたようである。溝５と同様に規模が大きく、屋敷地を囲む堀のような印象を受けた。遺物は土器小片や土製品、鉄器が出土した。**241**～**248**は早島式土器椀と呼ばれるもので、**241**～**243**・**247**は白色を、**244**～**246**・**248**は淡橙色を呈する。**241**・**242**は器壁が厚く、しっかりした高台を持つ。それ以外は器壁が薄く、高台も非常に小さいか高台のないタイプである。**249**・**250**は器壁の薄い土師器の小皿、**251**は青磁の皿、**Ｃ４**・**５**は土錘、**Ｍ３**は鉄製鍬先の側辺部である。時期は土器の特徴から14世紀以降と考えられる。（物部）



第240図　溝６・出土遺物（１/60・１/３・１/２）

溝７・８（第241・242図）

東西方向の直線的な溝７と、東西から南北方向に直角に折れ曲がる溝８である。未調査部分を挟むが、検出状況から両者は同一の溝と考えられる。溝８の北端は、溜池状遺構の南東端から２m離れている。検出時の規模は幅１～1.5m、深さ0.2～0.4mで溝８に向かって深くなる。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は同安窯系青磁皿**260**である。溝の時期は中世と考えられる。（高田）

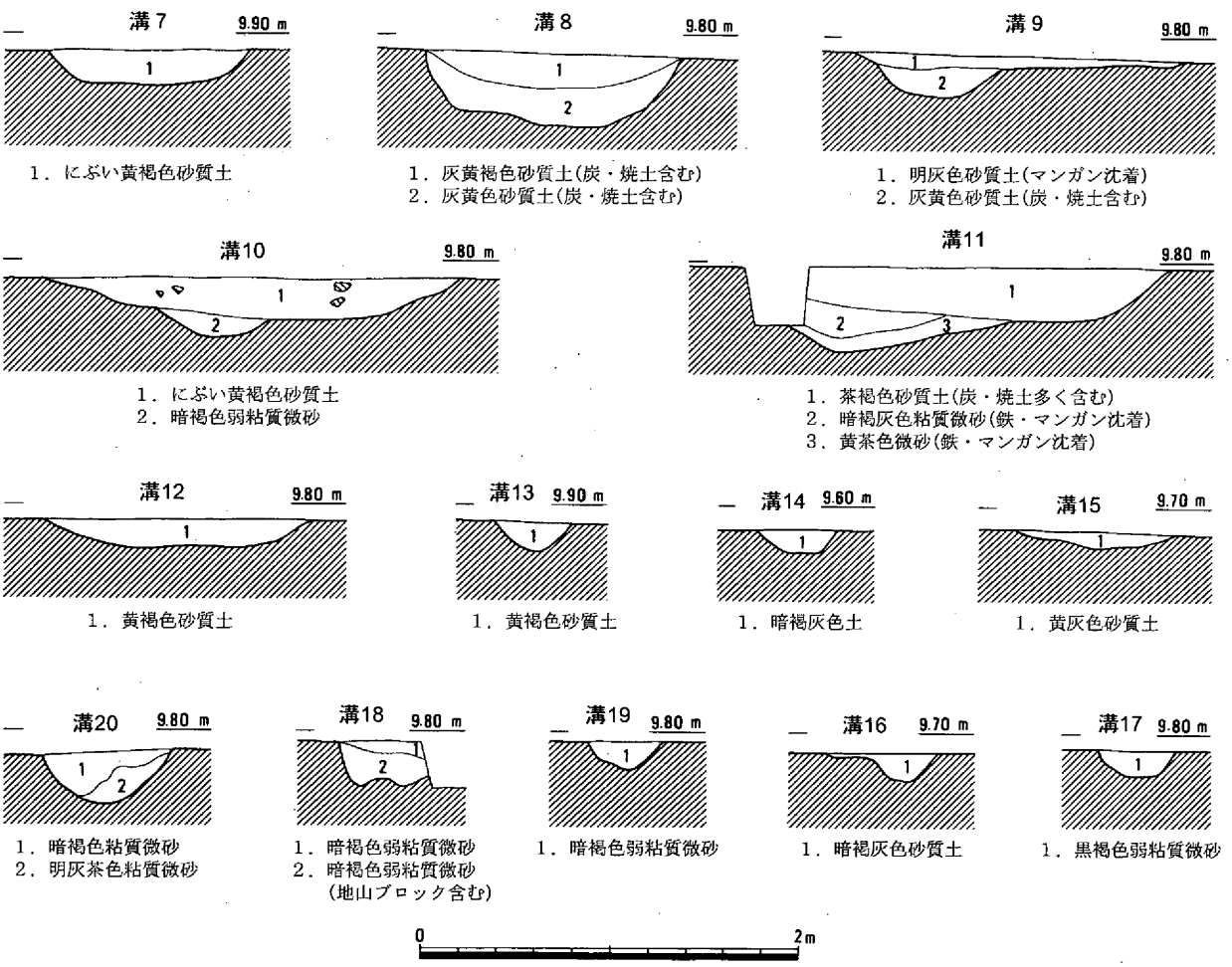
溝９（第241図）

30区南端で検出した溝で、西から東に直線的に流走する。検出時の規模は幅1.8m、深さ0.2mで、底面が二段に深くなる。出土遺物には少量の中世土師器片がある。

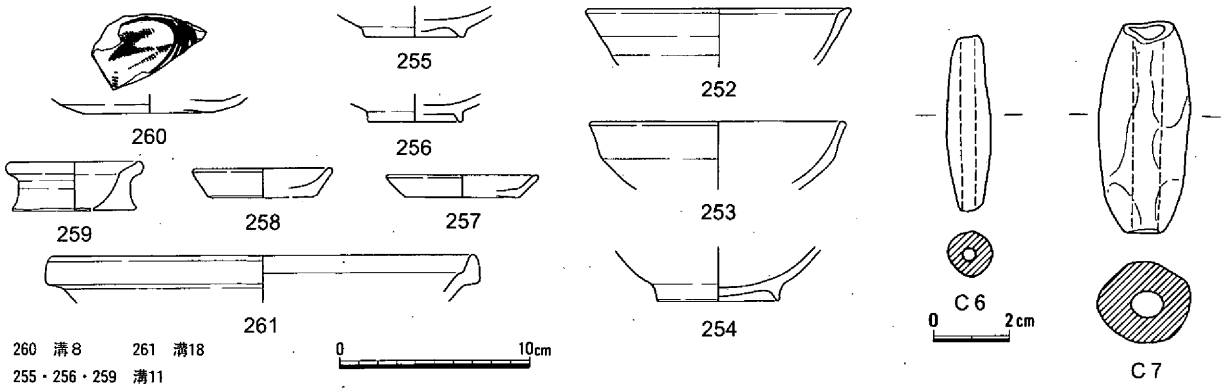
検出状況と出土遺物から、溜池状遺構の北端に接続する溝と考えられる。（高田）

溝10・11（第241・242図）

溝10は27区南端部に位置する。溝11は13区南端に位置し、その形状や方向、位置関係から同一の溝と考えられる。井手天原遺跡の所在する微高地南縁部を西北西－東南東に走る溝である。検出長12.26m、検出幅2.05～2.00m、検出面からの深さ0.30～0.21mを測る。また下部にはさらに古い時期の溝底部が検出され、２条の溝が重複している、あるいは、掘り直しが行われたと考えられる。下部の溝の検出幅1.35～0.56m、検出面からの深さ0.27～0.12mを測る。遺物は第１層から土器小片が少量出土した。**255・256**は灰白色を呈する早島式土器と呼ばれる土師器椀、**259**はにぶい黄橙色を



第241図　溝７～20（１/40）



第242図　溝７～20出土遺物（１/４・１/２）

呈する土師器の小杯である。時期は土器の特徴から13世紀前半と推定される。（物部）

溝12（第241図）

溝12は28区南半、溝10の北約22ｍに位置する。溝１・17を切っている。主軸をほぼ東西にとり、検出幅1.35ｍ、検出面からの深さ0.16ｍを測る。出土遺物は僅かであるが、黄褐色を呈する埋土からこの溝の時期は中世の範疇に入るものと推測される。（物部）

溝13（第241図）

溝13は28区中央、溝12の北約２ｍに位置する。主軸をほぼ東西にとり、検出幅0,40ｍ、検出面からの深さ0.15ｍを測る。断面は椀形を呈し、埋土は黄褐色砂質土である。遺物はほとんど無く、埋土から時期は中世と考えられる。（物部）

溝14（第241図）

16区の北東端、わずか３ｍ程を検出した直線的な溝である。検出面での溝の幅は0.65ｍ、深さは0.15ｍを測る。断面形は逆台形状を呈している。溝底のレベルから北から南へ流走していたと思われる。

時期は遺物や埋土等から中世と思われる。（小嶋）

溝15（第241・242図）

16区の北側で検出した北西から東へと流走する溝である。検出面での溝の幅は1.29ｍ、深さ９㎝を測る。遺物は土師器の椀**252～254**、土師器の小皿**257・258**などが出土している。

時期は中世に比定される。（小嶋）

溝16・17（第241図）

溝16は15区に位置し、溜池状遺構に切られている。溝17は27区から28区にかけて検出され、溝７・12に切られ、また、溝１を切っている。溝の方向や形状から両者は同一の溝と考えられる。遺物は僅かであり、時期は遺構の切りあいなどから中世前半と考えられる。（物部）

溝18（第241図）

溝18は28区北半に位置し、後述する溝19の南約１ｍの間隔をあけて併走する。土壙10・溝５に切られる。検出幅0.37ｍ、検出面からの深さ0.15ｍを測る。南南西－北北東に主軸をとる。遺物は僅かで、**261**は口縁端部が上方に拡張する東播系の鉢である。時期は14世紀と推定される。（物部）

溝19・20（第241図）

溝19は28区北半、溝20は16区南半に位置し、方向や形状から同一の溝と考えられる。また、溝16・17、溝18、溝19・20は一様に主軸を南南西－北北東にとり、埋土は暗褐～黒褐色の砂質土であるなど 性格は不明であるが、関連性があり、時期も同じ頃と考えられる。（物部）

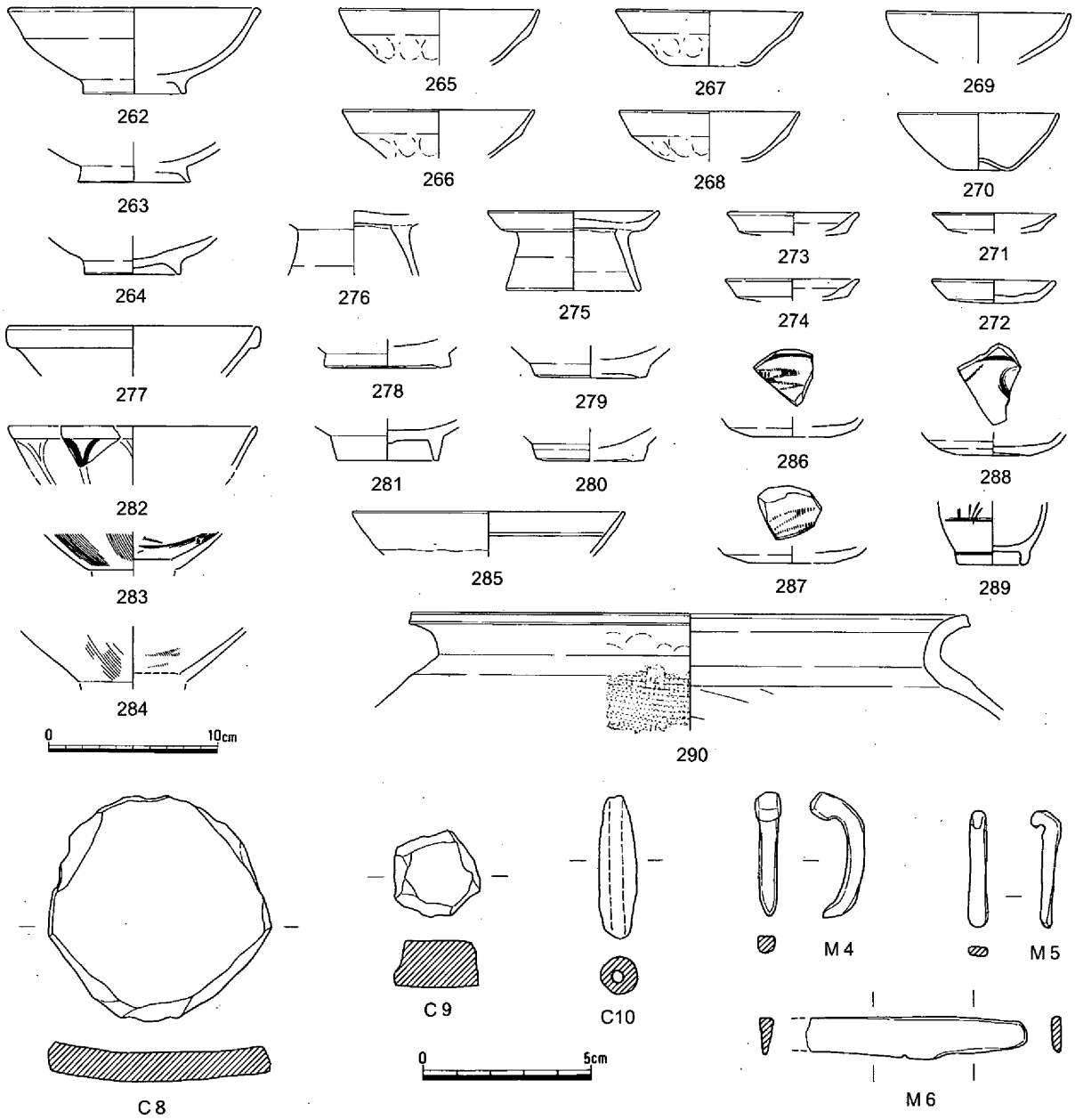
（６）遺構に伴わない遺物（第243図）

遺構を検出する段階で、中・近世に属する土器や陶磁器、土製品、金属製品が出土している。

262～270は土師器の椀である。このうち高台をもつ262～264はいわゆる早島式土器で、口径14.4cmを測り、12世紀後半に位置付けられる。また251～256は凹み底をもつへそ椀で、14世紀に属するものである。小皿には底部をヘラキリする271～274と、長い高台を貼り付ける275・276がある。

277～281は白磁の碗で、277は玉縁状の口縁部をもつ。青磁には碗282～285と皿286～288がある。碗は蓮弁文を飾る竜泉窯系の282と、内外面に櫛描き文を飾る同安窯系の283・284が見られる。これらは11世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。このほか肥前染付の徳利289や亀山焼の甕290がある。

また、土製品には須恵器片を円板状に打ち欠いた面子Ｃ８・９、紡錘形をなす土錘Ｃ10があり、金属製品は鉄釘Ｍ４・５、刀子Ｍ６が出土している。（亀山）



第243図　遺構に伴わない遺物（１/４・１/２）

第７章　まとめ

国道429号線改良に伴い、都窪郡山手村から総社市にかけて所在する７遺跡・１散布地の発掘調査を行った。これらの遺跡の立地は４種類に分けられる。１．福山・仕手倉山山塊を縦断する谷筋に面した丘陵尾根上およびその裾部、２．谷筋が北の総社平野に向けて大きく開く緩斜面部、３．作山古墳と備中国分寺の間の広い低湿地部、４．その低湿地部の北にある旧河道と幾筋もの低位部に区切られた微高地部である。１に立地する前山遺跡では弥生時代後期の集団墓地の検出や初期須恵器の出土、鎌戸原遺跡では包含層からであるが、縄文時代後・晩期～弥生時代前期の土器片や緑釉陶器、灰釉陶器、面取りされた高杯脚部などの出土が注目される。２の緩斜面に立地する岡谷大溝散布地では遺構は検出されず、遺物も僅かで、おそらく調査区の東約100ｍにある大溝川の氾濫などの影響により調査区の周辺は住居地として利用されなかったものと推定される。３の低湿地部に立地する三須今溝遺跡および４の微高地に立地する三須河原・三須畠田・井手見延・井手天原遺跡については時期を追って概観することでまとめとしたい。ただし、調査地は遺跡のほんの一部分にすぎないので、遺構に加えて出土遺物の時期や量に重点を置き、また、総社市教育委員会の発掘調査の成果をふまえ、その弱点をできるだけ補いたい。

縄文時代晩期　縄文時代晩期の土器は三須今溝遺跡から数点、井手見延遺跡の微高地部にあたる18区から１点出土した。平野部に設定した調査区で確認された最古の遺物であり、遺跡の形成がこの時期まで遡る可能性もある。

弥生時代前期　この時期の遺物も非常に少ない。微高地部では、三須畠田遺跡で頸部に２条のヘラ描沈線文の施された壺**375**が１点確認された。三須今溝遺跡では、前・Ⅱ期の溝が１条（溝１）検出された。この溝は自然流路か人工水路か判別しがたいが、低湿地の中央部に立地することから、水田耕作の排水路として機能したと考えられ、周囲に弥生前期の水田が存在する可能性もある。

弥生時代中期　中期の前半においては、三須河原・三須畠田・井手見延遺跡で土器が出土しているが、量は少ない。しかし、井手見延遺跡では住居跡は検出されなかったものの土壙３基と溝１条が確認された。これらは調査区内の微高地部で検出された最古の遺構である。中期後半になると井手見延遺跡では遺構に加え遺物もほとんどみられなくなる。逆に三須畠田遺跡ではこの段階で初めて遺構が検出され、土器も大量に出土した。土器は遺構に伴うもの以外に、弥生時代後期から古墳時代にかけてのほとんど全ての遺構埋土中に混入している状況がみられ、実際検出された遺構はそれほど多くないものの、集落として大きく発展していたと考えられる。出土土器の中には壺・甕・高杯・鉢など一般的な器種以外に内面にヘラケズリを施す大形の鉢**296**や尖底の小形の鉢**90**・**399**・**400**、回転台形土器10個体、分銅形土製品８個体、さらに、箱形土製品**C16**や鹿と推定される動物形土製品**C17**・**C18**などがみられる。回転台形土器は11区を中心に包含層や異なる時期の遺構から出土し、形態の異なる２種類がみられる。天板の直径と筒部の直径とにあまり差がないもの**412**と、筒部の直径が天板の直径の１/２前後あるいはそれ以下で、筒部が壺の口縁～頸部のような形状を呈し、上半部が大きく外方に反るもの**306**・**413**～**417**であり、後者は筒部や筒部上端および天板外縁端面に凹線文が施される。仮に前者をＡ類、後者をＢ類とする。調整は天板部上面にヘラミガキ、筒部外面はナデ・ハケメ、内面は押圧やユビナデである。時期は砂粒の少ない胎土や灰白色の色調などから弥・中・Ⅲと考えられる。岡

山県内の回転台形土器と断定し得るものは、管見の限りでは18点あり、現在のところ、その出土は県南に限られている。形態はＡ類に筒部上半部の反りが小さいものとやや大きいものがあるが、大枠にはＡ・Ｂ類の２種類がみられる。Ｂ類は山陽町門前池遺跡第２地点12号住居跡上部土器溜まり上層出土の１点のみで他は全てＡ類に属する。Ａ類の時期は、百間川兼基・百間川今谷遺跡の溝出土のものが弥・中・Ⅱ新相、津寺遺跡の住居跡出土のものが弥・中・Ⅲ、門前池遺跡第２地点予備調査土器溜まり出土のものが弥・後・Ⅰである。Ｂ類の時期は門前池遺跡のものが弥・後・Ⅰに、そして三須畠田遺跡のものが弥・中・Ⅲに比定される。このことから、現段階ではＡ類は弥・中・Ⅱ～弥・後・Ⅰ、Ｂ類は弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの時期が想定され、Ｂ類はＡ類より後出する形態と考えられるのであるが、資料の蓄積を待ちたい。

弥生時代後期前葉（弥・後・Ⅰ）　この時期、三須畠田遺跡で検出された遺構は井戸を含む土壙11基のみであり、検出範囲は８・11区の南半部に限定される。住居域はおそらく東方の調査区外に位置するものと推定される。また、出土土器の量は中期後半より、格段に減少し、集落としては前段階から存続しているけれど、やや縮小傾向にあると考えられる。それに反するように、中期後半にはまったく遺構・遺物がみられなかった井手見延遺跡では、竪穴住居３軒ほか多数の袋状土壙が検出され、この遺跡の中心を成す時期となる。また、三須河原遺跡の南に位置する美濃田遺跡はこの時期に中心をおく集落である。

弥生時代後期中葉（弥・後・Ⅱ）　調査した全ての遺跡で、ほとんど遺構・遺物がみられない。

弥生時代後期後葉～末葉（弥・後・Ⅲ～Ⅳ）　三須畠田遺跡では再び全盛を迎える。井手見延遺跡・三須河原遺跡では遺構・遺物ともに僅かである。また、この時期にいたり、井手天原遺跡で初めて竪穴住居や土壙および遺物が確認される。

古墳時代前期　前段階で多数の遺構や大量の遺物が確認された三須畠田遺跡は、竪穴住居１軒など遺構は確認されるが、包含層遺物は極端に減る。井手見延遺跡では、比較的多くの土器を包含する溝が確認されたほか、同一微高地に立地する金井戸鴻崎遺跡で竪穴住居３軒が検出されており、この時期の集落は微高地の北東部に展開しているものと思われる。前段階から集落を形成していた井手天原遺跡では、古墳時代前期になって竪穴住居が９軒確認され、遺物も格差をもって増加し、井手天原遺跡の中心時期となる。また、井手天原遺跡の北西に隣接する金井戸新田遺跡でも古墳時代初頭の竪穴住居６軒や溝１条が検出され、金井戸鴻崎遺跡から井手天原遺跡、金井戸新田遺跡にかけて、広域にわたって集落が展開していた状況がうかがわれる。なお、井手天原遺跡の竪穴住居８から椀形鍛冶滓が出土している。

古墳時代中期　井手天原遺跡では、遺構・遺物とも激減する。この時期には、遺構に伴わない遺物はほとんどみられないけれど、各遺跡ごとに竪穴住居や土壙が点在し、集落がそれぞれ微高地ごとに分散したような印象を受ける。三須畠田遺跡竪穴住居10から出土した粘土と土器の胎土でほぼ同一の分析値が得られた。土器製作に使用する粘土を自らの住居内に保管していた可能性がある。しかし、三須畠田遺跡の弥生時代中期末の粘土塊と弥生時代後期前葉の土壙13での同様の分析では胎土は一致せず、報告文にもあるように複数の粘土を混ぜて焼成粘土とした可能性以外に住居の屋根や壁に塗ったり、床に敷いたり、カマドを作ったりなど、土器製作以外の用途も考慮すべきと考えられる。

古墳時代後期　古墳時代後期においても、中期と同様な傾向がみられるが、全体的に遺構・遺物が増加する。その中で、三須畠田遺跡は遺構・遺物の増加が著しく、６世紀代の竪穴住居15軒が検出

された。６世紀前半代の５軒のうち、竪穴住居**12・13・15**は住居としては異常なほど多くの遺物を伴う。器種には須恵器蓋杯・甕・高杯・鉢・小形直口壺、土師器壺・甕・高杯・鍋・甑・羽釜、製塩土器、手捏ね土器、砥石、などがある。須恵器の蓋杯は天井部須と口縁部の境の段や口縁端部の段がしっかりし、天井部のケズリも広く施されているものから、段がはっきりせず、ケズリの幅の短いものまである。杯身においても斬移的な形態差がみられ、陶邑編年MT15からTK10への過渡的な様相を持っている。土師器羽釜**539**は菅生小学校裏山遺跡出土の５世紀前半の手捏ね土器を除くと、百間川原尾島遺跡の井戸出土５世紀末の羽釜に次ぐ時期の古いものである。また、検出された５～６世紀前半の竪穴住居の半数以上が製塩土器を伴うのに対し、６世紀後半以降の住居からは、出土遺物自体が少なくなる傾向はあるが、製塩土器がみられなくなる。逆に、鉄滓の出土は６世紀前半から増え始め、６世紀末～７世紀初頭になると竪穴住居５軒のうち、２軒で鍛冶滓、１軒で箱形炉の炉底塊が検出された。古墳時代後期Ⅲ（７世紀前半）では三須畠田・井手見延遺跡で遺構・遺物が若干みられるが、全ての遺跡で前段階に比べ遺構・遺物が減少する。

古代　全ての遺跡で遺構・遺物がみられるようになる。特に、三須河原遺跡では、総社市教育委員会の調査によって、奈良時代の棟方向を同じくする掘立柱建物群や総柱建物群が検出され、さらに「群殿」と墨書された８世紀初頭の須恵器杯身・杯蓋４点や丹塗り暗文土師器が出土するなど、窪屋郡衙の可能性が指摘されている。井手見延遺跡では、低位部から円面硯**Ｃ５**、風字硯**Ｃ６～８**が出土し、また、総社市教委が調査した金井戸鴻崎遺跡では掘立柱建物の一部や溝(SD01)から８世紀初頭から９世紀初頭の須恵器と丹塗り土師器が出土するなど、金井戸鴻崎遺跡一帯に８～９世紀にかけての官衙関連遺構が存在している可能性が高く、注目される。また、井手見延遺跡土壙９や金井戸鴻崎遺跡SD01から出土した鍛冶滓や羽口は官衙関連遺構に付随する鍛冶工房の存在を示す可能性がある。微高地端部で検出された土壙８からは須恵器杯身**212**・杯蓋**210**・**211**と土師器の甕**213**、および丹塗り土師器の皿**214**と高杯**212**がそれぞれ完形に近い状態で出土し、一括性の高い遺物として重要である。さらに、井手天原遺跡では、中～近世の溝埋土中に混入して第244図の風字硯**Ｃ11**が出土した。現在のところ、備中国府推定域から出土した唯一の官衙関連遺物といえる。また、東西に直線的に伸びる溝３・４にも留意しておく必要があると思われる。平安時代後半になると全ての遺跡で遺構・遺物がほとんどみられなくなる。

中世　全ての遺跡で遺構・遺物がみられる。平安時代末頃から鎌倉時代にかけては掘立柱建物や柱穴が多数確認されるのに対し、室町時代、特に15世紀以降は溝や畦畔が遺構の中心となり、この辺り一帯の水田化が急速に進んだことが推察される。

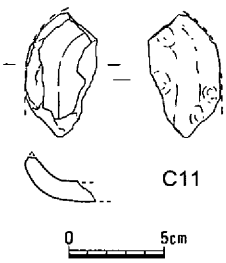
以上、おおまかに各遺跡の概要を述べたが、特に、弥生時代中期から古墳時代前期にかけては三須畠田遺跡・井手見延遺跡・井手天原遺跡の３者が中心時期をずらし、相互補完的な状況を呈するのに対し、古墳時代中期以降は遺跡ごとに分散して集落を形成をしているようにみえる。このことは沖積平野部における集落の動向を考える上で重要と思われる。しかし、部分的な調査の成果を元にしたものであり、今後の調査に負うところが大きい。　（物部）

＜主要参考文献＞

『総社市埋蔵文化財調査年報２・３・６～９』総社市教育委員会、1993・1994・1996～1999

「備中国府跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書７』総社市教育委員会、1989

『総社市史　考古資料編』総社市、1987
『岡山県埋蔵文化財報告29』岡山県教育委員会、1999
「百間川原尾島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995
「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会、1993



第244図　井手天原遺跡
出土遺物（1/4）

第１表　遺跡の変遷　※岡山県教委・総社市教委の調査成果から作成

	縄文時代	弥生時代										古墳時代								奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代
	晩期	前期			中期			後期				前期			中期		後期						
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ				
岡谷大溝散布地																							
三須今溝遺跡			溝１				溝２										溝１	溝１		溝１		溝２	
三須河原遺跡							溝１			溝１	溝２					住２		住１ 溝４		建14 土１ 溝２	建	建２	
三須皇田遺跡							住２ 土７ 溝３	土10 井１	土１	住５ 柱列１ 土７ 溝３	住３ 土２		住１			住１	住５ 土１	住18 建１ 溝１	溝２	土１ 溝１		建６ 土４ 墓４ 井１	土１ 溝３ 畦１
井手見延遺跡						土２ 溝１		住３ 袋14 土２					溝２		住１		住３	土１		建１ 土１ 溝２		建１ 墓１	池１ 溝１
井手天原遺跡											土２	土１	住６	住１		土１	住１			溝１		建３ 土２ 溝１	土１ 池１ 溝３

第２表　岡山県出土の回転台形土器一覧

番号	所在地	遺跡名	出土遺構	時期	残存状況	天板径cm	タイプ	備考	文献	刊行年
1	山陽町	門前池	第２地点予備調査土器溜まり	後期初頭	上部周辺	18	A	上面ヘラミガキ	「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告９』	1975
2	山陽町	門前池	第２地点12号住居跡上部土器溜まり上層	後期初頭	上半部	19	B	上面ヘラミガキ　上面中央は孔		
3	山陽町	門前池	第２地点12号住居跡上部土器溜まり上層	後期初頭	上部周辺	27	A	上面ヘラミガキ		
4	山陽町	惣図	第２地点第14号住居跡流入埋積土	中期後半	上半部	18	A	天板部外面ヘラミガキ内面なで	「惣図遺跡第２地点」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（４）』	1977
5	山陽町	惣図	第２地点第20号住居跡床面	中期後半	下半部		A	可能性あり		
6	山陽町	用木山	第９住居跡支群出土遊離土器	中期後半	上半部	21	A	上面径15.5~22cm、上面使用痕は不明、天板部外面ヘラミガキ、同内面上端ヘラ状工具ナデ	「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（４）』	1977
7	山陽町	用木山	第９住居跡支群出土遊離土器	中期後半	上半部	20.5	A			
8	山陽町	用木山	第10住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	15.5	A			
9	山陽町	用木山	第11住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	19	A			
10	山陽町	用木山	第11住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	19.5	A			
11	山陽町	さくら山							同　上	
12	岡山市	百間川兼基	１－溝30	百・中・Ⅱ新相	上部	24.5	A	外ハケメ、内指ナデ、上部外湾	「百間川兼基遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』	1982
13	岡山市	百間川今谷	１－溝１	百・中・Ⅱ新相	上部	20	A		「百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』	1982
14	岡山市	後池内	２区包含層	中期後半	上半部			小片	「後池内遺跡」（山陽自動車道建設に伴う発掘調査８）『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』	1994
15	岡山市	南方	土壙墓群	後期以前	上面部	20.5	A		「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110』	1996
16	岡山市	津寺	西川調査区　竪穴住居－２	中期Ⅲ	全形	27	A	上面ヘラミガキ、内外面ハケメ、上部外湾	「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』	1995
17	岡山市	津寺	竪穴住居―200	中期Ⅲ	上半部	24	A	上面ケズリのちミガキ、内面ケズリ外ハケメ	「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』	1998
18	真備町	蓮池尻	油田地区Ｔ－28	中期前半	上半部	20	A	上半部　胴部外面ヘラミガキ、打ち欠きあり	「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62』	1986

第８章　自然科学分野における分析・鑑定

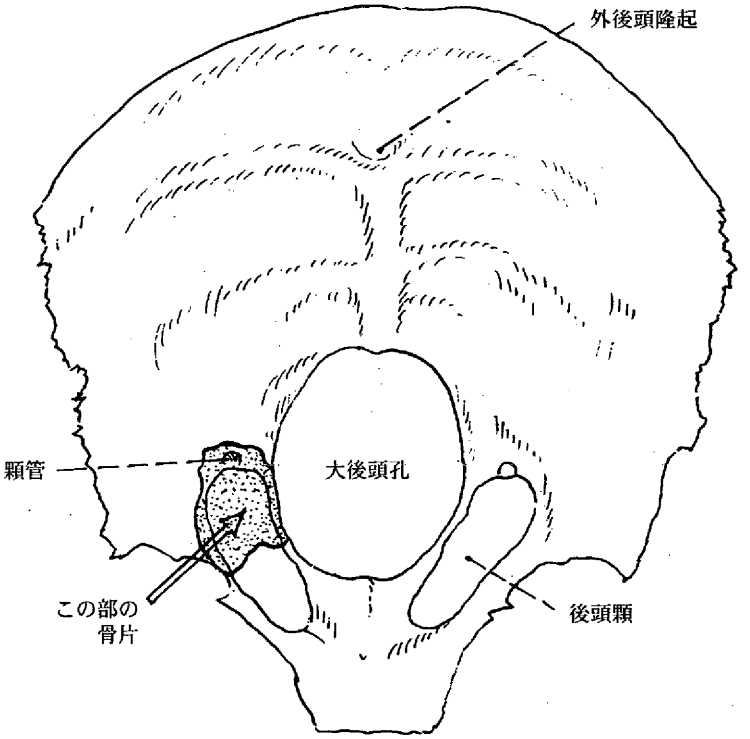
第１節　三須畠田・井手天原遺跡中世墓出土の歯の鑑別

小田嶋　梧郎

１．三須畠田遺跡４区　土壙墓２

歯冠小片３個と骨片（24×16㎜）の鑑別で、歯冠片の１個は大臼歯の歯種の判別以外は鑑別不可能である。

骨片は後頭骨の後下面で左側後頭顆上半部のものであろう（図参照）。そのほかのことはまったく不詳である。



後頭骨の後下面

２．三須畠田遺跡４区　土壙墓３

今回の検索鑑別依頼歯は、原形の欠損、咬耗など保存状態不良で、その判別に難儀した症例であったが、決め手になる特徴によって、推定できた歯の鑑別記録を記述する。

歯種、上下、順位、顎側などの判別ができたのは下表の歯列に属する７個の歯である。

右　側								左　側							
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	③	○	○	⑥	⑦	⑧
⑧	○	○	⑤	④	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

１）左上顎犬歯（|3）：歯冠幅6.8㎜（平均値7.9㎜）、歯冠厚7.8㎜（平均値8.2㎜）で、平均値より小さく、歯冠唇面の歯頸部に３本の横走する溝と横走隆線が認められる（図１）。また、舌面観で、歯冠結節および中央舌面隆線の発育は悪いが、近心舌側隆線が著明である（図２）。

歯冠の接触面の外形は、ほぼ三角形で、その底辺の歯頚線が切縁に向って軽度に凸弯するが、その高さが近心面と遠心面とで差があることから本症例は左上顎犬歯（|3）である判別の決め手となった。すなわち、遠心面の歯頚線の頂点ａ（図３）は、近心面の歯頚線の頂点ｂ（図４）よりも歯根側に近

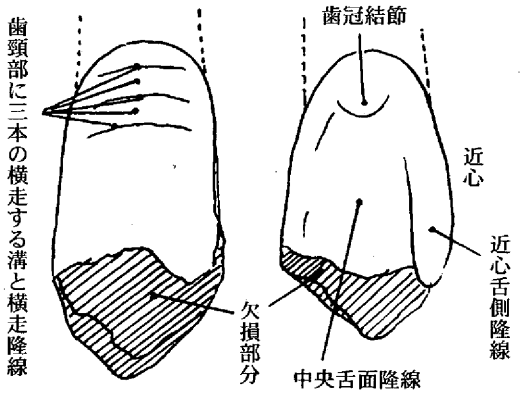


図１.唇面観　　図２.舌面観

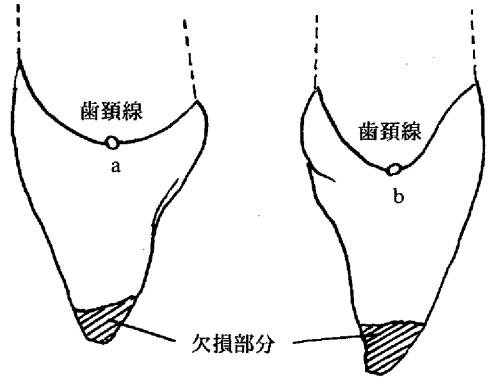


図３.遠心面の歯頚線　　図４.近心面の歯頚線

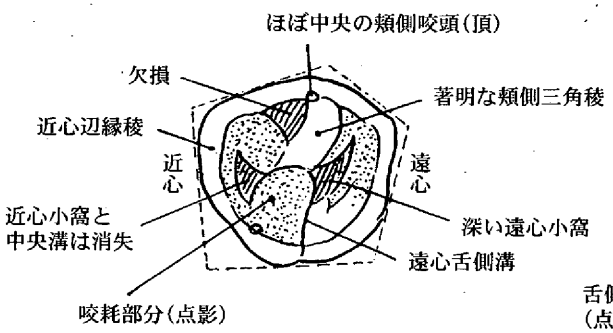


図５.右下顎第一小臼歯の咬合面観

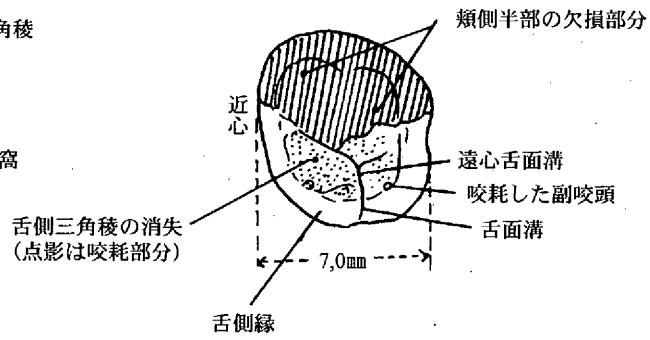


図６.右下顎第二小臼歯の咬合面観

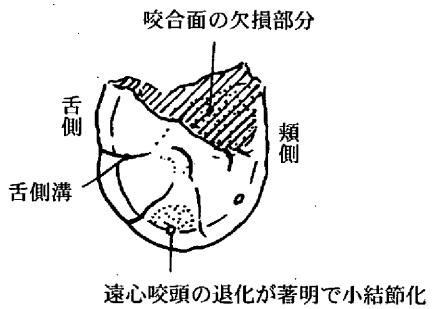


図７.右下顎第三大臼歯の咬合面観

く位置しているからである。

２）右下顎第一小臼歯（ 4| ）：２個の咬頭のうち、頬側咬頭が高く大きく突出し、その咬頭頂が頬側咬合縁のほぼ中央に位置し、咬頭頂から咬合面に向う傾斜面の中央は頬側三角稜とよぶ高い隆線状をしている。これに反し、舌側咬頭が隆線化して小さく、かつ、低くなるのに、舌側咬頭の発育が良好で、歯冠幅7.0㎜は平均値を示すが、歯冠厚6.7㎜（平均7.8㎜）は小さく華奢な形態から、恐らく女性歯で、しかも咬耗度の強いところから高齢者と推察する（図５）。更に、近心縁に沿う近心辺縁稜（辺縁隆線）と遠心縁に沿う遠心辺縁稜とは共に比較的著明で、前者が後者より短く、しかも高い位置にあることが判別の決め手になった。すなわち、下顎第一小臼歯の近・遠心側の鑑別に役立ったわけである。

３）右下顎第二小臼歯（ 5| ）：頬側半部の欠損並びに舌側半部の激しい咬耗ある症例であるが、図６に示すごとく、歯冠舌側半部に遠心舌面溝および舌面溝を認め、咬耗もあるが舌側咬頭の発育が良好で、僅かに咬耗した副咬頭の存在もうかがえる。歯冠幅7.2㎜で平均値を示すが、頬側半部の欠損がなく、歯冠厚の計測ができれば、判別は可成容易であったであろう。

４）左上顎第一大臼歯（ |6 ）、左上顎第二大臼歯（ |7 ）、左上顎第三大臼歯（ |8 ）：３本とも舌側半部の欠損した上顎大臼歯列で、歯冠幅の大きさの順、すなわち10.6㎜、9.1㎜、8.3㎜に並んでいる。歯冠頬面の外形は、咬合縁を大きな底辺とした台形をなし、歯頚線はほぼ水平にまっすぐに経過する。咬合縁は近心頬側咬頭と遠心頬側咬頭とが下方に向って突きでるので、その全体観はW字形を示す。また、近心頬側咬頭は遠心頬側咬頭より高く大きいが、上顎第三大臼歯（ |8 ）の両咬頭には咬耗がなく、他の２者は可成の咬耗を認める。４縁のなす角のうち、近心頬側隅角が鋭角をなし、遠心頬側隅角が鈍角をなす上顎大臼歯群の大きな特徴が判別の決め手となる。なお、第一大臼歯の歯冠幅の計測値は平均値を示すが、第二大臼歯および第三大臼歯はともに平均値を下まわる点から女性歯と推察した。

５）右下顎第三大臼歯（ 8| ）：近心半部の欠損、特に近心頬側部の欠損が強く、上顎歯との咬合接触による頬側縁の舌側方向への傾斜が見えないが、歯冠幅9.2㎜と小さく、遠心咬頭の退化が著明で（図７）、小結節化している点と、上顎歯との咬合臼磨運動による咬合面の咬耗が強いことなどから、右下顎第三大臼歯（ 8| ）と鑑別した。

３．井手天原遺跡27区　土壙墓

18小歯片がこまかく、特徴ある歯片の見つからないまま、鑑別不詳であった。

第２節　国道429号線改良に伴う発掘調査出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査

大　澤　正　己・鈴　木　瑞　穂

１　調査項目

①　肉眼観察　②　顕微鏡組織　③　ビッカース断面硬度　④　化学組成分析

２　調査結果

TMH－１A　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：黒色ガラス質の偏平な椀形鍛冶滓である。上面は凹面を示す。周縁部には２～３㎜径の気孔が多数認められる。下面は淡褐色の一面に鍛冶炉床粘土が付着する。

②　顕微鏡組織：Photo．１①～③に示す。①は暗黒色ガラス質滓中に微小析出物が認められる。②③は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が暗黒色ガラス質滓に晶出する。ガラス質の椀形鍛冶滓である。

TMH－１B　鍛冶滓片

①　肉眼観察：黒灰色を呈する不定形な鍛冶滓の小片である。上面は平坦気味で、下面中央の凹部は木炭痕と思われる。

②　顕微鏡組織：Photo．１④～⑥に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また僅かに微小金属鉄粒が散在する。鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo．１④に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は474Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイト（Wüstite：FeO）に同定される。

小結

井手天原遺跡竪穴住居８（４世紀後半）出土椀形鍛冶滓（TMH－１A）はガラス質滓で、鍛冶炉炉壁及び羽口の溶融物、ないしは赤熱鉄素材の表面に酸化防止粘土汁を塗布した際の派生物であろう。また、ヴスタイト（Wüstite：FeO）、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組成の鍛冶滓小片（TMH－１B）が確認できた。鍛冶原料鉄は製錬系鉄塊系遺物ではなく、不純物の少ない鉄素材が搬入され、鍛錬鍛冶工程が行われた可能性が高い。

TMH－２A　鍛冶滓片

①　肉眼観察：黒灰色を呈する鍛冶滓の小破片である。緻密で表面僅かに光沢を持つ。

②　顕微鏡組織：Photo．１⑦に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また、錆化鉄（Geothite：$\alpha-FeO \cdot OH$）が認められる。

TMH－２B　鍛冶滓片

①　肉眼観察：黒灰色を呈する鍛冶滓の小破片である。緻密だが僅かに破面に細かい気孔が認められる。

②　顕微鏡組織：Photo．２①に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot$

SiO_2)、が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また、微小金属鉄粒が散在する。

TMH－３　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：小型の椀形鍛冶滓である。全面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われている。側面１面は破面。破面中央に小さな錆膨れが認められる。

②　顕微鏡組織：Photo．２②～④に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。④は錆化鉄（Geothite：α－FeO･OH）部分である。

③　ビッカース断面硬度：Photo．２②に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は444Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450～500Hv(注1)の下限を僅かに下回るが測定時の亀裂などによる誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

TMH－４A　鉄滓片

①　肉眼観察：僅かに光沢のある黒灰色を呈する。表面は滑らかな流動状で、細かい木炭痕による凹部が２個所認められる。上面１面が破面。外観からは鍛冶滓片の可能性か高いと考えられる。

②　顕微鏡組織：Photo．２⑤～⑦に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)、白色樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なお局部的にファイヤライトの巨晶が認められる。この晶癖からは鉱石系製錬滓の可能性も考えられる。

TMH－４B　鍛冶滓片

①　肉眼観察：黒灰色で破面の光沢の顕著な鍛冶滓片である。径１㎜前後の細かい気孔が散在する。細かい木炭痕が１個所認められる。

②　顕微鏡組織：Photo．３①に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が凝集して晶出する。その粒間の淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）とガラス質滓はごく少量である。これも鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

③　ビッカース断面硬度：Photo．３①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は475Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイト（Wüstite：FeO）に同定される。

TMH－５A　鉄滓片

①　肉眼観察：表面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われた平面長方形状の試料である。錆化のためか２辺に割れている。

②　顕微鏡組織：Photo．３②に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また錆化した微小鉄粒が散在し、木炭の付着も認められる。

TMH－５B　鉄滓片

①　肉眼観察：黒灰色で僅かに光沢を持つ、表面細かい凹凸が顕著な鍛冶滓片である。

②　顕微鏡組織：Photo．３③～⑤に示す。③は木炭及び錆化鉄部分。④⑤は発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と微小白色樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。発達したファイヤライト結晶の晶出から鉱石系製錬滓の可能性も考えられる。

TMH－５C　鍛冶滓片

①　肉眼観察：無光沢で黒灰色を呈する、小型で緩やかに彎曲する板状の滓片である。

②　顕微鏡組織：Photo．３⑥に示す。微小白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が凝集気味に晶出し、その粒間に淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）も認められる。

小結

井手見延遺跡３区の６世紀前半に比定される竪穴住居５・６の出土鉄滓の分析結果、断定は難しいがTMH－４A・５Bでは発達したファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）結晶が認められ、鉱石系製錬滓である可能性もある。製錬滓とすれば鍛冶原料の鉄塊系遺物の付着滓を除去した残材であった可能性が高い。また他の試料の鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）及び小結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、ないしは小結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）単相であり、鍛冶滓といえよう。これらの派生物から鍛冶原料鉄の性格について言及することは困難であるが、地域的な特色も含めて考えると鉱石系の原料鉄であった可能性が考えられる。

TMH－６　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：平面楕円状で厚手の椀形鍛冶滓である。側面２面は破面。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われる。上面には長さ１cm程の木炭痕がまばらに見られ、下面はきれいな曲面を呈する。表面には割れが広範囲に認められる。含鉄部の錆化と風化双方の影響であろうか。

②　顕微鏡組織：Photo．４①～③に示す。①は錆化した鉄部でフェライト基地に少量のパーライトが析出する組織痕跡が残存する。組織から含有炭素量は0.2%程度の軟鋼と推定される。②③は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

④　化学組成分析：Table．２に示す。ガラス質分が高めで、脈石成分（MnO、TiO_2、V）の低減した成分系である。全鉄分（Total Fe）49.48%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.09%、酸化第１鉄（FeO）34.49%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）32.29%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）24.52%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）1.89%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.12%、バナジウム（V）＜0.01%と低値で、酸化マンガン（MnO）0.08%、銅（Cu）0.008%であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

TMH－７　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：やや不定形の小型の椀形鍛冶滓である。側面は１面のみ破面。上面には長さ１cm程の木炭痕が数個所認められる。下面は平坦気味で一部鍛冶炉炉床土が付着する。また、銀灰色で光沢のある鍛造剥片が付着している。破面には中小の気孔がやや密にみられる。

②　顕微鏡組織：Photo．４④～⑧に示す。④～⑥は付着鍛造剥片(注2)である。酸化膜の３層構造、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）が確認できる。④は内層ヴスタイトが粒状痕跡を僅かに留める。⑤⑥は内層ヴスタイトが非晶質化する。鍛打工程の後半段階の派生物である。⑦⑧は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo．４⑧に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は458Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

TMH－８　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：小型の椀形鍛冶滓片である。側面３面は破面。黄褐色の酸化土砂に覆われる。地は灰褐色でやや風化気味。細かい気孔がまばらに認められる。裏面は青灰色で光沢のある鍛造剥片が付着する。

②　顕微鏡組織：Photo.５①～⑤に示す。①は付着木炭である。②③は錆化した鉄部でフェライト基地に少量のパーライトが析出する組織痕跡が残存する。組織はやや不明瞭であるが軟鋼と推定される。④⑤は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

③　ビッカース断面硬度：Photo.５⑤に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は447Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を僅かに下回るが、測定時の亀裂による誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

小結

井手見延遺跡土壙９より出土した椀形鍛冶滓（８世紀）の分析結果、TMH－６は脈石成分の低減した成分系から鍛練鍛冶滓に分類される。またいずれの試料の鉱物組成もヴスタイト（Wüstite：FeO）、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）からなり、ヴスタイト粒内に析出物なども認められないことから、主に繰り返し折り曲げ鍛接の高温作業の鉄器製作が行われたものと推測される。なおTMH－７付着鍛造剥片２点は鍛打工程後半段階での派生物であった。鍛冶原料鉄の性格について言及することは困難であるが、地域的な特色も含めて考えると鉱石系の原料鉄であった可能性が考えられる。

TMH－９　鍛冶滓

①　肉眼観察：小型の鍛冶滓片である。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われる。地の色調は黒灰色。上面は凹面を呈している。木炭痕であろうか。

②　顕微鏡組織：Photo.５⑥～⑧に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

③　ビッカース断面硬度：Photo.５⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は426Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限をやや下回るが、測定時の亀裂などによる誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

TMH－10　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：椀形鍛冶滓の破片である。側面４面は破面。上面には小さな錆膨れがあり、錆化割れも認められる。表面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われる。滓の地は黒灰色で表面が風化気味である。

②　顕微鏡組織：Photo.６①～③に示す。①③は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛冶滓の晶癖である。②には錆化した鉄部を示す。不明瞭であるがパーライト痕跡が認められる。

③　ビッカース断面硬度：Photo.６③に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は463Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

④　化学組成分析：Table.２に示す。ガラス分が高く脈石成分低めの成分系である。全鉄分（Total Fe）50.33%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.11%、酸化第１鉄（FeO）45.27%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）21.49%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）28.31%で、このうちに塩基性成分（$CaO+MgO$）2.80%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン

（TiO_2）0.18%、バナジウム（V）<0.01%と低値で、酸化マンガン（MnO）0.24%、銅（Cu）は0.028%とやや高値であった。鉱石系の鍛冶滓の成分系といえる。

TMH－11　製錬滓（炉内滓）

①　肉眼観察：箱形炉の炉壁内面に沿って生成したガラス質滓主体の炉内滓である。側面４面は破面。１面には炉壁胎土が僅かに付着する。上面は黒色ガラス質滓で被熱を受けた石英粒が多数認められる。また、長さ３cm程の大型の木炭痕が残る。下面側は暗灰色の滓部で径１mm程の気孔が認められる。

②　顕微鏡組織：Photo．６④～⑧に示す。④は暗黒色ガラス質滓中の微小析出物である。⑤～⑧淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、白色多角形結晶マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鉱石系製錬滓の晶癖である。

④　化学組成分析：Table．２に示す。鉄分低く、ガラス質分の高い成分系である。全鉄分（Total Fe）11.58%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.14%、酸化第１鉄（FeO）3.69%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）12.26%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）82.72%で、このうちに塩基性成分（$CaO+MgO$）3.94%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（$TiO_2$）0.25%、バナジウム（V）<0.01%と低値で、酸化マンガン（MnO）0.25%、銅（Cu）0.005%であった。

小結

三須畠田遺跡竪穴住居18（６世紀末～７世紀初）より出土したTMH－11製錬滓（炉内滓）は炉壁に接して形成された炉壁溶融ガラス質滓主体の試料であった。また、鉱石系製錬滓であることが明らかになった。炉壁側に生成した鉄塊を割り取った後の残材であろうか。

TMH－９･10の鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）からなり鍛冶滓に分類される。また、TMH－10は化学組成から鉱石を原料とした鉄素材を用いた鍛冶作業での派生物である可能性が考えられる。

３　まとめ

井手天原・井手見延・三須畠田の各遺跡は共に沖積平野の自然堤防に立地した弥生時代から中世へかけての集落遺跡である。この地区の出土鉄滓を通して鉄生産の展開をみてみると、(i) ４世紀後半代は外来製の鉄素材を原料とした鍛冶加工（鍛錬鍛冶）に始まる。(ii) ６世紀前半になると当地域での鉱石製錬の鉄生産が開始され、鍛冶加工までの鉄・鉄器生産の全工程が地域内に出そろった可能性を持つ。(iii) この体制は７世紀初頭から８世紀代にかけて継続される。

以上、県北津山方面でみられる鉄生産開始・展開(注３)に類似した様相が読み取れた。

注

（1）　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968　当刊行物にはヴスタイトの硬度値は450～500Hv、マグネタイト500～600Hv、ファイヤライトが600～700Hvとある。

（2）　鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）の３層から構成される。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

（３）　大澤正己「大開古墳群・大開遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集　津山市教育委員会　1994

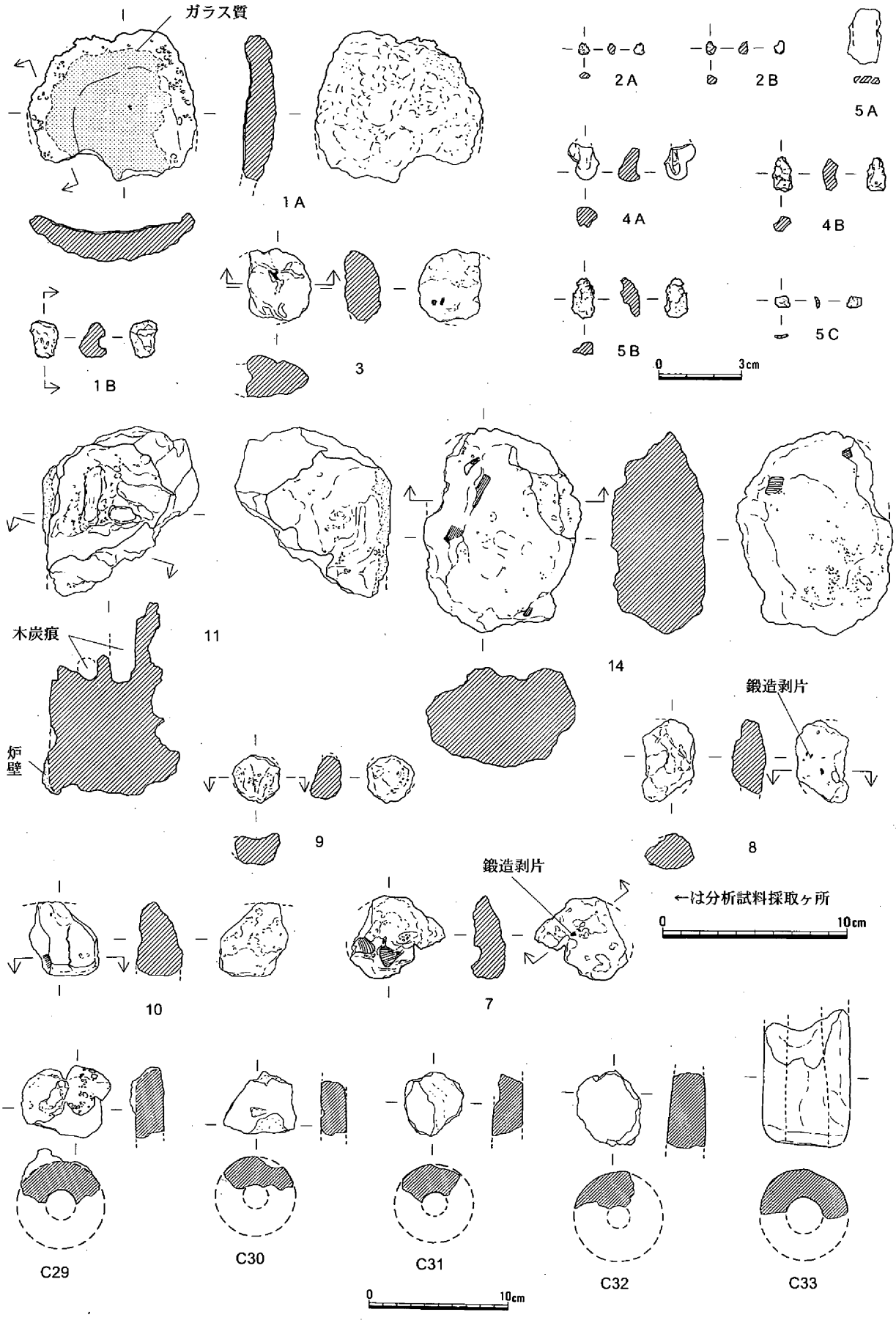


図１　分析鉄滓及び井手見延遺跡土壙９・周辺出土羽口（１/４・１/３・１/２）

Table．1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	鑑定No.	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
						大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	カロリー	
TMH-1A	井手天原	竪穴住居８埋土下層	1	椀形鍛冶滓(ガラス質)	4c後半	78×89×15	93.98	なし		○							A・B同一試料に埋め込み
TMH-1B	井手天原	竪穴住居８Ⅰ区	2	鍛冶滓	4c後半	20×15×14	4.32	なし		○	○						A・B同一試料に埋め込み
TMH-2A	井手見延	竪穴住居５床面	3	鍛冶滓片	6c前半	4×4×2.5	0.05	なし		○							
TMH-2B	井手見延	竪穴住居５床面	4	鍛冶滓片	6c前半	5×3×3.5	0.05	なし		○							
TMH-3	井手見延	竪穴住居６埋土	172	椀形鍛冶滓	6c前半	38×33×22	32.95	なし		○	○						
TMH-4A	井手見延	竪穴住居６床面(E-3)	71	鉄滓片	6c前半	12×9×7	1.18	なし		○							A・B同一試料に埋め込み
TMH-4B	井手見延	竪穴住居６床面(I-4)	151	鉄滓片	6c前半	12×7×5	0.83	錆化(△)		○	○						
TMH-5A	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	76	鉄片	6c前半	18×8×2	1.92	なし		○							A・B・C同一試料に埋め込み
TMH-5B	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	77	鉄滓片	6c前半	15×9×7	0.47	なし		○							
TMH-5C	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	93	鉄滓片	6c前半	5×4×1	0.03	なし		○							
TMH-6	井手見延	土壙９	252	椀形鍛冶滓（含鉄）	8ｃ	110×82×52	569.39	H（○）		○				○			
TMH-7	井手見延	土壙９	275	椀形鍛冶滓	8ｃ	46×45×18	37.10	なし		○	○						
TMH-8	井手見延	土壙９	306	鍛冶滓(鍛造剥片付着)	8ｃ	44×28×18	18.35	なし		○	○						
TMH-9	三須畠田	竪穴住居17	210	鍛冶滓	6c末～7c初	25×24×14	17.62	なし		○	○						
TMH-10	三須畠田	竪穴住居16	249	椀形鍛冶滓	6c末～7c初	40×36×25	46.22	なし		○	○			○			
TMH-11	三須畠田	竪穴住居18	251	製錬滓（炉内滓）	6c末～7c初	83×79×113	647.2	なし		○				○			

Table．2　供試材の化学組成

符号	遺跡名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第１鉄 (FeO)	酸化第２鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
TMH-6	井手見延	椀形鍛冶滓(含鉄)	8ｃ	49.48	0.09	34.49	32.29	17.61	3.82	1.42	0.47	0.72	0.48	0.08	0.12	0.03	0.02	0.50	0.23	<0.01	0.008	24.52	0.496	0.002	
TMH-10	三須畠田	椀形鍛冶滓	6c末～7c初	50.33	0.11	45.27	21.49	19.45	4.66	2.11	0.69	1.03	0.37	0.24	0.18	0.03	0.10	0.30	0.11	<0.01	0.028	28.31	0.562	0.004	
TMH-11	三須畠田	製錬滓（炉内滓）	6c末～7c初	11.58	0.14	3.69	12.26	64.54	9.41	3.46	0.48	3.82	1.01	0.25	0.25	0.05	<0.01	0.17	0.07	<0.01	0.005	82.72	7.143	0.022	

Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
TMH-1A	井手天原	竪穴住居８埋土下層	椀形鍛冶滓(ガラス質)	4c後半	暗黒色ガラス質スラグ、ファイヤライト	−	−	−	−	−	−	−	−	ガラス質主体の鍛練鍛冶滓
TMH-1B	井手天原	竪穴住居８Ｉ区	鍛冶滓	4c後半	ヴスタイト＋ファイヤライト、金属鉄粒	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓
TMH-2A	井手見延	竪穴住居５床面	鍛冶滓片	6c前半	ヴスタイト、錆化鉄	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓
TMH-2B	井手見延	竪穴住居５床面	鍛冶滓片	6c前半	ファイヤライト、金属鉄粒	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓(錆化鉄：フェライト分散)
TMH-3	井手見延	竪穴住居６埋土	椀形鍛冶滓	6c前半	ヴスタイト＋ファイヤライト、金属鉄粒	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓
TMH-4A	井手見延	竪穴住居６床面(E-3)	鉄滓片	6c前半	ヴスタイト＋ファイヤライト	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓、製錬滓の可能性も僅かにあり(小割り残材)
TMH-4B	井手見延	竪穴住居６床面(I-4)	鉄滓片	6c前半	ヴスタイト凝集	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛練鍛冶滓
TMH-5A	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	鉄片	6c前半	ファイヤライト、木炭、金属鉄粒(錆化)	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓
TMH-5B	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	鉄滓片	6c前半	ファイヤライト＋ヴスタイト、木炭、金属鉄粒(錆化)	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓、製錬滓の可能性も僅かにあり(小割り残材)
TMH-5C	井手見延	竪穴住居６床面(E-4)	鉄滓片	6c前半	微小ヴスタイト凝集	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛練鍛冶滓
TMH-6	井手見延	土壙９	椀形鍛冶滓(含鉄)	8ｃ	ヴスタイト＋ファイヤライト、錆化鉄(パーライト痕跡あり)	49.48	32.29	1.89	0.12	<0.01	0.08	24.52	0.008	鉱石系鍛練鍛冶滓、錆化鉄は軟鋼
TMH-7	井手見延	土壙９	椀形鍛冶滓	8ｃ	ヴスタイト＋ファイヤライト、付着鍛造剥片(３層分離型・内層ヴスタイト非晶質)	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓、付着鍛造剥片は鍛打後半段階の派生物
TMH-8	井手見延	土壙９	鍛冶滓(鍛造剥片付着)	8ｃ	ヴスタイト＋ファイヤライト、錆化鉄(パーライト痕跡あり)、木炭に鉄置換	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓、錆化鉄は軟鋼
TMH-9	三須畠田	竪穴住居17	鍛冶滓	6c末～7c初	ヴスタイト＋ファイヤライト	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶滓
TMH-10	三須畠田	竪穴住居16	椀形鍛冶滓	6c末～7c初	ヴスタイト＋ファイヤライト、錆化鉄	50.33	21.49	2.80	0.18	<0.01	0.24	28.31	0.028	鍛冶滓
TMH-11	三須畠田	竪穴住居18	製錬滓（炉内滓）	6c末～7c初	暗黒色ガラス質スラグ、ファイヤライト、マグネタイト	11.58	12.26	3.94	0.25	<0.01	0.25	82.72	0.005	鉱石系製錬滓(ガラス質主体)、炉壁溶融物

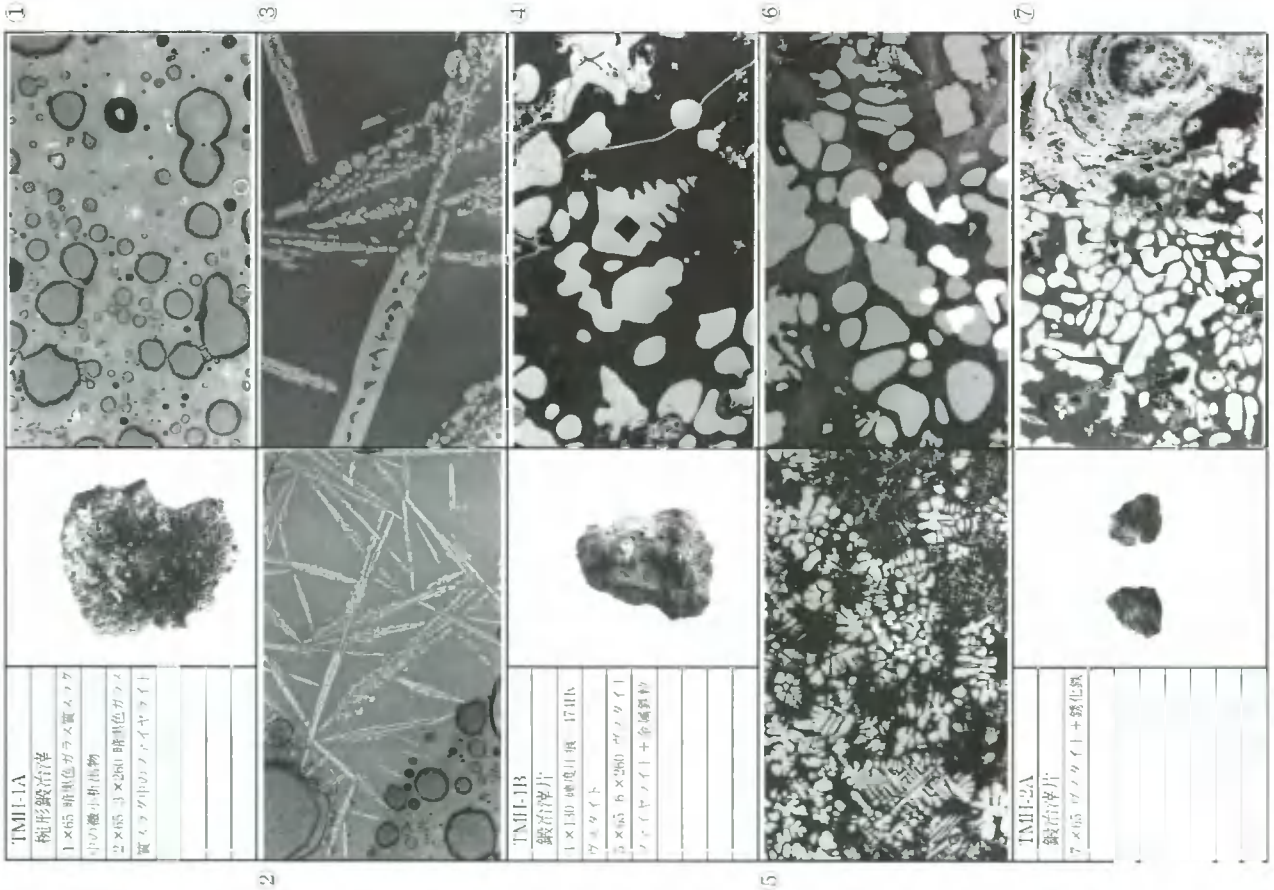


Photo.1　椀形鍛冶滓・鍛冶滓片の顕微鏡組織

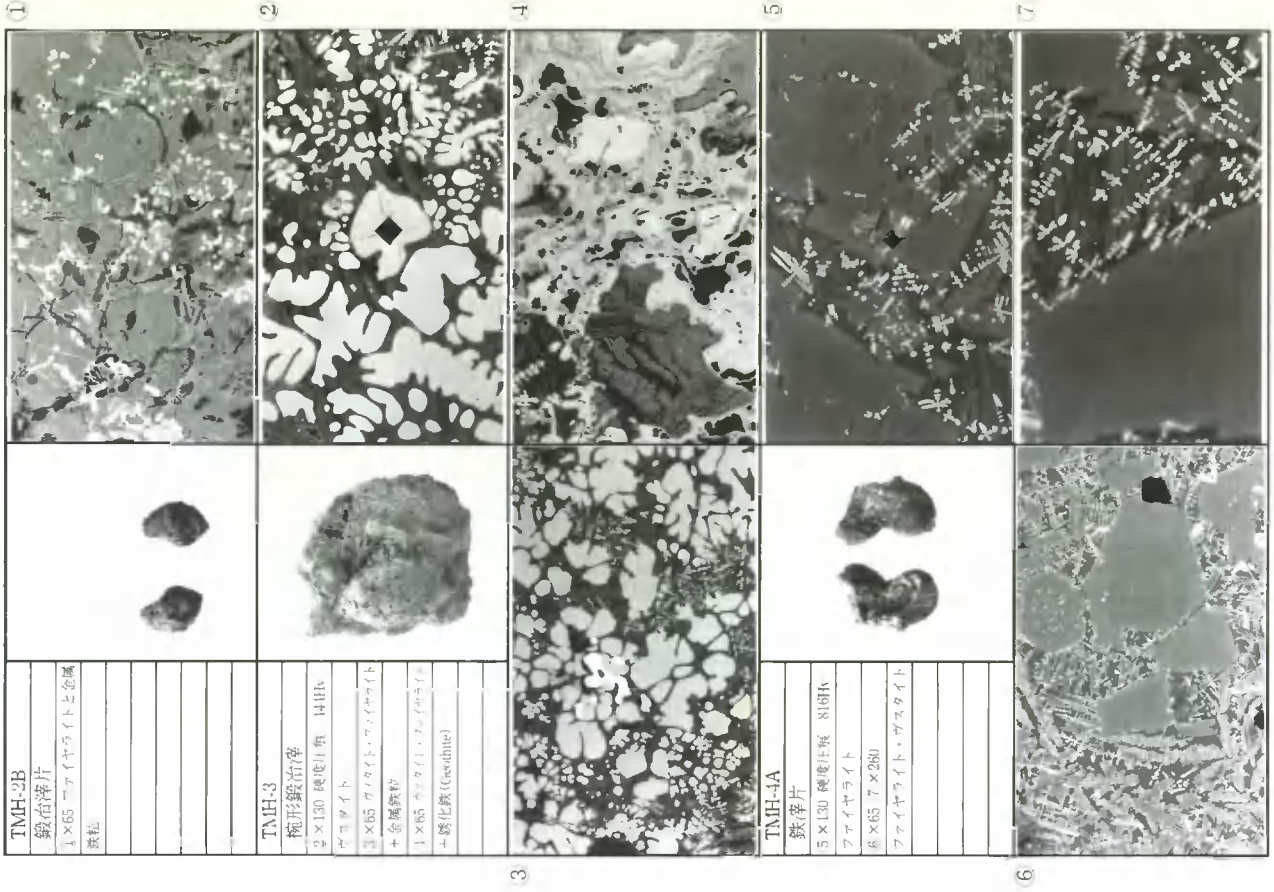


Photo.2　鍛冶滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

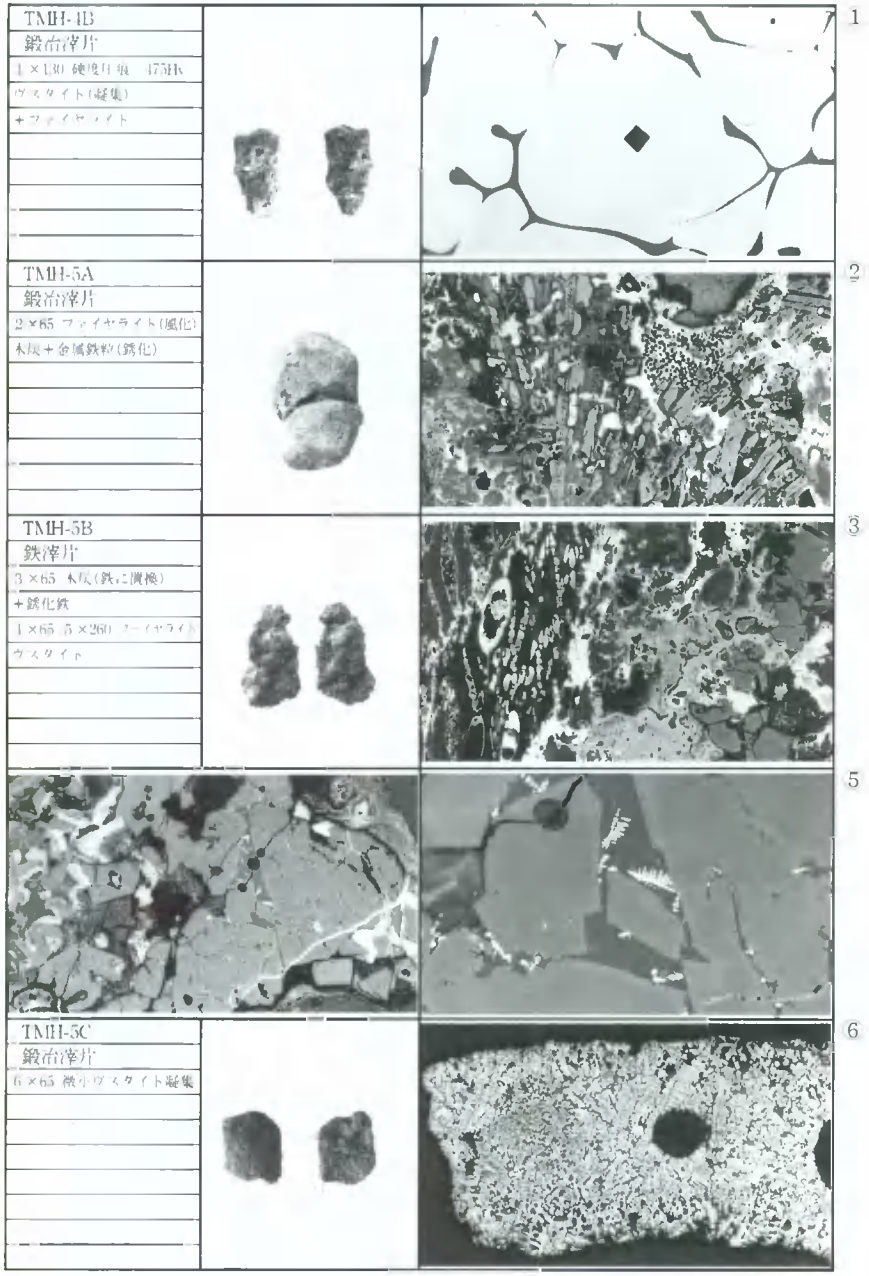


Photo.3　鍛冶滓片の顕微鏡組織

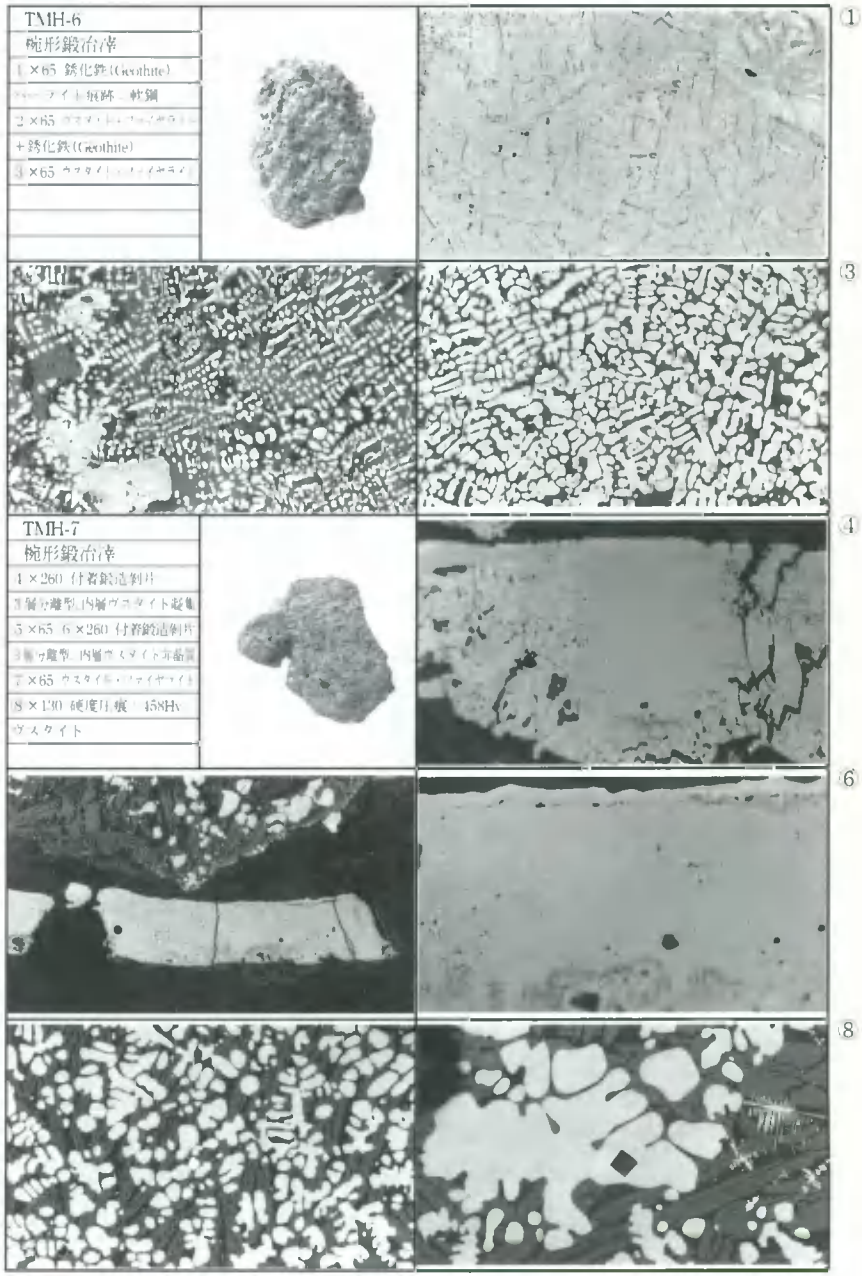


Photo.4　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

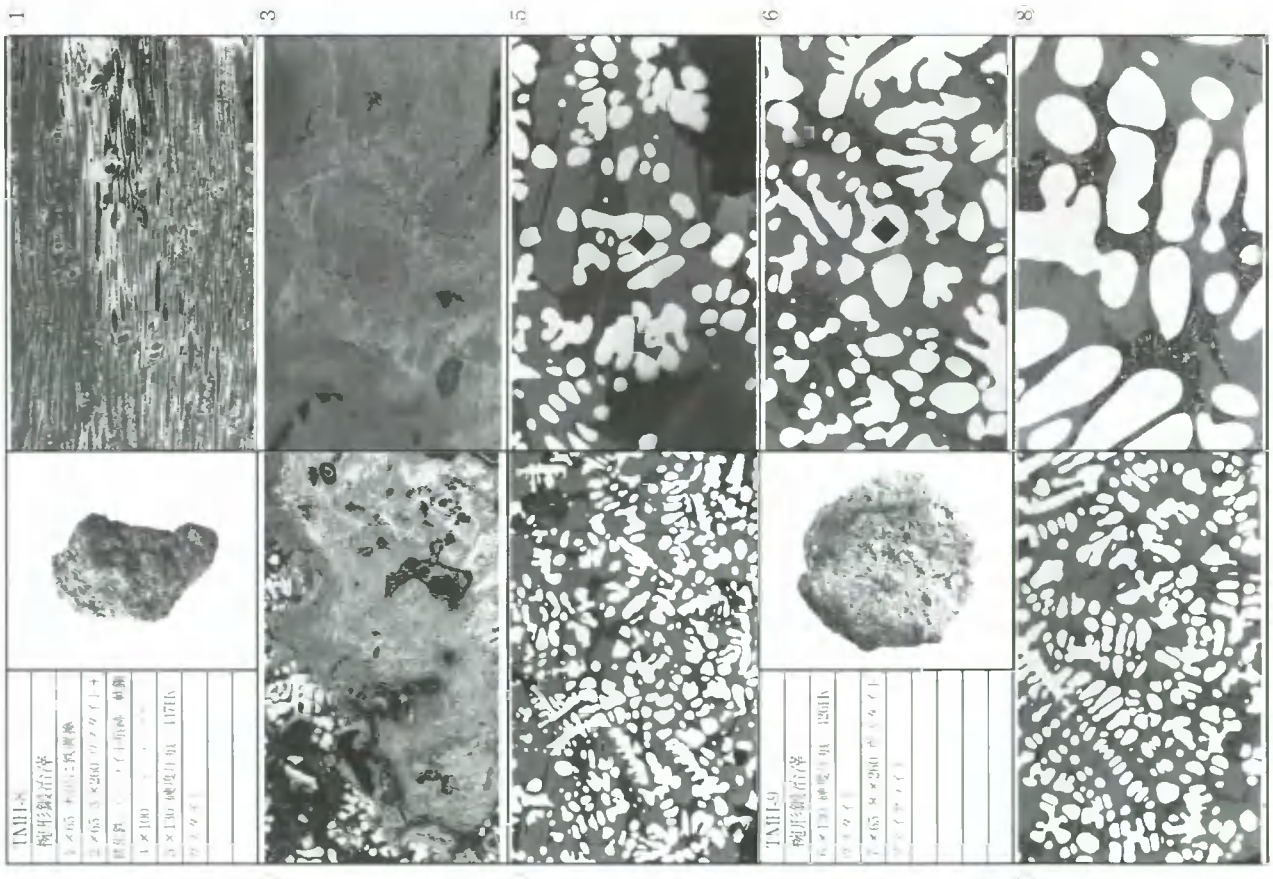


Photo.5　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

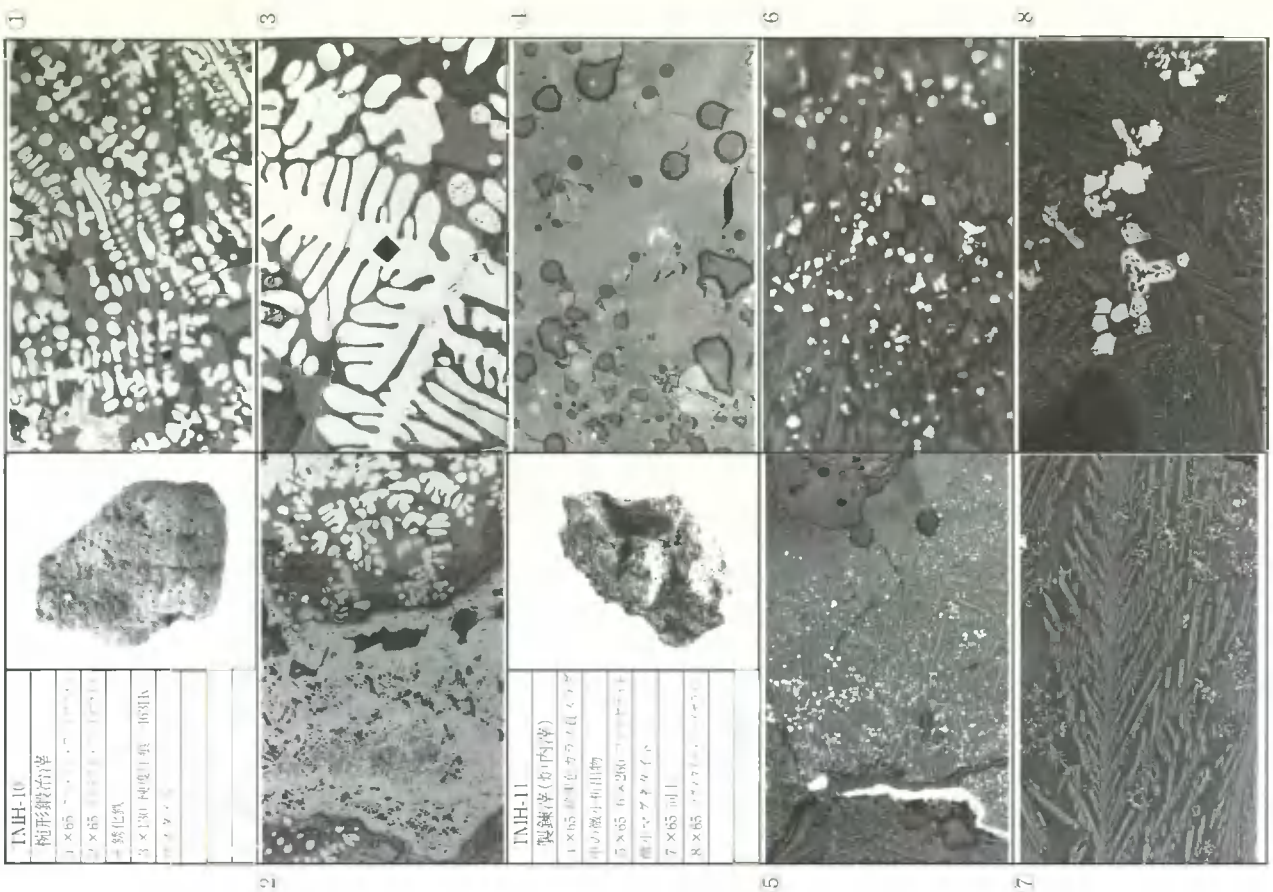


Photo.6　椀形鍛冶滓・製錬滓の顕微鏡組織

第３節　三須畠田遺跡出土の白色粘土および土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白　石　　純

１．分析の目的

この分析では、三須畠田遺跡出土の弥生中期末、後期前葉、５世紀中頃の時期の白色粘土を分析し、それぞれの粘土に伴う土器との差異および時期の異なる粘土の間での差異について検討した。

２．分析方法および結果

分析は蛍光Ｘ線分析装置を使用し、測定方法・条件などは現在まで行っている方法である(1)。

測定元素は、第１表に示したK_2O・Fe_2O_3・SiO_2・TiO_2・Al_2O_3・CaO・Sr・Rbの８元素である。このうち第１表から各粘土・土器の分析値に顕著に差異が見られるのはK_2O・CaO・Sr・Rbの４元素である。そこで、これらの元素からCaO/K_2O比、Sr/Rb比をとりXY散布図で検討した。

この結果、第１図CaO/K_2O－Sr/Rbの散布図から各時期の粘土の間での比較では明らかに識別が可能であった。ただ、各遺構の粘土を４点ずつ分析したが、この４点の選び方は一つの塊の粘土から無作為に抽出したものであるが、一塊の粘土でも分析値にばらつきがみられることがわかった。

また、これら粘土に伴う土器との比較では、弥生中期末の粘土と同時期の土器（試料番号２・３・４）の間で明確に識別でき、分析値が一致しなかった。弥生後期前葉の粘土と土器（試料番号６・７・８）の間でも同様の結果となった。５世紀中頃の粘土と土器（試料番号10）の間では、ほぼ分析値が一致し、分析値的には、同一の粘土と推定される。

以上のように、時期ごとの粘土と土器の比較では５世紀中頃の粘土と土器がほぼ同一の分析値と考えられる以外は、粘土と土器が重ならず一致しなかった。このことは、複数の粘土を混ぜて焼成粘土としたことが十分示唆される分析結果となった。

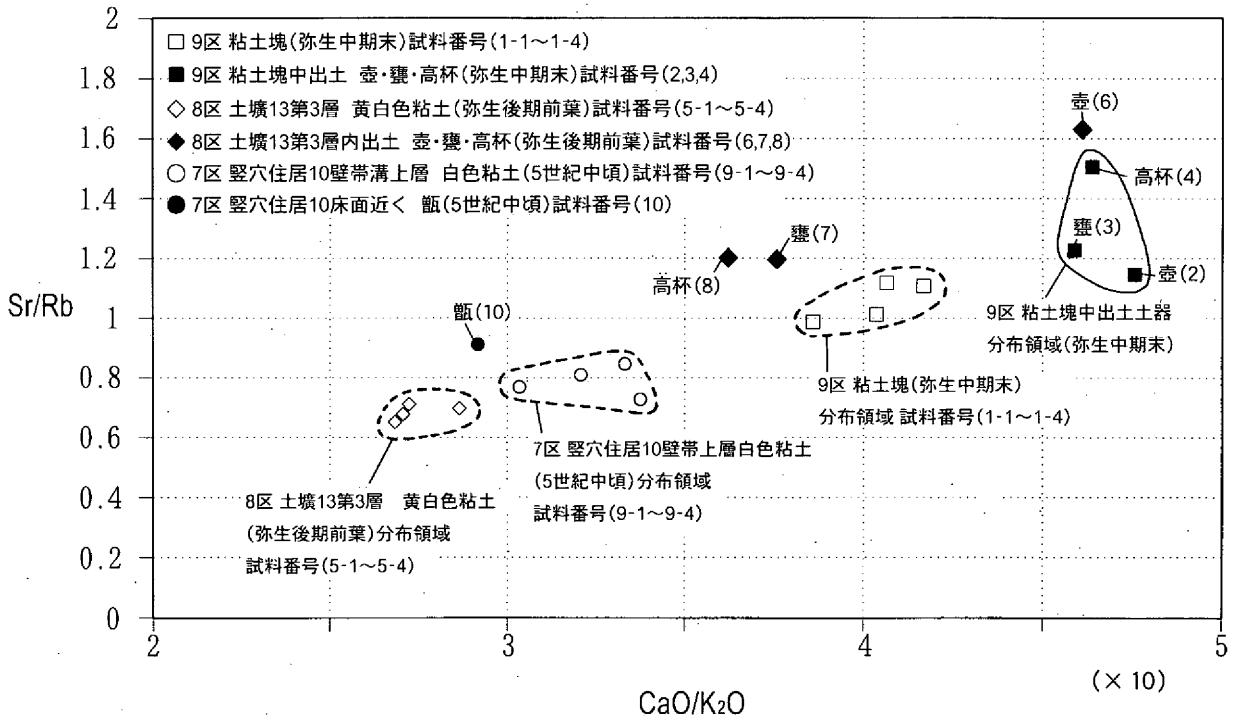
註

(1)白石　純1986「蛍光Ｘ線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」『蒜山研究所研究報告第12号』岡山理科大学 pp.43-54

ただし、Sr,Rbはppm.

試料番号	出　土　地　点	器種(掲載番号)	時　　期	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	Sr	Rb
1－1	9区　粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.48	4.52	58.48	0.85	21.68	0.96	137	138
1－2	9区　粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.61	5.12	53.86	0.84	21.01	1.09	155	140
1－3	9区　粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.64	4.85	64.03	0.88	22.81	1.07	147	132
1－4	9区　粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.64	4.81	63.50	0.89	22.07	1.06	147	146
2	9区　粘土塊中	壺(362)	弥生中期末	2.31	4.05	60.88	0.70	20.29	1.10	150	131
3	9区　粘土塊中	甕(366)	弥生中期末	2.40	4.11	60.34	0.86	19.18	1.10	149	121
4	9区　粘土塊中	高杯(369)	弥生中期末	2.32	3.86	61.53	0.84	20.20	1.08	171	113
5－1	8区　土壙13第３層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.35	4.48	60.64	0.74	20.28	0.64	96	135
5－2	8区　土壙13第３層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.27	4.28	63.68	0.70	18.82	0.61	88	136
5－3	8区　土壙13第３層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.52	4.65	67.28	0.73	20.77	0.72	103	148
5－4	8区　土壙13第３層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.46	4.61	66.02	0.76	21.94	0.67	96	143
6	8区　土壙13第３層	壺(180)	弥生後期前葉	2.26	5.60	62.22	0.71	18.84	1.04	176	107
7	8区　土壙13第３層	甕	弥生後期前葉	1.86	4.02	66.59	0.67	18.13	0.70	121	100
8	8区　土壙13第３層	高杯	弥生後期前葉	2.66	5.59	63.61	0.57	18.33	0.96	173	143
9－1	7区　竪穴住居10壁帯溝上層	白色粘土	５世紀中頃	3.05	6.01	58.71	0.71	20.05	0.98	117	144
9－2	7区　竪穴住居10壁帯溝上層	白色粘土	５世紀中頃	2.97	5.38	59.05	0.71	19.77	0.99	126	149
9－3	7区　竪穴住居10壁帯溝上層	白色粘土	５世紀中頃	3.15	5.24	63.52	0.70	20.71	0.96	119	155
9－4	7区　竪穴住居10壁帯溝上層	白色粘土	５世紀中頃	3.03	6.27	62.13	0.72	21.69	1.02	112	155
10	7区　竪穴住居10床面近く	甑(429)	５世紀中頃	2.89	3.41	61.35	0.60	21.13	0.84	140	156

第１表　三須畠田遺跡出土土器および粘土の胎土分析表（%）



第１図　CaO/K_2O－Sr/Rb散布図　三須畠田遺跡出土粘土・土器の比較

第４節　井手天原遺跡出土動物遺存体

岡山理科大学理学部　富　岡　直　人

（１）　出土状況

井手天原遺跡は岡山県総社市井手に所在し、平坦な沖積面に形成された弥生時代から中世の複合遺跡である。中世後半から近世に属する溝より、本報告の分析対象である室町時代から江戸時代前半に属する動物遺存体群が検出された。この遺構は、溜池状遺構の南々東隅に形成された突起状のプランを持つ東西幅1.5m×南北長８mの広がりの溝である。南側は閉塞し、北側は溜池状遺構に開口している。同定された動物遺存体は全てウシ、ウマであった。遺存体群は任意に上部・中部・下部に分類して発掘されているが、一時期にまとまって廃棄された集合と考えられる。いずれも風化が激しく、一部はビビアナイト（藍鉄鉱〔Vivianite：$Fe_3P_2O_8 \cdot 8H_2O$〕）を析出し脆弱化している。

（２）出土動物遺存体の概要

第１表　井手天原遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	Vertebrata
哺乳綱	Mammalia
ウシ目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	*Bos taurus domesticus* Gmelin
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	*Equus caballus* Linnaeus

ウシ　　*Bos taurus domesticus* Gmelin

いわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシの遺存体が多量に出土した（図版１、２-１、３-１）。本遺跡では最も出土量が多い種である。

出土部位は下顎骨、上顎臼歯、第１頸椎、肩甲骨、橈骨、尺骨、脛骨、手根骨、果骨、中手骨、中足骨、距骨、踵骨、基節骨、中節骨、末節骨、肋骨である。出土量が最も多かった部位は下顎骨であるが、それに比べて上顎骨等を含む頭蓋骨の出土量は少ない。

咬合面が観察された左下顎骨（(12)付近③）は小窩連結状態で、前・後臼歯列歯槽最大長122.90㎜であった。第４前臼歯の萌出状況から2.5～３歳以上と考えられるが、咬耗から推定するとそれ以上の老齢であることが明らかである。この下顎骨には解体や火を受けた破損痕跡はみられず、意図的に解体処理されたのかは明確ではなかった。

また、右橈骨（No.２①）が出土した。本資料は遠位端を失っている。遠位端破損面には一部切創がみられるが、破断面の大半は粗面で、風化後に破損した状況を示している。前位には斜方向に鋭利な刃物による切創が６条観察される。このような傷は皮を剥ぎとるのみであれば残らないことから、筋肉の切断と削ぎ落としが行われたと考えられる。食用として解体された可能性が高いであろう。

さらに、出土地点の不明の資料（No.13）は右脛骨骨幹部であった。本資料は近位端と遠位端を失っている。破断面は全て風化後に破損した状況を示している。外側位に鋭い切創が観察される。最大の切創は深さ2.3㎜に達している。左下顎骨（(21)①：図版３－２）の舌側には切創があり、頭部が解体されたことがうかがわれる。その他の切創例やスパイラル割れ（SP）は、図版３、５－２・３・４に示した。

ウマ　　*Equus caballus* Linnaeus

出土試料は全て小型のウマ遺存体であった（図版１－１、２－２）。出土部位は下顎骨、上顎骨、第２頸椎、大腿骨、脛骨、中手骨、中足骨、距骨、踵骨、基節骨、中節骨、末節骨、肋骨である。出土量が最も多かった部位は下顎骨であるが、それに比べて上顎骨等を含む頭蓋骨の出土量が少ない。

咬合面が観察された左右下顎骨（(10)①:図版２－２－２）は小窩連結状態で、後臼歯列歯槽最大長81.82㎜であった。臼歯の萌出状況から3.5～４歳以上と考えられるが、咬耗から推定するとそれ以上の老齢であることが明らかである。この下顎骨には解体や火を受けた破損痕跡はみられず、ネズミの齧痕がみられた。本資料は意図的に解体処理されたのかは明白ではなかったものの、右下顎骨（(12)付近⑭）には右外側位に切創があり、頭部が解体されたことがうかがわれる。

また、左大腿骨（(16)⑫:図版２－２－４、４－１）が出土した。近位端回転子には関節を分離した切創がみられる。これは体部から後肢を分離するために残された痕跡と考えられる。その他も切創例は図版２－２、４－１・２・４・５、５－１に示した。

（３）井手天原遺跡におけるウマ・ウシ遺存体集積遺構の解釈と意義

井手天原遺跡からは、中世のウマ、ウシが溝から多量に集積された状態で検出された。岡山県内で発見された同種の遺跡のなかでも、高密度に遺存体が検出された例である。

これらの包含状況は、一括性が高いこと、後述するように人間以外の原因による損壊が少ないことから、意図的に廃棄された遺存体のまとまりで、遺跡内あるいは付近で屠殺・解体され、部位ごとに関節あるいはその付近で分離された後、この地点に運搬され、比較的早い段階で埋存したものと考えられる。

出土状況を検討すると、骨格の配置の方向には明確な法則性はみられないものの、接合資料の一括性が高く、約80cm程度の深度と約２ｍ長、幅約１ｍの範囲に意図的に集積され埋存したものと考えられる。また、発掘時や遺存体処理時に土壌を詳細に検討したが、溝中で遺存体が流された痕跡は看取されなかった。

出土部位を検討してみると四肢骨に比較して頭部、特に下顎骨が多いという状況がみられ、金子(1996)が指摘するように、骨になった頭蓋および下顎骨を用いて溝内で祭祠が行われた可能性が考えられる。一部の四肢骨と頭蓋骨には激しく横断するように切り通された切創（Ａタイプ）、突き刺され骨の中で刃器が停止した切創（Ｂタイプ）、微細で浅く刻まれた切創（Ｃタイプ）の解体痕（図版２－２、４－１・２・４・５、５－１・２・３・４）がみられ、これらの遺存体が食用あるいは皮革加工原料として解体された可能性が推定された。ただしその痕跡は、四肢骨の中でも外側縁と前・後位の検出例が多い。特にＢタイプは鉤状あるいは直状の刃部又は突部が骨格に突き刺さり残されたものと考えられる。ただし残されるはずの大腿骨・脛骨の内側縁の解体痕跡がみられないことから、比較的粗雑な解体行為であったのだろう。特に脛骨の外側縁に残された切創は、生体時の屠殺直前直後

に残された可能性が高いのではないかと考えられる。

草戸千軒遺跡第36次調査で室町時代の池から検出されたウシ遺存体は四肢骨を近接させ首から上部を失った状態で出土している。これについて松井（1997）は、「このウシは四肢を一か所で縛られて身動きできないようにしてから首をおとされたことを発掘状況が物語る。四肢の足先で一か所に束ねられているので縛りを解いておらず、皮を剥いだり、頭部以外に解体せずにこの池に捨てられたものであろう。」としている。この資料は解体痕跡が四肢骨にみられない点が、井手天原遺跡の例とは異なるものの、まず屠殺され解体されたウシが利用されたこと、さらに四肢がまとまって出土していることが、井手天原遺跡出土資料と類似している。

一方、イヌによる噛痕は一切検出されず、ネズミの噛痕（図版３-１・２、４-３）もわずかである。すなわち、比較的短期間のうちにこれらの資料群が溝中に集積され、土中に埋存した可能性が推定される。特に、保存処理中に観察したところでも、ウシ・ウマの左右下顎の間に径１～２cm程の小礫が多く含まれることが看取されており、これらの遺存体を包含していた土壌が溝中に比較的速い速度で堆積したものと推定される。

以上の諸点から、これらの遺存体は、①動物犠牲として祭祀に利用された、②斃死して利用された、③殺害され利用された、という３点の可能性が推定される。ただし、埋存状況が良好なことから、一括して廃棄された可能性が高いと考えられることと、年齢組成にもバリエーションがみられることから、②では斃死個体が一時期に多量に生じたこととなり、不自然である。このことから①③の可能性がより高いと考えられる。特に、雨乞いのような犠牲祭祀が実施された可能性が指摘される。

謝辞

古代吉備文化財センター各位には資料の提供とともに、様々な御教示、御援助を頂いた。また、岡山理科大学学生、田中紀子さん、中村友美さん、重名佐紀さんには、同定・集計作業を手伝っていただいた、記して感謝致します。

参考文献

金子浩昌　1996　「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡３　山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104:pp.282-285

金子浩昌　1995　「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡２　山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98:pp.597-604

西中川　駿　1989　『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）

林田重幸、山内忠平　1954　「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4):pp.122-126

林田重幸、山内忠平　1957　「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6:146-156

林田重幸　1957　「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5):pp.301-306

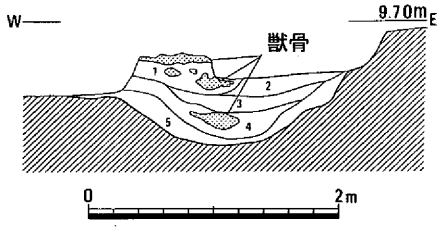
図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位
1	1	1	(12)付近	中部
		2	(20)・(21)	中部
	2	1a	№3	上部
		1b	№9	上部
		2		
		3		
2	1	1	(11)	中部
		2	(17)	中部
		3	№3下	上部
		4	(12)付近	中部
		5	(12)付近①	中部
		6	(19)	中部
		7	(12)付近	中部
		8	(12)付近	中部

図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位
2	1	9	(12)付近⑱	中部
		10	(12)付近㉚	中部
		11	(12)付近⑰	中部
		12	(12)付近⑨	中部
		13	(12)付近⑳	中部
		14	(12)付近⑩	中部
		15	(12)付近⑧	中部
		16	(12)付近④	中部
2	2	1	№14①	上部
		2	(2)・(10)	中部
		3	(12)付近⑮	中部
		4	(16)⑫	中部
		5	(16)付近①	中部
		6	(16)②	中部

図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位
2	2	7	№12	上部
3	1	1	(12)付近㉚	中部
		2	(12)付近①	中部
		3	(12)付近⑰	中部
		4	(12)付近⑨	中部
		5	(12)付近⑳	中部
		6	(12)付近⑩	中部
		7	(12)付近⑧	中部
		8	(12)付近④	中部
		9	(12)付近⑪	中部
		10	(12)付近㉗	中部
		11	(12)付近	中部
		12	(12)付近㉖	中部
		13	(12)付近③	中部

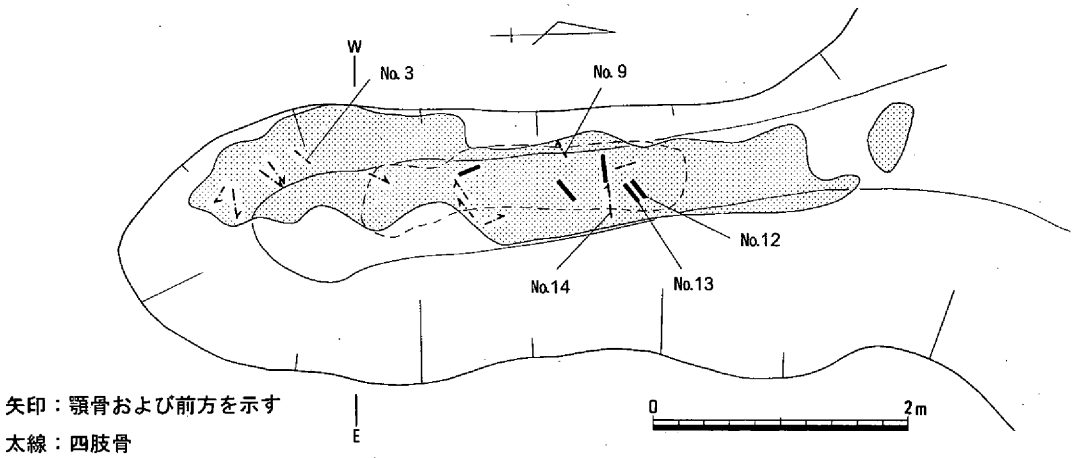
図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位
3	1	14	(12)付近㉙	中部
		15	(12)付近㉑	中部
3	2		(20)①	中部
	3		(21)①	中部
4	1		(16)⑫	中部
	2		(16)付近①	中部
	3		(12)付近	中部
	4		番外１③	不明
	5		№13	上部
5	1		番外１③	不明
	2		(12)付近	中部
	3		(4)①	中部
	4		(4)①	中部

第１表　図版・骨番号と出土位置の対応表



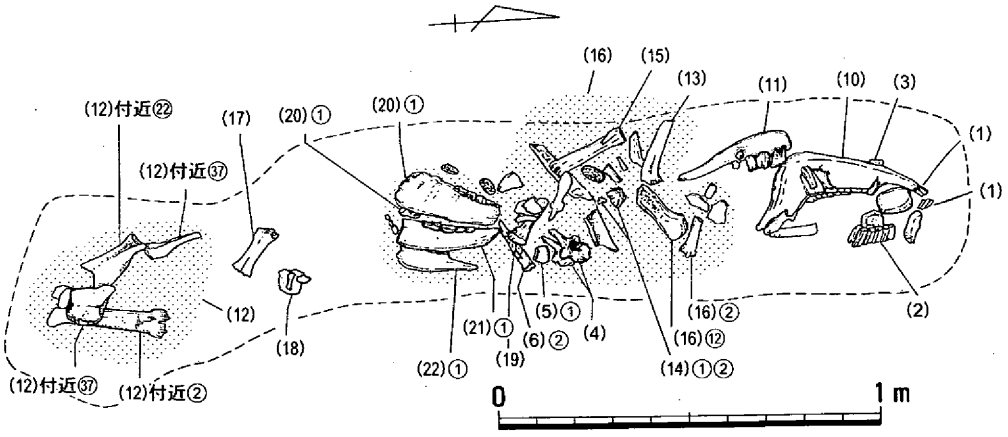
1．暗褐色粘質微砂(粗砂・円礫・獣骨を多く含む)
2．黄茶褐色粘質微砂
3．暗黄褐色粘質微砂
4．暗黄灰色粘質砂～粘質微砂(獣骨・円礫を含む)
5．暗黄灰色砂(円礫を含む)

第１図　溝断面図（１/60）



矢印：顎骨および前方を示す
太線：四肢骨

第２図　獣骨出土状況〈上部〉（１/60）　アミ目：上部獣骨出土範囲、
破線：中部獣骨出土範囲。（第３図は同範囲の詳細分布を示す）



第３図　獣骨出土状況〈中部〉（１/20）　(12)、(16) はアミ部分の骨格を一括して採集した。
分布範囲の破線は第２図の破線に対応する。

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	LR	部分	破損	成長度	測定値	備考
(14)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎第２・３後臼歯	L	完形　遊離歯	cmなし	RM3,RM2:小窩連結	RM3:咬合面長=29.85,咬合面幅=22.85,遠側歯根叉～咬合面高=20.59 RM2:破片のため計測不能	
(16)⑤	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎関節突起	LR	近位端	cm？	f	関節幅：38.03	
№1②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎第１～３後臼歯	L	遊離歯	cmなし？	小窩独立	咬合面長；M2=27.86,咬合面幅：M2=14.78,歯槽長：M2=28.04	M1△ M2○ M3×
№3③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯P3～M3	cm不明	若～成獣	M3咬合面長=36.27,M3歯槽長=36.70	M2○3○ M2小窩連結 M3小窩独立
№7①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯	cm不明	M3小窩独立	歯槽長：M1～M3=81.14,M2～M3=60.13,M1～M2=43.73,M1=20.75,M2=22.32,M3=31.93咬合面長：M3=36.62,歯槽幅：M1=13.87,M2=15.27,M3=15.66	P3×4△M1△2△3○,②と同一個体
№8③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	切歯部	cmなし？	？	計測不能	№8④と同一個体
№8④	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯M3	cm不明	成～老	計測不能	M3△,№8③と同一個体
№9①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯P2～M3	cm不明	M23：小窩独立	歯槽長：M1～3=90.29,M2～3=67.00,M1=20.24,M2=26.56,M3=37.90,歯槽幅：M1=15.00,M2=18.46,M3=17.42,咬合面長：M2～3=67.98,M1=29.30,M2=39.30,咬合面幅：M1=14.54,M2=14.25,最大高：75.32	P2△3△4△ M1△2○3○,№9②と同一個体
(3)①	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯P2～	cm不明	3.5歳以上	P2～M3の歯槽長：139.65 M1～M3の歯槽長：88.94 P2～P4の歯槽長：52.28	P2△3△4△M1×2×3△
(6)①	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯P2～M3	cm不明	3.5歳以上	咬合面長M1～3:78.15,M2～3:58.30,P4～M3:96.59 歯槽長M1～3:83.57,M2～3:60.40,P4～M3:100.28 咬合面長M1:19.96,M2:26.50,M3:35.13咬合面幅M1:14.18,M2:15.34,M3:16.44 歯槽長P2:15.37,P3:17.92,P4:18.18,M1:22.70,M2:24.78,M3:34.92	P2△3△4△M1△2△3△(6)②と同一個体
(6)③	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	L	関節突起	cmなし？	3.5歳以上	計測不能	(6)①と同一個体
(12)付近③	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯	cm？	成獣	歯槽長M1～3：84.60,M2～3：63.80,P2～M3：129.38,P2～4：53.38,M3長；39.13,M1～M3長：84.36,M1～2長：45.90,M2～3長：65.00,P2～M3長：122.90,P2～M2長：86.42	P2○3△4○M1○2△3○,P2.P3.P4.M1全面窩,M2.M3小窩連結
(12)付近④	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	下顎骨	L	関節突起,筋突起	cm不明	不明	計測不能	
(4)③	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯部	cm不明	？	-	P2×(5)①と接合
(4)④	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯部	cm不明	？	-	P2×(5)①と接合
(5)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯部歯根のみ	cm不明	？	歯槽長：P2～P4=49.02	P3×P4×(4)③④と接合
(21)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯	cm？	M1:全面窩(異常に全てすり減っている) M23:小窩独立	M1～3：歯槽長=(91.23),M1：咬合面長=21.26,咬合面幅=14.44,歯槽長=21.75,歯槽幅=15.50	P2△3△4△M1○2○3○(20)-①と同一個体
(22)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯	cm？	P234M123:小窩連結	歯槽長：M1～3=84.90,M1=19.34,咬合面長：M1～3=83.48,M1=21.08	P2○3○4○M1○2○3○
(22)②	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	関節突起	cmなし？	p：f	計測不能	
(11)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯P3～M3	cm不明	M3:萌出途次,M1小窩独立,M2小窩独立,P(咬耗開始)	歯槽長：M1～3=98.84,M2～3=71.21,M1～2=56.50,咬合面長：M1=25.90,M2=32.07,M3=39.13,咬合面幅：M1=10.90,M2=12.80,舌側歯冠高：M3=52.42,M2=60.20,M1=34.40	P3○4×M1○2○3○

第２表　出土動物遺体属性表１

部分，P：前臼歯、M：後臼歯、　　破損cm：切創、

成長度，p：近位端、d：遠位端、f：化骨化、uf：未化骨化、　　測定値，単位はmm

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	LR	部分	破損	成長度	測定値	備考
No.7②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm不明	3.5歳以上	歯槽長：M2＝23.62,M3＝36.20,歯槽幅：M1＝15.47,M2＝15.51,M3＝14.34	P3×4×M1×2×3×,No.7①と同一個体
No.8①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm不明	成～老	歯槽長：M3＝36.20,M2＝25.52,M1＝23.30,M1～3＝86.50,歯槽幅：M3＝14.28,M2＝15.48,M1＝13.08	P2△3△4△M1△2△3△,②と同一個体
No.8②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	R	切歯部	cmなし？	p：f	計測不能	No.8①と同一個体
No.9②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm不明	M23：小窩独立	歯槽長：M1～3＝91.16,M2～3＝66.94,M1＝20.04,M2＝25.77,M3＝39.79,歯槽幅：M1＝15.06,M2＝18.24,M3＝17.08,咬合面長：M2～3＝68.07,M1＝29.59,M2＝37.89,咬合面幅：M1＝14.03,M2＝13.81	P3△4△M1△2○3○,M3の形状が特殊,No.9①と同一個体
(3)②	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯P2～M3	cm？(下位)	M3：小窩独立	P2～M3歯槽長：141.34 P2～P4歯槽長：51.86 M3:咬合面長：37.48,咬合面幅：16.97 M1～M3歯槽長：90.18	P2△3△4△M1×2△3○
(6)②	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cmなし？(ネズミ噛痕)	3.5歳以上		P2×3×4×M1○2○3○(6)①と同一個体
(6)④	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	下顎骨	R	関節突起	cmなし？	3.5歳以上	計測不能	(6)②と同一個体
(12)付近㉜	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm(舌側)		M3歯槽長：37.77,歯槽幅：14.84	M2△M3△
(7)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	R	下顎体破片	cm不明	？	計測不能	
(18)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋関節突起	cm？	？	計測不能	
(20)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm？	ネズミ噛痕	歯槽長：M1～3＝88.96,M1＝21.86,歯槽幅：M1＝17.90	P2×3△4△M1△2△3△ 風化歯根残る (21)-①と同一個体
(16)④	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	下顎第1切歯	LR	遠位端	cm？	？	L最大幅：16.50	
No.11	14区	溜池状遺構	下層	ウシ	下顎第2，3後臼歯	R	遊離歯	cm不明	M3：第1咬頭咬耗開始 M2：小窩連結	M3咬合面長：38.70,咬合面幅：12.90,M2咬合面長：30.55,咬合面幅：12.55	
No.8⑤	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下顎第3後臼歯	R	遊離歯,完形M3	cmなし？	成～老 ,M3：小窩独立	頬側歯冠高：13.90mm	
(12)付近㉗	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	果骨	L	完形	cm不明	？	最大幅：31.83	
(15)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	L	近位端＋骨幹部	cm不明	prox：f	最大長：55.95	
(11)②	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	L	ほぼ完形	cm不明(発掘後の新しい傷有り)	p：f	残存全長：50.97	
(12)付近⑨	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	基節骨	L	完形	cmなし	f	全長：56.60	
(12)付近⑰	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	基節骨	R	完形	cmなし	f	全長：56.40	
(3)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	R	完形	cmなし	f	全長：52.60 近位関節幅：26.76	
(12)①	14区	溜池状遺構	下層	ウシ	距骨	L	完形	cmなし	f	全長：60.75	②と同一個体,(12)⑫付近の㉜と同一個体
(17)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	肩甲骨	L	遠位端	cm不明	f	計測不能	
(12)付近㉒	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肩甲骨	R	遠位＋骨幹部	cm(前位)	d：f	計測不能	
(2)③	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	尺骨	R	関節部,破片,前位	cmなし？	？	計測不能	
(12)付近㉘	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	尺骨	R	関節部	cm不明、ネズミ噛痕	？	計測不能	
(20)③	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	尺側手根骨	R	完形	cmなし？	f	計測不能	
番外2②	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	上顎臼歯	L	遊離歯	cmなし？	すべて小窩独立	咬合面長M1：23.76,M2：31.06,M3：34.98,咬合面幅M1：18.42,M2：20.70,M3：18.09,舌側歯根又高M1：24.25,M2：30.96,M3：45.85	P2○3○4○ M1○2○3○③と同一個体
番外2③	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	上顎臼歯	R	遊離歯	cmなし？	すべて小窩独立		P2○3×4○ M1×2○3○②と同一個体
No.7③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	第1頸椎	M	後位破片	cm不明	f	計測不能	

第３表　出土動物遺体属性表２

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	LR	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)③	14区	溜池状遺構	下層	ウシ	第２・３足根骨	L	完形	cmなし	f	最大幅：35.38	(12)付近の㉖と同一個体
(4)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	第７頸椎	M	完形	cm(棘突起，前関節顆)	f	椎体長：53.76	
(3)③	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	大腿骨	L	遠位端破片	cm不明	?	計測不能	
南	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中間手根骨	L	完形(一部欠損)	cmなし？	若～老？	横幅：22.65	発掘後の新しい傷有り
(12)付近②	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中手骨	L	完形	cm不明	d，p：f	最大長；185.35,近位最大幅：52.30	
(12)②	14区	溜池状遺構	下層	ウシ	中心第４足根骨	L	完形	cmなし	f	最大幅：51.05	(12)①と同一個体 (12)付近の㉘と同一個体
(12)付近㉚	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中心第４足根骨	R	完形	cmなし		最大幅：51.50	(12)付近①と同一個体
(20)②	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	中心第４足根骨	R	完形	cmなし？	f	最大幅：55.20	
(12)付近⑩	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	L	完形	cmなし	f	全長：37.33,近位端最大高：29.60	
(16)⑪	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	中節骨	L	近位端＋骨幹部	cm？	f	近位関節幅最大高：28.22	
(12)付近⑯	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	R	完形	cmなし	f	全長：37.37	
(12)付近⑳	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	R	完形	cm不明	d：f	最大長：36.94,近位端最大高：28.50	
(３)④	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	中足骨	L	遠位端破片	cmなし？	?	計測不能	
(12)付近㉑	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	L	近位端	cmなし？	p：f	近位端最大幅：49.19	(12)①と同一個体
(12)付近㉔	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	L	遠位端	cm？	d：f	遠位端最大幅：51.98	
(16)③	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	中足骨	L	遠位端＋骨幹部	cm？	f	計測不能	ネズミ噛痕
No.６①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	中足骨	R	近位端＋骨幹部	cm？	p：f	近位関節幅：42.65	
(12)付近①	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	R	完形	cmなし(ネズミ噛痕)	d，p：f	最大長；198.52,近位最大幅：49.30,近位最大高：44.05,遠位最大幅：53.20,遠位最大高：28.62	
(６)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	中足骨	R	完形(骨幹部＋遠位端,一部欠損)	cm(前位)	d，p：f	残存長(ほぼ全長)：216.5	
	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	L	完形	cmなし	fused	全長：56.50,近位端最大高：37.63	
(12)付①	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	L	完形	cmなし	f	全長：57.75,近位端最大高：40.73	
(12)付近⑧	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	R	完形	cmなし	f	全長：57.00,近位端最大高：34.25	
(12)付近⑤	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肋骨	LR不明	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
(12)付近㉓	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肋骨	R	骨幹部	cm	不明	計測不能	
(19)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	橈骨	L	近位端＋骨幹部近位端寄り	cm？	f	近位端最大幅：78.20	風化
(２)①	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	近位端＋骨幹部，外側位	外側位にcm	p：f	計測不能	(2)②と別個体
(２)②	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	近位端＋骨幹部	cmなし？	p：f	計測不能	(2)①と別個体
(２)④	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	遠位端＋骨幹部	cmなし？	d：f	計測不能	
(12)付近⑱	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	橈骨	R	遠位端＋骨幹部	cm不明	d：f	遠位端最大幅：78.11	
(12)付近⑲	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	橈骨	R	近位端＋骨幹部	cm不明	p：f	近位端最大幅：79.48,近位端最大高：42.28	
No.６②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	L	骨幹部＋遠位端	cm(外側位)(発掘後の新しい傷有り)	d：f	計測不能	
(12)付近⑪	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	脛骨	L	遠位端	cmなし	f	遠位端最大幅：60.78	
No.４②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	R	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
No.10①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	R	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化

第４表　出土動物遺体属性表３

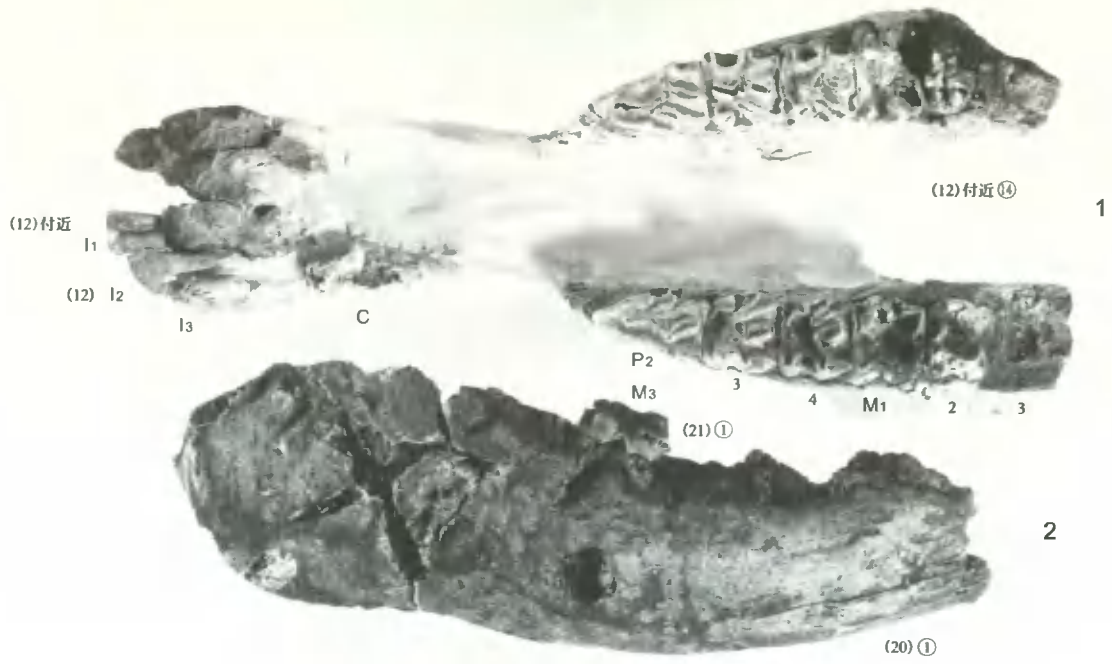
出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	LR	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)付近⑫	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	橈骨	R	遠位端,外側位	cmなし	f	計測不能	
番外２①	14区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	骨幹＋遠位	cm？	d：f	計測不能	風化
(13)	14区	溜池状遺構	中部	ウシ	橈骨	R	骨幹部	cm(外側位)	？	計測不能	
(12)付近㉖	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	L	完形	cmなし	p：f	最大長：120.92	(12)の①②と同一個体
(12)付近㉘	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	R	完形	cm(外側位、遠位端)		最大長：124.32	
(12)付近㉙	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	R	完形	cm不明		最大長：120.46	
番外１⑤	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ/ウマ	下顎骨	L	関節突起	cm不明	f不明	計測不能	
番外２④	14区	溜池状遺構	下部	ウシ/ウマ	寛骨	L	寛骨臼　腸骨坐骨部	cm不明	f	計測不能	
(23)③	14区	溜池状遺構	中部	ウシ/ウマ	寛骨	L	寛骨臼　坐骨部	cm不明	f	計測不能	風化
(4)②	14区	溜池状遺構	中部	ウシ/ウマ	胸椎	M	棘突起＋関節突起欠損	cmなし	f	椎体長：62.22	
(12)付近㉕	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ウマ	頸椎	M	骨幹部,破片	cm？	pos：u	計測不能	
(23)②	14区	溜池状遺構	中部	ウシ/ウマ	頸椎	M	前位破片	cm不明	f	計測不能	風化
(12)付近㉘	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ウマ	腰椎	R	右外側縁，骨幹部破片	cmなし？	不明	計測不能	
(12)付近㉔	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ウマ	仙骨	M	骨幹部,破片	cm不明	ant：f	残存長：53.00	
(23)①	14区	溜池状遺構	中部	ウシ/ウマ	仙椎	M	前位破片	cm不明	f	計測不能	風化
中	14区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ウマ	大腿骨	L	近位端	cm(関節部後位より)	prox：f	関節最大径：42.05	
No.12①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウシ/ウマ	肋骨	？	破片	cm不明	不明	計測不能	風化
(16)⑥	14区	溜池状遺構	中部	ウシ/ウマ	橈骨	L	遠位端＋骨幹部破片	cm？	f	計測不能	
No.5③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎骨	R	破片(歯根欠損)	cmなし	小窩独立	M2,咬合面長：20.09,咬合面幅：11.96	
No.5②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼歯	L	破片(歯根欠損)	cmなし	小窩独立	M2,咬合面長：20.09,咬合面幅：11.96	
No.2①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼歯	L	遊離歯	cmなし？	P2P4M1：小窩独立	咬合面長：M1＝26.80，P2＝30.10，P4＝26.40,咬合面幅：M1＝14.84，P2＝14.02，P4＝13.20	P2P4M12 No.2①とは別個体 成長障害顕著 No.3③と同一個体
No.2②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼歯	R	遊離歯	cmなし？	M1：小窩独立	咬合面長：M1＝26.13,咬合面幅：M1＝14.89	P2M1 No.2②と同一個体 成長障害同一
No.3①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎骨	L	下顎体＋臼歯	cm不明	成～老獣	P3～M2長＝95.90，P3～M1長=76.13 歯槽長 M1～3：81.10，P3～4：51.26，P3～M3：131.17	P2△3○4○M1○2○3○ M3以外小窩独立
(10)②	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	L	P3～M3	cm不明	小窩連結	省略	P3○4○M1○2○3○ ①と同一個体 重なって出土
(1)	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	LR	遊離歯	cmなし	8～18歳	I1～3長=36.70,I1：長=14.46,幅=10.90,I2：長=14.99,幅=14.99,I3：長＝14.87,幅＝9.07(全て右)	I123＋C ♂
No.3②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎骨	R	下顎体＋臼歯	cm不明	成～老獣	P3～M3歯槽長=129.70㎜：P4～M3長=102.56㎜,M2～P3長＝97.50㎜，歯槽長M1～3：77.82，P3～4：51.42	P2△3○4○M1○2○3○ M3以外小窩独立
(10)①	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	R	P2～M3	cm不明(ネズミ噛痕)	小窩連結	歯槽長：M1～3＝81.82,M2～3＝56.88,M1＝22.28,M2＝23.50,M3＝30.46,歯槽幅：M3＝13.26,咬合面長：M1～3=75.84,M2～3＝50.87,M1＝22.30,M2＝25.34,M3＝29.21,咬合面幅：M1＝15.85,M2＝12.90,M3＝11.76	P2○3○M1○2○3○ ②と同一個体 重なって出土
No.1①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎第1～3後臼歯	R	遊離歯	cmなし？	小窩連結	咬合面長：P4～M2＝71.00,M2＝26.32,P4＝24.27,咬合面幅：M2＝14.92,P4＝12.82	M1○2○3○
No.4③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	基節骨	R	ほぼ完形(一部欠損)	cm不明	f	残存長：70.55	

第５表　出土動物遺体属性表４

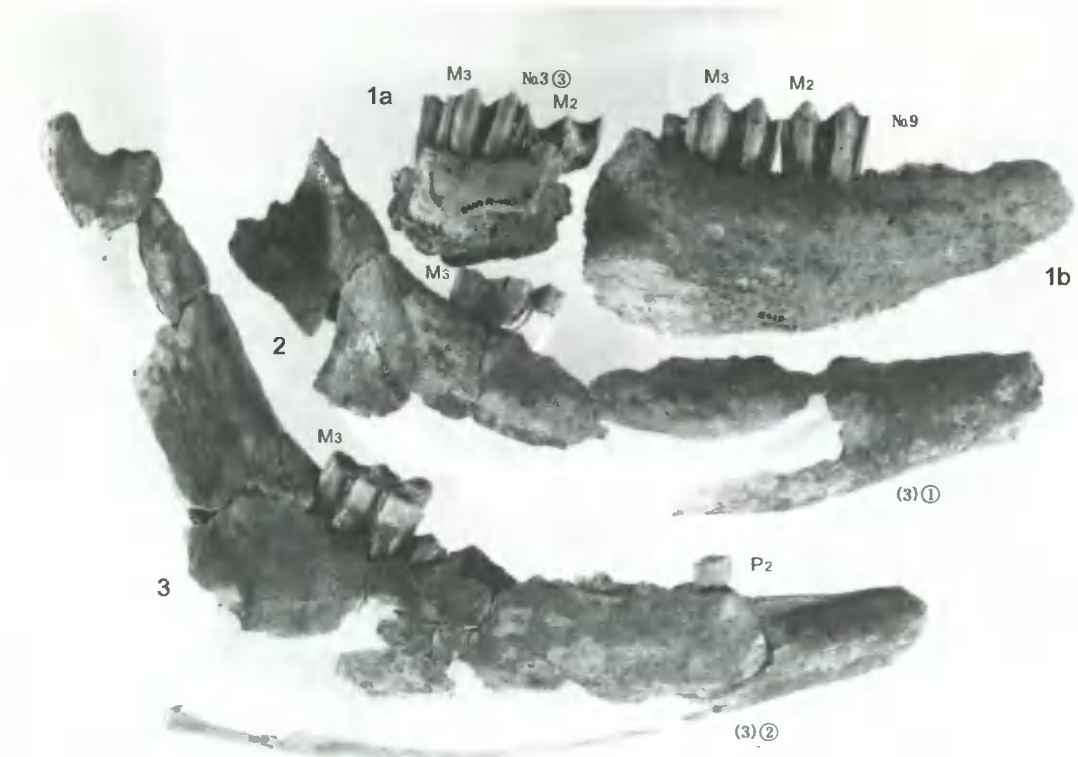
出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	LR	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)付近㊵	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	距骨	L	骨幹部破片	cmなし？	不明	計測不能	
(16)⑦	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	距骨	L	内側位破片	cm？	f	計測不能	
番外１①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	距骨	R	ほぼ完形	cm？	ｆｕｓｅｄ	最大幅：55.60	
№５①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎臼歯Ｐ２	L	遊離歯	cmなし(発掘後の傷有り)	小窩独立	咬合面幅：21.04	Ｐ２
(２)①	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	上顎臼歯Ｍ１～３	L	遊離歯	cmなし	小窩連結 3.5～4.5歳以上(萌出より)	Ｍ１:咬合面長＝23.70,咬合面幅＝24.80,Ｍ２:咬合面長＝24.31,咬合面幅=24.00,Ｍ３:咬合面長=24.22,咬合面幅＝19.93	Ｍ123
(２)②	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	上顎臼歯	R	遊離歯	cmなし	小窩連結	Ｐ３:咬合面長＝27.37,咬合面幅＝25.94,Ｐ４:咬合面長＝27.48,咬合面幅＝26.66(大きめ象牙質の付着物も計測),Ｍ１:咬合面長＝23.74,咬合面幅＝25.90,Ｍ２:咬合面長＝24.88,咬合面幅＝23.84	Ｐ34Ｍ12
(12)付近⑭	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	上顎骨	LR	上顎体＋臼歯	cm(右外側位)	成～老	Ｌ：Ｍ１咬合面長=19.12,Ｒ：咬合面長：Ｍ１=20.77,Ｍ２=20.95,Ｐ２～４=79.76,咬合面幅：Ｍ１=25.50,Ｍ２=24.40,歯槽長：Ｐ２～４=80.75,Ｍ１～２=43.74	Ｐ２○３○４○(小窩独立)Ｍ１○２△３×(全面窩)
№14①	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎第２～４前臼歯	L	遊離歯	cmなし？	P234:小窩独立	咬合面長：Ｐ２～４=87.95,Ｐ２=34.32,Ｐ３=27.20,Ｐ４=26.90,咬合面幅：Ｐ２=22.65,Ｐ３=24.78,Ｐ４=23.75	Ｐ２○３○４○ №14②と同一個体
№14②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎第２前臼歯	R	遊離歯	cmなし？	Ｐ２:小窩独立	-	Ｐ２ №14①と同一個体
番外１③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	L	骨幹部	cm	ｆ？	計測不能	
番外１④	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	L	遠位端	cm不明	ｆ不明	計測不能	
番外１②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	R	遠位端＋骨幹部	cm	ｄ：ｆ	計測不能	
(12)付近㊱	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	第２頸椎	M	前位左外側位，破片	cm？	ａｎｔ：ｆ	計測不能	
(12)付近㊸	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	大腿骨	L	骨幹部	cmなし？	不明	残存長：156.26,前位幅：45.14	
(16)⑫	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	大腿骨	L	近位端＋骨幹部	cm(回転子)	f	近位関節最大幅：27.85	
(12)付近㊲	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	大腿骨	R	遠位端,骨幹部破片	cmなし？	不明	計測不能	
(16)⑨	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	中節骨	L	遠位端	cm？	f	計測不能	
(16)⑩	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	中節骨	R	遠位端	cm？	f	遠位関節幅：39.96	
№12③	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	中足骨	L	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化
(16)②	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	中足骨	L	骨幹部＋遠位端	cm？	f	近位関節幅：42.79	
(4)⑤	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	末節骨	R	完形(前位一部欠損)	cm不明	？	関節幅：38.09	
(12)付近⑮	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	脛骨	L	遠位端＋骨幹部	cm(前位)	ｄ：ｆ	遠位端最大幅62.64,遠位最大高：35.78	
(16)①	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	脛骨	L	骨幹部＋遠位端	cm(骨幹部外側位)	ｆ ネズミ噛痕	遠位端最大幅(復元値)：66.20	
№13②	14区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	脛骨	R	遠位端＋骨幹部	cm	ｄ：ｆ ネズミ噛痕	計測不能	
(12)付近㊴	14区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	踵骨	L	関節部破片	cmなし？	不明	上部踵骨関節幅：30.30	
(16)⑧	14区	溜池状遺構	中部	ウマ	踵骨	L	骨幹部	cm？	f	上部距骨関節幅：31.44	
№12②	14区	溜池状遺構	上部下層	哺乳類	四肢骨	?	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化
№14③	14区	溜池状遺構	上部下層	哺乳類	四肢骨	?	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
(12)付近⑬	14区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	四肢骨	不明	骨幹部	cm？	不明	計測不能	
(12)付近⑥	14区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	手根ｏｒ足根骨	LR不明	完形	cmなし？	不明	計測不能	
北	14区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	部位不明	?	骨幹部破片	cm不明	不明	計測不能	

第６表　出土動物遺体属性表５

図版1

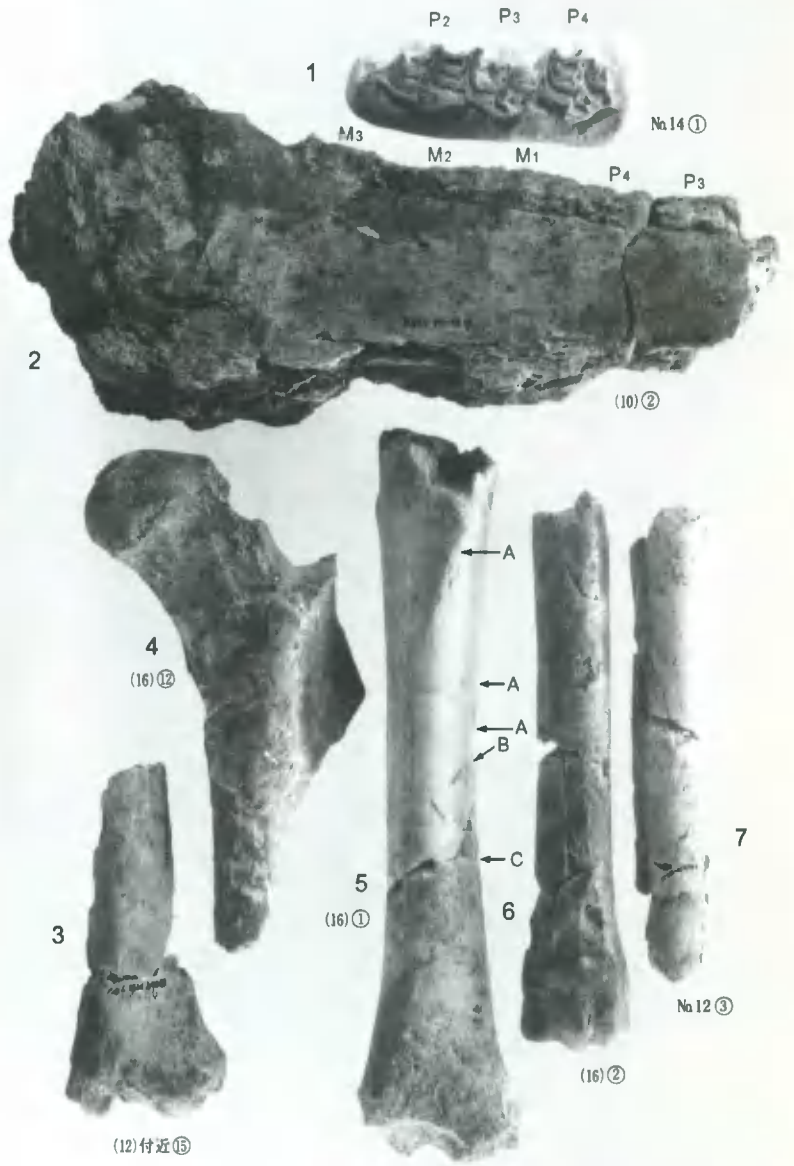


1．ウマ・ウシ遺存体　1．ウマ上顎骨 咬合面　2．ウシ左下顎骨 頬側

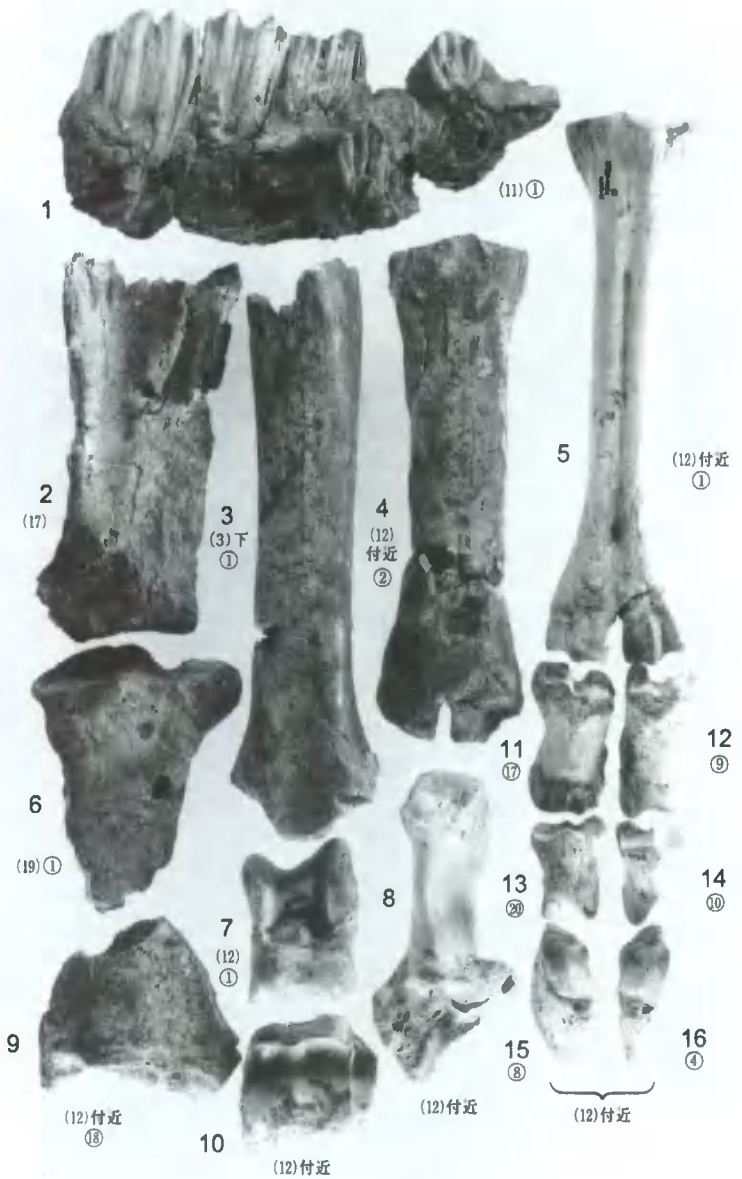


2．ウシ遺存体　下顎骨　1．左下顎骨 舌側　2．左下顎骨 舌側　3．右下顎骨 頬側

図版２

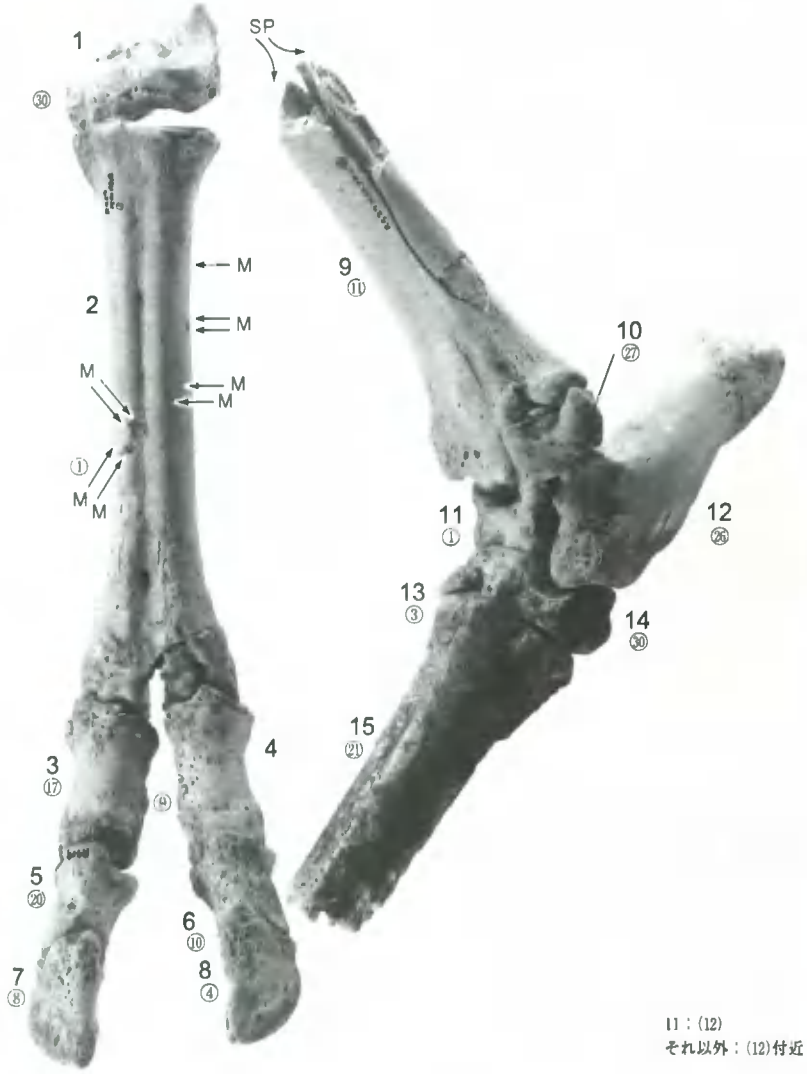


2．ウマ遺存体〔47%〕　1．左上顎臼歯　2．右下顎骨　3．左脛骨　4．左大腿骨　5．左脛骨　6．左中足骨　7．左中足骨



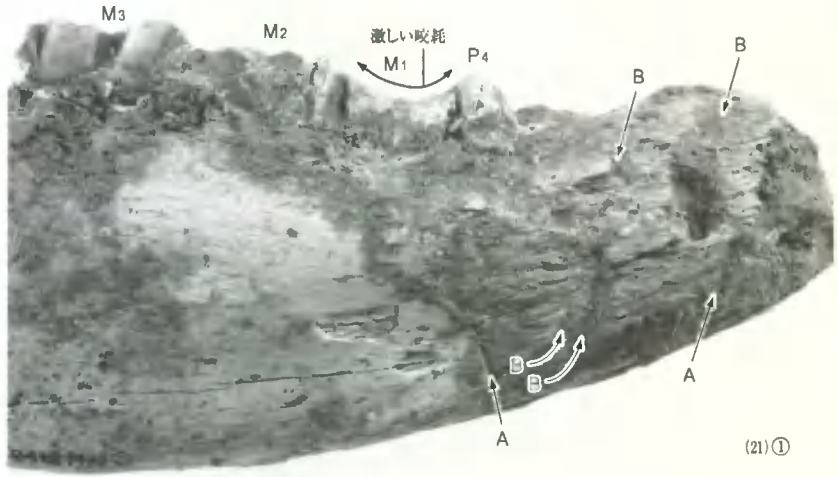
2．ウシ遺存体〔37%〕　1．左下顎骨　2．左肩甲骨　3．右脛骨　4．左中足骨　5．右中足骨　6．左橈骨　7．左距骨　8．右踵骨　9．右橈骨　10．右中心足根骨　11･12．基節骨　13･14．中節骨　15･16．末節骨

図版3



1．ウシ遺存体〔41%〕　1.右中心足根骨　2.右中足骨　3・4基節骨　5・6中節骨　7・8末節骨　9.左脛骨　10.果骨　11.左距骨　12.左踵骨　13.左第2・3足根骨　14.左中心足根骨　15.左中足骨　M：ネズミの噛痕　SP：スパイラル割れ

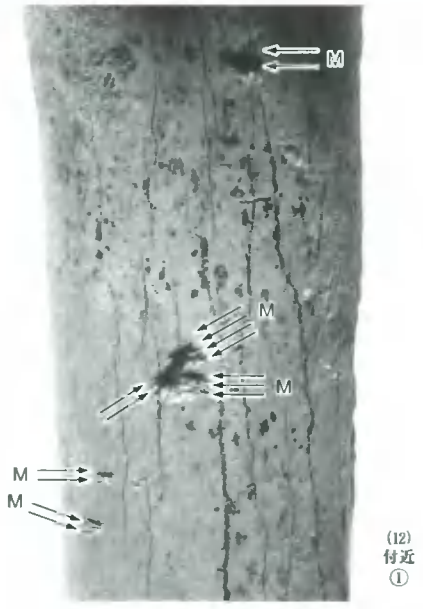
2．ウシ右下顎骨(図版1、1-2)舌側　ネズミによる噛痕(矢印)〔120%〕



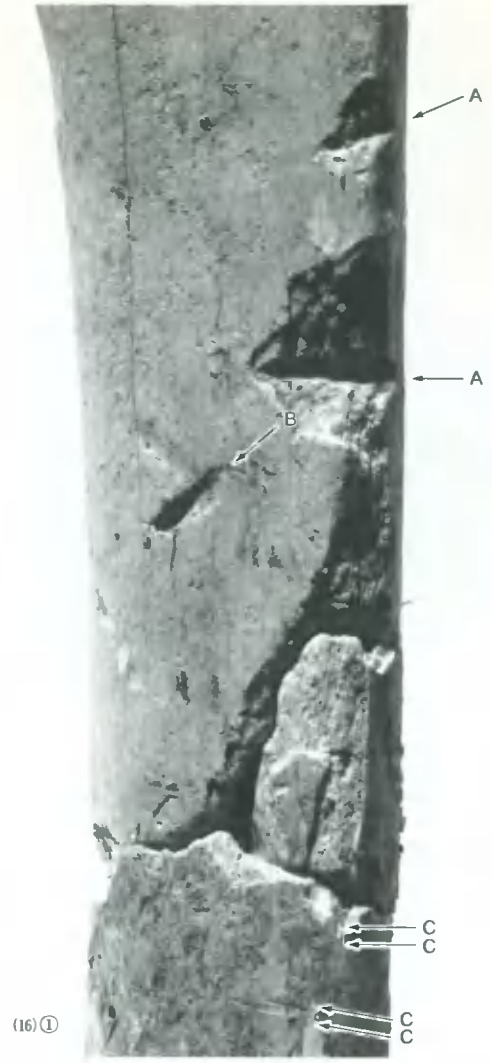
3．ウシ左下顎骨舌側（図版1-1-2）〔70%〕

図版４

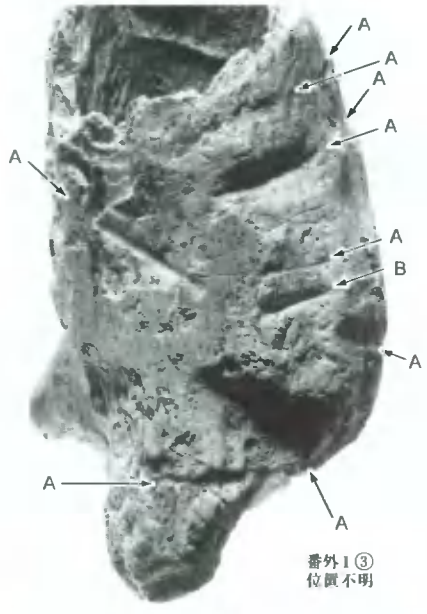
1．ウマ大腿骨頭（近以関節）切創（カットマーク）〔100%〕



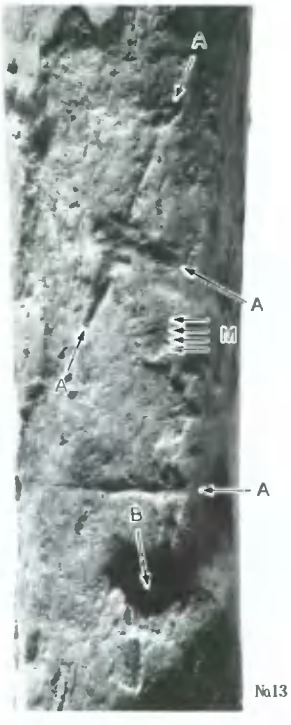
3．ウシ右中足骨　骨幹部内側位〔150%〕
M：ネズミの噛痕



2．ウマ左脛骨　骨幹部外側面切創（カットマーク）〔147%〕
A・B：激しい切創（A．貫通パターン　B．停止パターン）　C：微細な切創



4．ウマ左上腕骨
骨幹部外側面
〔100%〕



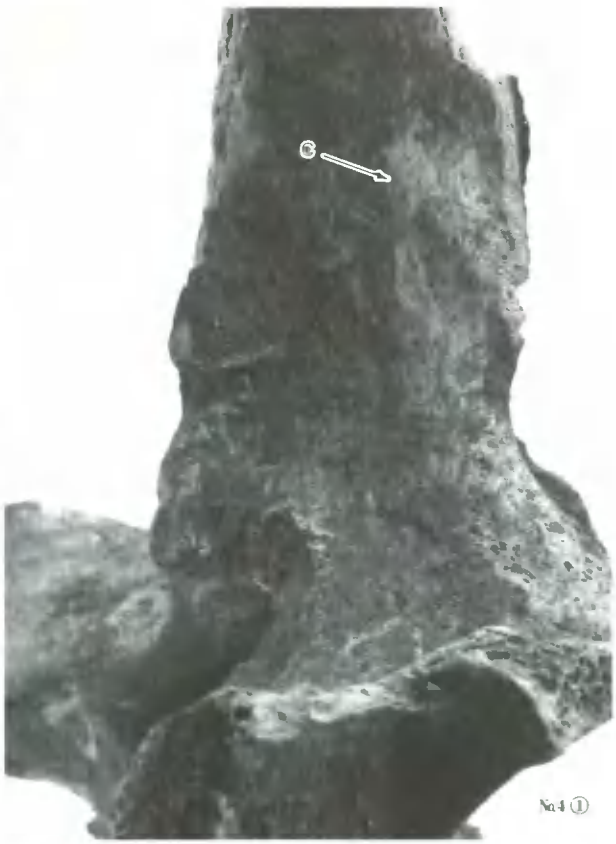
5．ウマ右脛骨
骨幹部外側面切創
（カットマーク）
〔94%〕

図版5

1．ウマ左上腕骨　骨幹部後面〔133%〕

2．ウシ右肋骨　骨幹部内側面切創〔240%〕
C：軽微な切創

3．ウシ第7頸椎　椎頭　前面切創〔200%〕
C：軽微な切創



4．ウシ第7頸椎　棘突起　左外側面切創〔200%〕
C：軽微な切創

図版１

岡谷大溝散布地

１．近景　南から

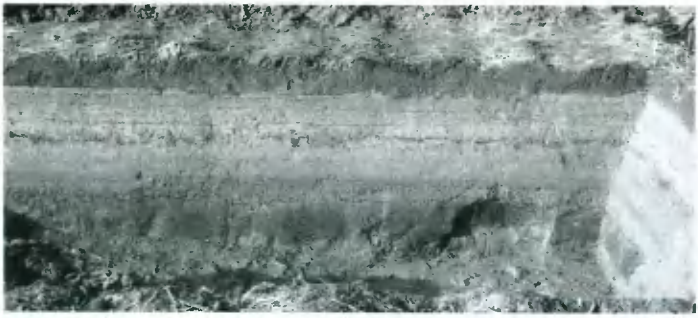
２．Ｔ６西壁
東から

３．ＯＴ－１東壁
西から

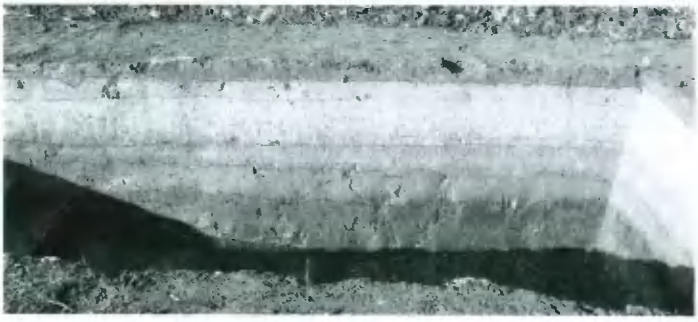
４．ＯＴ－３東壁
西から

図版２

岡谷大溝散布地



１．ＯＴ－５西壁
東から



２．ＯＴ－８西壁
東から

３．Ｔ５東壁
西から

1　1/3

2　1/3

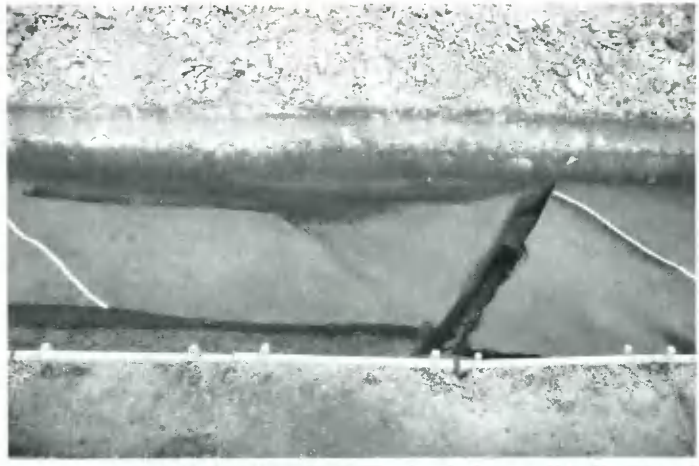
3　1/3

4

1/3

４．出土遺物

三須今溝遺跡



１．溝１
西から

２．溝３護岸
北から

３．溝４
南西から

図版４

三須今溝遺跡

１．溝８
南西から

２．溝10
西から

３．溝11
北から

三須今溝遺跡

１．溝11
南から

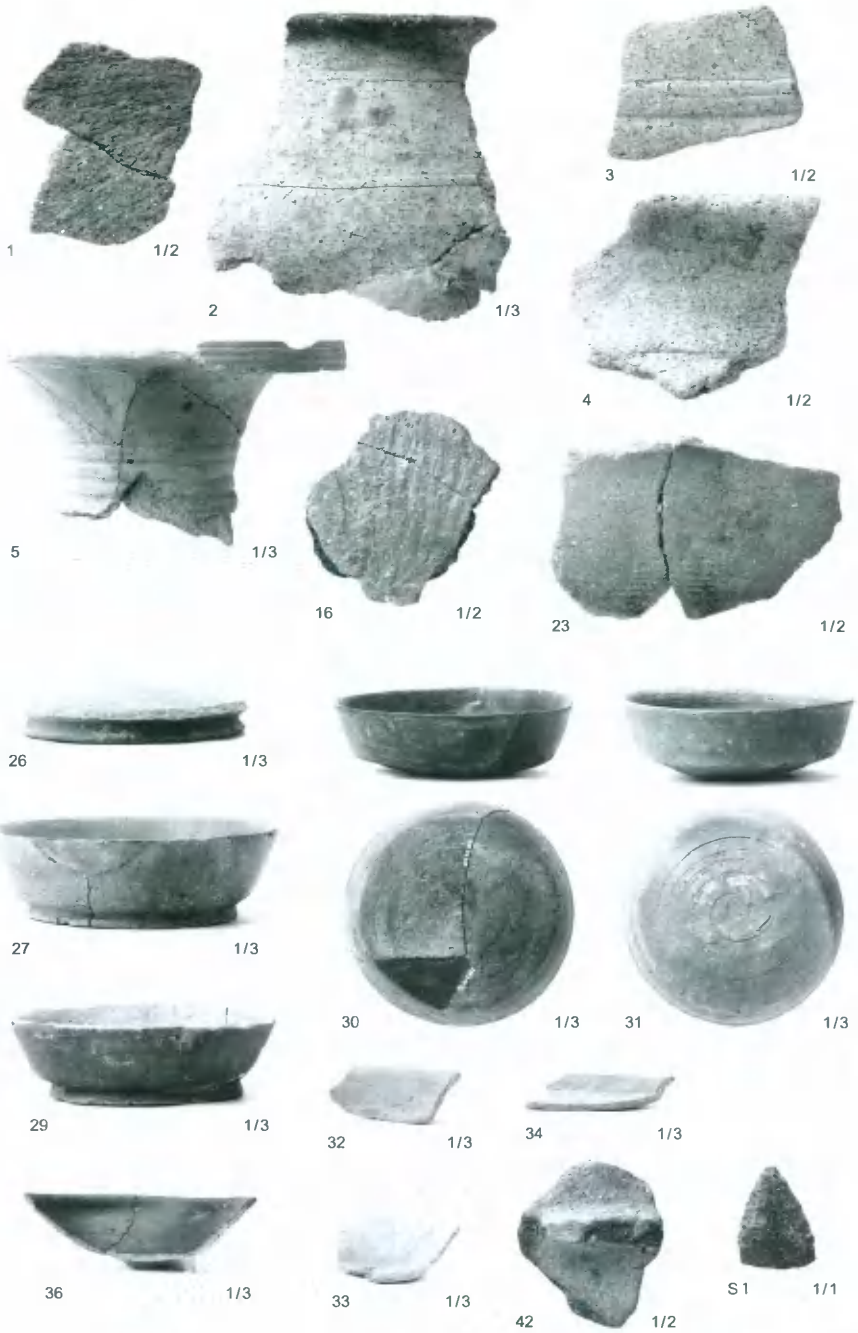
２．溝11護岸
北東から

３（左）．Ｔ４西壁
東から

４（右）．Ｔ１西壁
東から

図版６

三須今溝遺跡



溝１・溝２・溝11出土遺物

三須河原遺跡

１．遺構全景（13区）
南から

２．溝16・溝10・溝９・
溝８（手前から）
北から

図版８

三須河原遺跡

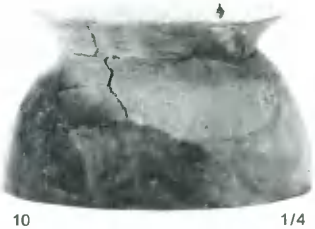
１．竪穴住居３
北から

２．竪穴住居４
南東から

３．柱穴列
北から

三須河原遺跡

9　1/3



10　1/4

12　1/3

14　1/3

15　1/3

16　1/3

17　1/3

18　1/6

20　1/4

27　1/3

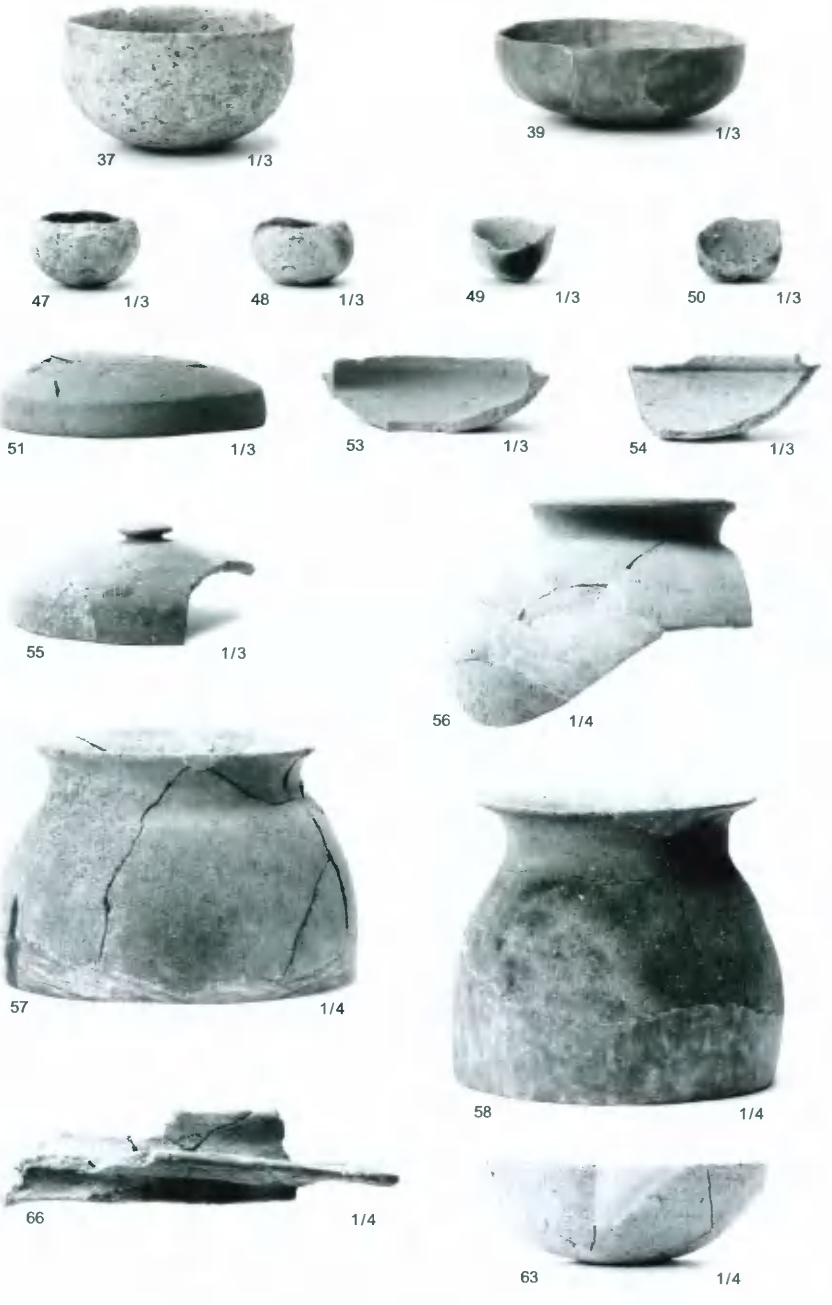
29　1/3

35　1/3

竪穴住居３・４出土遺物

図版10

三須河原遺跡



竪穴住居４・溝12出土遺物

三須畠田遺跡

1．竪穴住居６
上層床面
西から

2．竪穴住居７
北から

3．竪穴住居８
南から

図版12

三須畠田遺跡

1．土壙７
南東から

2．土壙８
南西から

3．粘土塊
北西から

三須畠田遺跡

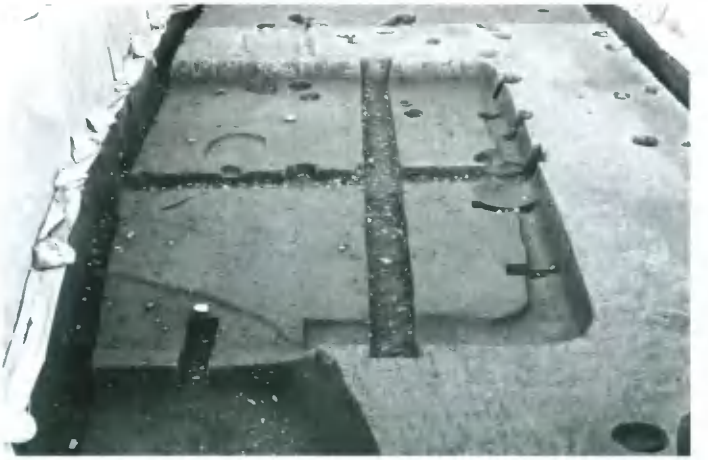
1．竪穴住居10
西から

2．竪穴住居12
南から

3．竪穴住居13
東から

図版14

三須畠田遺跡



1．竪穴住居15
南から

2．竪穴住居18
鉄滓出土状況
西から

3．竪穴住居20
南西から

三須畠田遺跡

M1 1/2

15 1/4

16 1/4

26 1/4

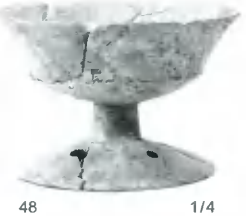
34 1/3

35 1/3

55 1/4

38 1/4

41 1/4


48 1/4

47 1/2

54 1/3

46 1/4

82 1/4

84 1/4

竪穴住居２・４・６・８・土壙７出土遺物

図版16

三須畠田遺跡

59 1/6

87 1/4

72 1/4

78 1/5

180 1/4

C 2 1/2

184 1/4

178 1/4

182 1/4

187 1/4

181 1/5

土壙７・13出土遺物

三須畠田遺跡

95 1/3

296 1/4

313 1/4

316 1/4

318 1/4

323 1/4

327 1/4

328 1/4

340 1/4

336 1/4

337 1/4

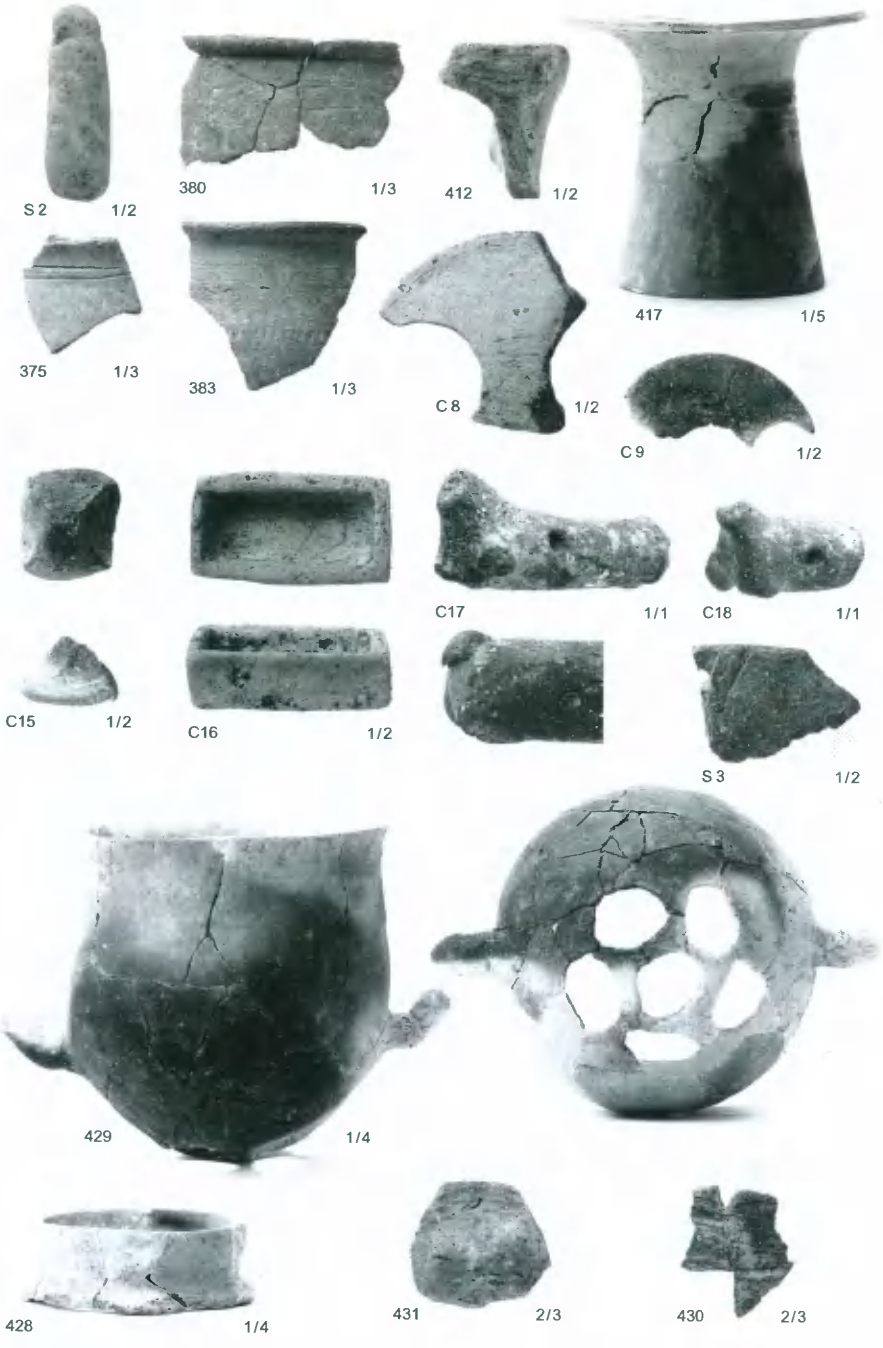
339 1/4

342 1/4

土壙８・溝９出土遺物

図版18

三須畠田遺跡



遺構に伴わない遺物、竪穴住居10出土遺物

三須畠田遺跡

435 1/3

446 1/3

454 1/3

437 1/3

451 1/3

455 1/3

438 1/3

452 1/3

460 1/4

439 1/3

474 1/3

440 1/3

459 1/4

476 1/3

443 1/3

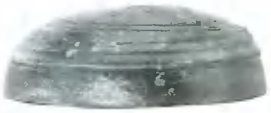
444 1/3

C19 1/2

477 1/3

485 1/3

487 1/3


482 1/3

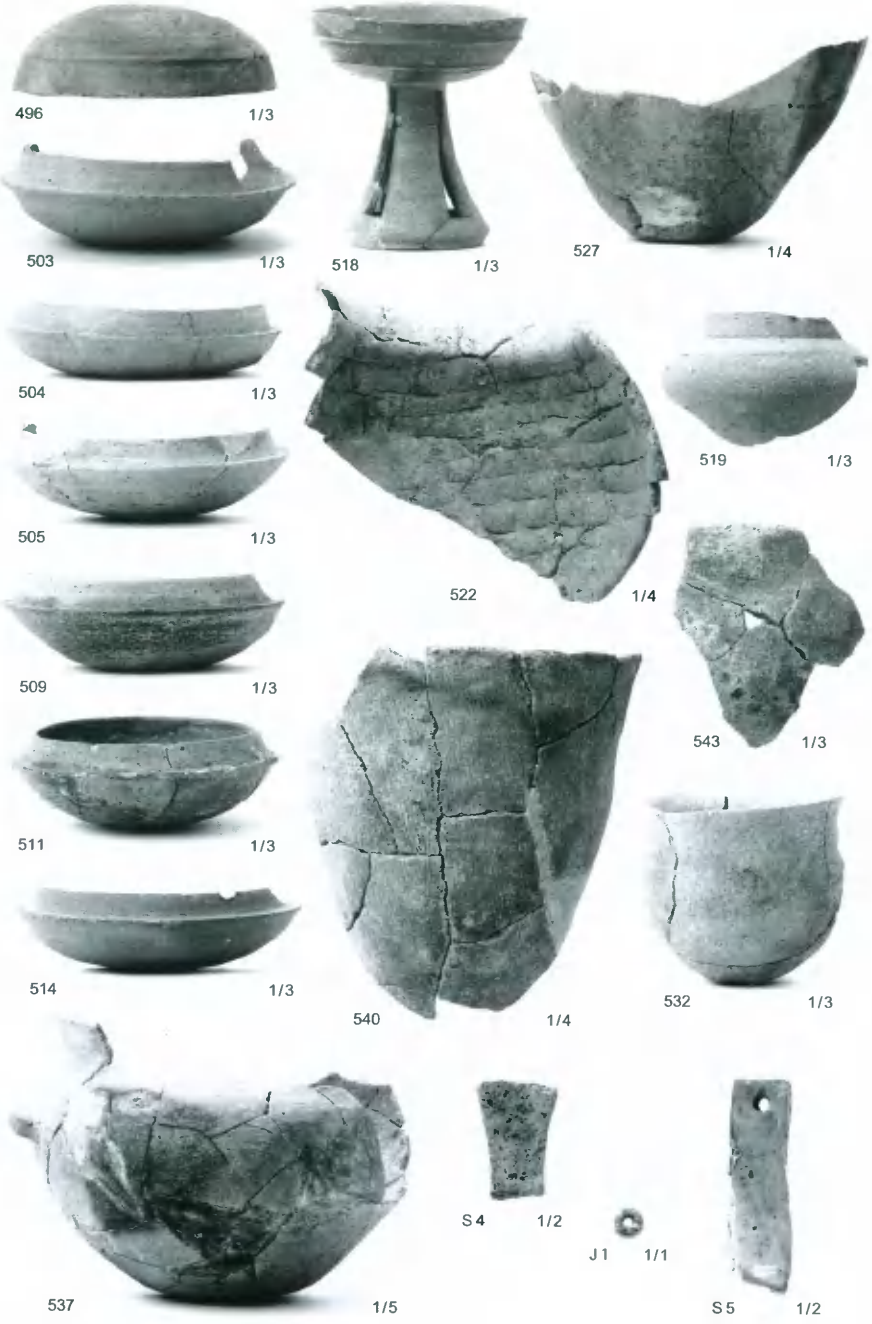
486 1/3

488 1/3

竪穴住居12・13出土遺物

図版20

三須畠田遺跡



竪穴住居13・14出土遺物

三須畠田遺跡

竪穴住居15・土壙31・土壙墓３・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

図版22

井手見延遺跡

1．遺構全景（２区）
北から

2．竪穴住居１
北から

3．竪穴住居２
南西から

井手見延遺跡

1．袋状土壙４
南から

2．袋状土壙６
北東から

3．袋状土壙15
西から

図版24

井手見延遺跡

1．竪穴住居５
南から

2．竪穴住居５カマド
南から

3．竪穴住居６
南から

井手見延遺跡

1．掘立柱建物２
南から

2．土壙８出土遺物
北東から

3．土壙墓
南東から

図版26

井手見延遺跡

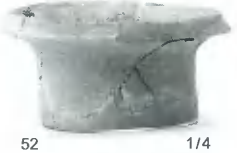
竪穴住居１・袋状土壙２・４・６出土遺物

井手見延遺跡

51 1/4

62 1/4

69 1/4


52 1/4

68 1/4

48 1/5

50 1/4

58 1/4

59 1/4

78 1/5

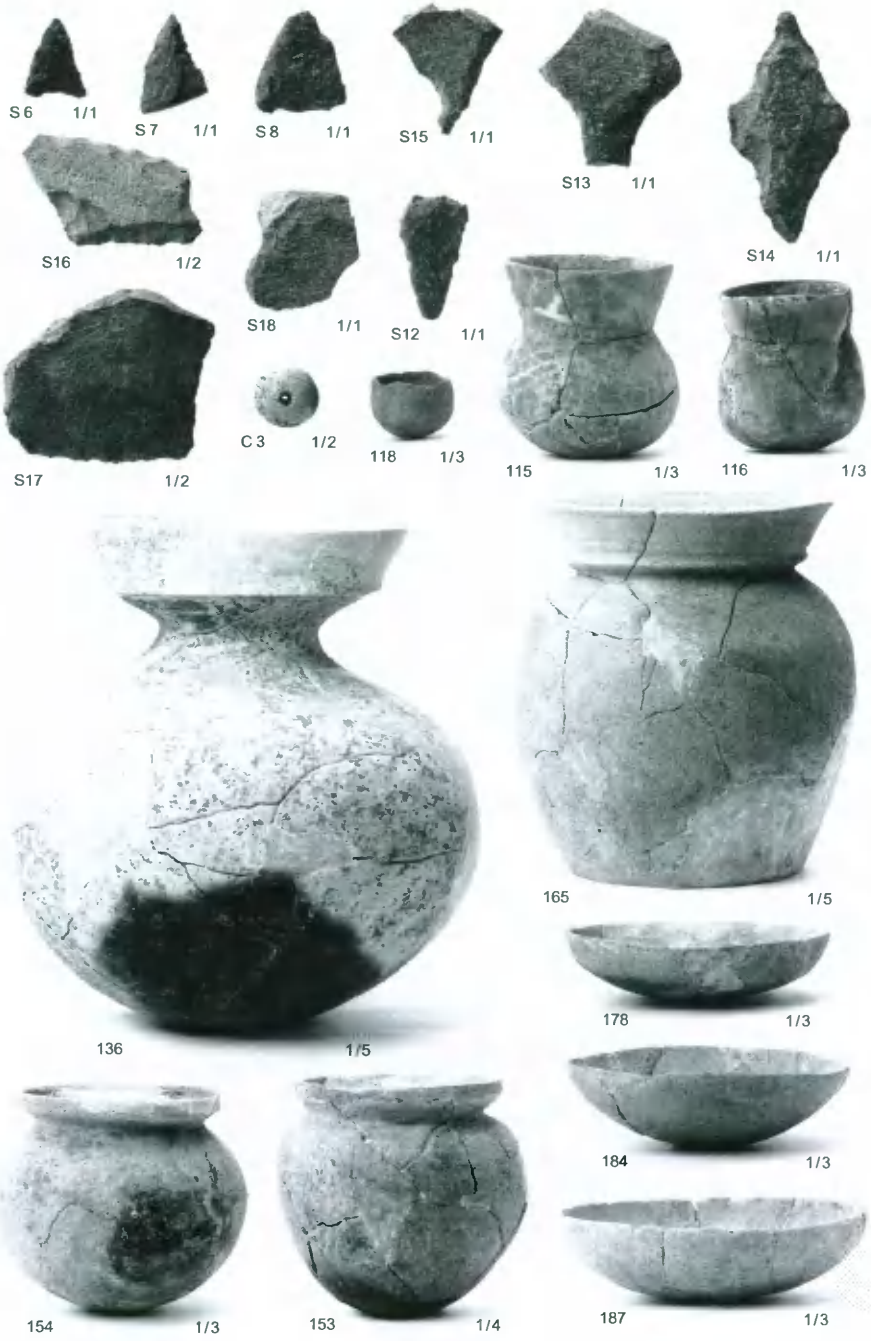
91 1/4

80 1/5

袋状土壙９・土壙２出土遺物

図版28

井手見延遺跡



土壙２・竪穴住居４・溝４出土遺物、遺構に伴わない遺物

井手見延遺跡

溝４・土壙８・溝５出土遺物、遺構に伴わない遺物

図版30

井手天原遺跡

1．竪穴住居１検出状況
北から

2．竪穴住居１
北から

3．竪穴住居２
南から

井手天原遺跡

1．竪穴住居６
南から

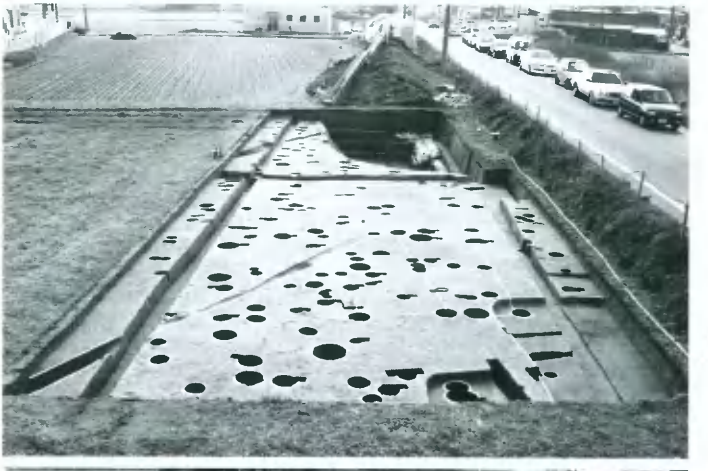
2．竪穴住居７
南から

3．竪穴住居９
南から

図版32

井手天原遺跡

1．中世遺構全景
（16区）南から



2．中世遺構全景
（15区）北から

3．中世遺構全景
（29区）南から

井手天原遺跡

1．土壙墓
南から

2．溝8
南から

3．溜池状遺構出土
獣骨
南から

図版34

井手天原遺跡

竪穴住居１・２・５出土遺物、遺構に伴わない遺物

井手天原遺跡

49 1/3

50 1/3

62 1/4

73 1/4

81 1/4

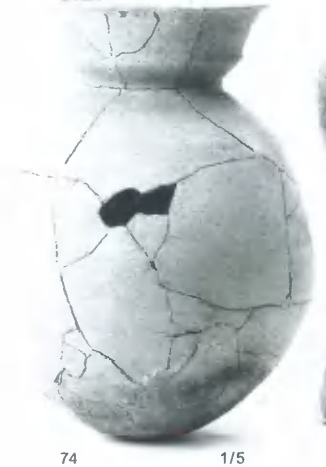
115 1/3

75 1/4

94 1/4

120 1/3

110 1/3


74 1/5

93 1/4

111 1/3

134

1/4

竪穴住居６・７出土遺物

図版36

井手天原遺跡

145 1/4

148 1/3

152 1/3

J1
1/1

S11 1/1

177 1/4

164 1/4

176 1/3

185 1/3

158 1/4

188 1/3

M2 1/4

213 1/3

M5
1/2

196 1/3

270 1/3

C8 1/2

C9
1/2

C3
1/2

C4
1/2

C5
1/2

C7
1/2

C6
1/2

C10
1/2

竪穴住居９・土壙７・溝４～20・土壙墓・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	おかだにおおみぞ　みすいまみぞ　みすこうら　みすはたけだ　いでみのべ　いでてんばら
書名	岡谷大溝散布地　三須今溝遺跡　三須河原遺跡　三須畠田遺跡　井手見延遺跡　井手天原遺跡
副書名	国道429号線改良に伴う発掘調査
巻次	Ⅱ
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	156
編著者名	物部茂樹・亀山行雄・小嶋善邦・金田善敬・蛯原啓介・高田恭一郎・葛原克人・重根弘和・宇垣匡雅・岡本泰典・小田嶋梧郎・大澤正己・鈴木瑞穂・白石純・富岡直人
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL(086) 293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL(086) 224-2111
発行年	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おかだにおおみぞさんぷち 岡谷大溝散布地	つくぼぐんやまてそんおかだに 都窪郡山手村岡谷	33427		34°39′30″	133°46′39″	930125～930128	113	道路改良
みすいまみぞいせき 三須今溝遺跡	そうじゃしみす 総社市三須	33208		34°39′49″	133°46′32″	930127～930331	460	道路改良
みすこうらいせき 三須河原遺跡	そうじゃしみす 総社市三須	33208		34°40′18″	133°46′25″	940117～940331 950421～950512	503	道路改良
みすはたけだいせき 三須畠田遺跡	そうじゃしみす 総社市三須	33208		34°40′12″	133°46′24″	940401～941222 981101～990131	1983	道路改良
いでみのべいせき 井手見延遺跡	そうじゃしいで 総社市井手	33208		34°40′24″	133°46′24″	941107～950929 960513～960613 961001～961105 970605～970625	2917	道路改良
いでてんばらいせき 井手天原遺跡	そうじゃしいで 総社市井手	33208		34°40′38″	133°46′23″	950517～950822 961125～961224 970401～970627 980604～980716	1960	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡谷大溝散布地	散布地	弥生～近世		弥生土器・須恵器・土師器・瓦	流入遺物
三須今溝遺跡	水路	弥生～中世	溝	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦・石器	弥生前期の溝を確認。護岸を伴う古代の水路。
三須河原遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列・溝	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・瓦	多量の遺物を伴う５世紀後半の竪穴住居を検出。
三須畠田遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓・畦畔	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	弥生時代後期と６世紀に中心を持つ集落。特に６世紀前半の住居は豊富な遺物を伴う。
井手見延遺跡	集落跡	弥生～近世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	弥生時代後期前半を中心とする集落。袋状土壙を多数検出。一括性の高い８世紀の須恵器土師器を伴う方形土壙を確認。円面硯、風字硯が出土。
井手天原遺跡	集落跡	弥生～近世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓・溜池状遺構	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	古墳時代前期を中心とする集落。中近世の溜池状遺構からは多量の獣骨が出土。風字硯が出土。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
井手見延遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001年２月20日　印刷
2001年２月28日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6
印　刷　ワシュウ印刷株式会社
岡山市当新田381－3